

# 常呂川河口遺跡

— 常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る発掘調査報告書 —

2006

北海道常呂町教育委員会



1. 常呂川河口遺跡遠景



2. 2001年9月の洪水（東側より撮影）



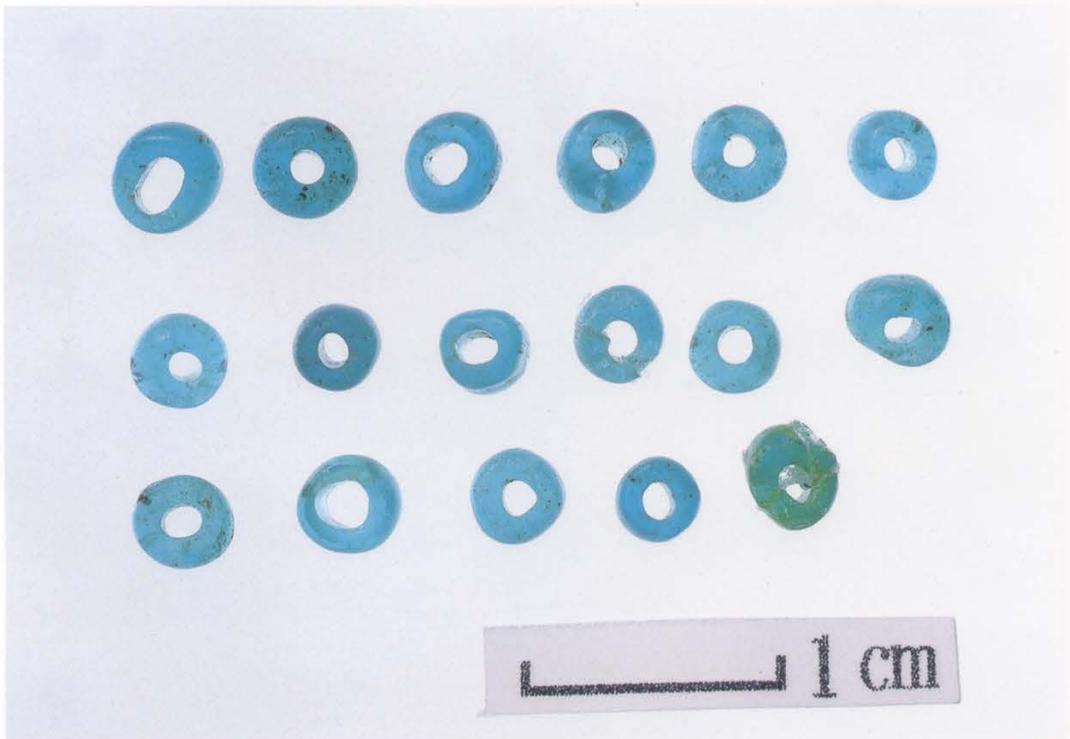
1. 146号堅穴住居跡



2. 151号堅穴住居跡遺物出土状況



1. 930a 号土墳墓



2. 994号土墳墓出土ガラス玉



1. 986号土壙墓



2. 988号土壙墓



1. 988a 号土墳墓



2. 988a 号土墳墓土器・鉄器出土状況



1. 988a 号土壙墓鉄器 (刃子)



2. 988a 号土壙墓刃子柄部 (撚紐巻き付け)



1. 997号土墳墓



2. 1025号土墳墓



1. 1025号土壙墓ガラス玉出土状況



2. 埋甕9



1. 971号土壙墓



2. 1012号土壙墓遺物出土状況



1. 1046a号土壙墓遺物出土状況



2. 973号土壙墓

## 序 文

常呂町には竪穴総数2,500軒以上に及ぶ史跡常呂遺跡をはじめとして130箇所の遺跡が発見されています。遺跡は常呂川河口周辺、オホーツク海岸に沿う海岸砂丘上、岐阜台地と通称する台地などにあります。これらの区域に共通するのが川であります。遡上するサケ・マスなどの捕獲のために人々は生活の場を求めてきたのでしょう。また、海・湖も重要な役割を担っていたと考えられ、狩猟・漁労を中心とした先住民にとって最適な地域であったわけです。

常呂川河口遺跡は常呂川河口右岸掘削護岸工事に伴い昭和63年から継続して発掘してきました。時代は縄文文化、続縄文文化、擦文・オホーツク文化、アイヌ文化まで複数の時代にまたがっていることが明らかになりました。出土遺物の総数は約300万点にもおよぶ膨大な数です。発掘した住居跡や墓などその成果の一部は5巻の「常呂川河口遺跡発掘調査報告書」としてまとめられ、今回が6巻目となります。これまでの報告同様にお墓に埋納された遺物に特色がありますが、中でも約1,300年前の墓が多数検出できたことは成果のひとつです。道東部では数少ない時代のもので東側に頭を向け、傍らに土器を安置する埋葬の方法はこの人々が一定の社会規範をもっていたことを示しています。また、北海道内でも数少ない数点の鉄製品は交易などによって獲得したものと考えられますが、それを可能にしたのは豊富な食糧資源によるものと思われます。

今回の報告書でも約1,800年前の墓から出土した琥珀玉の装飾品は注目されます。これまでの琥珀玉と異なり量は多くはありませんが様々な形をもっています。人々がどのような思いで琥珀玉を身につけたのか謎ですが、貴重な品であったことは事実のようです。その謎を解き明かすために遺跡の保護が必要となります。地域の歴史、古代の環境を学習する唯一の場所が遺跡と言っても過言ではありません。遺跡を未来に伝え、残すことが私たちの責務と言えるでしょう。

最後に調査当初から北海道教育委員会、北海道埋蔵文化財センター、東京大学名誉教授藤本強氏、東京大学大学院人文社会系研究科教授宇田川洋氏をはじめ関係各位から多大なご協力を頂きました。衷心より感謝申し上げます。

平成18年1月

北海道常呂町教育委員会

教育長 谷 昭廣

## 例 言

1. 本書は、主に平成10年・11年に実施した常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る常呂川河口遺跡(TK73遺跡)の緊急発掘調査の報告書である。各年度の調査面積は平成10年度2,200㎡、平成11年度2,200㎡である。
2. 本遺跡は北海道常呂町字常呂100-1番地先にある。遺跡の登載番号はI-16-128である。
3. 発掘調査は網走開発建設部から委託を受けて、常呂町教育委員会が主体となって実施した。
4. 本書の執筆は武田修・佐々木覚が行い、武田修が編集した。
5. 写真撮影は遺構を渡部高士、遺物を武田修が行った。
6. 各種遺物の実測図、トレースは恒常的な整理員である吉田義子、加藤雪江、大西信子、矢萩友子が行った。
7. 150号堅穴、ピット1059、1060、1061は欠番とした。
8. 平成10年度の調査体制

調査期間 平成10年5月11日～10月31日

調査担当者 武田 修

調査員 佐々木覚

調査補助員 渡部高士

事務 林 尚美

作業員 後藤譲、氷室福二、藤田伊玲、工藤清、大野正男、原田聖吾、橋本信義、深尾若樹、室田恵美、大谷俊子、高木貴美子、清永順子、栗原アサ子、近江谷光栄、武田美津子、日脇京子、山根利智、後藤チエ子、佐藤成子、佐藤美代、大沼篤子、杉田弘子、熊谷弘子、諸岡英子、西川明美、阿部喜代子、井ノ木信子、佐々木清子、新井田智子、中島隆子、田中清子、阿部真子

整理員 吉田義子、加藤雪江、大西信子、矢萩友子、日脇京子、中島隆子、根本郁代、加藤幸恵、山田喜美子、西川明美、山根利智、清永順子、高木貴美子、藤田伊玲、高野義人、高岡康治

9. 平成11年度の調査体制

調査期間 平成11年5月11日～10月31日

調査担当者 武田 修

調査員 佐々木覚

調査補助員 渡部高士

事務 林 尚美

作業員 後藤譲、氷室福二、藤田伊玲、工藤清、大野正男、原田聖吾、渡辺政彦、橋本信義、深尾若樹、室田恵美、大谷俊子、高木貴美子、清永順子、栗原アサ子、近江谷光栄、武田美津子、日脇京子、山根利智、後藤チエ子、佐藤成子、佐藤美代、大沼篤子、杉田弘子、熊谷弘子、阿部喜代子、井ノ木信子、佐々木清子、新井田智子、中島隆子、田中清子

整理員 吉田義子、加藤雪江、大西信子、矢萩友子、日脇京子、中島隆子、山田喜美子、山根利智、清永順子、高木貴美子、阿部真子、藤田伊玲

10. 発掘調査及び報告書作成の整理作業には、下記の方々の指導・助言を得た。記して感謝の意を表するしだいです。

東京大学名誉教授 藤本強、東京大学大学院人文社会系研究科 宇田川洋、同山田哲、東京大学大学院新領域創成科学研究科 佐藤宏之、日本学術振興会研究員 福田正宏、北海道教育委員会 大沼忠春、同種市幸生、枝幸町教育委員会 高島孝宗、紋別市立博物館 佐藤和利、斜里町知床博物館 合地信生、同松田功、文化財サポート(有) 豊原熙司 北海道埋蔵文化財センター 熊谷仁、余市町水産博物館 乾 芳弘

# 目 次

序 文	常呂町教育委員会 教育長 谷 昭 廣 ……	i
例 言	.....	ii
第Ⅰ章	調査に至る経過 .....	1
第Ⅱ章	遺跡の地形と基本土層 .....	3
第Ⅲ章	周辺の遺跡 .....	7
第Ⅳ章	竪穴住居 .....	13
第Ⅴ章	ピット.....	187
第Ⅵ章	まとめ.....	339

# 挿 図 目 次

<p>第1図 基本層序模式図…………… 4</p> <p>第2図 地形模式図…………… 6</p> <p>第3図 常呂川河口遺跡の位置と周辺 の遺跡…………… 8</p> <p>第4図 遺構配置図…………… 11</p> <p>第5図 140号竪穴平面図…………… 14</p> <p>第6図 140号竪穴床面・煙道・煙道上 部・埋土出土土器・土製品…………… 15</p> <p>第7図 140号竪穴埋土出土土器・土製 品…………… 16</p> <p>第8図 140号竪穴埋土、141号竪穴埋 土出土土器…………… 17</p> <p>第9図 141号竪穴、ピット904、920、 931、932、933平面図…………… 19</p> <p>第10図 141号竪穴埋土出土土器・土製 品…………… 20</p> <p>第11図 141号竪穴埋土出土土器…………… 21</p> <p>第12図 142号竪穴平面図…………… 22</p> <p>第13図 142号竪穴床面・埋土出土土器…………… 23</p> <p>第14図 142号竪穴埋土出土土器…………… 24</p> <p>第15図 143号竪穴、ピット940、940a、 940b、940c、1097、1099平面 図…………… 25</p> <p>第16図 143号竪穴埋土出土土器…………… 26</p> <p>第17図 144号竪穴、ピット982、1086、 1090、1091、1092、1093、 1093a、1094、1095、1096、屋 外炉平面図…………… 28</p> <p>第18図 144号竪穴床面・埋土出土土器…………… 29</p> <p>第19図 144号竪穴埋土出土土器…………… 30</p> <p>第20図 144号竪穴埋土出土土器…………… 31</p> <p>第21図 144号竪穴埋土出土土器…………… 32</p> <p>第22図 144号竪穴埋土出土土器…………… 33</p> <p>第23図 144号竪穴埋土出土土器…………… 34</p> <p>第24図 144号竪穴埋土出土土器…………… 35</p> <p>第25図 144号竪穴埋土出土土器…………… 36</p> <p>第26図 144号竪穴埋土出土土器・土製 品…………… 37</p> <p>第27図 143号竪穴床面・埋土、144号 竪穴床面・埋土出土土器…………… 38</p>	<p>第28図 144号竪穴埋土出土土器…………… 39</p> <p>第29図 145号竪穴、ピット913、935、 936、937平面図…………… 40</p> <p>第30図 145号竪穴埋土、146号竪穴埋 土、147号竪穴埋土出土土器…………… 41</p> <p>第31図 146号竪穴平面図…………… 42</p> <p>第32図 146号竪穴カマド・カマド上部・ 埋土出土土器…………… 44</p> <p>第33図 146号竪穴埋土、147号竪穴カマ ド上部出土土器…………… 45</p> <p>第34図 147号竪穴、ピット900、901、 902、902a、903、918、919平面図…………… 47</p> <p>第35図 147号竪穴埋土出土土器…………… 48</p> <p>第36図 147号竪穴埋土出土土器…………… 49</p> <p>第37図 148号竪穴平面図…………… 50</p> <p>第38図 148号竪穴埋土出土土器…………… 51</p> <p>第39図 148号竪穴埋土出土土器…………… 52</p> <p>第40図 148号竪穴埋土出土土器・石製 品…………… 53</p> <p>第41図 148a号竪穴、ピット987平面図…………… 55</p> <p>第42図 148a号竪穴床面出土土器…………… 57</p> <p>第43図 148a号竪穴炉・炉上部・埋土 出土土器…………… 58</p> <p>第44図 148a号竪穴埋土出土土器…………… 59</p> <p>第45図 148a号竪穴埋土出土土器…………… 60</p> <p>第46図 148a号竪穴埋土・生活面出土 土器…………… 61</p> <p>第47図 148a号竪穴埋土出土土器…………… 62</p> <p>第48図 148a号竪穴埋土出土土器…………… 63</p> <p>第49図 148a号竪穴埋土出土土器…………… 64</p> <p>第50図 148a号竪穴埋土出土土器…………… 65</p> <p>第51図 148a号竪穴床面・埋土出土土 器…………… 66</p> <p>第52図 148a号竪穴埋土出土土器…………… 67</p> <p>第53図 148a号竪穴埋土出土土器…………… 68</p> <p>第54図 148b号竪穴、148c号竪穴、 集石9平面図…………… 70</p> <p>第55図 148b号竪穴埋土出土土器…………… 71</p> <p>第56図 148b号竪穴埋土出土土器…………… 72</p> <p>第57図 148b号竪穴埋土出土土器…………… 72</p>
--	---

	土製品……………73	第87図	151a号竪穴埋土出土土器……………109
第58図	148c号竪穴床面・埋土、148d号竪穴埋土出土土器……………74	第88図	151a号竪穴埋土出土土器……………110
第59図	148c号竪穴床面、148d号竪穴埋土出土土器……………75	第89図	151b号竪穴平面図……………111
第60図	148d号竪穴、148e号竪穴、埋甕9平面図……………77	第90図	151b号竪穴埋土出土土器……………112
第61図	148e号竪穴床面出土土器……………78	第91図	151b号竪穴埋土、152号竪穴埋土、153号竪穴埋土出土土器・石製品……………113
第62図	148e号竪穴床上ベンガラ層・暗赤褐色土内・埋土出土土器……………79	第92図	152号竪穴平面図……………114
第63図	148e号竪穴埋土出土土器……………80	第93図	152号竪穴埋土出土土器……………115
第64図	148e号竪穴床面・床上ベンガラ層・暗赤褐色土内出土土器……………81	第94図	153号竪穴、ピット1014、1067、1068、1069平面図……………117
第65図	148e号竪穴暗赤褐色土上・埋土出土土器……………82	第95図	153号竪穴埋土出土土器……………118
第66図	149号竪穴平面図……………84	第96図	154号竪穴平面図……………119
第67図	149号竪穴床面出土土器……………85	第97図	154号竪穴埋土出土土器……………120
第68図	149号竪穴床面・埋土出土土器……………86	第98図	154号竪穴埋土出土土器……………121
第69図	149号竪穴埋土出土土器……………87	第99図	154号竪穴埋土出土土器……………122
第70図	149号竪穴埋土出土土器……………88	第100図	154号竪穴埋土出土土器……………123
第71図	149号竪穴埋土出土土器……………89	第101図	154号竪穴埋土出土土器……………124
第72図	149号竪穴床面・埋土出土土器……………90	第102図	154号竪穴埋土出土土器……………125
第73図	149号竪穴埋土出土土器……………91	第103図	155号竪穴平面図……………126
第74図	149号竪穴埋土出土土器……………92	第104図	155号竪穴床面・床面直上・埋土出土土器……………127
第75図	149a号竪穴、149b号竪穴、ピット914、915、916、917平面図……………94	第105図	155号竪穴埋土出土土器……………128
第76図	149a号竪穴床面・埋土出土土器……………95	第106図	155号竪穴埋土、155a号竪穴床面・埋土出土土器……………129
第77図	149a号竪穴埋土、149b号竪穴床面・埋土出土土器……………96	第107図	155号竪穴埋土出土土器……………130
第78図	149a号竪穴埋土、149b号竪穴床面・埋土出土土器……………97	第108図	155a号竪穴、ピット1076平面図……………132
第79図	151号竪穴平面図……………100	第109図	155a号竪穴埋土出土土器……………133
第80図	151号竪穴埋土出土土器……………101	第110図	155a号竪穴床面・埋土出土土器……………134
第81図	151号竪穴埋土出土土器……………102	第111図	155a号竪穴埋土出土土器……………135
第82図	151号竪穴埋土出土土器……………103	第112図	155b号竪穴平面図……………137
第83図	151号竪穴埋土、151a号竪穴焼土・埋土出土土器・琥珀玉……………104	第113図	155b号竪穴床面・埋土出土土器……………138
第84図	151a号竪穴平面図……………106	第114図	155b号竪穴埋土出土土器……………139
第85図	151a号竪穴床面・埋土出土土器……………107	第115図	155b号竪穴炉・埋土出土土器……………140
第86図	151a号竪穴埋土出土土器……………108	第116図	155c号竪穴、155d号竪穴平面図……………141
		第117図	155c号竪穴埋土出土土器……………142
		第118図	155c号竪穴埋土出土土器……………143
		第119図	155e号竪穴、155f号竪穴平面図……………145
		第120図	155d号竪穴炉・埋土出土土器……………146

第121図	155e号竪穴埋土出土土器	147
第122図	155d号竪穴埋土、155e号竪穴床面・埋土、155f号竪穴埋土出土土器	148
第123図	155f号竪穴埋土出土土器	150
第124図	155g号竪穴、炭化材配列ピット平面図	151
第125図	155g号竪穴床面・埋土出土土器	152
第126図	155g号竪穴埋土、156号竪穴床面・埋土出土土器	153
第127図	155g号竪穴床面・焼土・埋土出土土器・琥珀玉	154
第128図	155g号竪穴埋土出土土器	155
第129図	155g号竪穴埋土出土土器	156
第130図	156号竪穴、ピット1035、1036、1038、1051、1054、1055平面図	159
第131図	156号竪穴埋土出土土器	160
第132図	157号竪穴平面図	161
第133図	157号竪穴カマド・煙道・埋土出土土器	162
第134図	157号竪穴埋土出土土器	163
第135図	157a号竪穴平面図	165
第136図	157a号竪穴床面・埋土出土土器	166
第137図	157a号竪穴埋土出土土器	167
第138図	157a号竪穴埋土出土土器	168
第139図	157a号竪穴埋土出土土器	169
第140図	157a号竪穴埋土出土土器	170
第141図	157a号竪穴埋土出土土器	171
第142図	157a号竪穴床面・埋土出土土器	172
第143図	157a号竪穴表土出土土器	173
第144図	157b号竪穴平面図	175
第145図	157b号竪穴床面・埋土出土土器	176
第146図	157b号竪穴埋土出土土器	177
第147図	157b号竪穴床面・埋土・表土出土土器	178
第148図	158号竪穴平面図	179
第149図	158号竪穴埋土出土土器	180
第150図	158号竪穴埋土、158a号竪穴床	

	面・埋土出土土器	182
第151図	158号竪穴埋土出土土器	183
第152図	158a号竪穴平面図	184
第153図	158a号竪穴床面・埋土出土土器	185
第154図	ピット900床面、901床面、902埋土上部、902a埋土、903埋土上部出土土器	187
第155図	ピット903埋土、904埋土出土土器	190
第156図	ピット905埋土、906埋土、907埋土、907a埋土、908床面、908a床面・埋土、908b埋土、909埋土、910埋土、912埋土出土土器	191
第157図	ピット900埋土、901埋土、902a埋土、907遺体上・埋土、907a埋土、909埋土、912a埋土出土土器・石製品	192
第158図	ピット908、908a、908b、909、911、921、922、922a、923、927、928、928a平面図	195
第159図	ピット910、912、912a、929、930、930a、930b、942、943、999、1037、1040、1041、1048、1066、1100平面図	196
第160図	ピット918埋土、919床面、920埋土出土土器	200
第161図	ピット921埋土出土土器	202
第162図	ピット921埋土出土土器	203
第163図	ピット922a床面・遺体上・埋土、924埋土、925埋土、926床面・埋土、929埋土出土土器	205
第164図	ピット921埋土、922a埋土、923埋土、924埋土、925埋土、926埋土、929埋土、930a床面・埋土出土土器	207
第165図	ピット905、906、907、907a、924、925平面図	208
第166図	ピット926平面図	209
第167図	ピット934平面図	213
第168図	ピット934埋土、938埋土、940埋土、941埋土、出土土器	

	琥珀玉・石製品・練り玉 ……214		面・埋土、983a 埋土出土土器 ……244
第169図	ピット931埋土、934遺体上・埋土、938埋土、939埋土、940埋土、940a 埋土上部、940b 床面・埋土、940c 床面出土土器 ……217	第181図	ピット979a 平面図 ……247
第170図	ピット941、941a 平面図 ……219	第182図	ピット966、967、967a、967b、967c、970、970a、971、972、972a、973、973a、973b、974、975、977、978、979、979b、979c、979d、979e、980、981、981a、994、995、996、997平面図 ……249
第171図	ピット941埋土、942埋土、943埋土、949埋土、953床面・埋土出土土器 ……221	第183図	ピット984埋土、984a 床面、985床面・埋土出土土器 ……252
第172図	ピット939、944、945、946、947、948、949、950、951、952、953平面図 ……223	第184図	ピット985埋土出土土器 ……253
第173図	ピット938、954、955、955a、955b、955c、956、960、961、961a、962、石組遺構平面図 ……226	第185図	ピット986床面、987床面出土土器 ……256
第174図	ピット954埋土出土土器 ……227	第186図	ピット963、963a、963b、983、983a、984、984a、984b、985、985a、985b、985c、985d、986、986a、1074、1074a、1077、1078、1079、1080、1081、1081a、1082、1083、1084、1085、1088、1089、1089a、1089b 平面図 ……257
第175図	ピット955埋土、955c 埋土、957埋土、958埋土、959a 埋土、961埋土、962埋土、963埋土、965埋土、966埋土、967埋土、968埋土出土土器 ……230	第187図	ピット988床面、988a 床面、990床面、991埋土出土土器 ……259
第176図	ピット942埋土、952埋土、953埋土、955c 埋土、957遺体上・埋土、958遺体上・埋土出土土器・琥珀玉・管玉 ……231	第188図	ピット988、988a、989、990、990a、990b、990c、991、992、993、998、1073、1087、1087a 平面図 ……261
第177図	ピット957、958、959、959a、959b、964、965、968、968a、969、976、976a、屋外炉平面図 ……232	第189図	ピット991埋土、992埋土、996埋土、997床面、1001埋土、1005埋土、1006埋土、1006a 埋土、1006b 遺体上・埋土出土土器 ……265
第178図	ピット969埋土、970埋土、971埋土、972床面、972a 埋土、973埋土出土土器 ……239	第190図	ピット994遺体上、997埋土、1001遺体上、1002遺体上・埋土、1005埋土、1006埋土、1006a 埋土出土土器・琥珀玉・ガラス玉・石製品 ……266
第179図	ピット970埋土、970a 埋土、973埋土、979a 遺体上・埋土、985床面・埋土、986埋土、988埋土、988a 床面・埋土、990遺体上・埋土、993遺体上出土土器・琥珀玉・ガラス玉・鉄製品 ……240	第191図	ピット1006、1006a、1006b 平面図 ……270
第180図	ピット973a 埋土、974埋土、975埋土、976埋土、978埋土、979埋土、979a 埋土、983床	第192図	ピット1006b 床面・遺体中・遺体上出土土器・石製品 ……272
		第193図	ピット1000、1001、1002、1003、

	1004、1005、1007、1008、1009、 1010、1011平面図 ……………273
第194図	ピット1012平面図 ……………276
第195図	ピット1007埋土、1010埋土、 1012遺体上・埋土出土石器 ……277
第196図	ピット1013平面図 ……………278
第197図	ピット1007床面・埋土、1010 埋土、1012遺体内・遺体上・ 埋土、1013遺体上・埋土出土 石器・琥珀玉・管玉 ……………279
第198図	ピット1013遺体上・埋土、 1014埋土出土石器 ……………280
第199図	ピット1015埋土、1016埋土出 土石器 ……………282
第200図	ピット1016平面図 ……………283
第201図	ピット1019平面図 ……………285
第202図	ピット1014埋土、1017床面、 1018埋土、1019床面・埋土、 1021埋土、1023遺体上・埋土、 1025床面・埋土出土石器・琥 珀玉・ガラス玉 ……………287
第203図	ピット1023平面図 ……………289
第204図	ピット1025、1025a 平面図 ……291
第205図	ピット1019埋土、1022埋土、 1023埋土、1024埋土、1025床 面・埋土出土石器 ……………292
第206図	ピット1025c 埋土、1025d 埋土、 1026埋土、1027埋土、1028埋土、 1029埋土、1031埋土、1032埋土、 1034埋土、1036埋土出土石器 …294
第207図	ピット1025c 床面、1028a 埋土、 1028b 埋土、1029埋土、1033埋 土、1035埋土、1036埋土出土石器 ……………296
第208図	ピット1031平面図・遺物出土 状況 ……………298
第209図	ピット1038埋土、1039埋土、 1046a 遺体上・埋土、1050埋土、 1050a 埋土出土石器 ……………301
第210図	ピット1017、1018、1020、1021、 1022、1024、1025b、1025c、 1025d、1026、1043、1043a、 1045、1045a、1046、1046b、

	1047、1049平面図 ……………304
第211図	ピット1040床面、1042a 埋土、 1043埋土、1043a 埋土、1045a 床面・床面直上、1046埋土出 土石器・琥珀玉 ……………305
第212図	ピット1046a 平面図・琥珀出 土状況 ……………307
第213図	ピット1046a 埋土、1051埋土、 1053埋土、1055埋土、1058埋 土出土石器・琥珀玉・石製品 …308
第214図	ピット1015、1027、1028、 1028a、1028b、1029、1030、 1030a、1032、1033、1034、 1039、1050、1050a、1052、 1052a、1053、1053a、1056、 1056a、1057平面図 ……………311
第215図	ピット1053埋土、1056a 埋土、 1057埋土、1058埋土、1062埋 土出土石器 ……………314
第216図	ピット1062a 平面図 ……………315
第217図	ピット1058、1062、1062b、 1063、1064、1065平面図 ……316
第218図	ピット1062埋土、1062a 床面・ 埋土、1064床面、1065埋土、 1066埋土、1070上部、1073埋 土、1074遺体上・埋土、1075 埋土出土石器・ガラス玉 ……318
第219図	ピット1062a 埋土、1062b 埋土、 1064埋土、1066埋土、1067埋土、 1069埋土、1070埋土上部、1071 埋土、1072埋土出土石器 ……319
第220図	ピット1042、1042a、1044、 1070、1071、1072、1075、 1098平面図 ……………322
第221図	ピット1074床面、1075埋土、 1076埋土、1079埋土、1081a 埋土出土石器 ……………324
第222図	ピット1084床面・埋土、1087a 埋土、1088埋土、1089埋土上部、 1092埋土、1093a 埋土、1095埋 土、1097埋土出土石器 ……………330
第223図	ピット1076埋土、1079埋土、 1084埋土、1087a 埋土、1089a

	遺体上、1091埋土、1092埋土、 1094埋土出土石器 ……………331
第224図	ピット1099床面・埋土、1100 埋土出土石器 ……………335

第225図	ピット1099埋土、1100埋土出 土石器 ……………336
第226図	埋甕 9 ……………337

## 図 版 目 次

図版 1	140号竪穴、140号竪穴煙道上部・埋土 出土石器	器
図版 2	141号竪穴炭化材出土状況、141号竪穴、 141号竪穴埋土出土石器	図版20
図版 3	142号竪穴、144号竪穴	157b号竪穴、158号竪穴、158号竪穴 埋土出土石器
図版 4	144号竪穴埋土出土石器、145号竪穴	図版20
図版 5	146号竪穴、146号竪穴カマド出土状況、 146号竪穴埋土出土石器、147号竪穴埋 土出土石器	158a号竪穴
図版 6	148号竪穴遺物出土状況、148号竪穴	図版22
図版 7	148a号竪穴、148a号竪穴埋土出土土 器	ピット900、900床面・埋土出土石器・ 石器、901埋土出土石器、902埋土上部 出土石器、902a埋土出土石器・石器、907 遺体上出土石器・石製品、907a埋土 出土石器
図版 8	148b号竪穴埋土出土石器、148c号竪 穴床面出土石器、148e号竪穴床面出 土石器	図版23
図版 9	149号竪穴、149号竪穴床面・埋土出土 石器	ピット908床面出土石器、908a床面出 土石器、909埋土出土石器、912a埋土 出土石器、919埋土出土石器、920埋土 出土石器、ピット919
図版10	149a号竪穴、149b号竪穴	図版24
図版11	151号竪穴炭化材出土状況・遺物出土 状況	ピット921遺物出土状況、921埋土出土 石器
図版12	151号竪穴、151号竪穴埋土出土石器	図版25
図版13	151a号竪穴、151a号竪穴埋土出土土 器、151b号竪穴	ピット921埋土出土石器
図版14	152号竪穴、153号竪穴、153号竪穴埋 土出土石器	図版26
図版15	154号竪穴、154号竪穴埋土出土石器	ピット922a、922a床面・遺体上・埋 土出土石器、925埋土出土石器・石器
図版16	155号竪穴、155号竪穴床面直上・埋土 出土石器	図版27
図版17	155a号竪穴、155b号竪穴床面・埋土 出土石器、155f号竪穴埋土出土石器、 155g号竪穴床面出土石器	ピット926、926床面・埋土出土石器、 929埋土出土石器、930a床面出土石器、 934床面出土石器
図版18	156号竪穴、156号竪穴床面出土石器、 157号竪穴カマド出土石器、157号竪穴	図版28
図版19	157a号竪穴、157a号竪穴埋土出土土	ピット940b、940b床面出土石器、940 c床面出土石器、ピット940c
		図版29
		ピット941・遺物出土状況
		図版30
		ピット941埋土出土石器・琥珀玉
		図版31
		ピット954埋土出土石器、955埋土出土 石器、957遺体上・埋土出土石器、958 遺体上・埋土出土石器・琥珀玉・管玉
		図版32
		ピット962埋土出土石器、970埋土出土 石器、970a埋土出土石器、ピット971、 971埋土出土石器、972床面出土石器
		図版33
		ピット973、973埋土出土石器・石器、 975埋土出土石器、979a埋土出土石器
		図版34
		ピット984a、984a床面出土石器、985

- 床面・埋土出土土器・石器
- 図版35 ピット986、986床面・埋土出土土器・石器、987床面出土土器
- 図版36 ピット988、988床面出土土器、988a床面出土土器、ピット988a
- 図版37 ピット988a床面・埋土出土鉄製品・石器、ピット990、990床面・遺体上・埋土出土土器・石器、993遺体上出土石器
- 図版38 ピット997、997床面・埋土出土土器・石器、1001埋土出土石器、1002床面・埋土出土石器
- 図版39 ピット1006埋土出土土器、1006a埋土出土石器、ピット1006b、1006b床面・埋土出土土器・石器・石製品
- 図版40 ピット1006b埋土出土石器、ピット1007、1007床面・埋土出土石器
- 図版41 ピット1010埋土出土土器、1012遺体上出土土器、ピット1012・遺物出土状況
- 図版42 ピット1012遺体上・遺体内・埋土出土土器・石器・琥珀玉・管玉
- 図版43 ピット1013、1013遺体上出土土器・琥珀玉出土状況
- 図版44 ピット1013遺体上・埋土出土石器、1015埋土出土土器、1016埋土出土土器、ピット1016
- 図版45 ピット1017床面出土石器、1018埋土出土石器、ピット1019、1019床面・埋土出土石器
- 図版46 ピット1023、1023遺体上・埋土出土土器、1024埋土出土土器
- 図版47 ピット1025・土器出土状況、1025床面出土土器・石器
- 図版48 ピット1025c床面出土石器、1028b埋土出土石器、ピット1031
- 図版49 ピット1046a・遺物出土状況、1046a遺体上・埋土出土土器
- 図版50 ピット1046a埋土出土石器、1053埋土出土石器、1058埋土出土石器、1062埋土出土石器、1062a床面・埋土出土石器
- 図版51 ピット1067埋土出土土器、1074床面・埋土出土土器・石器、1079埋土出土土器、1089a遺体上出土石器
- 図版52 ピット1100埋土出土石器、埋甕9

# 第 I 章 調査に至る経過

## 1

常呂川は十勝、石狩、北見の分水嶺である三国山（標高1,541m）に源を発し、流路延長120km、流域面積1,930km<sup>2</sup>に及ぶ一級河川である。

常呂川流域の気候は、オホーツク海高気圧の影響を受け雨の少ない地域であるが、明治30年頃からの開拓による森林伐採の結果、河川の水量調節機能は低下し洪水が起りやすくなったと考えられている。明治31年。大正4、8、11年。昭和7、9、10、14、22、23、28、30、32、33、37、39、44、46、47、50年と相次いで記録的な洪水が発生している。発掘調査を行っている間の平成4年にも集中豪雨があり、強力な水流によるため遺跡の一部が削られることもあった。毎年のように起こる洪水の治水対策は大正10年から始められ現在も営々と続けられている。常呂川治水の完成は地域住民の悲願でもある。

今回、緊急発掘調査の対象となった地域は昭和50年の台風6号による出水の影響で堤防が決壊し、床上浸水等の被害を蒙った区域である。常呂川は河口幅が狭いうえ、本遺跡の付近で最も大きく蛇行しているため水の疎通が悪く、豪雨時は上流で溢水するなどの問題が指摘されていた。このため蛇行部をショートカットして新捷水路を設けるための工事計画が策定された。昭和52年から用地買収が進められ、昭和56年から工事着手の予定であった。しかし、工事着手の直前になって遺跡の存在することが明らかとなった。昭和56年11月4日に埋蔵文化財保護のための事前協議書が網走開発建設部から提出されたのをうけ、同年11月11日～12日に北海道教育委員会、(財)北海道埋蔵文化財センター、本町教育委員会の三者で包蔵地範囲確認調査を実施した。調査の結果、本遺跡の主体は標高4～5mの砂丘上と低地域にも堅穴の存在することが判明した。遺跡の総面積は約140,000m<sup>2</sup>に及び39,000m<sup>2</sup>が発掘必要区域である。考古学的には縄文中期・後期・晩期、続縄文、擦文・オホーツク、アイヌ文化にわたる複合遺跡であり、砂丘上にある縄文中期の包含層まで深度約1.50mに達することも確認された。これらの調査結果を踏まえて発掘調査を行うことも協議されたが、調査には莫大な経費と期間を要しなければならず早速の実施には至らなかった。

その後、網走開発建設部では常呂川下流域の堤防整備を構じていたが、本遺跡を回避した新捷水路の計画もありえるため、本来の計画地以外についても埋蔵文化財の有無が必要となった。昭和57年9月2日に事前協議書の提出を受け北海道教育委員会と本町教育委員会は昭和60、61、62年の3年間で周辺地域の包蔵地範囲確認調査を実施した。昭和60、61年調査地域は標高2～3mの常呂川の氾濫原と考えられる地域であり、全域に包含層が認められた。昭和62年の調査地域は常呂大橋下の中洲であるが、包含層は認められなかった。このような背景とともに常呂川

## 常呂川河口遺跡

下流域の堤防整備もほぼ完了したため、本来の計画とおり新捷水路工事を進めるために発掘調査の依頼があった。

しかし、調査にはかなりの歳月を要し、調査体制の問題もあるため本町教育委員会が独自に対応することは困難であるため北海道教育委員会に調査機関の照会を願ったものの、適した機関が無いとの回答があったので本町教育委員会が調査体制の充実を図り受諾することとなった。

新捷水路は護岸工事部分を含めると全幅300m、延長320mあるため調査には約10年間で予想された。協議者としてもそれまで事業の実施を延ばすのは困難であり、調査と並行して工事を着手したいので新捷水路幅80mのうちセンターから東側の幅40mについて調査を終了してほしいとの要望があった。その場合、幅20mの護岸部が後回しとなり、検出した遺構も半掘りのまま残されてしまう恐れもあるため護岸部を含めて調査することとなった。

調査を進めている過程で縄文中期の包含層よりも下層に縄文前期末葉の包含層があり、さらに下層には縄文前期中葉の包含層が検出された。また、標高0mの低湿地にはアイヌ文化期の木製品が新たに発見され当初の予定を大きく変更させるを得なかった。

## 2

調査グリッドは新捷水路センター杭のIP. No. 1～600を基準に4×4mで設定し、東西をアルファベット、南北を数字で示した。

### 参考文献

- 網走開発建設部 『常呂川治水史』 1987  
常 呂 町 『常呂町史』 1969

## 第Ⅱ章 遺跡の地形と基本土層

常呂地域の地形・地質は標高70～75m以上の丘陵・高位段丘、標高20～30mの中位段丘、標高5～15mの低位段丘に分けられる。本遺跡は東側の中位段丘側から派生しており、地形的には標高4～5mの低位段丘とさらに下面にある標高2～3mほどの常呂川の氾濫原に存在している。昭和63年と平成1年はこの氾濫原と思われる区域を調査した。この区域の地盤は層厚30～40cmの黄褐色粘土であり、その下層は粒子の粗い砂と礫混じりの層が堆積している。黄褐色粘土層は常呂川岸の付近では層厚約3～4mに及んでいる。川岸に移行するにしたがい黄褐色粘土層の堆積は厚みを増すようである。昭和63年度に行った包蔵地範囲確認調査では深度約3mのところから木杭が出土している。この区域では現在のところ擦文文化期の堅穴しか発見されていないが、木杭の出土から裏付けられるように下層には他の時期の包含層も残されている可能性がある。氾濫原と考えられるこの区域には大正年間に作られた築堤がある。盛土による築堤の上部を道路として利用されていたため原地形は捉えにくい、おそらく中位段丘側から常呂川に向かって緩く傾斜していたと思われる。

一方、平成2年から調査している標高4～5mの区域もトコロチャシ跡付近から常呂川に向かって延びた砂丘である。調査当初は栄浦第二・第一遺跡、常呂堅穴群のある新砂丘Ⅰ、古砂丘と同一の海成砂丘台地と考えていたが、調査を進めるにつれて様々なことが明らかになった。一つはこの低位段丘面が常呂川の氾濫の繰り返しによる土砂の堆積で形成されてきたことである。第1図の基本層序模式図に示すとおり基本的な土層は砂質土層であるが、この砂層の粒子は海成層のものよりも極めて粗く、海成層には含まれない大型の角礫を多量に含むことである。角礫混じりの砂層は特に第Ⅲ層において顕著である。この砂礫層・砂層は数枚の薄い文化層と交互に堆積を繰り返す。平成8年・9年度の調査では縄文中期のトコロ六類・五類の下層に第Ⅹa層の(古)トコロ六類とⅦ層の平底押型文Ⅱ群、平成10年の調査では第Ⅹa層の下層にある第Ⅹc層からも北筒式系の包含層、平成11年度の調査ではさらに第ⅩⅦ層から縄文前期綱文式の包含層を確認した。

第Ⅶ層の砂礫層からは層厚約30cmの中から縄文前期中野式、シュブノツナイ式、押型文と中期のトコロ六類・五類の北筒式が満遍なく出土している。安定した遺物の出土状態をもつ第Ⅶ層とは明らかに異なった出方である。第Ⅶ層は河川の氾濫等による土砂流失の影響で本来は下層にある土器が上部に押し上げられ、時期が逆転したものと考えられる。平成2年から調査を行った低位面はこの様な洪水等による土砂の堆積が繰り返され、現在の地形に形成されたものであるが、そこには第2図の地形模式図に示すとおり少なくとも三次の変化が認められる。

第一次形成地は第ⅩⅦ層の縄文前期末の押型文から第Ⅶ層の縄文中期トコロ六類・五類のある礫・角礫を含む極めて硬質な黒色土である。層厚は薄い箇所では10～15cm、厚い箇所では20～30cm

常呂川河口遺跡

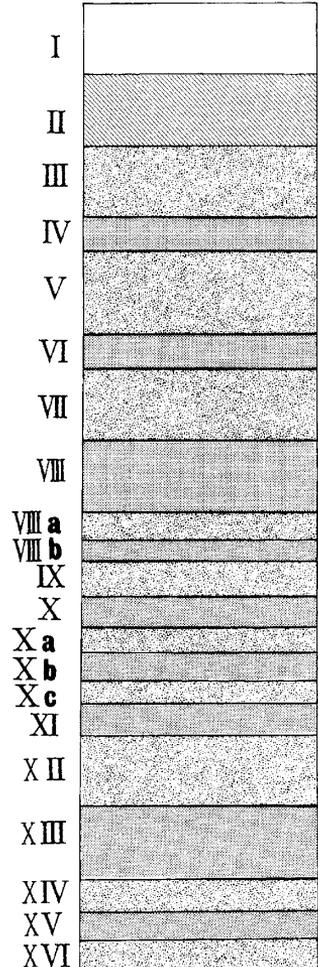
である。第Ⅻ層の西側部分が削り取られており、縄文前期末葉から中期初頭にかけてかなり激しい流勢のあったことを示している。

第二次形成地は第一次形成地を覆うもので、第Ⅶ層から第Ⅱ層が常呂川に向かってせり出している。せり出し幅は2～20mあり、常呂川に近い程広がっている。

第三次形成地には擦文期の堅穴と続縄文後北C<sub>2</sub>・D式の生活面、オホーツク文化期の包含層があるだけであり、それ以前の時期の遺構は全く認められない。第二次形成地と第三次形成地の間は自然の窪みが細長く延びている。特にオホーツク文化期の15号堅穴の付近では土器、獣骨等も散布されている。このことから第二次形成地は縄文中期後半から縄文晩期にかけて少なくとも6回の河川堆積の後に形成されたものと考えられる。第三次形成地はそれ以後のものであり、土質は第二次形成地と比較して粒子の細かい砂質土である。

層位ごとの時期区分は概ね次のとおりである。

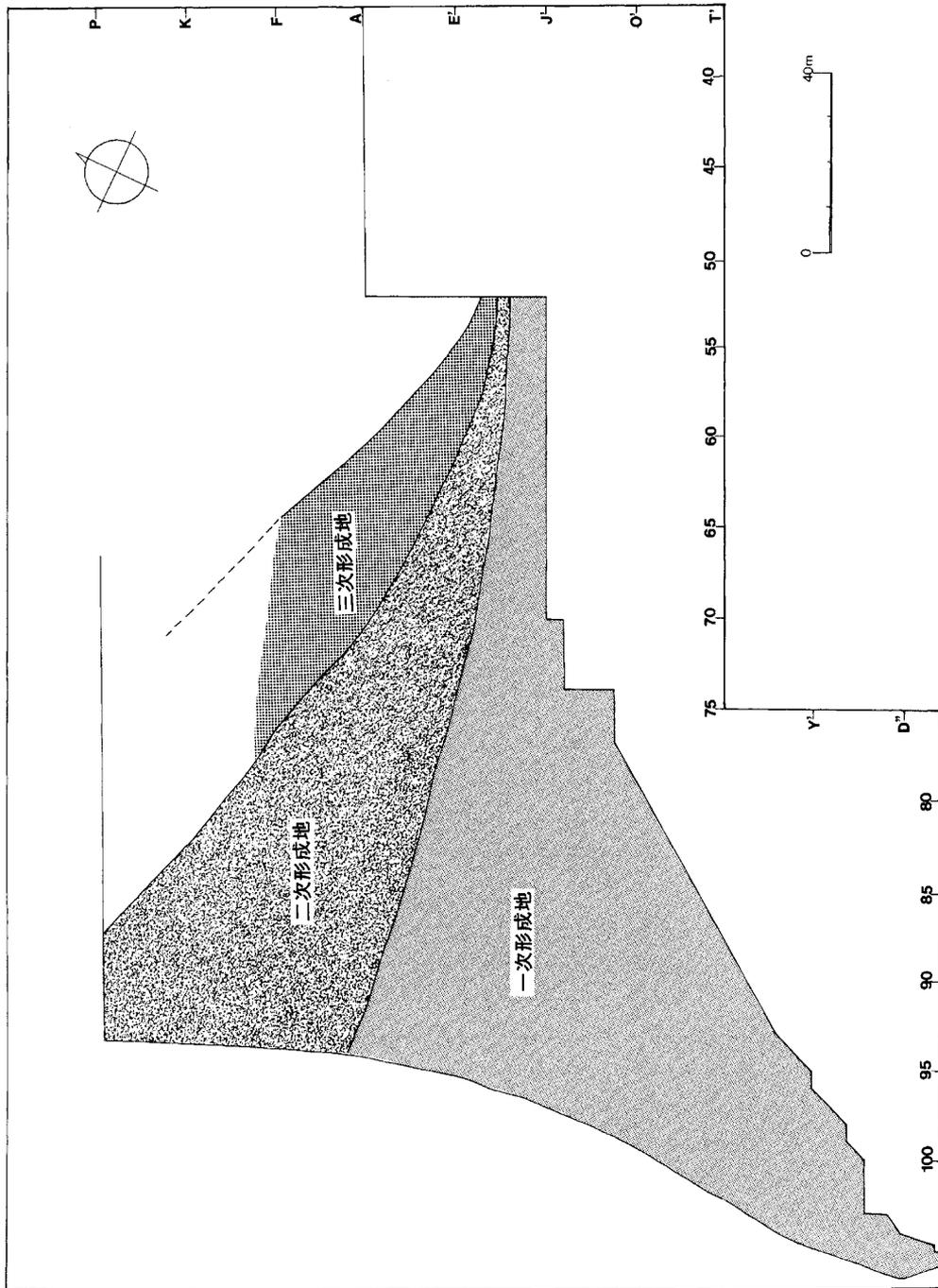
第Ⅰ層	表土層	
第Ⅱ層	茶褐色砂層	縄文晩期、続縄文、擦文 オホーツク文化
第Ⅲ層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅳ層	黒色土層	縄文後期
第Ⅴ層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅵ層	黒色砂層	縄文中期後葉
第Ⅶ層	褐色砂層	遺物包含層（砂・礫混じり）
第Ⅷ層	黒色土層	縄文中期中葉
第Ⅷa層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅷb層	黒褐色砂層	遺物包含層
第Ⅸ層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅹ層	明褐色砂層	無遺物層
第Ⅹa層	黒褐色砂層	縄文中期前葉
第Ⅹb層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅹc層	黒褐色砂層	縄文中期前葉
第Ⅺ層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅻ層	黒色砂層	縄文前期末葉
第Ⅼ層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅽ層	黒色砂層	無遺物層
第Ⅾ層	明褐色砂層	無遺物層
第Ⅿ層	黒色土層	縄文前期



第1図 基本層序模式図

参考文献

- 1) 遠藤邦彦・上杉 陽『常呂』所収 東京大学文学部 1972



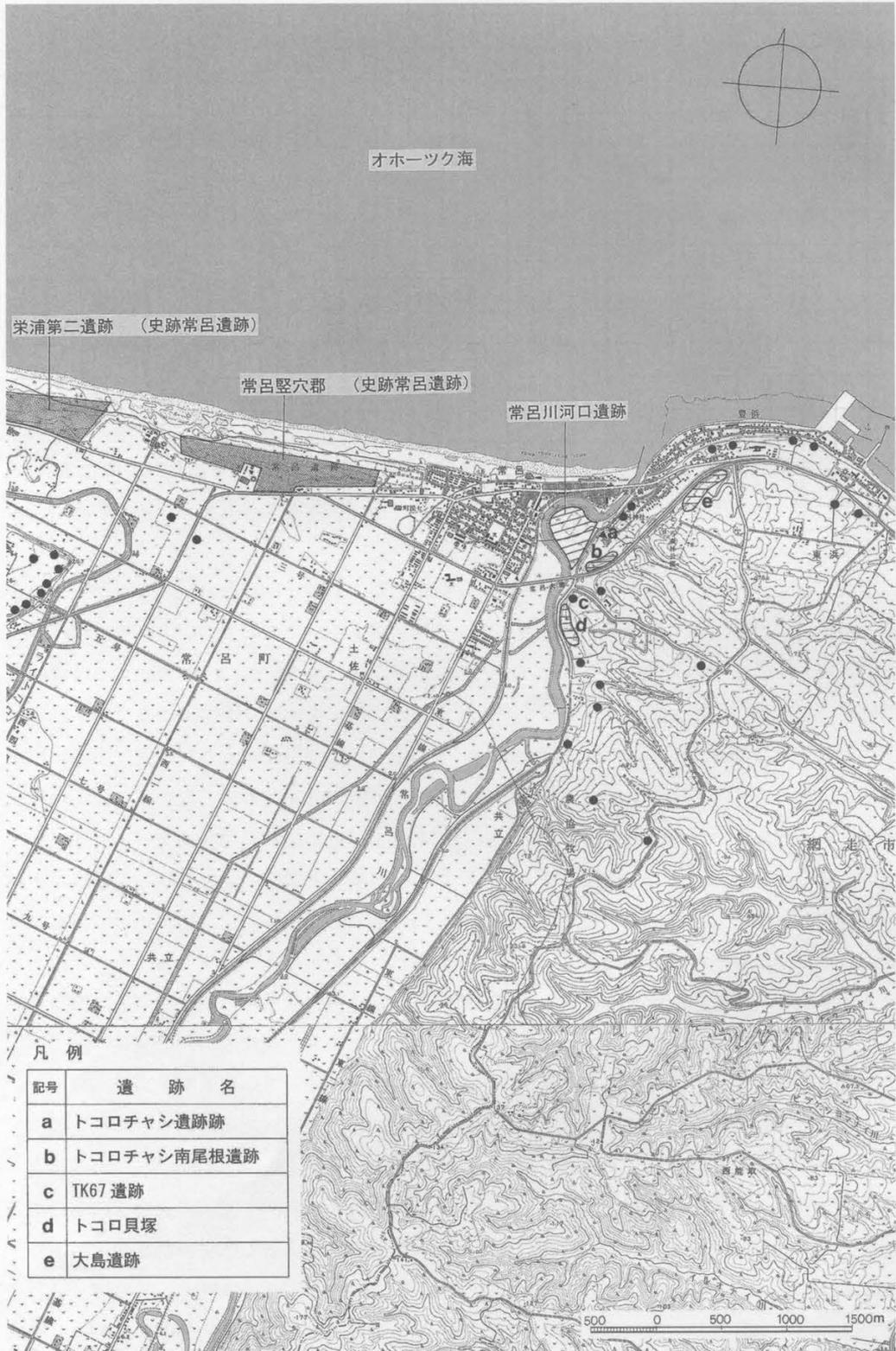
第2図 地形模式図

## 第Ⅲ章 周辺の遺跡

本遺跡の後背地にある標高20～30mの中位段丘には学史的にも有名な遺跡が多数存在する(第3図)。トコロチャシ跡遺跡は本遺跡から約100～150mの距離である。昭和35年に擦文文化期とアイヌ文化期の研究を目的とした調査が東京大学文学部により行われ、オホーツク文化期1号堅穴内側(藤本e群)、同外側の2軒が調査された。また、堅穴埋土中には近世アイヌ文化の遺構も検出されている。昭和38年にはアイヌ文化期の濠とオホーツク文化期堅穴との時間関係を解明するためオホーツク文化期2号堅穴(藤本e群)と新旧2本の濠が調査されている。平成3年から再度、トコロチャシ跡の濠の調査を実施しており、平成7年度の調査において刀子、中柄、青銅製円盤、矢筒、短刀、長刀を副葬するアイヌ墓のほかオホーツク文化期の屋外の骨塚も発見されている。平成8年度の調査ではチャシの出入り口と思われる橋状遺構(ルイカ)に類する箇所も検出され、先に認められていた柵列柱穴とあわせチャシ跡の構造解明に大きな成果が得られた。

さらに東京大学は平成10年からオホーツク文化期の堅穴調査を開始した。トコロチャシ跡遺跡0地点としたチャシの濠の南側に位置する7号堅穴である。この堅穴の調査は平成11年も引き続き行われた。長軸13.5m、短軸9.7mの7a号堅穴と長軸8.5m、短軸7.5mの7c号堅穴の2軒重複住居である。いずれも火災を受けているが、特に7a号では白樺樹皮を巻かれた炭化材列などが確認され、住居内部の構造を解明する上で貴重な情報をもたらした。各種の出土遺物も豊富である。骨塚の前面から出土した十字形の青銅製品をはじめ、炭化木製品では大小の盆・碗・樹皮容器・櫛・杓子・スプーンなどがある。骨塚にははくマ・エゾシカ・タヌキ・キツネの動物骨が見られる。時期はソーメン状貼付文(藤本e群)に比定される。平成12・13年に調査された8号堅穴は7号堅穴同様の火災住居である。壁面に樹皮をあてた後に板材を設置しており内部構造の一端が明らかにされた。骨塚はくマを主体としてキツネ、タヌキがある。平成13・14年に調査された9号堅穴も同様の構造をもった堅穴である。また、本遺跡の15号堅穴でも屋根材と思われる樹皮とそれを留めたと推測できる木釘、炭化木製品が発見されている。この様にトコロチャシ跡遺跡から南側に続く台地の縁辺部にはオホーツク文化期をはじめとした大型堅穴の窪地が遺されている。常呂川河口遺跡を含むこの区域は栄浦第二遺跡に匹敵するオホーツク文化の集落遺跡である。

トコロチャシ跡遺跡と連続したトコロチャシ南尾根遺跡は標高60～80mの台地縁辺部にある。地表面から32軒の堅穴が観察され、昭和39年に東京大学文学部により縄文中期北筒式の1号堅穴が調査されている。昭和50年には「トコロバイパス建設」(国道238号線)工事に伴う緊急発掘調査が行われ、18軒の堅穴が発掘されている。この調査では特に縄文後期中葉の船泊上層式・鮫濶式・エリモB式が出土して注目された。昭和61年には最西端部で住宅建設工事に伴う



第3図 常呂川河口遺跡の位置と周辺の遺跡

緊急発掘調査が行われ、8軒の堅穴が調査された。擦文文化期の17号堅穴埋土から頸部に「井」のヘラ記号と回転糸切りの底部をもつ五所川原産の須恵器である長頸壺が出土している。縄文晩期の5号ピットからは中葉と思われる刺突文の施された鉢形土器とボート形の浅鉢が出土している。

トコロチャシ南尾根遺跡の対岸にはTK67遺跡がある。昭和47年に発見されたこの遺跡は昭和61・62年に北海道営畑総事業の農道改良工事に伴い緊急発掘されている。比較的急斜な北側斜面に擦文期の堅穴5軒、時期不明のピット群がありさらに奥まったところには続縄文期を主体とした堅穴4軒がある。擦文期の堅穴は宇田川編年後期に比定されるもので、包含層から五所川原産の大甕の須恵器が出土している。他に須恵器は包蔵地範囲確認調査字岐阜127-6番地、表面採集により岐阜地区国有林、常呂川河口遺跡で発見されている。TK67遺跡と連続しているのがトコロ貝塚である。昭和33~36年に東京大学文学部による学術調査が実施されている。長さ約200m、幅約70mのカキ貝を主体とした縄文中期北筒式の貝塚である。トコロ六類と五類土器が層位的に確認されるとともに縄文早期の石刃鎌が類竹管文を3段めぐらしたトコロ14類土器と共伴することが明確になった。

平成11~13年に東京大学大学院人文社会系研究科教授宇田川洋氏を研究代表として東京大学常呂研究室と常呂町による地域連携推進研究に伴う詳細分布調査がトコロチャシ跡遺跡とトコロチャシ南尾根遺跡で実施され、ほぼ全域から遺物が出土している。確認された遺構は縄文早期東釧路系の堅穴、石刃鎌の石器集中域、縄文中期の集石、オホーツク文化期の土壇墓2基である。特にオホーツク文化期の土壇墓は予想されていたことであるが、堅穴群と土壇墓は分離されており墓域を形成していたことが推測された。オホーツク文化期の社会組織・集落研究に果たす役割は大きいものがある。この二遺跡は平成14年9月に史跡常呂遺跡として追加指定を受けた。現在、常呂町ではこの地域の史跡整備に向けた基本構想を策定中であるが、平成15年から東京大学常呂研究室の協力をいただきオホーツク文化期の堅穴復元のための基礎資料を得るため10号堅穴を調査した。時期は藤本編年d群期に比定されるが、重複する内部の藤本編年e群期の堅穴は3期にわたり縮小化が認められる。

この様に本遺跡の後背地の段丘上には大遺跡が多く、時期も縄文早期からアイヌ期まで連続しており、常呂川河口遺跡の性格を解明する上でも重要な地域である。例えばオホーツク文化期の堅穴をみてもトコロチャシ跡の4軒と常呂川河口遺跡の15号堅穴はソーメン文状貼付文（藤本e群）の時期であり、両者に新旧関係があるのか同時併存するかなどの問題がある。擦文期の堅穴も常呂川河口遺跡と同じで後期のものが多い。続縄文期の堅穴は宇津内系が多いようであり、後北C<sub>2</sub>・D式の土壇墓もある。縄文後期では本遺跡からは堅穴の発見はないがピット2基、集石4基あり、周辺に集落跡が予想される。段丘上の遺跡はごく一部分を調査されたに過ぎず各時期の全容を明らかにすることはできないものの、本遺跡とは比較的類似した時代構成である。しかし、個々の時代を見ると縄文晩期後葉の弊舞式から続縄文期初頭の興津

式、宇津内Ⅱa式。中葉の宇津内Ⅱb式、後北C<sub>1</sub>式。後葉の後北C<sub>2</sub>・D式までほぼ全期間にわたっている。擦文期は宇田川編年後期に比定できる堅穴が多くある。本遺跡は各時代で濃淡はあるものの生業活動の場として利用されたことは明らかである。特に統縄文期は一時的な場として利用されたのではなく長期間定住していたであろうことが数多くの墓の存在から考えられる。統縄文期の墓では興津系、宇津内系のものが特徴的である。統縄文期の副葬品の消長についてすでに論じられているところであるが、琥珀玉をもつが興津系は原石に近い大型、宇津内Ⅱa式は平玉を多量に副葬している。前回までに報告したピット95・254・263a・301・470・545・872号墓がその例である。宇津内Ⅱb期になると琥珀を副葬する例もあるが極端に減少し本報告書の1012号土壙墓にみられる管玉が加わるなど変化が現れてくる。後北C<sub>1</sub>式では鉄製刀子を副葬するものもあるが石器が一般的である。後北C<sub>2</sub>・D式は鉄製品の他にガラス玉がある。副葬品の豊富さは生業活動の賜物であり、安定した食料源の獲得が定住をもたらしたのであろう。低地にも大規模遺跡は存在し、隣接する段丘上の遺跡群との相関関係を考える必要がある。

(武田 修)

## 文 献

- 1) 東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室「トコロチャシ跡遺跡」1995年度調査略報 1995. 9
- 2) 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室・常呂実習施設「トコロチャシ跡遺跡0地点」1999年度調査略報 1999. 9
- 3) 東京大学大学院人文社会系研究科・常呂町教育委員会「トコロチャシ跡遺跡群の調査」トコロチャシ跡遺跡・同オホーツク地点及び「常呂遺跡」の史跡整備に関する調査概要報告 2002. 2



第4図 遺構配置図

## 第Ⅳ章 竪穴住居

### 140号 竪 穴

#### 遺 構 (第5図, 図版1-1)

本竪穴はA87・88, A'87・88グリッドにまたがって位置する。表土を剥土すると明褐色砂層と角礫層がみられた。角礫は5~15cmのものを多量に含むもので、近代の住民が土地を平坦にするため竪穴の窪みを埋めたものと判断できた。竪穴の北壁側にはコンクリートによる家屋の基礎もみられるので、住宅建設時に埋められたのであろう。この礫層を取り除くと層厚約9cmの白色の樽前a火山灰が全面を覆っていた。規模は東西約5.00m、南北は住宅基礎部で破壊されているため明確ではないが、支柱穴の位置から判断して約4.40mの方形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約50cmを測る。

カマドは東壁中央部に構築されている。構築材は橙色粘土と黒褐色粘土の混合土と黄褐色粘土を用いる。芯材に扁平な角礫を両袖部と煙道部に利用しているが、垂直でなく、水平の状態であった。煙道は緩く傾斜しており、煙道口には第6図-4に示す小型土器が出土している。カマド内部の焼土は粘性を有し、微細な骨粉が混入する。煙道部に被さるように黄褐色粘土が3点の角礫とともに広い範囲にみられた。これらはカマド構築材と思われる。床面からは炭化材が検出されているが、主にカマドの周辺と西壁側に集中する。特に、西壁側に並ぶ2本の支柱穴の前面にある炭化材は梁材と推測できる。他は垂木材であろう。炉跡は竪穴中央部にあり、径40cmを測る。支柱穴は4本ある。径約12~18cm、深さ約18~30cmである。径約5~10cm、深さ約8~13cmの壁柱穴は規則性がなくまばらにみられる。

#### 遺 物 (第6図, 第7図, 第8図-1~8, 図版1-2~5)

第6図-1・2は床面出土。1は高杯の杯部。2は紡錘車。半載状施文具による刺突文が放射状に施される。70g。3はカマド煙道部出土の大型鉢形土器。口唇部は内側に内屈し、交互に施された斜位の刻線文は横位の沈線文によって3段に区画される。器面は復段文直下が幅狭い刷毛、底部にかけて篋により調整される。4は口径12.5cm、器高14cmの小型無文土器。器面は篋により調整されている。5は口径13.5cm、器高11cmの小型無文土器。口縁部は横位の調整痕がみられる。6は口径11cm、器高9cmの小型無文土器で口縁部に2本の太い沈線文をもつ。7は口径約9.5cm、器高約8.5cmの小型無文土器。底部は丸みをもち不安定である。8は小型壺形土器。器面は刷毛により調整される。9は鋭く矢羽根状の刻線文が施される。10は鋸歯文、11は針葉樹状文、12は横位の沈線文と列点文によって斜位の刻線文が区画される。13は格子目文が縦位の沈線文で区画される。14は無文。

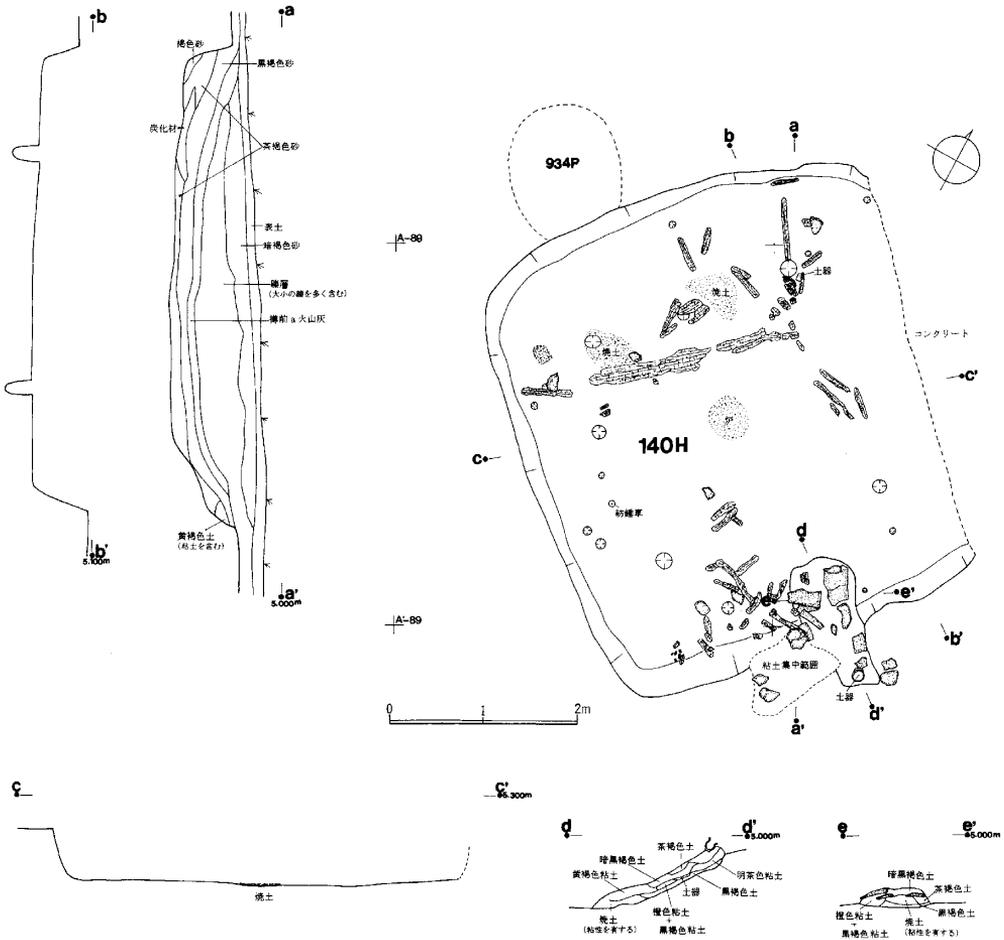
常呂川河口遺跡

第7図-1は口径約22cm、器高約32cmの大型鉢形土器。格子目状の刻線文は2本の横走沈線文で区画される。2は刺突文が十字形に施された紡錘車。55g。3～7は擦文土器の底部。8・9は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。10は同C<sub>1</sub>式。11は宇津内Ⅱb式。12・13は同Ⅱa式。14は縄文晩期中葉であろう。

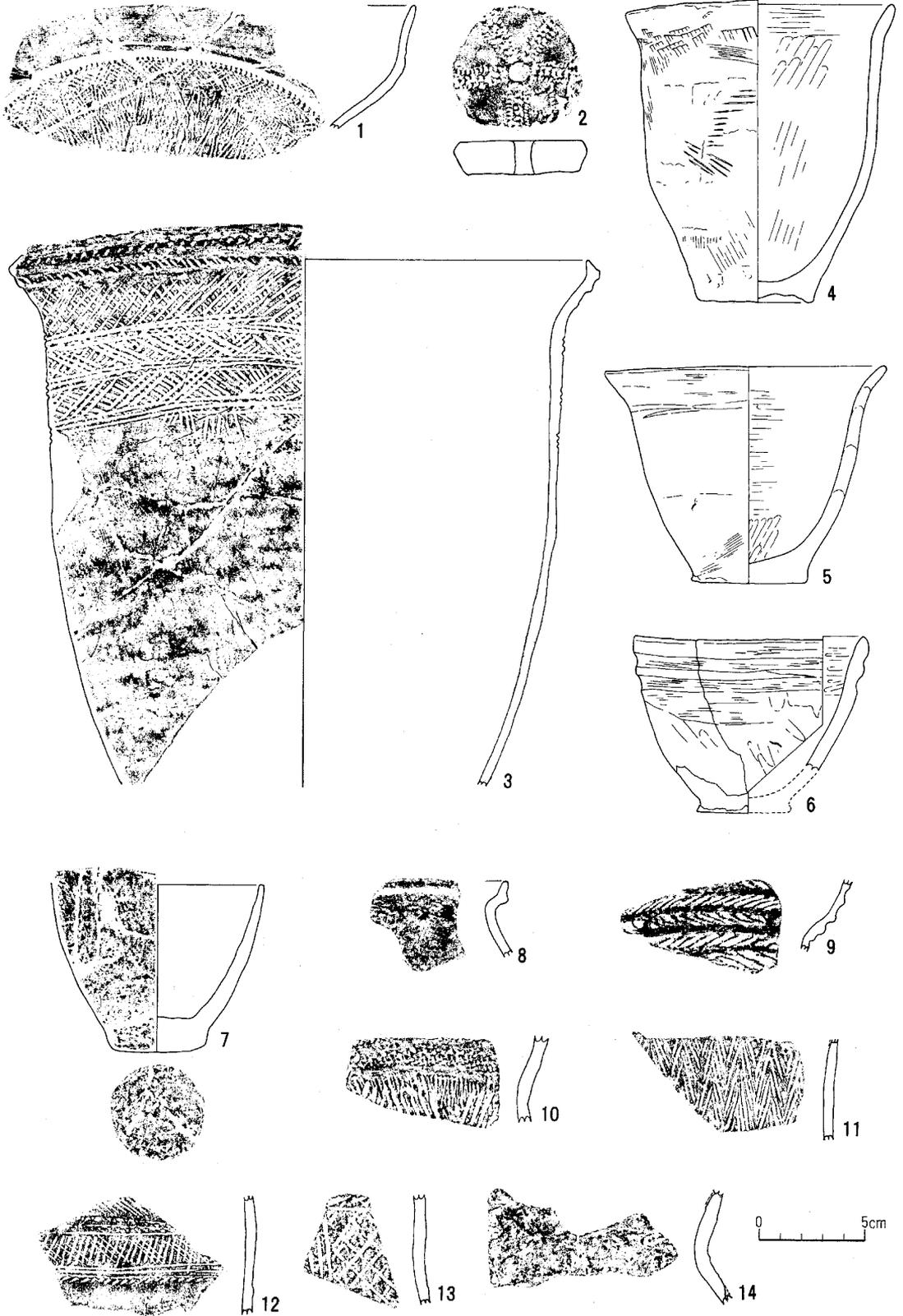
石器は第8図-1・2が無茎石鏃。3は有茎石鏃。4～8は削器。8は玄武岩製であり、他は黒曜石製である。

小 括

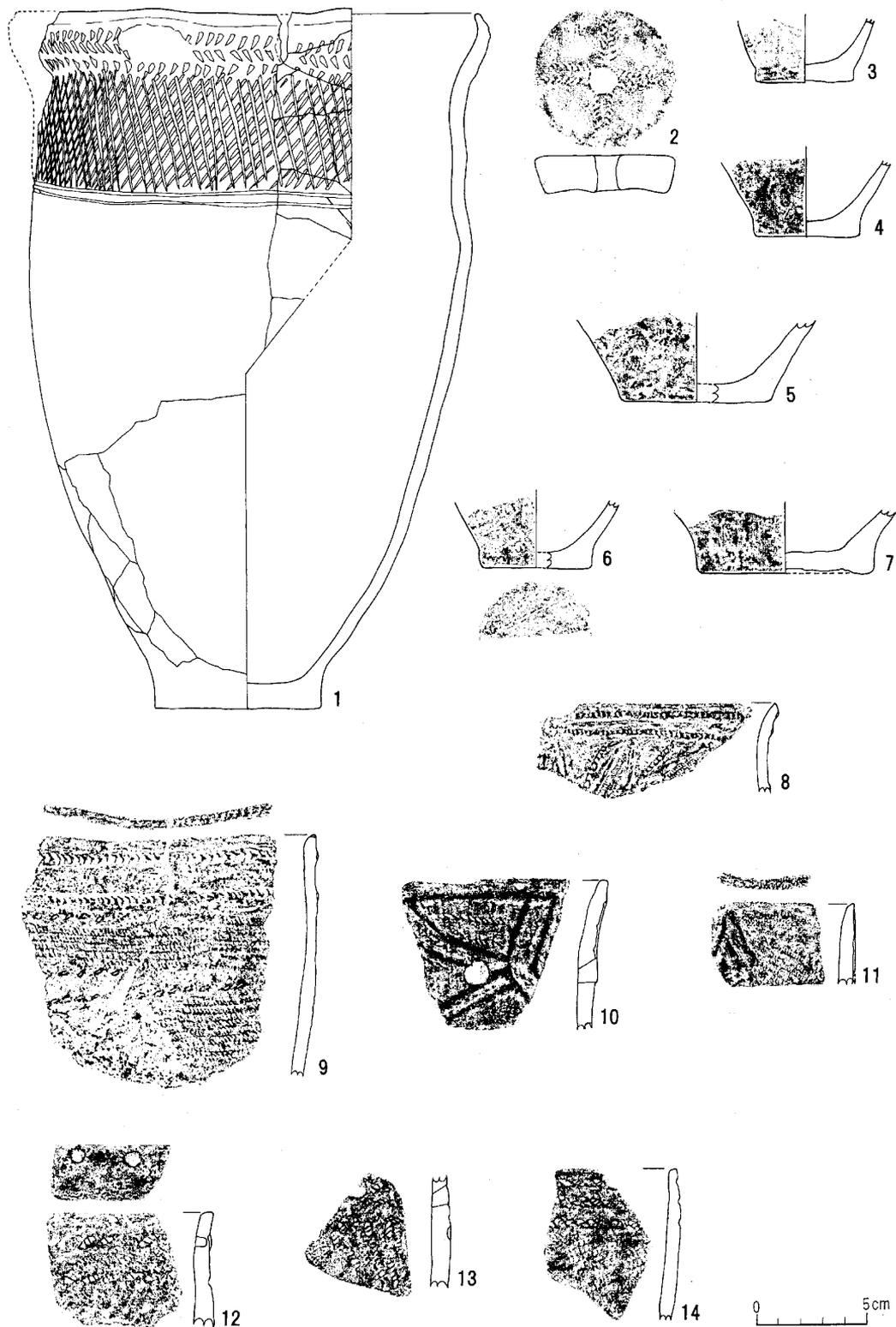
本竪穴は東西方向にやや長い方形を呈する。擦文期の焼失住居である。復段文様のカマド出土の土器から宇田川編年後期、藤本編年h・i期に比定される。(武田 修)



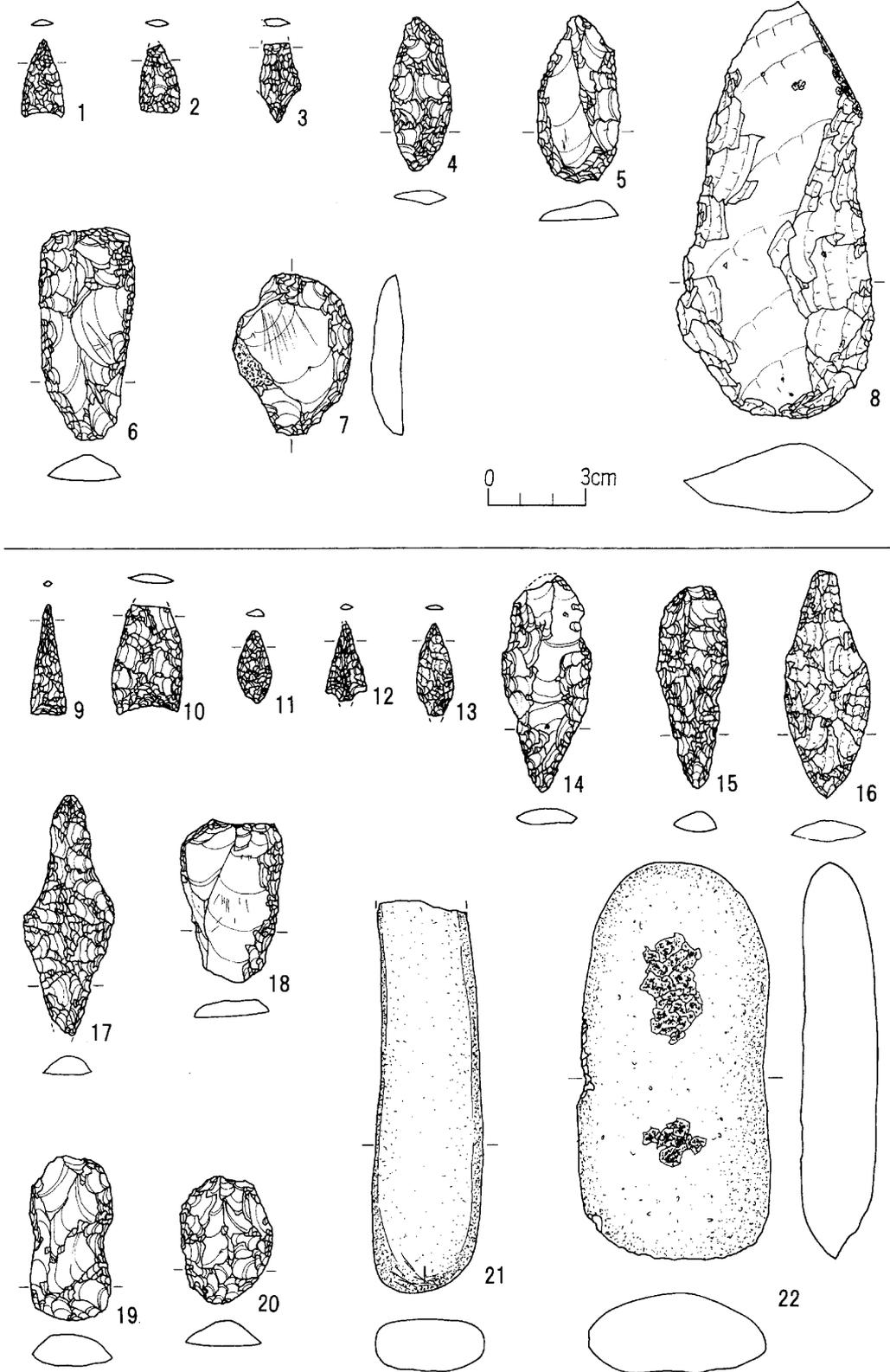
第5図 140号竪穴平面図



第6图 140号竖穴床面(1·2)·煙道(3)·煙道上部(4)·埋土(5~14)出土土器·土製品



第7圖 140号竖穴埋土(1~14)出土土器・土製品



第8图 140号竖穴埋土(1~8)、141号竖穴埋土(9~22)出土石器

## 141号 竪 穴

### 遺 構 (第9図, 図版2-1・2)

本竪穴はA85・86, B86・87グリッドにまたがって位置する。表土下の茶褐色砂層を剥土した段階で白色の樽前a火山灰をブロック状に混入する黒褐色砂層の堆積が認められ、竪穴であることを確認した。土層図に示すとおり黄褐色を呈した摩周b火山灰が壁上部の一部に認められたが、明瞭な堆積でなく流れ込んだものと考えられる。竪穴の北東隅にはコンクリートブロックが重ねられ破壊を受けているため規模は明確に把握することができなかった。規模は東西約5.60m、南北約4.60mであり、東西がやや長い方形である。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約60cmを測る。

カマドは東壁中央部に構築されているが、袖部は全く認められず燃焼部の焼土と黄褐色粘土の煙道部が残存する。煙道の傾斜は壁付近で皿状に浅く立ち上がる。炉跡は中央部に位置する。焼土面は大きく径約70cmである。

本竪穴は焼失住居であり、埋土の茶褐色砂層の下部から多量の炭化材がみられた。炭化材は竪穴のほぼ全域から検出されているが、床面密着は少なくやや浮いた状態で出土する。平面図のスクリーンゾーン区域では3～4mmの茅材が炭化材の上部にみられた。炭化材は壁上部から内側に向けた斜めの状態のものが多くこれらは垂木材と思われる。出土状態から中央部に向かって放射状に配置されていたと考えられる。

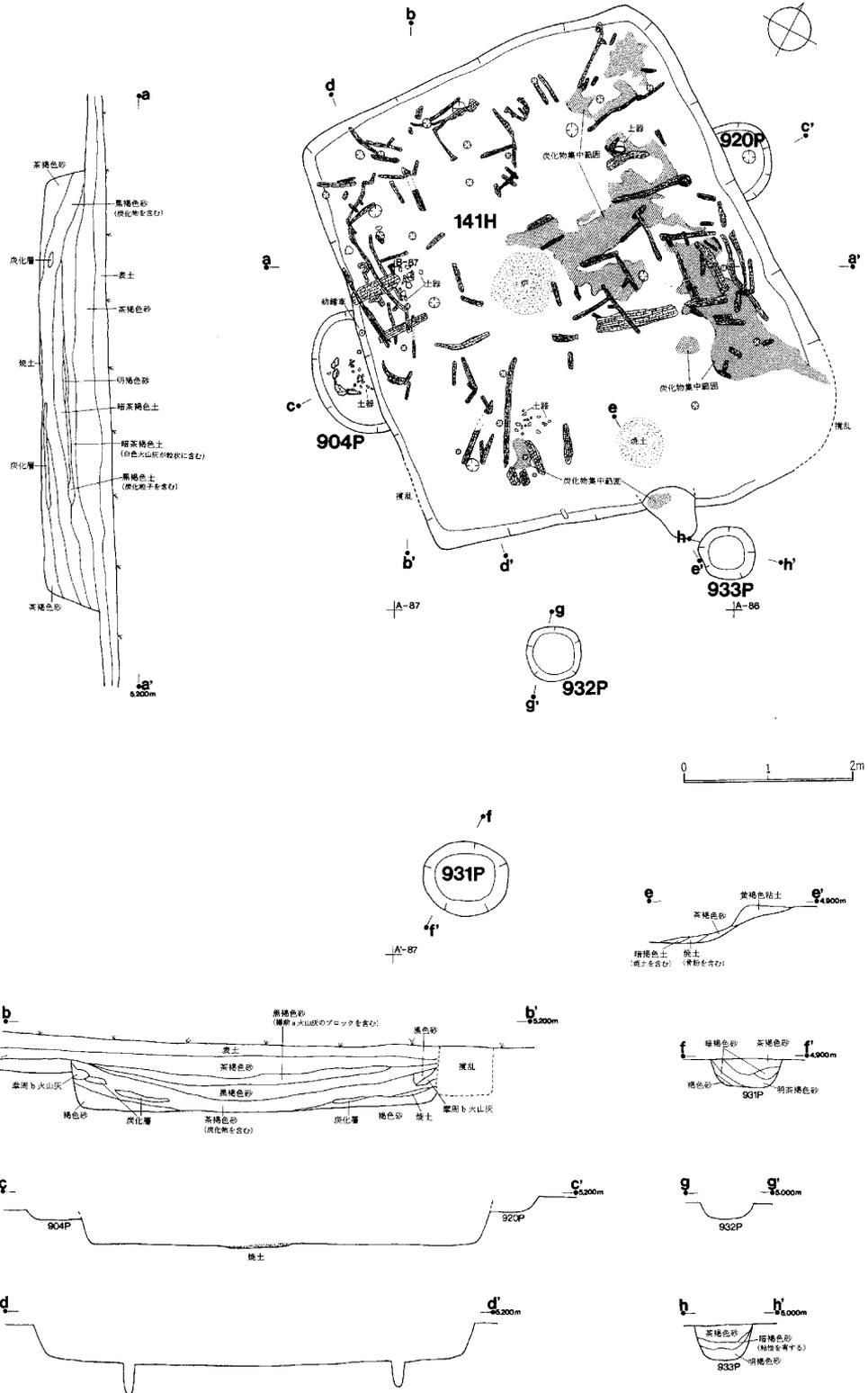
主柱穴は細く径約8～14cm、深さ約13～35cmである。3本単位で東西方向に2列並ぶのであろう。壁柱穴は径約8～15cm、深さ約9～22cmであり配置に規則性はない。

### 遺 物 (第10図, 第11図, 第8図-9～22, 図版2-3・4)

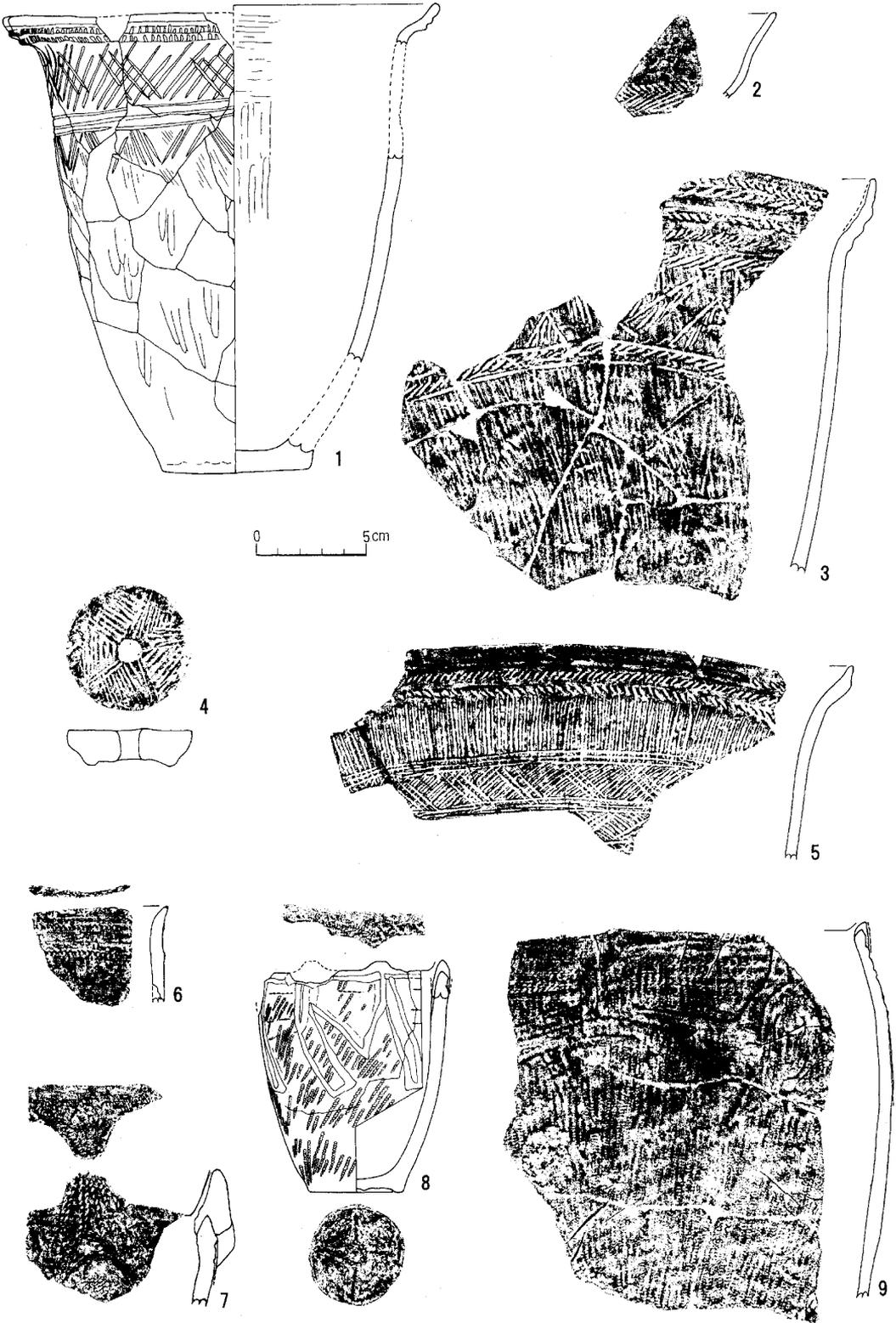
第10図-1は口径約20cm、器高22cmの中型鉢形土器。口縁部の隆帯には刻みが施され、斜位の刻線文は横位の沈線文と「ハ」字状の刻線文で区画される。2は高杯。3は数本の刻線文が三角状に施される。4は刻線文が重鎮された紡錘車。55g。5は縦位、斜位の刻線文が横位の沈線文で区画される。6は続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。7～9は宇津内Ⅱb式。8は口径8cm、器高10cmの小型土器。擬縄隆帯が「ハ」字状に垂下する。

第11図-1は続縄文宇津内Ⅱb式。2・6は横位の沈線文、3は縦位の縄線文が施される。続縄文初頭であろう。4・5は縄文晩期中葉。7は縄文中期トコロ六類。8は口唇部と口縁部に押引文が施される。トコロ六類より古手に位置づけられる。9～11は縄文前期末葉の押型文。

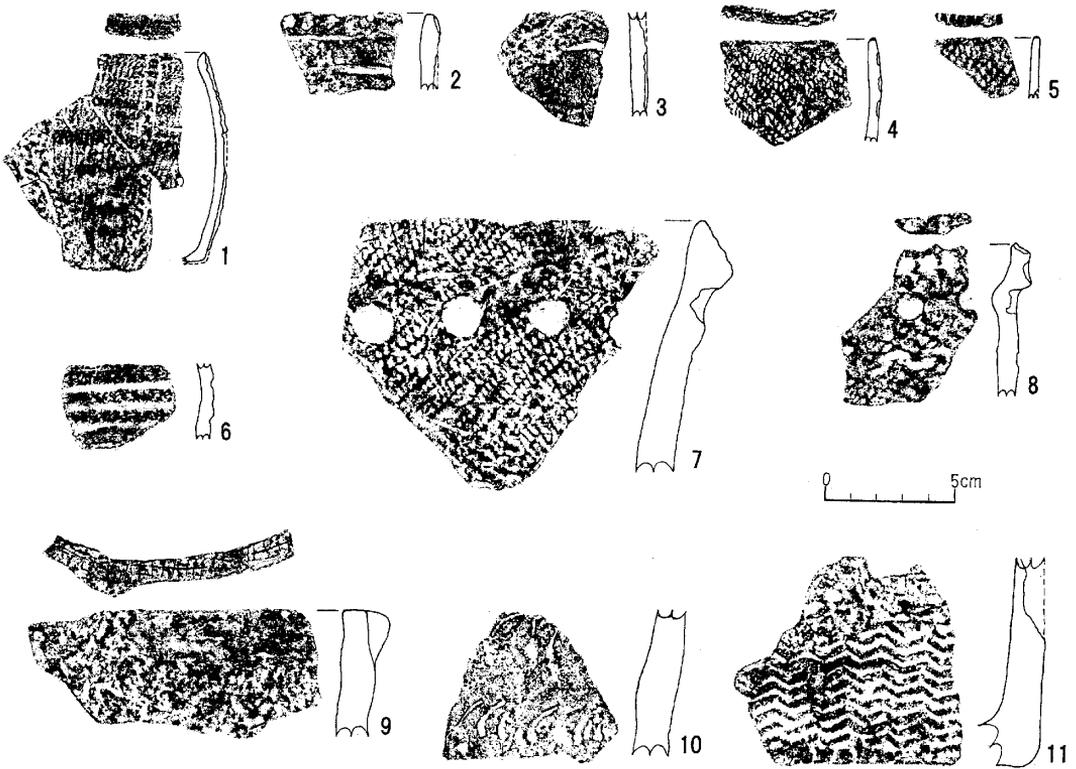
石器は第8図-9・10が無茎石鏃。11が柳葉形石鏃。12・13が有茎石鏃。14・15は片面加工ナイフ。16・17は両面加工ナイフ。18は削器。19は両側面の中央部が抉入した削器。20は搔器。21はたたき石。先端部は火熱を受けたためか黒色化している。22は表面に敲打痕があるが、裏面の下端部は粗く刃部を作出しており打製石斧の未製品と思われる。11はメノウ製、13・16は頁岩製、21・22は泥岩製であり他は黒曜石製である。



第9図 141号竪穴ピット904、920、931、932、933平面図



第10圖 141号竪穴埋土(1~9)出土土器・土製品



第11図 141号竪穴埋土(1~11)出土土器

### 小 括

本竪穴は擦文期の橈矢住居である。床面出土遺物はないが竪穴の平面形態が東西にやや長い点、竪穴間の相互距離から140号竪穴と同時併存とみられるので宇田川編年後期、藤本編年h・i期に比定されるとみてよいであろう。 (武田 修)

## 142号 竪 穴

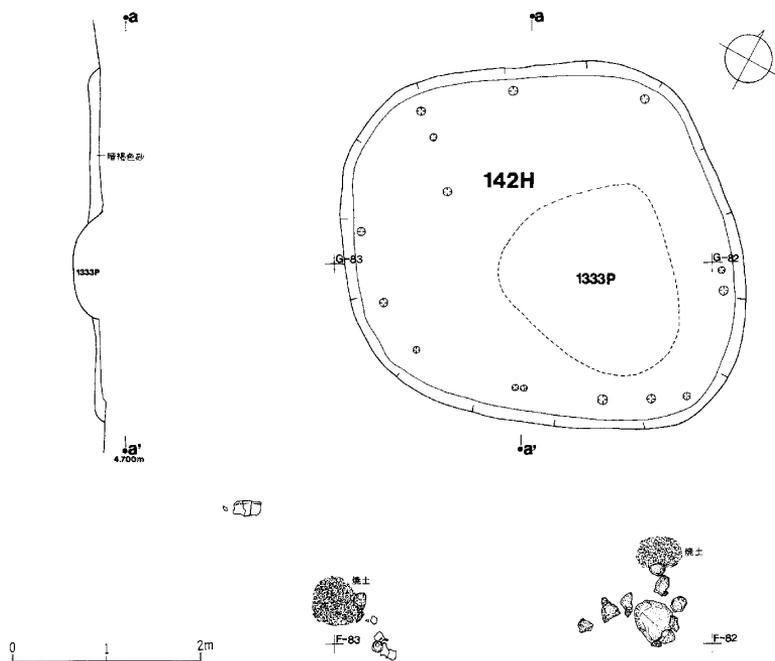
### 遺 構 (第13図, 図版3-1)

本竪穴はF82, G82グリッドに位置する。形態は南東壁側がやや張り出した不整形なもので、規模は長軸約4.40m、短軸約3.60mである。壁は皿状に浅く立ち上がり、高さは確認面から約10cmである。床面のほぼ中央部にピット1333が切り込まれているため炉跡は検出できなかった。

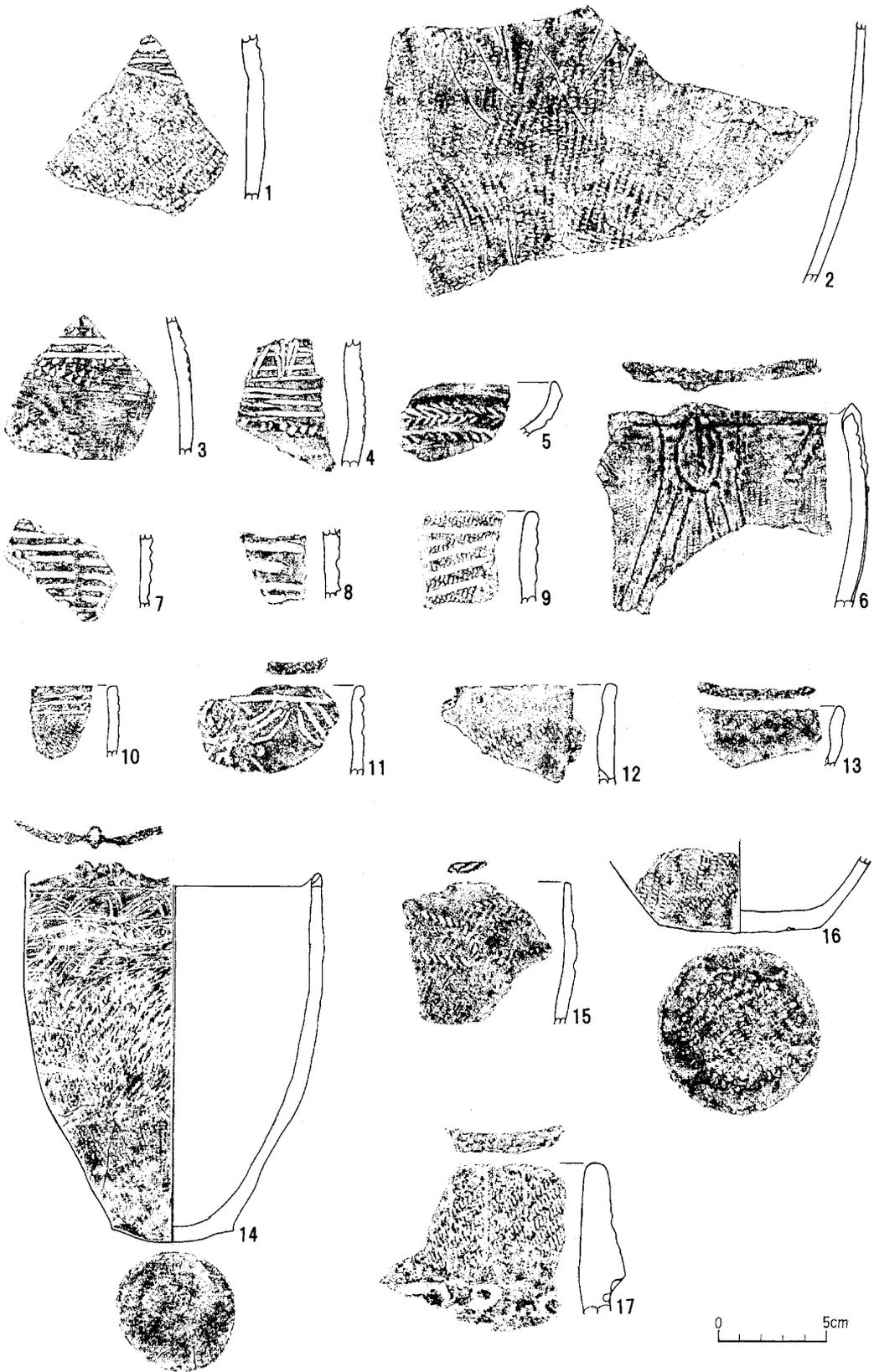
支柱穴はみられないが、径約6~10cm、深さ約5~10cmの壁柱穴は東壁側の一部を除きほぼ等間隔に配置される。

### 遺 物 (第13図, 第14図)

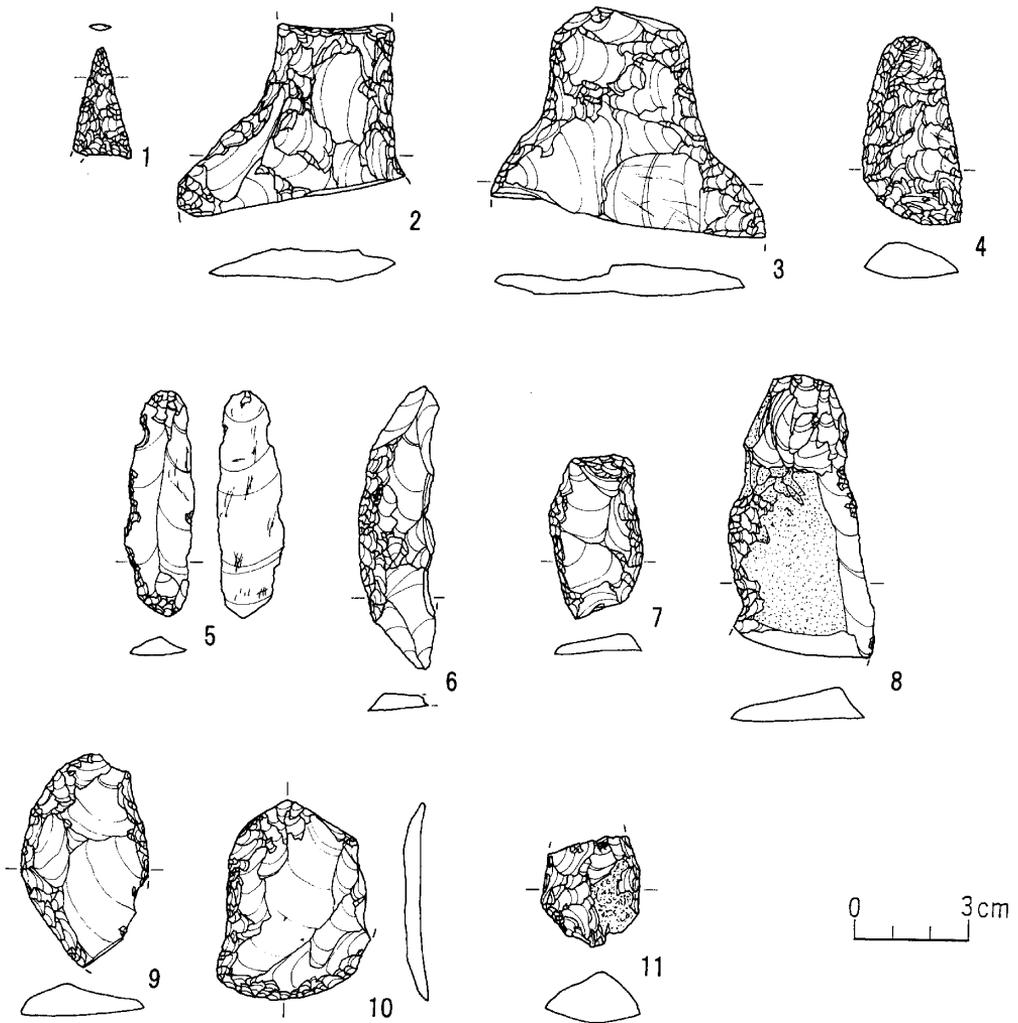
第13図-1・2は床面出土。2点とも縦走縄文を地文に1は上部に沈線文が施される。2点とも続縄文初頭であろう。3~5は擦文土器で3・4は前期である。6は続縄文宇津内Ⅱb式。7~11は沈線文を主体とし、12・13は口縁部が無文となる。続縄文初頭であろう。14は口唇部に突起をもち、口縁部は半載状施文具による波状沈線文と横走沈線文がみられ、胴部は撚糸文、下部は縦走縄文が施される。丸底の底部は不安定であり、内部は多量の煤が付着する。続縄文初頭であろう。15は縄線文を方形に区画する。16は続縄文土器の底部で、縄端圧痕文が円形に施される。17は胎土に繊維を多量に混入する縄文中期トコロ六類。



第12図 142号竪穴平面図



第13图 142号竖穴床面(1·2)·埋土(3~17)出土土器



第14図 142号竪穴埋土(1~11)出土石器

石器は第14図-1が無茎石鏃。2・3は柄部のある靴形石器。4は片面加工ナイフ。主要剥離面の打瘤部は調整されている。5~10は削器。11は搔器。全て黒曜石製である。

### 小 括

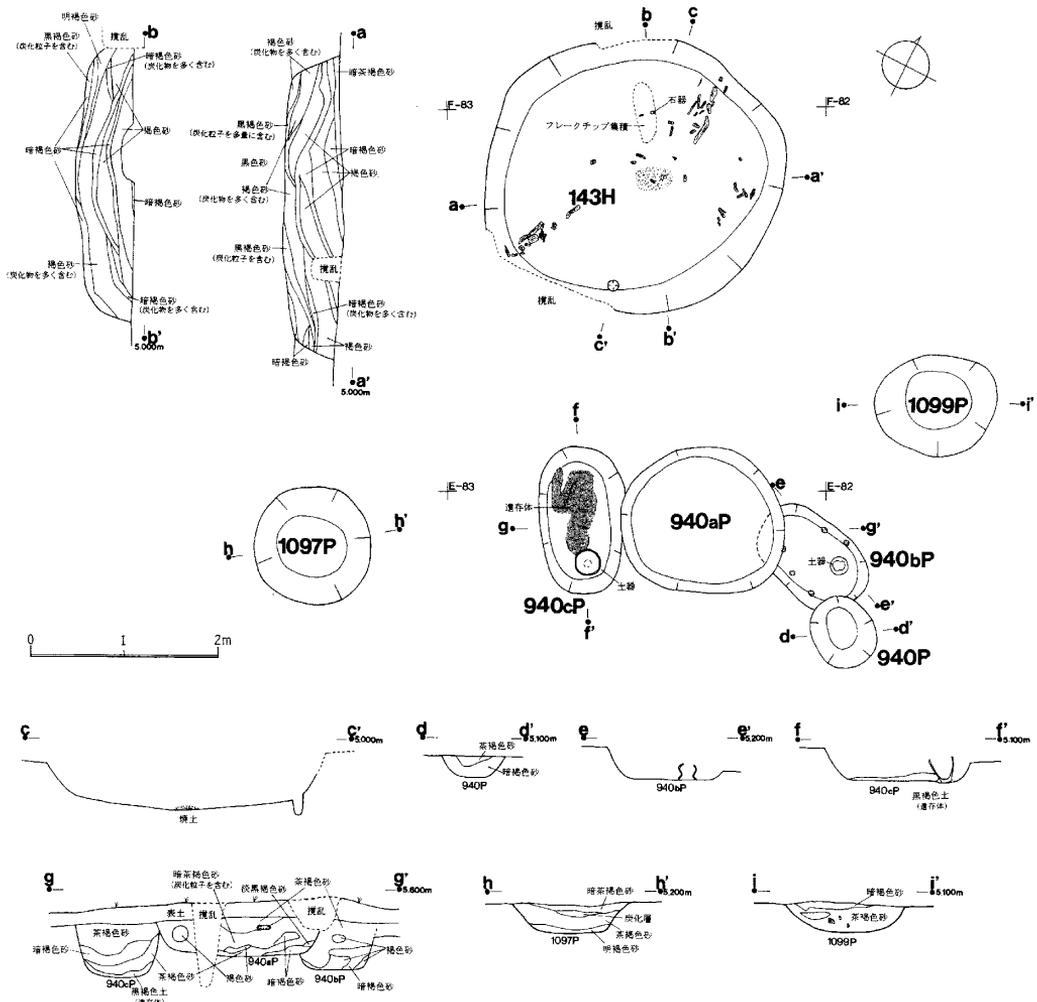
第13図-1・2の床面出土土器は続縄文初頭である。同図に示した埋土出土の沈線文系の土器群も同時期とみられる。 (武田 修)

# 143号 竪 穴

## 遺 構 (第15図)

本竪穴はE82, F82グリッドに位置する。規模は直径約3.20mの不整形円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは約40cmを測る。埋土は褐色砂層間に腐食土層である暗褐色砂、黒褐色砂が交互に堆積する。IV層暗褐色砂層に達した段階で、竪穴のほぼ中央部に位置するところから鯨骨と第16図-3に示す興津式相当土器が出土した。

埋土を掘り下げる段階から炭化材の混入が顕著に認められ、床面とやや上部から検出された炭化材は細いもので径4~5cm、太いもので径15cmのものが南北方向に連なる状態で検出された。これらは住居の構造材と思われる。中央部にある長さ80cm、幅50cmの炉跡上部には1cmあ



第15図 143号竪穴、ピット940、940a、940b、940c、1097、1099平面図

まりの小木がまとまってみられた。炉跡の西側にはフレーク主体の集積がみられる。

主柱穴と想定されるのは南壁の中央部に1本ある。径約22cm、深さ19cmである。

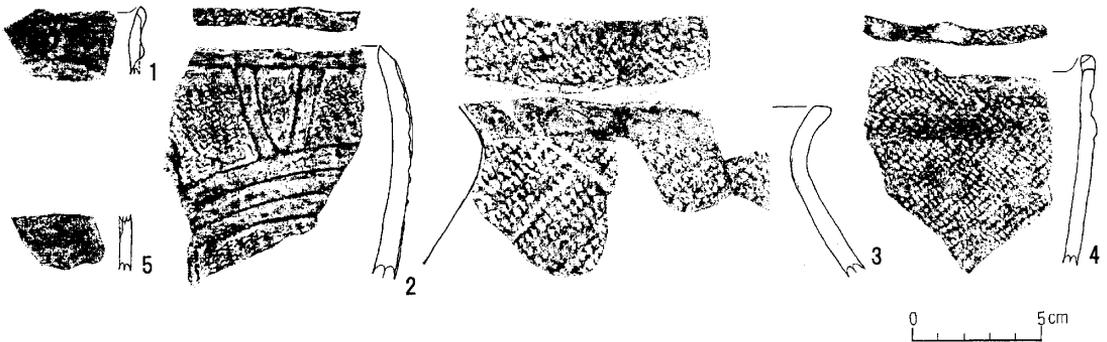
### 遺物 (第16図, 第27図-1~5)

土器は埋土出土である。第16図-1・2は統縄文字津内Ⅱb式。3は口縁部が無文帯をなし、強く外反する。統縄文興津式相当であろう。4は口縁下部に縄線文が施され、横位の隆帯をもつ。5は無文土器。4・5は縄文晩期中葉であろう。

第27図-1は床面出土。剥片の下端部に刃こぼれ状の加工痕がみられる。2~5は埋土出土。2は有茎石鏃。3は両面加工ナイフの柄部。4・5は削器。全て黒曜石製である。

### 小括

本堅穴の床面から土器は出土していないため詳細な時期は不明であるが、統縄文期の堅穴と思われる。(武田 修)



第16図 143号堅穴埋土(1~5)出土土器

## 144号 竪 穴

## 遺 構 (第17図, 図版3-2)

本竪穴はC84, D83・84グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約7.00m、短軸約5.30mの不整長方形を呈し、南北方向に長軸面をもつ。壁高は確認面から約50cmを測る。

黄褐色土を呈した炉跡は長軸面に2基ある。

主柱穴は炉跡に近い位置にあり、径約16~30cm、最大のものは径約40cmである。深さ約15~23cm。壁柱穴は西壁から南壁にかけてみられ径約10~20cm、深さ約9~26cmである。

## 遺 物 (第18図, 第19図, 第20図, 第21図, 第22図, 第23図, 第24図, 第25図, 第26図, 第27図-6~31, 第28図, 図版4-1~9)

第18図-1~10は床面出土。1は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。2~7は宇津内Ⅱb式。8も宇津内系の底部であろう。10は縄文晩期中葉。11~14は埋土出土。11は擦文。12は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式の小型土器。13は口径4cm、器高3cmのミニチュア土器。14は口縁部の大半が欠失する器高21cmの中型土器。無文であるが、縦方向の沈線文と縄文を部分的に施す。

第19図は埋土出土の後北C<sub>2</sub>・D式。1は口径31cm、器高39.5cmの大型鉢形土器。口唇部に4個の小突起をもち、下部の円形微隆起帯間を弧線状の微隆起帯で連結する。2は口径8cm、器高5.5cmの小型土器。1個の吊り耳をもち、微隆起帯を弧状に配する。3は口径13cm、器高14cmの注口土器。胴下部に4個の吊り耳をもち、円形微隆起帯を配する。注口部は径4mmの3個の貫通口をもつ。4は口径14cm、器高8.5cmの注口土器。帯縄文を三角形状に施す。

第20図は埋土出土。1は口径22cm、器高30cmの中型土器。口縁部と胴下部の帯縄文間に山形状の帯縄文を配する。2は大部分が欠失するが口径約7cm、器高8cmの小型土器。3本単位の櫛状施文により直線、弧線状の沈線文が施される。3は大半が欠失するが残存部から判断して上部は19cm×16cmの楕円形を呈した注口土器。注口までの器高は17cm。注口下部は同心円文を帯状に施し、部分的に赤色顔料が付着する。1~3は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。4は口径17cm、器高24cmの中型土器。4個の同心円文を起点に微隆起帯を菱形に施した、統縄文後北C<sub>1</sub>式。

第21図は埋土出土。1は微隆起帯を円形、2は鋸歯状に施した統縄文後北C<sub>2</sub>・D式の大型土器。

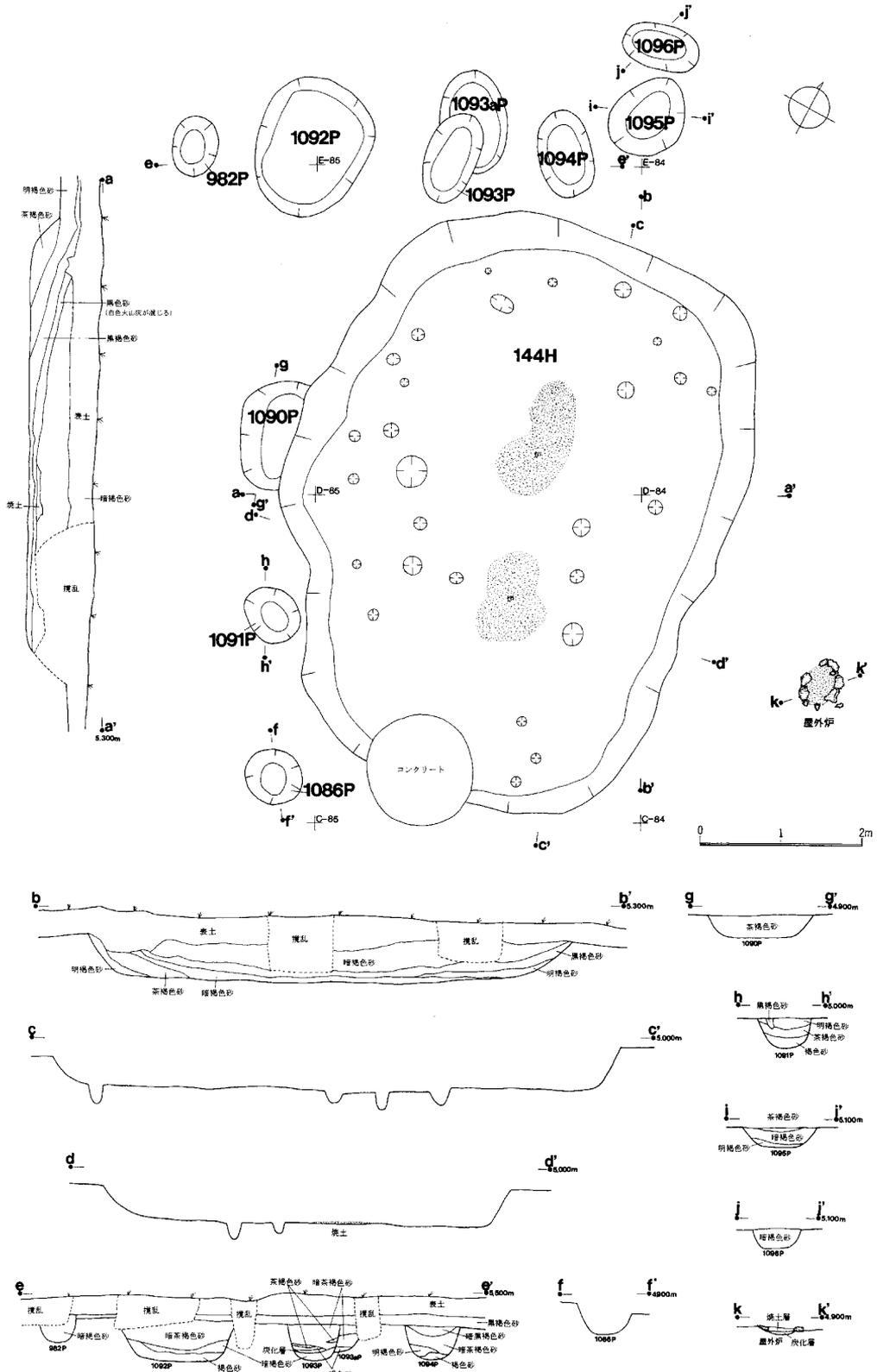
第22図は埋土出土。1~6は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。5は横・縦位に帯縄文を施す。

第23図は埋土出土。全て統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。9は細沈線文と短刻線文を直線的に施す。10は口径3.5cmほどの無文土器。

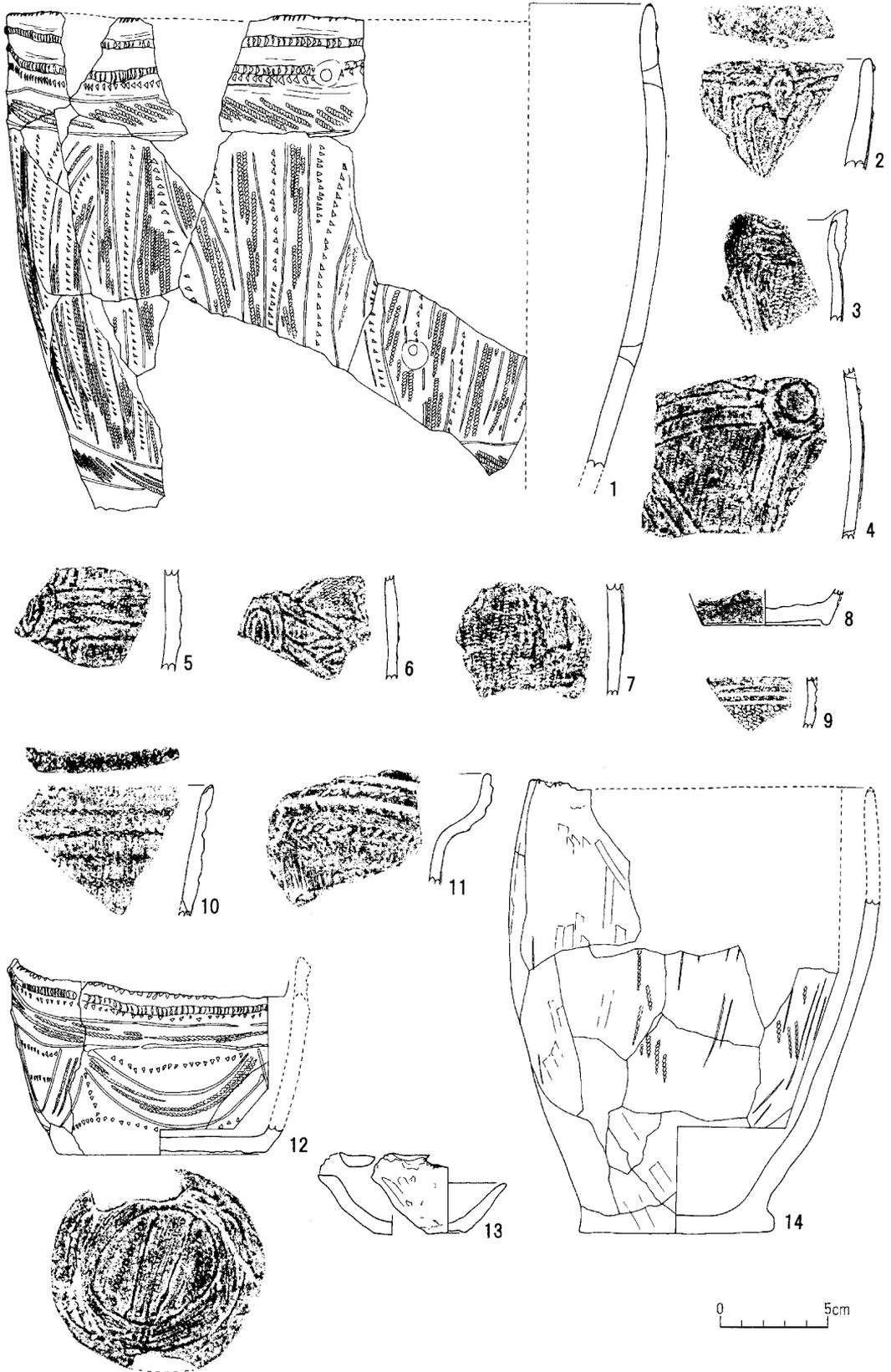
第24図は埋土出土。1~7は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。8は同C<sub>1</sub>式。9は宇津内Ⅱb式。

第25図は埋土出土。1~3は統縄文宇津内Ⅱb式。4は下田ノ沢Ⅱ式。5は底部に木葉痕が残る。宇津内系であろう。6~9は統縄文宇津内Ⅱa式。10は小波状の口縁下部に小孔をもつ。統縄文初頭であろう。11は揚げ底の底部。

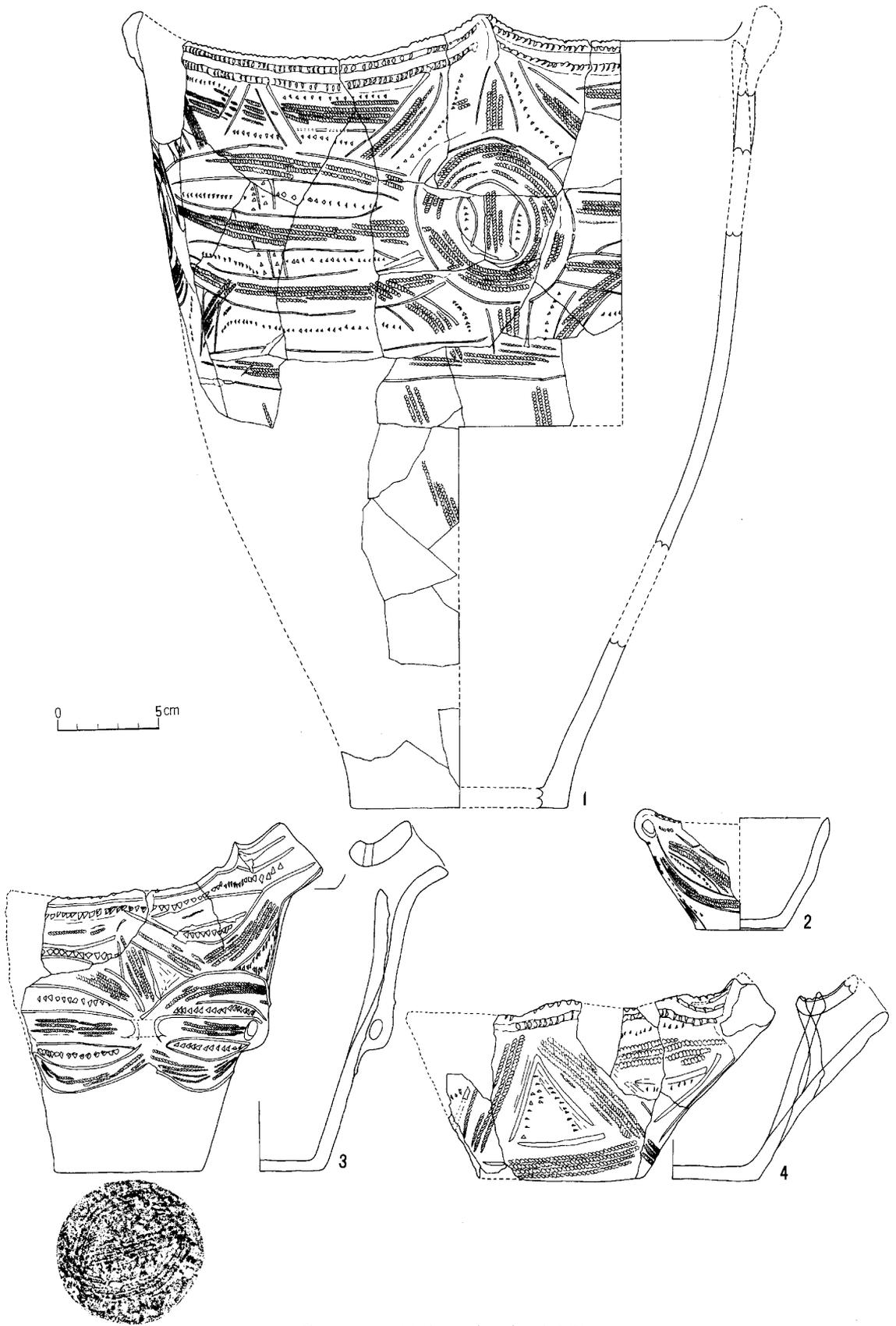
常呂川河口遺跡



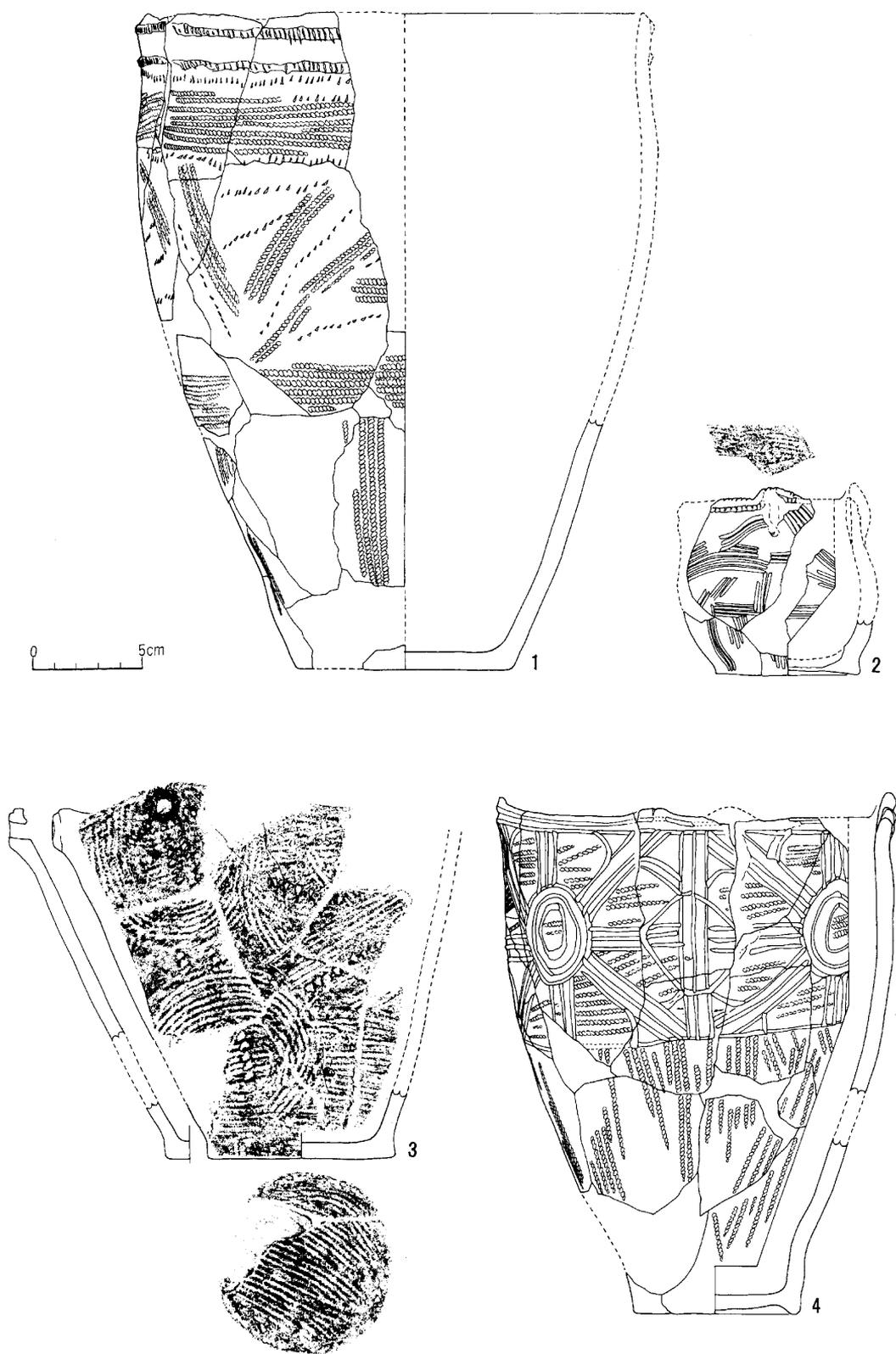
第17図 144号堅穴、ピット982、1086、1090、1091、1092、1093、1093a、1094、1095、1096、屋外炉平面図



第18图 144号竖穴床面(1~10)·埋土(11~14)出土土器



第19图 144号竖穴埋土(1~4)出土土器

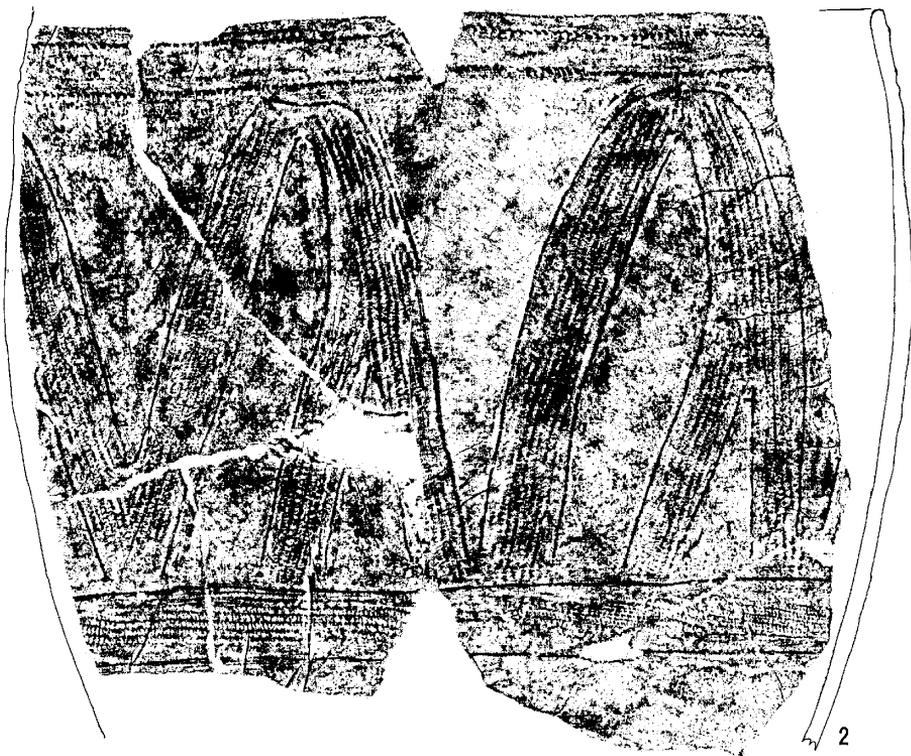


第20图 144号竖穴埋土(1~4)出土土器



0 5cm

1

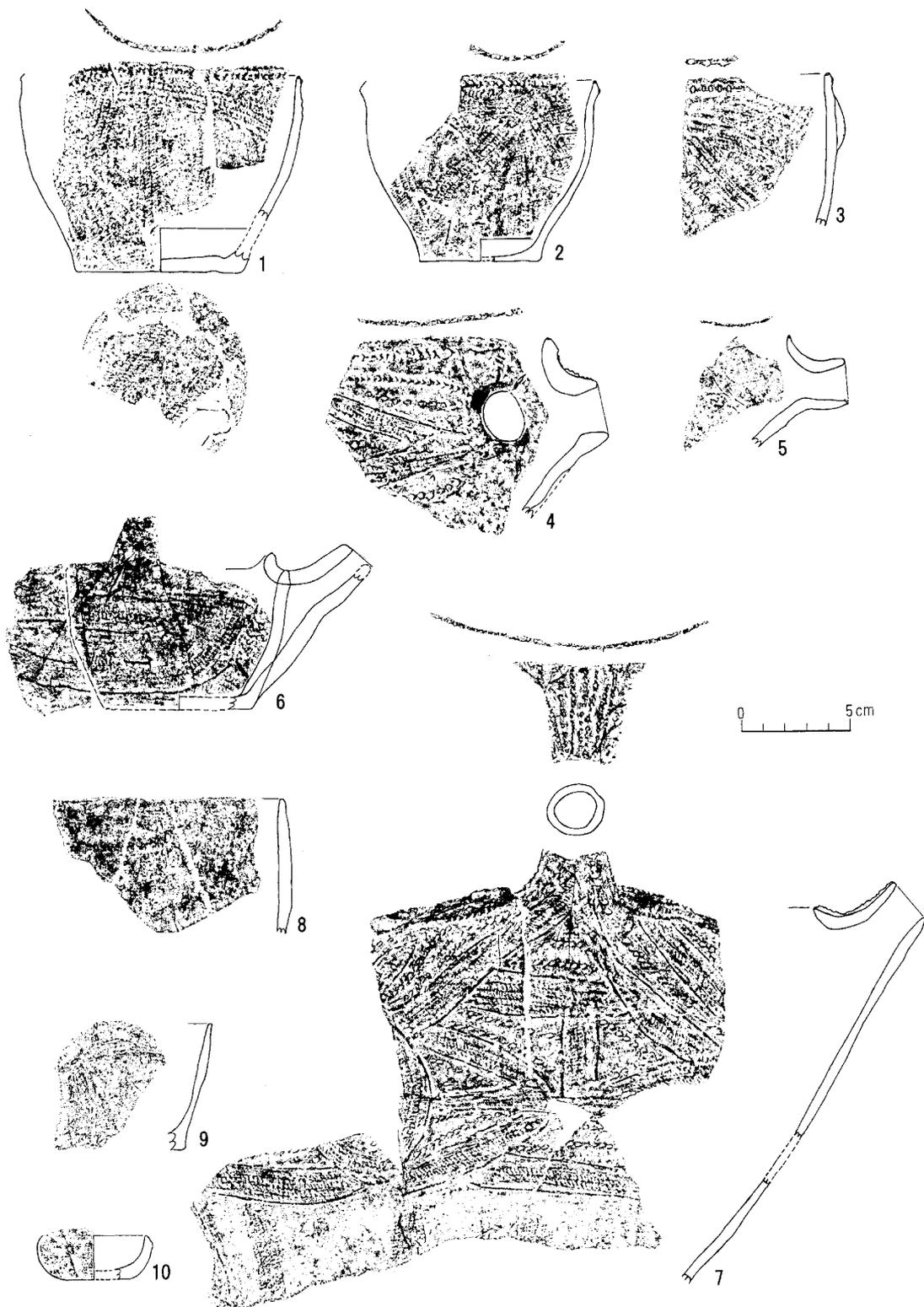


2

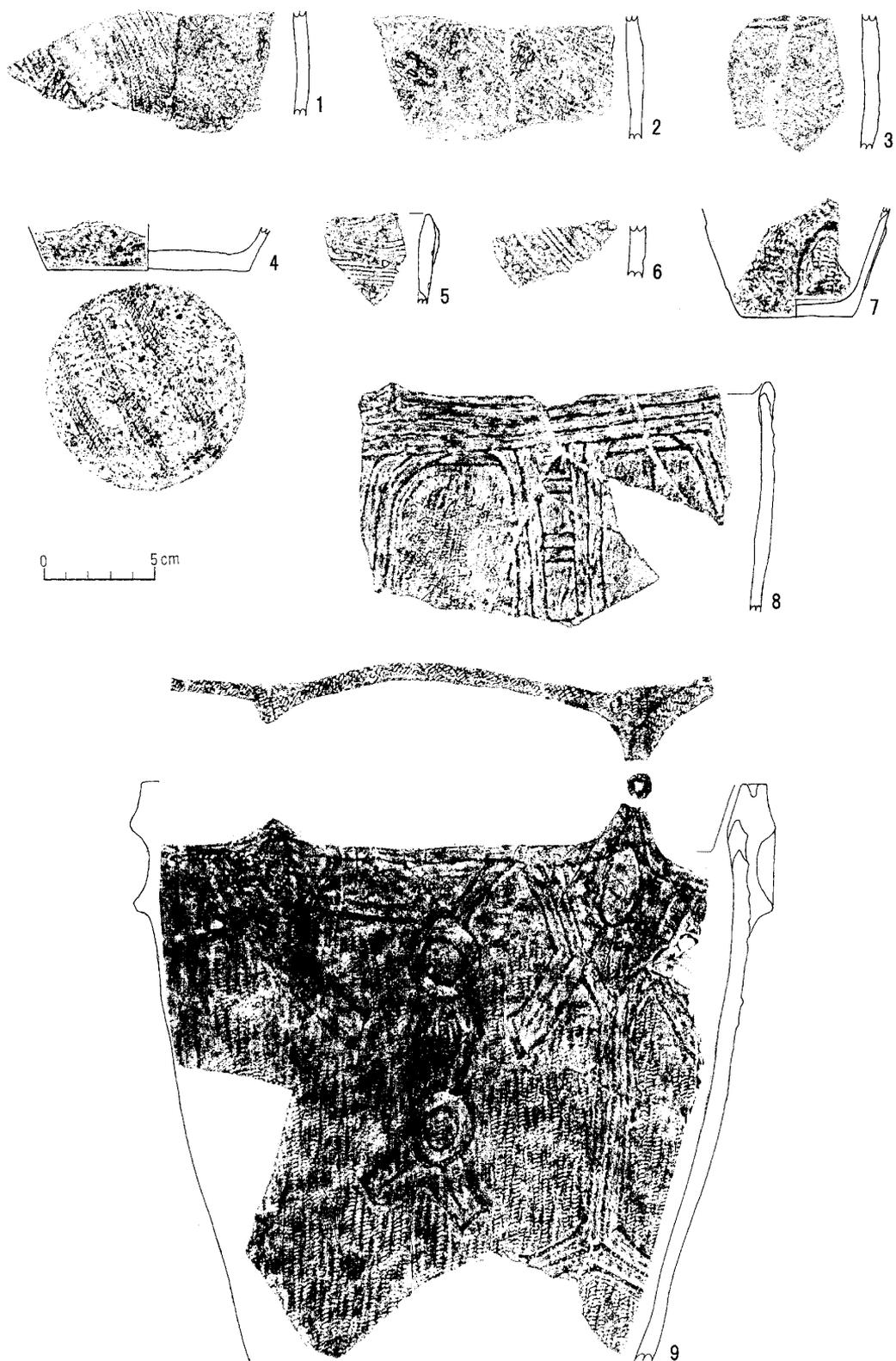
第21图 144号竖穴埋土(1·2)出土土器



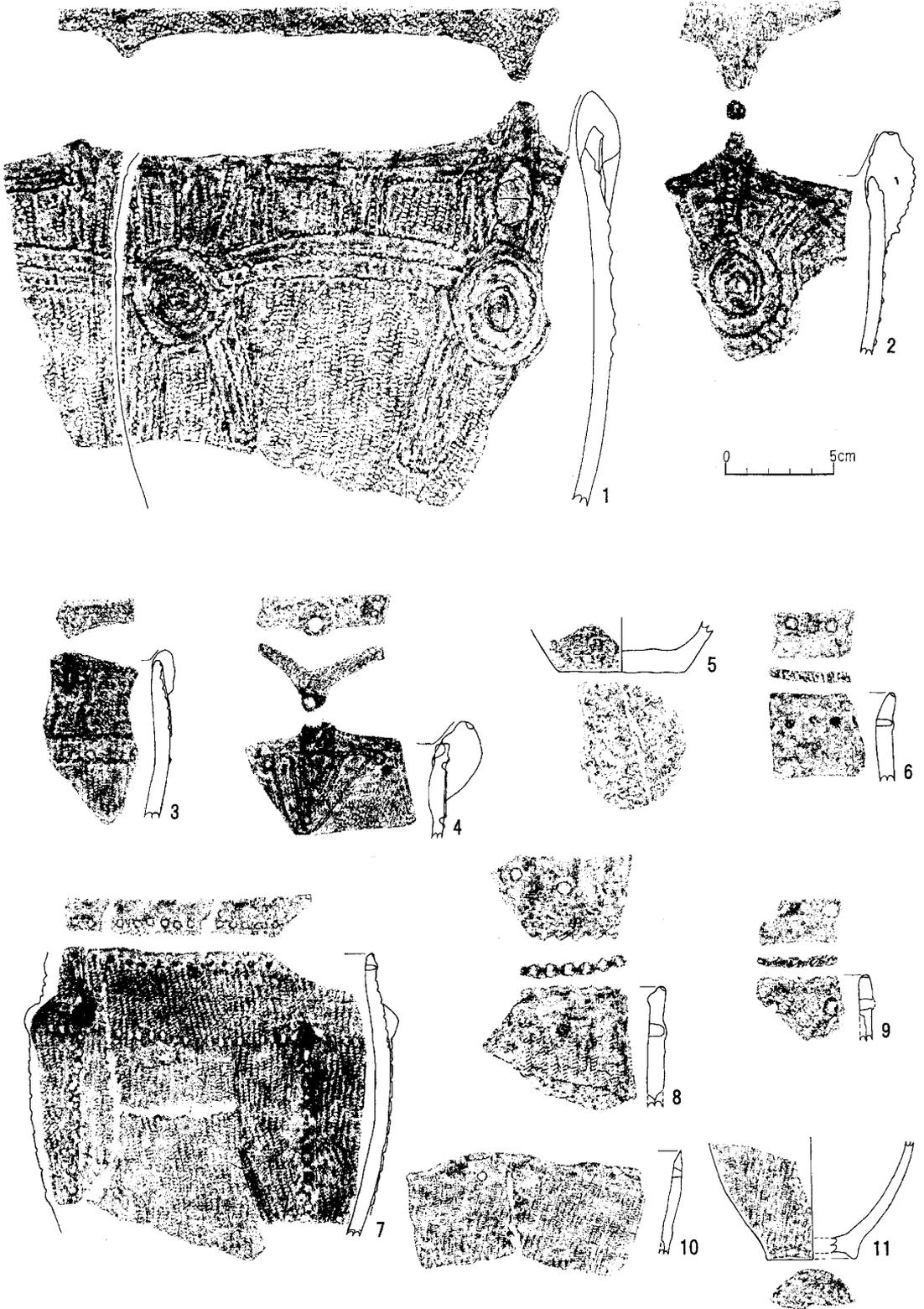
第22图 144号竖穴埋土(1~6)出土土器



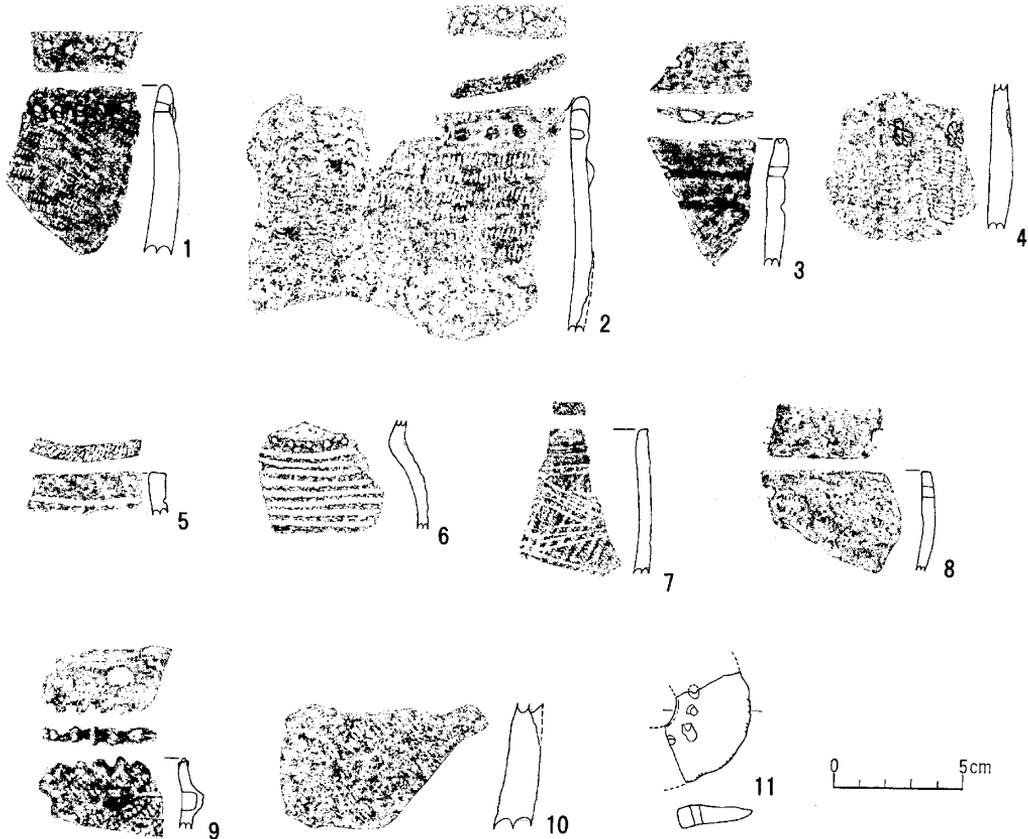
第23图 144号竖穴埋土(1~10)出土土器



第24图 144号竖穴埋土(1~9)出土土器



第25図 144号竪穴埋土(1~11)出土土器



第26図 144号竪穴埋土(1~11)出土土器・土製品

第26図-1は続縄文宇津内Ⅱa式。2も内側からの突瘤文をもつが、器面は絡縄体圧痕文が縦横に施される。宇津内Ⅱa式にはこの様な文様はみられず、古手の型式と考えられる。3は縄線文、4は縄端圧痕文が施される。5・6は横走沈線文、7は半載状施文で横長の菱形文を施す。1~7は続縄文初頭。8は無文。縄文晩期中葉。9は同前葉と思われる。10は縄文中期コロ五類。11は有孔土製品。貫通した円形刺突文が内縁部をめぐる。

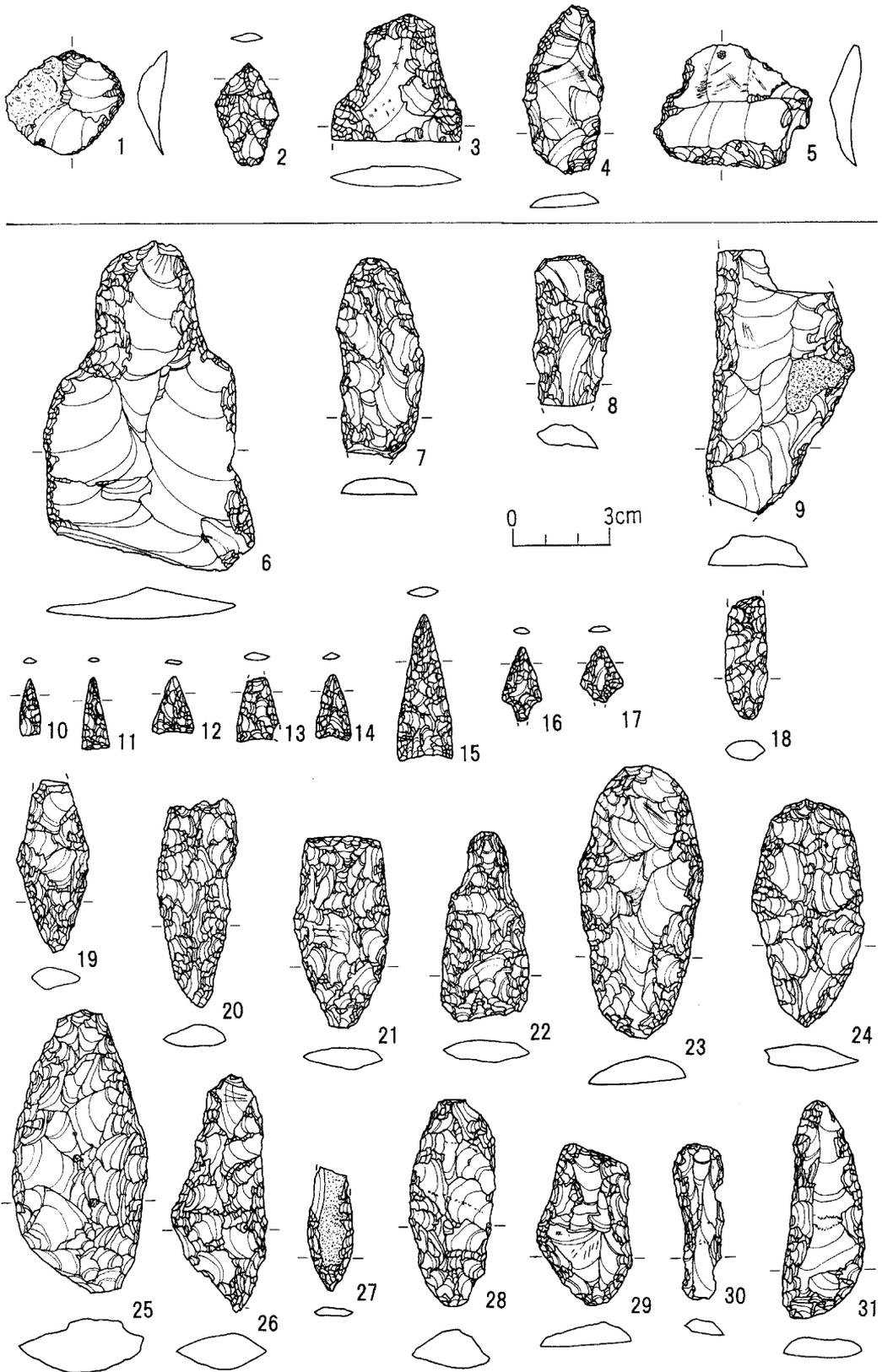
石器は第27図-6~9が床面出土。6は柄部を作出した削器。7~9も削器。10~15は無茎石鏃。16・17は有茎石鏃。18~26は両面加工ナイフ。27・28は片面加工ナイフ。29~31は削器。25はメノウ製であり、他は黒曜石製である。

第28図-1~10は原石面を遺す削器。11~15は搔器。16は青色泥岩製の片刃磨製石斧。17は表裏面に複数の溝をもつ有溝石器。18はたたき石。19・20はくぼみ石。17~20は砂岩製であり、他は黒曜石製である。

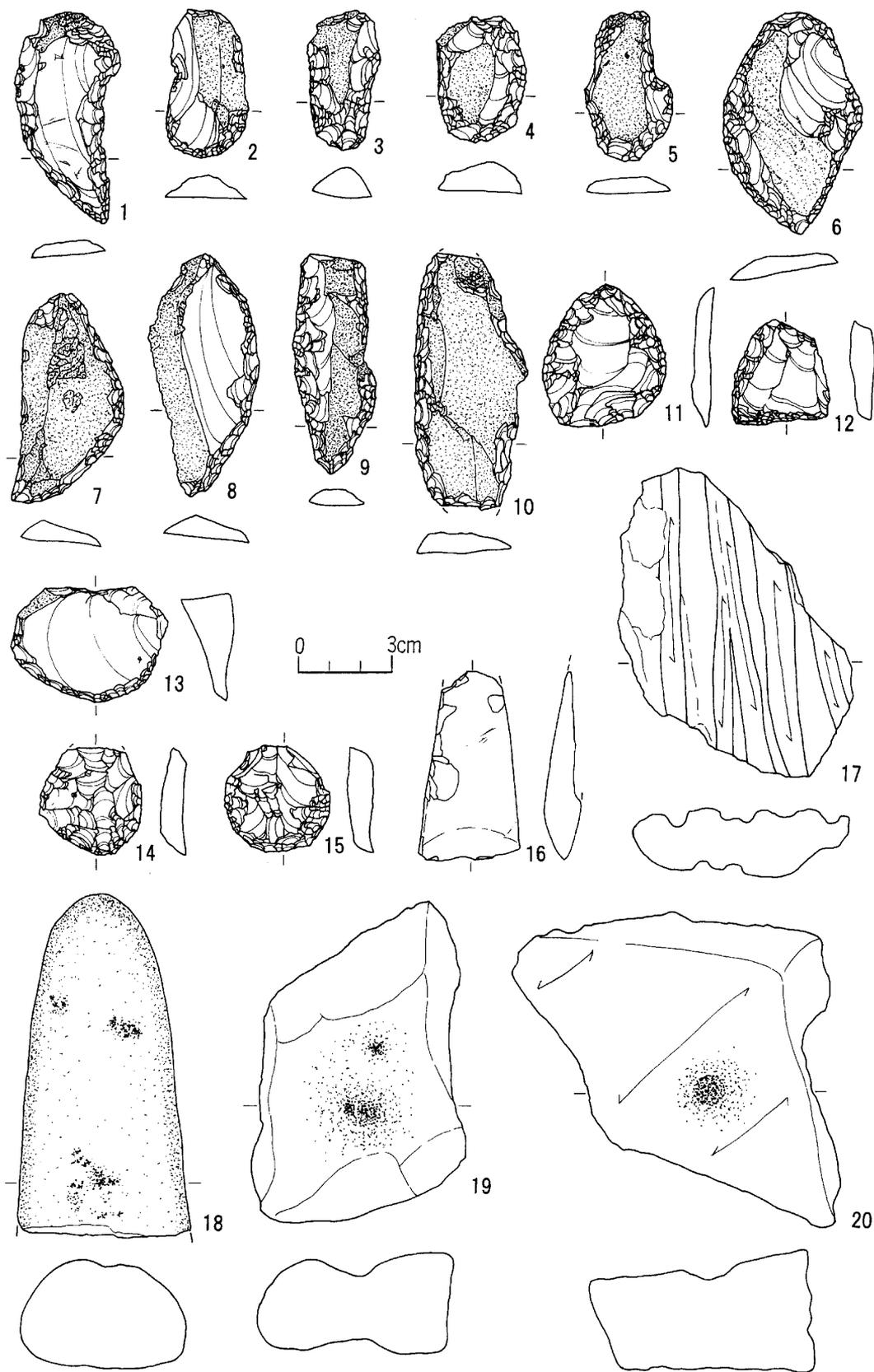
### 小 括

第18図に示すとおり本竪穴の床面からは続縄文後北C<sub>2</sub>・D式、宇津内Ⅱb式が出土している。後北C<sub>2</sub>・D式は埋土内に廃棄された状態で満遍なくみられるものの竪穴の時期は後北C<sub>2</sub>・D式か宇津内Ⅱb式と思われる。

(武田 修)



第27图 143号竖穴床面(1)·埋土(2~5)、144号竖穴床面(6~9)·埋土(10~31)出土石器



第28图 144号竖穴埋土(1~20)出土石器

# 145号 竪 穴

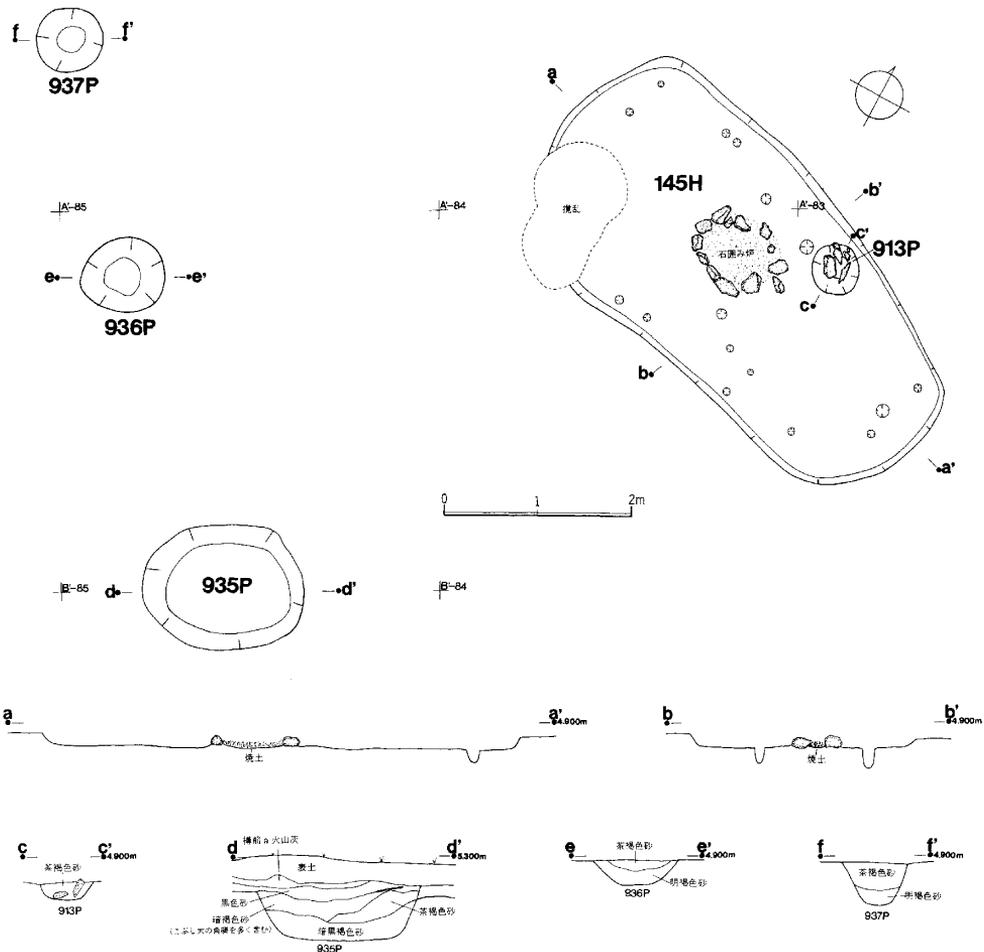
## 遺 構 (第29, 図版4-10図)

本竪穴はA' 83, B' 82・83グリッドに位置する。規模は長軸約5.06m、短軸約2.48mの長方形を呈する。第Ⅱ層茶褐色砂層の上面で掘り込み面は認められず、同層を約10cm下げた段階で確認したため壁の立ち上がりは低く高さは10~15cmである。竪穴の中央部に直径約80~90cmの石囲み炉がある。角礫主体の石囲み炉は、北側が僅かに隙間をみられるものの全周し、内部の赤化も著しい。

支柱穴は石囲み炉に近接した径10~18cm、深さ12~20cmのものが相当するようである。壁柱穴はまばらに配置され、径6~8cm、深さ6~10cmである。

## 遺 物 (第30図-1~3)

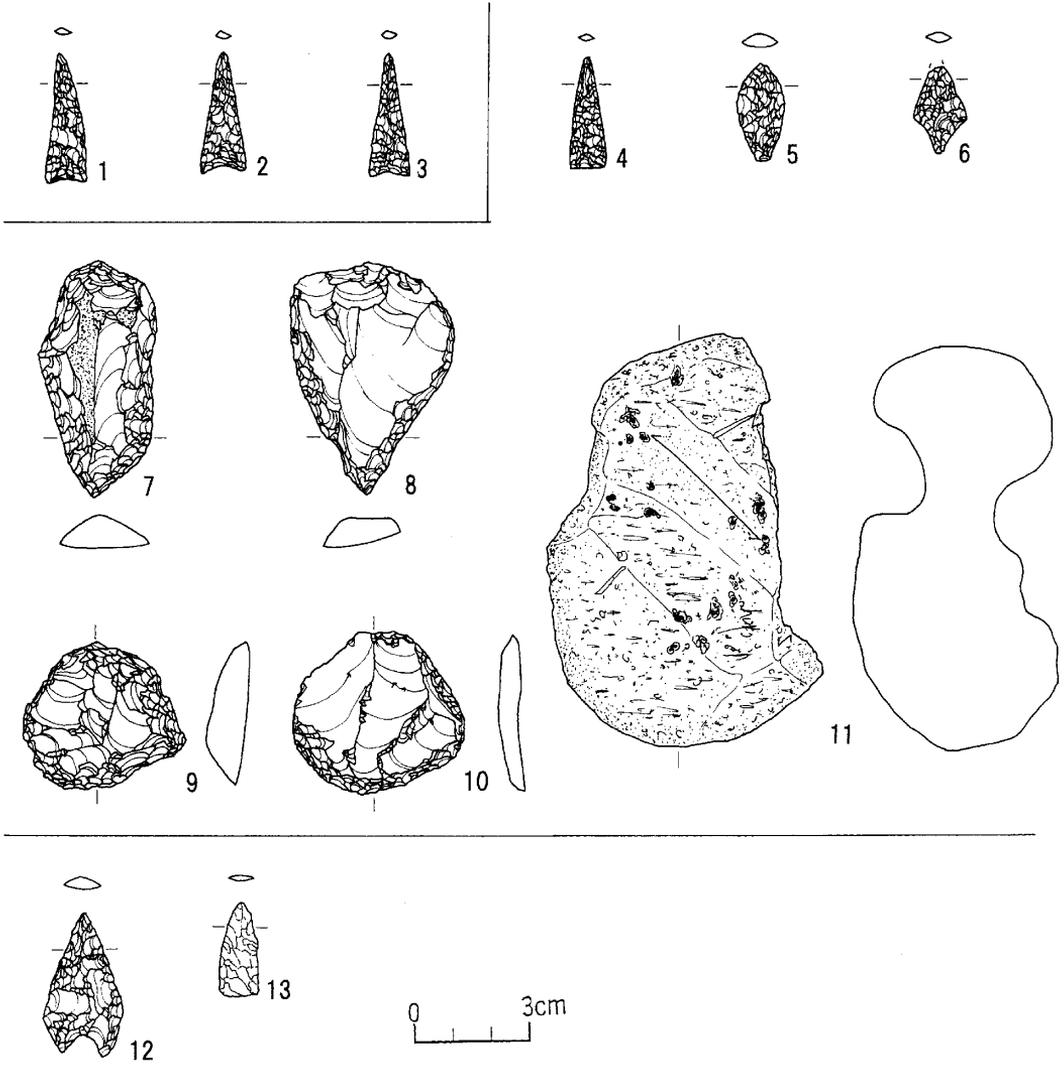
第30図-3点とも埋土から出土した黒曜石製の無基石鏃。



第29図 145号竪穴、ピット913、935、936、937平面図

小 括

竪穴の規模の割に石囲み炉は大型である。遺物は出土していないため詳細な時期は不明であるが統縄文期であろう。 (武田 修)



第30図 145号竪穴埋土(1~3)、146号竪穴埋土(4~11)、147号竪穴埋土(12・13)出土石器

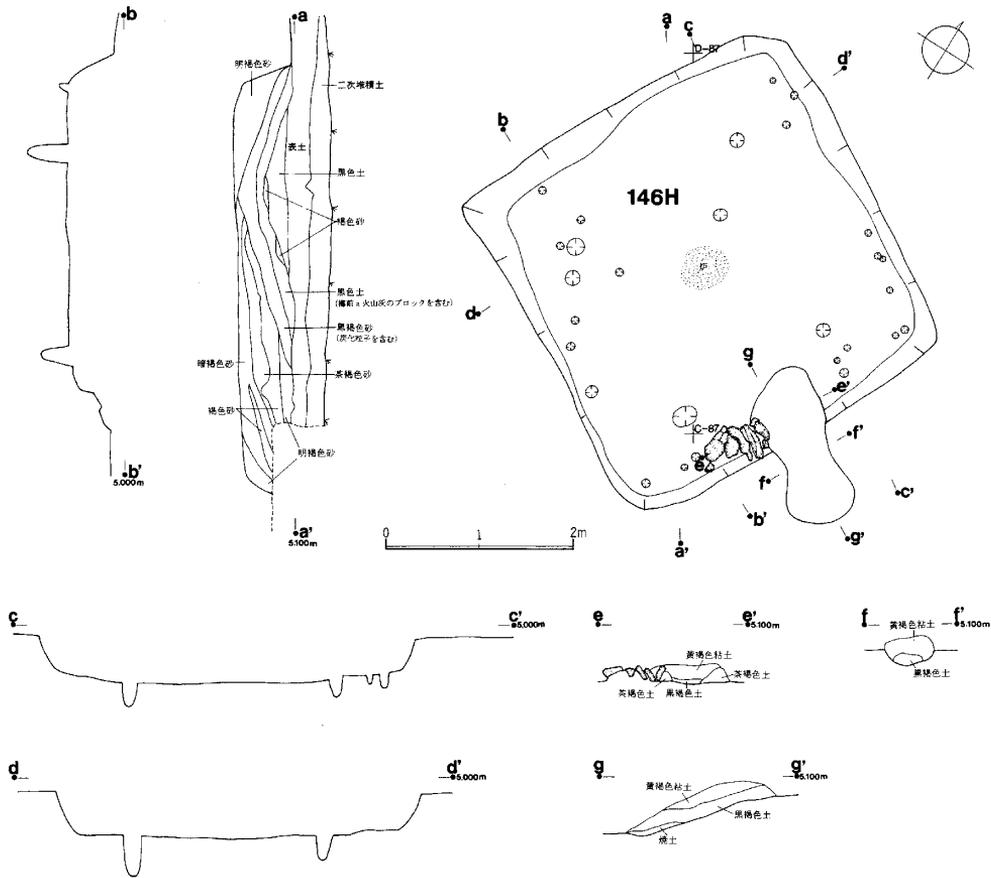
# 146号 竪穴

## 遺 構 (第31図, 図版5-1・2)

本竪穴はC86・87グリッドにまたがって位置する。規模は東西4.00m、南北3.90mの方形を呈する。壁高は確認面から約50cm測る。

カマドは東壁中央部に構築されている。構築材は黄褐色粘土を主体とし、芯材に用いられる長さ約40cm、幅約20cmの角礫はカマドの南側に並べられている。径約50cmの炉跡は竪穴の中央部にある。

主柱穴は径約17~28cm、深さ約24~40cmのものが4本ある。壁柱穴は西壁側を除く各壁側にある。径約8~12cm、深さ約8~20cmである。



第31図 146号竪穴平面図

**遺物** (第32図, 第33図-1~4, 第30図-4~11, 図版5-3)

第32図-1はカマド出土の擦文土器の底部。2は統縄文初頭。3はカマド上部出土の擦文土器。無文の中型土器。4~6も擦文土器で4は高杯、5は口縁部。6は無文。7・8は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。9・10は宇津内Ⅱb式。11は縄線文が3本単位に施される。12は撚糸文を地文として口縁直下に円形刺突文が連続する。11・12は統縄文初頭と思われる。

第33図-1・2の口縁部は無文帯となる。1は縦走縄文を地文とした壺形土器。2は無文帯の下部に刺突文が施される。3は刺突文が短い間隔で連続する。1~3は統縄文初頭、4は縄線文が施された縄文晩期中葉であろう。

第30図-4は無茎石鏃。5は柳葉形石鏃。6は有茎石鏃。7・8は下端部が尖る削器。9・10は搔器。11は幅約2cmの溝をもつ軽石製の有溝石器、5は硬質頁岩製であり他は全て黒曜石製である。

**小括**

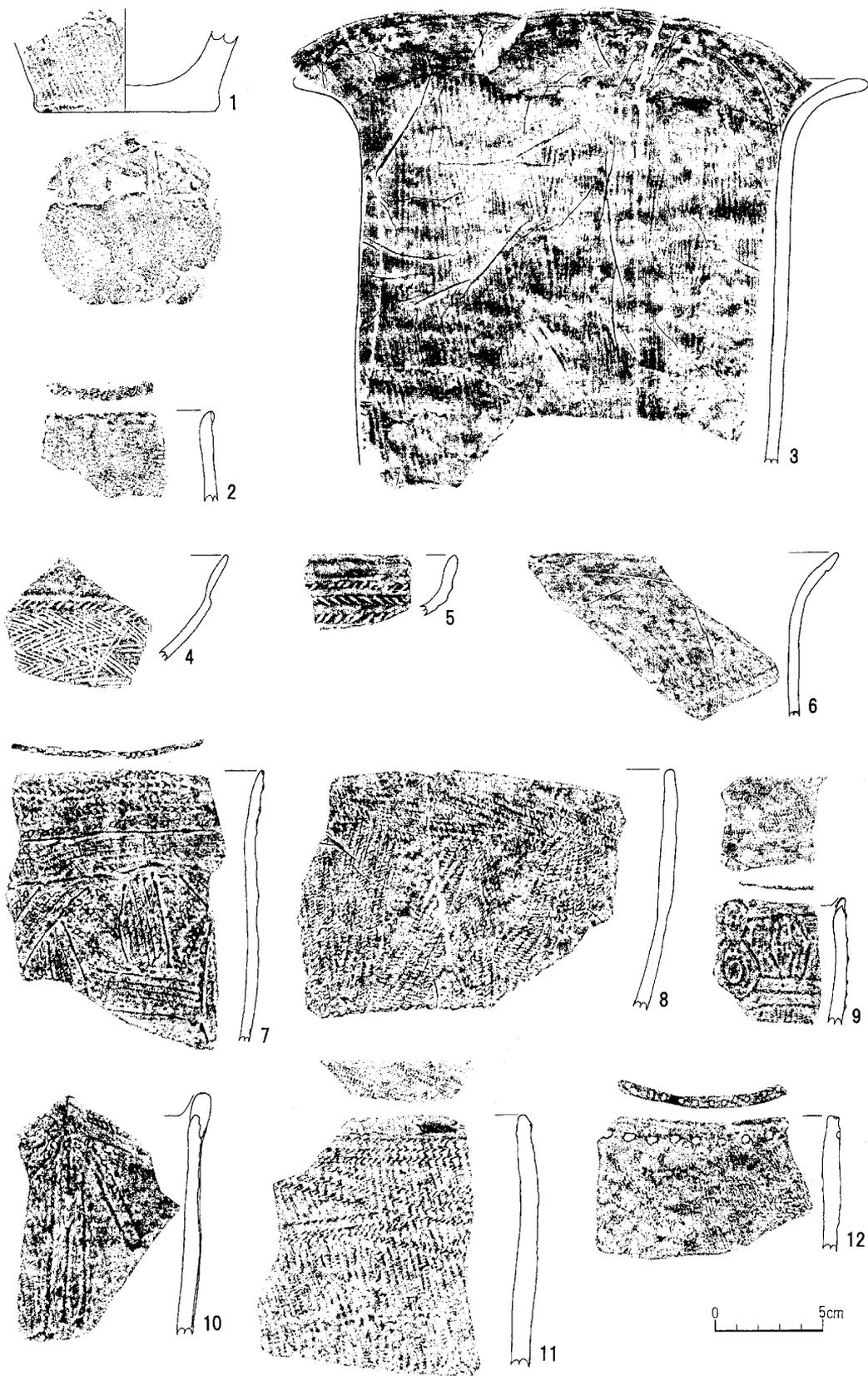
本竪穴は擦文期である。カマド上部から無文土器が出土するものの詳細な時期は不明である。  
(武田 修)

## 屋 外 炉

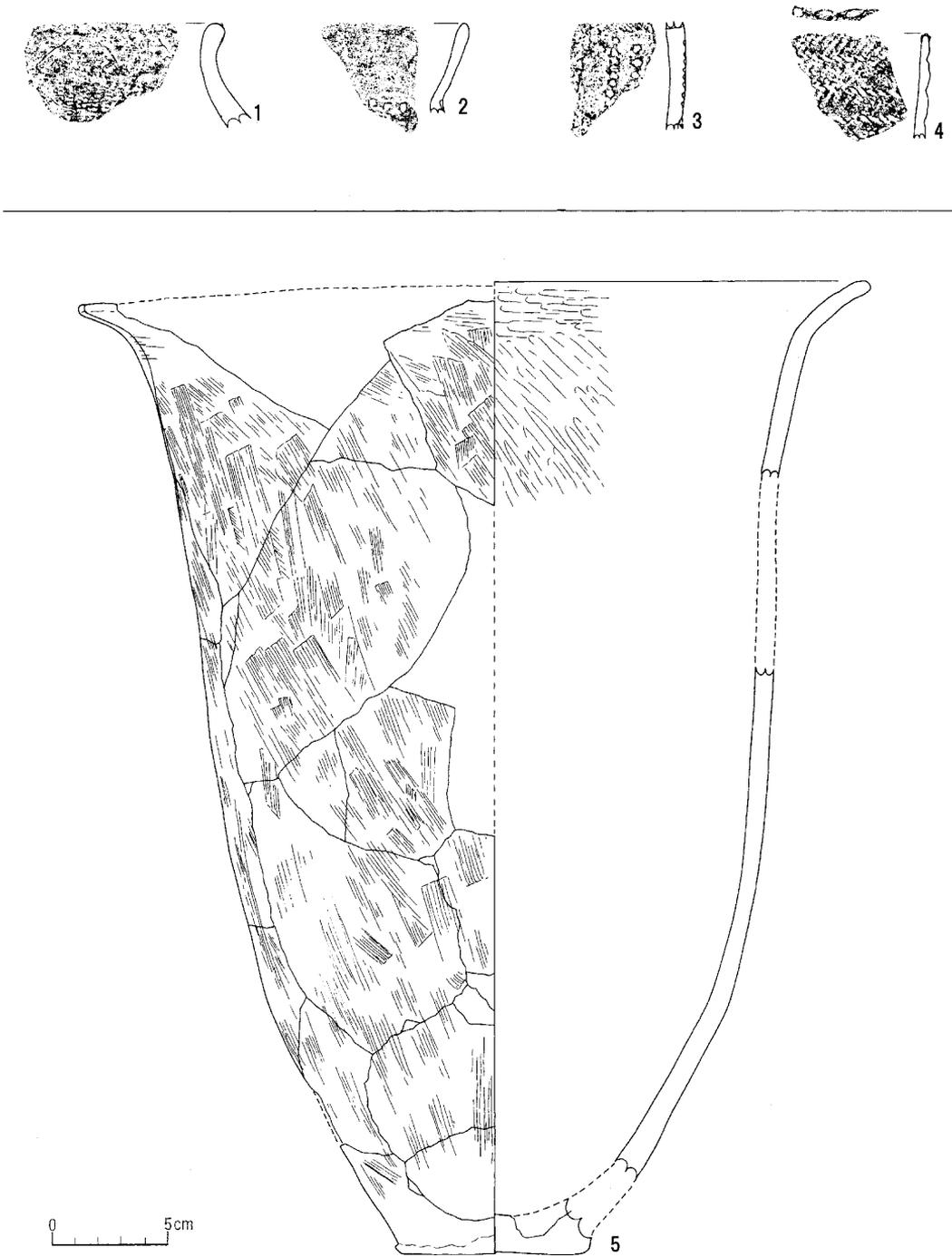
**遺構** (第17図)

屋外炉はC83グリッドに位置する。第Ⅱ層の暗茶褐色砂の上面にある。規模は長軸約0.64m、短軸約0.50mの円形を呈する。10個の角礫を用い構築されている。掘り込みは約10cmと浅く、焼土と炭化層の2層に分層される。

統縄文期と思われるが詳細な時期は不明である。  
(武田 修)



第32図 146号竪穴カマド(1・2)・カマド上部(3)・埋土(4~12)出土土器



第33図 146号竪穴埋土(1~4)、147号竪穴カマド上部(5)出土土器

## 147号 竪 穴

### 遺 構 (第34図)

本竪穴はB'88・89, C'88・89グリッドにまたがって位置する。形態は扇形に近く、長軸約5.20m、短軸約4.10mである。掘り込みは浅く、壁は確認面から約40cmである。

炉跡は検出できず、柱穴も径約6～12cm、深さ約8～12cmのものがまばらに認められる程度である。

### 遺 物 (第33図-5, 第35図, 第36図, 第30図-12・13, 図版5-4)

第33図-5は口径33cm、器高41cmの無文大型鉢形土器。器面は篋により調整されている。

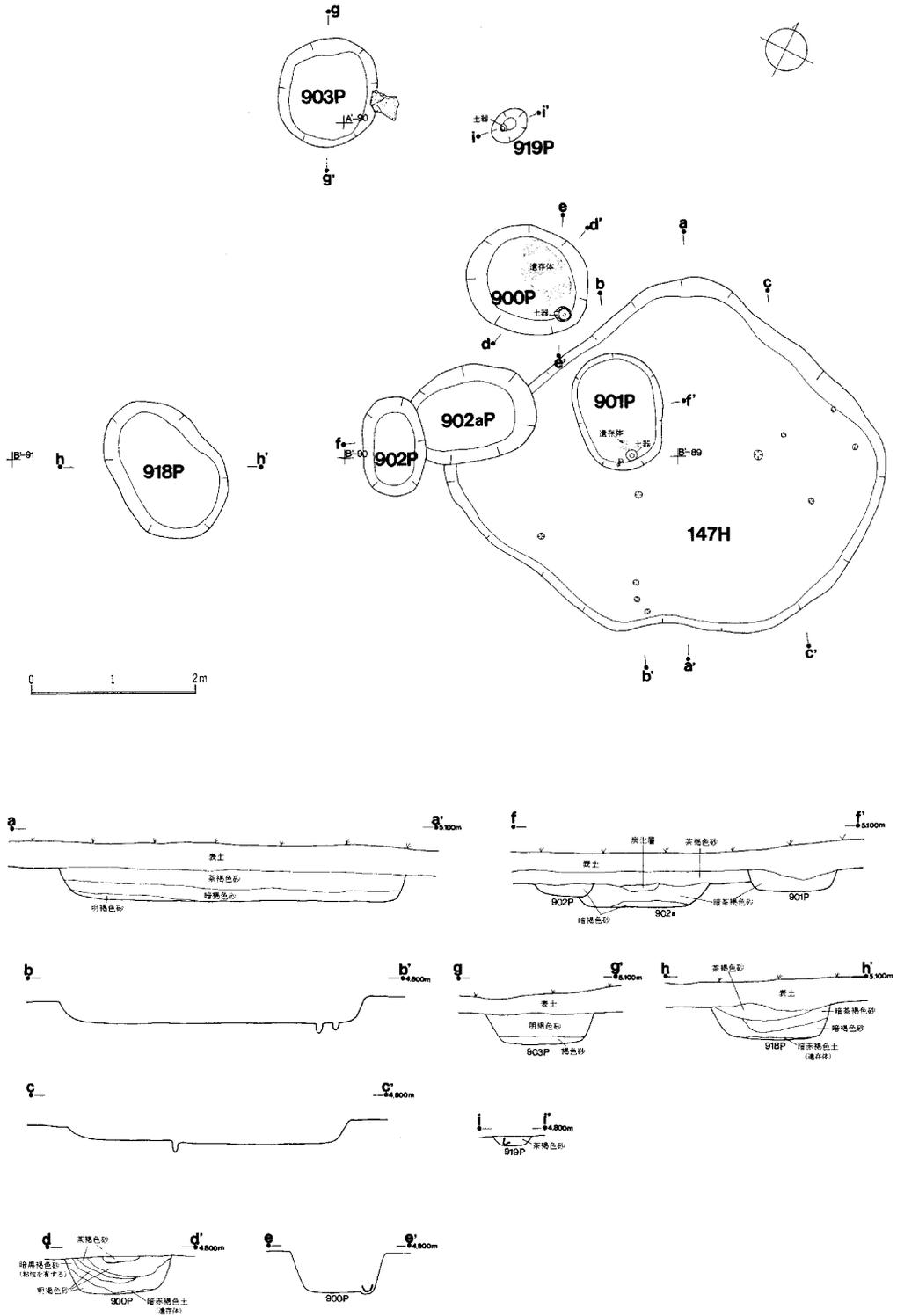
第35図-1は口径31cm、器高39cmの大型鉢形土器。1・2は続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。3は口縁直下に「∩」字状の縄線文がみられる。4は捺糸文を地文に口縁直下に2条の縄線文が施される。3～5は続縄文初頭。6～8は縄文晩期中葉であろう。

第36図-1は縄文晩期弊舞式。2は円形刺突文、3は縄端圧痕文が施される。縄文晩期中葉であろう。

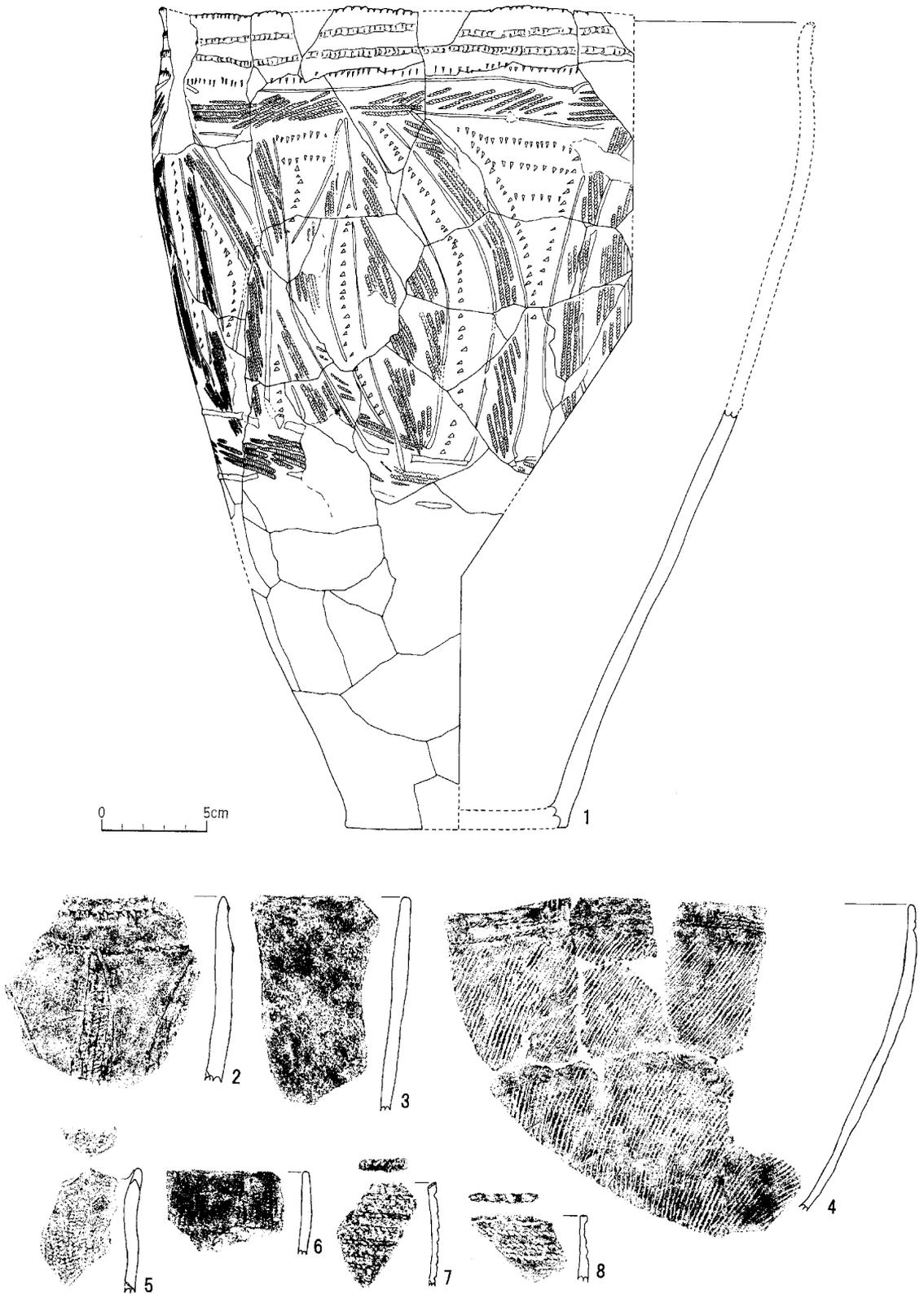
石器は第30図-12は基部が二又となる無茎石鏃。13も無茎石鏃。2点とも黒曜石製。

### 小 括

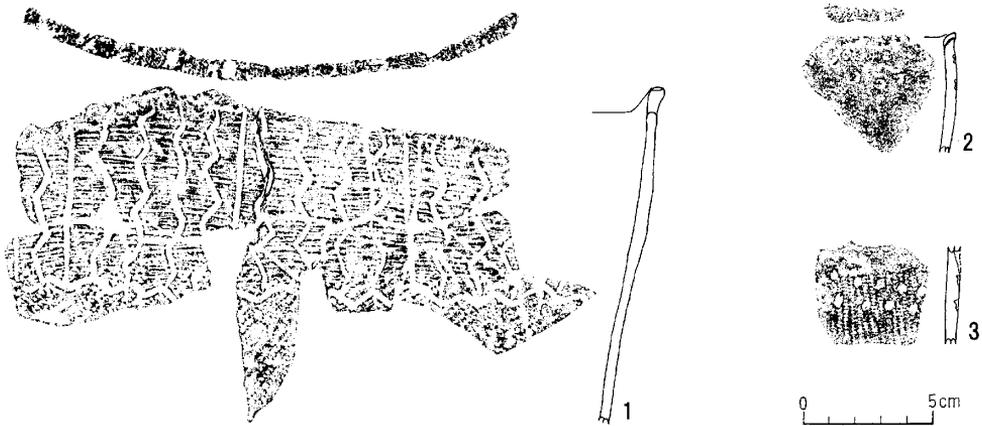
埋土内に続縄文後北C<sub>2</sub>・D式のピットがあるのでこれ以前のものであるが、詳細な時期は不明である。(武田 修)



第34図 147号竪穴、ピット900、901、902、902a、903、918、919平面図



第35図 147号竪穴埋土(1~8)出土土器



第36図 147号竪穴埋土(1~3)出土土器

## 148号 竪 穴

### 遺 構 (第37図, 図版6)

本竪穴はF84・85, G84・85グリッドにまたがって位置する。表土を剥土するとG84・85グリッド側に黒色砂が堆積し、竪穴はこの黒色砂を切り込んで構築されている。通常、擦文期の竪穴埋土は表土直下に黒色土や黒褐色砂が堆積し、樽前a火山灰がその下層にみられる。本竪穴は表土直下に暗茶褐色砂が厚く堆積し、次に樽前a火山灰を粒状に混入する黒褐色砂層がみられる。暗茶褐色砂は140号竪穴にみられた後世の住民による窪地を埋めるための二次堆積土ではない。隣接する擦文竪穴の排土とも考えられるが、層内には板状の炭化材も出土しておりアイヌ期の可能性もある。

規模は東西4.80m、南北5.00mの方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約40cmである。床面は焼失住居であるため床面を覆う茶褐色砂層やF84グリッド側では壁上部からも炭化材が認められる。炭化材で最も大きいのは長さ1.50m、最大幅15cmであり、西壁側に並ぶ主柱の梁材と思われる。北東壁隅には壁上から内部にかけて径8~10cmの垂木材がみられる。これら以外は径2~8cmの小枝状の炭化材である。特に西壁側から顕著に出土している。

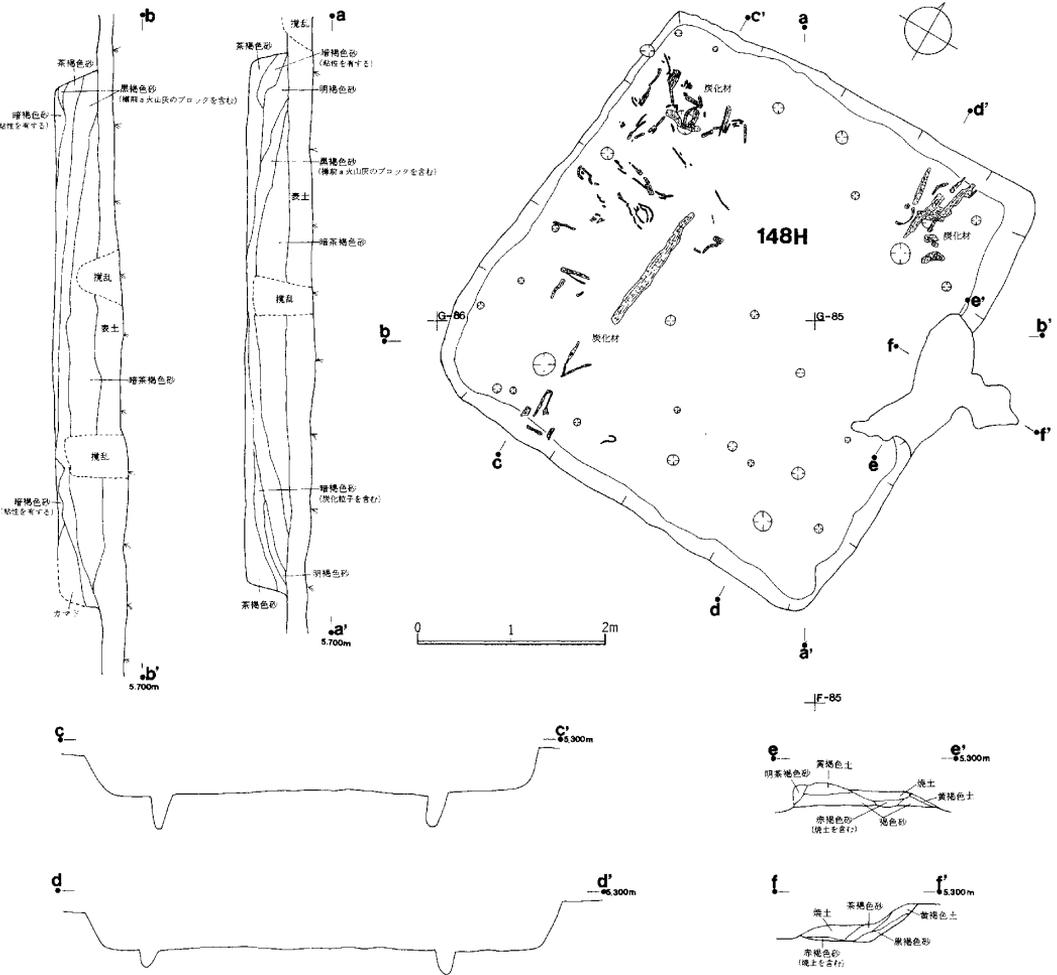
カマドは黄褐色粘土を用い東壁中央部に構築されている。遺存は悪い。炉跡は検出できなかった。床面はやや起伏がある。

主柱穴は4本ある。径20~22cm、深さ30~40cm。主柱穴内側の床面が外側よりやや盛り上がりみせる。壁柱穴は径6~13cm、深さ7~35cmのものが等間隔に配置されている。

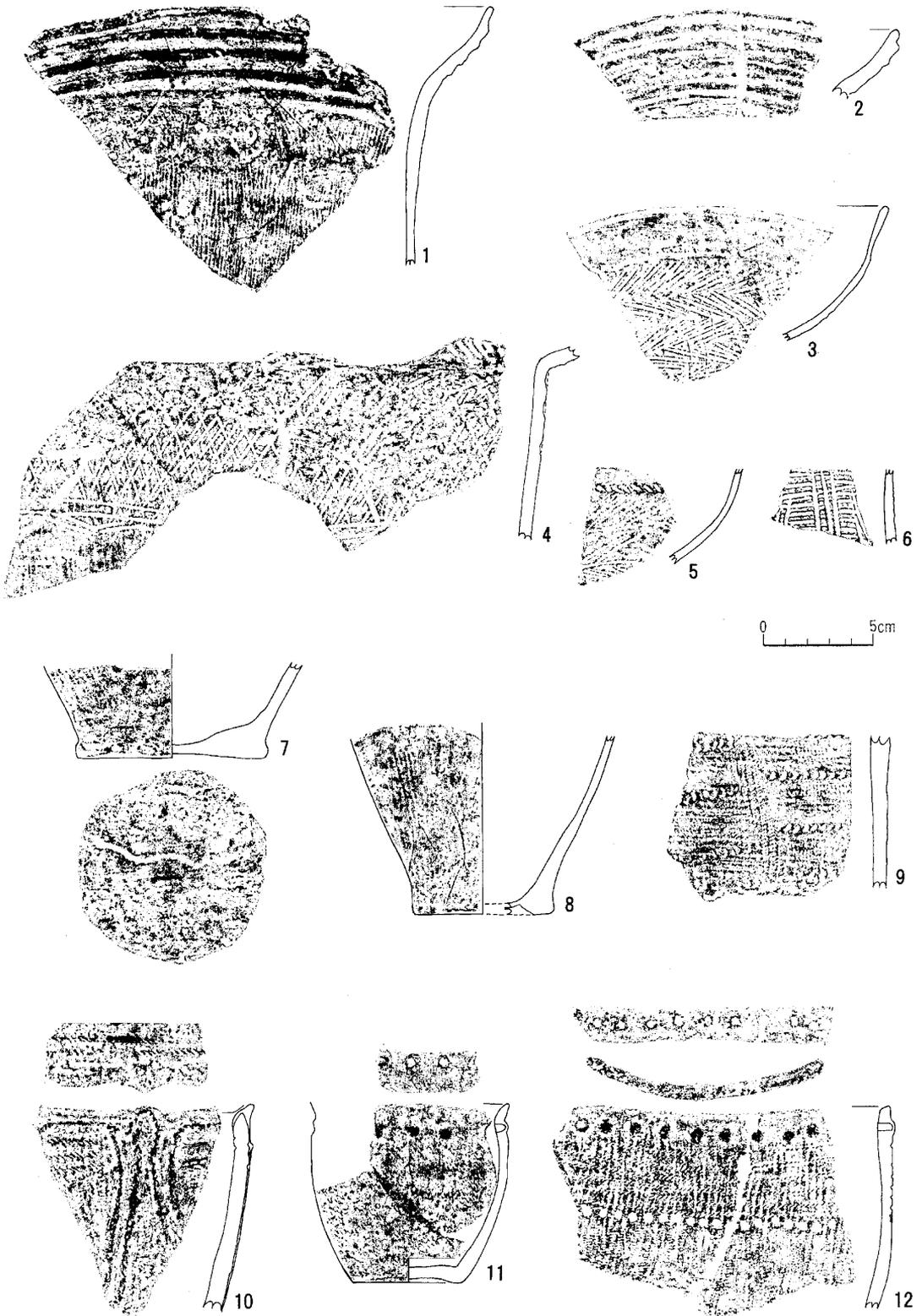
遺物 (第38図, 第39図, 第40図)

遺物は全て埋土出土である。第38図-1は刷毛により調整された無文大型鉢形土器。2も無文と思われる。3・5は高杯。4は格子目文、6は横位・縦位の沈線文が施された鉢形土器。7・8は擦文土器の底部。9は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。10は宇津内Ⅱb式。11・12は同Ⅱa式。

第39図-1は宇津内Ⅱa式。2は下田ノ沢Ⅱ式。3は内側からの突瘤文があり、貫通箇所もある。半載状施文具による弧線文が施される。4は横走沈線文。5~7は縄端匠痕文、8・9は縄線文をもち、8は有段化する。10・11は横走沈線文が施され、10は刺突文が連続する。3~11は統縄文初頭であろう。



第37図 148号竪穴平面図



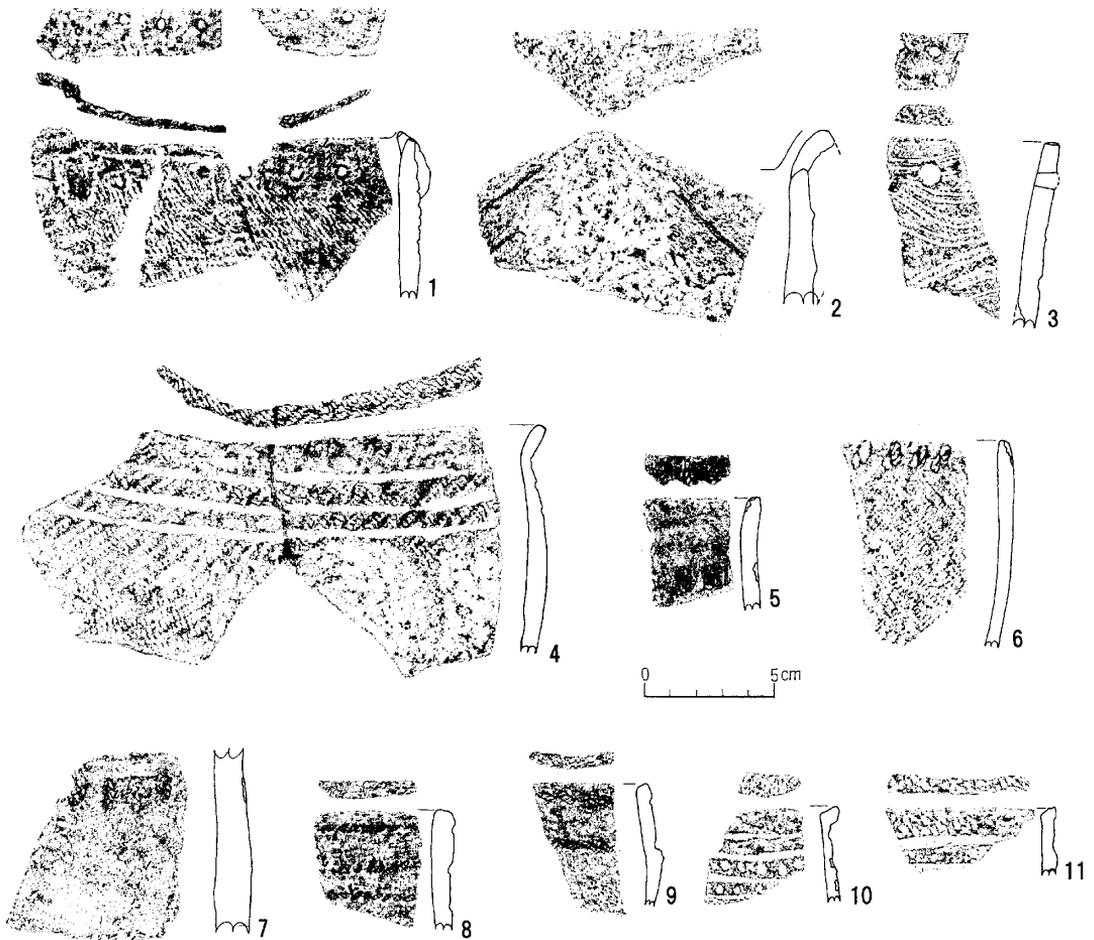
第38图 148号竖穴埋土(1~12)出土土器

常呂川河口遺跡

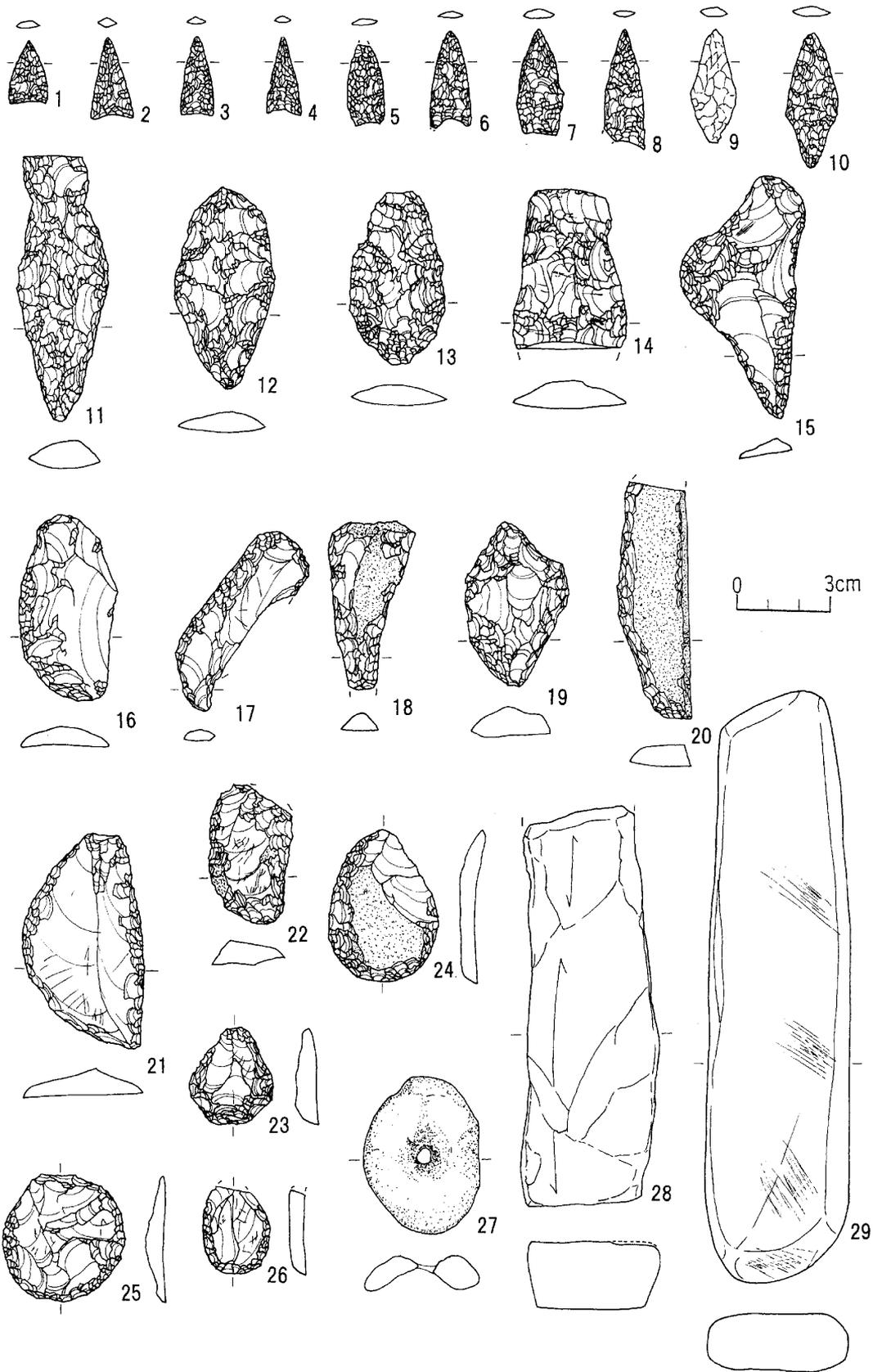
石器は第40図-1~8は無茎石鏃。9・10は有茎石鏃。11~14は両面加工ナイフ。15~20は削器。21~26は搔器。27は自然礫を利用した有孔石製品。28は砥石。29は擦石。27・29は泥岩製。28は砂岩製。他は全て黒曜石製。

小 括

本堅穴は擦文期の焼失住居である。床面出土の遺物がないため詳細は不明であるが、宇田川編年後期と思われる。(武田 修)



第39図 148号堅穴埋土(1~11)出土土器



第40图 148号竖穴埋土(1~29)出土石器·石製品

## 148a 号 竪 穴

### 遺 構 (第41図, 図版7-1)

本竪穴はE85・86, F85・86・87グリッドにまたがって位置する。表土を剥土するとF86グリッド杭の周辺で黄褐色を呈した摩周b火山灰の堆積が認められたため、セクションベルトに沿ってサブトレンチを設定し深掘りしたところ続縄文後北C<sub>2</sub>・D式土器を含む暗茶褐色砂層がみられた。この層がこの時期の生活面と考えられるが床面に炉跡等の痕跡は認められず、さらに下層からも同型式の土器が出土しており、大部分は本竪穴の炉跡の直上や床面からやや浮いて出土している。

規模は長軸約9.36m、短軸約6.20mの長方形を呈する。丸みをもって立ち上がる壁は深く確認面から約80cmを測る。

炉跡は長軸面の中央部に長さ約3.60m、幅約0.80mと長さ約2.30m、幅約0.80cmの2つの炉跡がある。炉跡のセクション図に示すとおり、2つの炉は微細な骨粉を含む黄褐色土であり、両方の床面には径約40cmの焼土がみられる。黄褐色土とした炉跡は焼土の上部に細長く被さる状態であった。竪穴の床面からは第42図に示す後北C<sub>2</sub>・D式、後北C<sub>1</sub>式が出土しておりいずれかの時期と判断される。焼土としたのは後北C<sub>1</sub>式の炉跡、黄褐色土とした炉跡上部からは第43図-5とやや上部からは第44図-2に示す後北C<sub>2</sub>・D式が出土しており、この時期と考えられるが明確にすることはできなかった。いずれにしても後北C<sub>2</sub>・D式の生活面は竪穴廃絶直後に利用されたものと考えられる。

主柱穴と思われる径約18~30cm、深さ約19~36cmのものは壁側に位置し、壁柱穴と思われる径約10~15cm、深さ約7~20cmのものはその周囲に認められるが、規則性はない。炉跡の近くに黒曜石を主体としたフレーク・チップ集積が3箇所みられる。

### 遺 物 (第42図, 第43図, 第44図, 第45図, 第46図, 第47図, 第48図, 第49図, 第50図, 第51図, 第52図, 第53図, 図版7-2~9)

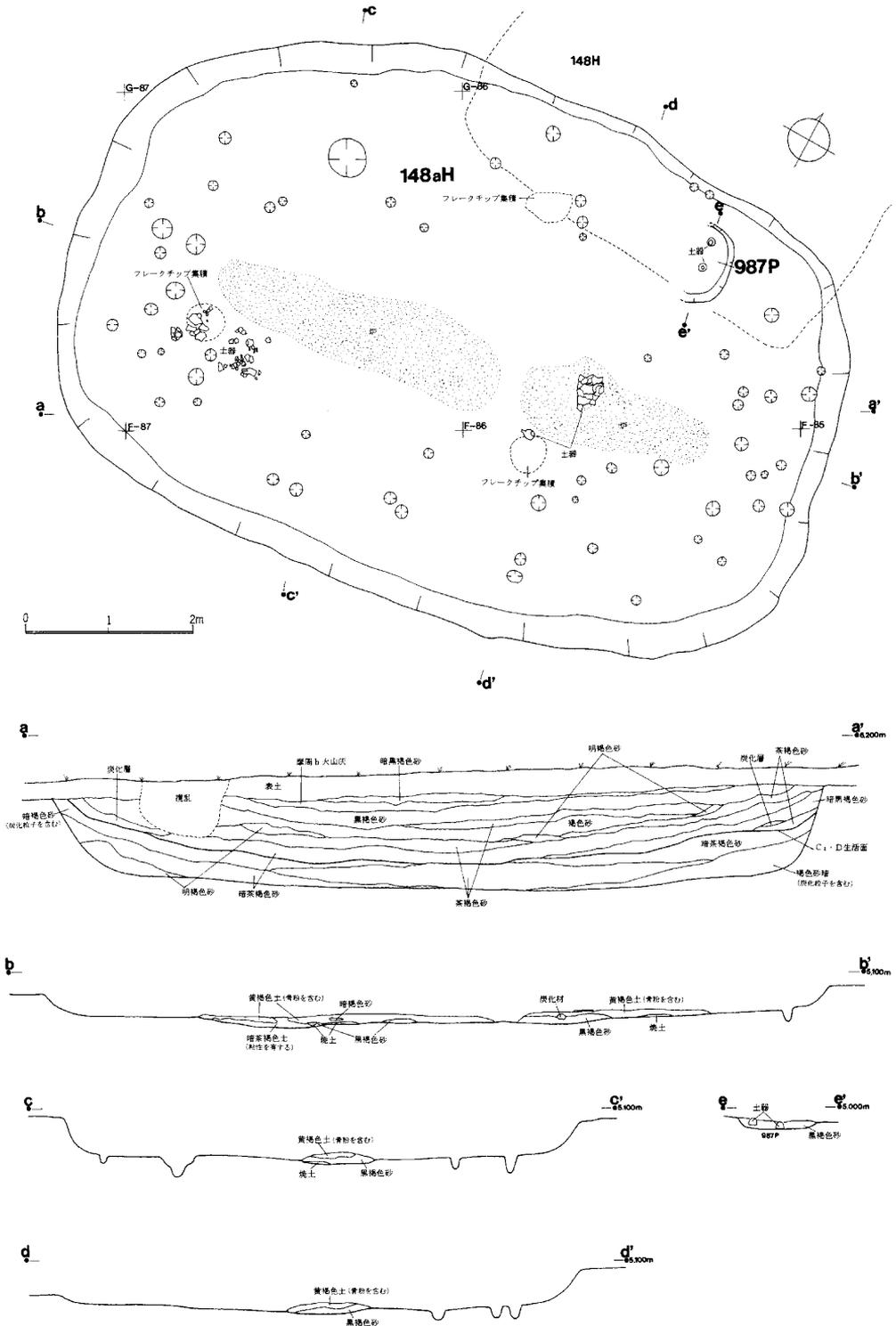
第42図は床面出土。1は続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。3は後北C<sub>1</sub>式。2・4~6は宇津内Ⅱb式。7~9も宇津内系であろう。10は底部がややまるみをもつ。続縄文初頭であろう。

11は縄文中期トコロ五類。

第43図-1~4は炉内出土の後北C<sub>1</sub>式。5は炉上部出土、6は埋土出土の後北C<sub>2</sub>・D式。

第44図は埋土出土の後北C<sub>2</sub>・D式。2は口径26cm、器高推定38cmの大型土器。小波頂部を起点に微隆起帯を菱形に施す。3は口径16cm、器高21cmを測る。上部観にみられるとおりに側面が張り出しており注口土器と思われる。直線、弧線の微隆起帯が施される。

第45図は埋土出土の後北C<sub>2</sub>・D式。1は口径30cmの大型土器。「M」字状と弧線状に微隆起帯を施す。2は口縁部の大半が欠失するものの一端が内側に入り込むため注口土器と思われる。口径は推定18cm、器高17cm。3は口径約25cm。



第41図 148a号竪穴、ピット987平面図

第46図は埋土出土の後北 C<sub>2</sub>・D 式。4 は口縁部の擬縄隆帯下部は無文となる。5 は口径約 12cm、器高 7.5cm の注口土器。帯縄文と垂下した微隆起帯が施される。6 は口径 15cm、器高 9.5cm の注口土器。

第47図は埋土出土。1 は口径 10cm、器高 7.5cm の注口土器。帯縄文が施される。2～6 は後北 C<sub>1</sub> 式。3 は口径 28cm、器高約 35cm の大型土器。微隆起帯を「V」字状、菱形、弧線状に配置し、胴部を帯縄文、胴下部を縦走縄文が施される。

第48図は埋土出土。1 は口径 20cm。2 個 1 対の小突起を 4 箇所にもち、直線と波状の微隆起帯を交互に施した続縄文後北 C<sub>1</sub> 式。2 は口径 22.5cm の宇津内 II b 式。3～6 も宇津内 II b 式。

第49図は埋土出土。1・2 は宇津内 II b 式。3～6 は同 II a 式。5 は縄線文の下部に円形文が刺突される。7・8 は下田ノ沢 II 式。9～10 は続縄文初頭フシココタン下層式相当であろう。

第50図は埋土出土。1 は口縁部がやや外反し、2 条の縄線文が施される。2 は緩い波状口縁の下部に円形貼付文、縄端圧痕文を施す。1・2 は興津式相当であろう。3 は半載状施文具による沈線文を菱形に描く。フシココタン下層式相当であろう。4 は縦走縄文が施される。5～7 は続縄文の底部であり、6 は幅約 1cm の隆帯を円形に貼付け、木葉痕を沈線文で描いている。8～10 はミニチュア土器。10 は縮約した口縁部に「ハ」字状の沈線文が施される。11 は口縁下部に円形刺突文をもつ。12 は横走する隆帯をもち、無文部に 2 条の縄線文が施される。13 は緩く外反した口縁部に横・縦位の縄線文、14～19 は横走沈線文、20 は縄端圧痕文が施される。21 は縄線文が多用される。縄文晩期後葉の緑ヶ岡式であろう。22 は細沈線文間に刺突文が加わる。文様、胎土の状況からみてオホーツク文化沈線文系の土器である。

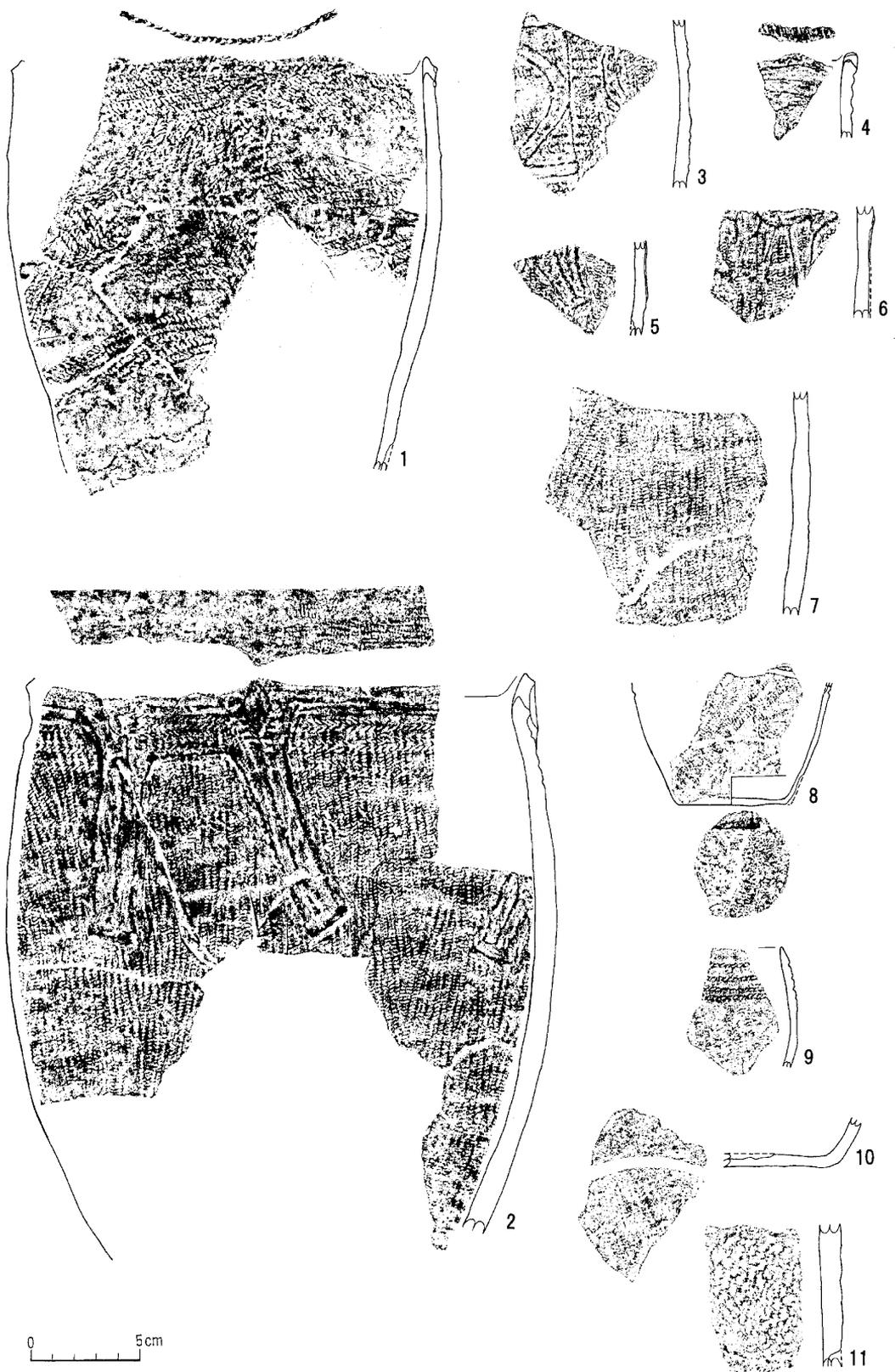
石器は第51図-1～7 が床面出土。1 は両面加工ナイフ。2 は片面加工ナイフ。裏面の柄部が調整される。3～5 は削器。6 は搔器。7 は自然礫の端部を片面だけ粗く打割して、刃部とした石斧。8～44 は埋土出土。8～26 は無茎石鏃。27・28 は有茎石鏃。29・30 は石槍。31～39 は両面加工ナイフ。40 は片面加工ナイフ。41～44 は削器。1・29 は頁岩製、7 は泥岩製、41 は玄武岩製であり他は黒曜石製。

第52図は埋土出土。1・2 は両面加工ナイフ。3 はつまみ付きナイフ。4・5 は片面加工ナイフ。6～17 は削器。18～22 は搔器。1 は玄武岩製であり、他は黒曜石製である。

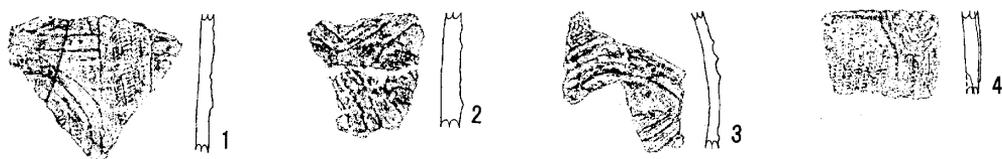
第53図は埋土出土。1～6 は急斜な刃部をもつ搔器で、4 は分銅状である。7 は大型の削器。8 は片面のみ加工を加え刃部とし、側面は表裏面とも調整された石斧。9 は表裏面とも調整した石斧。10 は両刃磨製石斧。11 は擦石。12 はくぼみ石。13 は石皿。7 は玄武岩製、8・9・11 は泥岩製、10 は緑色泥岩製、12・13 は砂岩製であり、他は黒曜石製である。

## 小 括

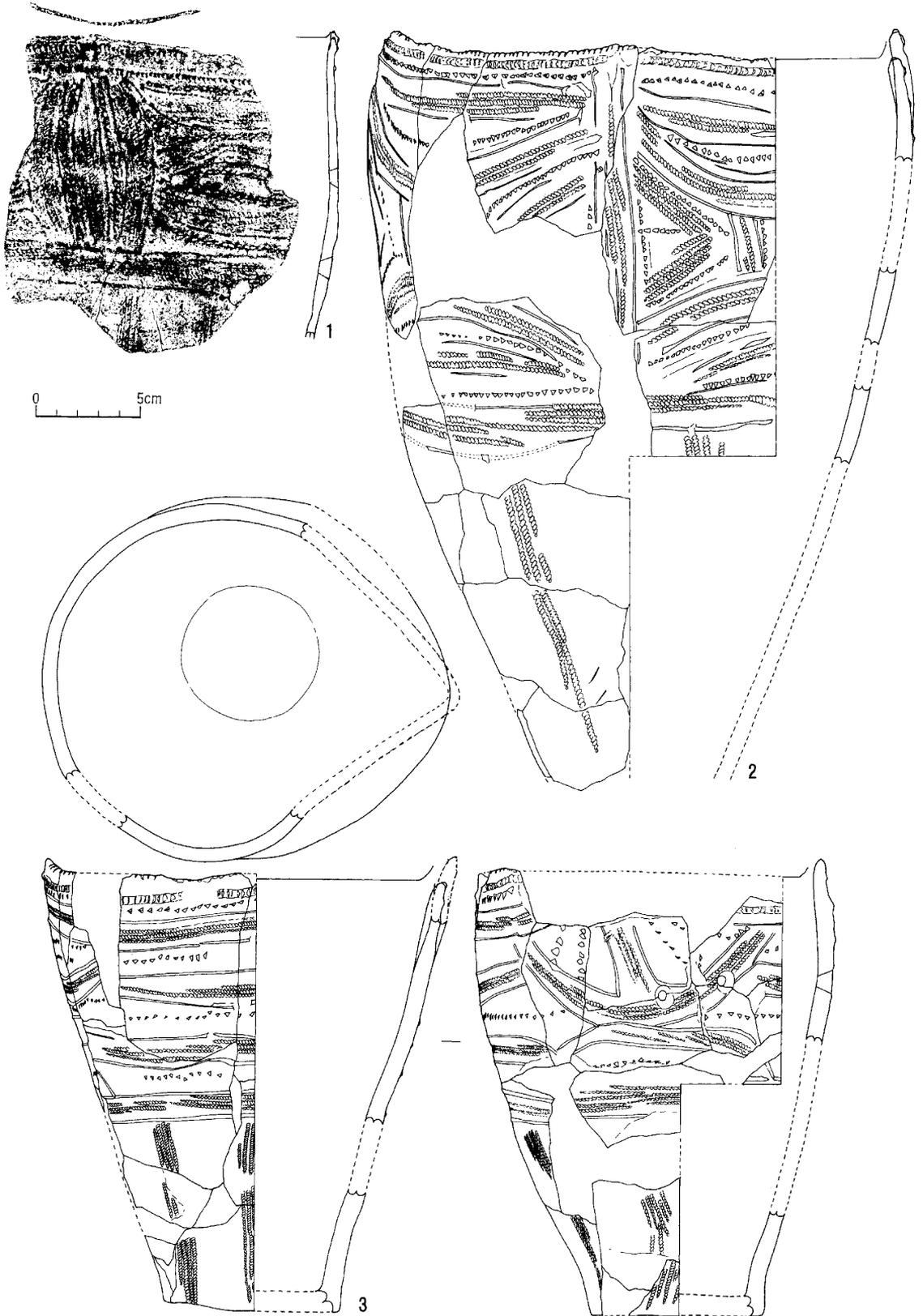
床面出土土器から本堅穴は続縄文後北 C<sub>2</sub>・D 式か C<sub>1</sub> 式と思われる。(武田 修)



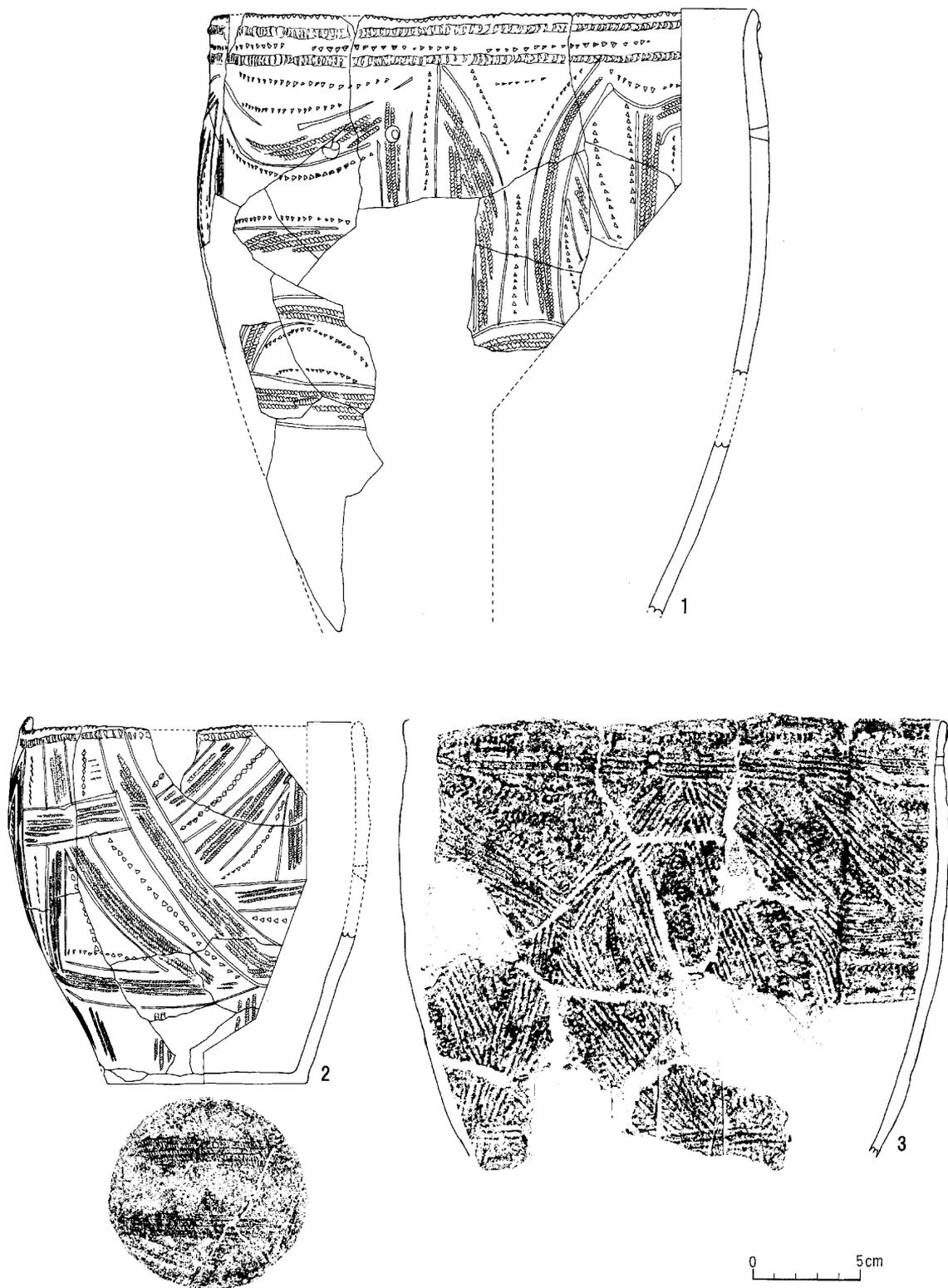
第42图 148a号竖穴床面(1~11)出土土器



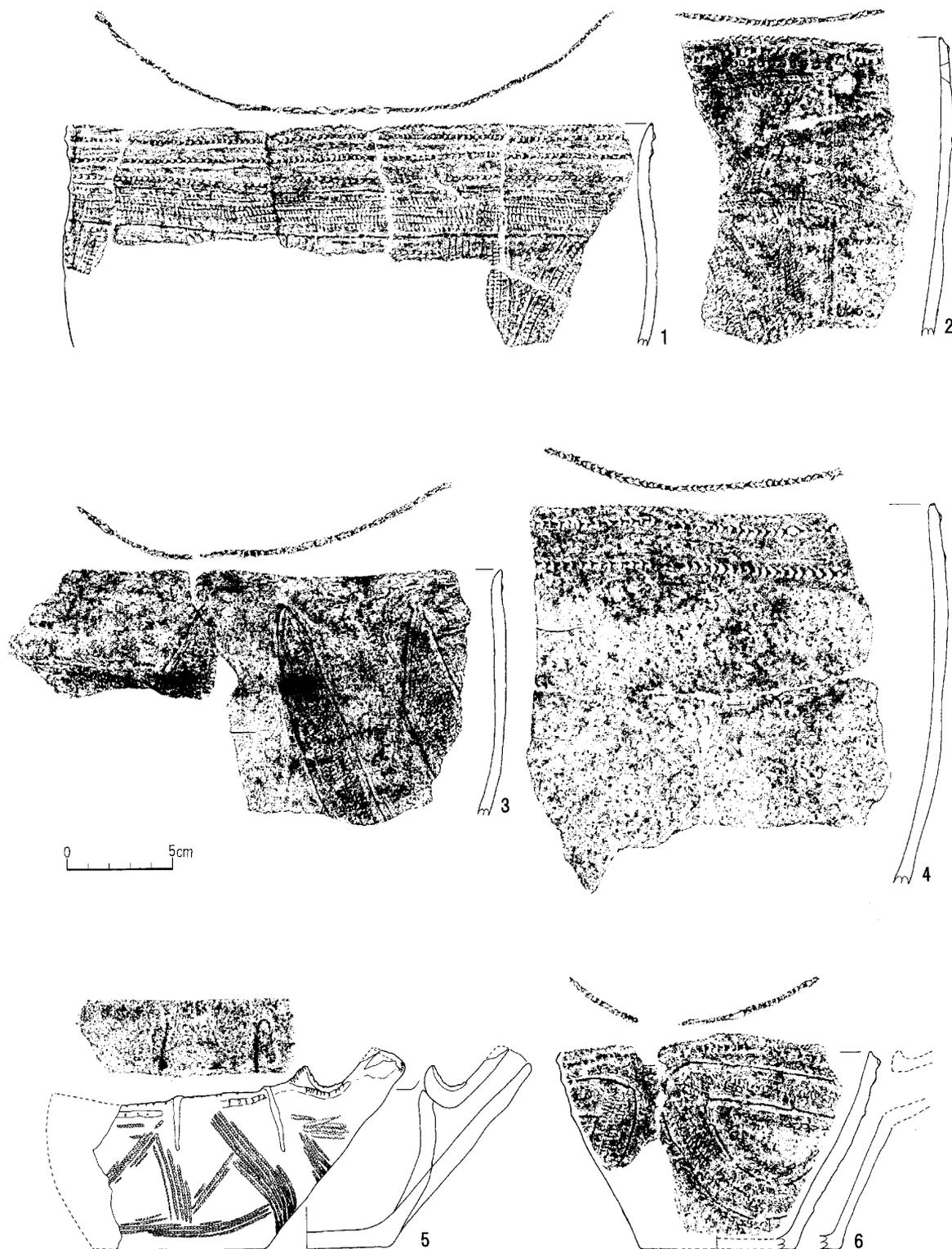
第43图 148a号竖穴炉(1~4)·炉上部(5)·埋土(6)出土土器



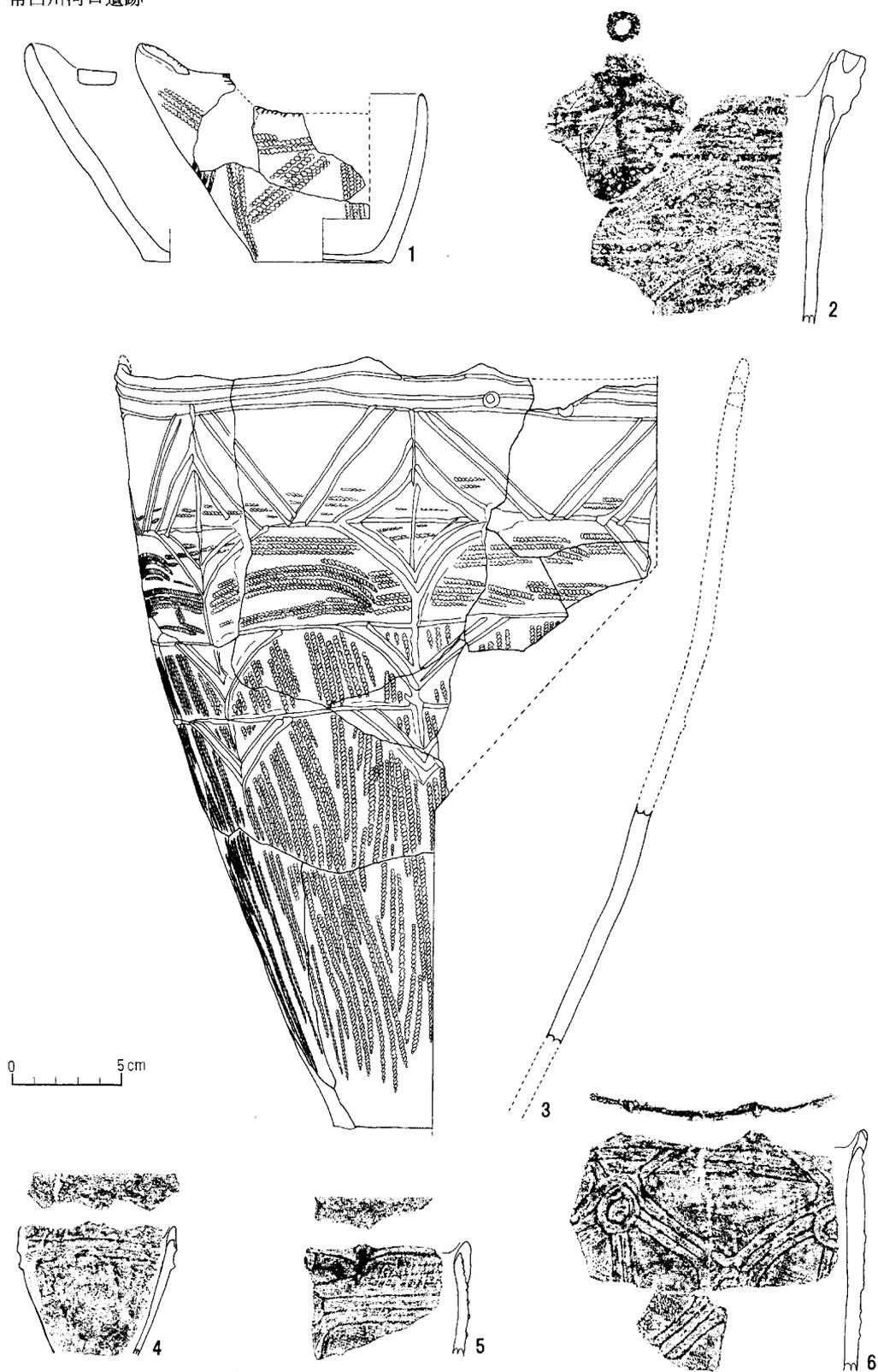
第44图 148a号竖穴埋土(1~3)出土土器



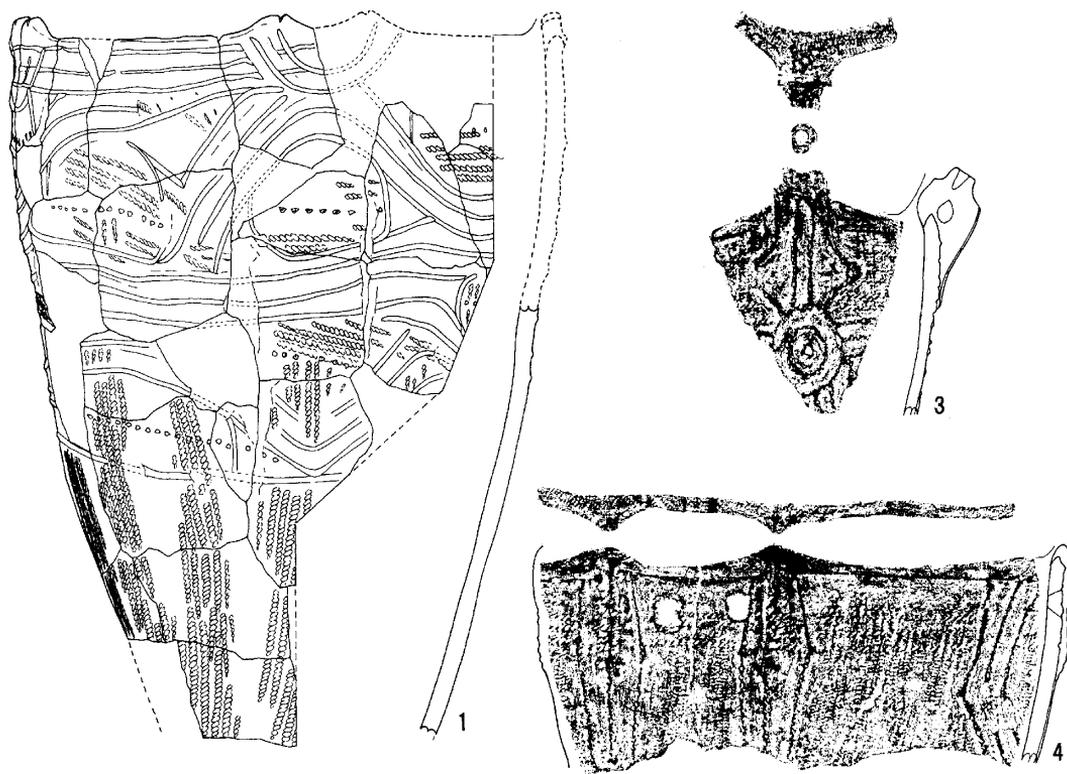
第45図 148a号竪穴埋土(1~3)出土土器



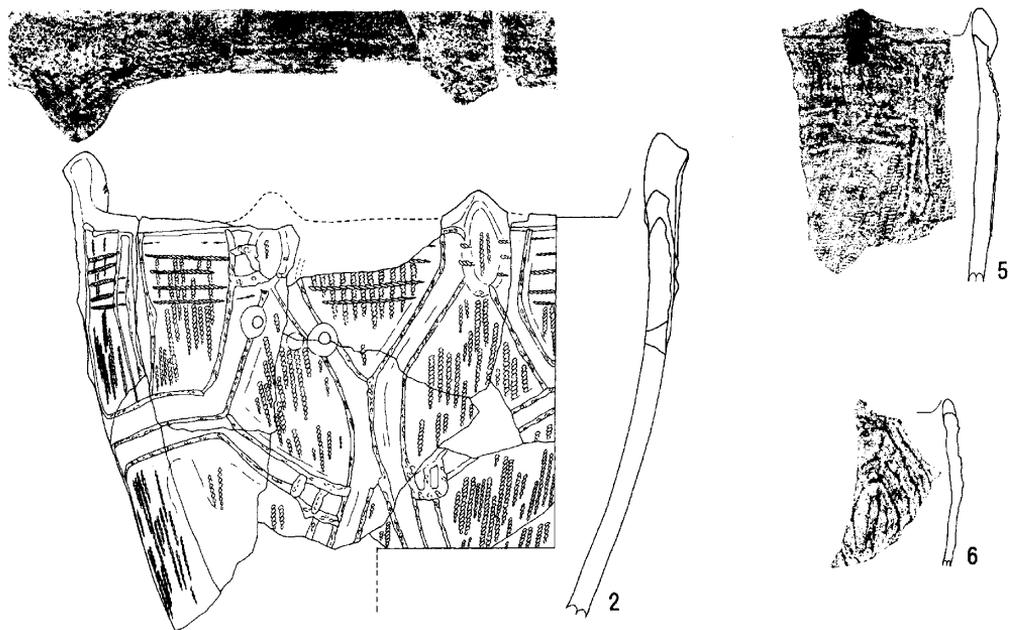
第46图 148a号竖穴埋土(1~4·6)·生活面(5)出土土器



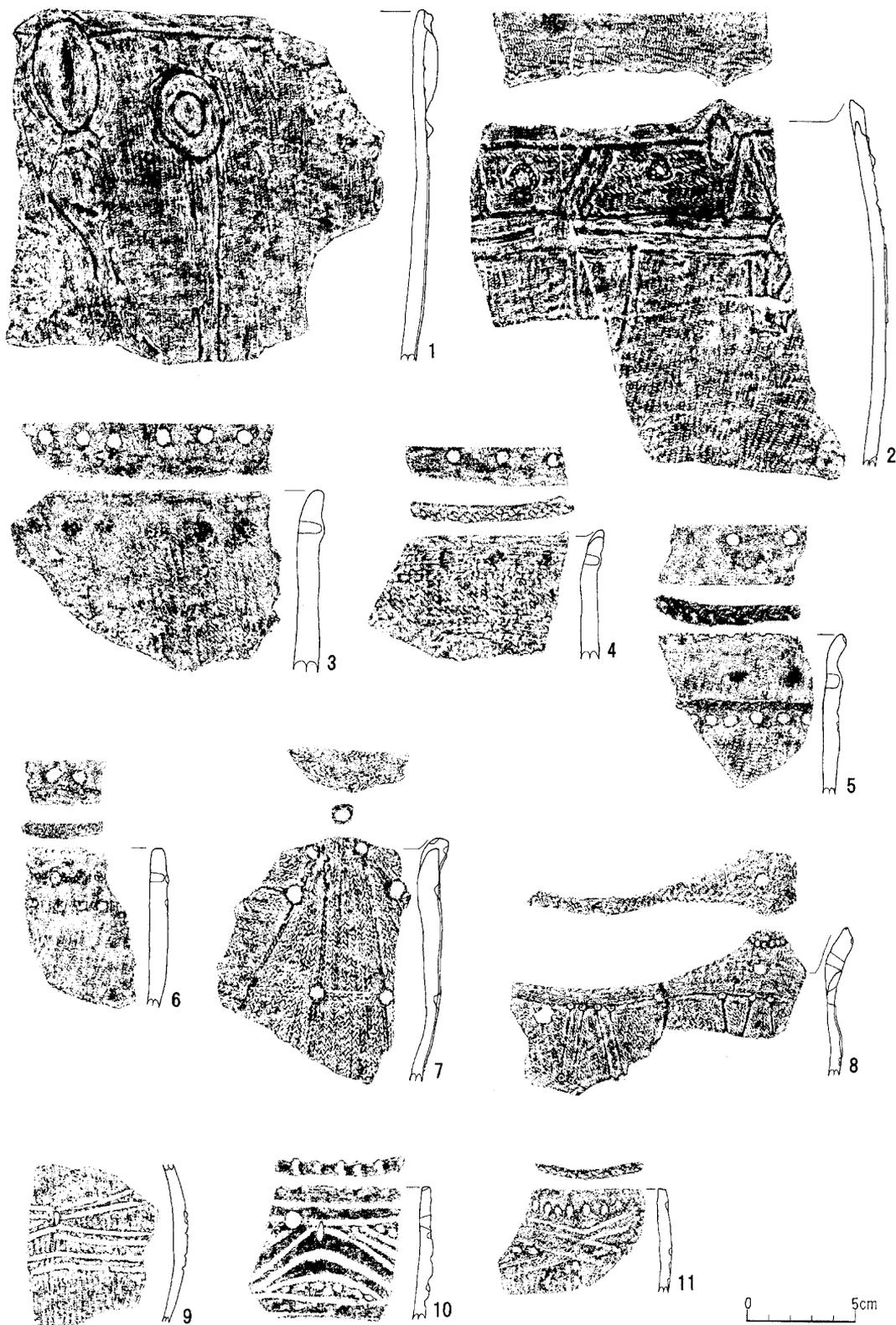
第47图 148a号竖穴埋土(1~6)出土土器



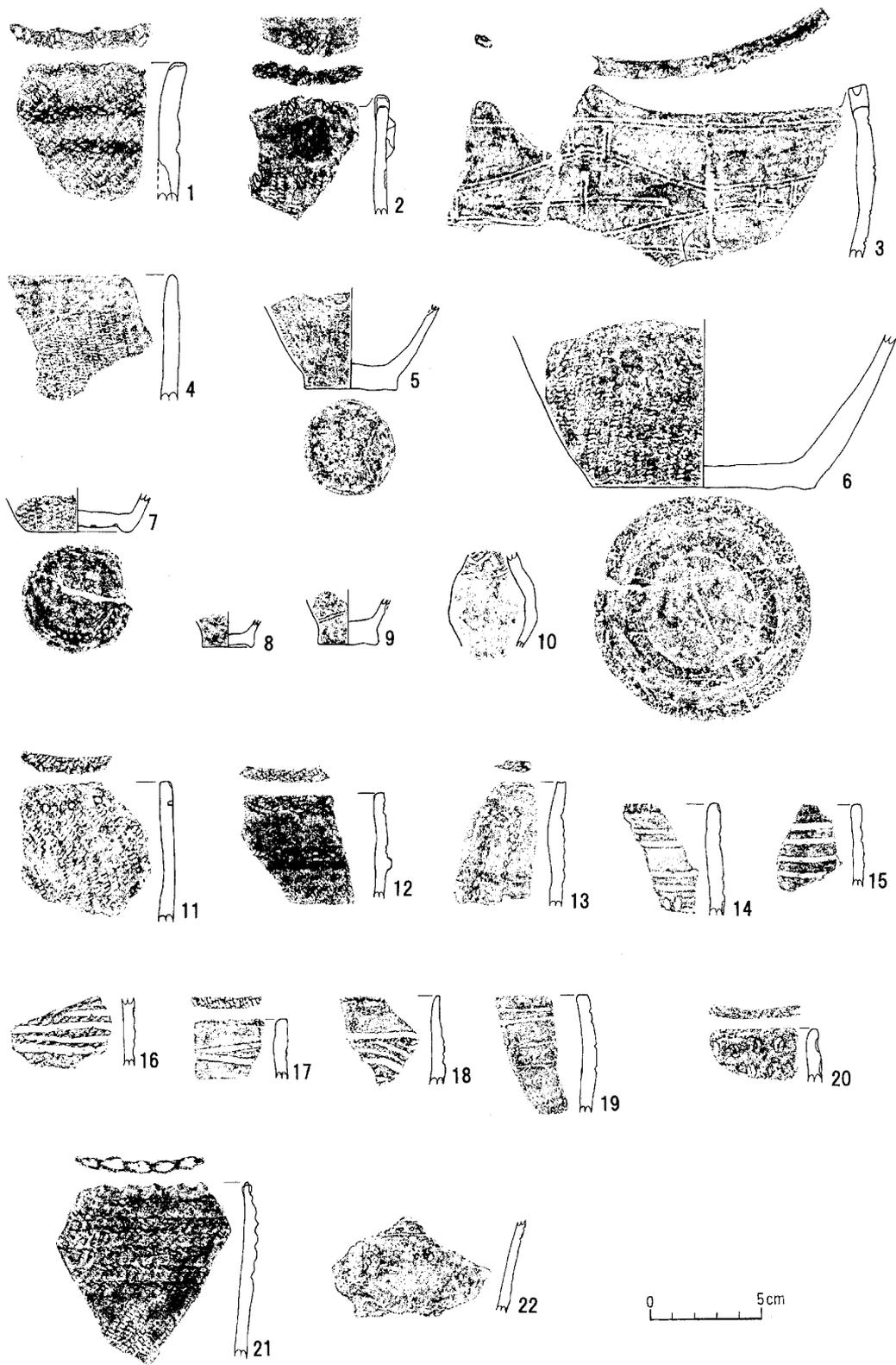
0 5cm



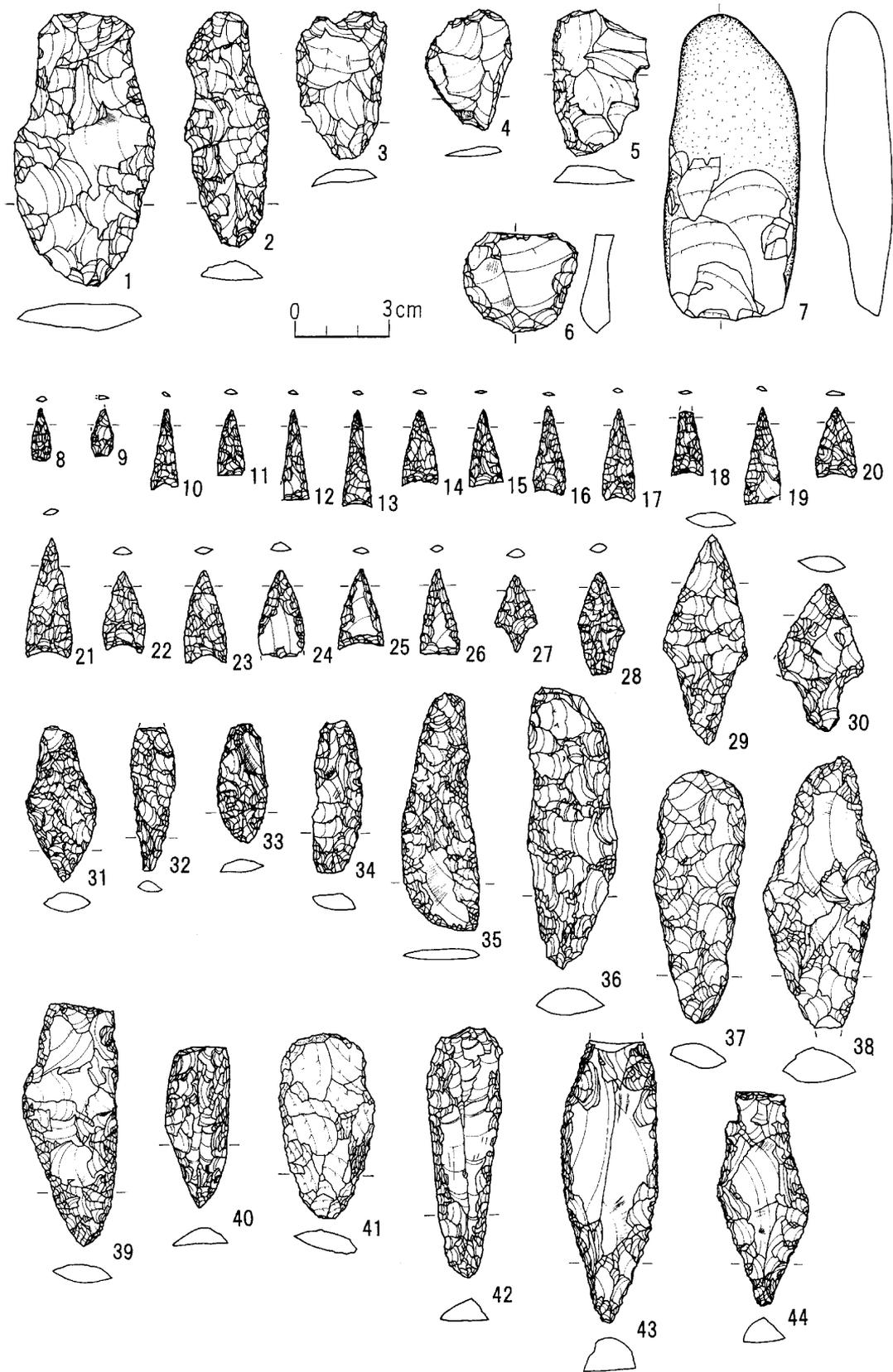
第48图 148a号竖穴埋土(1~6)出土土器



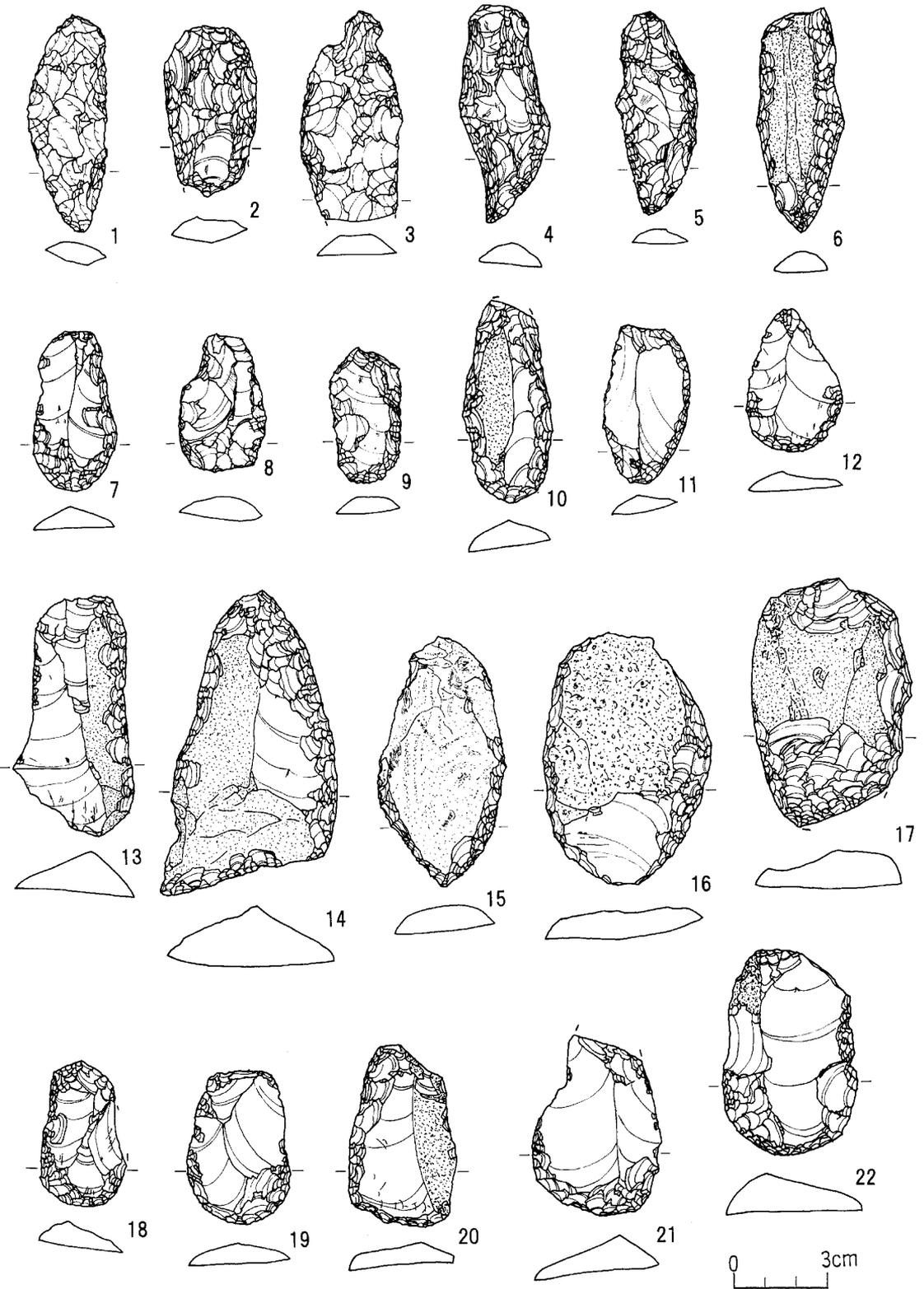
第49図 148a号堅穴埋土(1~11)出土土器



第50图 148a号竖穴埋土(1~22)出土土器

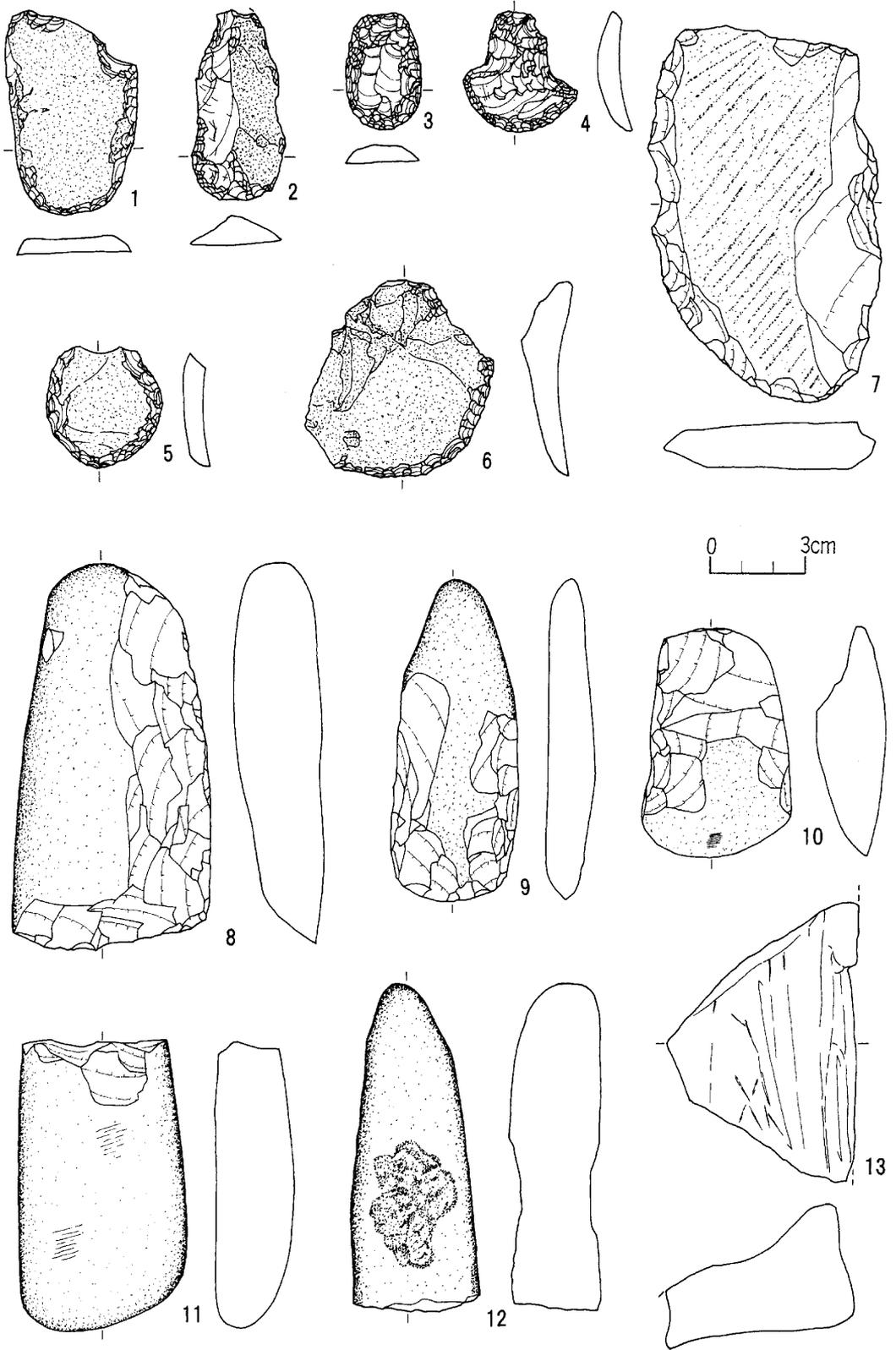


第51图 148a号竖穴床面(1~7)·埋土(8~44)出土石器



第52图 148a号竖穴埋土(1~22)出土石器

常呂川河口遺跡



第53図 148a号竪穴埋土(1~13)出土石器

## 148b号 竪 穴

## 遺 構 (第54図)

本竪穴は148a号竪穴下面に位置する。規模は長軸約5.00m、短軸約4.00mの楕円形を呈し、北側に長さ約50cm、幅約70cmの舌状部をもつ。壁高は148a号竪穴の床面から約15cmである。

埋土掘り下げ直後に2基の石囲み炉が現れたが、南側の石囲み炉をみるとさらに下方に石囲み炉があり、重複した石囲み炉であることが確認できた。北側の石囲み炉はレベル的にみて下方の石囲み炉に相対すると判断できた。したがって本竪穴に伴う石囲み炉は1基とみられる。石の配置は雑であるが、炉の長さは約100cm、幅約80cmである。

明確に支柱穴と思われるものはないが径約10～15cm、深さ約6～15cmの壁柱穴が南壁、西壁側にみられる。

## 遺 物 (第55図, 第56図, 第57図, 図版8-1～4)

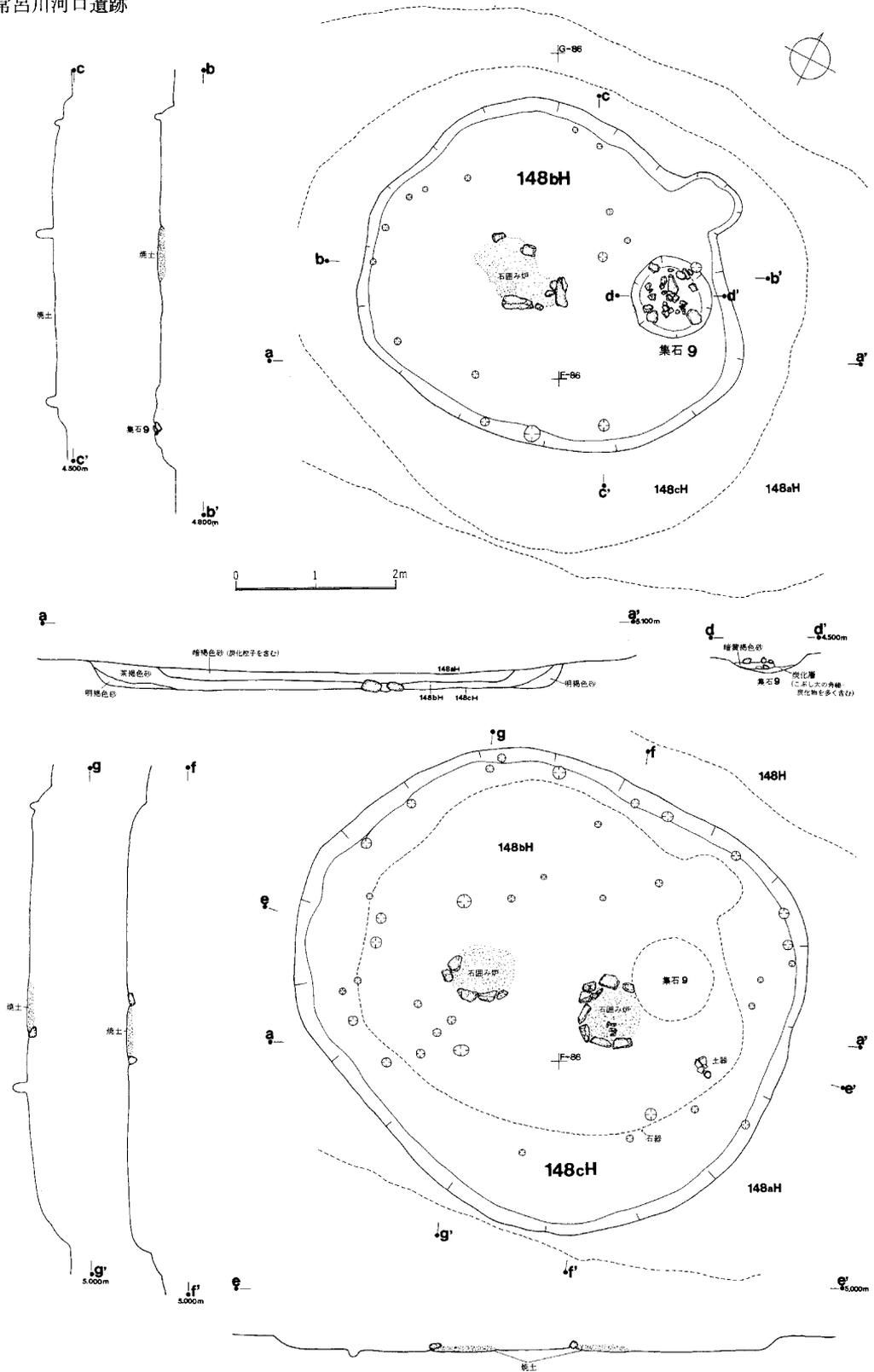
第55図は埋土から出土した続縄文字津内Ⅱb式である。1～4は同心円文がみられるもので1は口径約22cm、器高約28cmの大型土器である。5・6は擬縄隆帯が垂下するもので、5は口径約13cm、器高14.5cm。6は器高約9.5cmである。

第56図も埋土出土。1は宇津内Ⅱb式。2・3は同Ⅱa式。4は口径約7.5cm、器高約6cmの無文土器。小波状の口縁部に小孔をもち、底部は揚げ底となる続縄文土器。5・6は宇津内系の底部であろう。7・8は無文であるが胎土や焼成の状況から宇津内系と思われる。9の胎土は後北C<sub>2</sub>・D式に類似するが、同式にみられない縄線文が施され、口縁下部は無文帯となり、10は横走沈線文が施される。続縄文初頭と思われる。

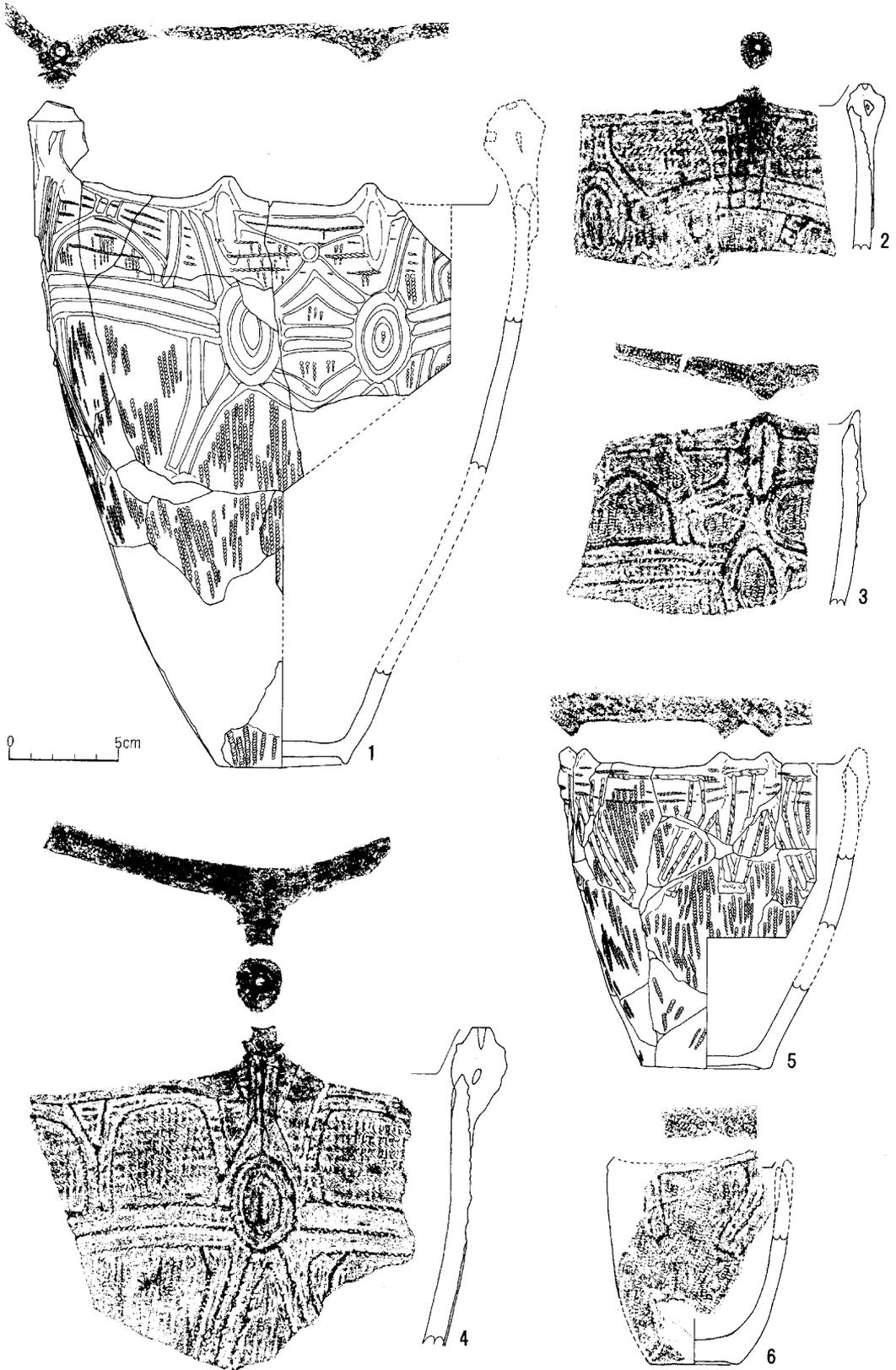
石器は第57図は埋土出土。1～7は無茎石鏃。8は両面加工ナイフ。9～18は削器。19は楕円形を呈した土製玉。20・21はくぼみ石。6は頁岩製、20・21は砂岩製であり、他は黒曜石製である。

## 小 括

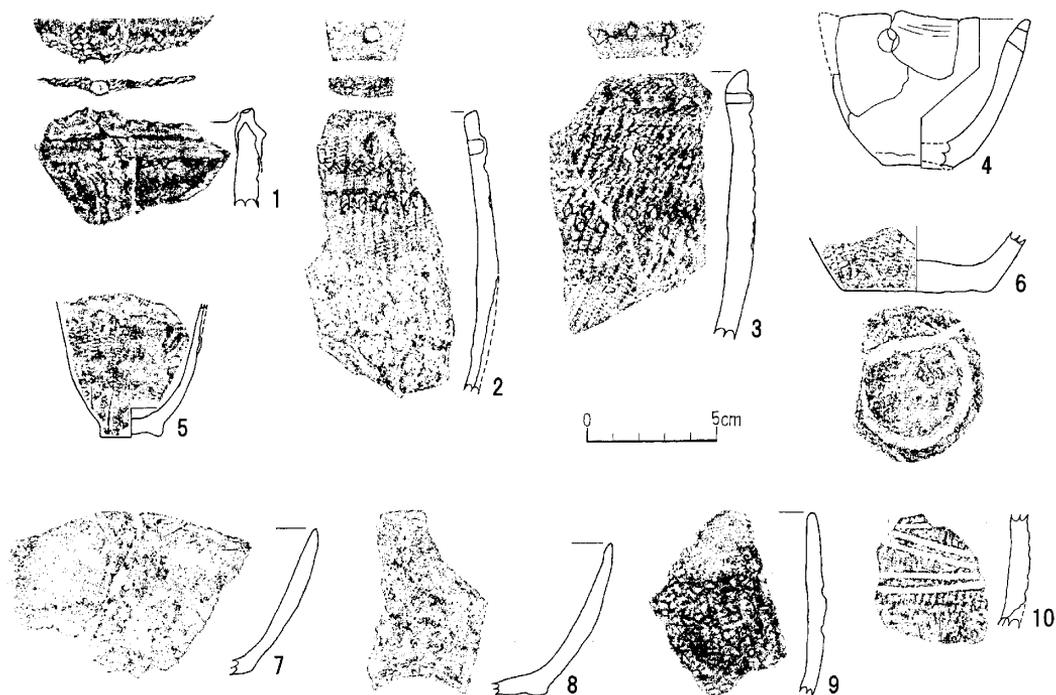
詳細な時期は不明であるが、続縄文字津内Ⅱb式の148c号竪穴より新しいことは層位的に確実であるが、極めて近接した時期と思われる。(武田 修)



第54図 148b号堅穴、148c号堅穴、集石9平面図



第55图 148b号竖穴埋土(1~6)出土土器



第56図 148b号竪穴埋土(1~10)出土土器

## 148c号 竪 穴

### 遺 構 (第54図)

本竪穴は148b号竪穴の下面に位置する。規模は直径約6.30mの不整円形を呈する。壁高は148b号竪穴の床面から約10cmである。2基の石囲み炉をもつ。2基とも角礫を方形に配置するが全周しない。

主柱穴は壁柱穴、補助柱よりも石囲み炉近くにある。径16~20cm前後、深さ15~18cmである。壁柱穴は径8~20cm、深さ約4~13cmであり、西壁側がほぼ等間隔に配列する。

### 遺 物 (第58図-1~8, 第59図-1・2, 図版8-5)

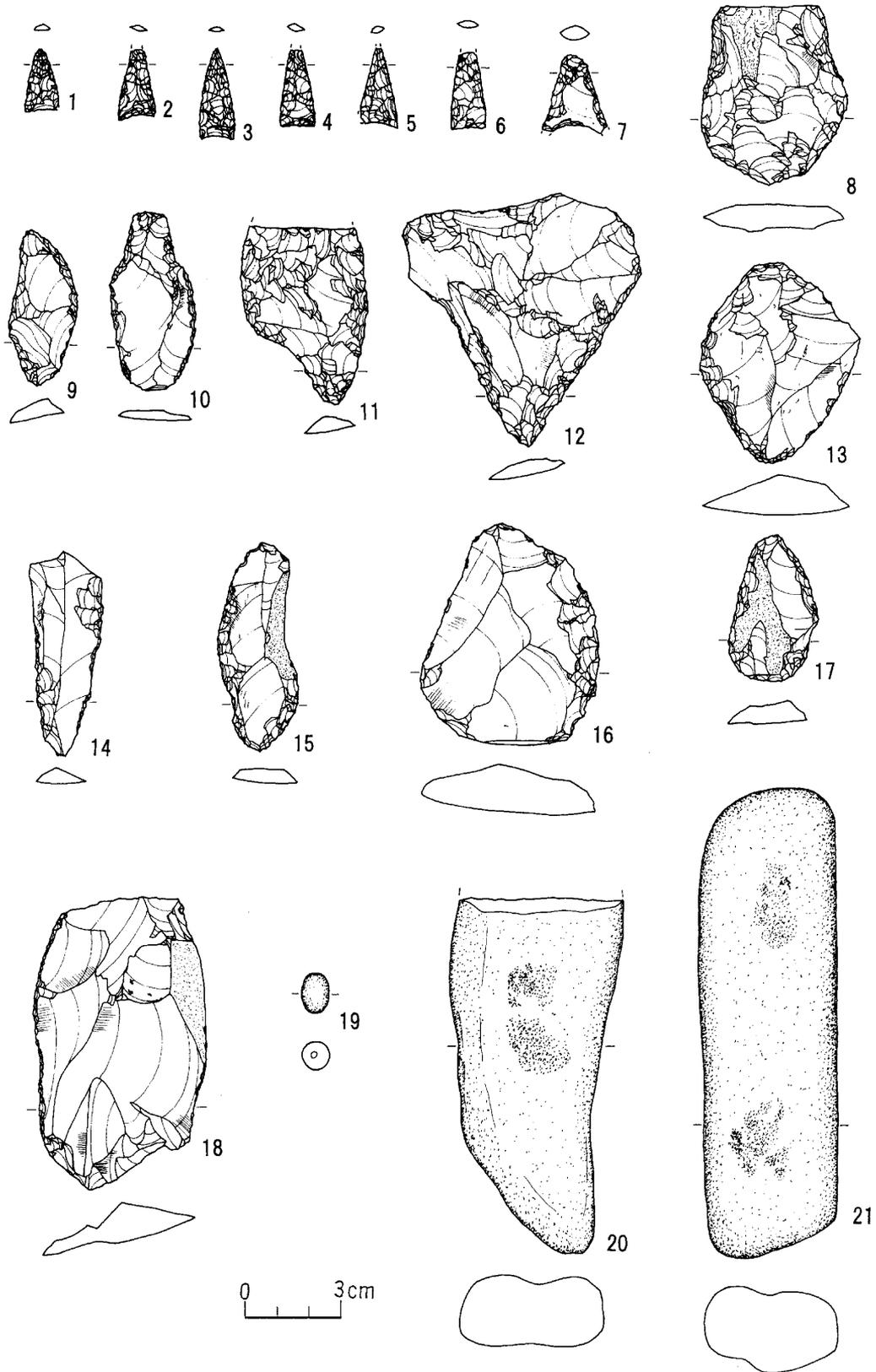
第58図-1は床面出土。口径約13cm、器高約13cmの小型土器。2個1対の小突起をもち、器面は縦走縄文が施される。底部は高い揚げ底となる。1~6は続縄文字津内Ⅱb式。7は同Ⅱa式。8は裏面に横方向からの刺突文を2段施す。続縄文初頭であろう。

石器は第59図-1は右側縁部が弧状の刃部をもつ搔器。2は削器。2点とも黒曜石製。

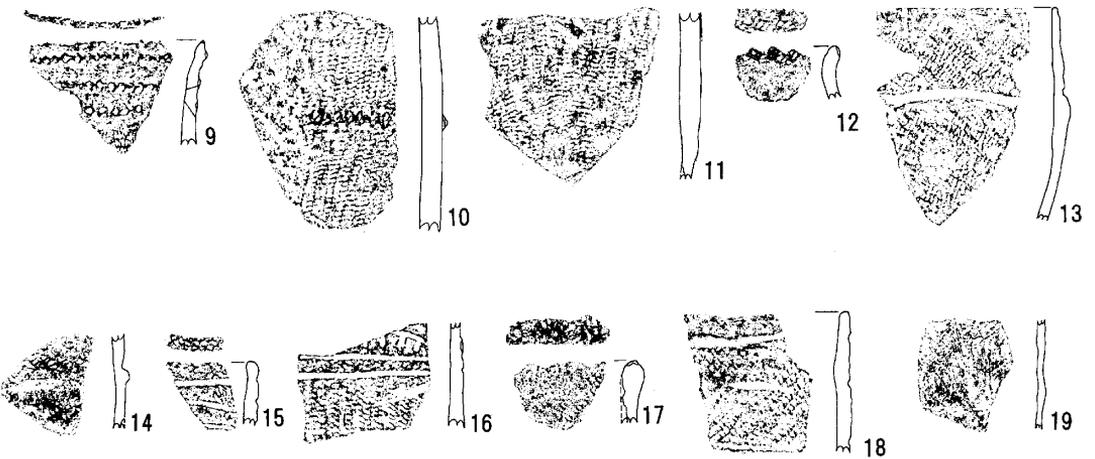
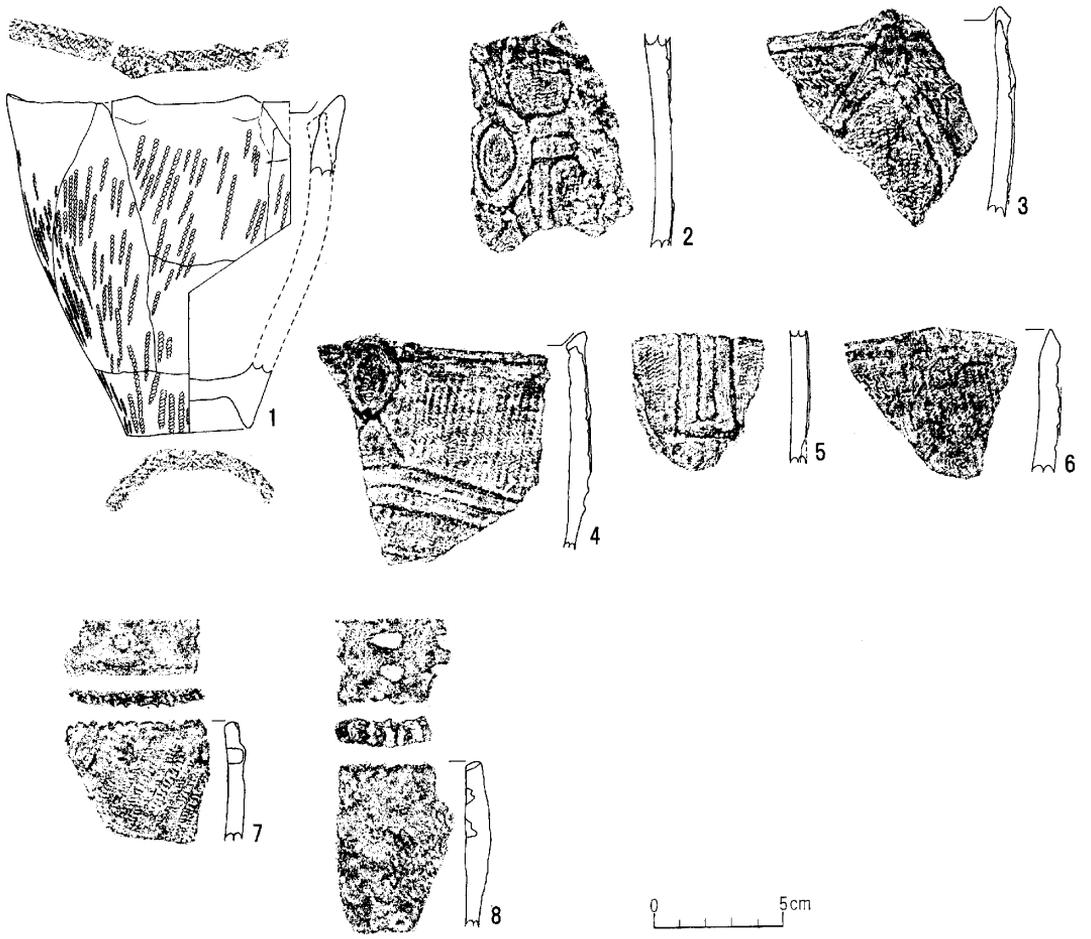
### 小 括

本竪穴は床面出土土器から続縄文字津内Ⅱb式とみられる。

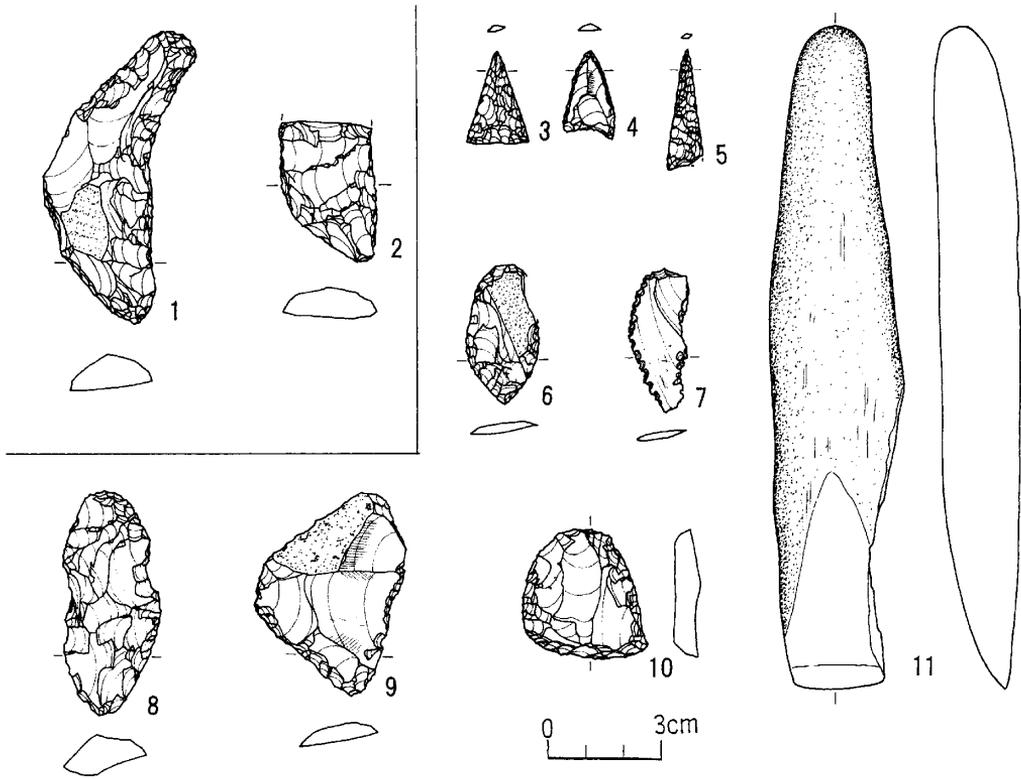
(武田 修)



第57图 148b号竖穴埋土(1~21)出土石器·土製品



第58図 148c号竪穴床面(1)・埋土(2~8)、148d号竪穴埋土(9~19)出土土器



第59図 148c号竪穴床面(1・2)、148d号竪穴埋土(3~11)出土石器

## 148d号 竪 穴

### 遺 構 (第60図)

本竪穴は148a号竪穴によって大半が削られるものの、中央部の石囲み炉から北壁側が検出できた。長軸は明確でないが、短軸は約2.84mを測る。楕円形を呈すると思われる。掘り込みは浅く、壁高は確認面から約14cmである。

炉は3点の角礫が用いられた石囲み炉であり、焼土の赤化は著しい。支柱穴は北壁側の径約16cm、深さ約13cmのものが相当する。壁柱穴は径約10cm前後、深さ約9~12cmの3本である。

### 遺 物 (第58図-9~19, 第59図-3~11)

全て埋土出土である。第58図-9は続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。10・11は宇津内系であろう。12は無文の外反する口縁部で、口唇部に縄端圧痕文が施される。13・14は胴上部が有段化するもので13は横走沈線文、14は縄線文が施される。15・16は横走沈線文と緩い弧線状の沈線文が施され、16には短刻線が加わる。17の口唇部は縄端圧痕文が施される。13~17は続縄文初頭であ

ろう。18は口縁直下と胴上部に浅い横走沈線文がみられる。19は無文。18・19は縄文晩期中葉であろう。

石器は第59図-3～5が無茎石鏃。6は小型の片面加工ナイフ。7は両側縁部が鋸歯状の刃部である。8は両面加工ナイフ。9・10は搔器。11は片刃磨製石斧。裏面に敲打痕がみられる。11は斑斕岩製であり他は全て黒曜石製である。

## 小 括

本竪穴の詳細な時期は不明であるが切り合い関係から148a号竪穴より古いことは確実である。(武田 修)

# 148e号 竪 穴

## 遺 構 (第60図)

本竪穴は長軸約5.80m、短軸約4.40mを測る。形態的には長軸面の南側がやや広がり、北側がすぼまる卵形を呈する。各壁とも緩い立ち上がり、高さは確認面から東壁から南壁にかけてやや高い38cm前後、西壁から北壁が25cm前後と浅い。

床面は各壁から中央部に向かって緩い凹状を呈し、北壁側の床面では層厚約1～3cmのベンガラ混じりの赤褐色土が散布されて、特に厚い箇所は層厚約3cmにおよぶ。炉跡は検出できなかった。このことはほぼ中央部にある埋甕9によって破壊された可能性もあるが、床面の埋甕9の掘り込みは径約30cmほどであり残存してもよさそうである。結果として、検出できなかったわけであるが、あるいはもともと炉はなかったのかもしれない。

床面直上に炭化物層があり、その上部に焼土層も堆積もすることから焼失住居と判断され、埋甕9は焼失直後に構築されたことはセクションから明らかである。

土器ブロックは床面中央部で丸く取り囲まれ、フレイク・チップ集積は土器ブロックの外側に配置される傾向をもつ。

明確な主柱穴は認められず径約8～12cm、深さ約9～19cmの壁柱穴が認められる。

## 遺 物 (第61図, 第62図, 第63図, 第64図, 第65図, 図版8-6)

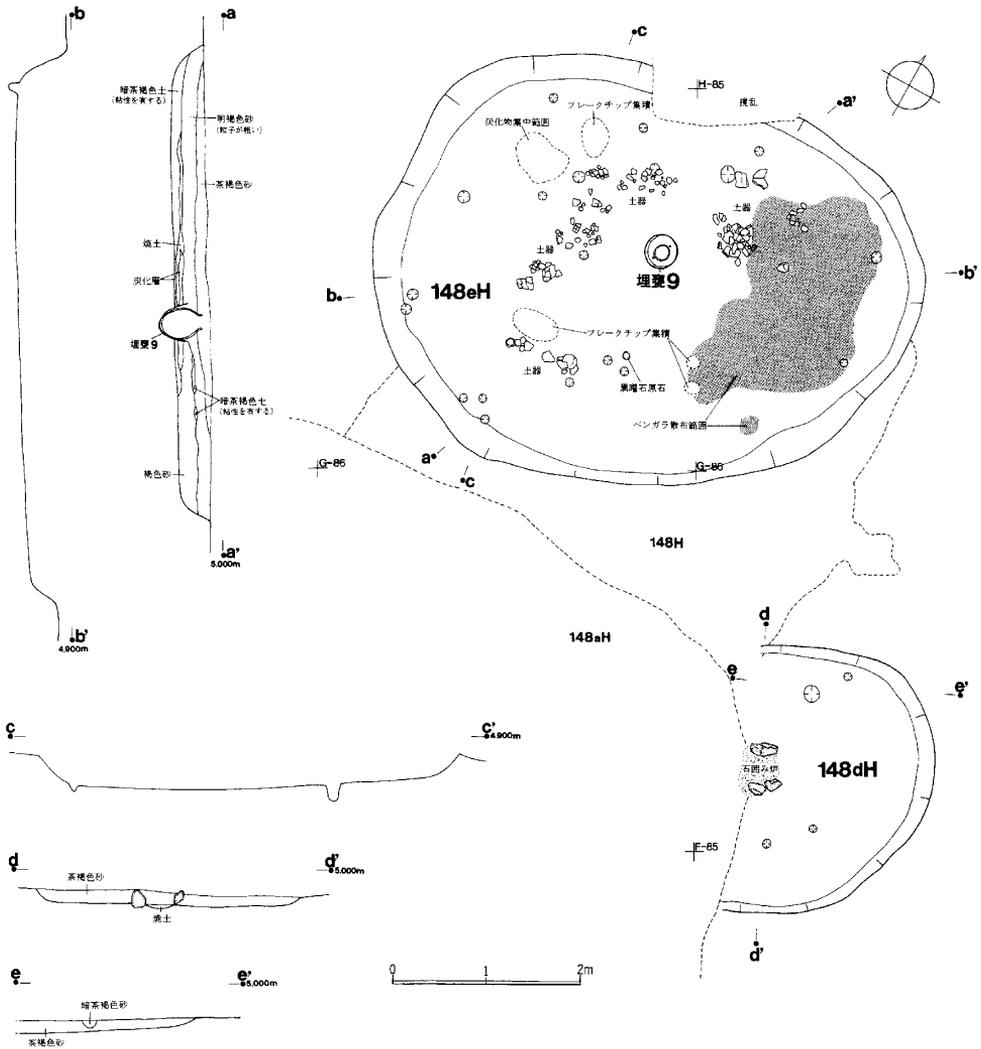
第61図は床面出土である。全て続縄文初頭であろう。1は口径約26cm。斜縄文を地文に口唇部に縄端圧痕文が施される。2は縦走縄文を地文とする。3は斜縄文を地文とし口唇部が平縁となる。内部は煤が付着する。4は縦走縄文を地文に2条の縄線文が横走し、口唇部に縄端圧痕文が施される。5は大型土器の胴部片。下端部では縄文の向きを換えている。6は無文のミニチュア土器。7は底部。

第62図-1～3は床面ベンガラ内出土。1は菱形沈線文を基本に多条の横走沈線文が施される。2は底部。3は4条の横走沈線文がみられる。4～6は床面上の暗赤褐色土内出土。4は口縁部がやや外反し、小突起に刻みがみられる。5は胴部片、6は底部。7～17は埋土出土。

7は口唇部に縄端による刻み、8は縄文、9は細い円形刺突文が施される。10は2個の小突起、11は丸みをもった小突起をもちそれぞれ横走沈線文が施される。12は横走沈線文上に縄線文が縦位、13は沈線文が施される。14~17は底部。14は丸みをもつ。15・16は揚げ底気味となる。

第63図-1は口唇部が平縁。口縁部は無文帯をなし、胴部は縦走縄文が施される。2は内側から突瘤文が施され、口唇部と内湾屈部に縄端圧痕文が連続する。

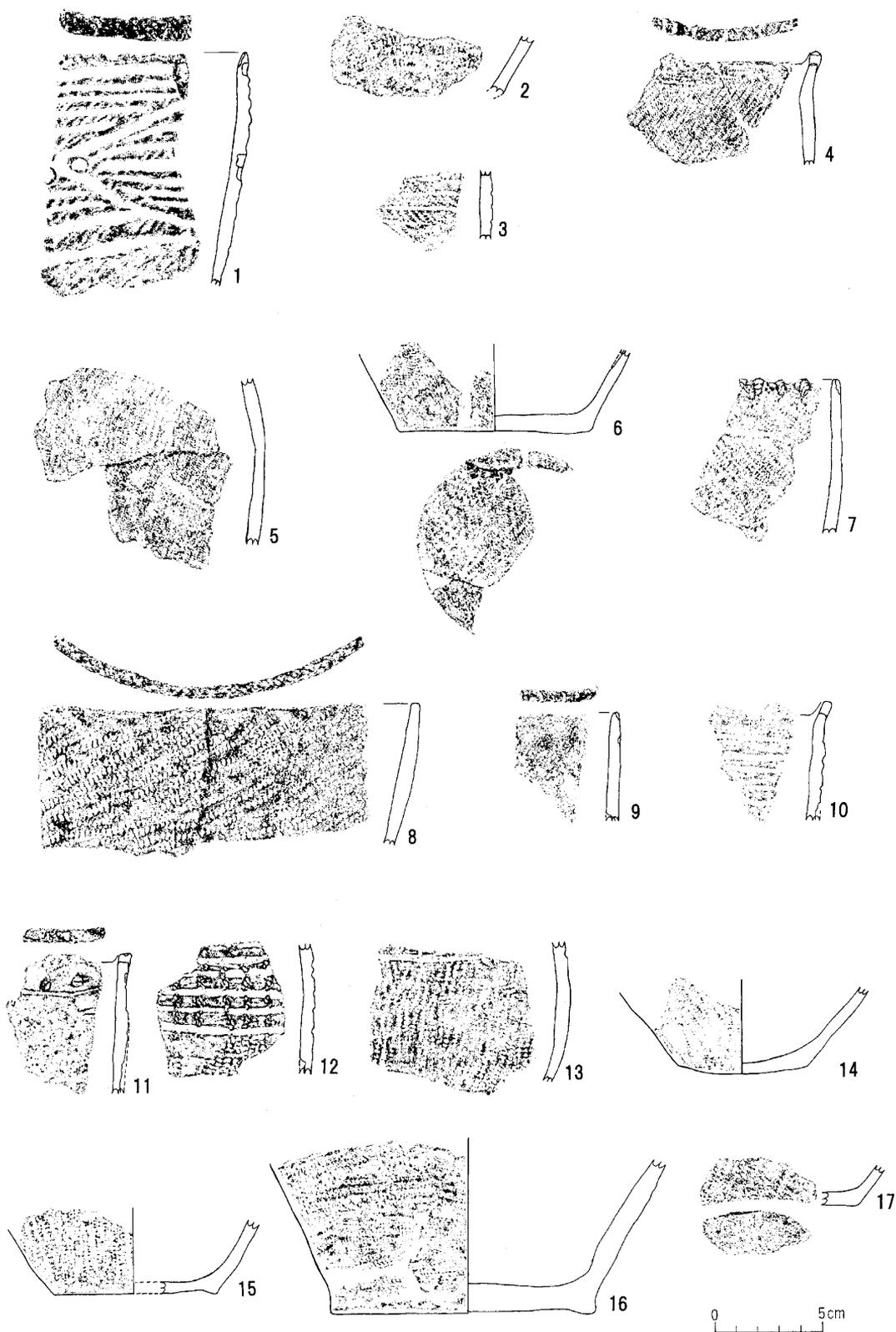
石器は第64図-1~6は床面出土。1・2は有茎石鏃。3は両面加工ナイフ。4は削器。5・6は棒状原石。7は石錐。8・9は両面加工ナイフ。10・12は削器。11・13は搔器。14は刃部が作出されていないものの側縁部に磨面がみられる。磨製石斧の未製品であろう。15は両面



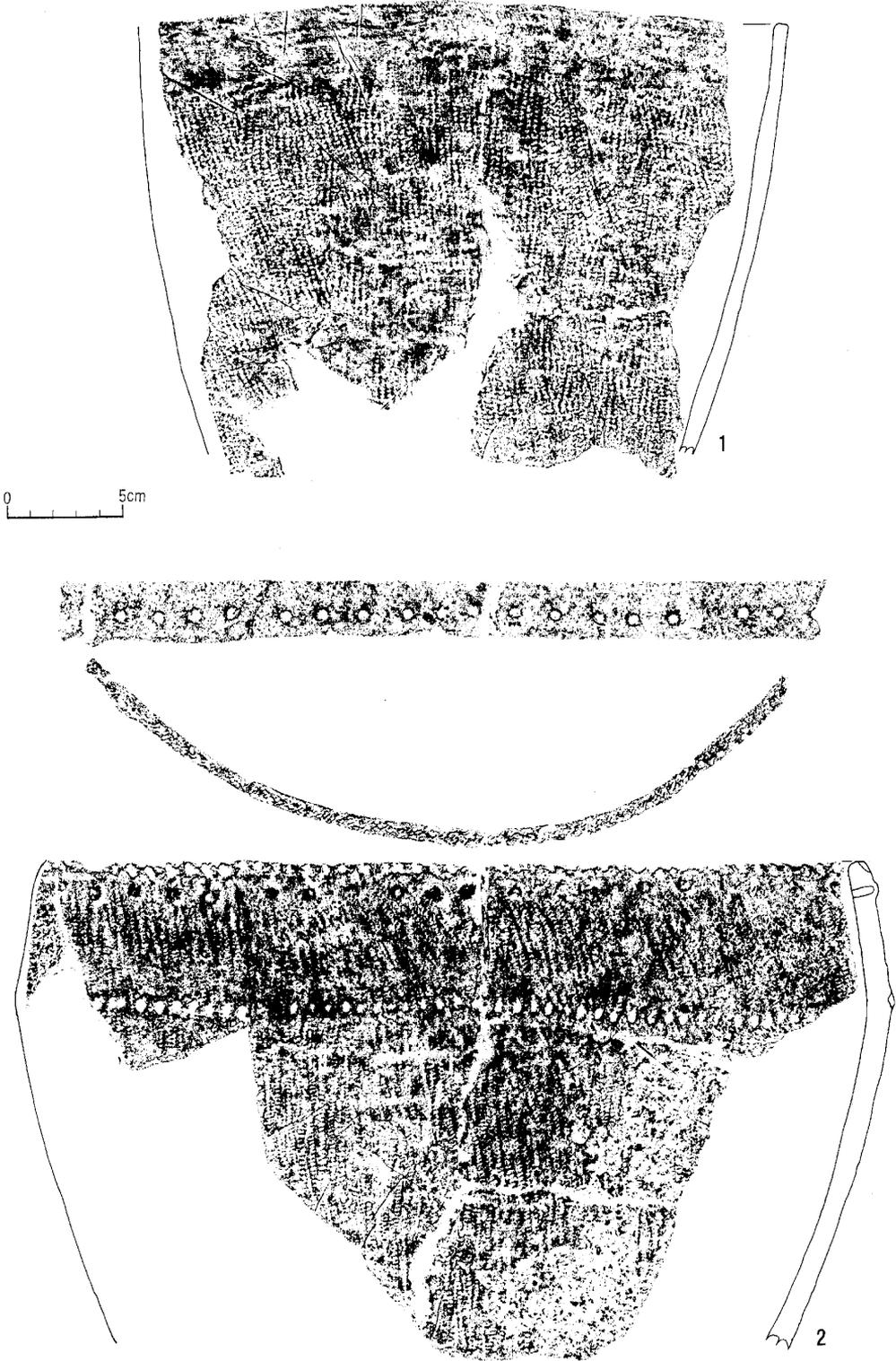
第60図 148d号竪穴、148e号竪穴、埋葬9平面図



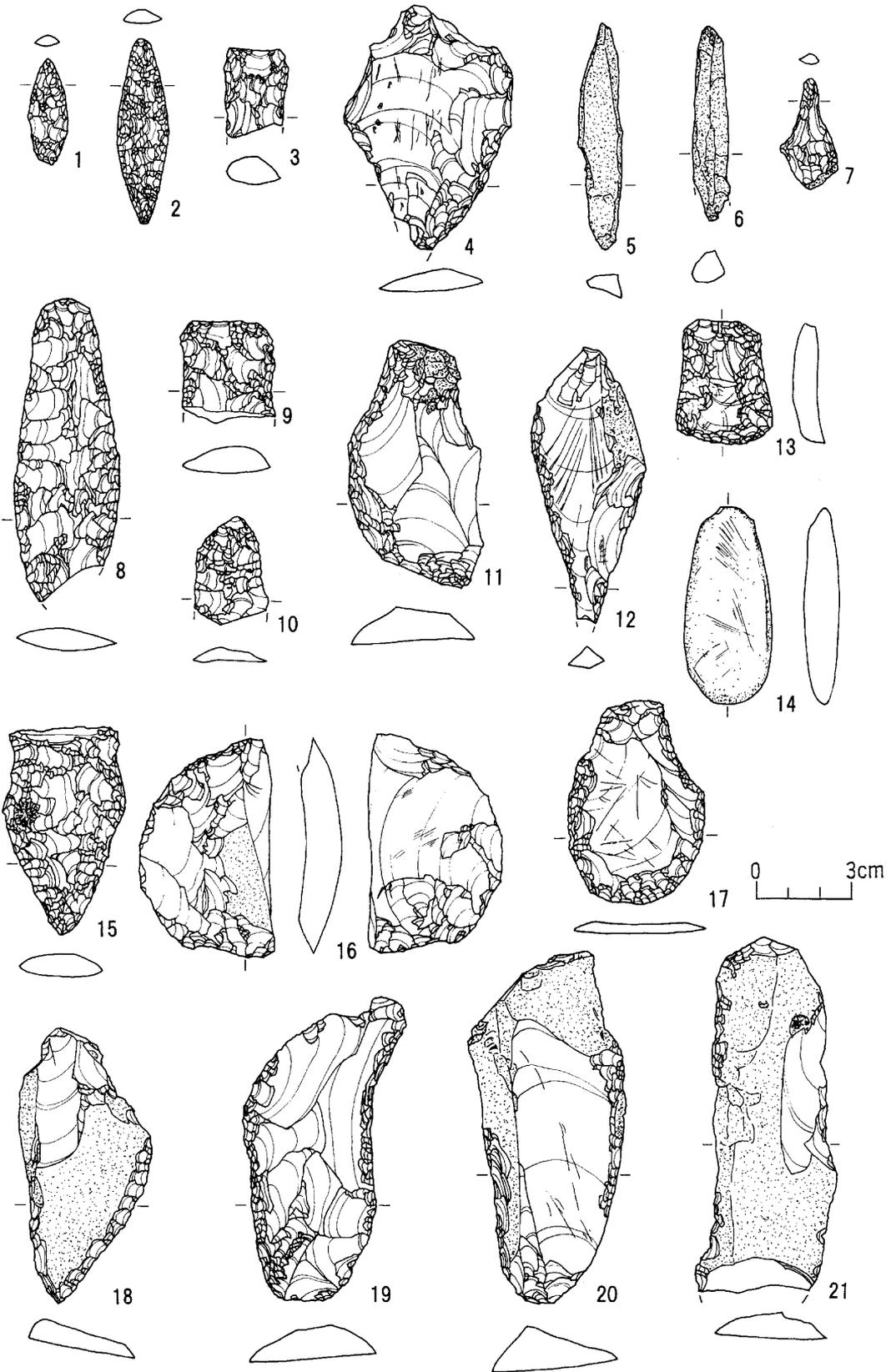
第61図 148e号竪穴床面(1~7)出土土器



第62図 148e号竪穴床上ベンガラ層(1~3)・暗赤褐色土内(4~6)・埋土(7~17)出土土器



第63図 148e号堅穴埋土(1・2)出土土器



第64図 148e号竪穴床面(1~6)・床上ベンガラ層(7~14)・暗赤褐色土内(15~21)出土石器



第65図 148e 号竪穴暗赤褐色土上(1~3)・埋土(4~15)出土石器

加工ナイフ。16は片面加工ナイフの未製品と思われる。17～21は削器。特に18～21は大型の縦長剥片を素材とする。7はメノウ製。8・11は頁岩製。14は青色泥岩製であり、他は黒曜石製である。

第65図－1～3は床面の暗赤褐色土内から出土の大型の縦長剥片を素材とした削器。埋土からは4～6が無茎石鏃。7が有茎石鏃。8は両面加工ナイフが縦に折れている。9は石錐。10～12は削器。13は搔器。14・15は棒状原石。10はメノウ製であり、他は全て黒曜石製である。

## 小 括

本竪穴は床面出土、ベンガラ層出土の土器からみて統縄文初頭と思われる。(武田 修)

# 149号 竪 穴

## 遺 構 (第66図, 図版9-1)

本竪穴はD87・88・89, E87・88・89グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約7.80m。北壁が約5.60mと広く、南壁が約4.20mのやや短い不整長方形である。壁高は確認面から約44cmを測る。床面の中央部に位置する炉跡は長さ280cm、幅80cmで黄褐色土を呈し、微細な骨片を含む。

主柱穴は径約10～22cm、深さ約14～33cmを測る。配置に規則性はないが、各壁側にあり、西壁と北壁では緩く傾斜した壁面にある特徴をもつ。壁柱穴は径約6～12cm、深さ約8～20cm。壁柱穴もまた西壁と北壁で緩い傾斜面にみられる。

## 遺 物 (第67図, 第68図, 第69図, 第70図, 第71図, 第72図, 第73図, 第74図, 図版9-2～6)

第67図は床面出土土器である。1～5は後北C<sub>2</sub>・D式。1は口径9.5cm、器高7cmの小型土器。3は器面に半載状施文具による刺突文が垂下する。6は後北C<sub>1</sub>式。7～12は宇津内Ⅱb式。13は同Ⅱa式。

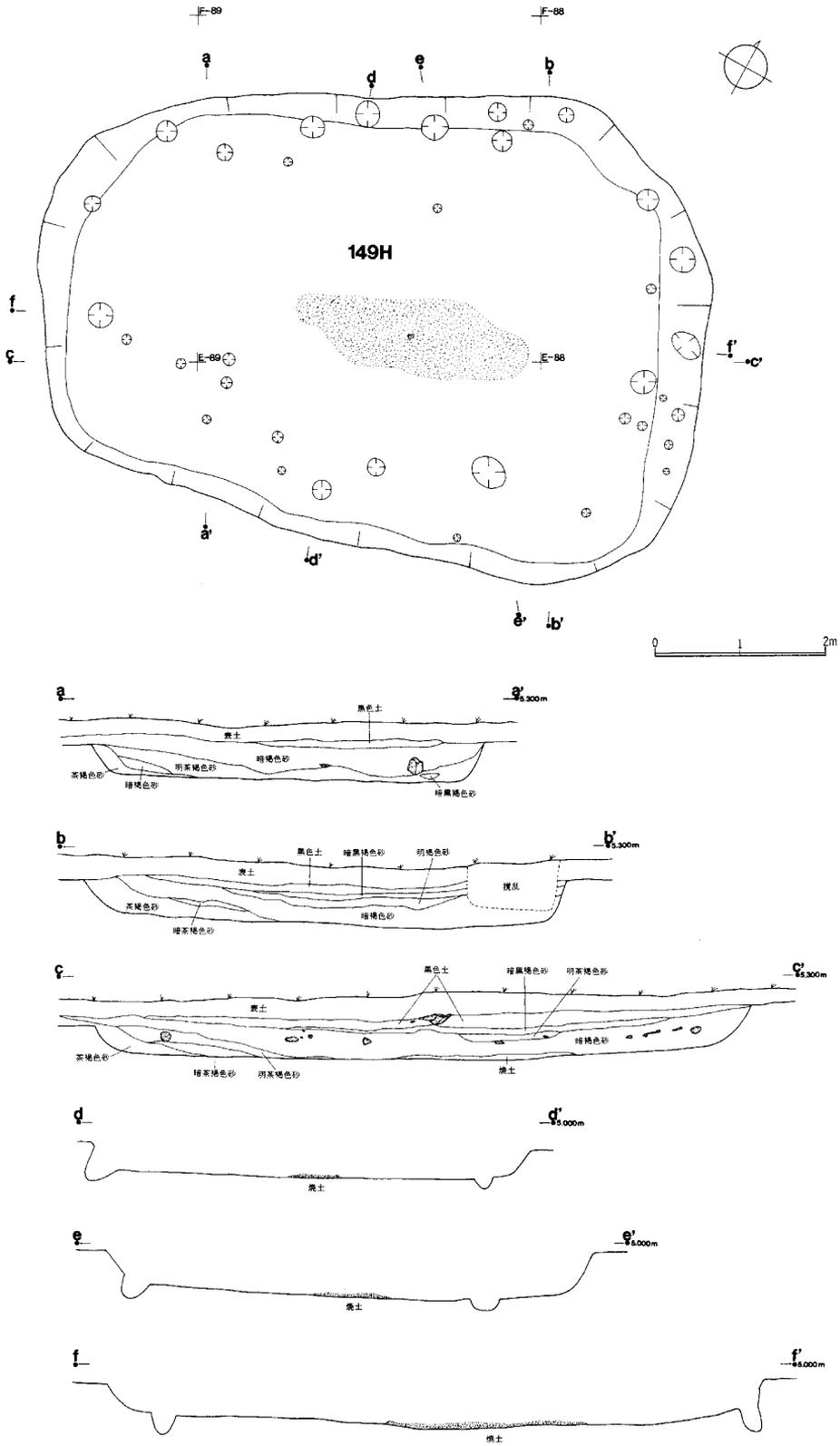
第68図－1～6は床面出土。1は統縄文宇津内Ⅱa式。2は同Ⅱb式。3～5は統縄文初頭であろう。5は撚糸文を地文にやや凹化した無文帯の下部に円形刺突文が加わる。6は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式の底部。7～10は埋土出土。7は擦文土器。宇田川編年後期、藤本編年g期に比定される。8は口径26cm、器高35cmの大型鉢形土器である。口縁下部に2条の擬縄隆帯をもち、胴部は縦位・横位の帯縄文で構成される。8～10は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。

第69図は埋土出土。1～10は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式であり、1・2は注口土器。11は同C<sub>1</sub>式。

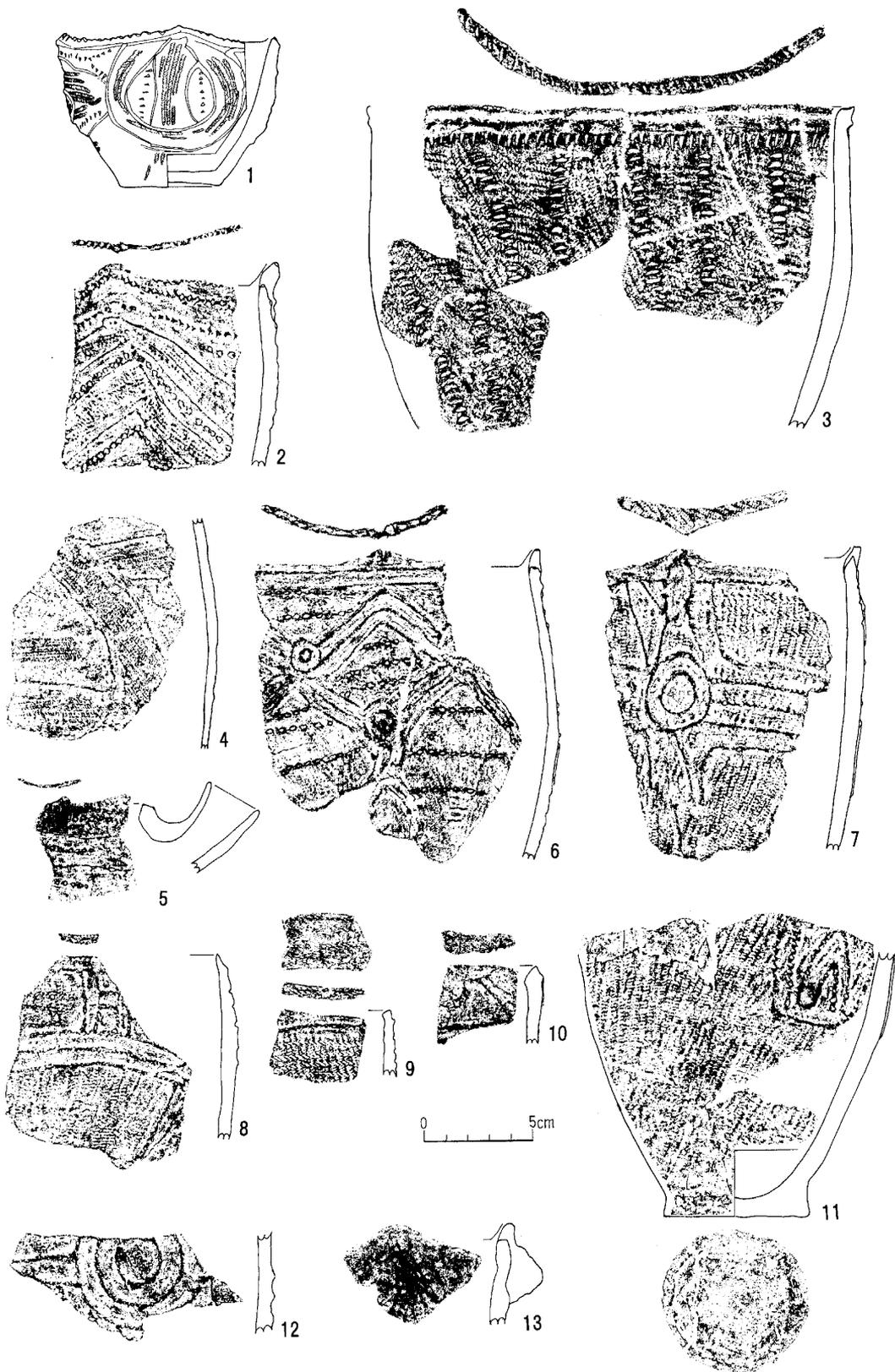
第70図は埋土出土。1は統縄文後北C<sub>1</sub>式。2～5は宇津内Ⅱb式である。

第71図は埋土出土。1～3は統縄文宇津内Ⅱb式。4～11は同Ⅱa式。12は宇津内系の底部であろう。13・14は口縁下部に縄端圧痕文が押捺される。15・16は無文。17～20は縄線文を主体とし、18・19は縄端圧痕文が押捺される。21は太目の縦位隆帯と沈線文が垂下する。22も縦

常呂川河口遺跡



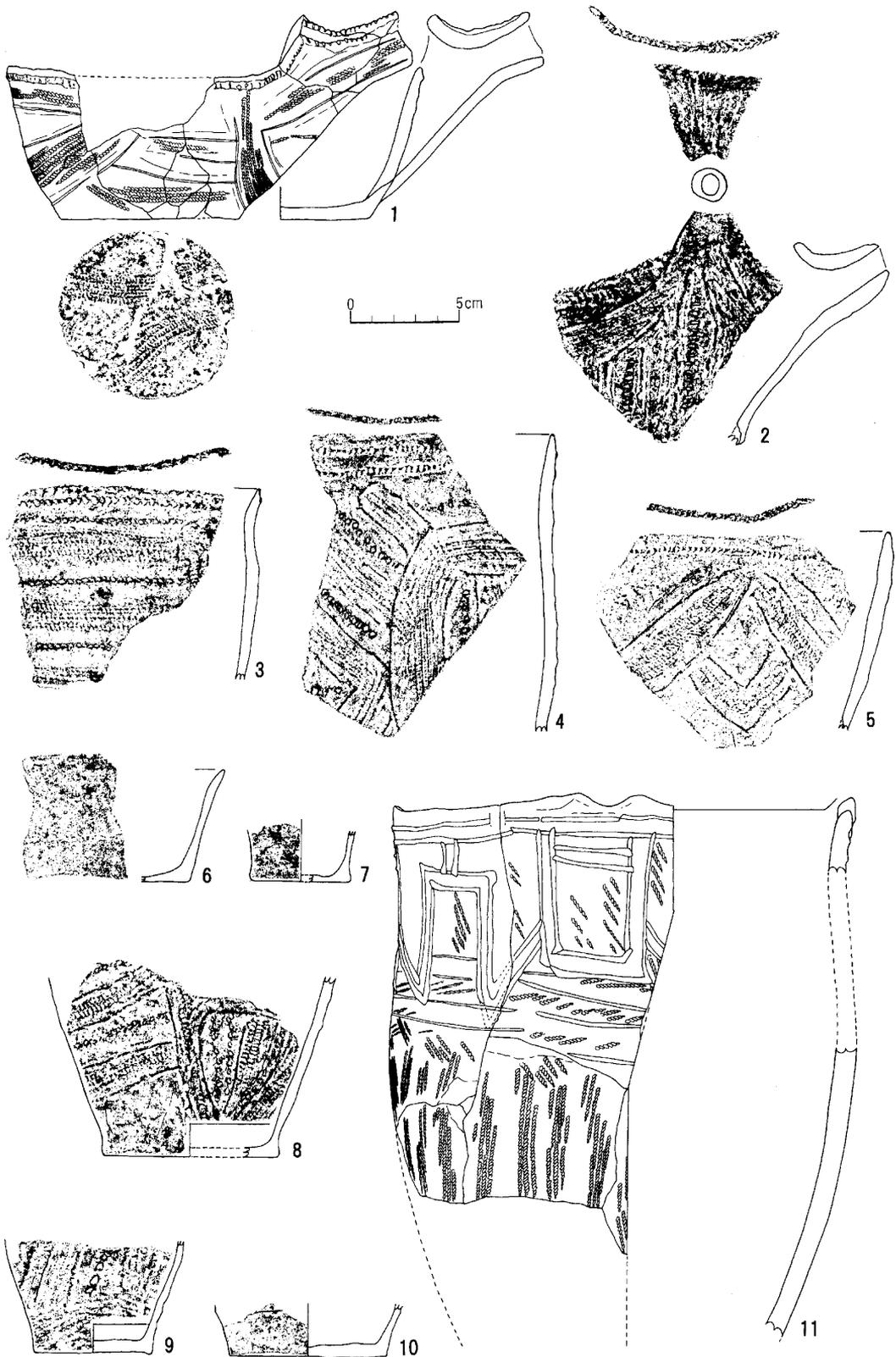
第66図 149号竪穴平面図



第67图 149号竖穴床面(1~13)出土土器



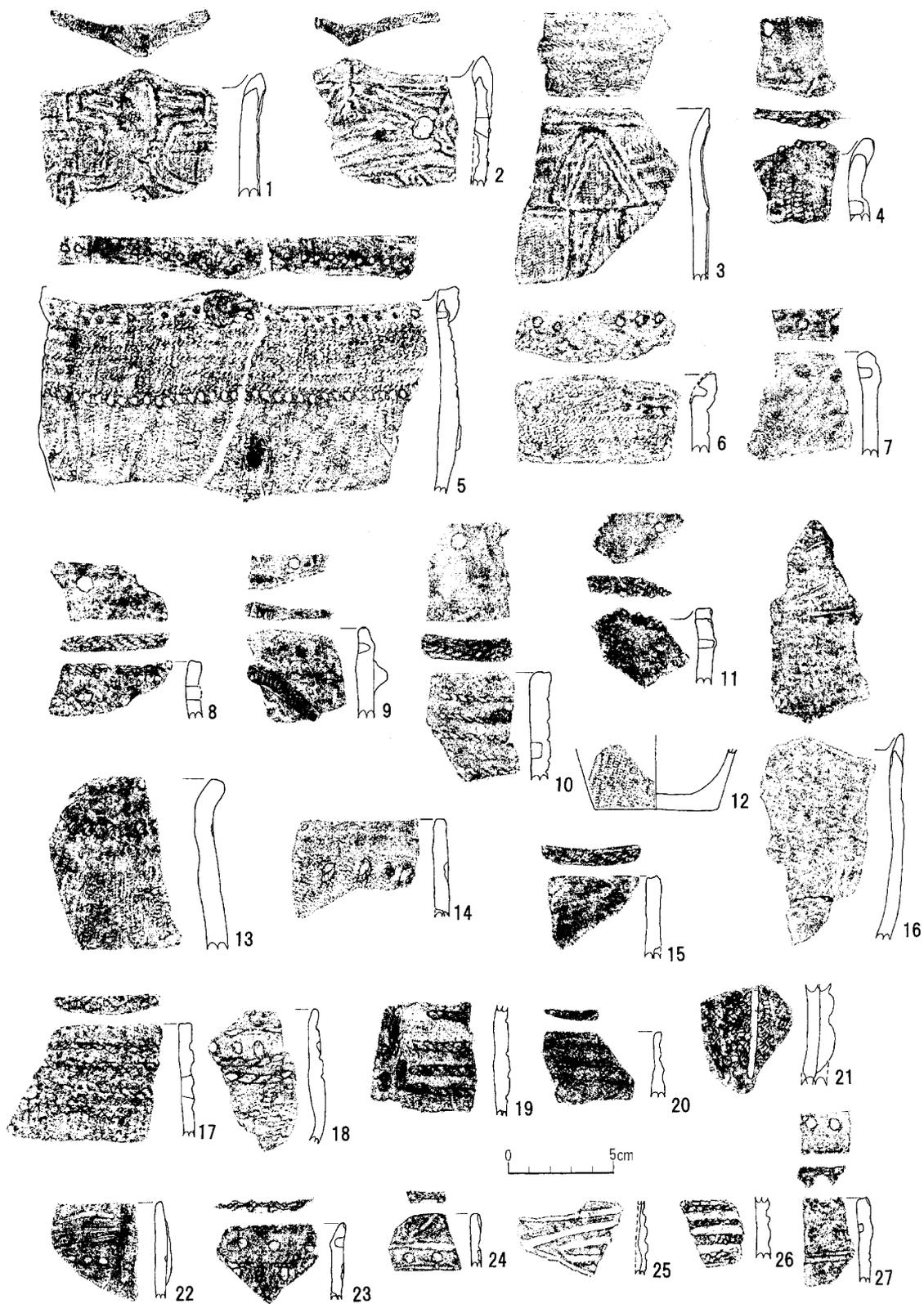
第68图 149号竖穴床面(1~6)·埋土(7~10)出土土器



第69图 149号竖穴埋土(1~11)出土土器

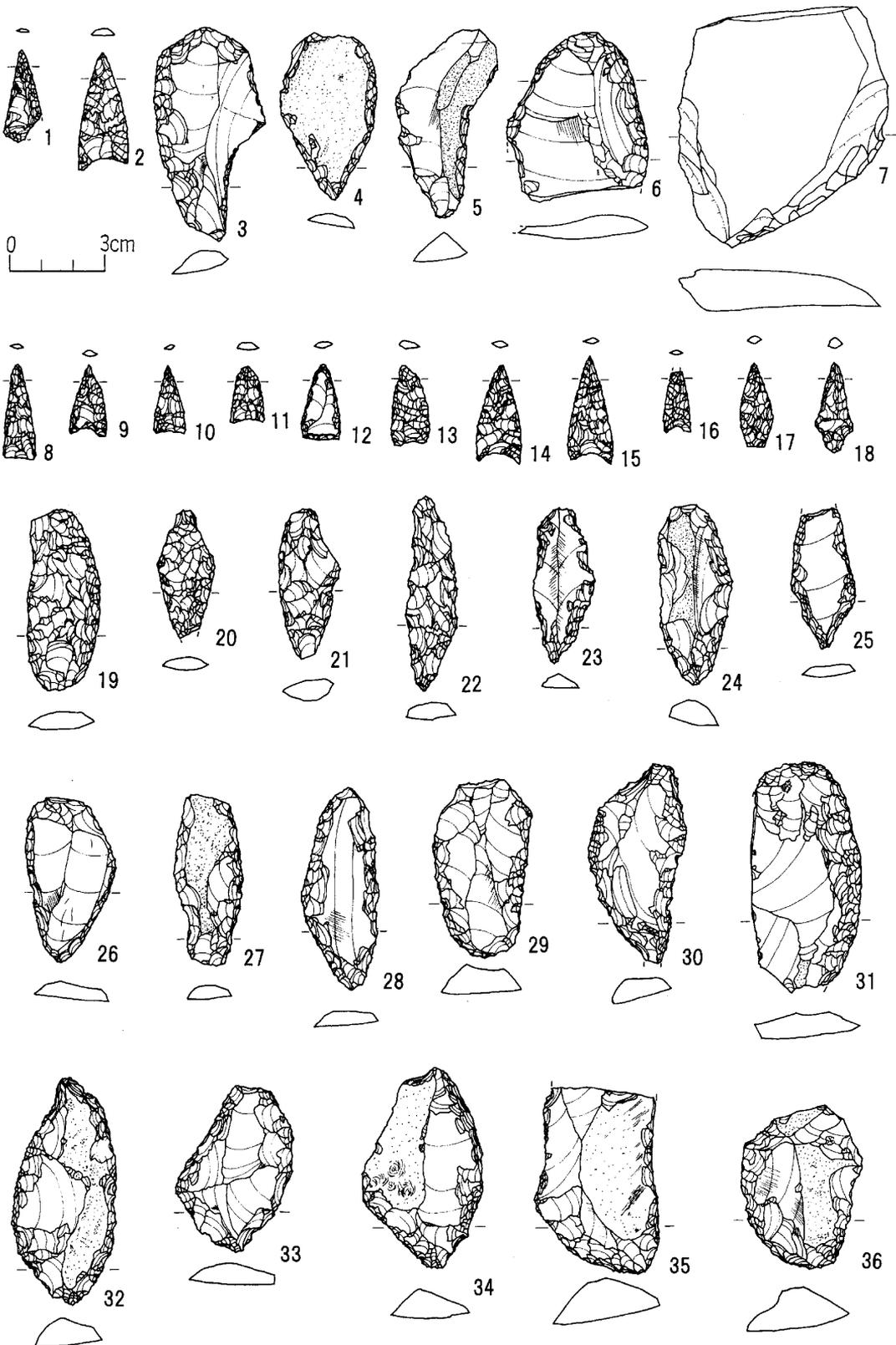


第70図 149号竪穴埋土(1~5)出土土器

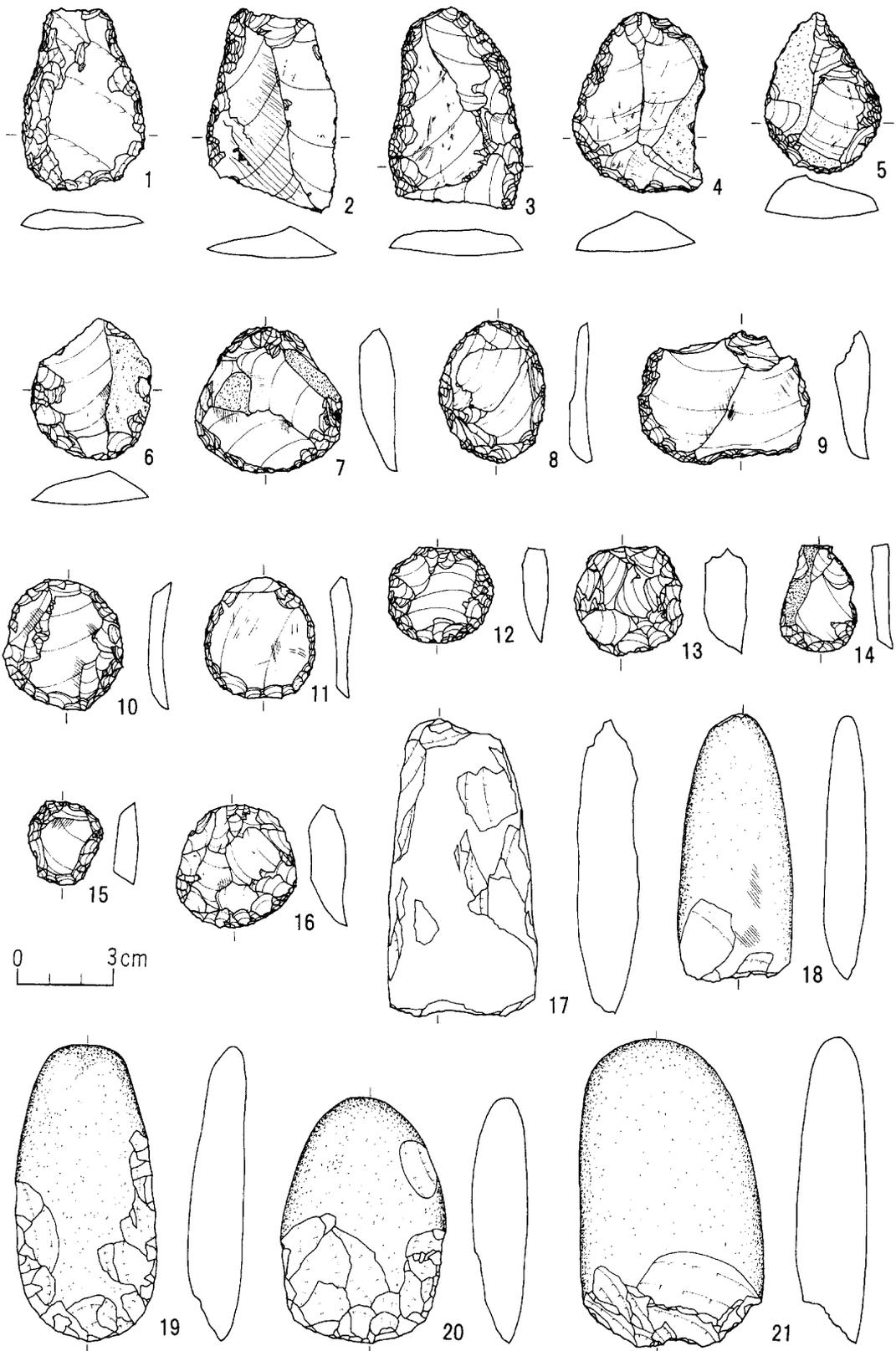


第71图 149号壑穴埋土(1~27)出土土器

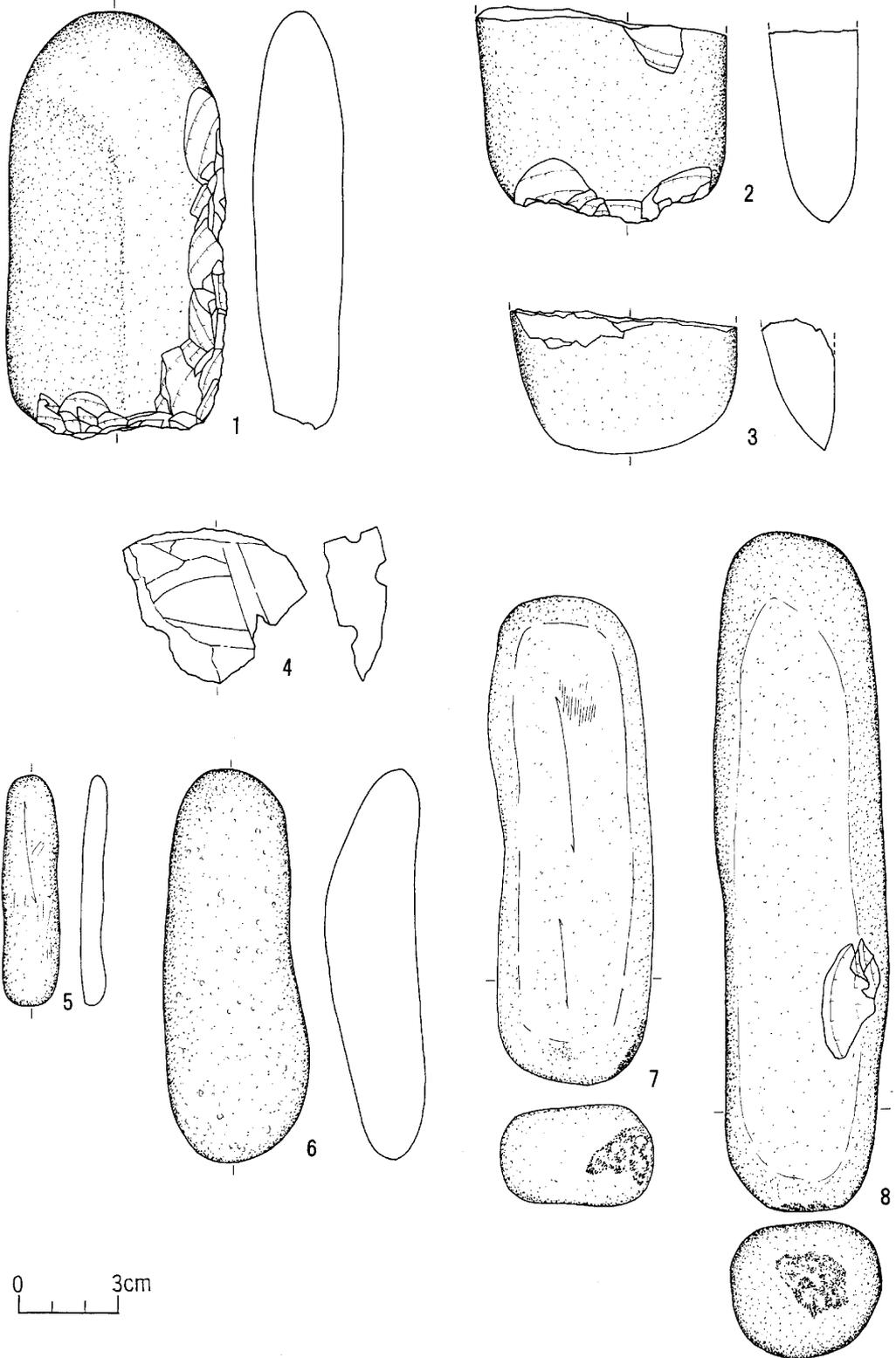
常呂川河口遺跡



第72圖 149号竪穴床面(1~7)・埋土(8~36)出土石器



第73图 149号竖穴埋土(1~21)出土石器



第74图 149号竖穴埋土(1~8)出土石器

位隆帯をもち、半載状施文具による沈線文と刺突文が施される。23は縄線文、24は沈線文をもち円形文が刺突される。25は直線・曲線の沈線文、26は横走沈線文である。27は無文帯に突瘤文と半載状施文具による沈線文が施される。13～27は統縄文初頭であろう。

石器は第72図-1～7が床面出土であり、他は埋土出土。1・2は無茎石鏃。3～7は削器。8～16は無茎石鏃。17・18は有茎石鏃。19～21は両面加工ナイフ。22は片面加工ナイフ。23～33は削器。34～36は搔器。7は玄武岩製、他は全て黒曜石製である。

第73図は埋土出土。1は片面加工ナイフ。2～4は削器。5～16は搔器。17は両刃、18は片刃磨製石斧。19～21は円礫端部の片面を粗く打割した刃部を作出した石斧。1は玄武岩製、17は青色泥岩製、18～21は泥岩製であり、他は黒曜石製である。

第74図は埋土出土。1は側面、2は下端部を粗く打割する。3は両刃磨製石斧。4は表裏面、側面に幅約5～8mmの溝をもつ有溝石器。5～8はたたき石。6は表裏面とも火熱を受け赤化している。1・2・5・7・8は泥岩製、3は斑斕岩製、4は砂岩製、6は安山岩製である。

## 小 括

本竪穴からも統縄文後北C<sub>2</sub>・D式、同C<sub>1</sub>式、宇津内Ⅱb式が床面から出土しているが、出土状況からみると第67図-1の土器は床面密着であり、竪穴はC<sub>2</sub>・D式と考えられる。

(武田 修)

# 149a号 竪 穴

## 遺 構 (第75図, 図版10-1)

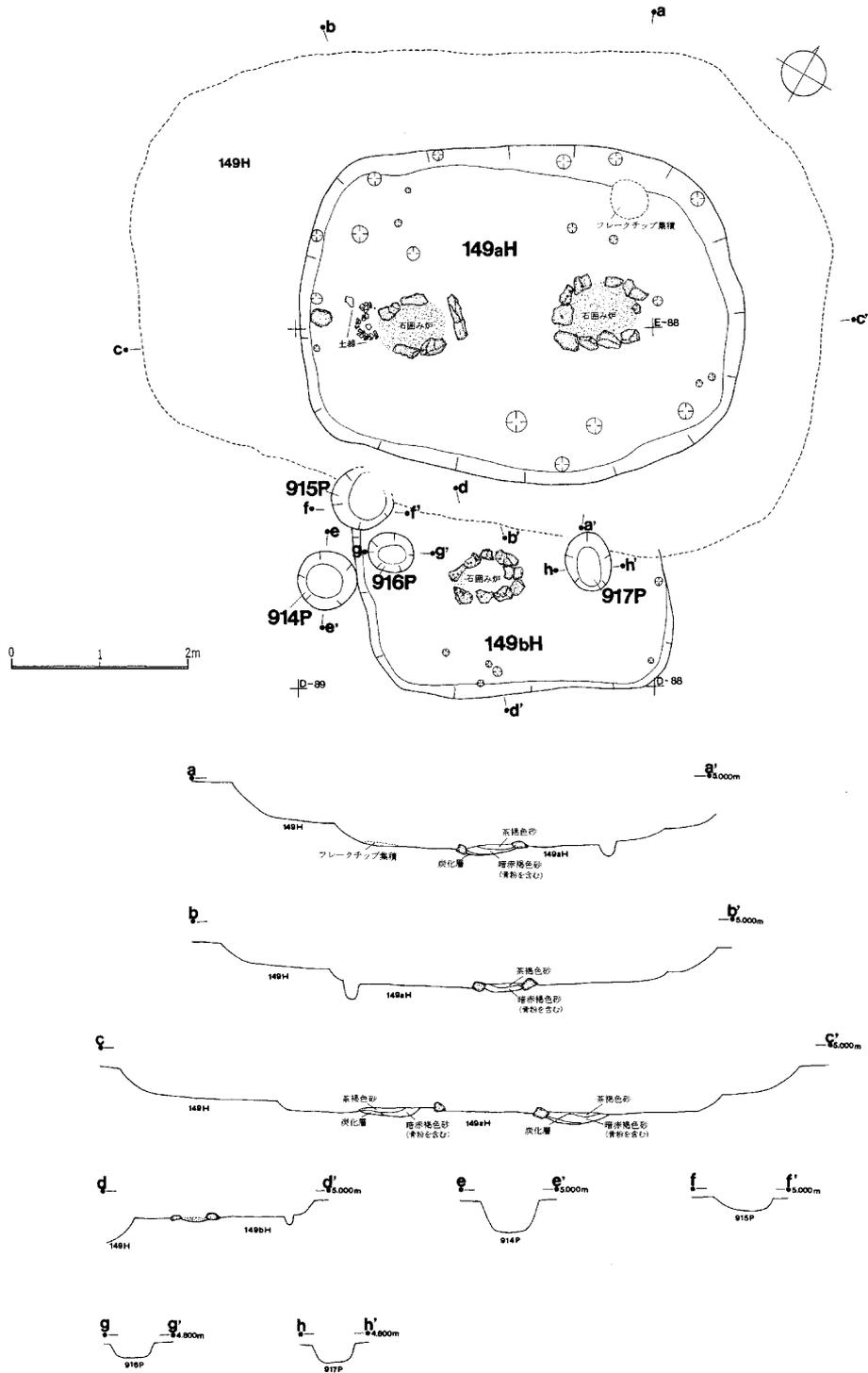
本竪穴は149号竪穴の下面に位置する。規模は長軸約5.00m、短軸約3.70mの長方形を呈する。壁高は149号竪穴の床面から約28cmである。角礫を用いた2基の石囲み炉をもつが、南側と北側の石囲み炉とも礫は全周せず、一端が欠けている。北側の石囲み炉では3個のくぼみ石がみられる。

径約20～28cm、深さ約16～30cmの支柱穴は149号同様に壁側にある。径約6～10cm、深さ約7～12cmの壁柱穴もしくは補助柱はまばらにみられる。北壁隅に黒曜石を主体としたフレーク・チップ集積がある。

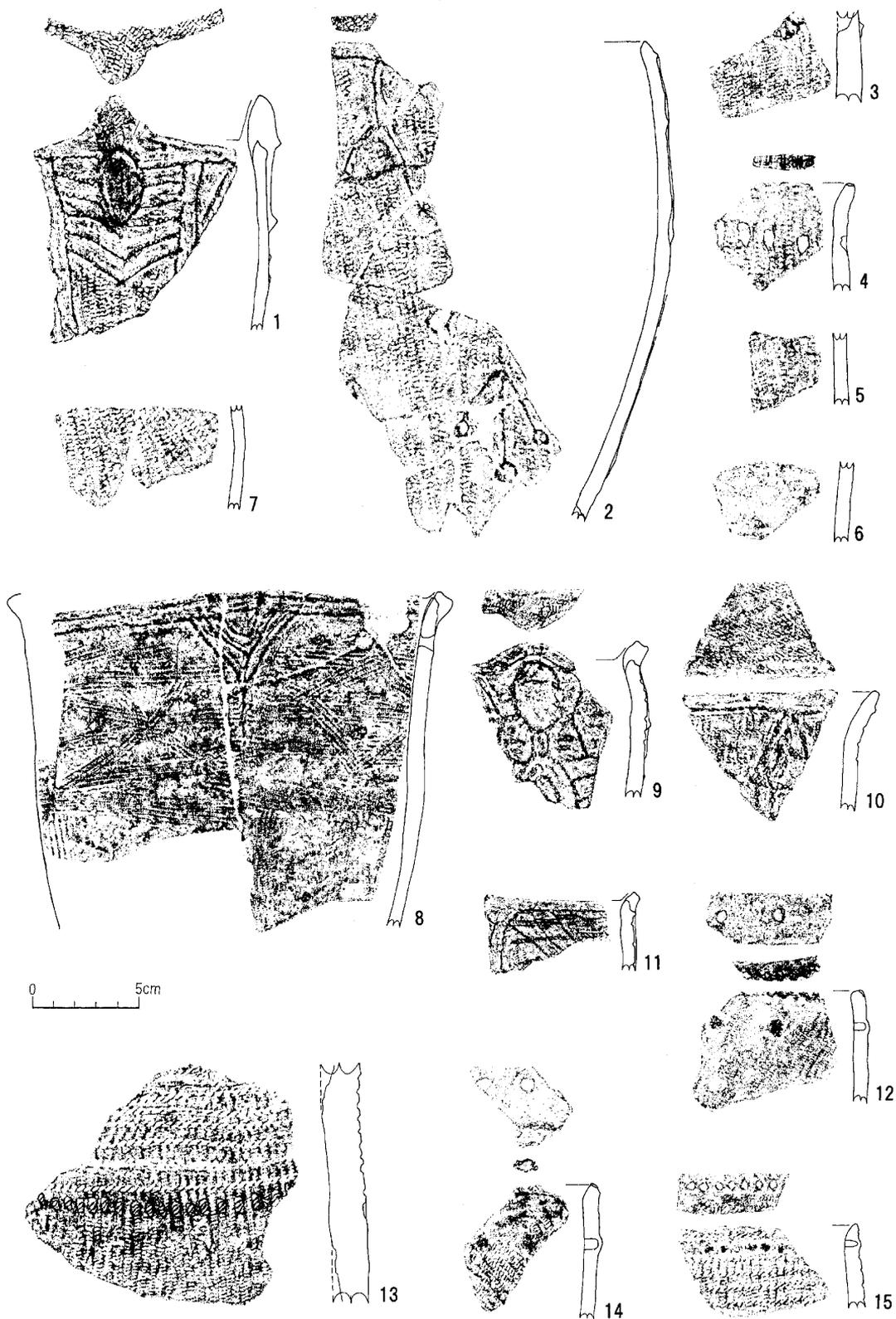
## 遺 物 (第76図, 第77図-1～12, 第78図-1～9)

第76図-1～7は床面出土。1・2は統縄文宇津内Ⅱb式。3は同Ⅱa式。4は口唇部に刻みをもち、口縁下部は下方から刺突文が施される。5～7は統縄文土器の胴部片。8～15は埋土出土。8は統縄文後北C<sub>1</sub>式。9～11は宇津内Ⅱb式。12～15は同Ⅱa式。

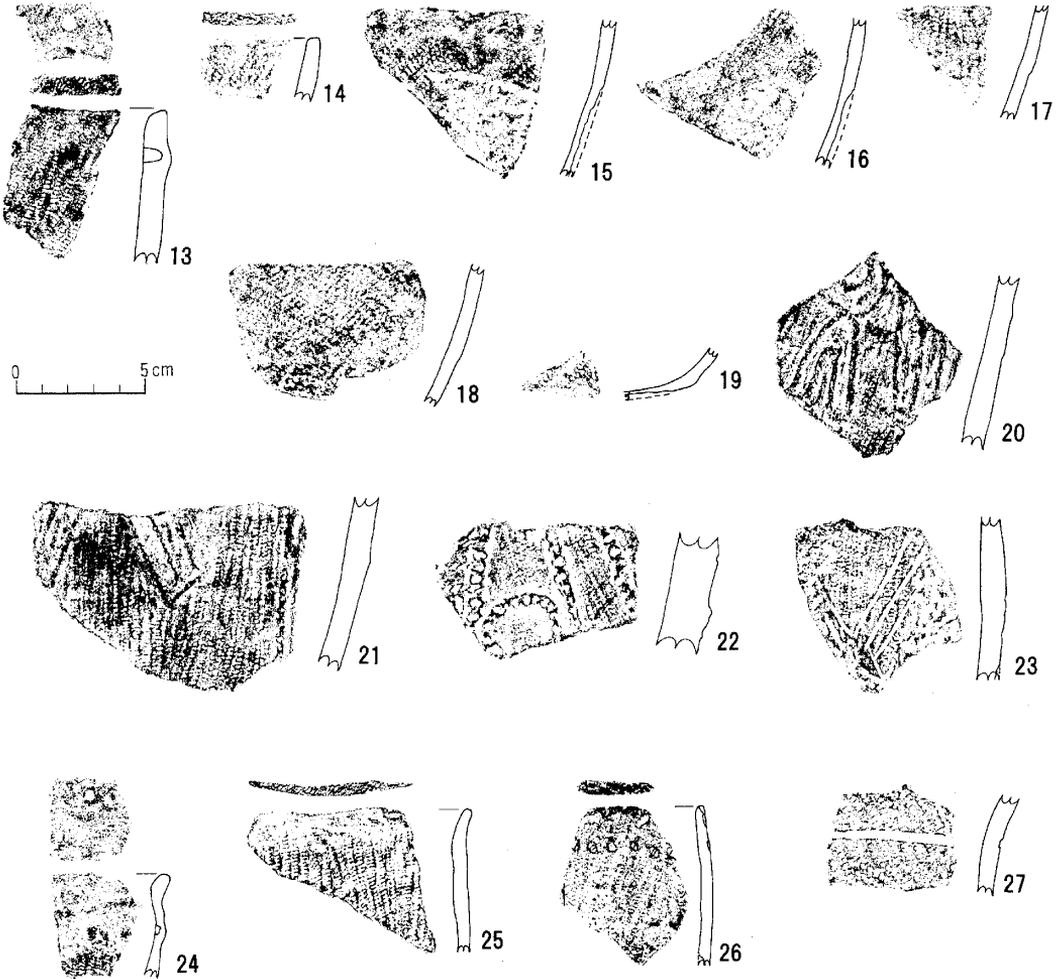
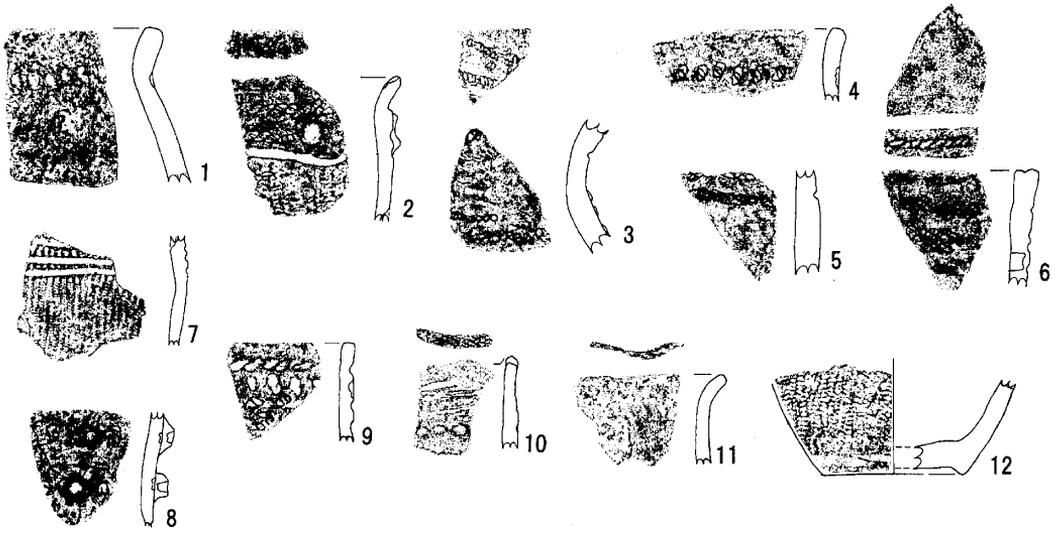
第77図-1～12は埋土出土。1は外反した頸部に縄端圧痕文、2は縄線文と沈線文、円形貼付文が施される。3は縮約した頸部に擬縄隆帯が横走する。4は縄端圧痕文、5・6は縄線文、7は沈線文、8は円形貼付文と円形刺突文がみられる。9は縄線文間に縄端圧痕文をもち、10



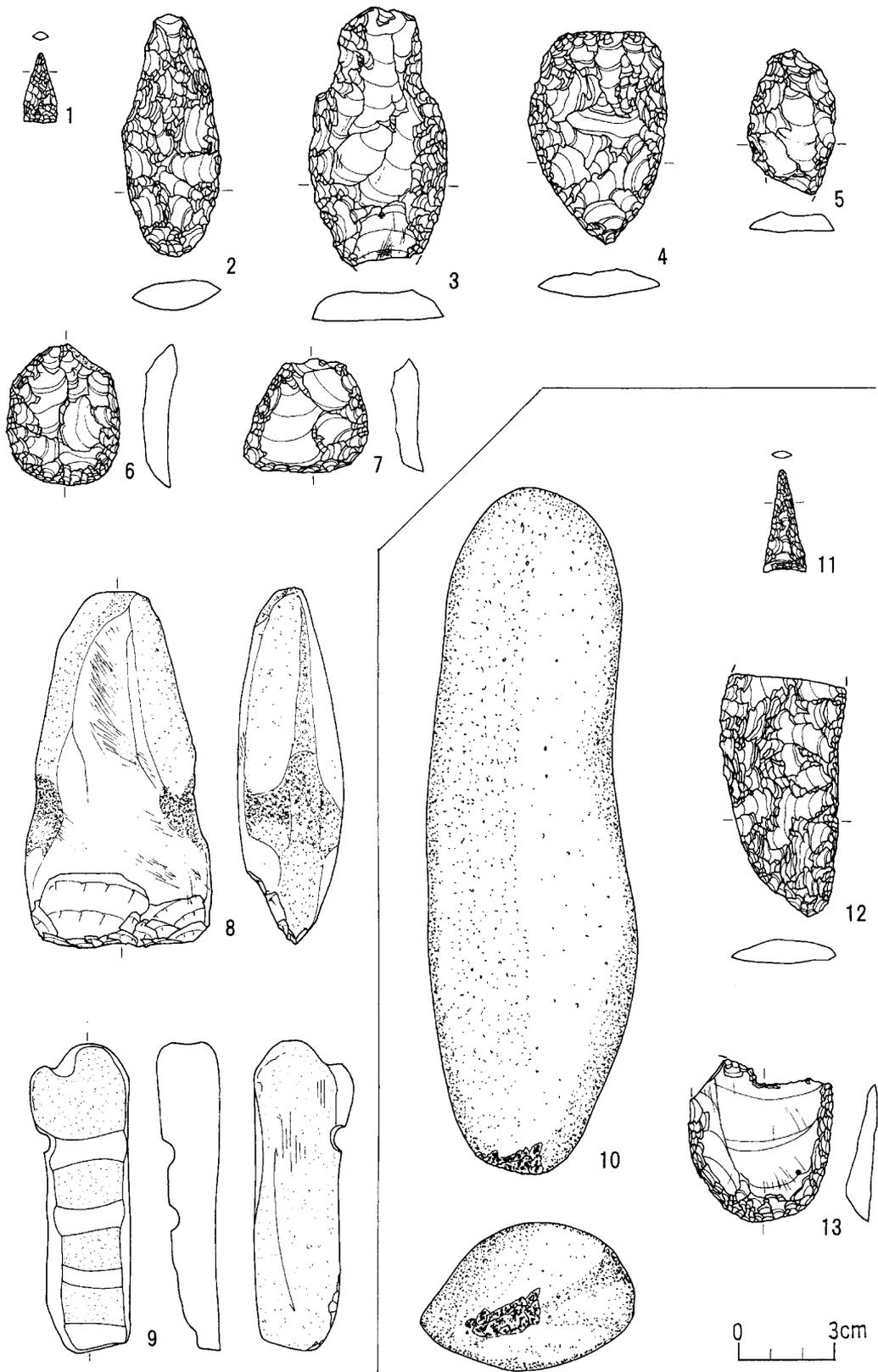
第75図 149a号竪穴、149b号竪穴、ピット914、915、916、917平面図



第76图 149a号竖穴床面(1~7)·埋土(8~15)出土土器



第77図 149a号壑穴埋土(1~12)、149b号壑穴床面(13~19)・埋土(20~27)出土土器



第78图 149a号竖穴埋土(1~9)、149b号竖穴床面(10)·埋土(11~13)出土石器

は櫛歯状の細い沈線文下部に刺突文がみられる。11は無文。12は底部。3、12は統縄文字津内系であり、他はそれより以前の統縄文初頭と思われる。

石器は埋土出土である。第78図-1は無茎石鏃。2は両面加工ナイフ。3・4は片面加工ナイフ。5は削器。6・7は搔器。8は両刃の磨製石斧。刃部のやや上部の両側縁部が凹状に敲打調整されている。固定用の凹状部と思われる。9は有溝石器。平坦面に4溝、上部に1溝、側縁部に1溝ある。8は緑色泥岩製、9は頁岩製であり他は黒曜石製である。

### 小 括

本堅穴は床面出土土器からみて宇津内Ⅱb式と思われる。(武田 修)

## 149b号 堅 穴

### 遺 構 (第75図, 図版10-2)

本堅穴はD88グリッドに位置する。149a号堅穴に西壁側を切られているため正確な規模、形態は不明であるが、残存部から判断して短軸推定2.50mの不整形を呈すると思われる。壁高は確認面から約20cmを測る。

床面のほぼ中央部に角礫を用いた石囲み炉がある。このうち5点はくぼみ石を利用している。内部はあまり焼けていない。

明確な主柱穴はみられず径約8~10cm、深さ約6~12cmの壁柱穴が北壁から東壁にかけてまばらに認められる。

### 遺 物 (第77図-13~27, 第78図-10~13)

第77図-13~19は床面出土。13は統縄文字津内Ⅱa式。14~18は縄文を地文とし、19は底部。14~19は縄文晩期中葉であろう。埋土出土は20~22が統縄文字津内Ⅱb式。23は「V」字状の沈線文が施される。宇津内系であろう。24は宇津内Ⅱa式。25は縦走縄文が施される。26は口縁下部に刺突文、27は胴部に横走沈線文が施される。25~27は統縄文初頭であろう。

石器は第78図-10が床面出土のたたき石であり、11~13は埋土出土。11は無茎石鏃。12は両面加工ナイフ。13は搔器。10は泥岩製であり、他は黒曜石製である。

### 小 括

本堅穴は統縄文字津内Ⅱb式の149a号堅穴に切られているためそれ以前の時期である。床面からは統縄文字津内Ⅱa式、縄文晩期中葉の土器が出土しているのでいずれかの時期であろう。(武田 修)

## 151号 竪 穴

## 遺 構 (第79図, 図版11, 図版12-1)

本竪穴はG92グリッドに位置し、一辺約3.80mの方形を呈する。各壁の長さは東壁が約3.90m、南壁が約3.40m、西壁が約3.60m、北壁が約3.80mを測る。埋土中の表土と黒色土層の間には樽前a火山灰と思われる火山灰が検出されている。壁高は確認面から約50cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。床面を覆っている黒色砂中にはカヤ材も検出された。

多くの炭化材は竪穴の中央に向かって倒れた状態で認められた。竪穴中央には約60×50cmの範囲で炉跡の焼土が検出され、焼土の中からは少量であるが骨片が検出されている。

カマドは東壁中央に構築され、構築材は粘土であるが、北側の袖部に礫が6点検出されていることから袖部には礫が用いられていたものと考えられる。煙道の長さは約80cmであり、斜めに立ち上がる。

柱穴は主柱穴が16～20cm、深さ18～27cmのものが4本、壁柱穴は西壁際に径8～21cmのものが4本、東壁際に径10～12cm、深さ9～20cmのものが20本確認されている。床面からは遺物は出土していないが、埋土中から第80図-1～3の土器が一括出土している。

## 遺 物 (第80図, 第81図, 第82図, 第83図-1～4, 図版12-2～5)

遺物はすべて埋土出土。第80図-1は口縁部に2列の短刻文を施し、鋸歯状文と縦位の短刻線を巡らす。口径27.5cm、器高は底部が欠失しているため不明である。2は口径16.2cm、器高15.5cmの無文の土器。底部に板目状圧痕文がみられる。3は口径19.2cm、器高10.6cmの高杯。矢羽根状文を巡らし、3～4本1組の縦位の刻線を7箇所に施す。1～10はすべて擦文土器。

第81図-1～5は擦文土器。3は杯の底部。4は高杯の底部。6・7は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。7は注口土器。8・9は統縄文後北C<sub>1</sub>式。10・11は宇津内Ⅱb式。10は口径17cm、器高23cm。口唇部に一対の大突起と2個一対の小突起をもち、胴部に同心円文を配す。それぞれの同心円文は擬状隆帯で連結し、同心円文の下には隆帯を垂下させる。

第82図-1～5は突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。6・7は統縄文初頭。6は吊り耳状の突起をもち、4～5条の縄線文を巡らす。8は下田ノ沢Ⅱ式。9は宇津内系の底部。10・11は縄文晩期。

石器はすべて埋土出土。第83図-1は無茎石鏃。2・3は削器。4は搔器。いずれも黒曜石製。

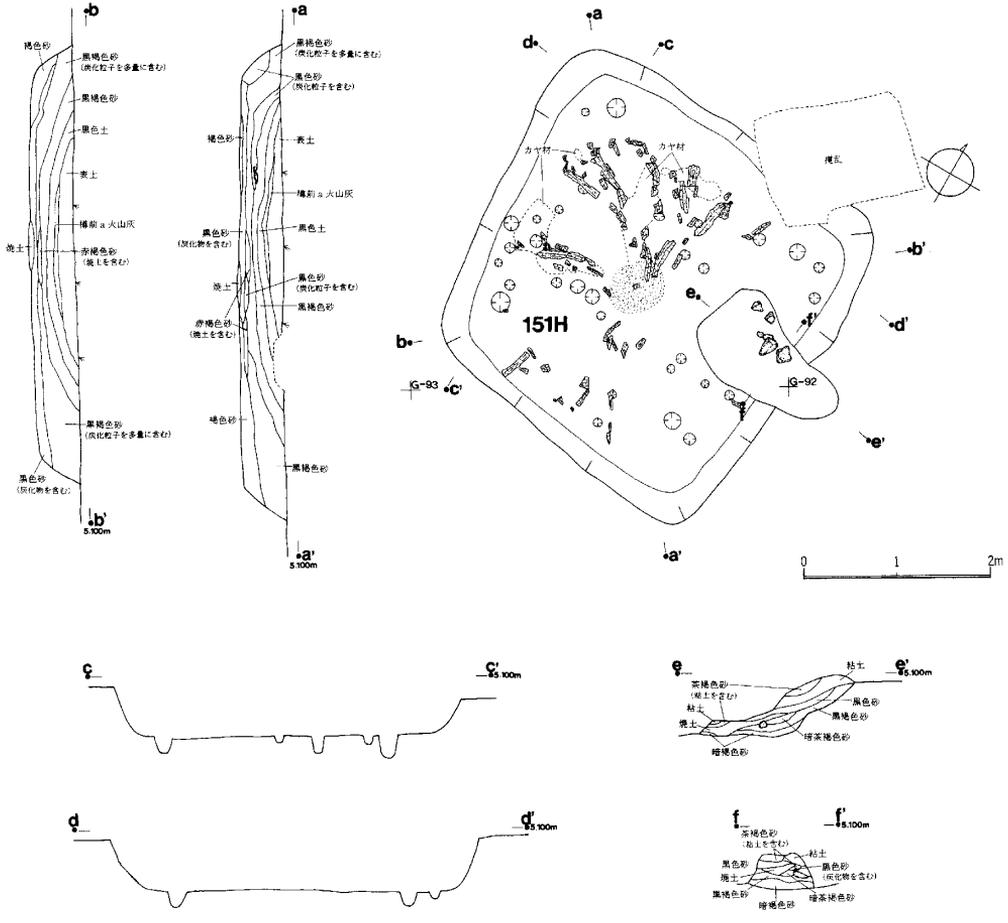
## 小 括

本竪穴は擦文期の竪穴で床面直上に多くの炭化材が検出されているところから火災住居と考えられる。

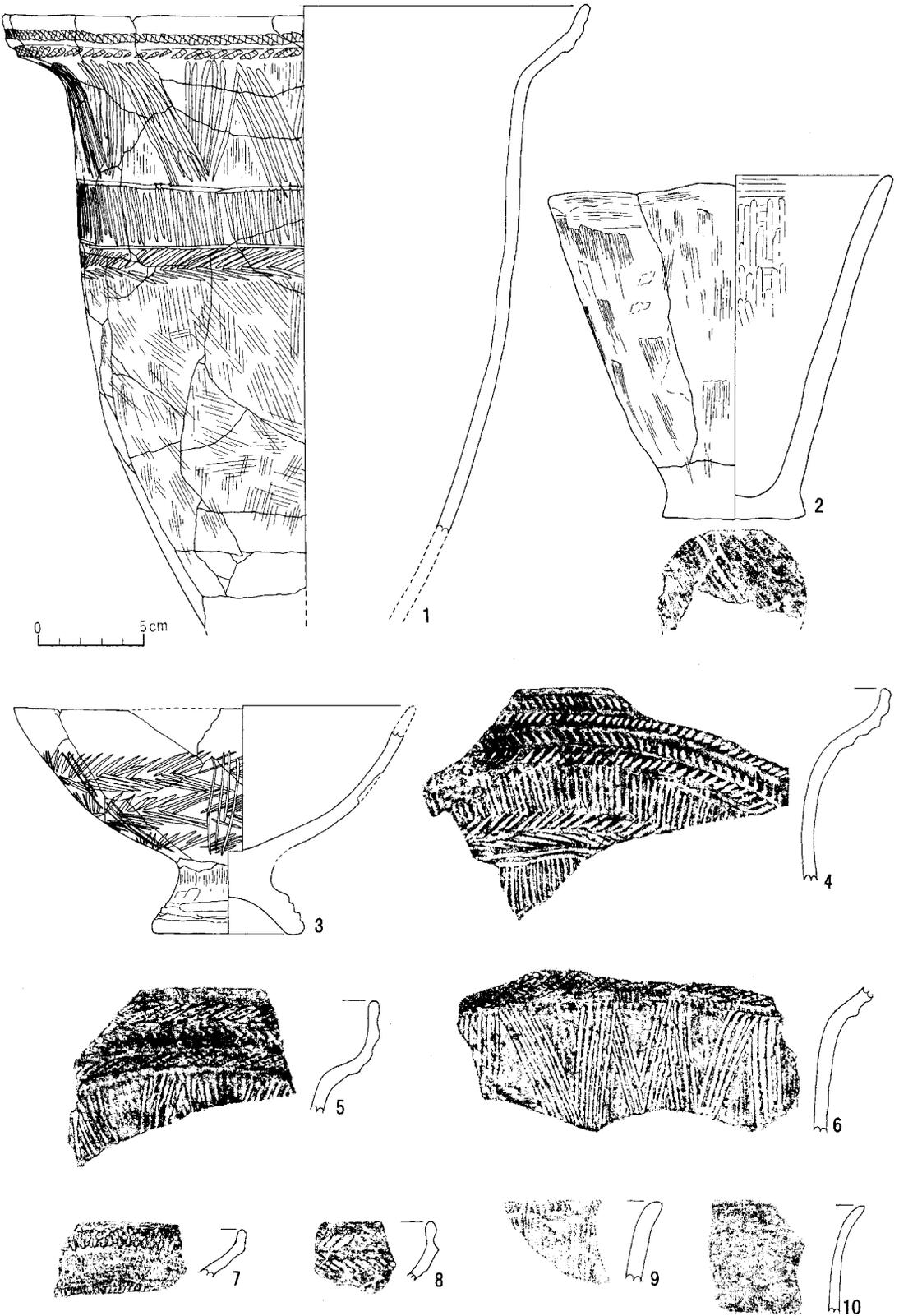
時期は埋土出土の土器から宇田川編年後期に比定されるが床面からの出土土器がないことから断定はできない。

(佐々木 覚)

常呂川河口遺跡



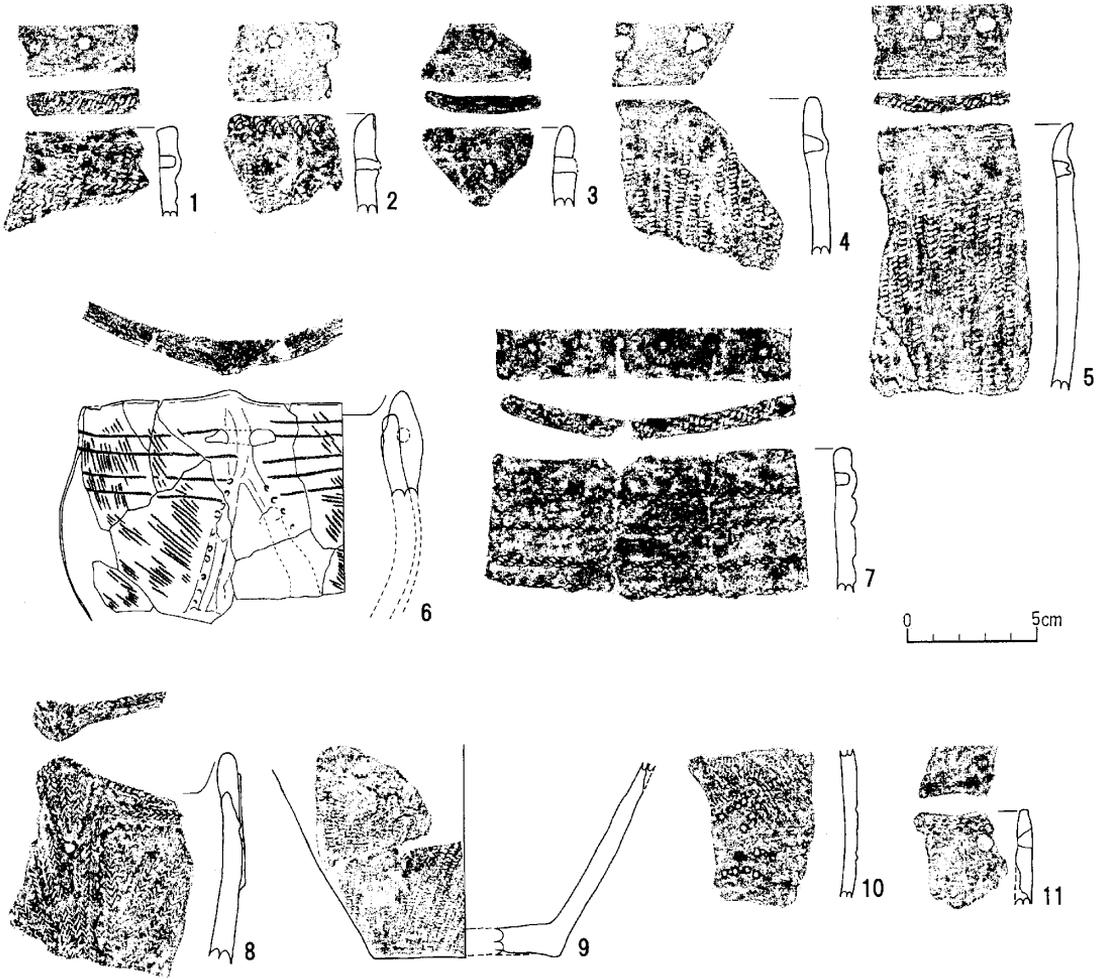
第79図 151号竪穴平面図



第80图 151号竖穴埋土(1~10)出土土器

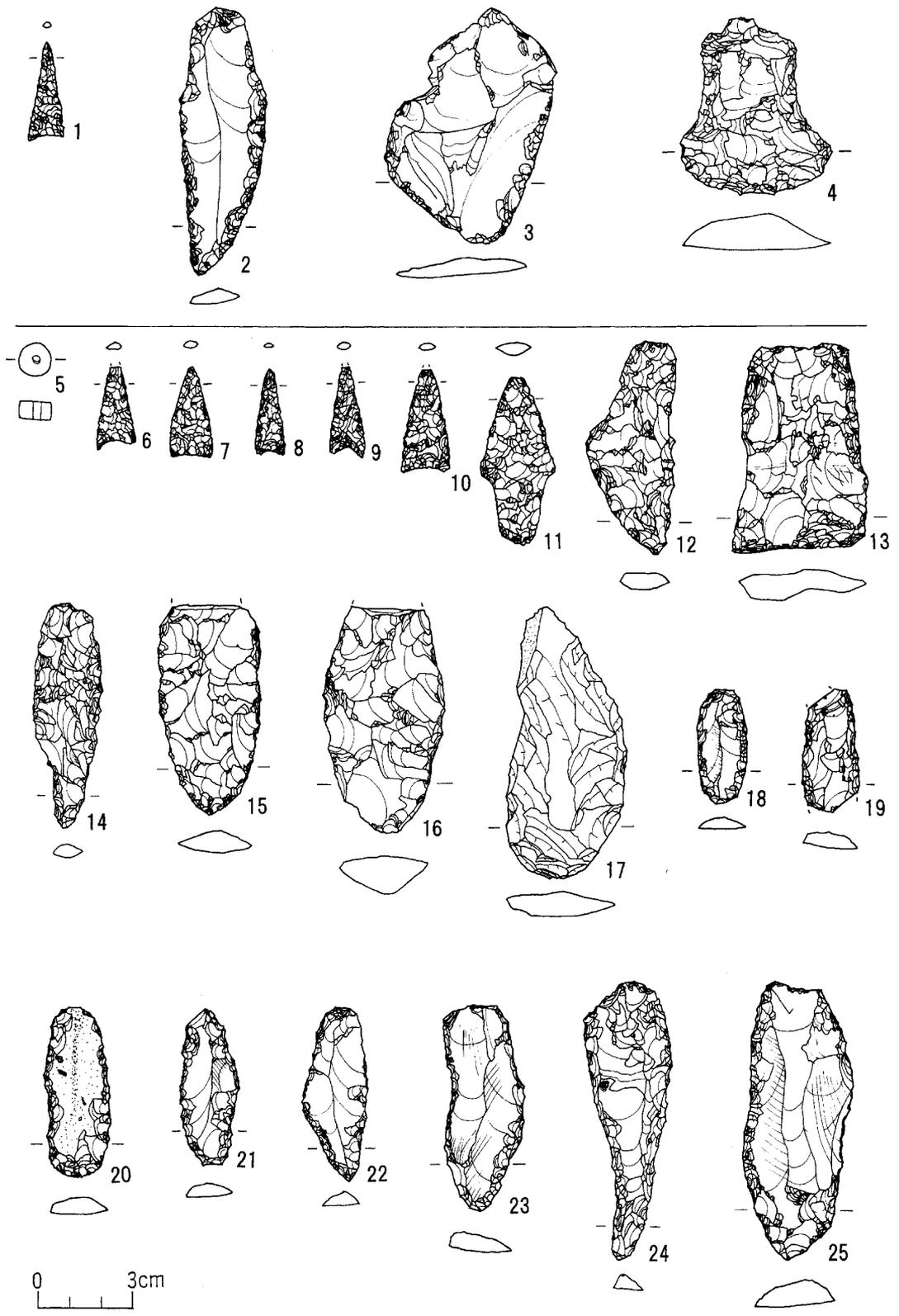


第81图 151号竖穴埋土(1~11)出土土器



第82图 151号竖穴埋土(1~11)出土土器

常呂川河口遺跡



第83図 151号堅穴埋土(1~4)、151a号堅穴焼土(5)・埋土(6~25)出土石器・琥珀玉

## 151a号 竪 穴

## 遺 構 (第84図, 図版-13-1)

本竪穴は151号竪穴の西側に検出された。表土と黒褐色砂層の間に樽前 a 火山灰と思われる火山灰が検出され、黒褐色砂下層部からは摩周 b 火山灰と思われる火山灰が検出された。埋土の黒色砂層と床面直上の褐色砂層の間はほぼ中央付近から径40cmの範囲で焼土が検出され、その西側に接して130×50cmの範囲にも焼土が検出された。どちらの焼土中からも骨片が多量に検出されている。西側の焼土からは粘土が検出されている。また、第86図-4、第87図-1の土器が中央の焼土の北側と東側から一括出土している。

規模は長軸約5.20m、短軸は東壁が151号竪穴に切られているため不明であるが約4.50mの楕円形を呈するものと思われる。南西側の壁の一部は検出できなかった。壁高は確認面から約40cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。竪穴のほぼ中央には大小の礫5個に囲まれた約70×50cmの範囲で炉の焼土が検出され、焼土の中から骨片と琥珀製の玉が1点出土した。

柱穴は径14~16cm、深さ16~18cmの主柱穴と思われるものが3本とその他に径8~16cm、深さ8~18cmのものが13本検出された。炉跡の東側の床面には黒曜石のフレークチップの集積が確認された。

## 遺 物 (第85図, 第86図, 第87図, 第83図-5~25, 第88図, 図版13-2・3)

床面からは第85図-1の同心円をもつ続縄文宇津内Ⅱb式が出土している。埋土からは2が高杯の底部。3~8は続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。

第86図-1も後北C<sub>2</sub>・D式。2・3は後北C<sub>1</sub>式。4は一对の吊り耳と2個一对の小突起をもち、吊り耳と小突起の下に同心円文を配す。それぞれの同心円文は擬状隆帯で連結する。口径22.3cm、器高は底部が欠失しているため不明。宇津内Ⅱb式。

第87図-1は一对の大突起と2個一对の小突起をもち、下に擬縄隆帯を垂下させる。口縁部に6条の縄線文を巡らす。口径31cm、器高は底部が欠失しているため不明である。宇津内Ⅱb式。2~4も宇津内Ⅱb式。5・6は宇津内Ⅱa式。7~9は宇津内式の底部。10・11は縄文晩期。12は縄文中期。

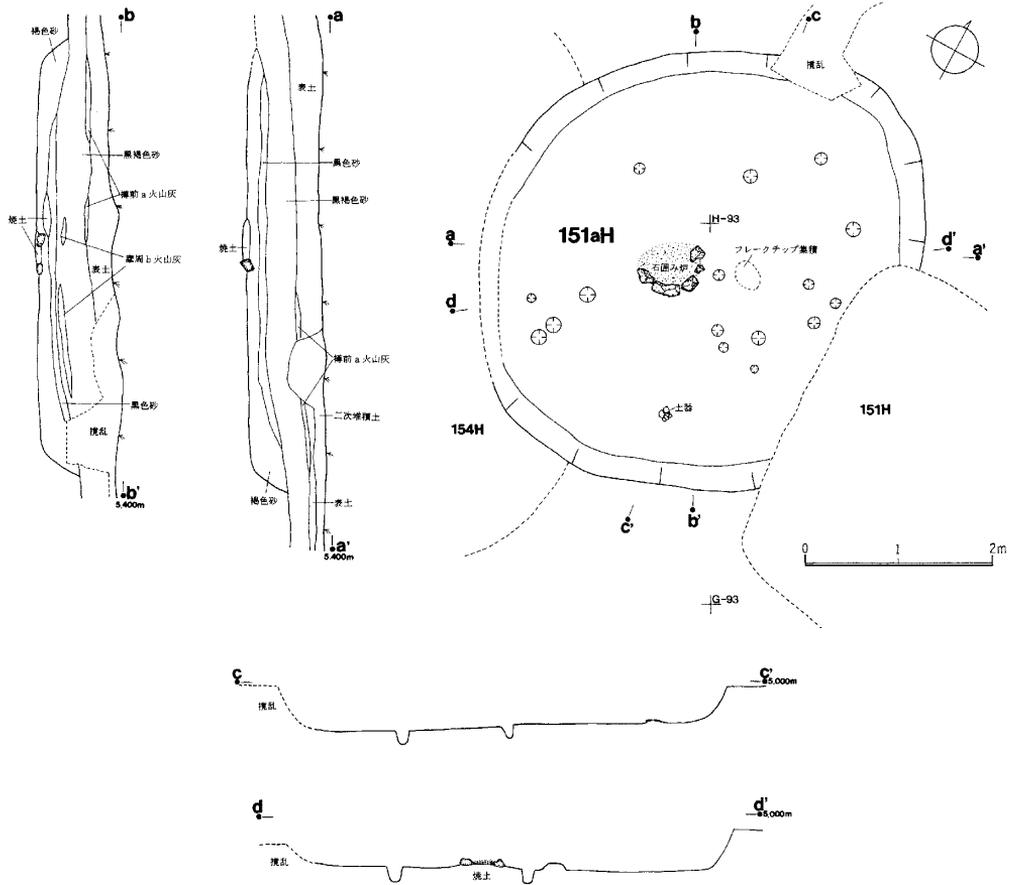
第83図-5は床面炉跡の焼土中から検出された琥珀玉。石器はすべて埋土出土。6~10が無茎石鏃。11は石槍。12~17はナイフ。17は玄武岩製。18~25は削器。17以外は黒曜石製。

第88図-1~11は削器。12~15は搔器。1~15は黒曜石製。16は泥岩製の鑿。17は泥岩製のたたき石。18は砂岩製のくぼみ石。

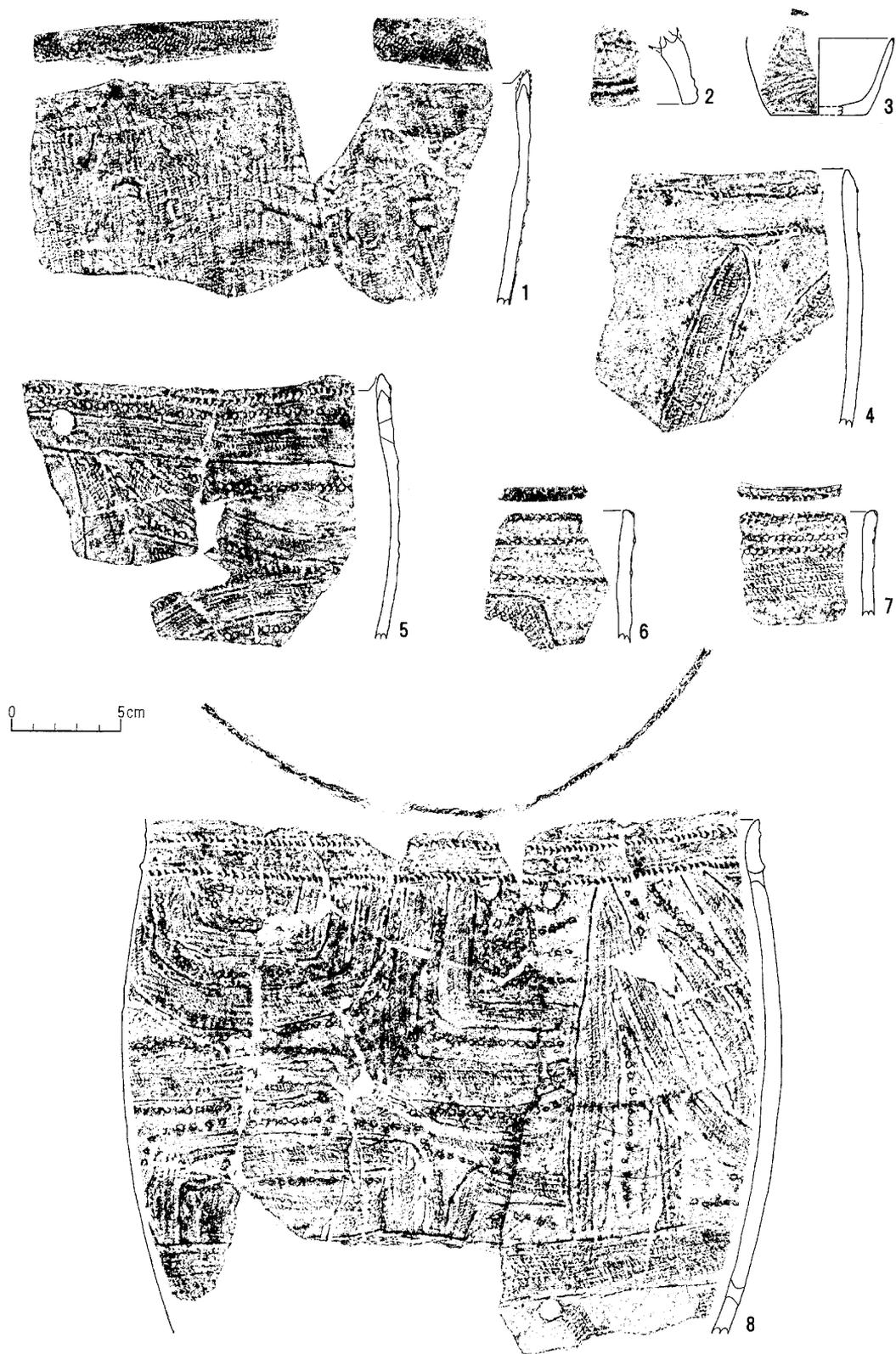
## 小 括

本竪穴は床面からの出土土器から続縄文宇津内Ⅱb式期と考えられるが、1点のみであることから断定はできない。(佐々木 覚)

常呂川河口遺跡



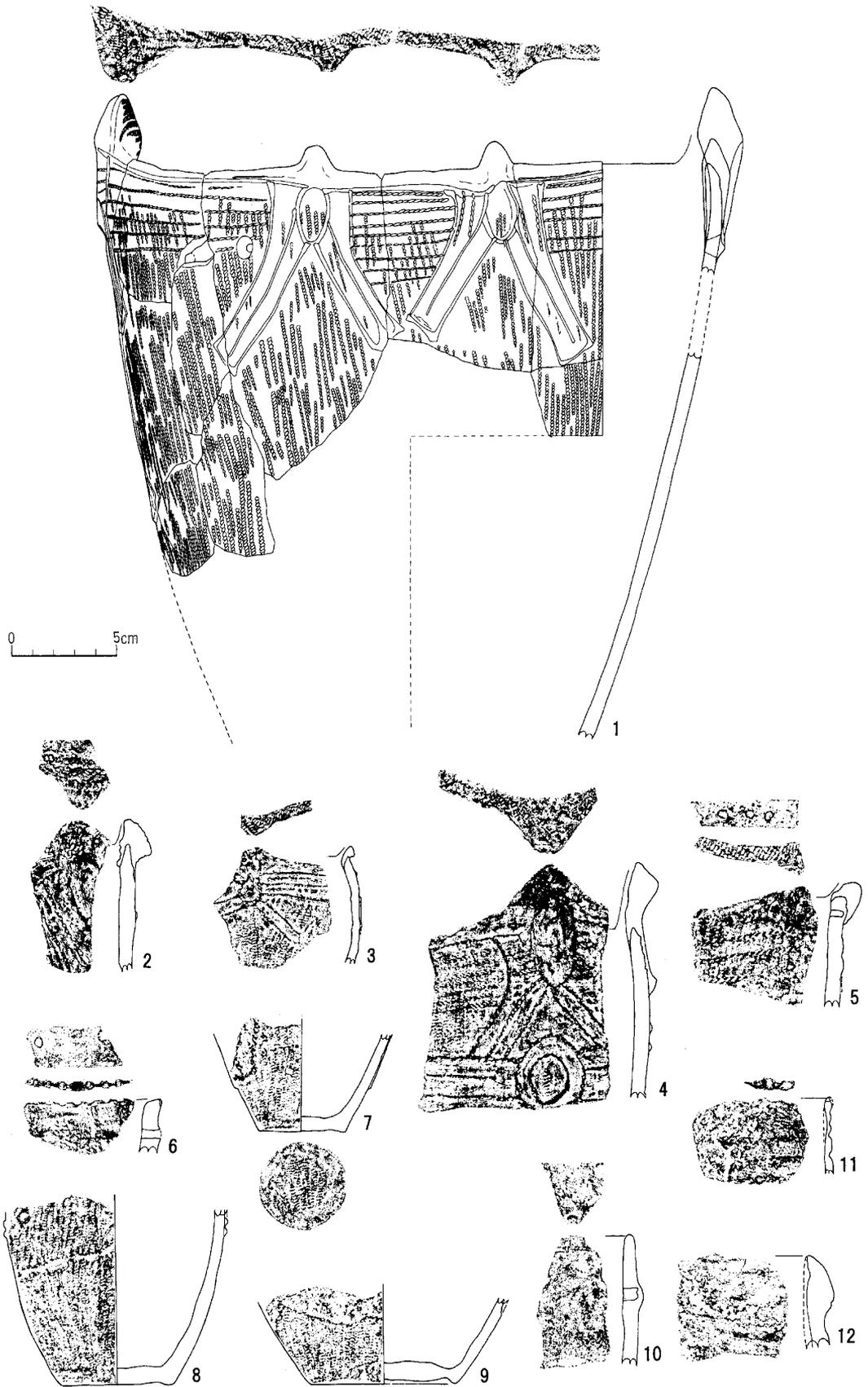
第84図 151a号竪穴平面図



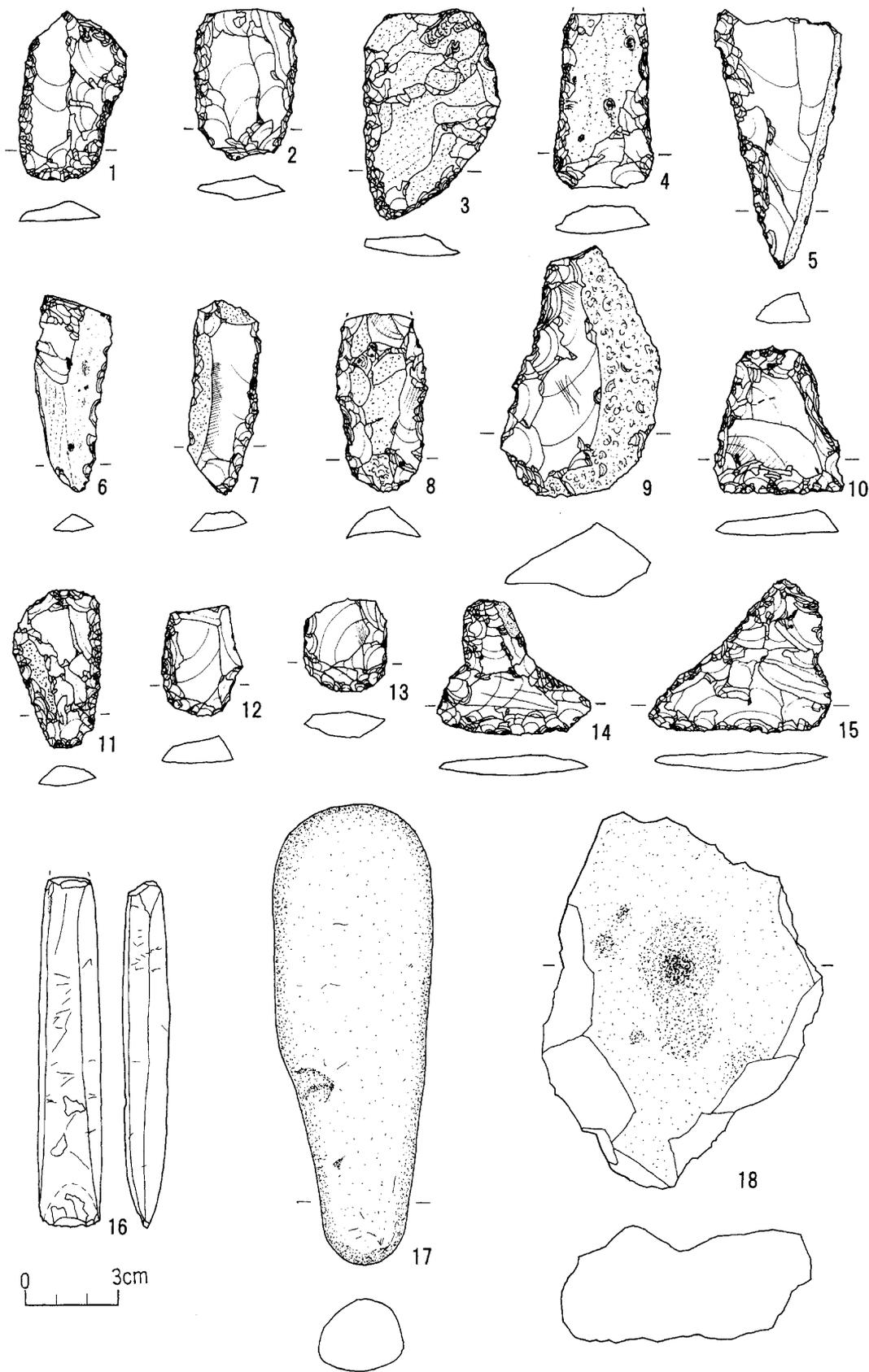
第85图 151a号竖穴床面(1)・埋土(2~8)出土土器



第86图 151a号竖穴埋土(1~4)出土土器



第87图 151a号竖穴埋土(1~12)出土土器



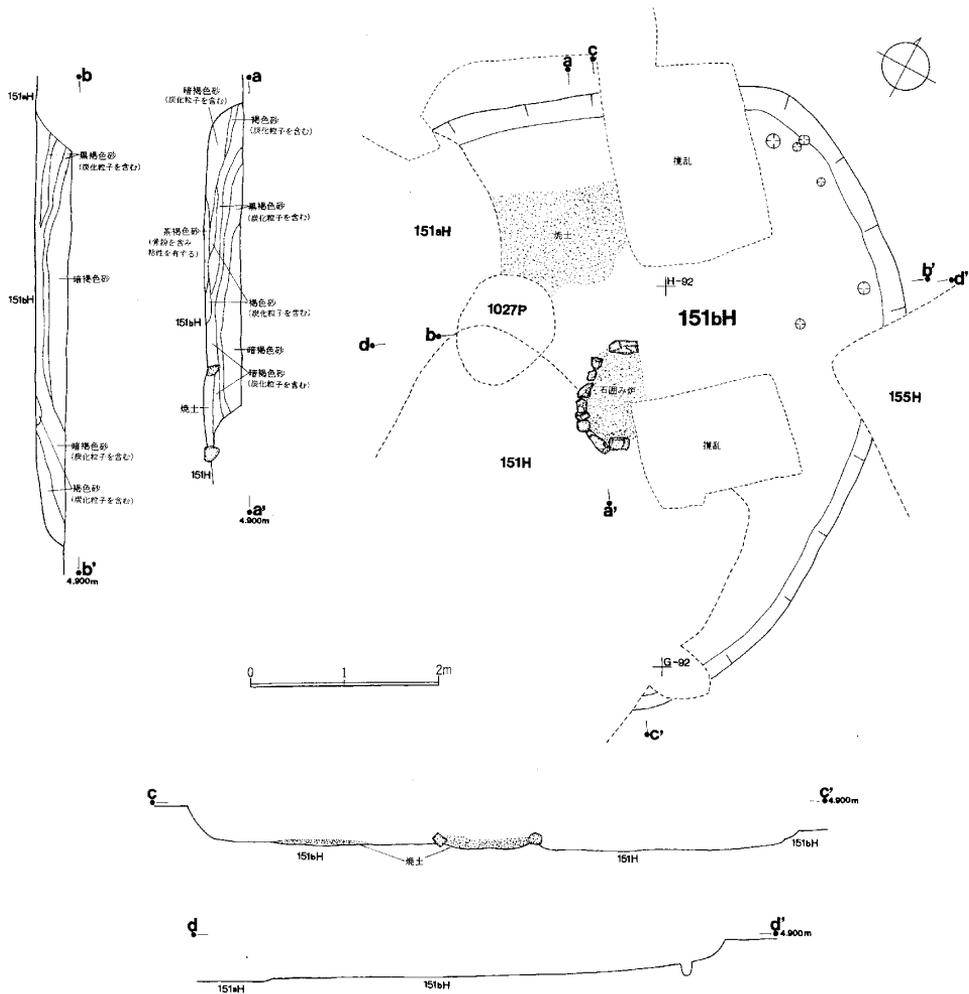
第88图 151a号竖穴埋土(1~18)出土石器

# 151b号 竪穴

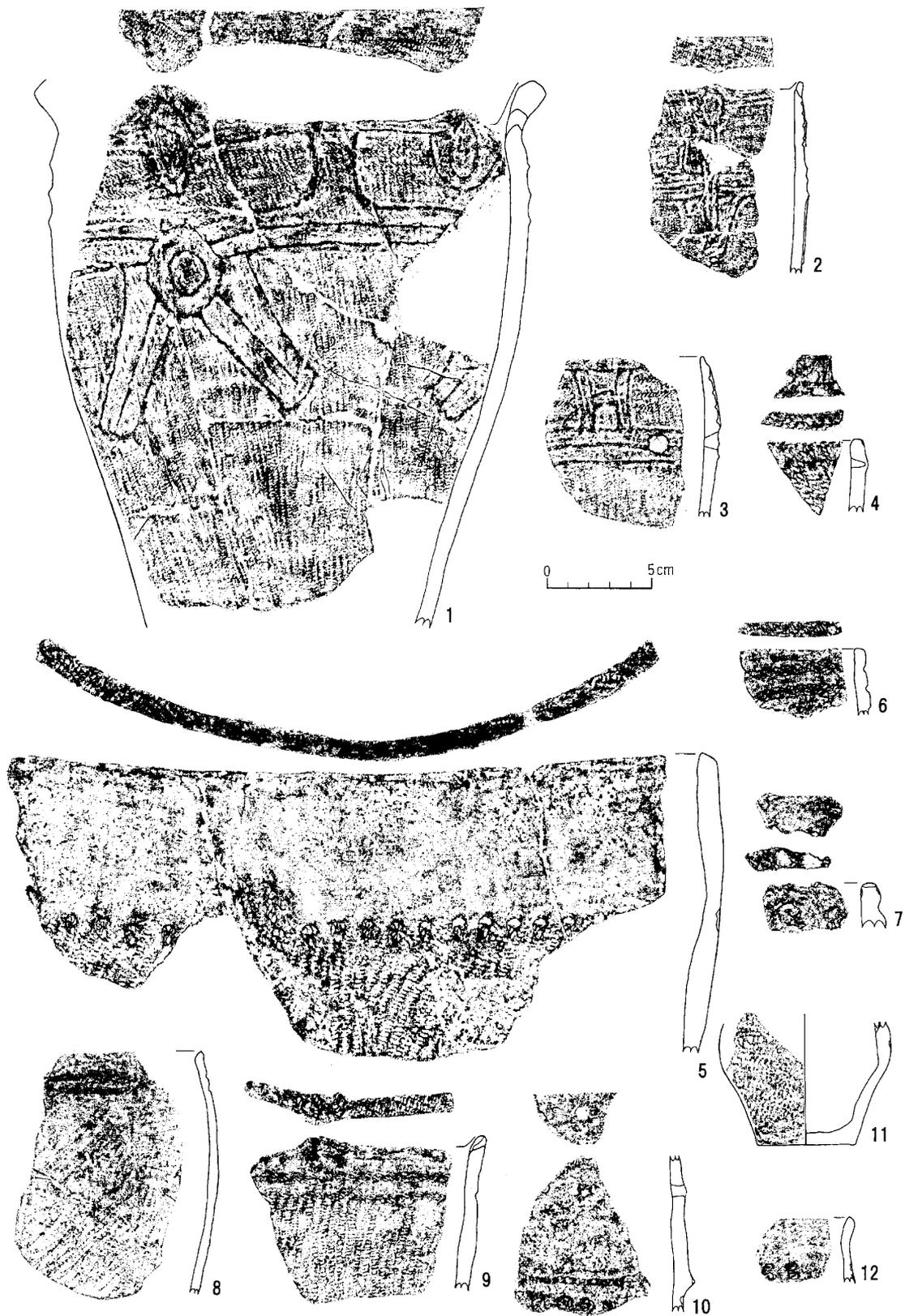
## 遺 構 (第89図, 図版13-4)

本竪穴は151号竪穴の北側に検出された。規模・形態は不明であるが、壁高は確認面から約40cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。竪穴の南側を151号竪穴に、西側を151a号竪穴に、東壁の一部を155号竪穴に切られており、北壁の一部も攪乱を受けている。

柱穴は径10~14cm、深さ7~16cmのものが6本確認された。炉跡は多少攪乱を受けているが大部分が残されており、攪乱を受けた東側を除いて9個の礫に囲まれている炉の焼土中には骨片が多量に含まれている。炉の北西側の床面には粘性をもつ焼土と多少骨片を含んだ茶褐色砂が検出された。床面精査中に竪穴西側の床面からピット1027が検出されている。



第89図 151b号竪穴平面図



第90图 151b号竖穴埋土(1~12)出土土器

遺物 (第90図, 第91図-1~3)

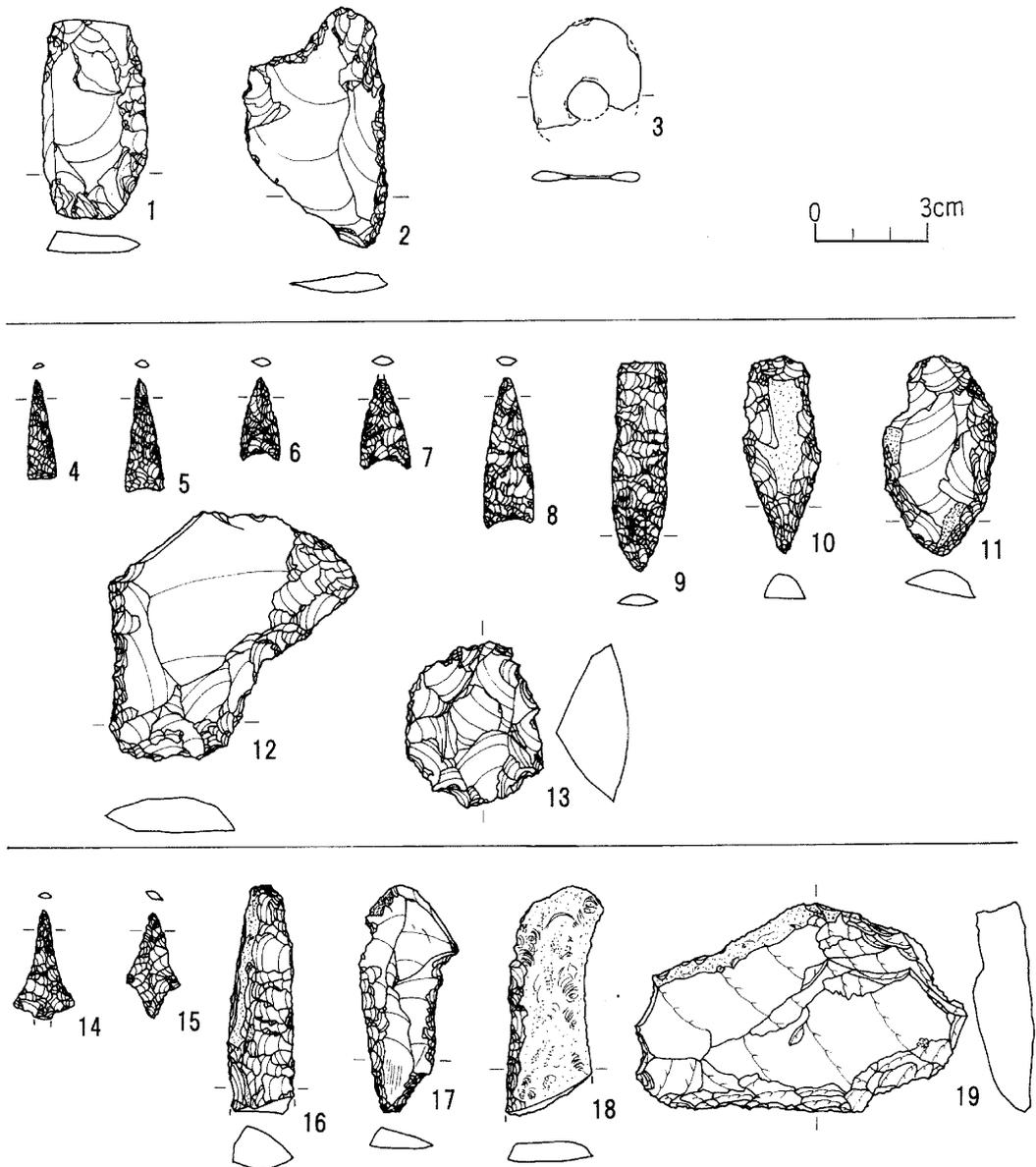
床面からの出土遺物はない。埋土から第90図-1~3は統縄文字津内Ⅱb式。4は宇津内Ⅱa式。5~11は統縄文初頭。12は縄文晩期中葉。

石器は埋土出土で第91図-1・2が黒曜石製の削器。3が硬質頁岩製の装飾品。

小括

本竪穴は床面出土の遺物がないため時期は不明である。

(佐々木 覚)



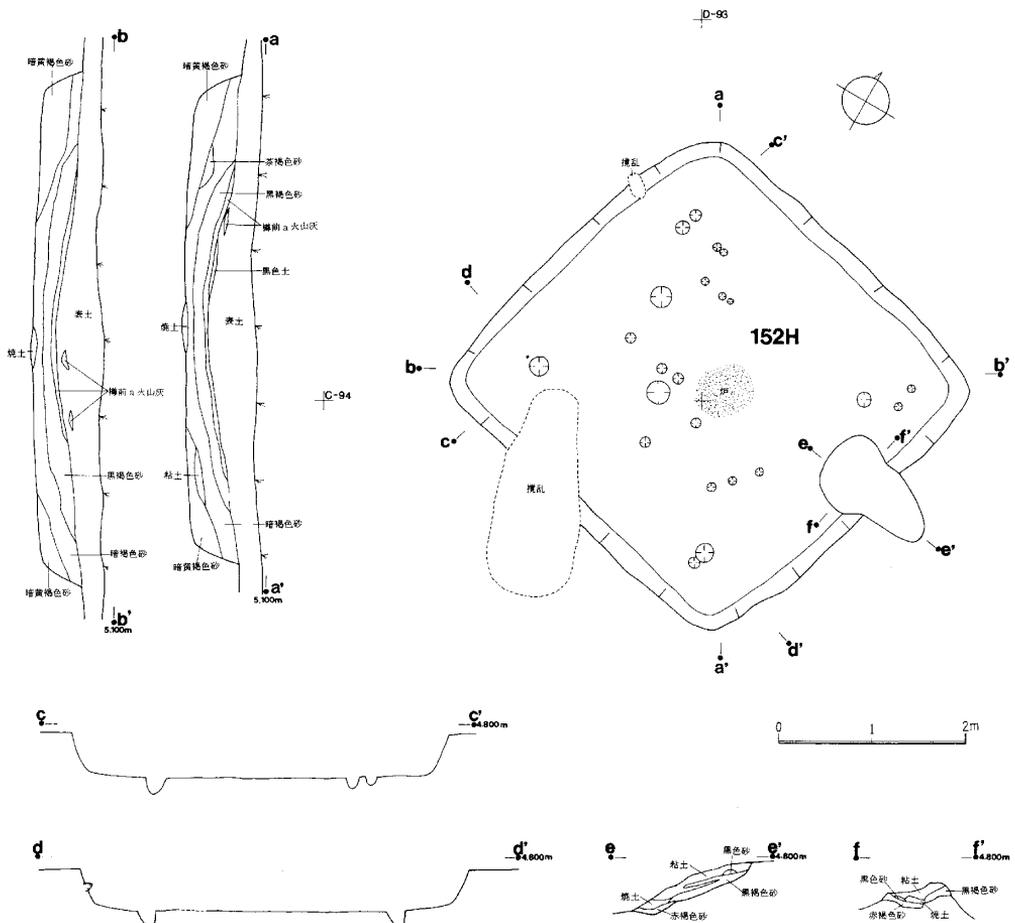
第91図 151b号竪穴埋土(1~3)、152号竪穴埋土(4~13)、153号竪穴埋土(14~19)出土石器・石製品

# 152号 竪穴

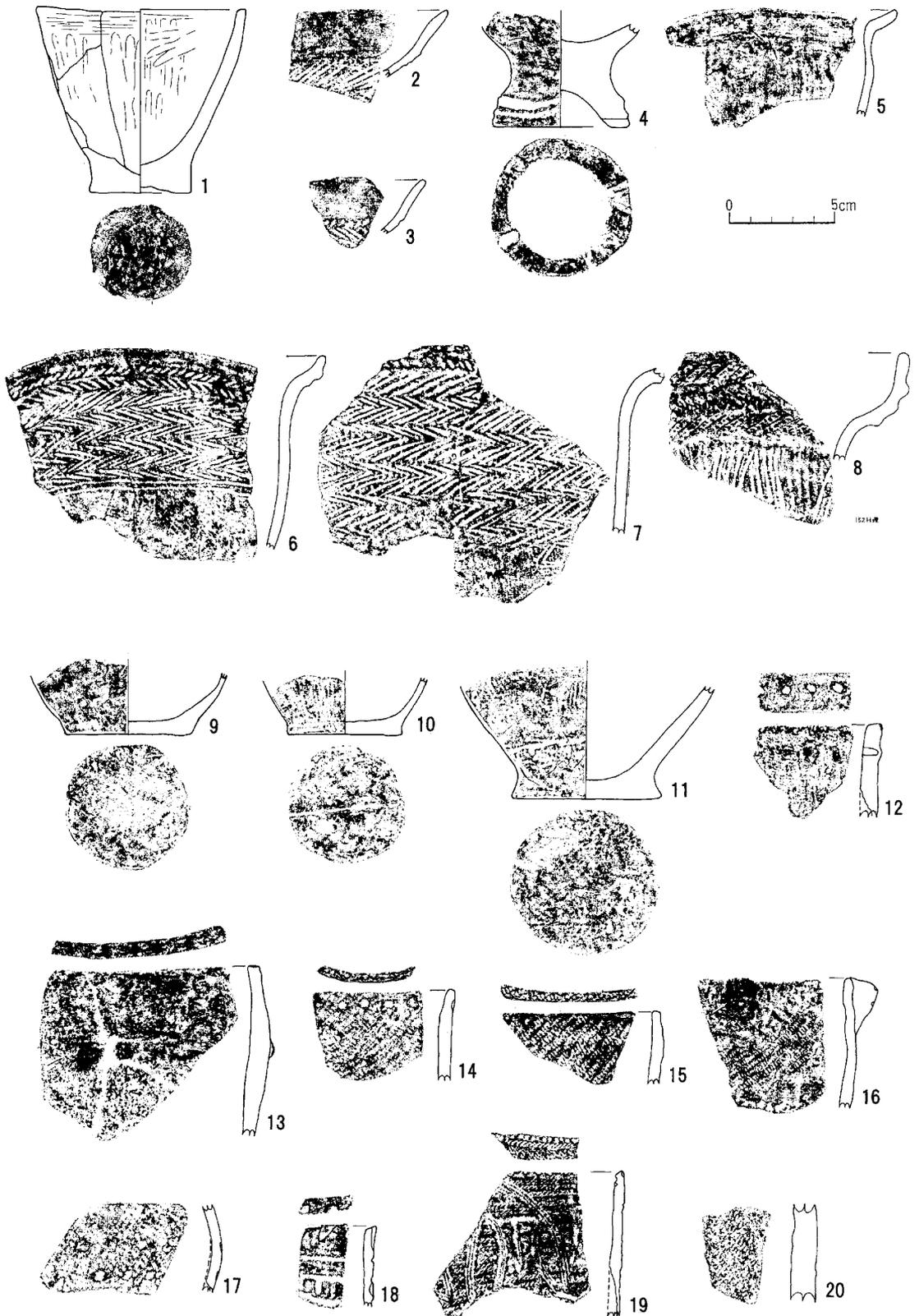
## 遺 構 (第92図, 図版14-1)

本竪穴は B92・93, C92・93グリッドにかけて検出された。各壁の長さは東壁が約3.90m、南壁が約4.00m、西壁が約3.90m、北壁が約4.00mを測る。埋土中の表土と黒褐色砂層の間の窪んだ部分には樽前 a 火山灰の堆積がみられる。竪穴の南壁の一部は攪乱を受けている。壁高は確認面から約45cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。竪穴の中央には約60×50cmの範囲に炉跡の焼土が確認され、焼土中からは骨片が検出された。

カマドは東壁中央よりやや北側に構築され、構築材は粘土である。煙道の長さは約80cmで緩やかに立ち上がる。カマドの焼土の中からも骨片が少量ではあるが検出されている。



第92図 152号竪穴平面図



第93图 152号竖穴埋土(1~20)出土土器

柱穴は径14～20cm、深さ14～17cmの主柱穴が4本、その他に径6～24cm、深さ6～24cmのものが19本検出された。

#### 遺物 (第93図, 第91図-4～13)

第93図-1は無文の擦文土器。口径10.1cm、器高8.9cm。2～11は擦文土器。4は高杯の底部。12は宇津内Ⅱa式。13・14は統縄文初頭。15～18は縄文晩期。19は縄文晩期幣舞式。20は縄文中期。

石器はすべて埋土出土。第91図-4～8が無茎石鏃。9・10はナイフ。11・12は削器。13は搔器。全て黒曜石製。

#### 小括

本堅穴は擦文期のもと考えられるが、詳細な時期は不明である。(佐々木 寛)

## 153号 堅 穴

#### 遺構 (第94図, 図版14-2)

本堅穴はM' 97・98グリッドに位置し、規模は長軸約4.40m、短軸約3.40mの楕円形を呈し、壁高は確認面から約20cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。堅穴の中央部が東から西へ攪乱を受けているため炉跡は検出されなかった。西壁上にはピット897が構築されている。

柱穴は径20～22cm、深さ17～18cmの主柱穴と思われるものが2本、壁柱穴は径14～18cm、深さ11～23cmが南壁で2本検出され、その他に径10～12cm、深さ10～12cmが2本検出された。

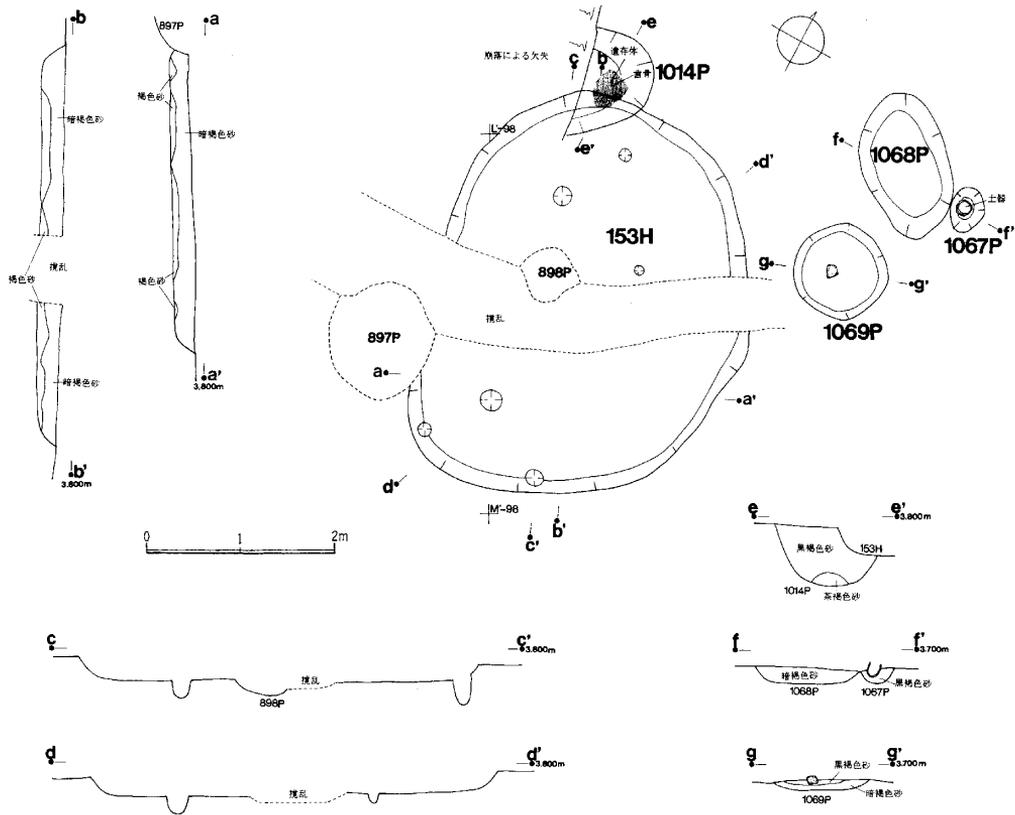
#### 遺物 (第95図, 第91図-14～19, 図版14-3・4)

第95図-1は小型の統縄文後北C<sub>2</sub>・D式の片口土器。胴部に縦位の刻線を配し、片口部に2個の小孔をもつ。2も後北C<sub>2</sub>・D式。3～5は同心円文をもつ統縄文宇津内Ⅱb式。3は口径11.6cm、器高10.1cm。6は宇津内Ⅱa式。7は統縄文初頭。8～10は縄文晩期幣舞式。11～17・19は縄文晩期中葉。18は縄文晩期の底部。20は爪形文をもつ縄文晩期前葉。全て埋土出土。

石器は埋土出土。第91図-14・15が有茎石鏃。16～18は削器。19は玄武岩製の搔器。19以外は黒曜石製。

#### 小括

本堅穴の時期は床面の出土遺物がないため不明である。(佐々木 寛)



第94図 153号竪穴、ピット1014、1067、1068、1069平面図

## 154号 竪 穴

### 遺 構 (第96図, 図版15-1)

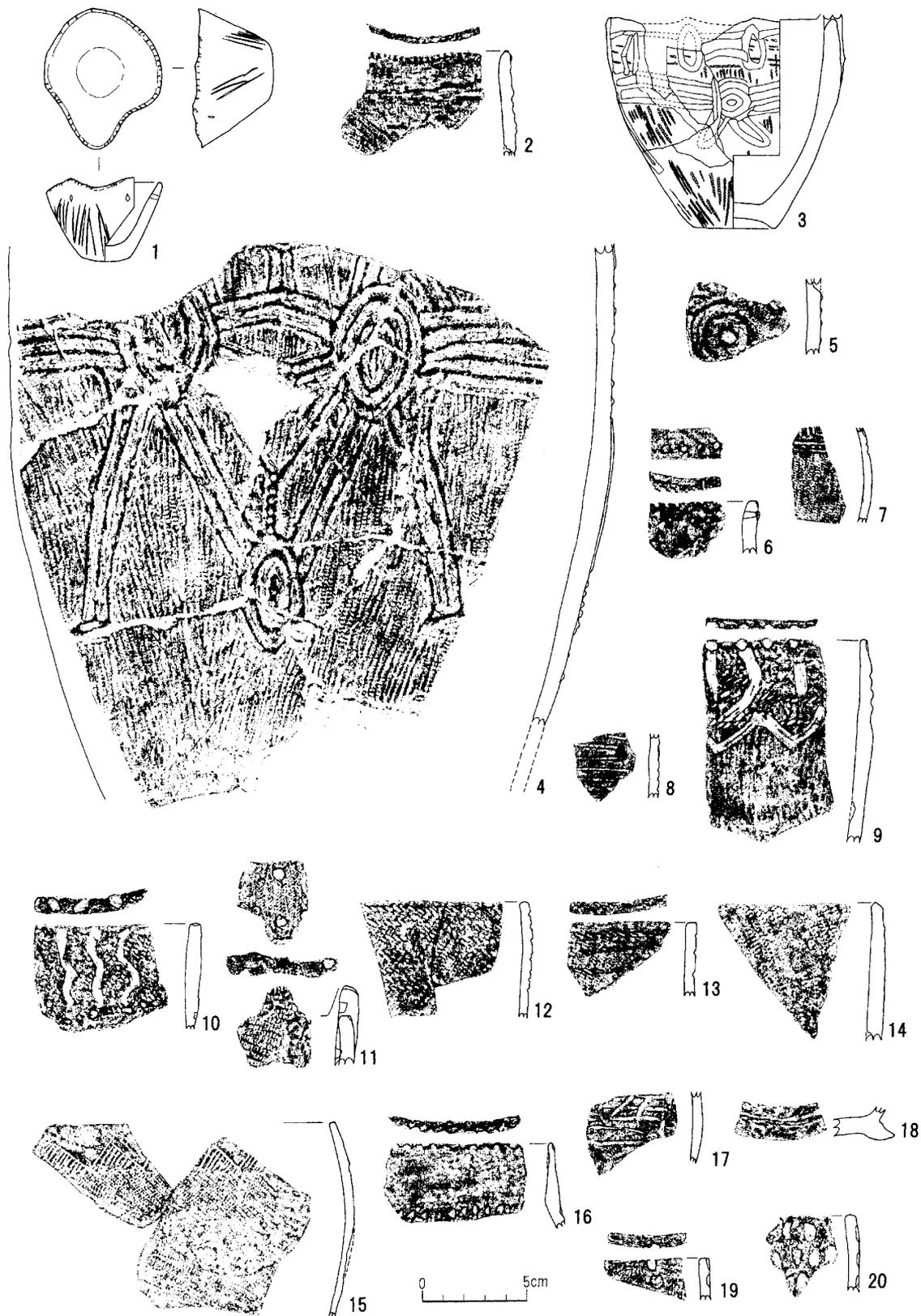
本竪穴は151a号竪穴の西側に検出された。竪穴の西南側が川岸の崩落により失われているため正確な規模・形態は不明であるが、径約6.50mの不整円形を呈するものと考えられる。壁高は確認面から約60cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。竪穴埋土の上面には第97図-1・2の土器が一括出土している。

柱穴は径8~20cm、深さ7~16cmの壁柱穴が8本、その他に径8~20cm、深さ8~16cmが16本確認された。

炉跡は竪穴の中央近くに約40×25cmの範囲と南東壁近くに約70×50cmの範囲の2箇所に検出された。竪穴中央近くの炉跡の西側に径約60×50cm、深さ約15cmのピットと北側に径約140×60cm、深さ約10cmのピットとその中に径40cm、深さ30cmのピットが検出された。

### 遺 物 (第97図, 第98図, 第99図, 第100図, 第101図, 第102図, 図版15-2~4)

第97図-1・2は微隆起線文と帯縄文をもつ続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。1は口径28.1cm、2は



第95图 153号竖穴埋土(1~20)出土土器

口径29.2cm、器高はどちらも底部が欠失しているため不明である。

第98図-1～3も後北C<sub>2</sub>・D式。

第99図-1は微隆起線文と帯縄文、列点文をもつ後北C<sub>2</sub>・D式の注口土器。2は後北C<sub>1</sub>式。3～6は宇津内Ⅱb式。7～10は宇津内Ⅱa式。11～13は続縄文初頭。

第100図-1～5は続縄文初頭。6～11は縄文晩期中葉。12は爪形文をもつ縄文晩期前葉。13は縄文晩期。全て埋土出土。

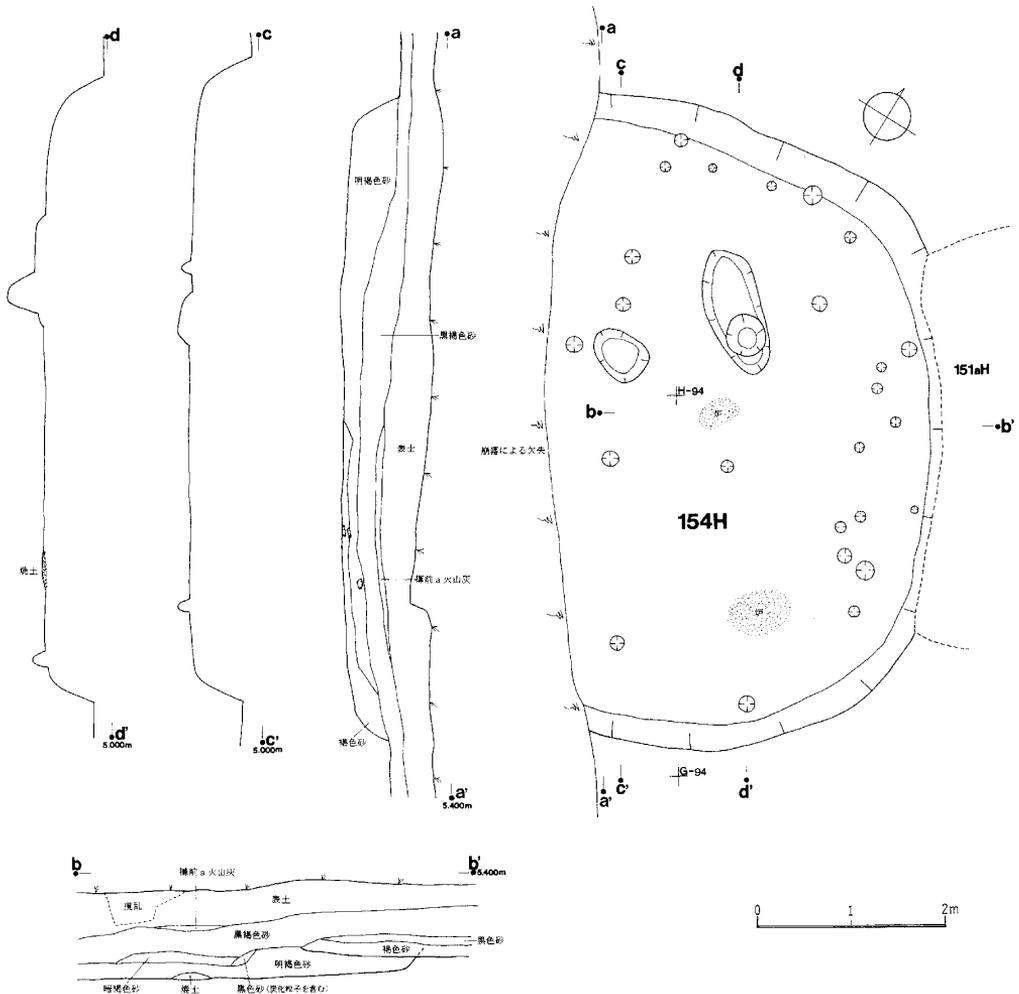
石器はすべて埋土出土。第101図-1～4が無茎石鏃。5が有茎石鏃。6～9はナイフ。10～18は削器。19～26は搔器。すべて黒曜石製。

第102図-1は磨製石斧。2は打製石斧。3はたたき石。いずれも泥岩製。

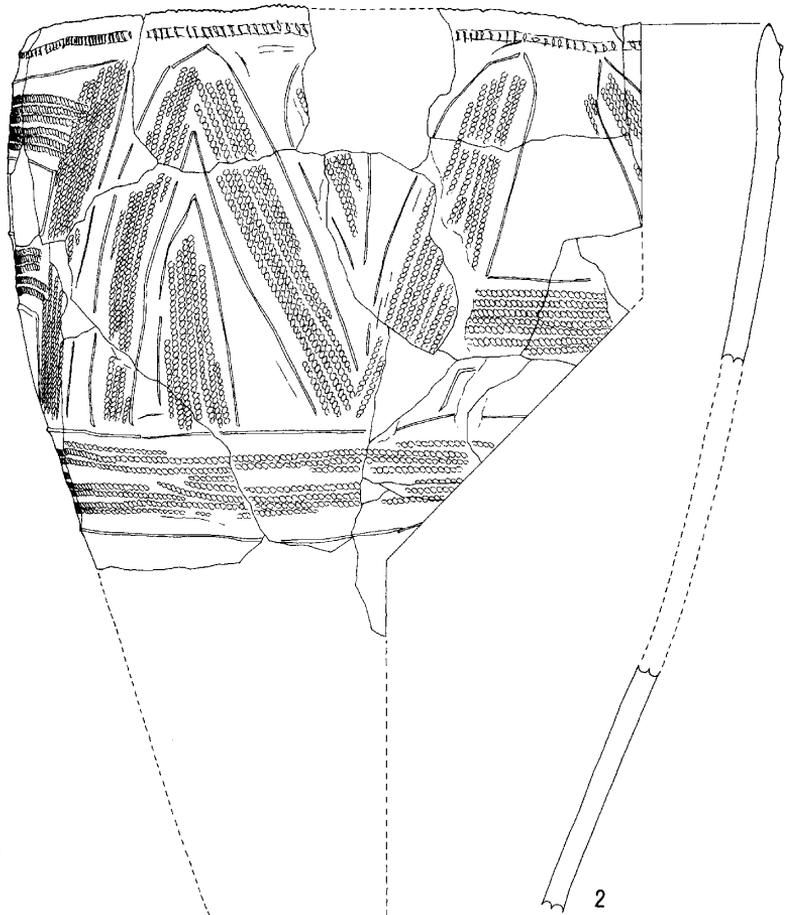
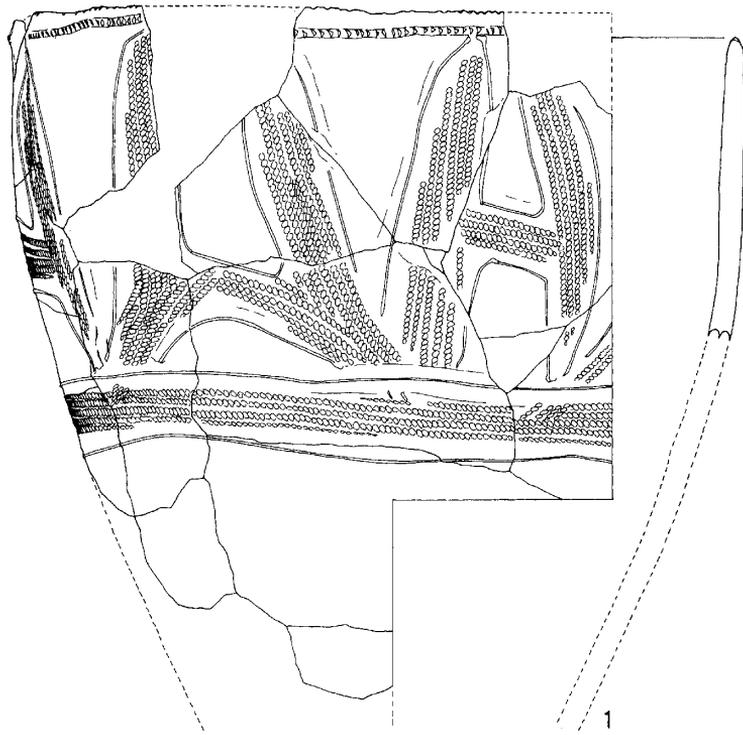
小 括

本竪穴の時期は床面出土の土器がないため不明である。

(佐々木 寛)

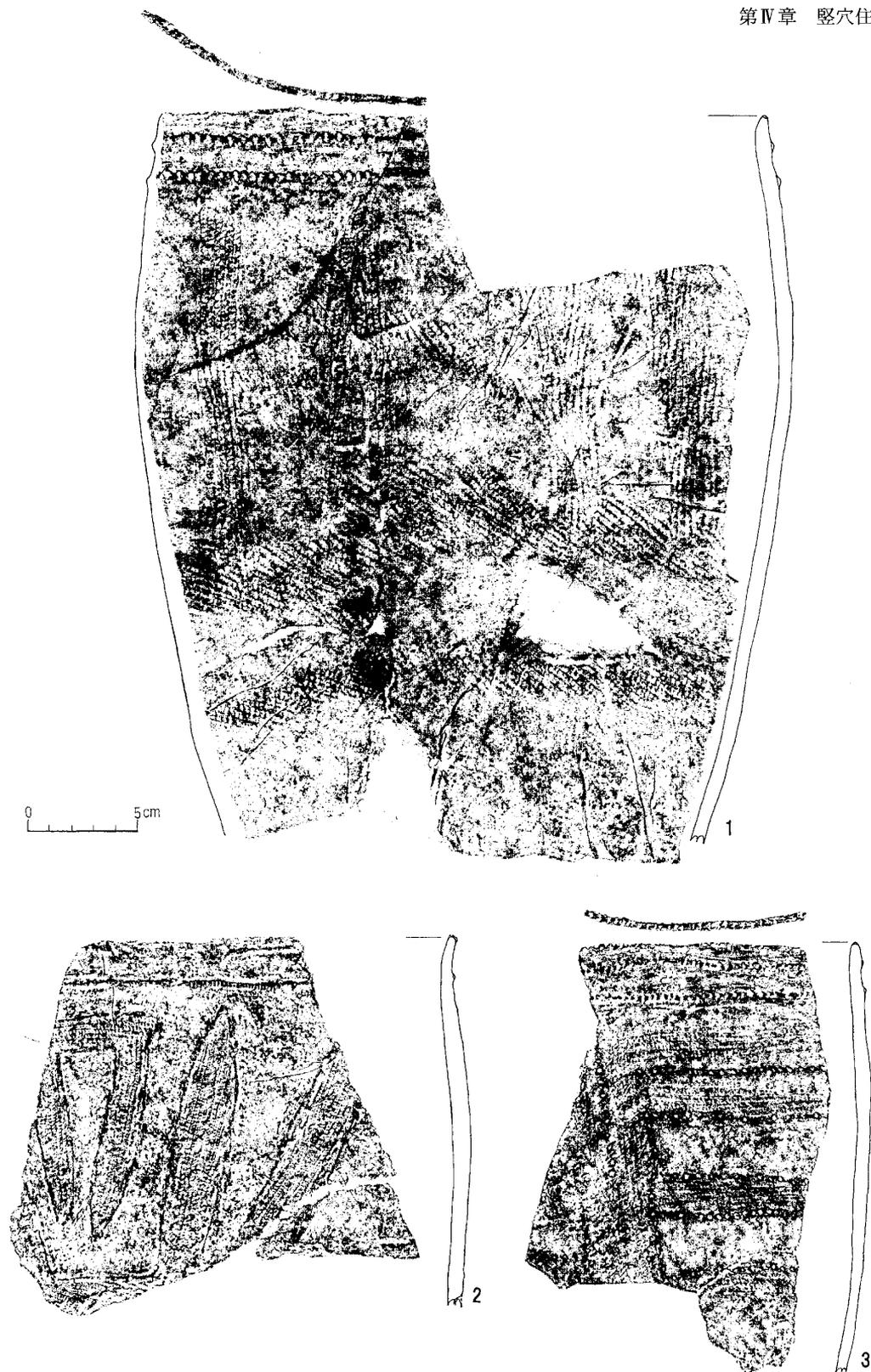


第96図 154号竪穴平面図

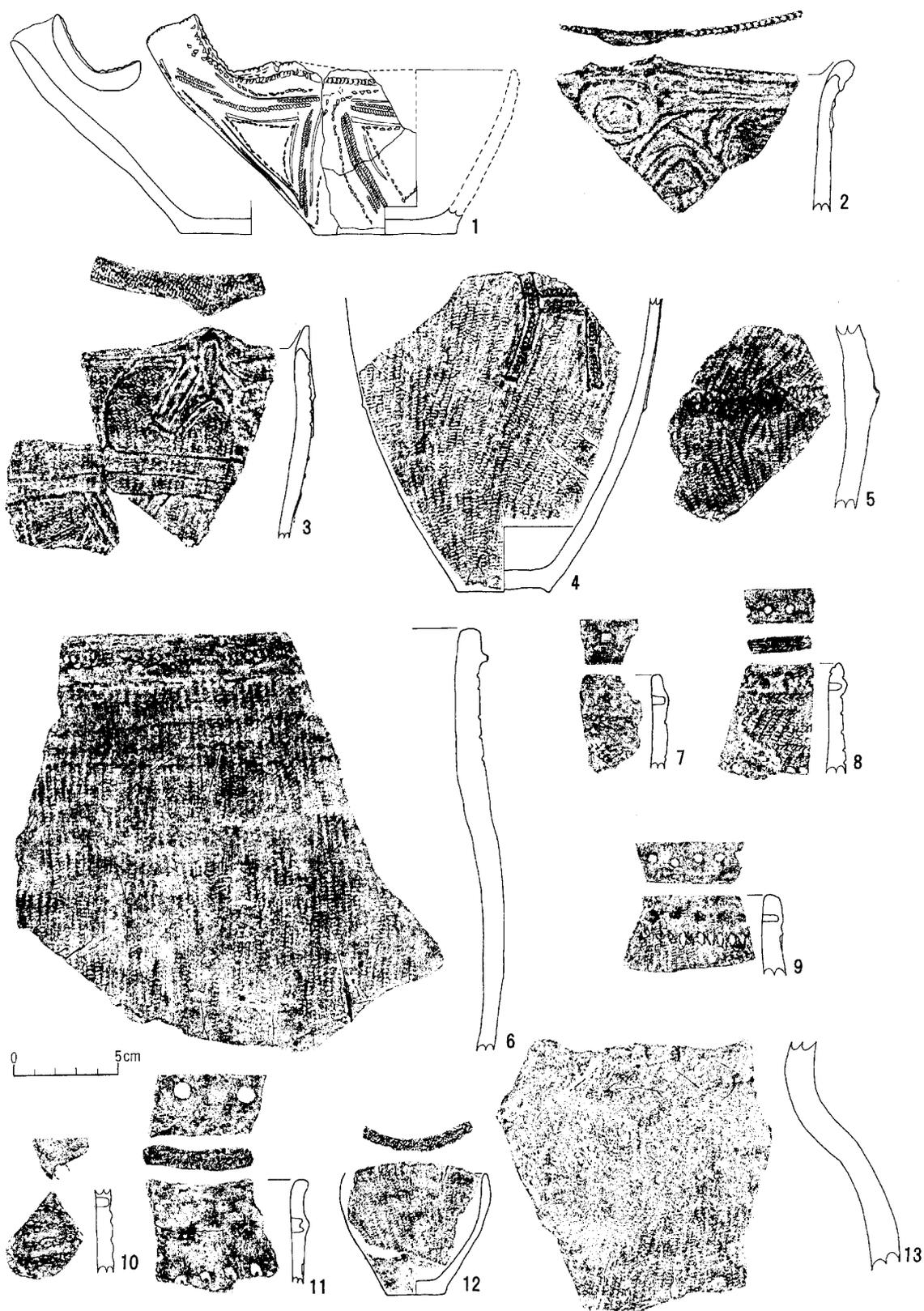


0 5cm

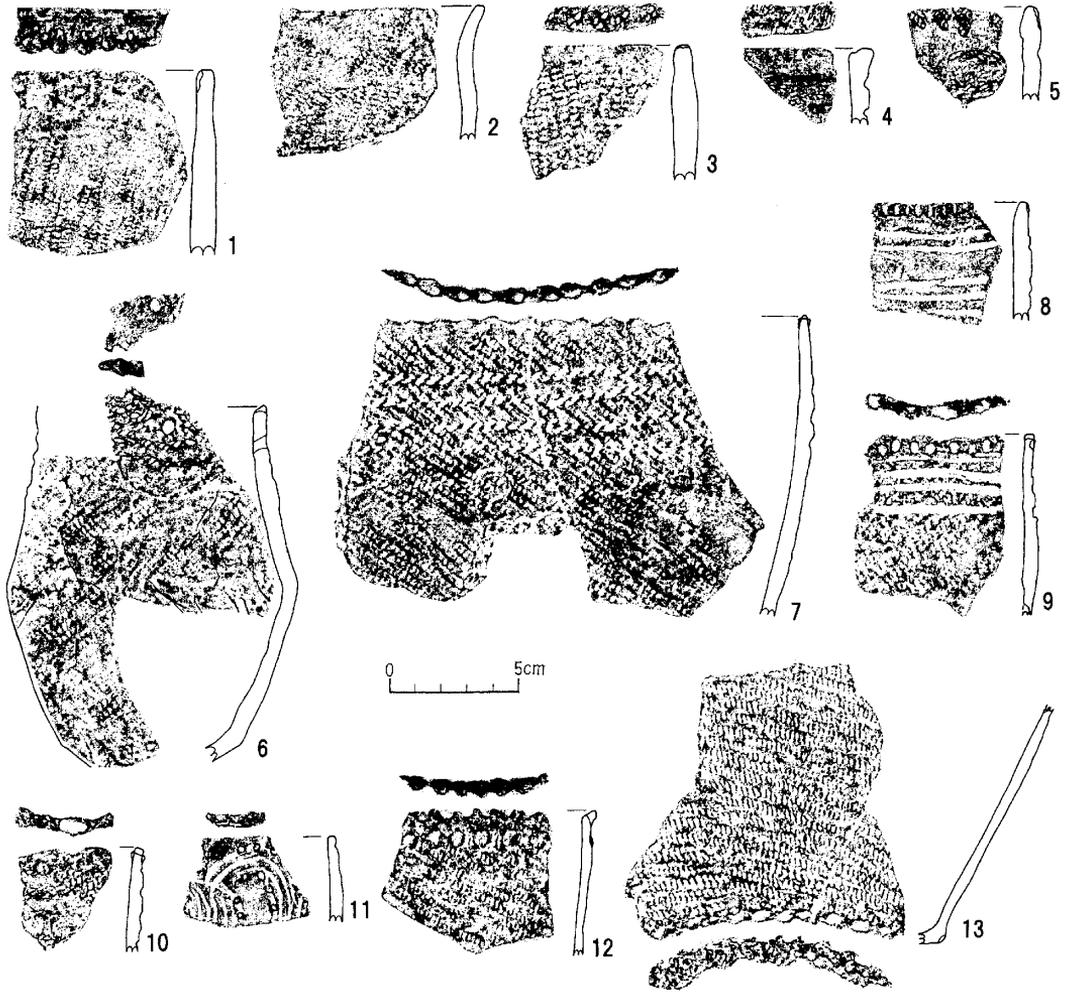
第97图 154号竖穴埋土(1·2)出土土器



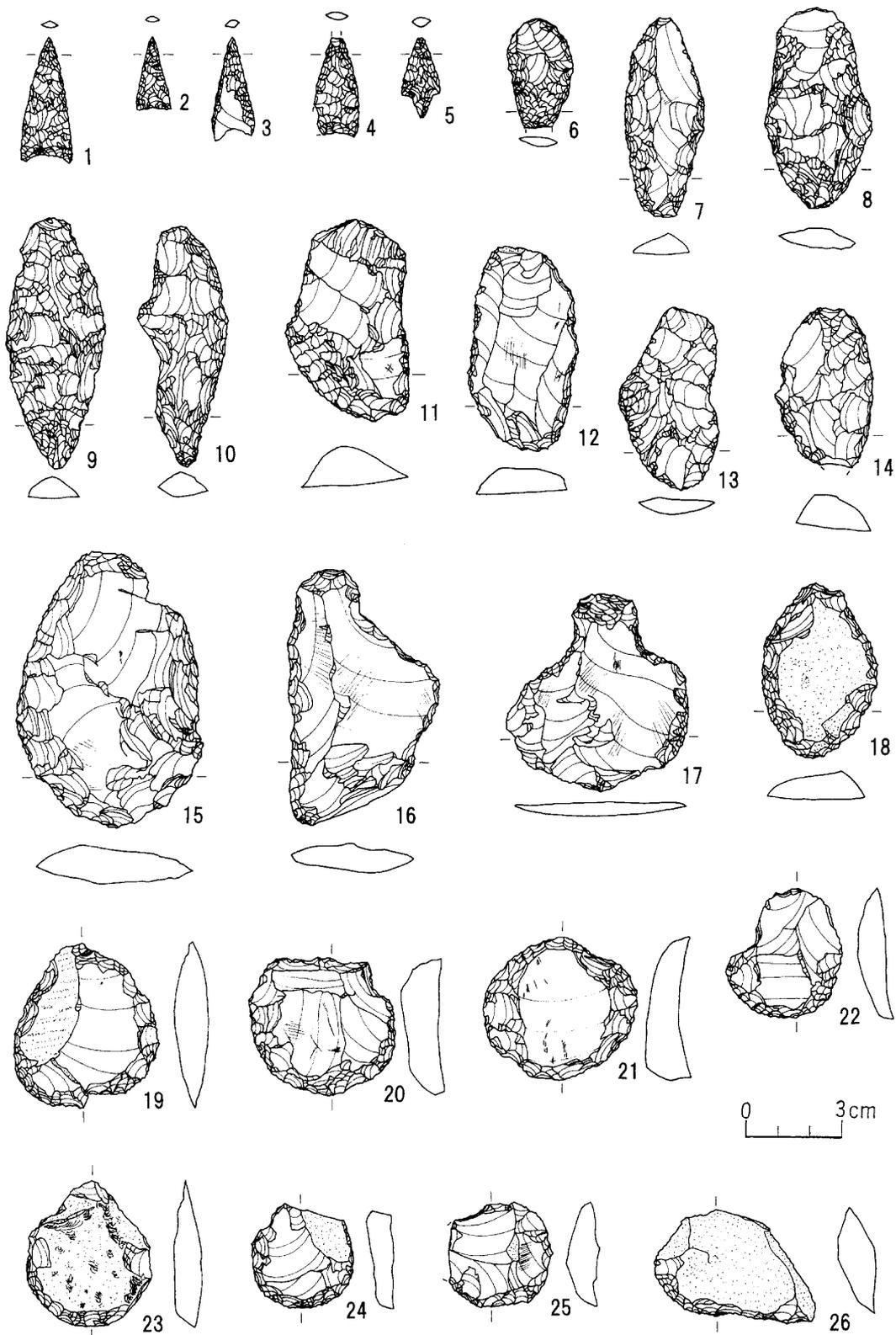
第98图 154号竖穴埋土(1~3)出土土器



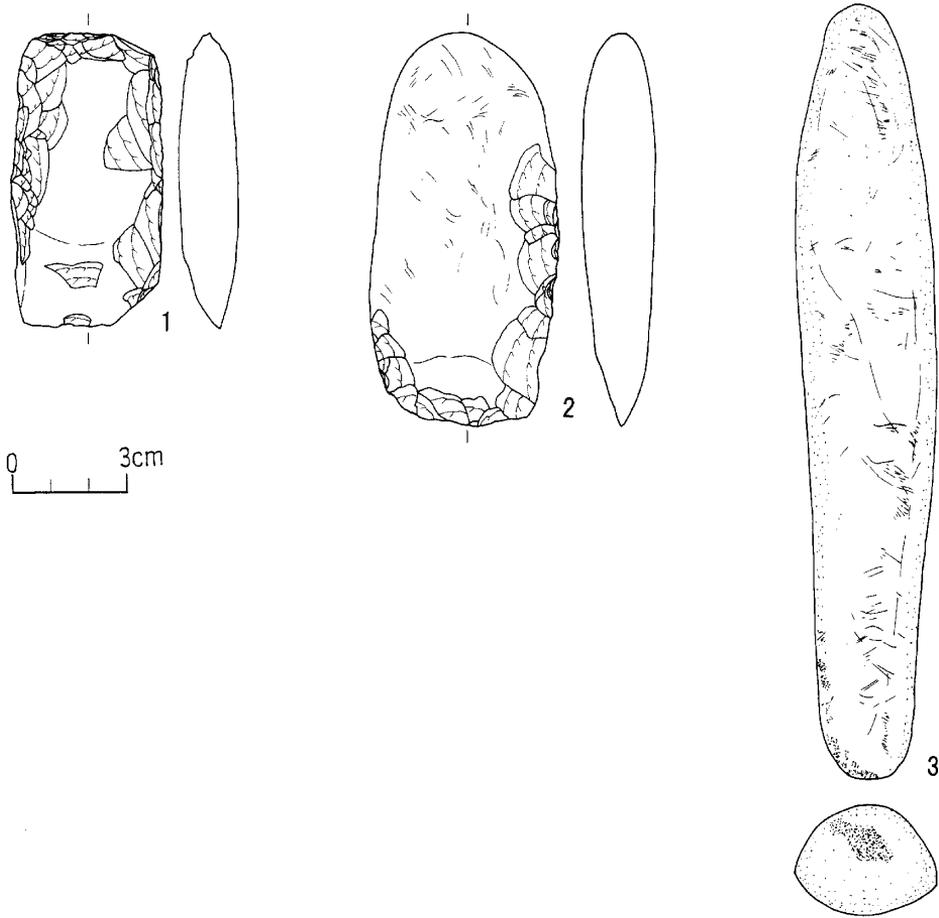
第99图 154号竖穴埋土(1~13)出土土器



第100图 154号竖穴埋土(1~13)出土土器



第101圖 154号竪穴埋土(1~26)出土石器



第102図 154号竪穴埋土(1~3)出土石器

## 155号 竪 穴

### 遺 構 (第103図, 図版16-1)

本竪穴はG90・91グリッドにかけて検出された。各壁の長さは東壁が約4.40m、南壁が約3.70m、西壁が約3.80m、北壁が約3.90mを測る。埋土中の表土と黒色土層の間にはわずかに樽前a火山灰と思われる火山灰が認められた。竪穴の壁高は確認面から約40cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。

竪穴の床面から炉跡は検出されなかった。カマドは東壁のほぼ中央に構築され構築材は粘土である。袖部には礫が使用され、燃焼部の礫は立った状態で検出されている。煙道の長さは約60cmであり、緩やかに立ち上がる。カマドの焼土から骨片が検出されている。カマド袖部の南側に約60×50cmの範囲で粘土が検出されているが、カマドの粘土が流れたものと思われる。

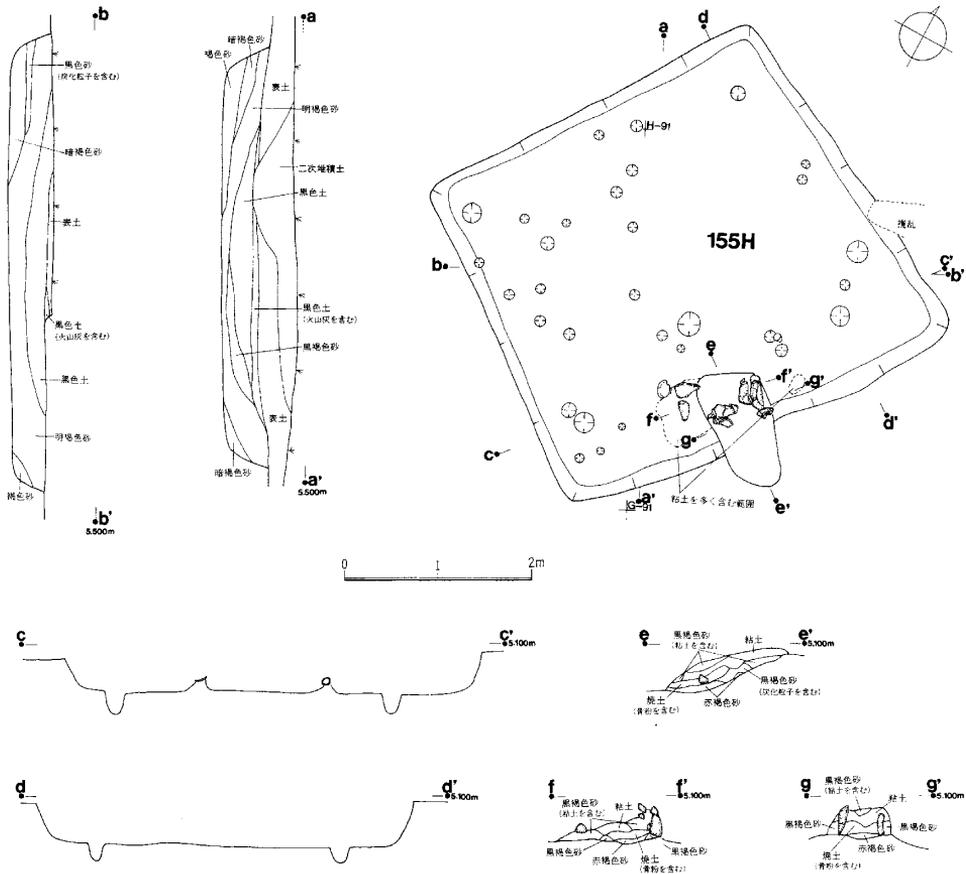
常呂川河口遺跡

柱穴は径16～22cm、深さ18～24cmの主柱穴が4本、壁柱穴が径8～10cm、深さ9～11cmのものが5本、その他に径8～24cm、深さ7～25cmのものが21本確認されている。

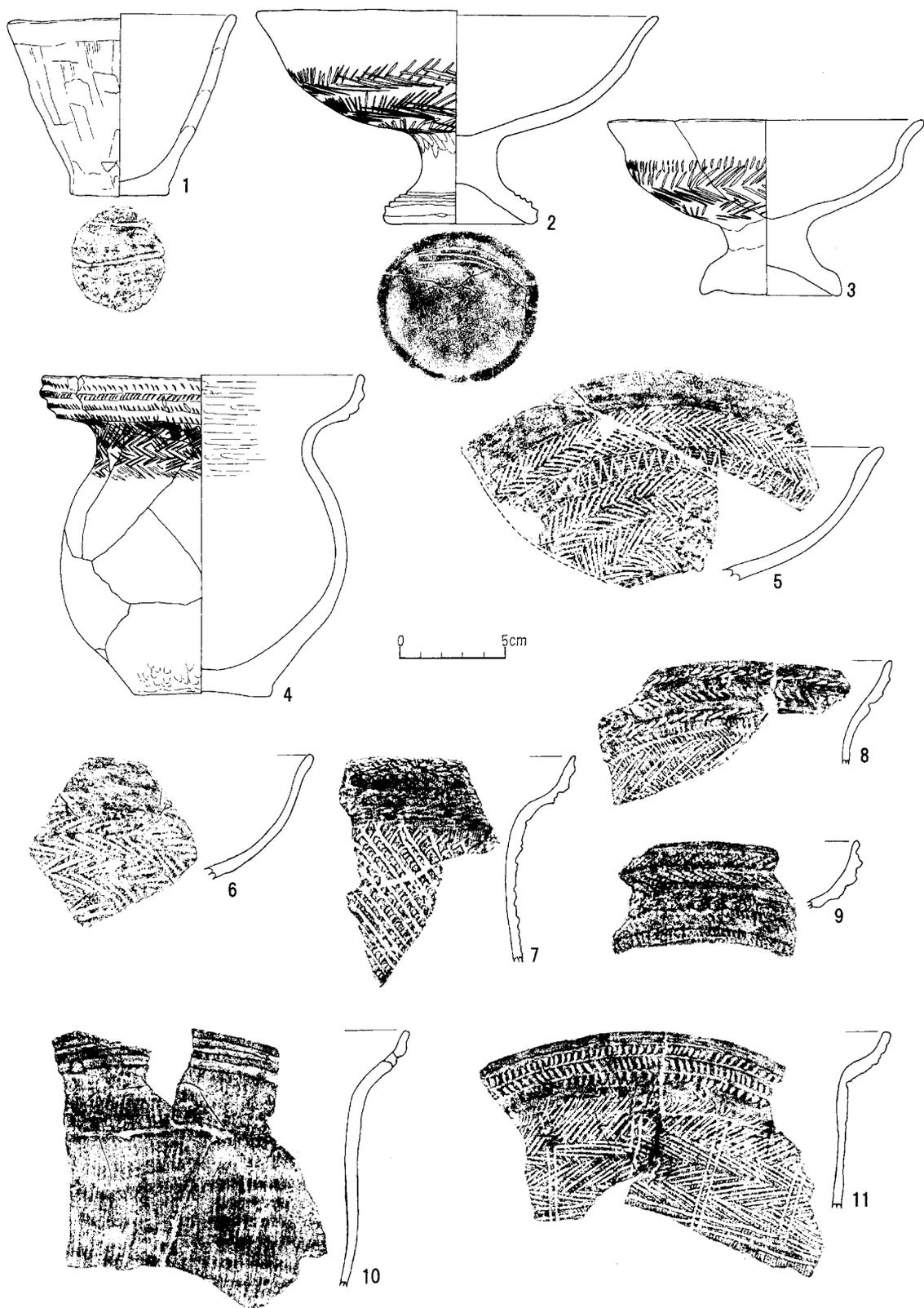
カマドの北側の床面から第104図-1の土器が出土し、カマド南西側の粘土の上から第104図-2の土器が出土している。

遺物 (第104図, 第105図, 第106図-1～8, 第107図, 図版16-2～5)

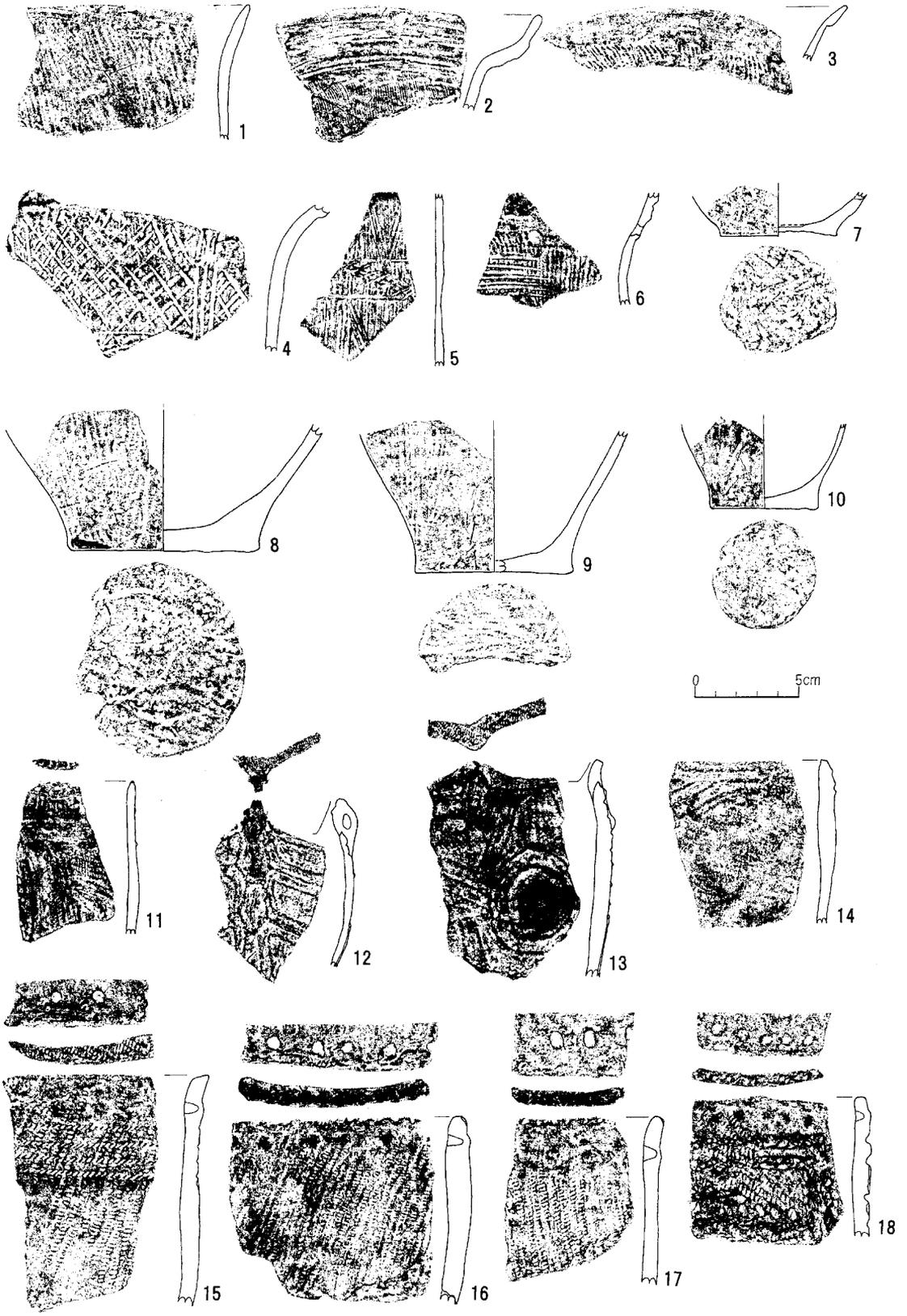
床面からは第104図-1の擦文土器が出土している。口径11.4cm、器高8.6cmの小型鉢形土器。胴部は無文であるが底部に板目状圧痕文が残る。2はカマド南西側の床面直上から出土しており、口径19.2cm、器高10cmの高杯で矢羽根状の刻線文が施されている。埋土から3は口径14.8cm、器高8.4cmの高杯。矢羽根状の刻線文を巡らす。4は口径15.4cm、頸部10.3cm、胴部13.4cm、器高15.6cmの壺形土器。口縁部は3段の隆帯をもち外反し、口唇部は垂直に立ち上がる。



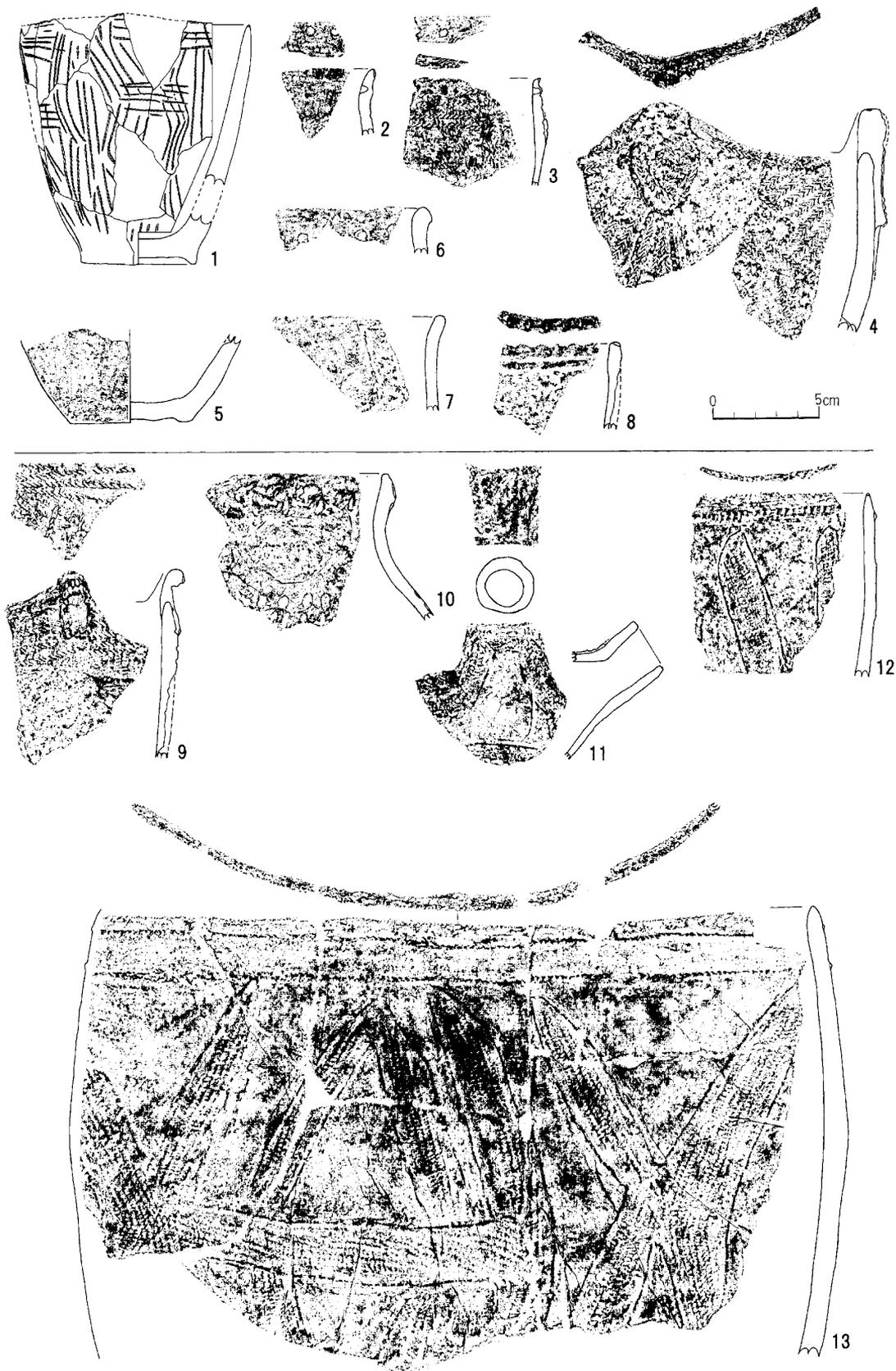
第103図 155号竪穴平面図



第104图 155号竖穴床面(1)·床面直上(2)·埋土(3~11)出土土器



第105图 155号竖穴埋土(1~18)出土土器



第106图 155号竖穴埋土(1~8)、155a号竖穴床面(9)·埋土(10~13)出土土器



第107图 155号竖穴埋土(1~30)出土石器

短刻文を口唇部直下に1条、口縁部の3段の隆帯の上に1条、頸部上端に1条施す。頸部に格子目文と矢羽根状文を配し、下に2本単位の斜め方向の短刻線文を巡らす。5～11は擦文土器。5・6は高杯。

第105図-1～10は擦文土器。11は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。12～14は宇津内Ⅱb、15～18は宇津内Ⅱa式。

第106図-1は胴部全体に縄線文を施す統縄文初頭。口径10.7cm、器高11.4cm。2・3は宇津内Ⅱa式。4は宇津内Ⅱb式。5は宇津内式の底部。6・7は統縄文初頭。8は縄文晩期。

石器はすべて埋土出土。第107図-1～7は無茎石鏃。8は有茎石鏃。9～13は両面加工のナイフ。14～18は片面加工のナイフ。19は小型のナイフ。20～27は削器。28・29は搔器。30は打製石斧の未製品。19は頁岩製、30は泥岩製、それ以外は黒曜石製。

### 小 括

本竪穴は擦文期のものであり、時期は床面直上の土器から宇田川編年後期に比定されると考えられる。(佐々木 覚)

## 155a号 竪 穴

### 遺 構 (第108図, 図版17-1)

本竪穴は擦文期の155号竪穴と南壁側で重複するため正確な規模は不明であるが、長軸推定10.00m、短軸約4.00mの長方形を呈する。壁の掘り込みは皿状の浅い立ち上がりをもち、高さは確認面から約15cmである。中央部からやや北寄りに径80cmほどの地床炉をもつ。

大小の柱穴が床面の全域にみられる。支柱穴と思われる大きなものは径約20～25cm、深さ約21～36cmであり、壁近くに配置される傾向をもつ。小柱穴は径約8～15cm、深さ約8～25cmであり、壁近くに配置される傾向をもつ。小柱穴は径約8～15cm、深さ約8～25cmであり、不規則に配置される。

### 遺 物 (第106図-9～13, 第109図, 第110図, 第111図)

第106図-9は床面出土の統縄文字津内Ⅱb式。埋土から10は口縁部に爪形文と頸下部に刺突文が施されたオホツク文化刻文土器。11～13は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。

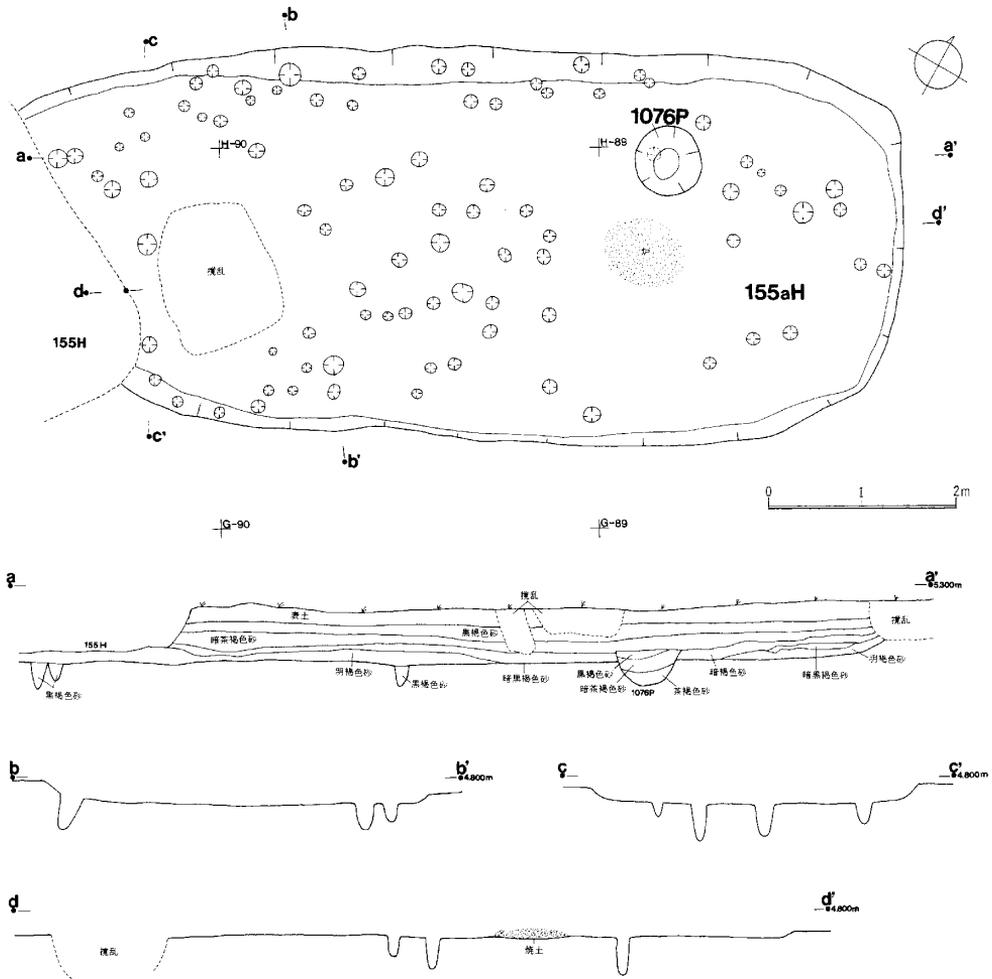
第109図は埋土出土である。1～4は統縄文字津内Ⅱb式。5～9は同Ⅱa式と思われるが、突瘤文をもつ3点はより古手であろう。10～12は壺形土器で10・11は縄線文、12は縄端圧痕文が施される。興津式相当であろう。13～15は沈線文が施される。フシココタン下層式相当であろう。

石器は第110図1～6が床面出土である。1は柄部をもつ削器。2は両面加工ナイフ。3～6は削器。7～12は無茎石鏃。13～22は両面加工ナイフ。23～28は削器。29～31は搔器。13・16は頁岩製であり、他は黒曜石製である。

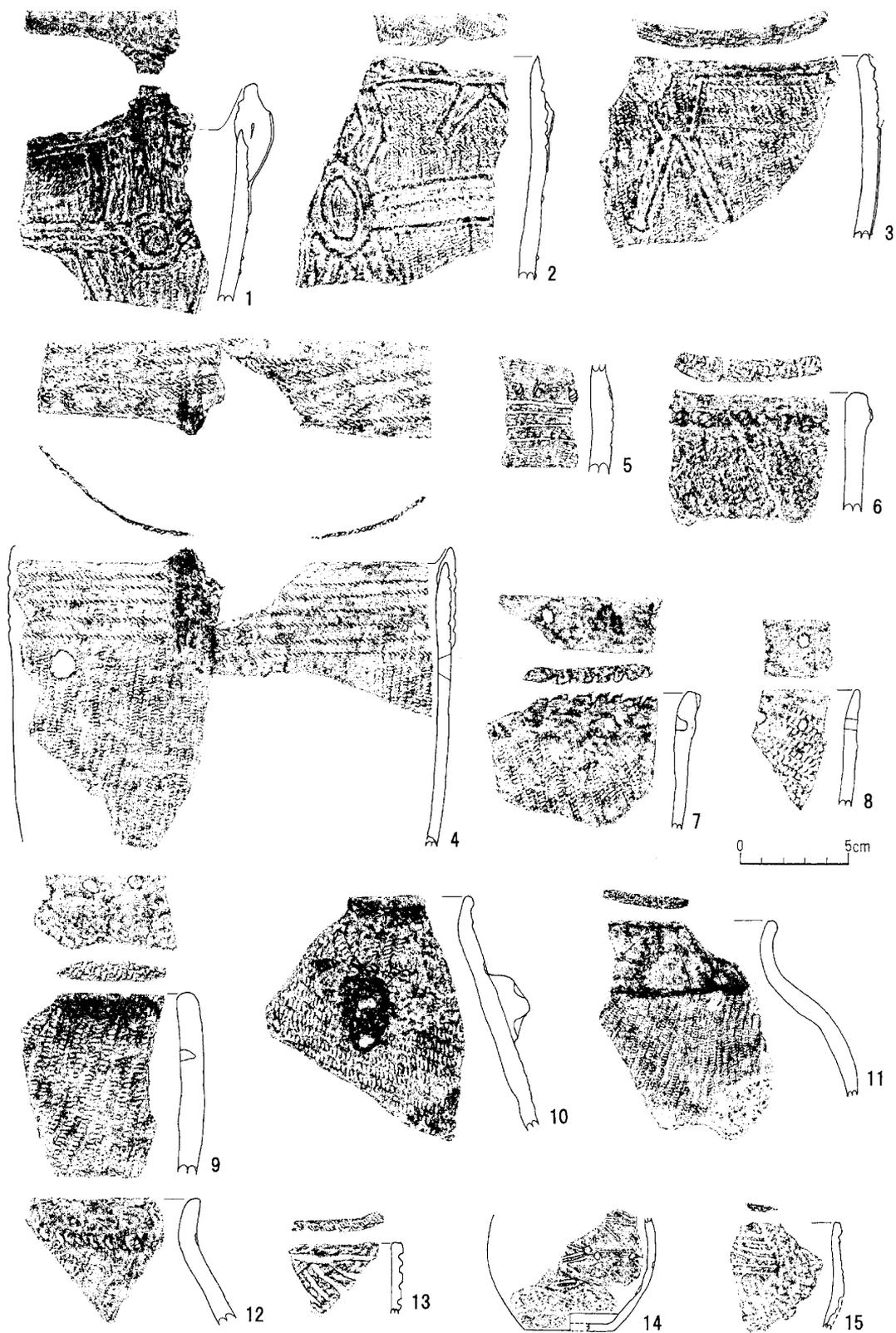
第111図は埋土出土である。1～5は搔器。6は両刃磨製石斧。7は砥石片。8はたたき石。6は青色片岩製、7は砂岩製、8は泥岩製であり、他は黒曜石製である。

小 括

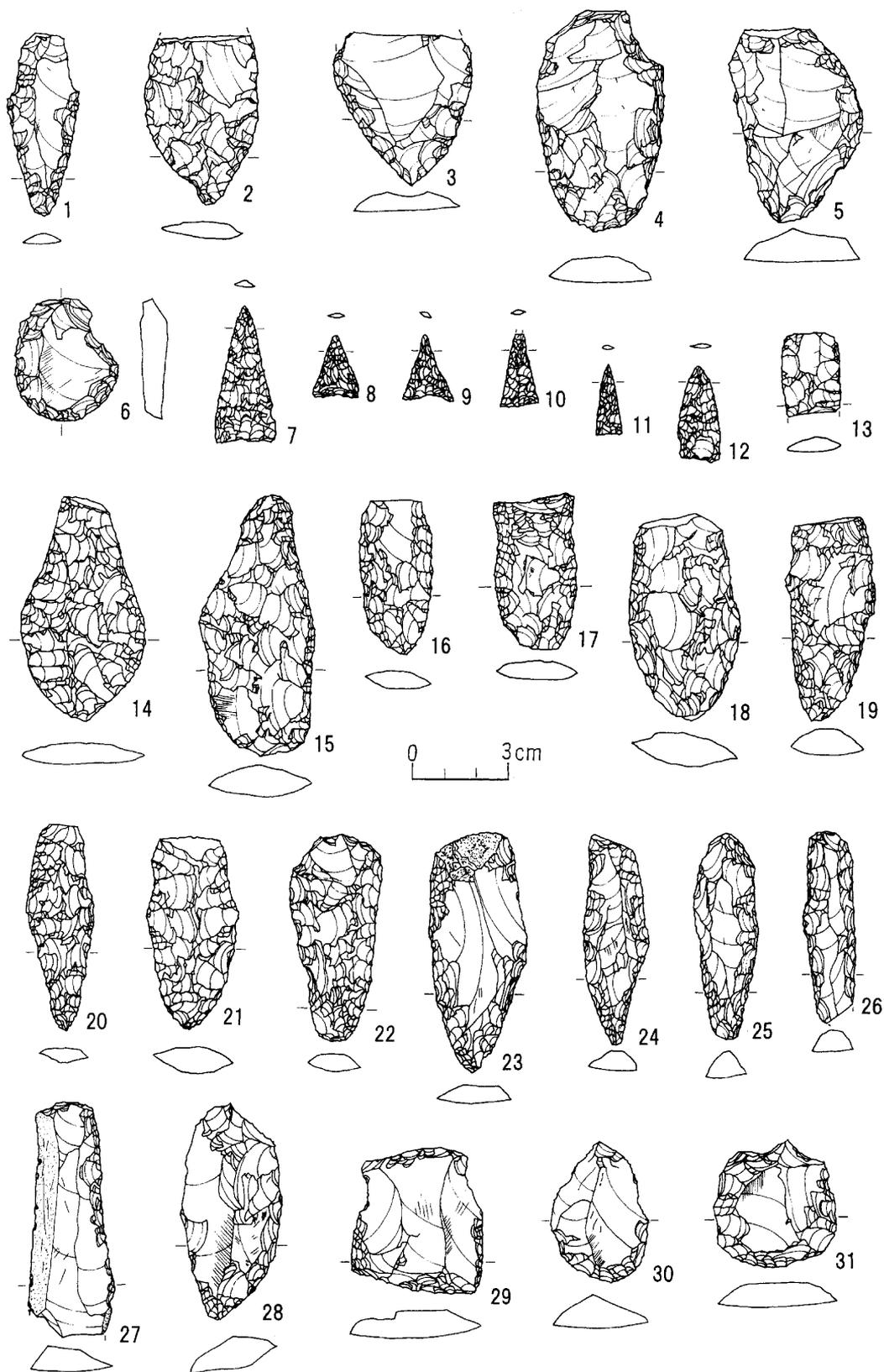
本堅穴の床面から続縄文字津内Ⅱb式の破片が出土しているが1点だけであり、時期の断定はできない。本遺跡における同様の堅穴の形態は148a号・149号堅穴があり、これらは後北C<sub>2</sub>・D式、同C<sub>1</sub>式に比定されるもので本堅穴もその時期の可能性が高い。(武田 修)



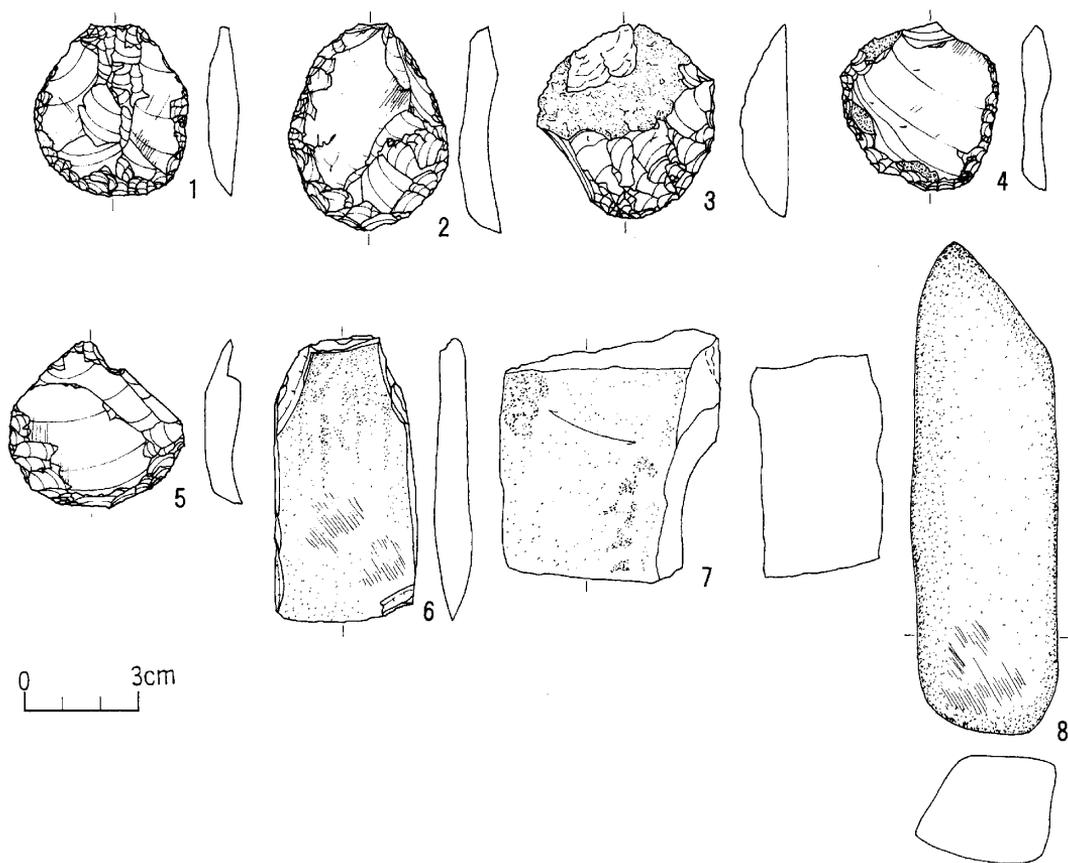
第108図 155a号堅穴、ピット1076平面図



第109图 155a号竖穴埋土(1~15)出土土器



第110图 155a号竖穴床面(1~6)·埋土(7~31)出土石器



第111图 155a号竖穴埋土(1~8)出土石器

## 155b号 竪 穴

### 遺 構 (第112図)

本竪穴は155a号竪穴の下面に位置する。北壁側が検出できなかったものの規模は推定8.00m、短軸5.80mの楕円形を呈すると思われる。壁高は155a号竪穴の床面から約20cmである。

床面に2基の石囲み炉をもつが、南側の石囲み炉は楕円形、北側の石囲み炉は方形でありタイプが異なる。炉石は全て角礫を用いている。

径約20～25cm、深さ約16～26cmの支柱穴は配置に規則性はないが、石囲み炉の近くに見受けられる。壁柱穴は径約6～20cm、深さ約6～21cmであり、南壁側では壁上部にもみられる。

### 遺 物 (第113図, 第114図, 第115図, 図版17-2・3)

第113図-1は床面出土である。口径約25cmの続縄文字津内Ⅱb式。2～5は埋土出土で全て宇津内Ⅱb式で、2は口径21cm。

第114図は埋土出土である。1～6は突瘤文が施される宇津内Ⅱa式。7・8も同式の底部であろう。9は無文部に縄端圧痕文が施される。10は壺形土器。11～14は縄線文、15は撚糸文を地文とし、部分的に赤色顔料が塗布されている。9～15は興津式相当であろう。16は半載状施文具による菱形状の沈線文、20は沈線間に縦・横位の刺突文が施される。16～22はフシココタン下層式相当であろう。23は縄線文間に縄端圧痕文が施される。続縄文初頭であろう。

石器は第115図-1・2は炉跡出土の無茎石鏃。2は焼けて発泡スチロール化している。他は埋土出土である。3・4は無茎石鏃、5・6は有茎石鏃。7は片面加工ナイフ。8～13は両面加工ナイフ。14～16は削器。17～21は搔器。22は片刃磨製石斧。11は硬質頁岩製、16は玄武岩製、22は青色泥岩製であり、他は黒曜石製。

### 小 括

本竪穴の時期は床面出土土器から続縄文字津内Ⅱb式と考えられる。(武田 修)

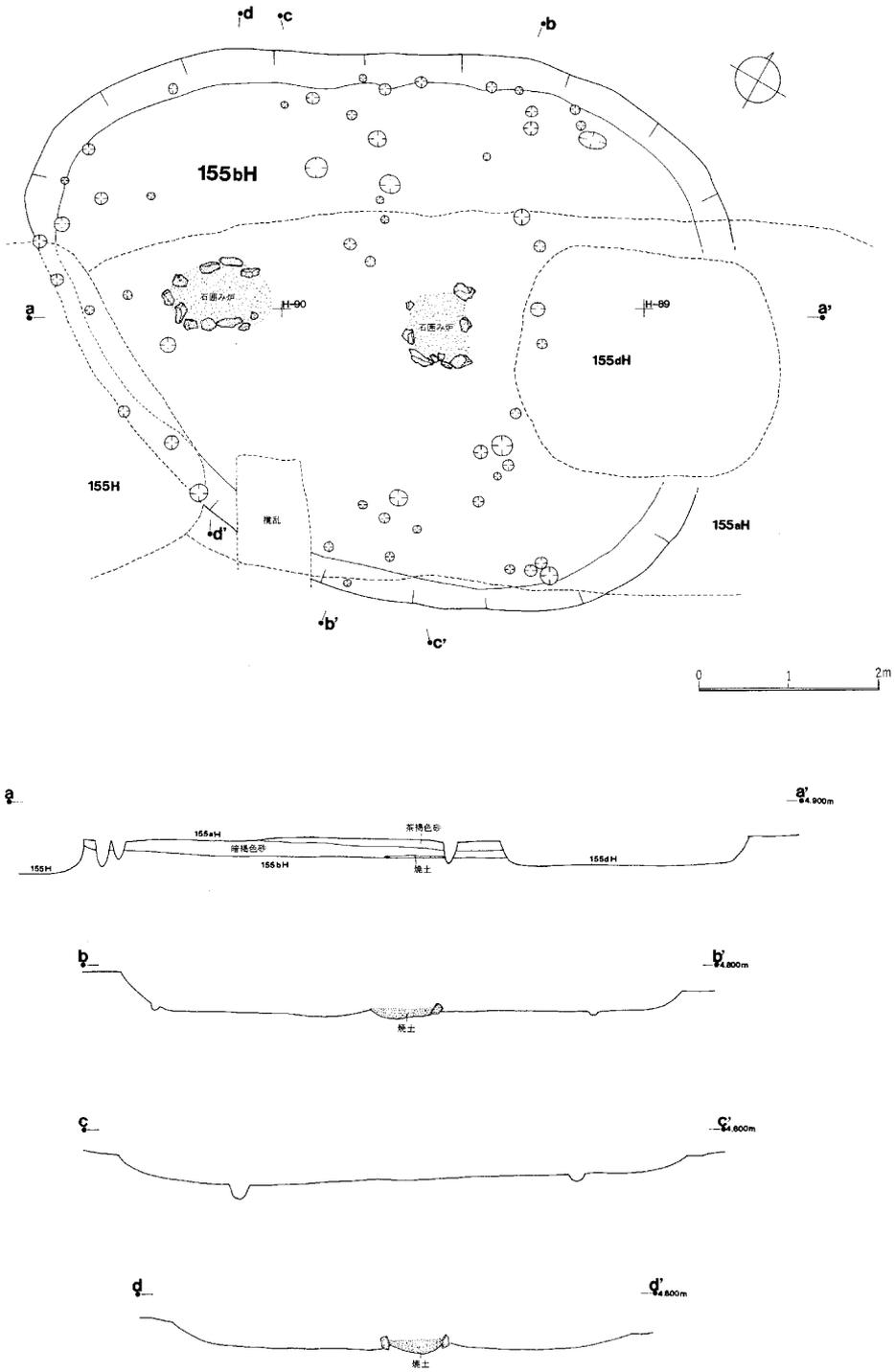
## 155c号 竪 穴

### 遺 構 (第116図)

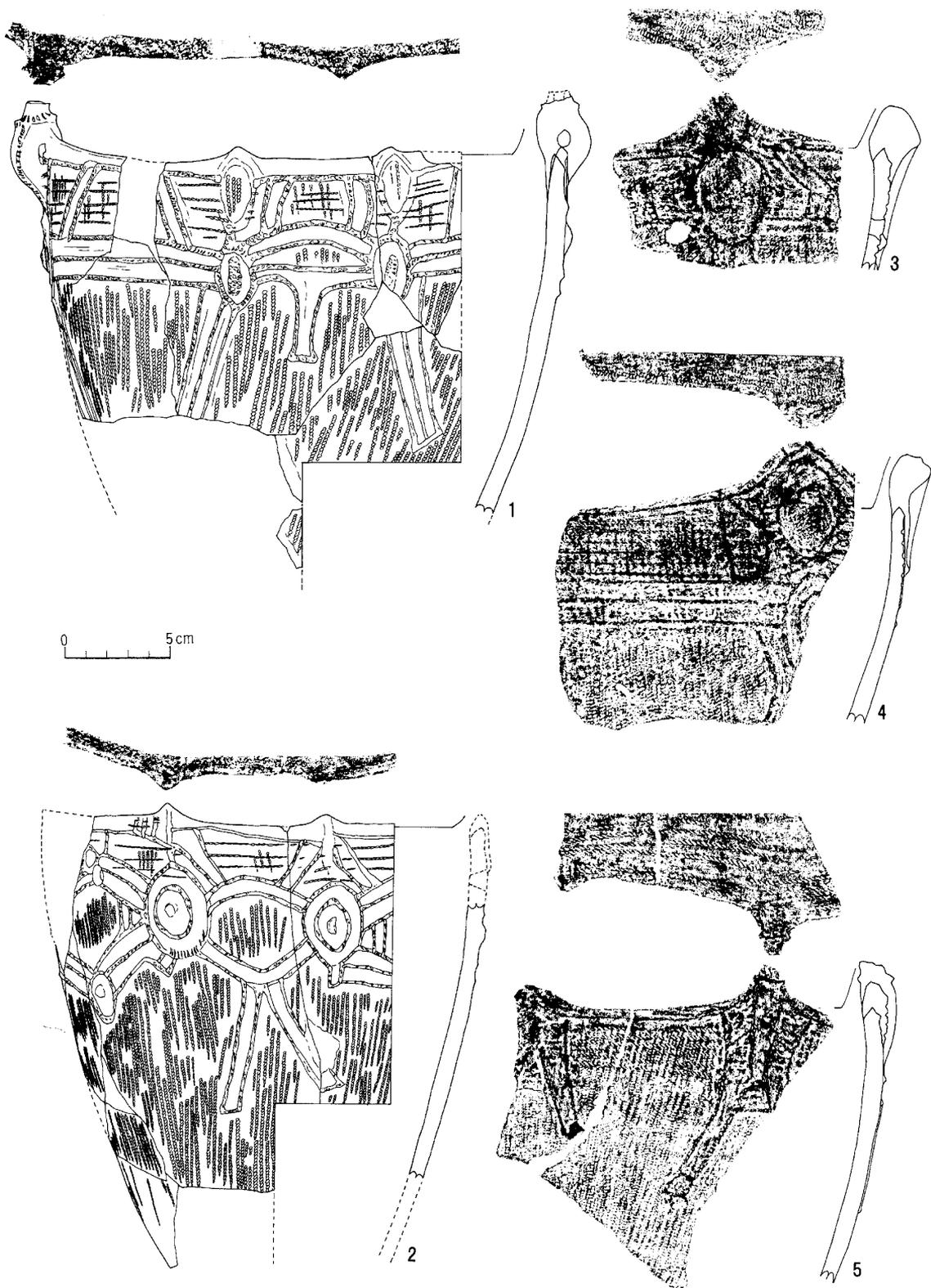
本竪穴は長軸約7.50m、短軸約7.20mの隅丸方形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約32cmである。径約70cmの地床炉は中央よりやや東寄りにある。径約20～30cm、深さ約18～26cmの支柱穴は炉跡とピット1350の周辺にある。径約5～15cm、深さ約6～20cmの壁柱穴は各壁際でそれぞれ等間隔に配置されている。

### 遺 物 (第117図, 第118図)

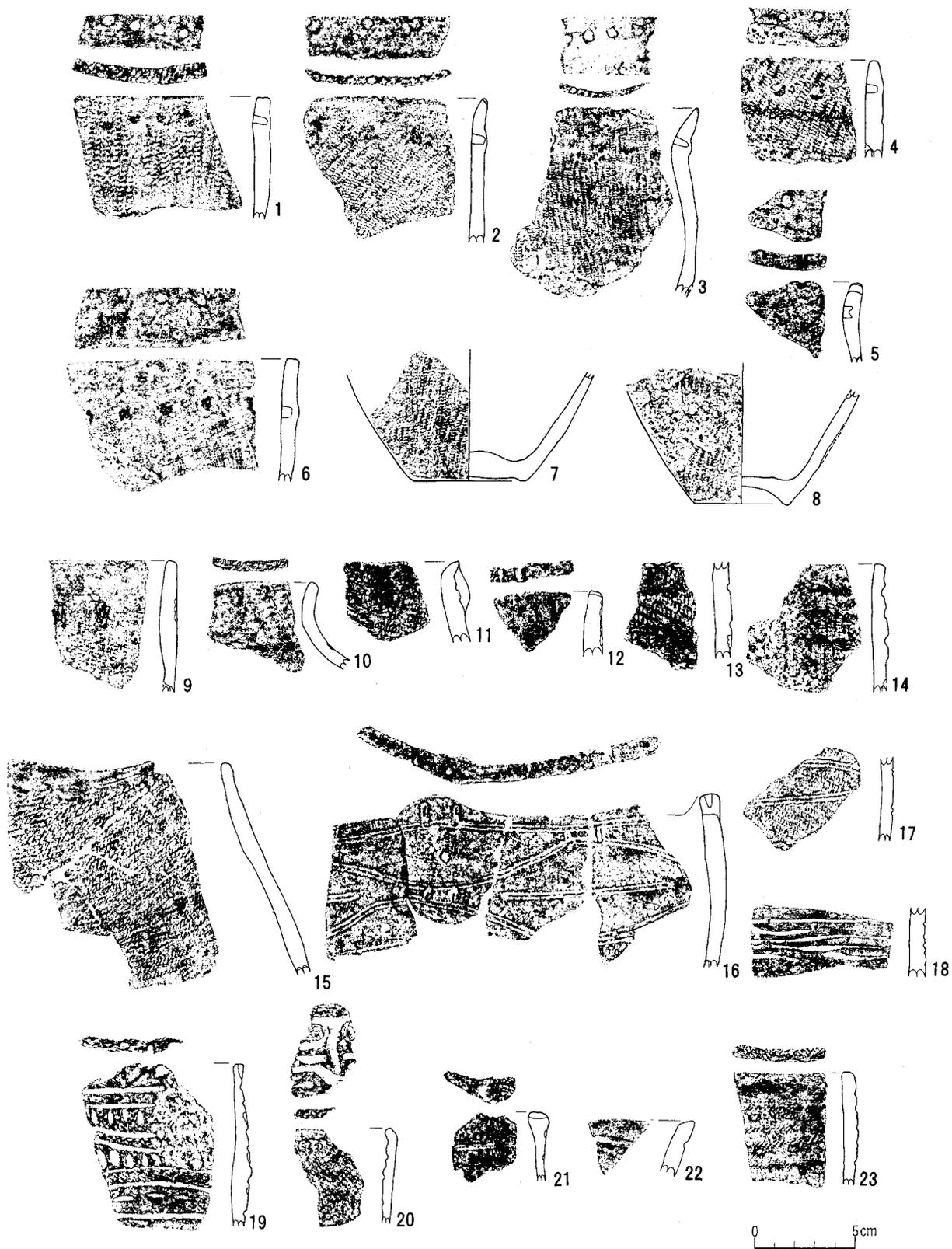
全て埋土出土である。第117図-1は続縄文字津内Ⅱb式。2は同Ⅱa式。3・4も突瘤文をもつが、3は横位の細沈線文があり、4の口縁部は無文帯となるので宇津内Ⅱa式より古手



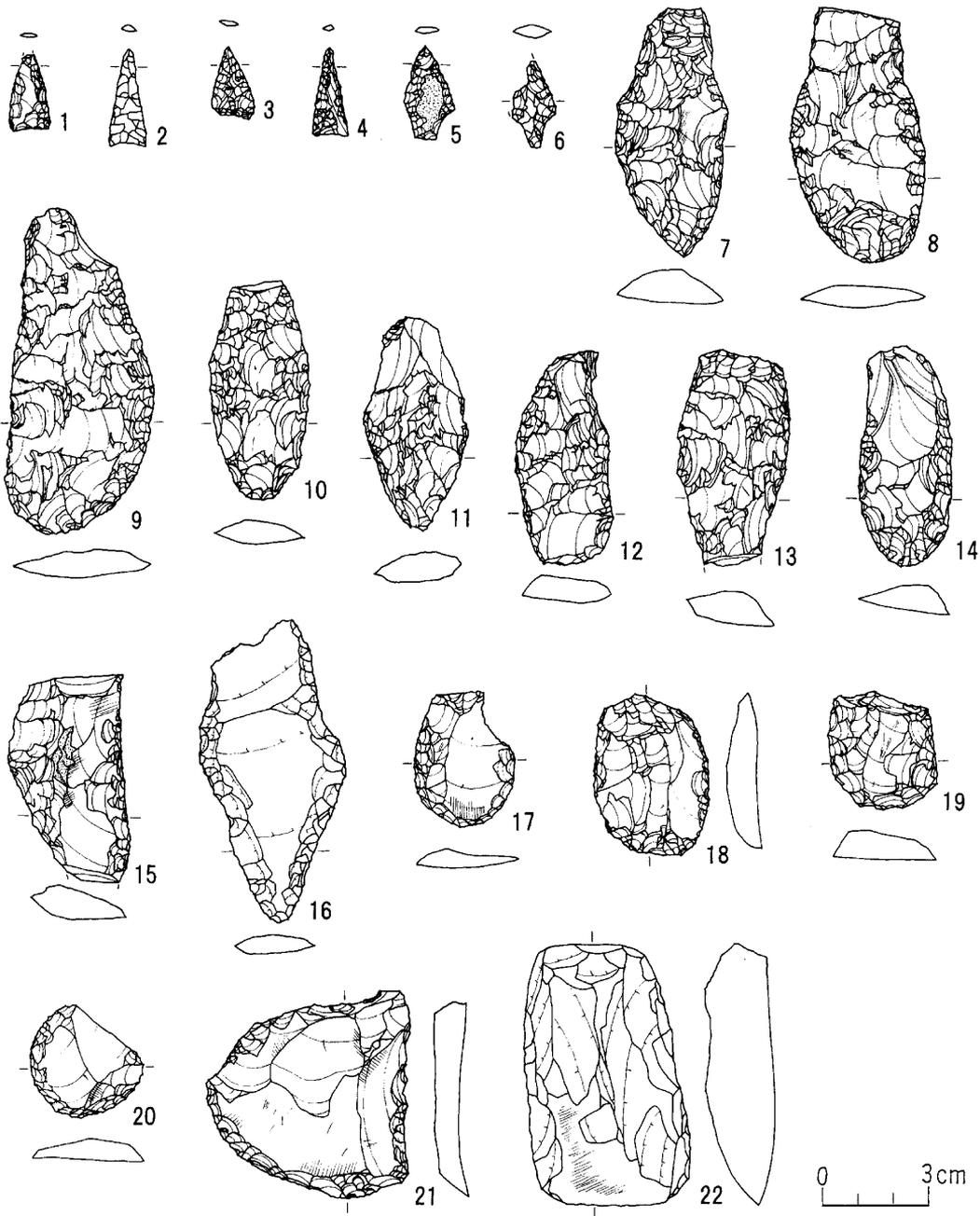
第112图 155b号竖穴平面图



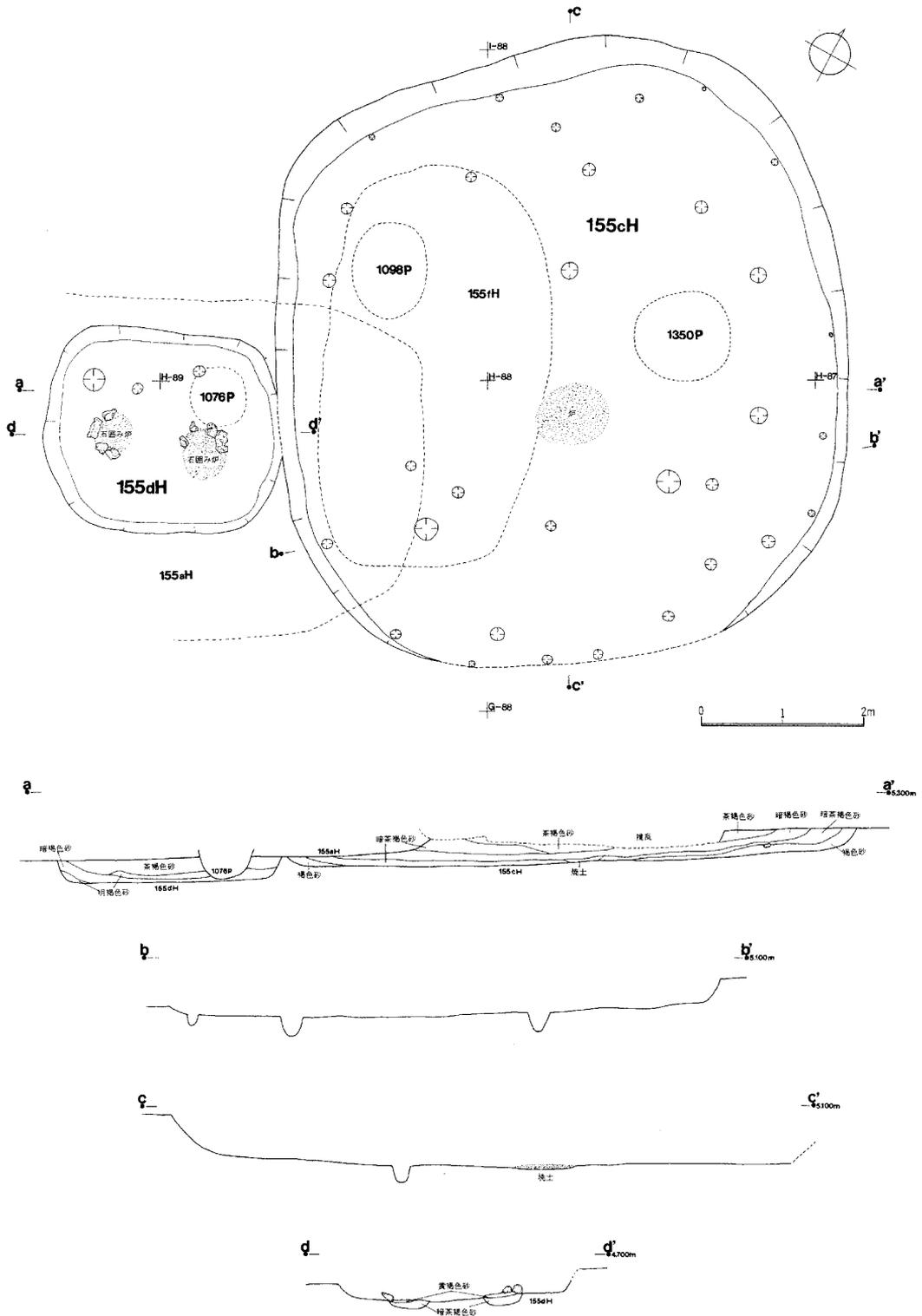
第113図 155b号竪穴床面(1)・埋土(2~5)出土土器



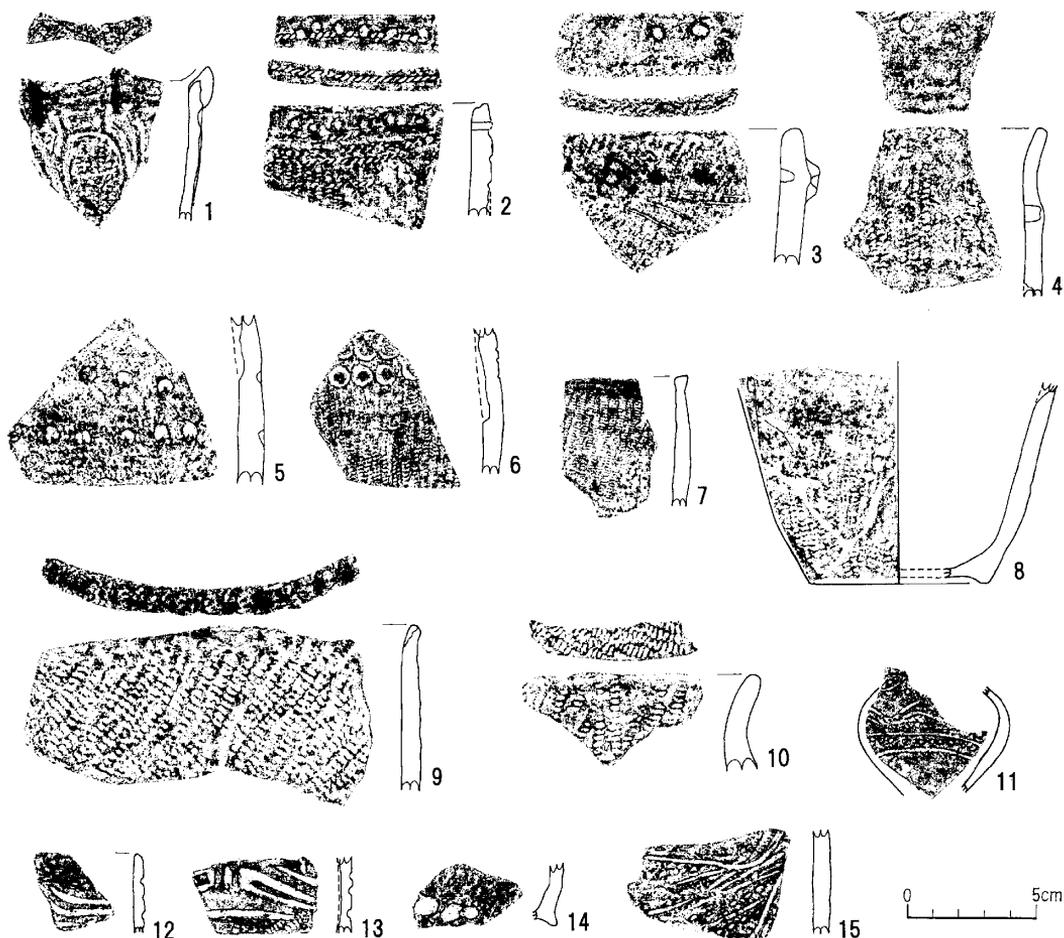
第114图 155b号竖穴埋土(1~23)出土土器



第115図 155b号竪穴炉(1・2)・埋土(3~22)出土石器



第116图 155c号竖穴、155d号竖穴平面图



第117図 155c号竪穴埋土(1~15)出土土器

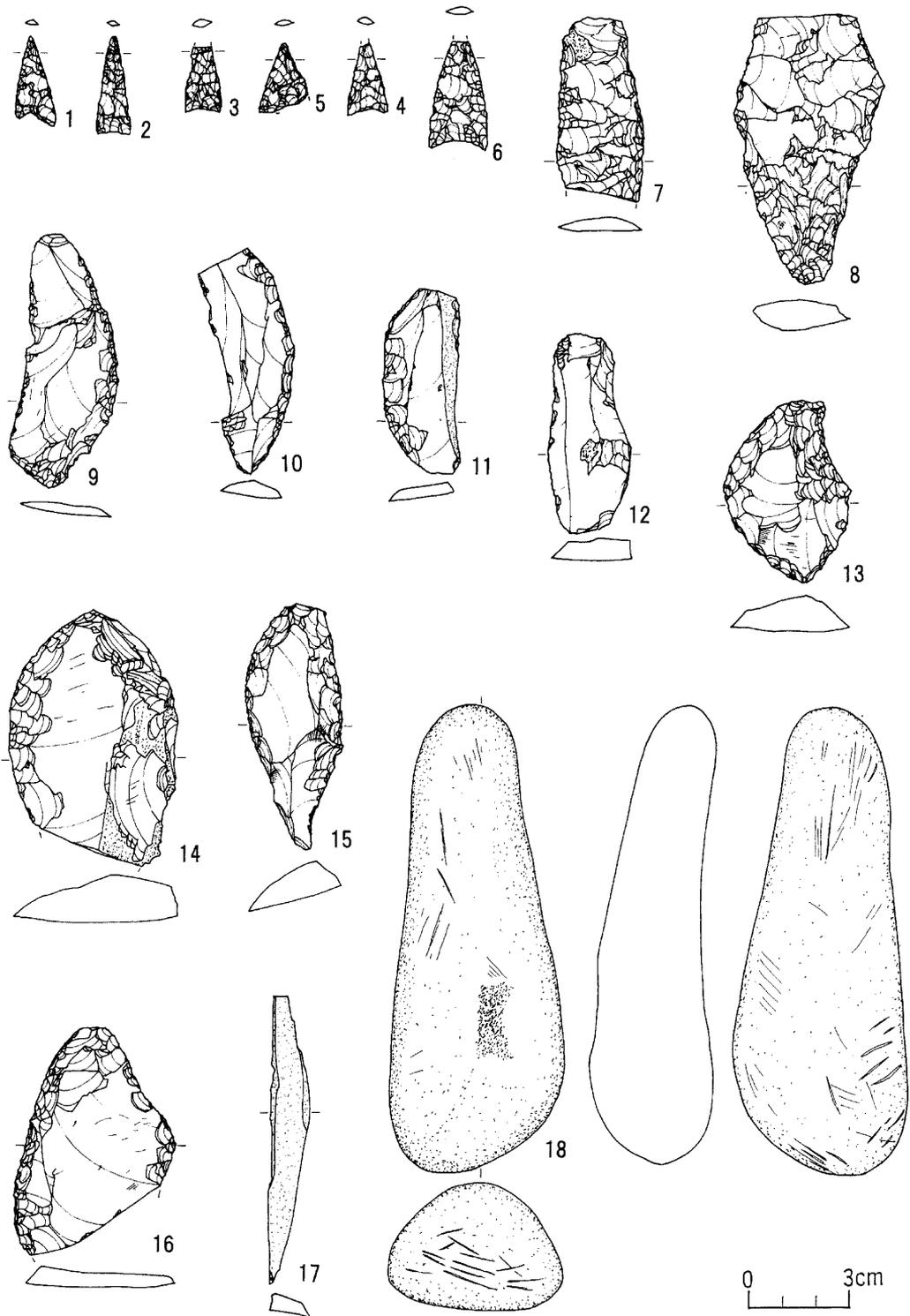
に位置づけられる。5は縄端圧痕文、6は円形刺突文が施される。宇津内系であろう。7~10は続縄文初頭、11~13はフシコタン下層式相当、14は無文のミニチュア土器の底部。太い刺突文が加えられている。15は縄文晩期幣舞式。

石器は全て埋土出土である。第118図-1~6は無茎石鏃。7は片面加工ナイフ。8は両面加工ナイフ。9~16は削器。17は棒状原石。18は擦石。18は泥岩製であり、他は黒曜石製である。

### 小 括

本竪穴の時期は続縄文後北C<sub>1</sub>式のピット1350に切られているためそれより以前であるが、詳細は不明である。

(武田 修)



第118图 155c号竖穴埋土(1~18)出土石器

## 155d 号 竪 穴

### 遺 構 (第116図)

本竪穴はH89グリッド杭の下部に位置する。東壁は一部検出できなかったが規模は長軸約2.90m、短軸推定2.50mの不整形を呈すると思われる。壁高は確認面から約40cmである。床面に2基の石囲み炉をもつ。南側の石囲み炉は1点だけ円礫を用いるが、大半は角礫であるものの全周しない。赤化は明瞭に認められない。

主柱穴は径約25cm、深さ約13cmのものが西壁隅にある。壁柱穴は径約15cm、深さ約9cmのものが2本ある。

### 遺 物 (第120図, 第122図-1~9)

第120図-1は炉跡内出土の縄文文字津内Ⅱb式であり、他は埋土出土である。2は字津内Ⅱb式。3~6は同Ⅱa式。3は斜位の太い隆起帯上に縄線文と上下端に縄端圧痕文が施される。7は突瘤文をもつが無文帯に縄線文が施されるもので、字津内Ⅱa式より古手であろう。8は幅広の無文帯下部に縄端圧痕文、9は縦位に縄端圧痕文をもつ。興津式相当であろう。

石器は全て埋土出土である。第122図-1は無茎石鏃。2は石槍。3は両面加工ナイフ。4は削器。5~7は搔器。8は片刃磨製石斧。9は刃部が欠失するが石斧である。8は青色泥岩製、9は泥岩製であり、他は黒曜石製である。

### 小 括

炉跡から出土した縄文文字津内Ⅱb式が本竪穴の時期と考えられる。(武田 修)

## 155e 号 竪 穴

### 遺 構 (第119図)

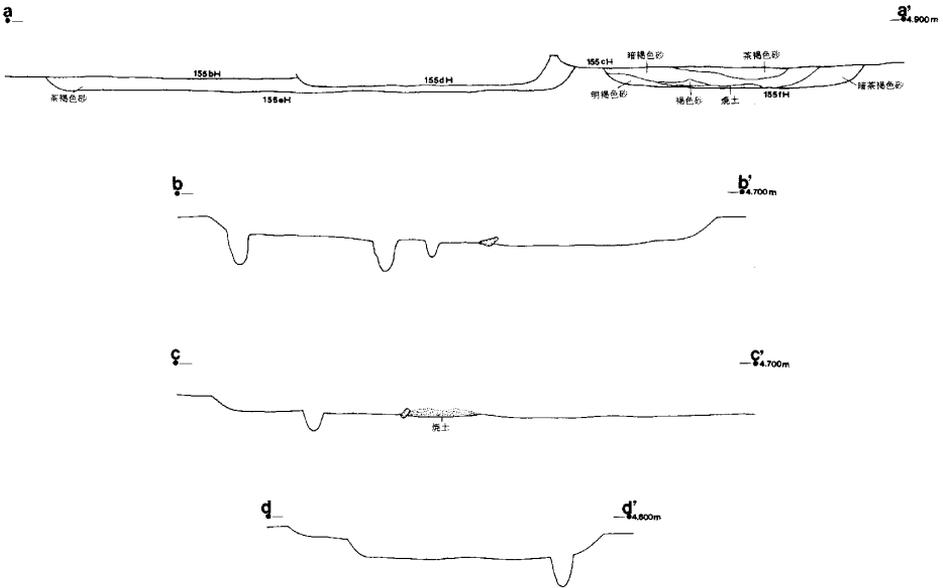
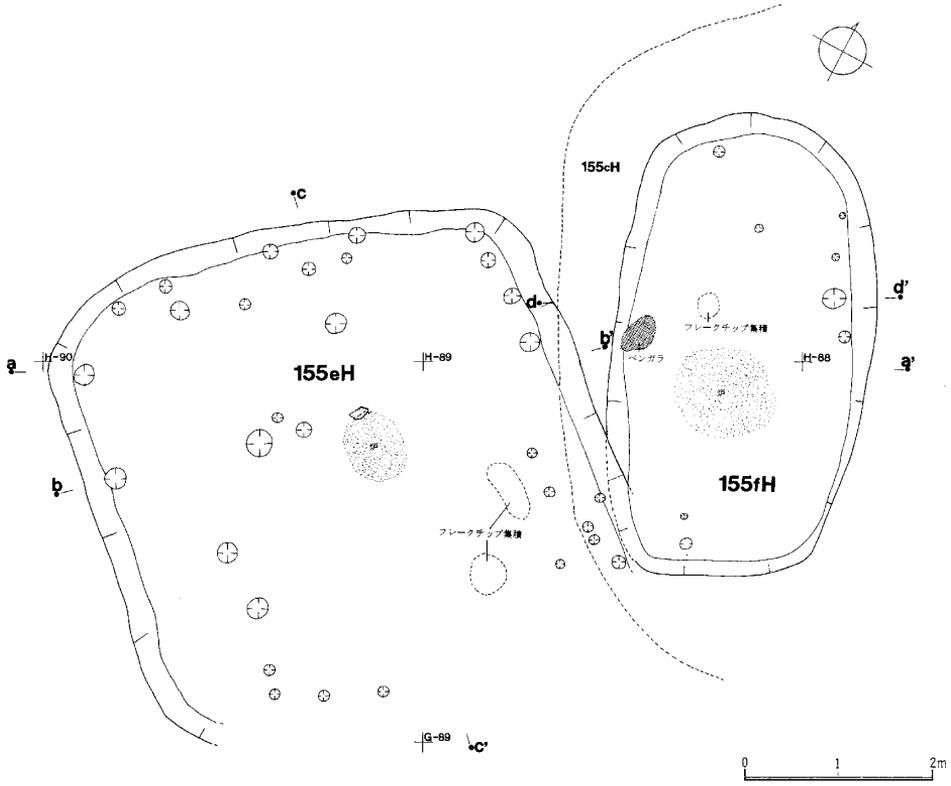
本竪穴は155b号・155d号竪穴の下面に位置し、北壁側の一部で155c号竪穴とも重複する。東壁側は検出できなかったものの規模は径約5.50mの方形を呈するのであろう。壁高は155b号竪穴の床面から約12cmを測る。床面のほぼ中央部に地床炉があり、縁にくぼみ石が刺さった状態で出土している。

径約20~28cm、深さ約23~33cmの主柱穴は不規則に配置される。径約10~25cm、深さ約7~23cmの壁柱穴は特に西壁と北壁隅で等間隔に配置されている。

北壁側に黒曜石を主体とした2箇所のフレーク・チップ集積がある。

### 遺 物 (第121図, 第122図-10~20)

全て埋土出土である。第121図-1は縄文後北C<sub>2</sub>・D式の注口部。2~4は字津内Ⅱb式。5・6は同Ⅱa式。7は字津内系の底部であろう。8・9は縄線文。10はボタン状貼付文に刺突文が施される。11は横位の縄文上に斜位の縄線文が施されたものであるが、焼成は字津



第119図 155e号竪穴、155f号竪穴平面図

内系と類似する。12は口唇部の内側に縄端圧痕文をもつ。13~15は興津式相当であろう。16・17は続縄文初頭であろう。

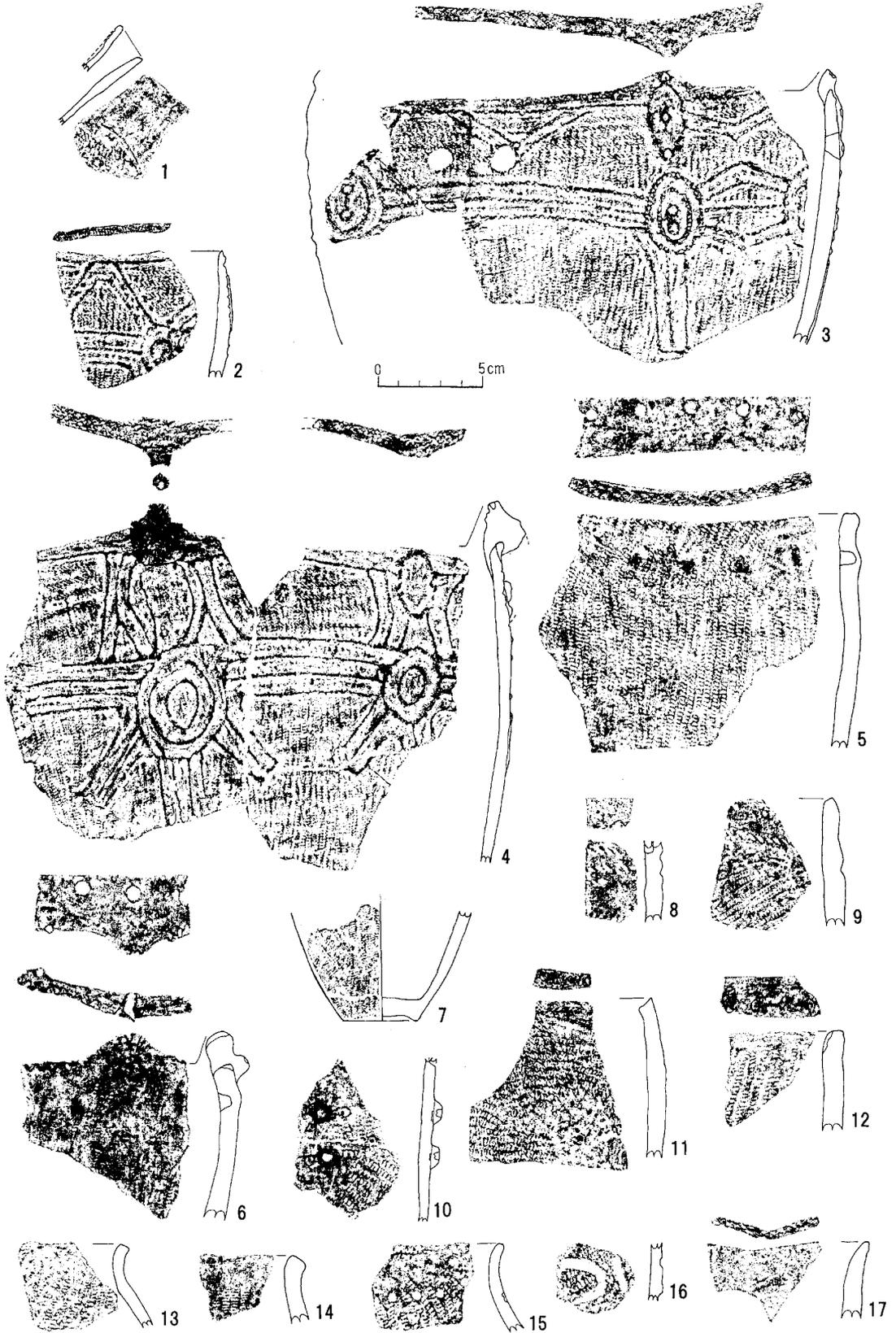
石器は第122図-10が床面出土であり、他は埋土出土。10は片面加工ナイフ。11~17は無茎石鏃。18は有茎石鏃。19は両面加工ナイフ。20は削器。全て黒曜石製である。

### 小 括

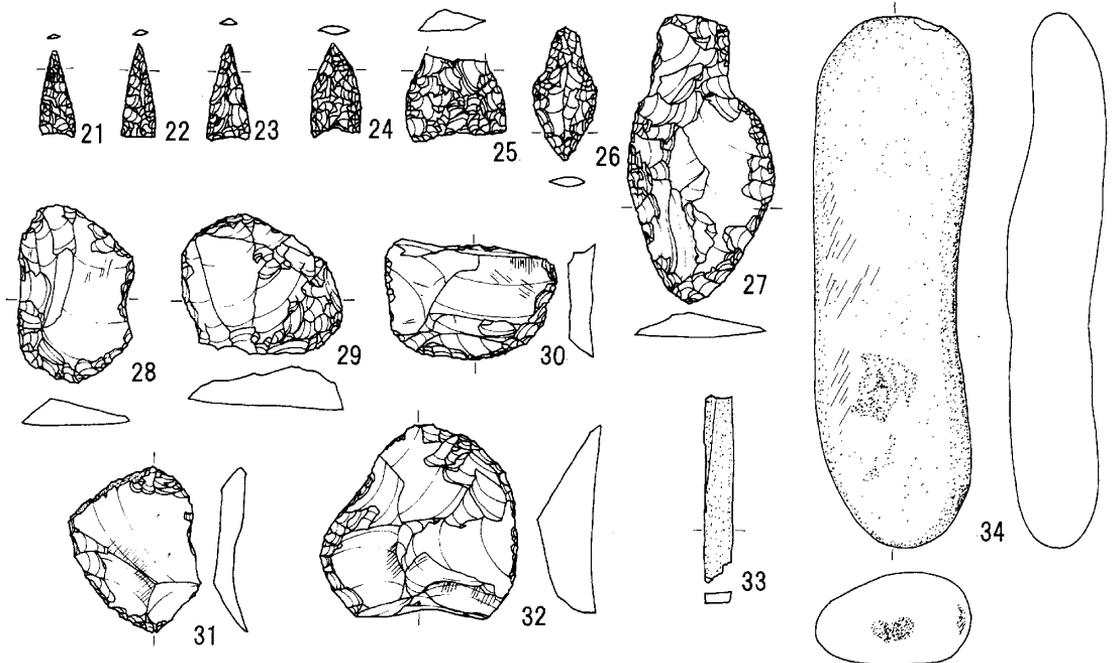
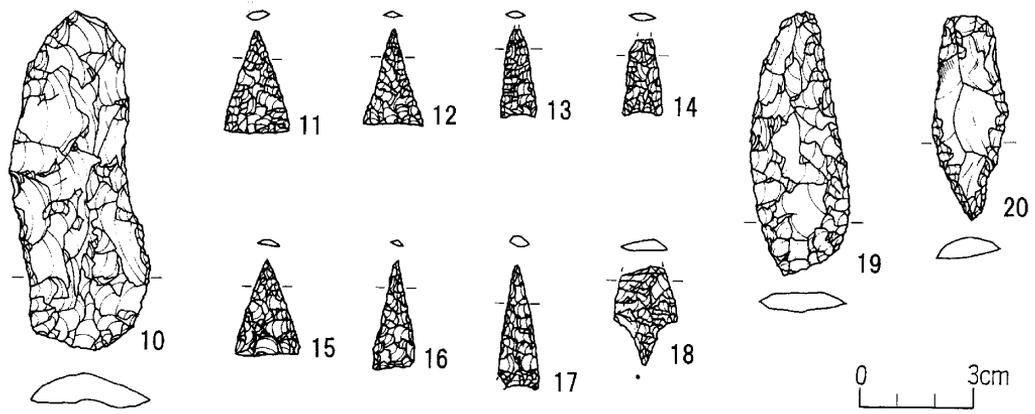
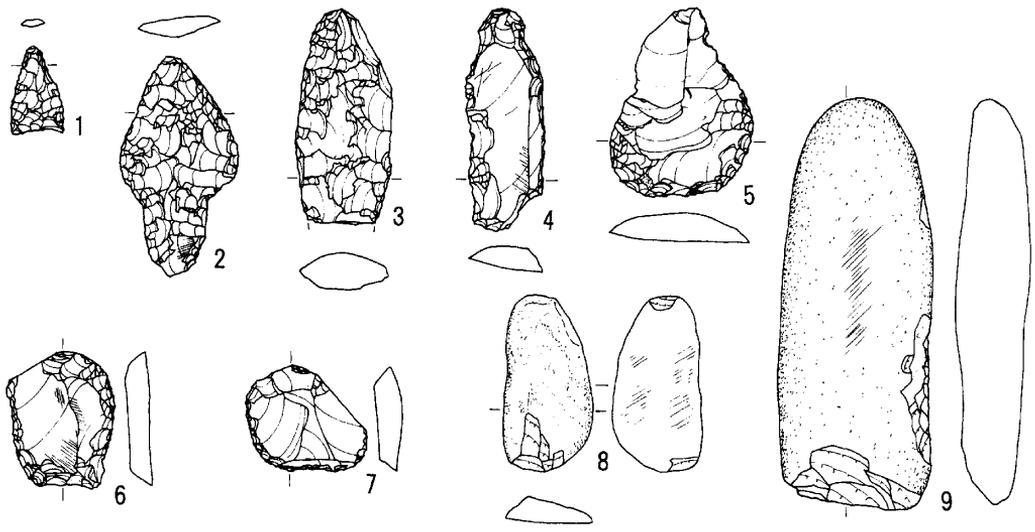
本堅穴の詳細な時期は不明であるが、155f号堅穴よりは新しい。 (武田 修)



第120図 155d号堅穴炉(1)・埋土(2~9)出土土器



第121图 155c 号竖穴埋土(1~17)出土土器



第122图 155d号竖穴埋土(1~9)、155e号竖穴床面(10)·埋土(11~20)、155f号竖穴埋土(21~34)出土石器

## 155f号 竪穴

## 遺 構 (第119図)

本竪穴は155c号竪穴の下面に位置する。規模は長軸約4.80m、短軸約2.70mの楕円形を呈する。壁高は155c号竪穴の床面から約20cmを測る。床面中央部からやや南寄りに良く焼けた径約90cmの地床炉をもつ。

主柱穴は北壁に径約25cm、深さ約34cmのものが1本だけみられる。壁柱穴は径約8～15cm、深さ約10～16cmのものを5本検出したが規則性はない。

炉跡に近接して黒曜石主体のフレーク・チップ集積が認められる。

## 遺 物 (第123図, 第122図-21～34, 図版17-4)

全て埋土出土である。第123図-1～5は統縄文字津内Ⅱb式。6も字津内系の底部と思われるもので、1条の浅い刻線文がみられる。7は無文帯、8は突瘤文下に縄線文をもつ。9は横走沈線文が施される。7～9は統縄文初頭であろう。

石器は全て埋土出土である。第122図-21～25は無茎石鏃。26・27は片面加工ナイフ。28～30は搔器。31・32は削器。33は棒状原石。34はたたき石。表裏面とも煤が付着する。34は泥岩製であり、他は黒曜石製である。

## 小 括

本竪穴の詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## 155g号 竪穴

## 遺 構 (第124図)

本竪穴は155e号・155f号竪穴の下面に位置する。規模は南壁約6.20m、やや丸みをもった北壁は約5.30m、西壁4.00m、東壁3.50mの不整形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは、155f号竪穴の床面から約30～40cmである。明瞭な炉跡は検出できなかった。

南壁側に2箇所炭化材集中域と炭化材配列ピットが認められた。南東端部の炭化材集中域は焼砂や焼砂を含む暗黄褐色砂にみられるもので、竪穴の内側に傾斜する状態で検出された。炭化材は3段に分かれており、上部の1段と2段の間は5cmほどの粗い砂質土があり、2段と3段の間は7～8cmほどの炭化層である。各段とも大型の炭化材は少なく、最大でも長さ約45cm、幅約10cmである。多くは長さ約5cm、幅約3～5cmの小型のもので構成されている。この炭化材集中域は床面のベンガラ散布域を覆っている。一方、南西端部の炭化材はこれほど明瞭でなく複数本がみられる程度である。床面には2箇所の焼土もあり、火災住居と想定される。

柱穴は径約5～20cm、深さ約6～21cmであり、西壁側の4本がほぼ等間隔に配置されるものの他は不規則である。

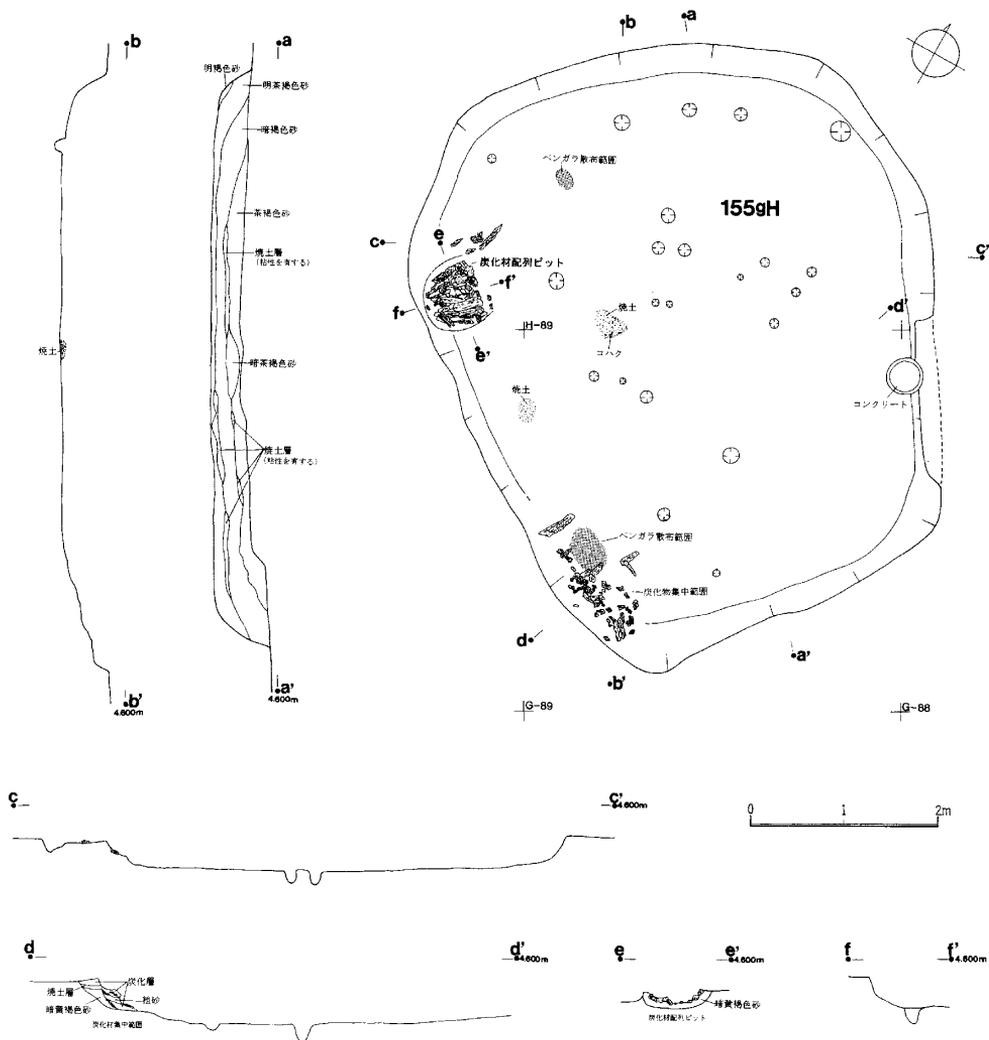


第123图 155f号竖穴埋土(1~9)出土土器

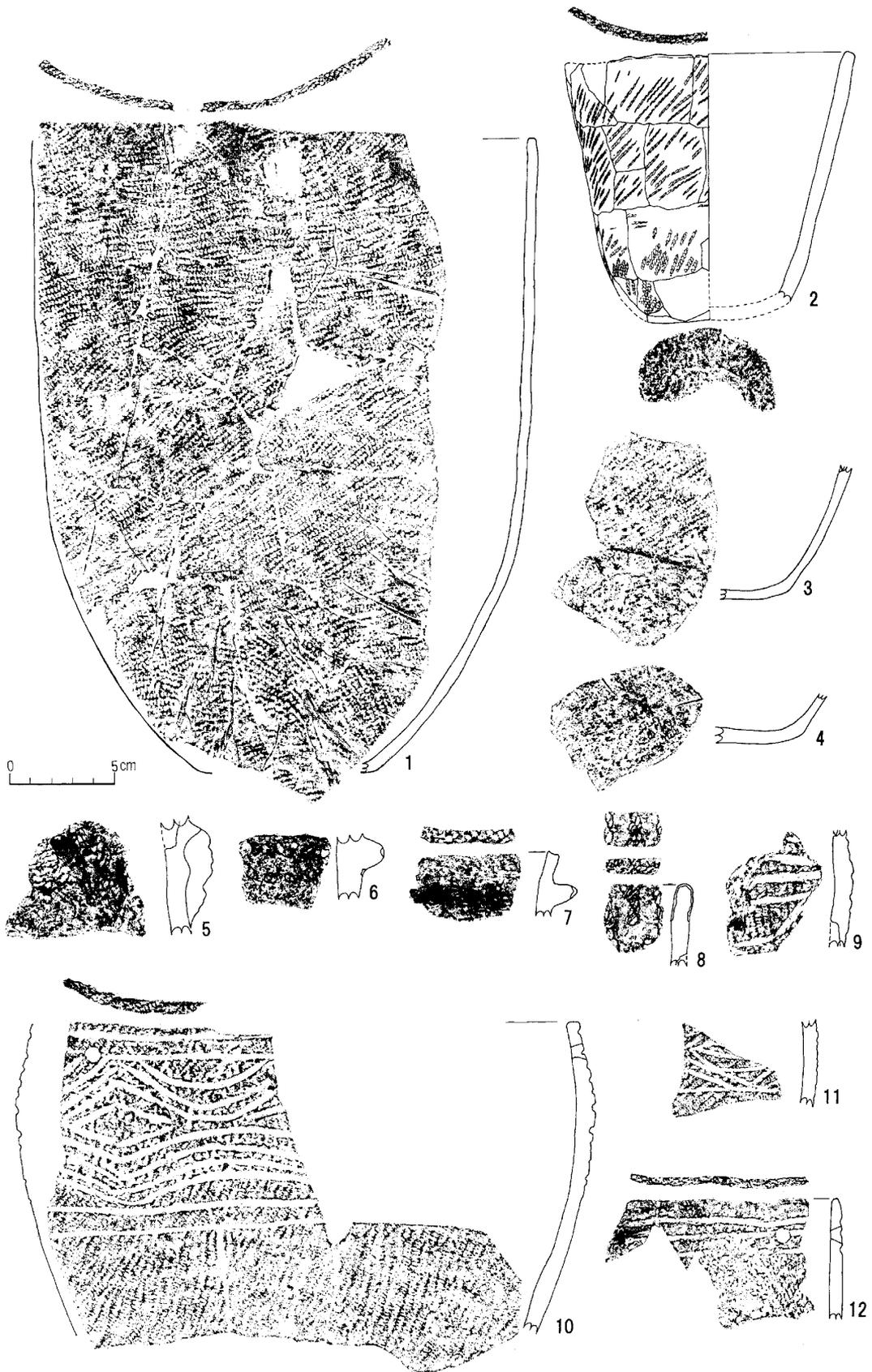
遺物 (第125図, 第126図-1~8, 第127図, 第128図, 第129図, 図版17-5)

第125図-1~4は床面出土の続縄文初頭の土器であり、他は埋土出土である。1は胴下部から底部にかけて極端に窄まる傾向である。2は口径14cm、器高12.5cmの小型土器。3・4は底部。部分的に赤色顔料が付着する。5~7は比較的太い隆帯をもつ。8は短縄文が押捺される。9~12は沈線文を主体としたもので、10はフシココタン下層式相当であろう。

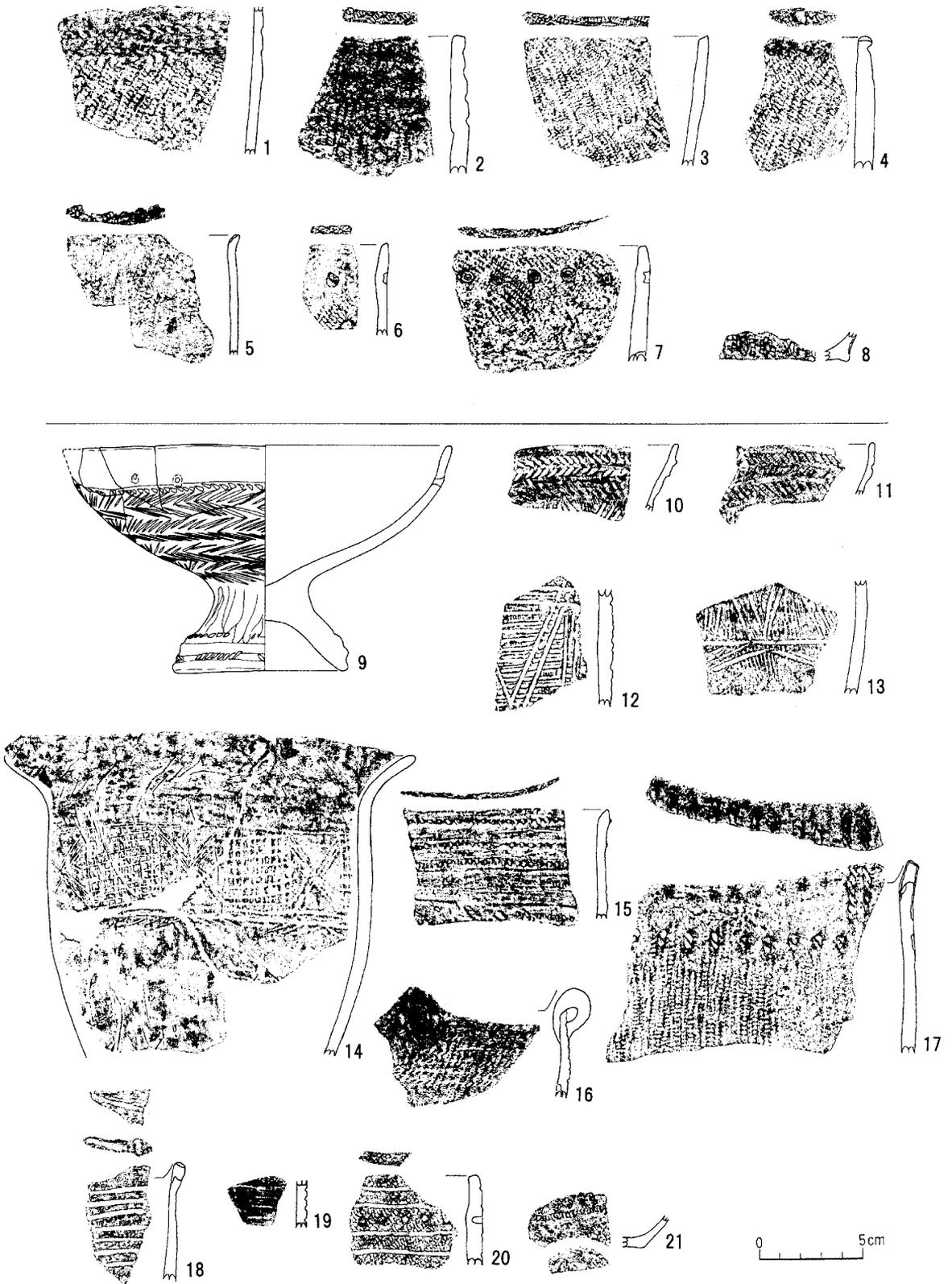
第126図-1~8は埋土出土である。1・2は太い縄線文、4は細い縄線文が口縁直下に施される。5は口唇部内側、6は口縁下部、8は底部に縄端圧痕文が押捺される。7は円形刺突文が連続する。1~7は続縄文初頭、8は縄文晩期中葉であろう。



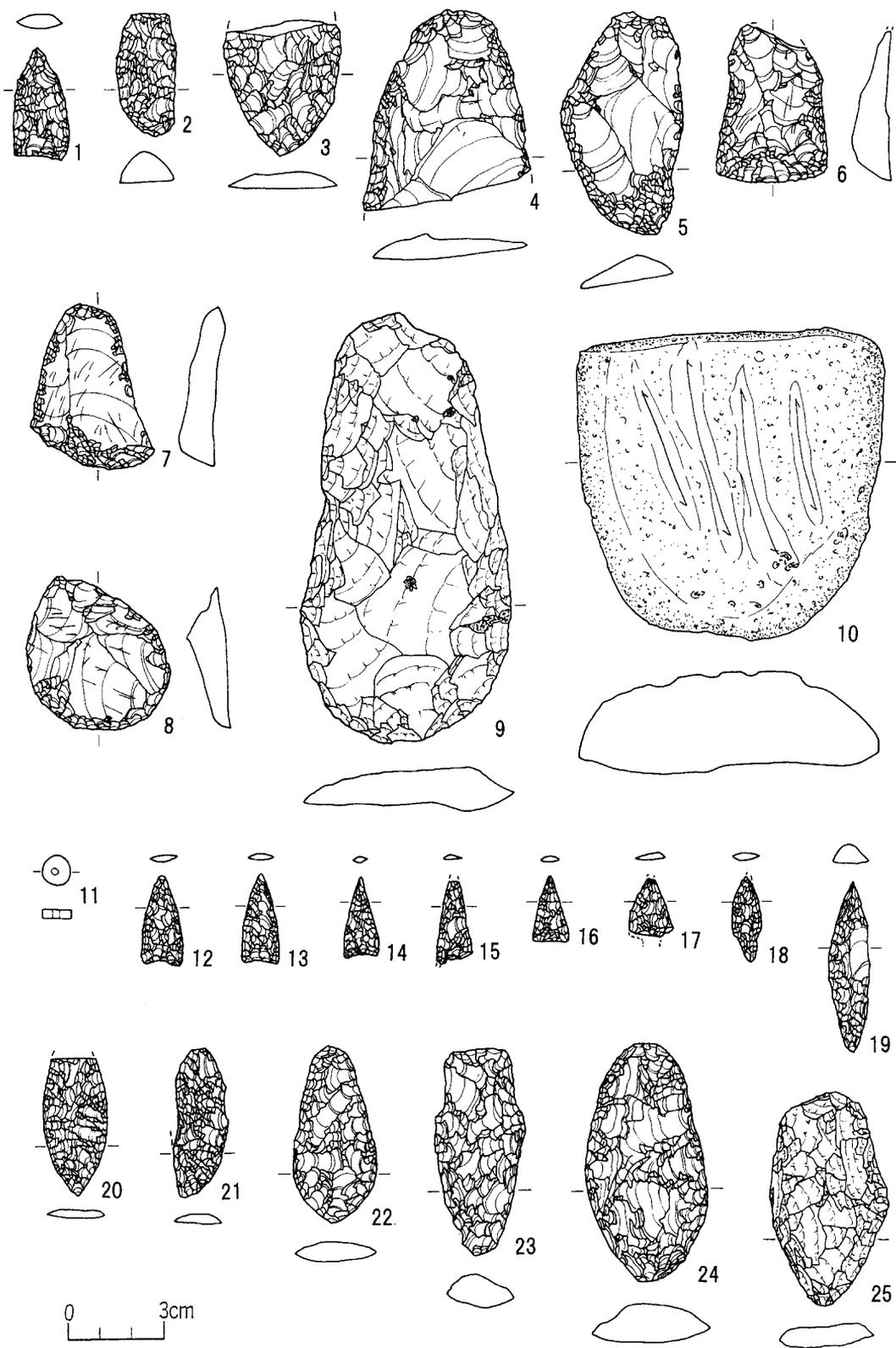
第124図 155g号竪穴、炭化材配列ピット平面図



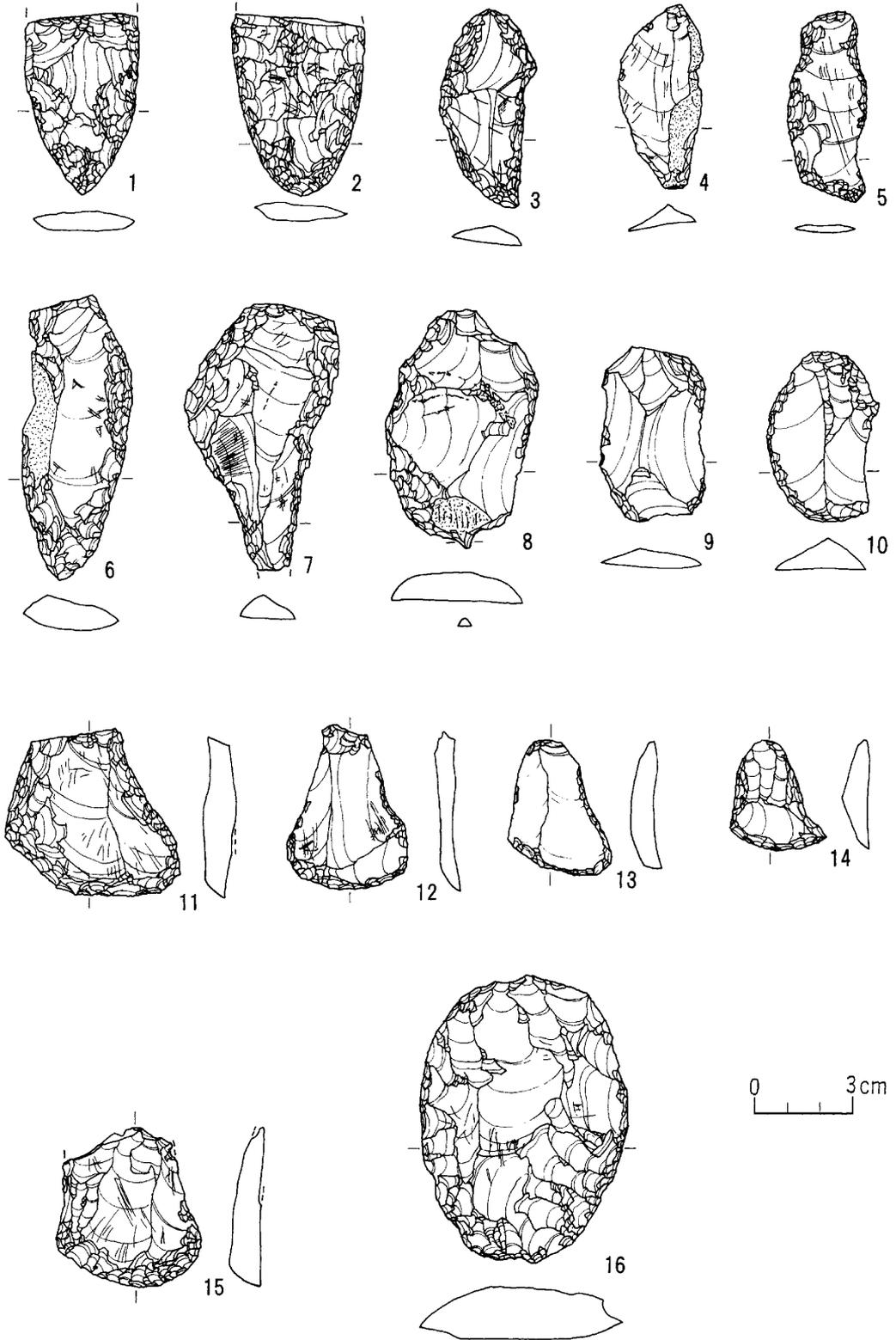
第125图 155g号竖穴床面(1~4)・埋土(5~12)出土土器



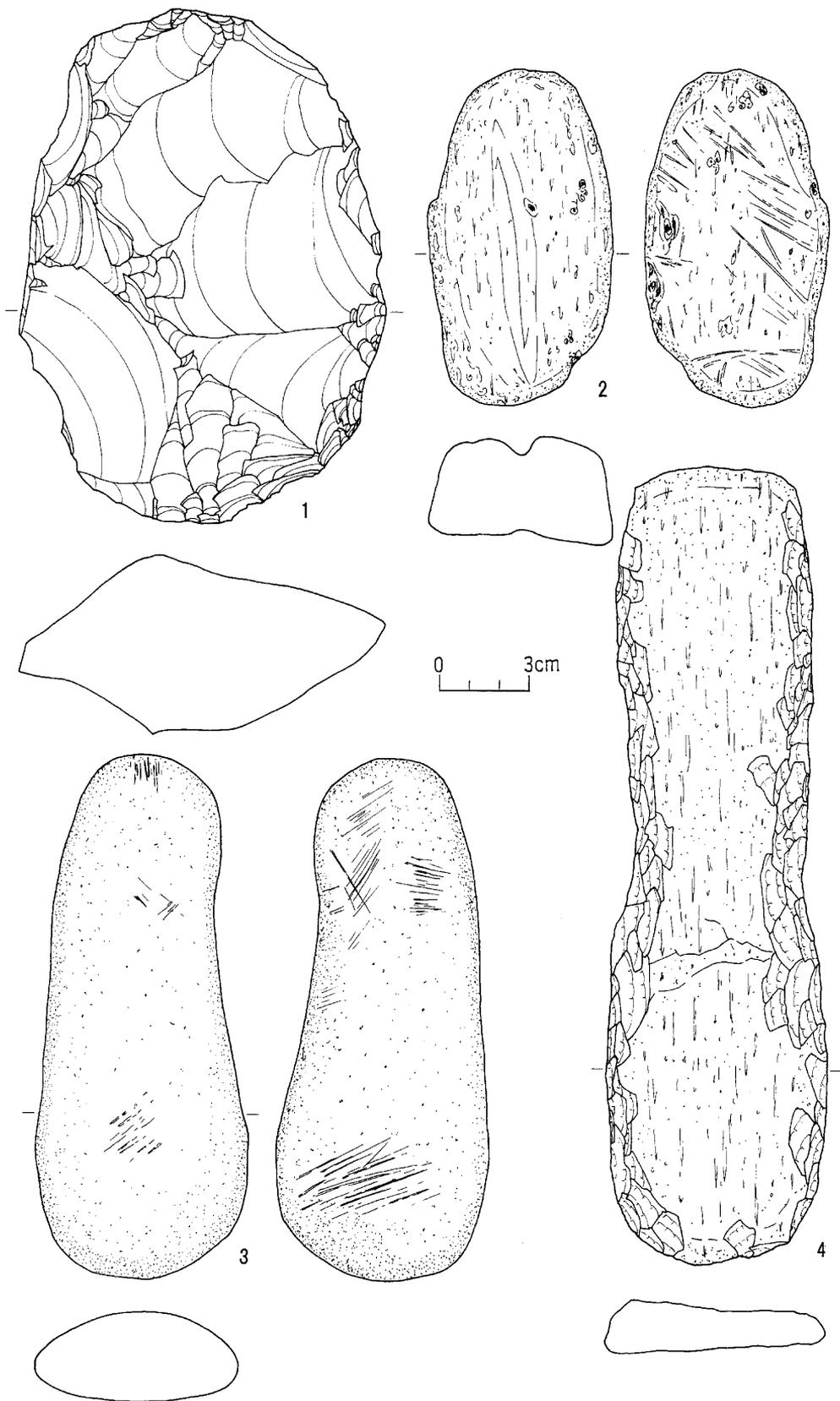
第126图 155g号竖穴埋土(1~8)、156号竖穴床面(9)·埋土(10~21)出土土器



第127图 155g号整穴床面(1~10)·烧土(11)·埋土(12~25)出土石器·琥珀玉



第128图 155g号竖穴埋土(1~16)出土石器



第129図 155g号竪穴埋土(1~4)出土石器

石器は第127図-1～10が床面出土である。1は無茎石鏃。2は肉厚の片面加工ナイフ。3は両面加工ナイフ。4・5は削器。6～8は搔器。9は両面加工ナイフ。10は有溝石製品。2・3は硬質頁岩製、9は玄武岩製、10は流紋岩質溶頁凝灰岩製である。11は焼土から出土した琥珀製の平玉。埋土から12～16は無茎石鏃、17・18は有茎石鏃。19は両先端部が石鏃状に鋭い両面加工ナイフ。20・22～25は両面加工ナイフ、21は片面加工ナイフ。19・22は頁岩製、25は玄武岩製であり、他は黒曜石製である。

第128図は埋土出土である。1・2は両面加工ナイフ。3～9は削器。10～15は搔器。16は表裏面とも粗く剥離された楕円形状の削器。9・14・15は頁岩製、13はメノウ製他は黒曜石製である。

第129図は埋土出土である。1は残核。2は表面に鋭い「V」字状の溝がある有溝石製品で、裏面は研磨された凹帯となり細い使用痕が斜位にみられる。3は擦石。4は中央部の両側が凹状に調整された両頭石斧。1は頁岩製、2は軽石製、3は泥岩製、4は蛇紋岩製である。

## 小 括

本竪穴は続縄文初頭の時期である。

(武田 修)

## 156号 竪 穴

### 遺 構 (第130図, 図版18-1)

本竪穴はK91グリッドに位置し、摩周b火山灰を切り込んで構築されている。そのため竪穴の壁際の埋土中に摩周b火山灰の流れ込みがみられる。また、竪穴全体を樽前a火山灰が覆っている。

竪穴の規模・形態は東壁が約4.50m、南壁が約3.80m、西壁が約4.40m、北壁が約4.00mの方形を呈する。壁高は確認面から約50cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。竪穴の中央には約100×60cmの範囲で炉跡の焼土が検出された。

カマドは東壁中央に構築され、構築材は粘土である。カマドの焼土の上に1点と南側に1点の平らな礫が検出されていることから、袖部には礫が用いられていたものと考えられる。煙道の長さは約50cmあり、緩やかに立ち上がる。カマドの焼土には骨片を含んでいる。カマドの北側の床面からは第126図-9の高杯が出土している。

柱穴は主柱穴が径18~22cm、深さ24~29cmのものが2本、壁柱穴は径10~16cm、深さ8~21cmのものが南壁で4本、北壁で4本、西壁と東壁でそれぞれ1本確認され、その他に径8~12cm、深さ10~16cmの柱穴が5本確認された。

### 遺 物 (第126図-9~21, 第131図, 図版18-2)

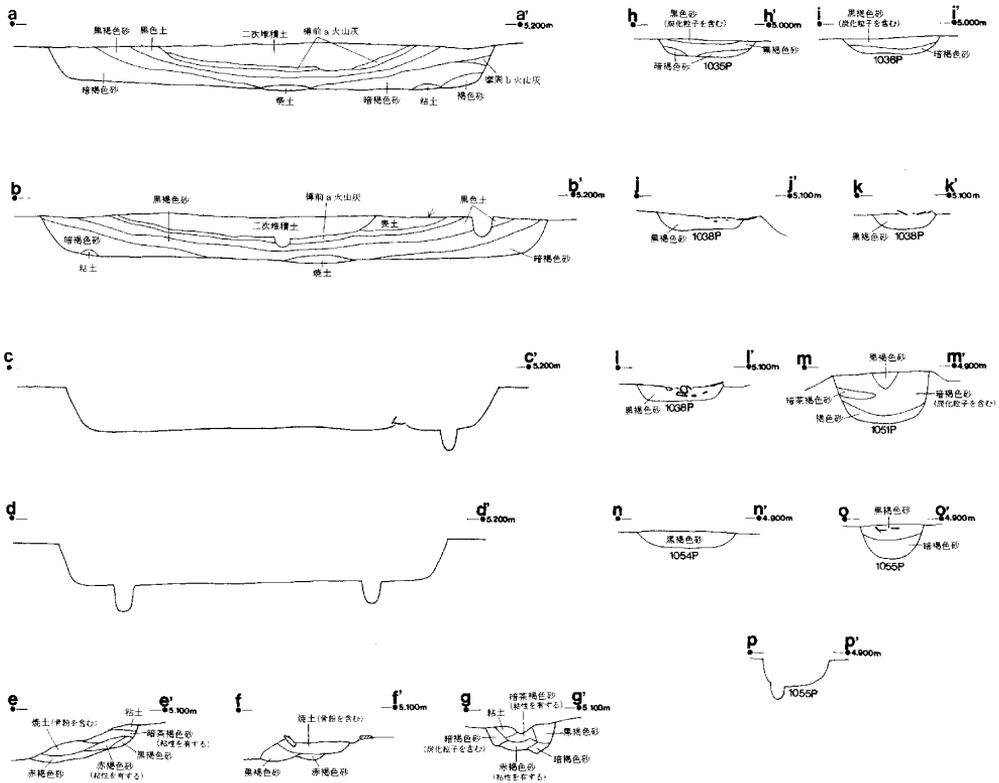
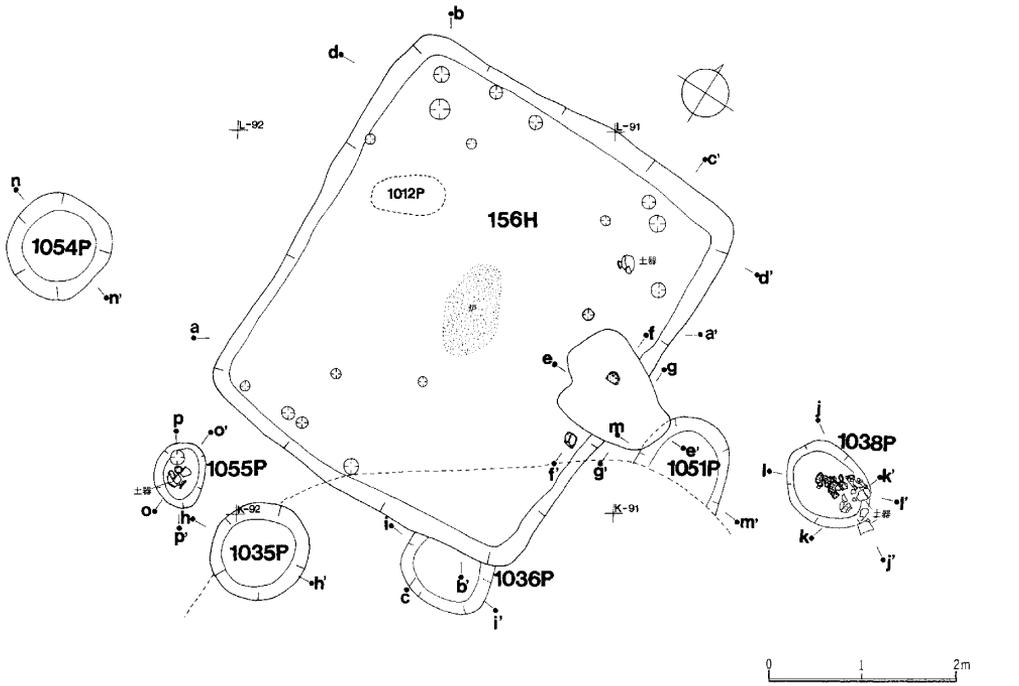
床面からは第126図-9の高杯が出土している。口径18.7cm、器高10.4cmで矢羽根状の刻線文を施す。埋土からは10~14が擦文土器。15は続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。16は宇津内Ⅱb式。17~20は続縄文初頭。21は縄文晩期中葉の底部。

石器は埋土出土。第131図-1~3が無茎石鏃。4は有茎石鏃。5は片面加工ナイフ。6~8は両面加工ナイフ。8はメノウ製。9~12は削器。12は硬質頁岩製。13は搔器。14は異形石器、上部の中央には孔を穿ち、下部は半円形を呈する。15は泥岩製の石鑿。16は軽石製で表面に刻線状の使用痕が見られる。8・12・15・16以外は黒曜石製。

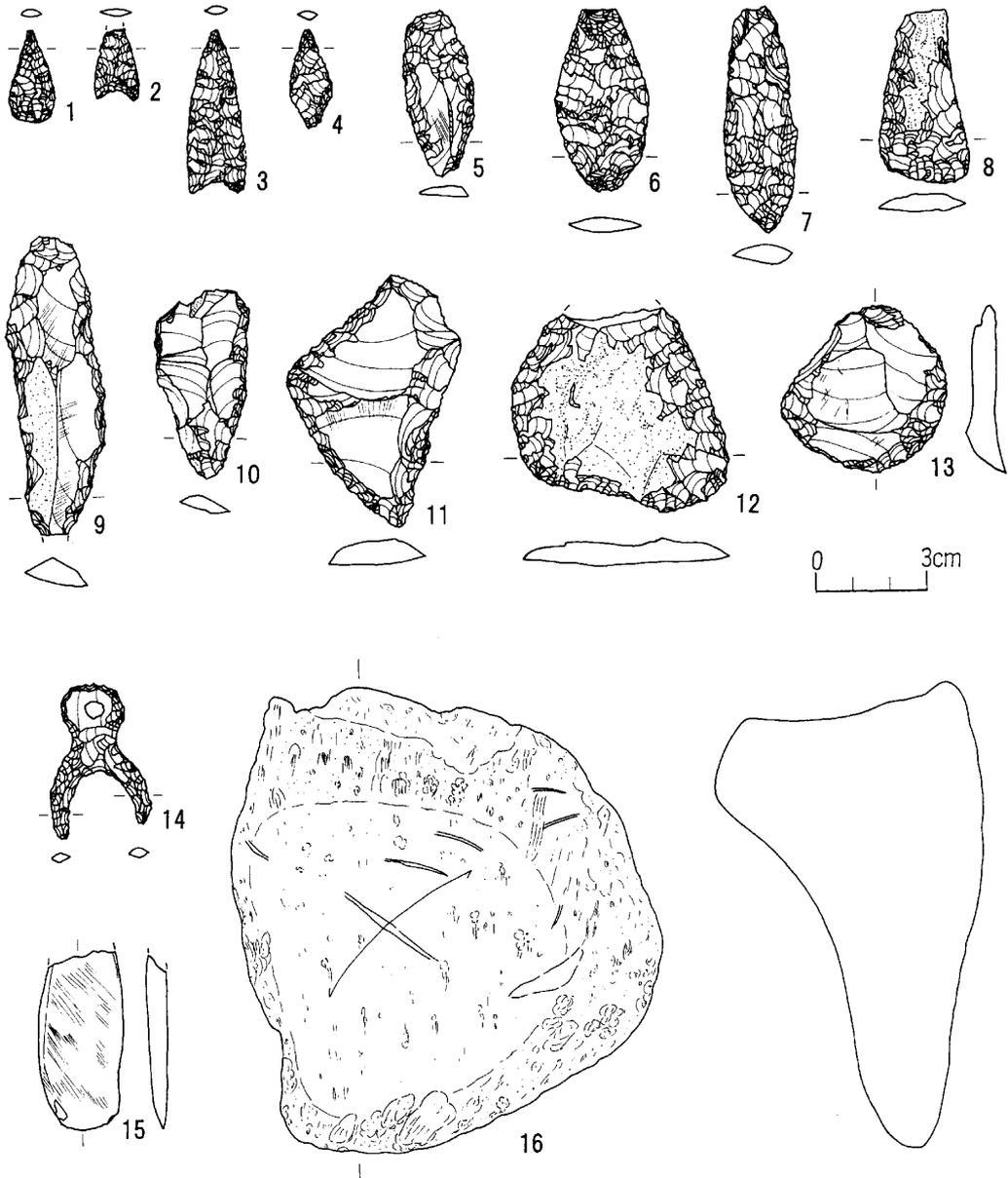
### 小 括

本竪穴は擦文期の竪穴であり、カマドの北側の床面から高杯が出土していることから宇田川編年後期に比定される。

(佐々木 覚)



第130図 156号竪穴、ピット1035、1036、1038、1051、1054、1055平面図



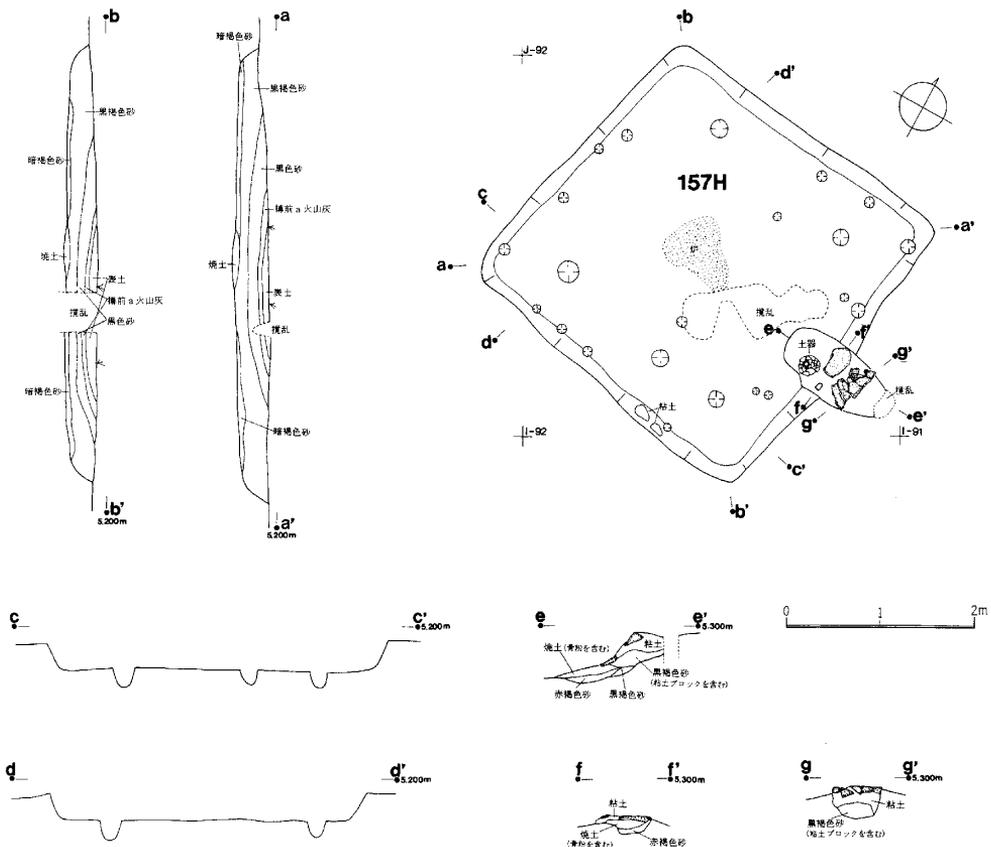
第131圖 156号竖穴埋土(1~16)出土石器

# 157号 竪穴

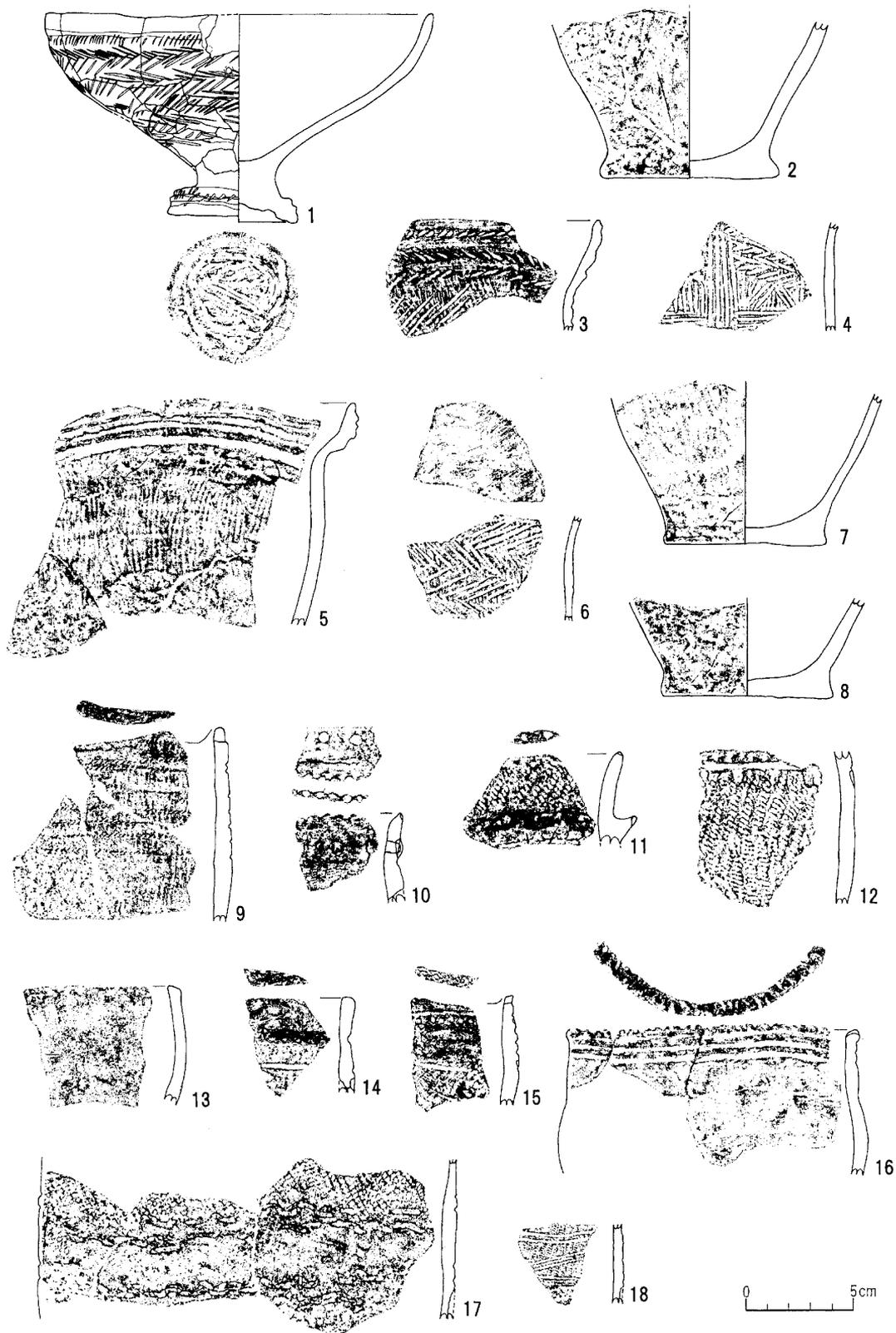
## 遺 構 (第132図, 図版18-4)

本竪穴はI 91グリッドに位置し、一辺約3.60mの方形を呈する。各壁の長さは東壁と南壁が約3.60m、西壁が約3.30m、北壁が3.40mを測る。壁高は確認面から約30cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。竪穴の埋土には樽前 a 火山灰が認められた。

竪穴の中央に約80×60cmの範囲で炉跡の焼土があり、焼土の中から骨片が検出された。カマドは東壁中央に構築されており、構築材は粘土である。煙道の長さは先端部が攪乱を受けているが約60cmと思われ、緩やかに立ち上がる。カマド燃焼部の上には第133図-1の高杯が出土しており、燃焼部に近い煙道の粘土ブロックを含んだ黒褐色砂中からは第133図-2の土器の底部が出土している。燃焼部と煙道との境の上面には礫が認められたが、袖部に用いられていたものと思われる。煙道部が屋外に出た部分の上面を覆って6点の礫が検出されているが、煙道の補強のために用いられたものと考えられる。カマドの焼土中からも骨片が検出されている。炉跡とカマドの間の床面の一部は攪乱を受けている。



第132図 157号竪穴平面図



第133図 157号竪穴カマド(1)・煙道(2)・埋土(3~18)出土土器

柱穴は径14~22cm、深さ16~23cmの主柱穴が4本検出され、壁柱穴は径8~14cm、深さ7~18cmのものが北壁と東壁で2本、南壁と西壁で各4本検出されており、その他に径8~16cm、深さ8~16cmのものが6本検出されている。

南壁際の埋土中から粘土塊が2点出土している。

### 遺物 (第133図, 第134図, 図版18-3)

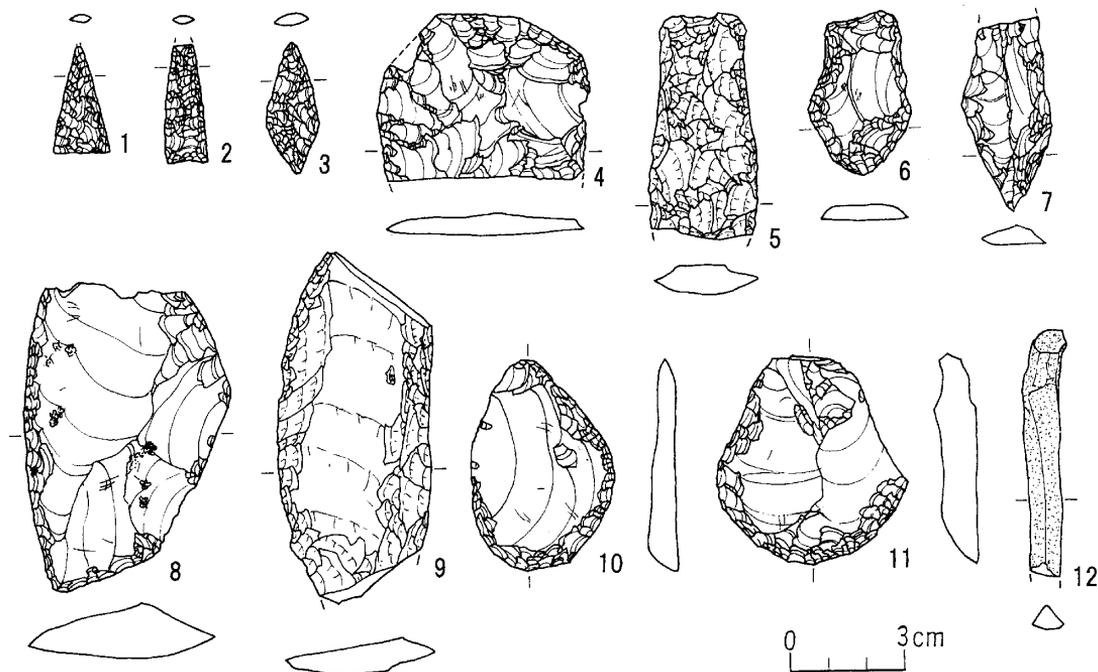
床面からは遺物は出土していないが、カマドから第133図-1の高杯が出土している。口径18.5cm、器高14.8cmで口縁部に沈線文と短刻文を巡らし、その下に矢羽根状の刻線文を施す。2は煙道から出土した擦文土器の底部。3~6は擦文土器。7・8は擦文土器の底部。9は宇津内Ⅱb式。10は宇津内Ⅱa式。11~16は続縄文初頭。17は縄文晩期後葉緑ヶ岡式。18は縄文晩期中葉。

石器は埋土出土。第134図-1・2は無茎石鏃。3は有茎石鏃。4・5はナイフ片。6・7は片面加工のナイフ。8・9は削器。10・11は搔器。12は棒状原石。5・9は玄武岩製それ以外は黒曜石製。

### 小括

本竪穴は擦文期の竪穴で、カマド出土の高杯から宇田川編年後期と考えられる。

(佐々木 寛)



第134図 157号竪穴埋土(1~12)出土石器

## 157a号 竪 穴

### 遺 構 (第135図, 図版19-1)

本竪穴は157号竪穴北西側に検出された。規模は長軸約7.80m、短軸約7.20mの不整六角形を呈する。壁高は確認面から約70cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。竪穴埋土中の北東壁際に5個の礫に囲まれた炉跡が認められた。また、北東壁際から竪穴中央部床面にかけてベンガラを含む赤褐色砂が検出された。

竪穴の中央部には径約40cmの範囲に焼土が認められ、周りに3個の礫が認められた。埋土中の炉跡は157a号竪穴に伴うものではなく、後から構築されたものと考えられる。床面炉跡、埋土中炉跡ともに焼土中に骨片が含まれていない。

柱穴は径8～16cm、深さ7～18cmのものが13本確認されている。炉の東側床面の2箇所から黒曜石のフレーク・チップの集積が検出され、ベンガラを含む赤褐色砂の上面からも1箇所黒曜石のフレーク・チップ集積が検出された。竪穴外の西側には玄武岩のフレーク・チップ集積が認められた。

### 遺 物 (第136図, 第137図, 第138図, 第139図, 第140図, 第141図, 第142図, 第143図, 図版19-2～5)

床面から第136図-1～4が出土している。1～3は縄線文をもつ縄文晩期から続縄文初頭。4は続縄文初頭。埋土から5・6は宇津内Ⅱa式。

第137図-1も宇津内Ⅱa式。2～4は続縄文初頭。5は口唇部に刻みをいれ、口唇部直下に突瘤文をもつ。突瘤文の下には細い2条の沈線文を巡らし、下に2～3条の細い沈線文を「」状に配し、その中に丸い縄線文を施す。口径31cm、器高41cmの続縄文初頭。

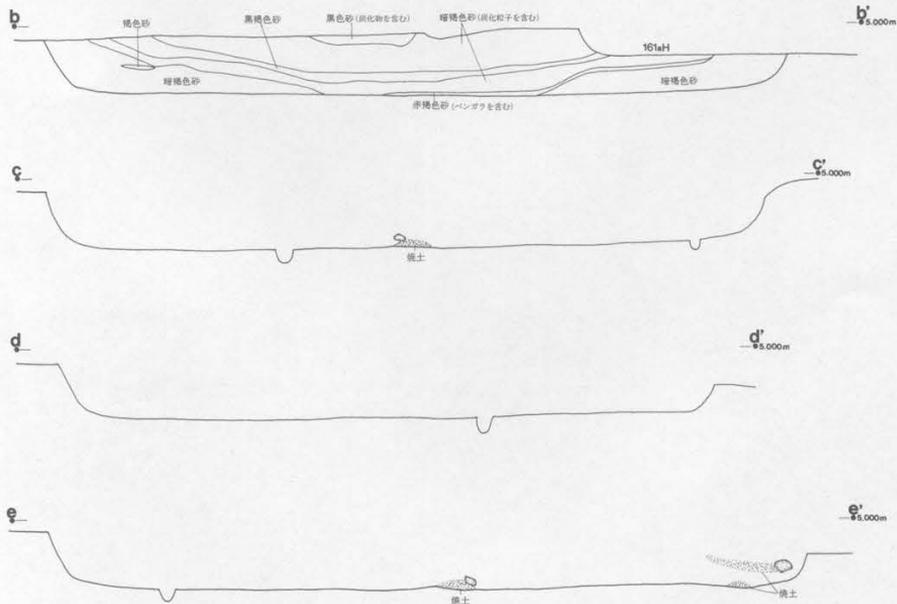
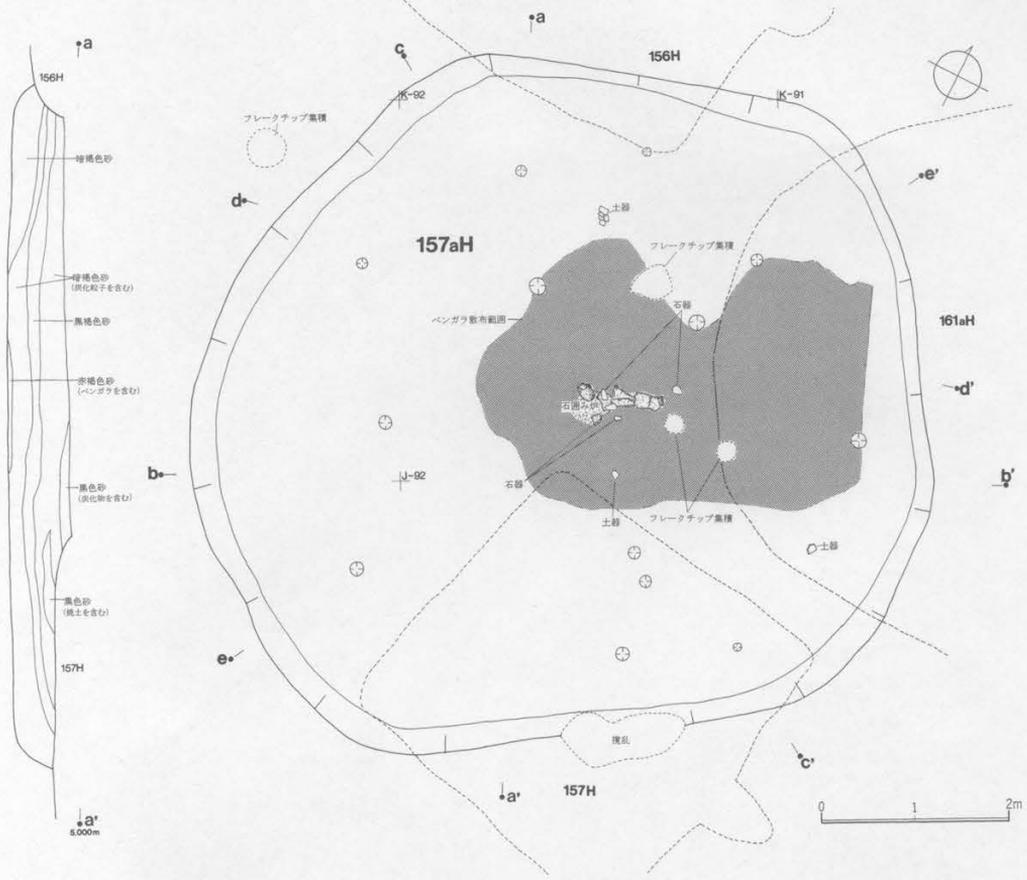
第138図-1～3は続縄文初頭。1は突瘤文と縄端圧痕文をもつ。2は2個一對の突起をもち、口縁部の1箇所に2本の弧状の沈線文を配し、片側の突起の内側にのみ4個の突瘤文をもつ。3は口縁部に縄端圧痕文を巡らし、下に2本の沈線文の間に縄端圧痕文を配したものを2段巡らす。2は口径12.8cm、3は口径37.5cm、どちらも底部が欠失しているため器高は不明である。

第139図-1～3も続縄文初頭。1は口縁部に横位の縄文を施す。口径14cm、器高16.3cm。2は無文、補修孔が見られる。口径14.2cm、器高は胴部が欠失しているため不明。3は口径約35cmの大型土器。

第140図-1～9は続縄文初頭。

第141図-1～8は続縄文初頭。9～13は縄文晩期から続縄文初頭。

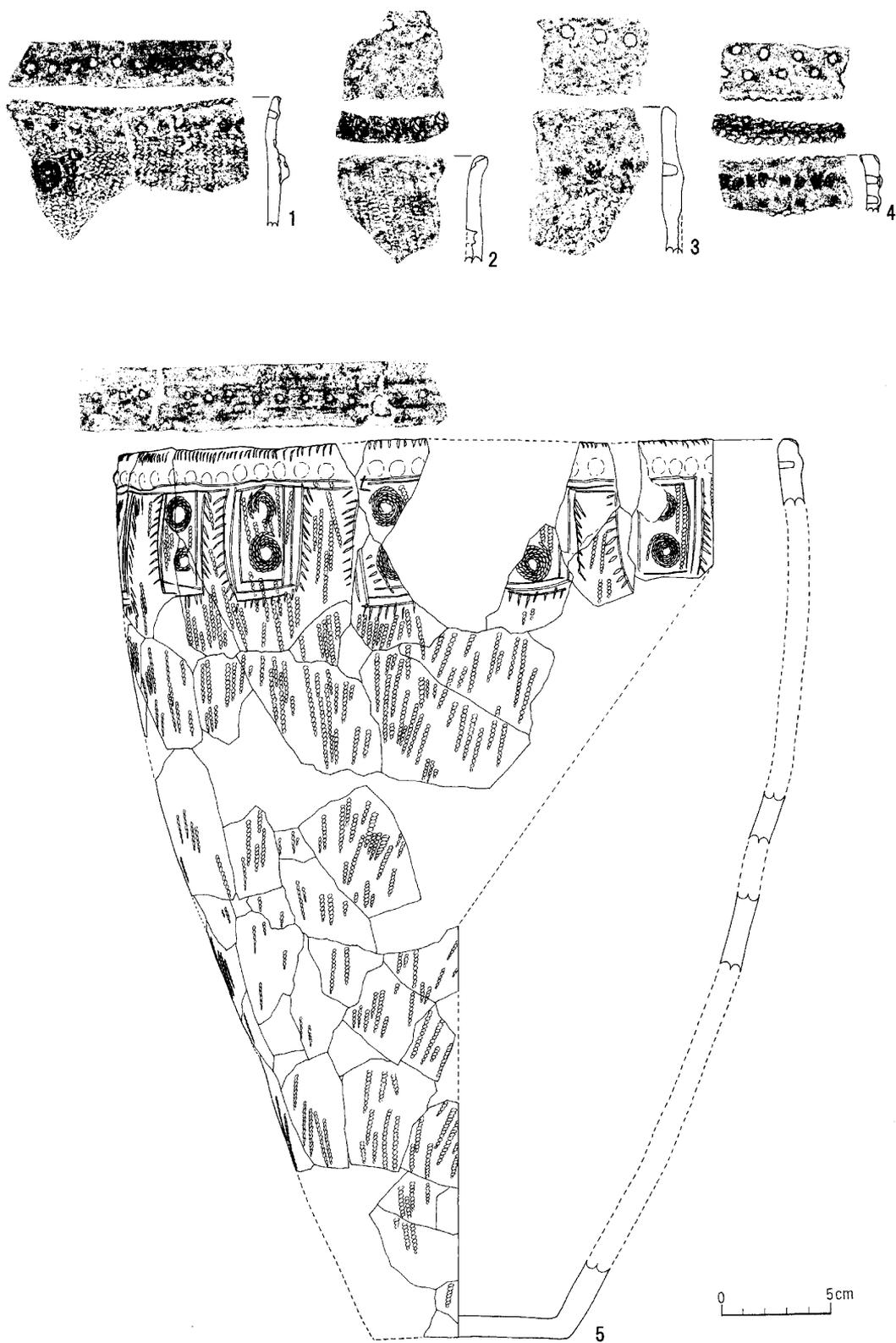
石器は第142図-1が床面から出土した両面加工ナイフの未製品。埋土からは2～10が無茎石鏃。11・12は有茎石鏃。13は石槍。14～18は両面加工のナイフ。20～22は削器。23・24は棒状原石。25はくぼみ石、両面に窪みが見られる。14・15は頁岩製、18は玄武岩製、25は砂岩製、



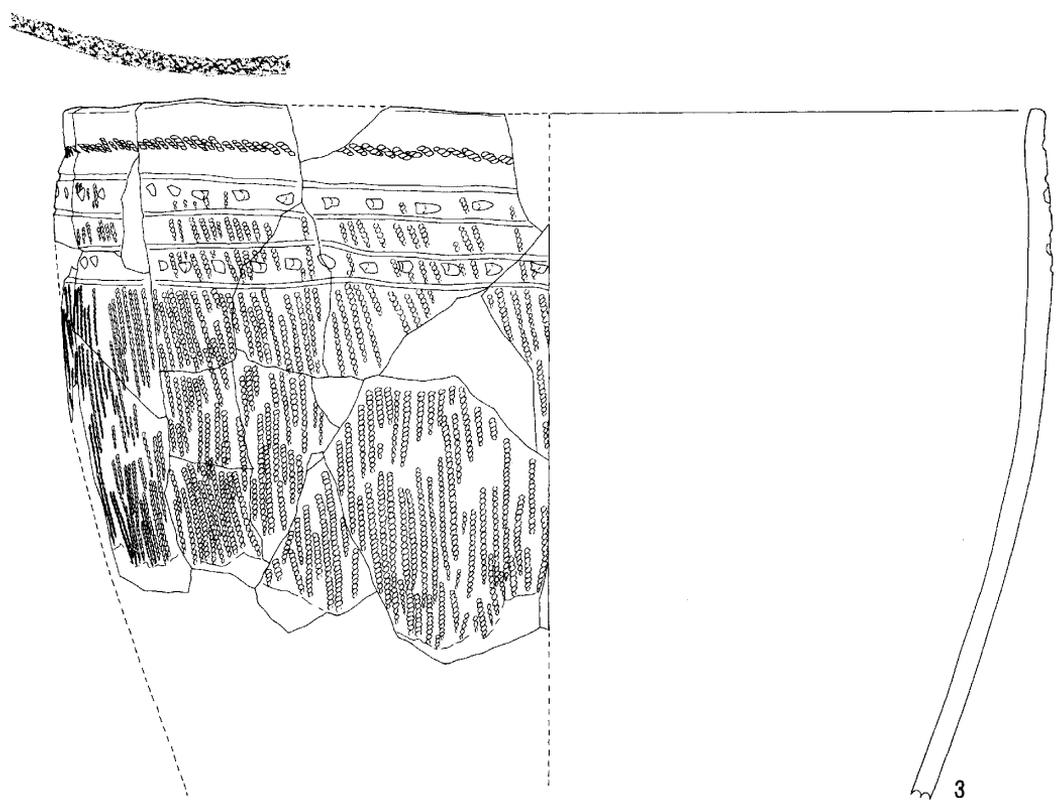
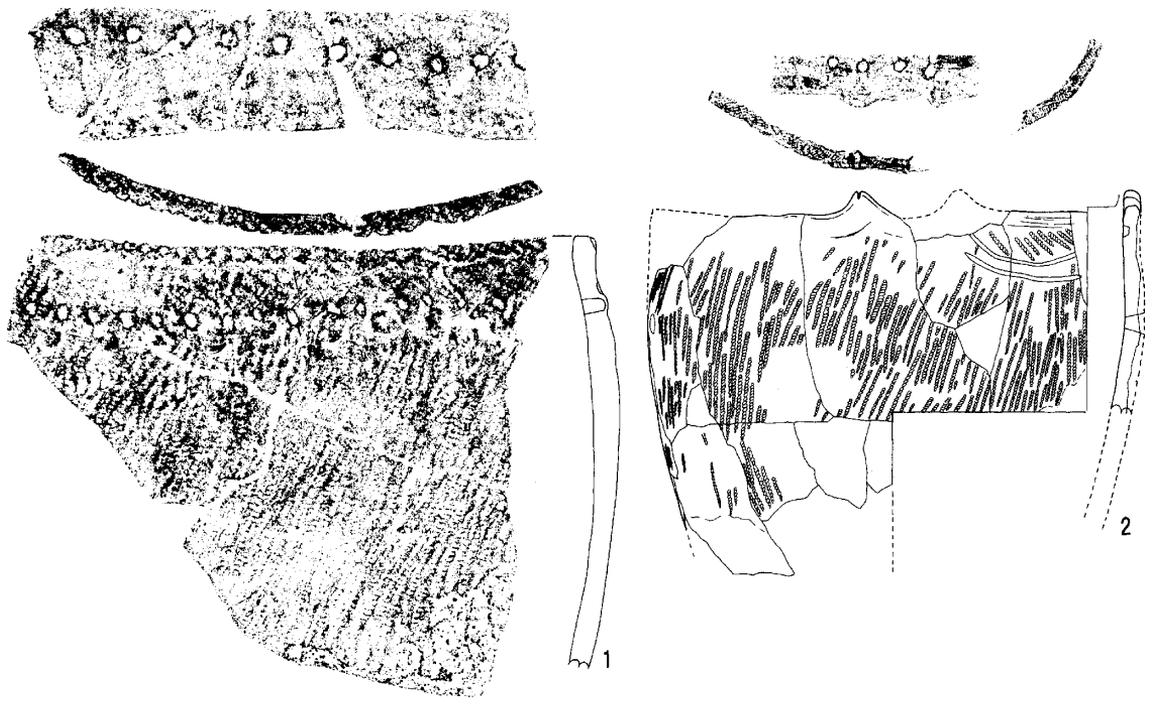
第135図 157a号竪穴平面図



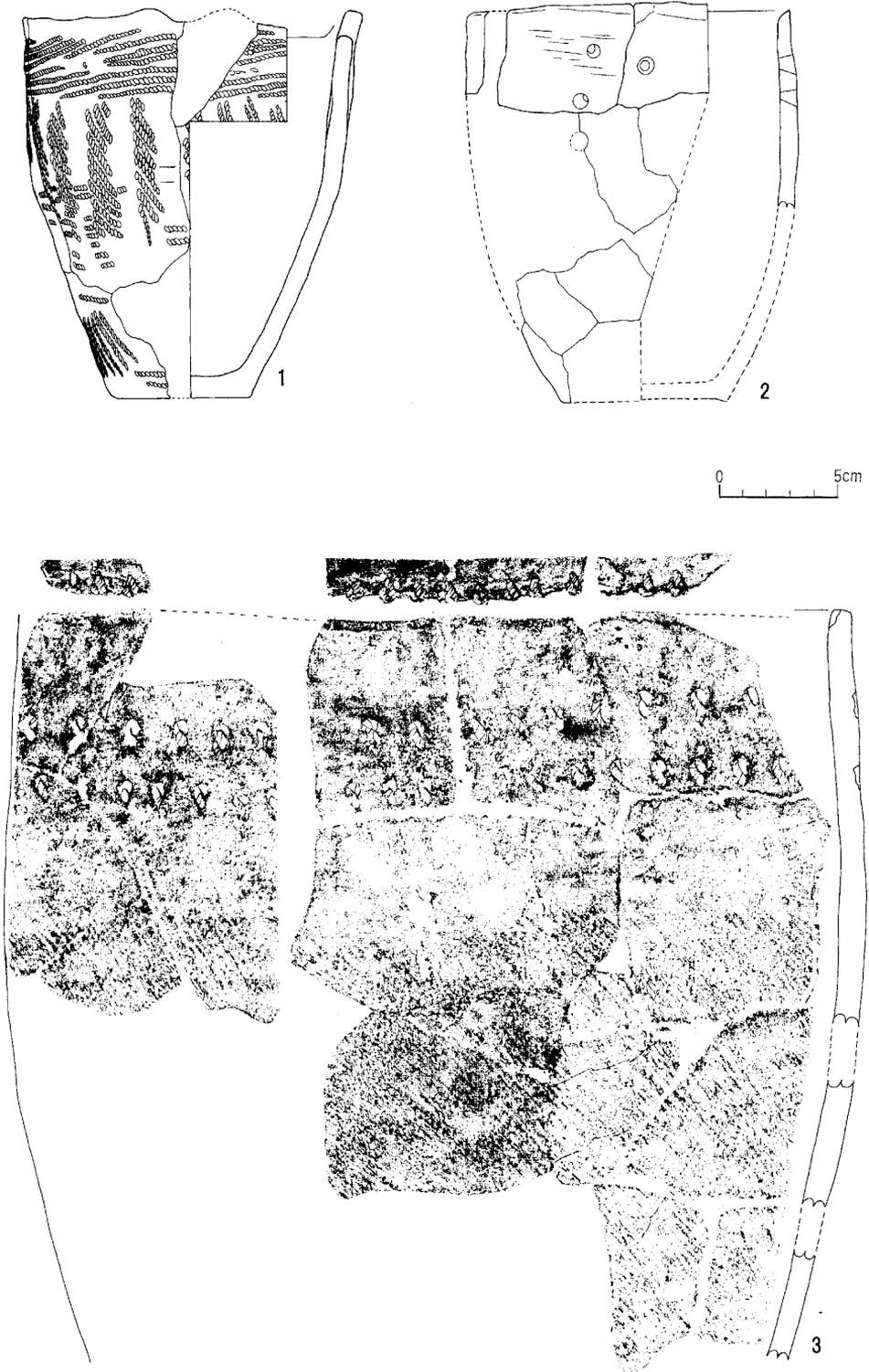
第136図 157a号堅穴床面(1~4)・埋土(5・6)出土土器



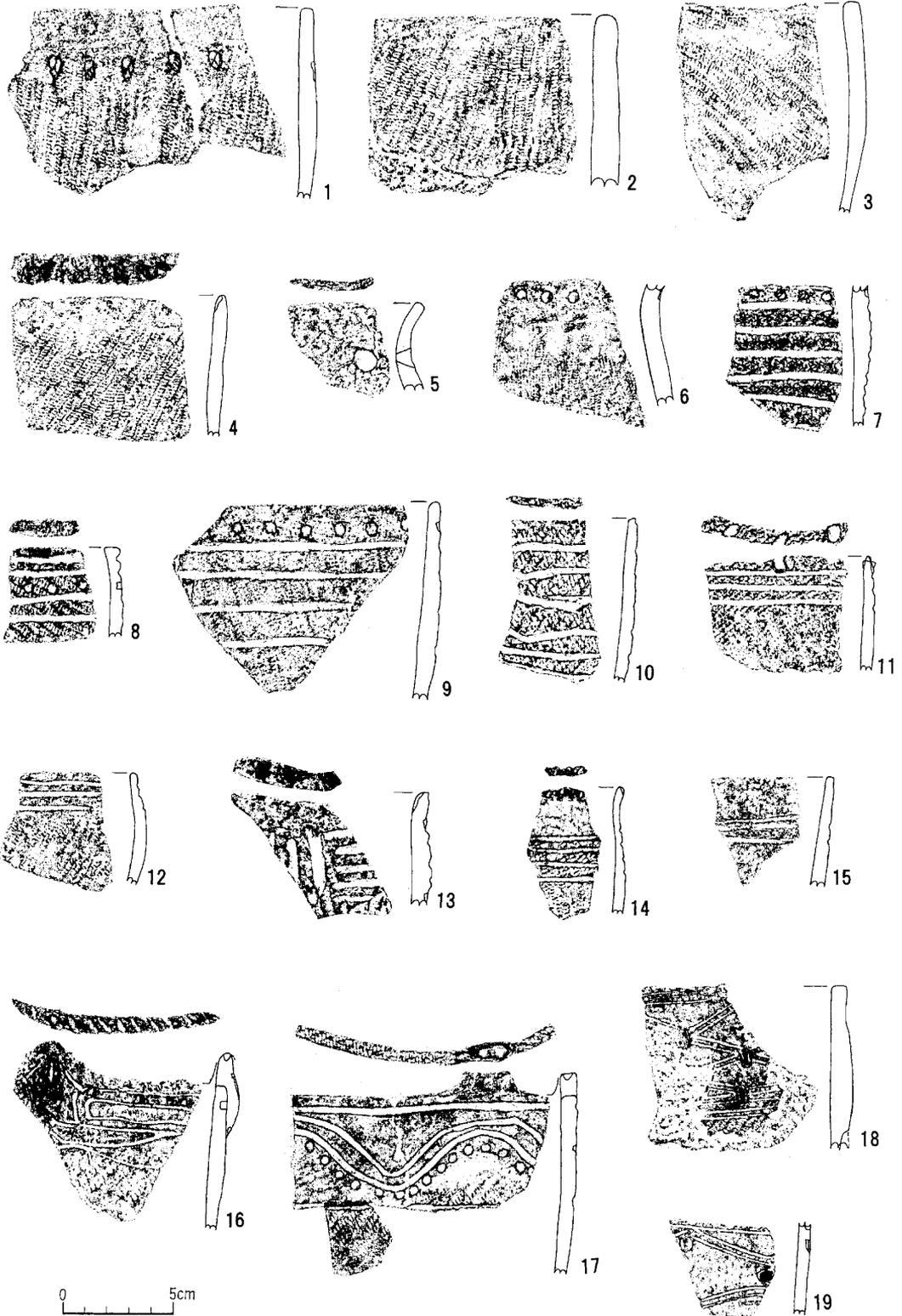
第137图 157a号竖穴埋土(1~5)出土土器



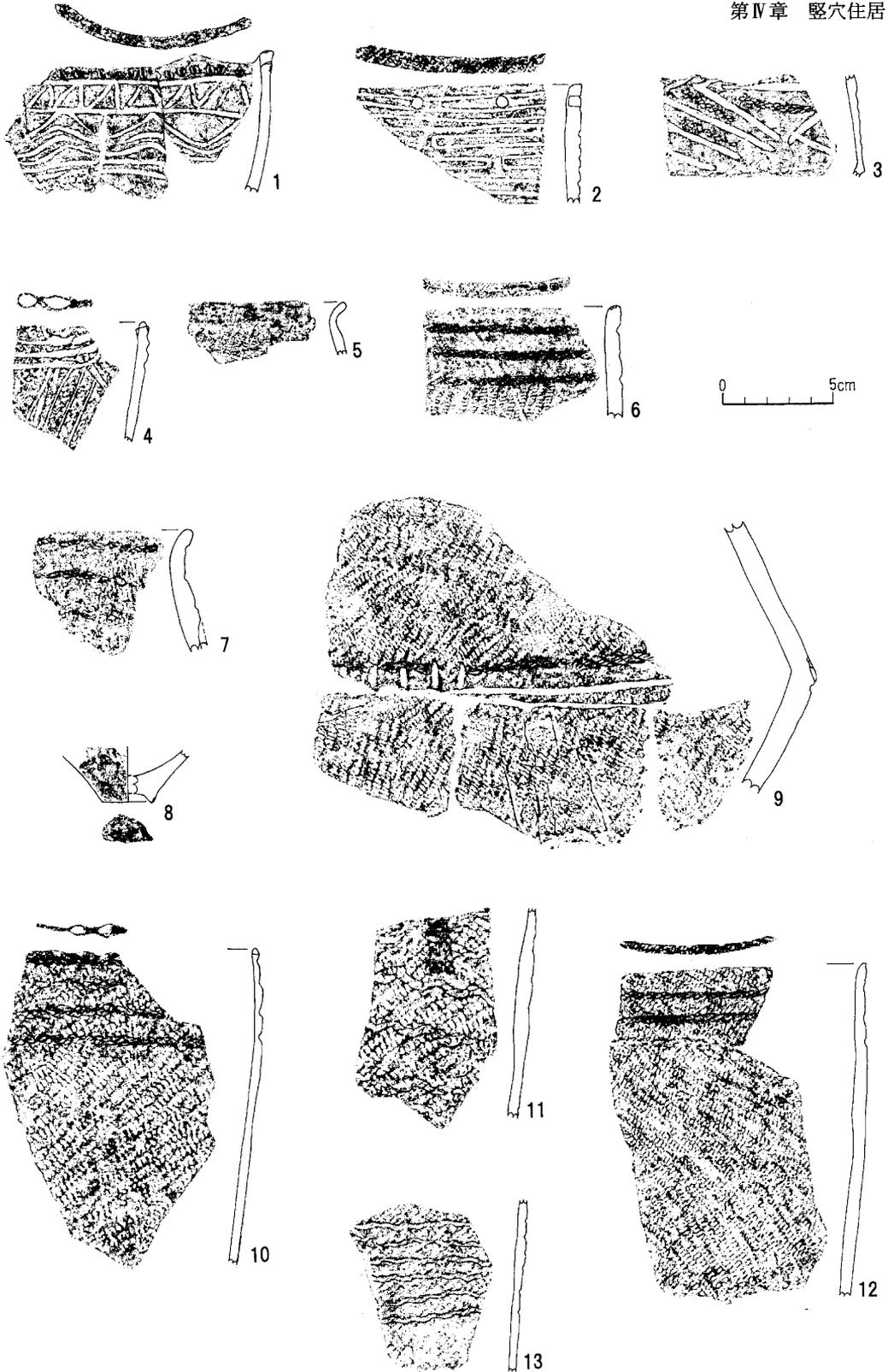
第138图 157a号竖穴埋土(1~3)出土土器



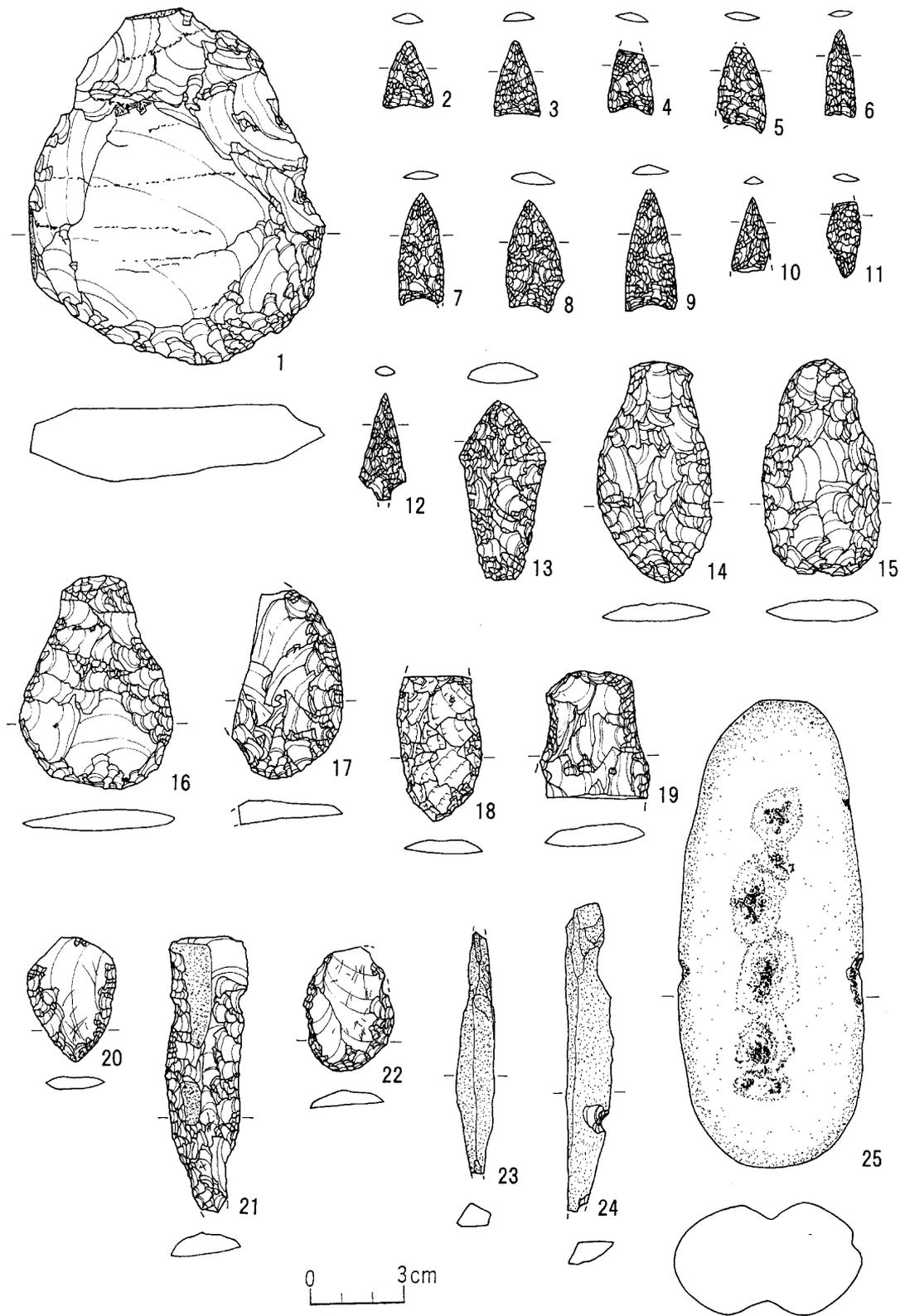
第139图 157a号竖穴埋土(1~3)出土土器



第140圖 157a 号竪穴埋土(1~19)出土土器



第141图 157a号竖穴埋土(1~13)出土土器



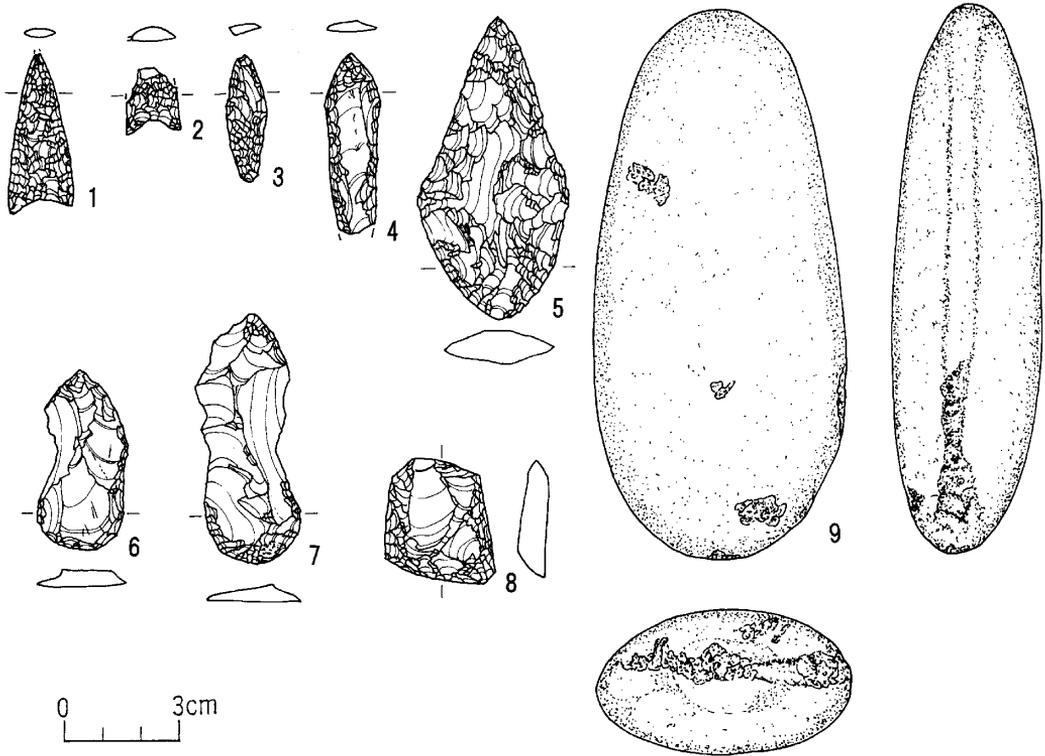
第142图 157a号竖穴床面(1)・埋土(2~25)出土石器

それ以外は黒曜石製。

第143図-1・2は無茎石鏃。3・4は有茎石鏃。5は両面加工のナイフ。6・7は削器。8は搔器。9は砂岩製のたたき石。9以外は黒曜石製。

小 括

本竪穴の時期は床面出土の土器から縄文晩期から統縄文初頭と考えられる。(佐々木 寛)



第143図 157a号竪穴表土(1~9)出土石器

## 157b号 竪 穴

### 遺 構 (第144図, 図版20-1)

本竪穴は157a号竪穴の床面精査中に検出された。157a号竪穴に重複しており、規模は長軸約9.00m、短軸約6.60mの楕円形を呈する。壁高は157a号竪穴床面から約30cmを測り、斜めに立ち上がる。

竪穴床面は炭化粒と骨片を含んだ黒褐色砂層に覆われている。床面には3箇所に焼土が認められており、それぞれは竪穴中央より多少西側に160×200cmの範囲、中央より南側に110×90cmの範囲、中央より東側に径約40cmの範囲である。西側と南側の焼土中からは骨片が検出されているが、東側の焼土中からは骨片は検出されなかった。南側の焼土中からは炭化したクルミが検出されている。

柱穴は径14～16cm、深さ18～20cmの主柱穴と思われるものが4本、径8～18cm、深さ7～17cmの壁柱穴が9本検出されている。その他に径8～16cm、深さ9～16cmの柱穴が17本検出されている。

### 遺 物 (第145図, 第146図, 第147図)

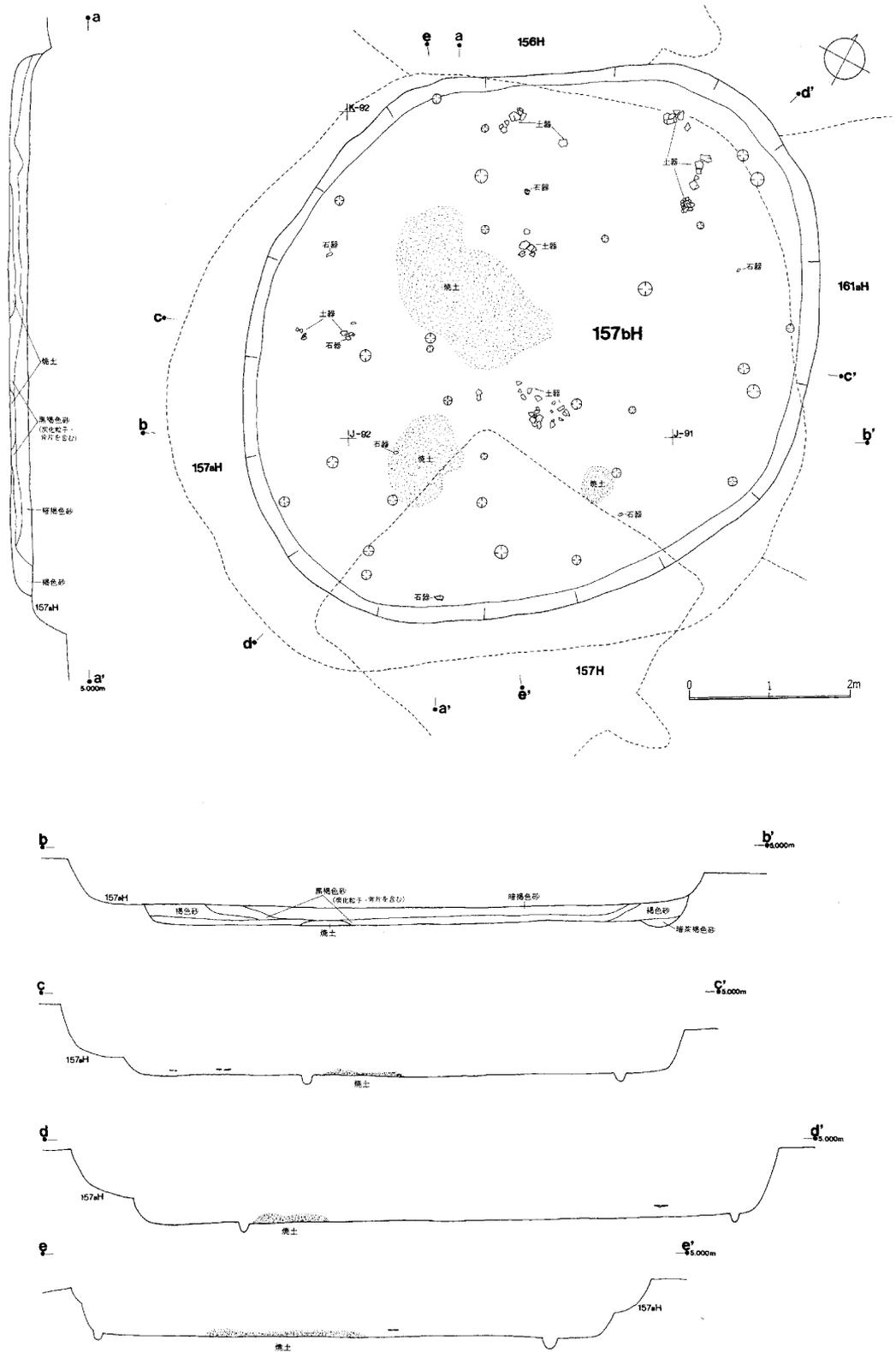
第145図-1～5は床面出土。1は地文の縄文のみ。口径17.2cm、器高22cm。縄文晩期から続縄文初頭。2～4も縄文晩期から続縄文初頭。5は縄文晩期。埋土からの6・7は宇津内II a式。8は続縄文、内部は著しく斜め方向に擦痕が残っている。9は続縄文初頭。10～13は縄文晩期から続縄文初頭。

第146図-1は続縄文初頭。2は縄文晩期。3～8は縄文晩期から続縄文初頭。9は縄文晩期の底部。

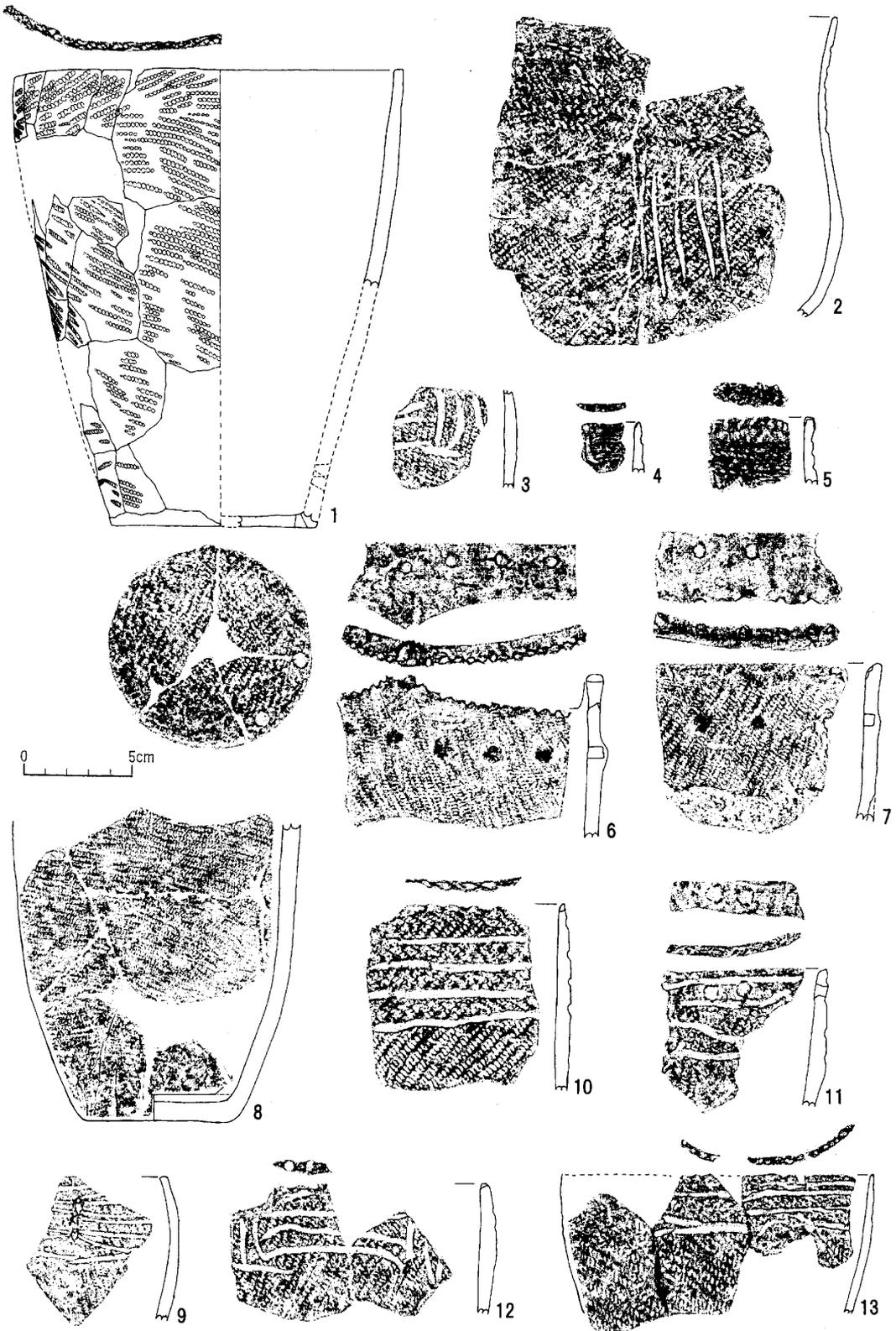
石器は第147図-1～8は床面出土。1～6は両面加工のナイフ。7は削器。8は砂岩製のくぼみ石。埋土からは9～11・14が石鏃。12・13は両面加工ナイフ。15は削器。6・10・11はメノウ製、それ以外は黒曜石製。

### 小 括

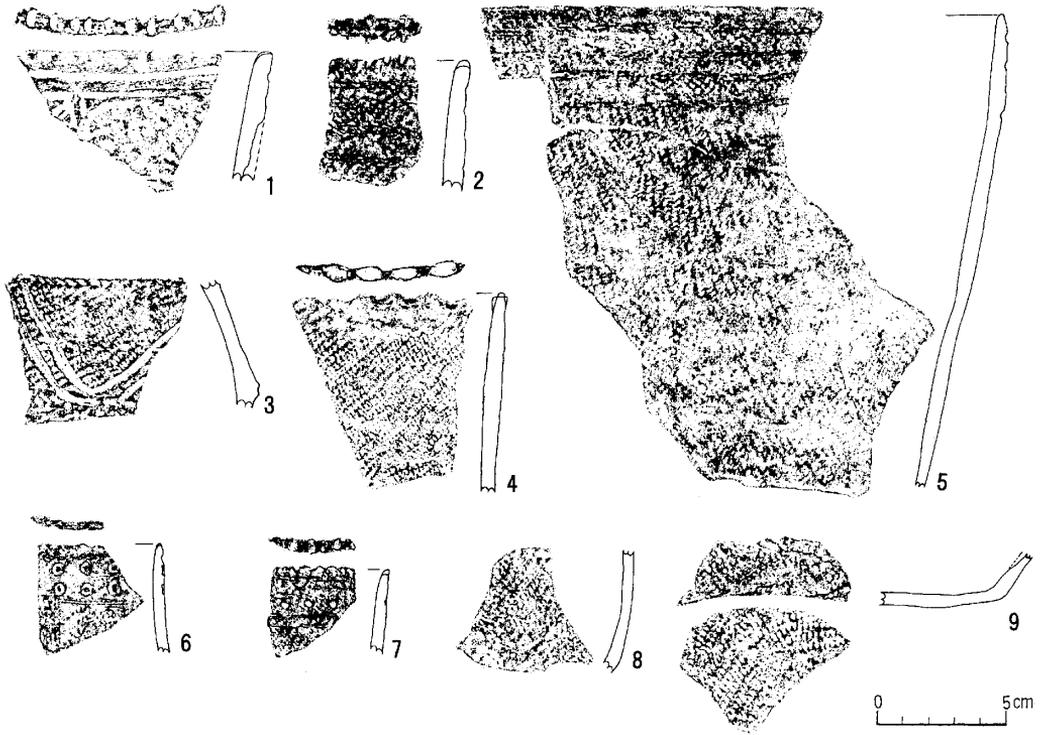
本竪穴の時期は床面の出土土器から157a号竪穴より若干古い縄文晩期から続縄文初頭のものと考えられる。(佐々木 寛)



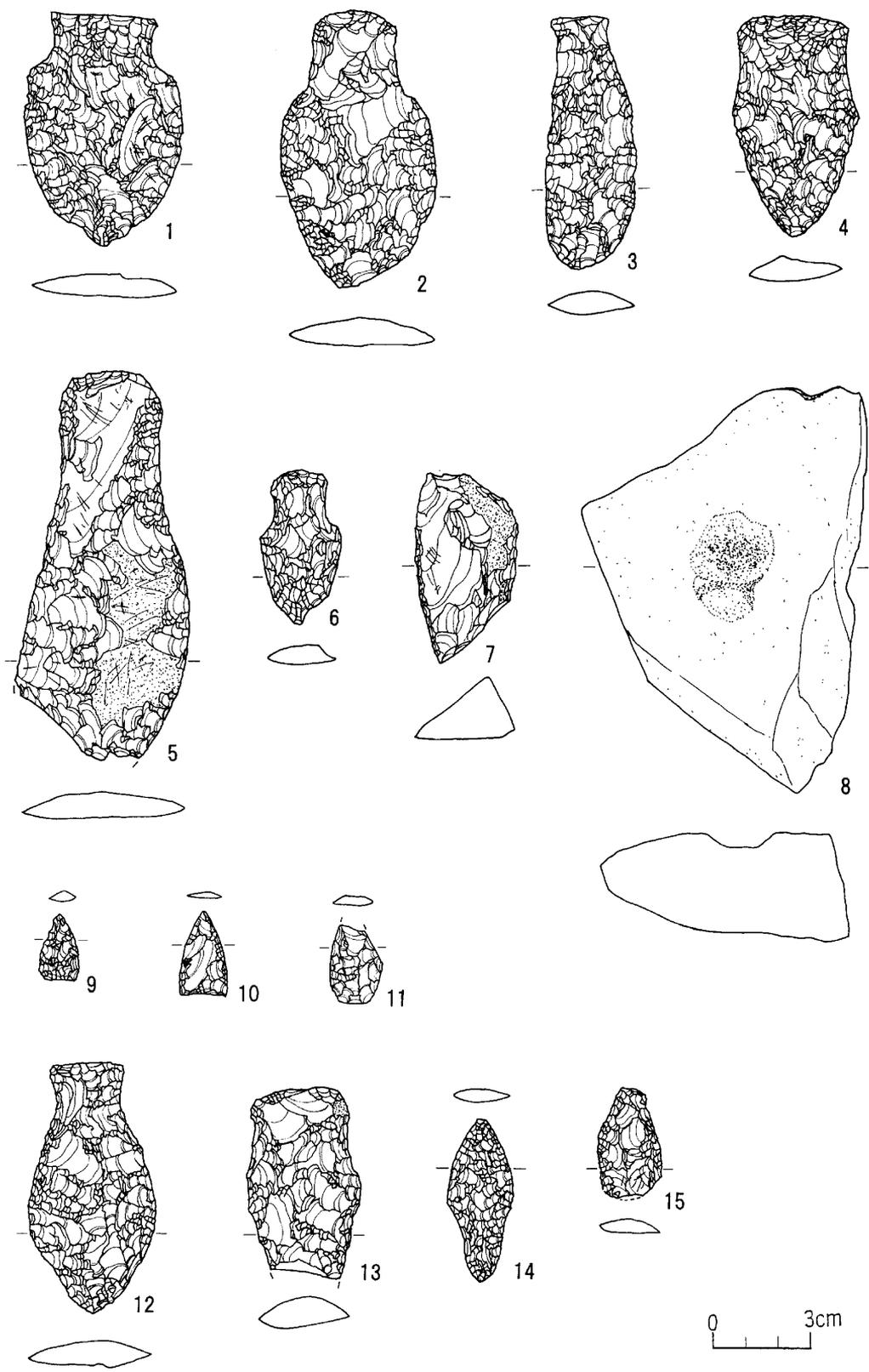
第144图 157b号竖穴平面图



第145図 157b号竪穴床面(1~5)・埋土(6~13)出土土器



第146图 157b 号竖穴埋土(1~9)出土土器



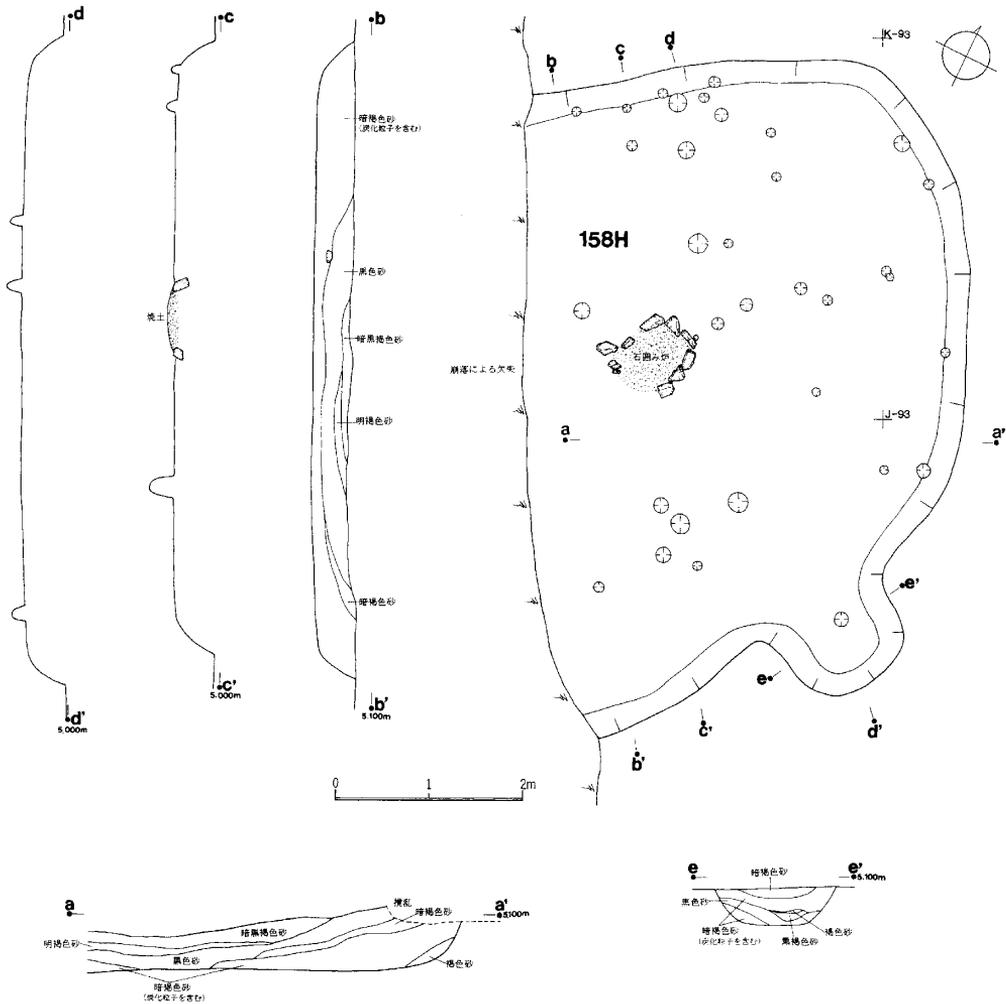
第147图 157b号竖穴床面(1~8)·埋土(9~13)·表土(14·15)出土石器

# 158号 竪 穴

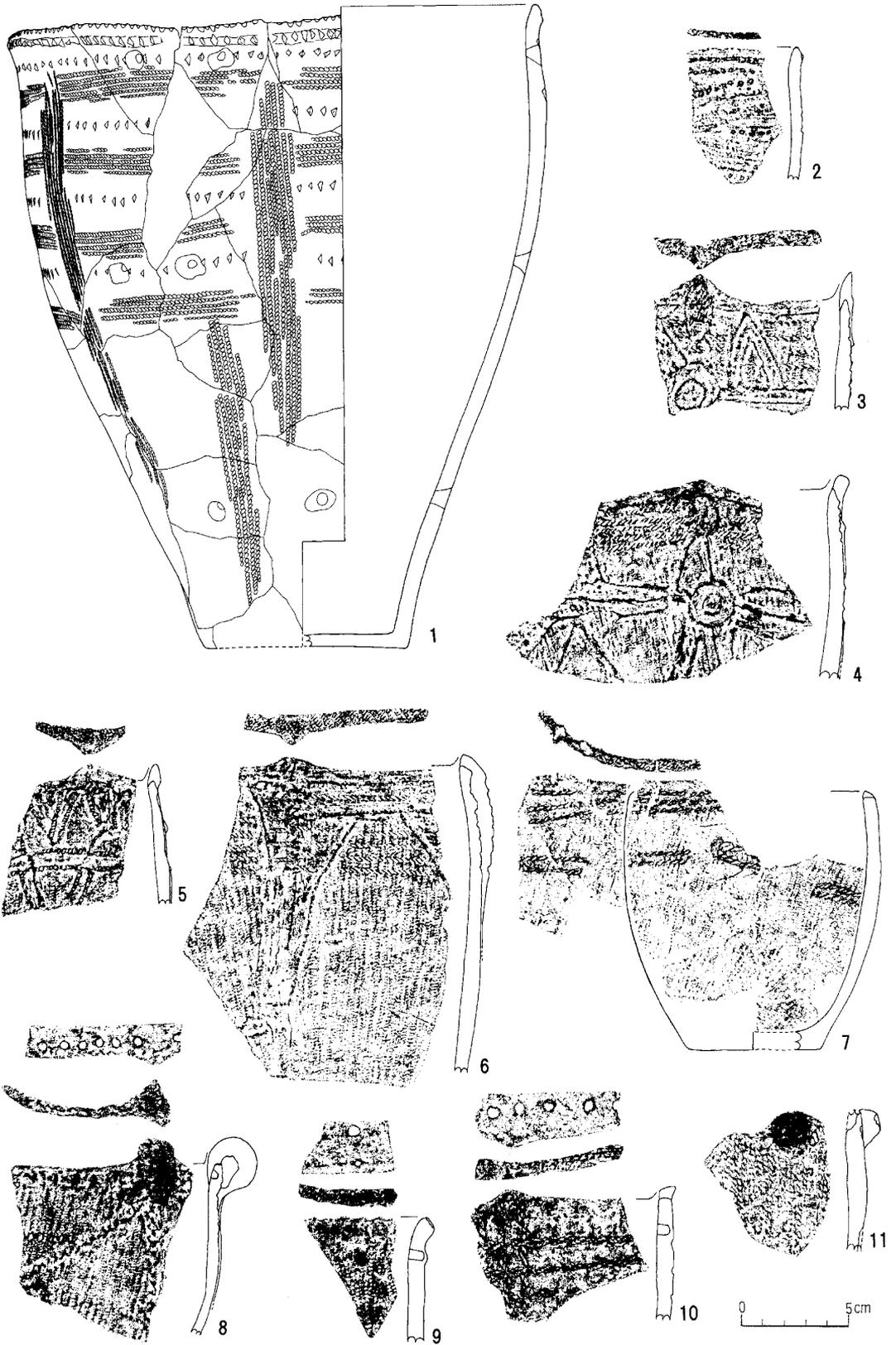
## 遺 構 (第148図, 図版20-2)

本竪穴は157号竪穴の西側に位置し、竪穴の西側が川岸の崩落によって失われているため正確な規模・形態は不明である。竪穴埋土の黒褐色砂層中からは第149図-1の土器が一括出土している。壁高は確認面から約40cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。竪穴東側には長さ・幅ともに約1.20mの張り出しをもつ。竪穴のほぼ中央に礫9点に囲まれた石囲み炉が検出された。

柱穴は径18~20cm、深さ20~26cmの主柱穴と思われるものが2本、壁柱穴は径8~16cm、深さ7~12cmのものが8本確認されて、その他に径8~28cm、深さ8~25cmの柱穴が22本検出されている。



第148図 158号竪穴平面図



第149图 158号竖穴埋土(1~11)出土土器

**遺 物** (第149図, 第150図-1~11, 第図151, 図版20-3)

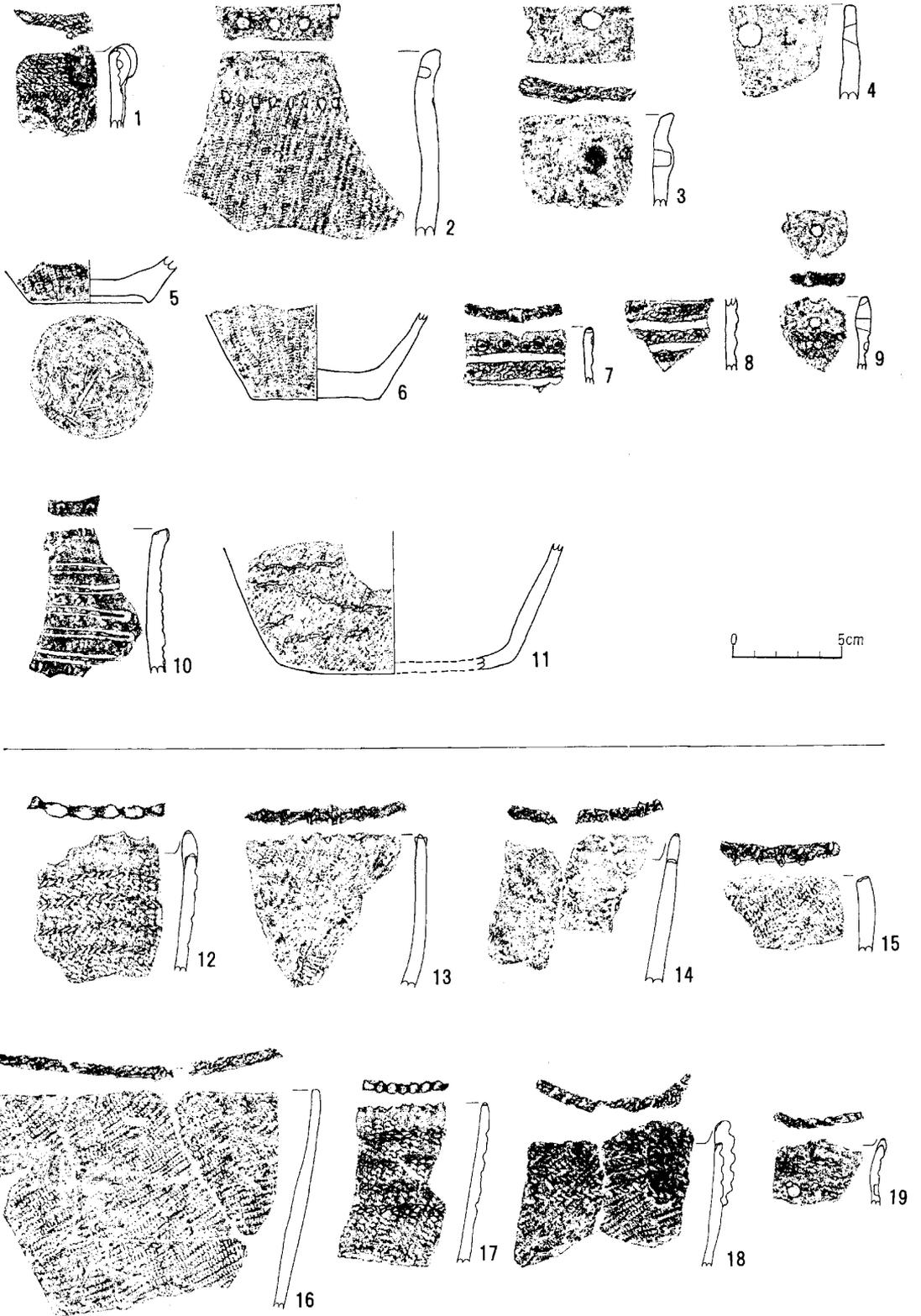
床面から遺物は検出されていない。埋土から第149図-1・2は続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。1は口径25cm、器高29.4cm。口唇部に刻みをいれ、口縁部に微隆起線文を巡らす。胴部は縞縄文と列点文を配す。3~7は宇津内Ⅱb式。8~10は宇津内Ⅱa式。11は続縄文初頭。

第150図-1~4は続縄文初頭。5・6は宇津内式の底部。7~11は縄文晩期。11は緑ヶ岡式の底部。

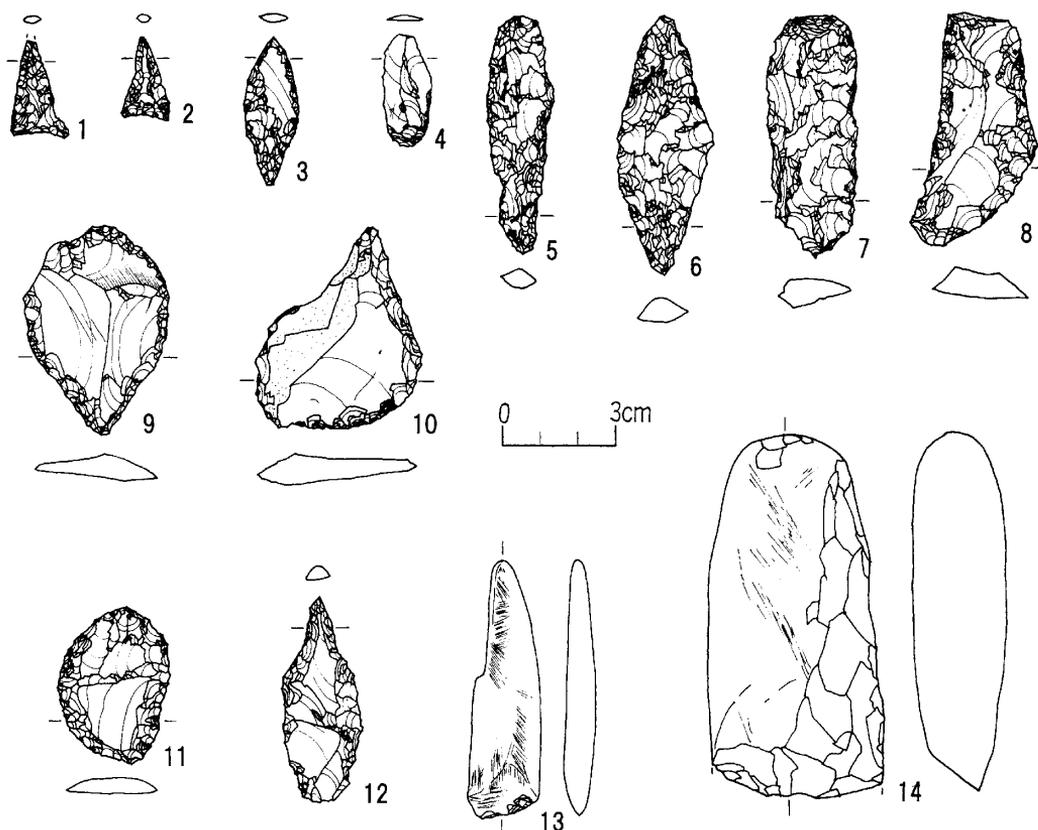
石器はすべて埋土出土。第151図-1・2は無茎石鏃。3・4は有茎石鏃。4は未製品。5~7は両面加工のナイフ。8は片面加工のナイフ。9~11は削器。12は頁岩製の石錐。13は泥岩製の石鑿。14は泥岩製の磨製石斧、先端部は欠失している。12~14以外は黒曜石製。

**小 括**

本竪穴の時期は床面から遺物が出土していないため不明である。 (佐々木 覚)



第150図 158号竖穴埋土(1~11)、158a号竖穴床面(12~15)・埋土(16~19)出土土器



第151図 158号竪穴埋土(1~14)出土石器

## 158a号 竪穴

### 遺 構 (第152図, 図版21-1)

本竪穴は158号竪穴の床面精査中に検出された。158号竪穴同様西側が川岸の崩落によって失われているため正確な規模は不明であるが、楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から約20cmを測り、緩やかに立ち上がる。

竪穴中央よりやや北西側に約80×30cmの範囲に炉跡の焼土があり、焼土中からクルミの炭化物が多数検出されている。

柱穴は径8~18cm、深さ8~21cmのものが18本確認された。北壁際の床面に黒曜石のフレーク・チップの集積が認められた。

### 遺 物 (第150図-12~19, 第153図)

床面からは第150図-12~15の縄文晩期の土器が出土している。16~19は埋土出土。いずれ

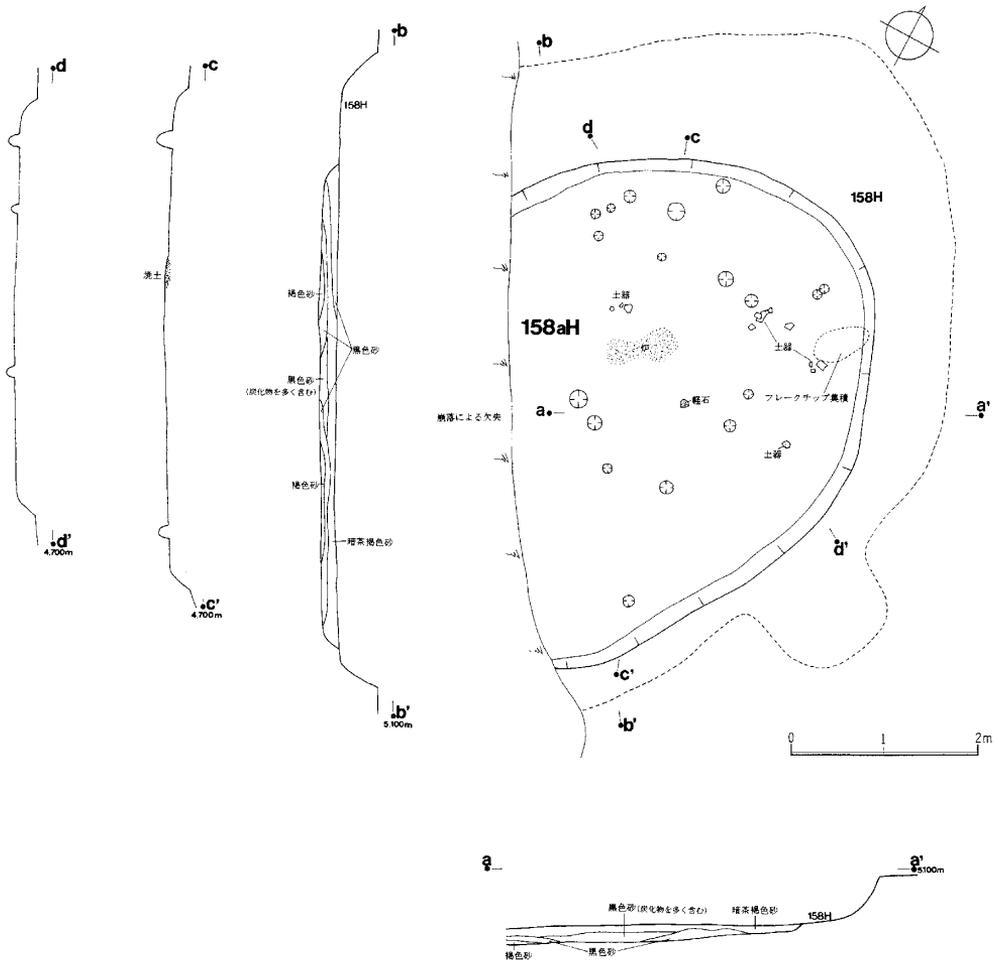
も縄文晩期。

石器は第153図-1~4は床面出土。1は無茎石鏃。2は両面加工のナイフ。3は泥岩製のたたき石。4は軽石製で側面と裏面に刻線状の使用痕が見られる。埋土からは5~7は無茎石鏃。8は両面加工ナイフ。9も頁岩製の両面加工ナイフ片。10~12はナイフ片。13~15は削器。3・4・9以外は黒曜石製。

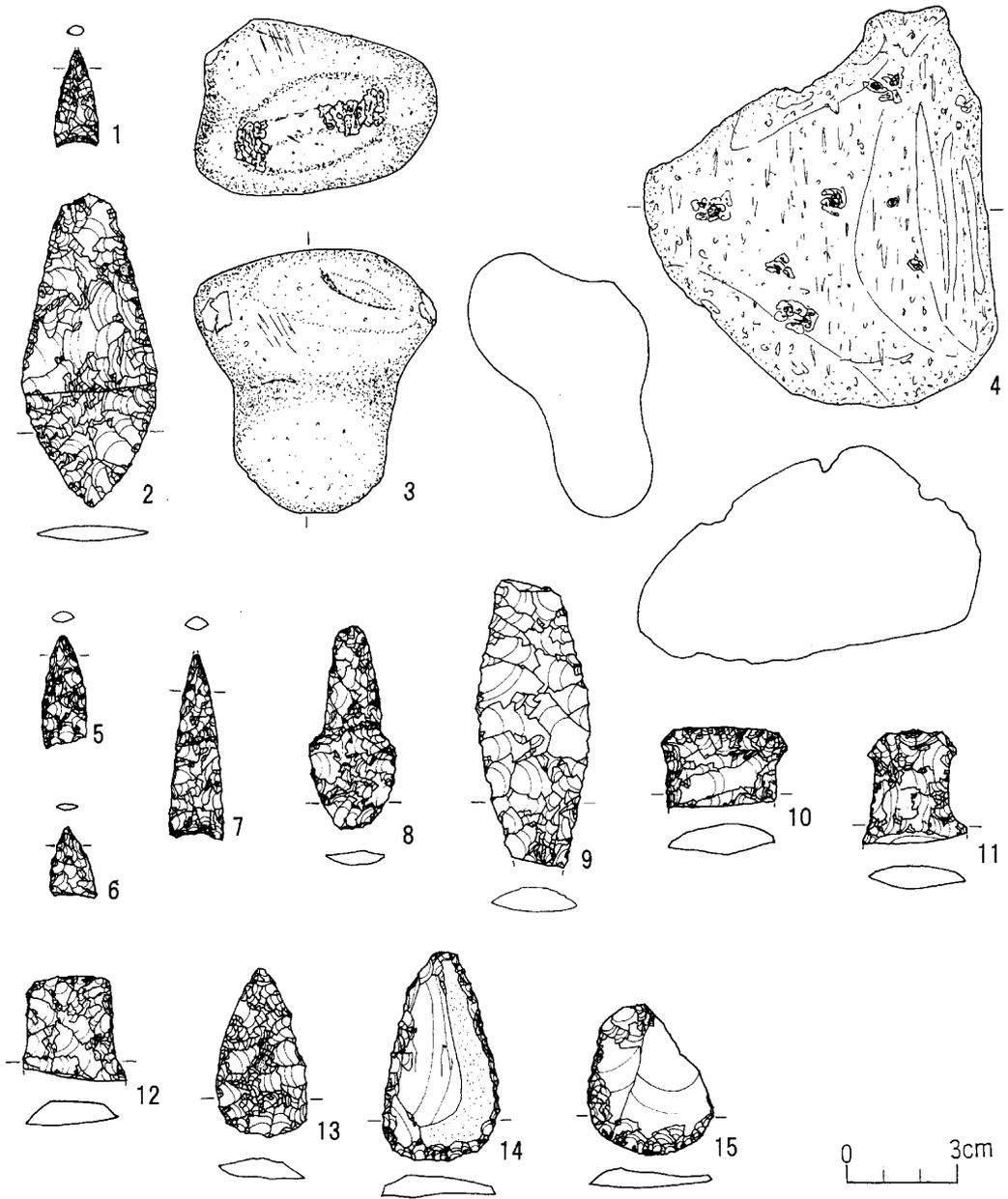
小 括

本竪穴は床面出土の土器から縄文晩期と考えられる。

(佐々木 寛)



第152図 158a号竪穴平面図



第153图 158a号竖穴床面(1~4)・埋土(5~15)出土石器

## 第V章 ピ ッ ト

### ピ ッ ト 900

#### 遺 構 (第34図, 図版22-1)

本ピットはB'89グリッドに位置する。第Ⅱ層の茶褐色砂を約十数cm掘り下げた段階で掘り込み面を確認した。規模は長軸約1.50m、短軸約1.28mの不整楕円形を呈する。床面中央部から北側にかけて遺存体である暗赤褐色土が認められた。壁高はほぼ垂直に立ち上がり確認面から約40cmを測る。東壁隅に密着して直径18cm、深さ4cmのピットがあり、上部から第154図-1の注口土器が注口部を内側に向け、正立の状態出土した。

#### 遺 物 (第154図-1, 第157図-1, 図版22-2・3)

第154図-1に示す床面出土の注口土器は口径17cm、器高17cmの注口土器。口唇部の外側に刻みが施され、注口部を起点に縞縄文が三角形状に施される。内部は多量の煤が付着する。後北C<sub>2</sub>・D式である。

石器は第157図-1は上下端が欠失した石槍かナイフと思われる。黒曜石製。

#### 小 括

時期は後北C<sub>2</sub>・D式の土壌墓である。正確な埋葬頭位は不明であるが、この時期は頭部側に土器を副葬するので、東頭位と思われる。(武田 修)

### ピ ッ ト 901

#### 遺 構 (第34図)

本ピットはB'89グリッドに位置する。第Ⅱ層の茶褐色砂上部から147号堅穴の床面にかけて切り込まれ、埋土は暗茶褐色砂が堆積している。規模は長軸約1.40m、短軸約1.05mの楕円形を呈する。壁高は浅く、確認面から約20cmを測る。東壁際から遺存体の一部が検出された。

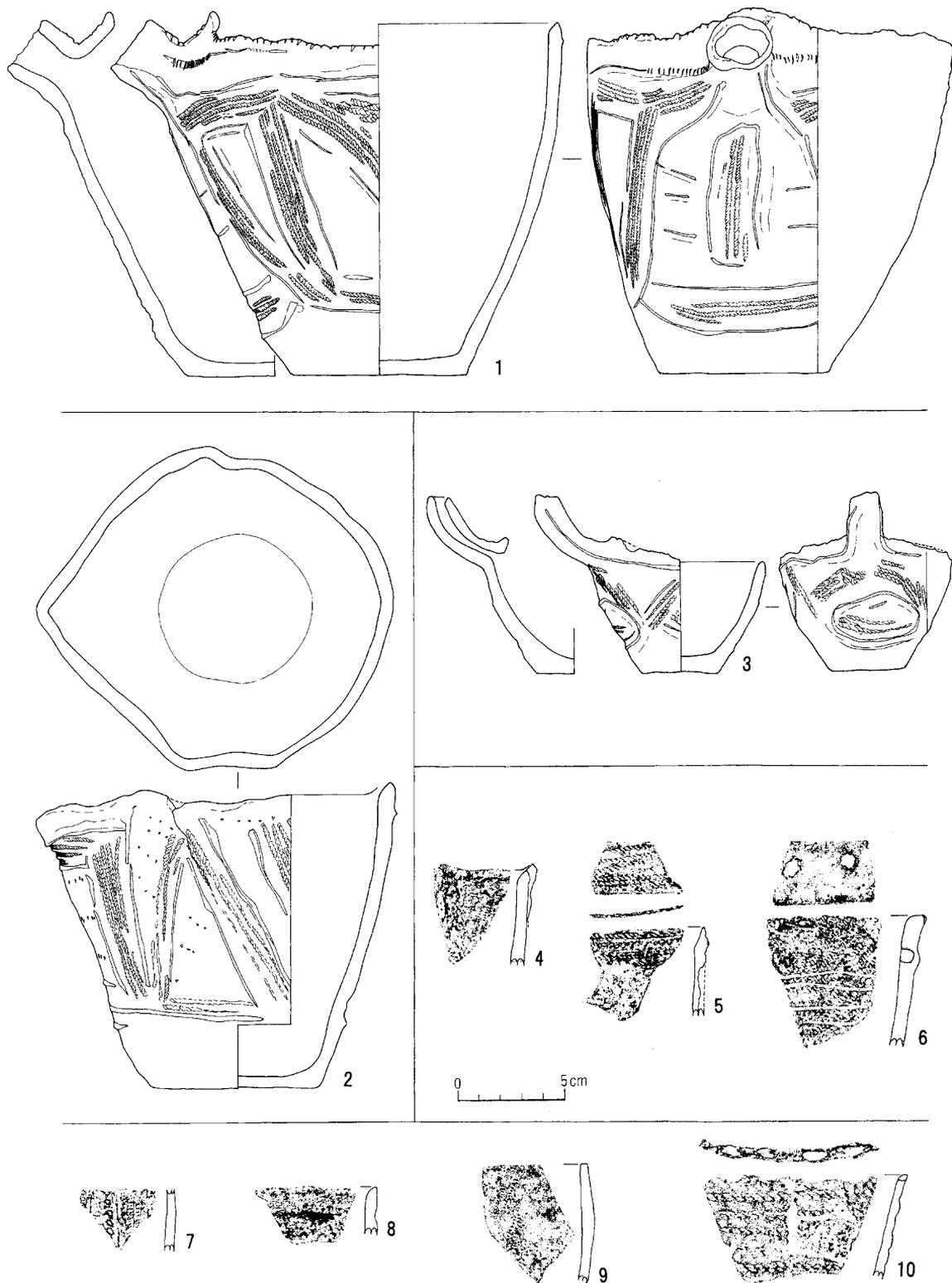
#### 遺 物 (第154図-2, 第157図-2, 図版22-4)

第154図-2は口径14.5cm、器高13.5cmの片口土器。

石器は第157図-2は茎部が短く、鍔身が長い有茎石鍔。鈍い光沢をもった黒曜石製。

#### 小 括

時期は後北C<sub>2</sub>・D式の土壌墓である。(武田 修)



第154図 ビット900床面(1)、901床面(2)、902埋土上部(3)、902a埋土(4~6)、903埋土上部(7~10)出土土器

## ピ ッ ト 902

## 遺 構 (第34図)

本ピットはB' 89, C' 89グリッドにまたがって位置する。規模は長軸1.16m、短軸0.65mの楕円形を呈する。壁は皿状に浅く立ち上がり、北壁でピット902aと重複する。壁高は確認面から10cm程度である。

## 遺 物 (第154図-3, 図版22-5)

第154図-3は埋土出土の口径8cm、器高6cmの注口土器。注口部は緩くカーブを描き上を向く。注口下部は楕円状に区画された微隆起線、縞縄文があり、背面は2条の縞縄文が施される。

## 小 括

形態や長軸の方向、完形品の注口土器の出土から、後北C<sub>2</sub>・D式の可能性が高い。

(武田 修)

## ピ ッ ト 902a

## 遺 構 (第34図)

本ピットはB' 89グリッドに位置する。ピット902に南壁上部を切られ、147号堅穴の西壁を切り込んでいる。確認面の上部に長さ約50cm、幅約30cm、層厚6~8cmの炭化物が認められた。規模は長軸約1.60m、短軸約1.15mの楕円形を呈する。各壁は緩く立ち上がり高さは確認面から29cmである。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第154図-4~6, 第157図-3・4, 図版22-6・7)

全て埋土出土。第154図-4・5は統縄文字津内II b式。6は口唇部の外側に縄が押捺され、内側からの突瘤文下部に4条の浅い沈線文が施される。縄文後期堂林式。

石器は第157図-3は石鏃の先端部。4は搔器。2点とも黒曜石製。 (武田 修)

## ピ ッ ト 903

## 遺 構 (第34図)

本ピットはA' 90グリッドの杭直下に位置する。表土を剥土した段階で落ち込みを確認した。規模は直径約1.25mの不整円形を呈する。壁高は確認面から約37cmを測る。

## 遺 物 (第154図-7~10, 第155図-1)

第154図-7~10は4点とも埋土出土。7は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。8は縦走縄文を地文に、

## 常呂川河口遺跡

口縁部直下に1条の縄線文が施される。9は平縁で、細い斜縄文が施される。8・9は続縄文初頭であろう。10は小波状の口縁部直下に5条の縄線文が施される。縄文晩期中葉であろう。

第155図-1は口縁部の口径34cmを測る大型土器である。緩い縄を原体とし、内側は縄端部を上から下に引きずっている。縄文晩期中葉であろう。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピット 904

### 遺構 (第9図)

本ピットはA87グリッドに位置する。擦文期の141号堅穴によって長軸面の半分を削られている。規模は長軸約1.50mを測り、楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約12cmである。

### 遺物 (第155図-2)

第155図-2はピット上部から出土した口径35cmの特大土器である。口縁部直下の擬縄隆帯と胴下部の縞縄文間に隆起線文・縞縄文・三角列点文を鋸歯状に施した後北C<sub>2</sub>・D式。

(武田 修)

## ピット 905

### 遺構 (第165図)

本ピットはE'89グリッドに位置する。規模は直径約1.12mの円形を呈する。壁は皿状に浅く立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺物 (第156図-1~4)

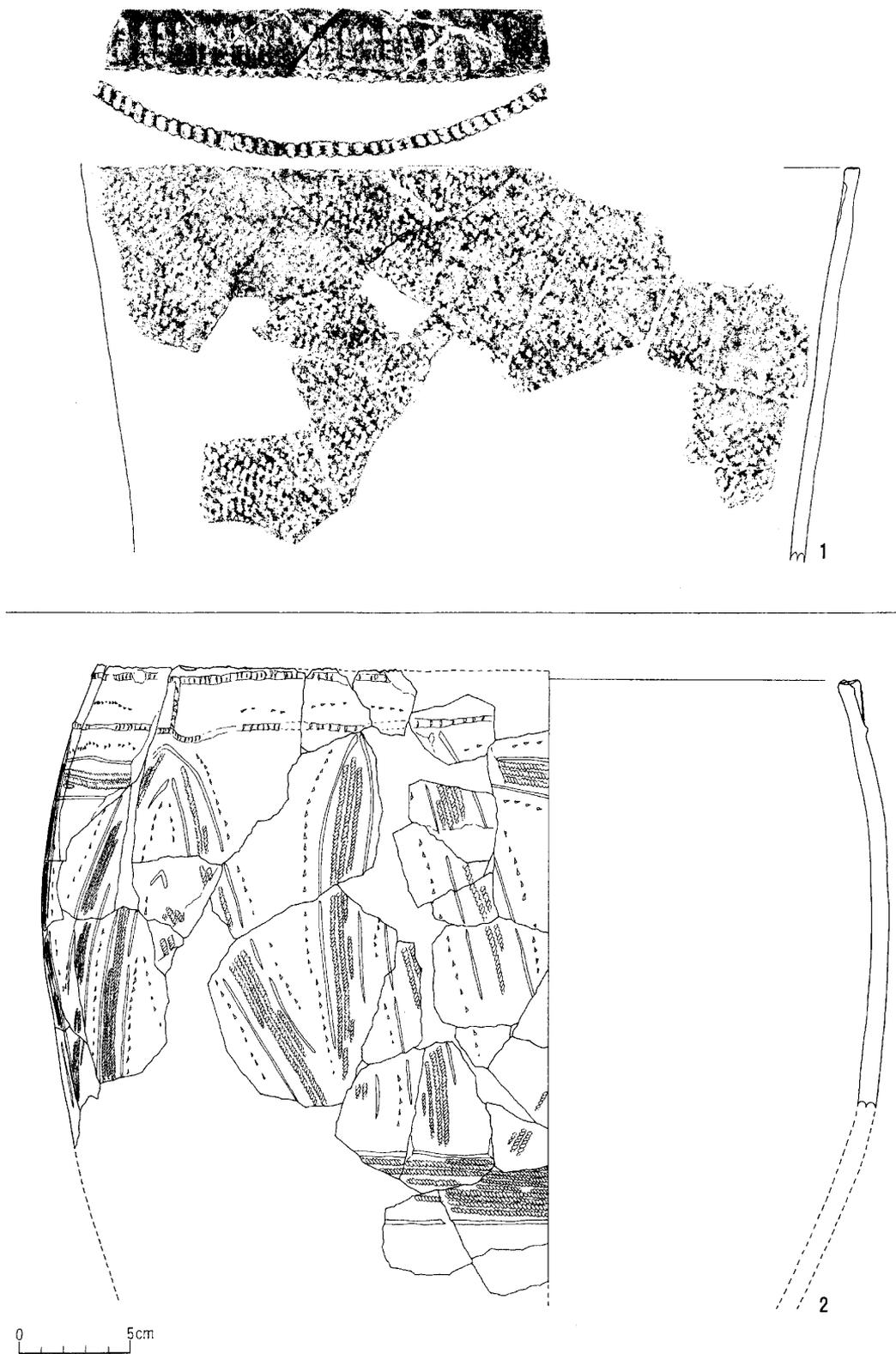
第156図-1~4は埋土出土。1は後北C<sub>2</sub>・D式。2は上部に半載状施文具による爪形文がみられる。3は口唇部外側に深い刻みが施される。2・3は縄文晩期中葉であろう。4は縄文後期縄濶式。

(武田 修)

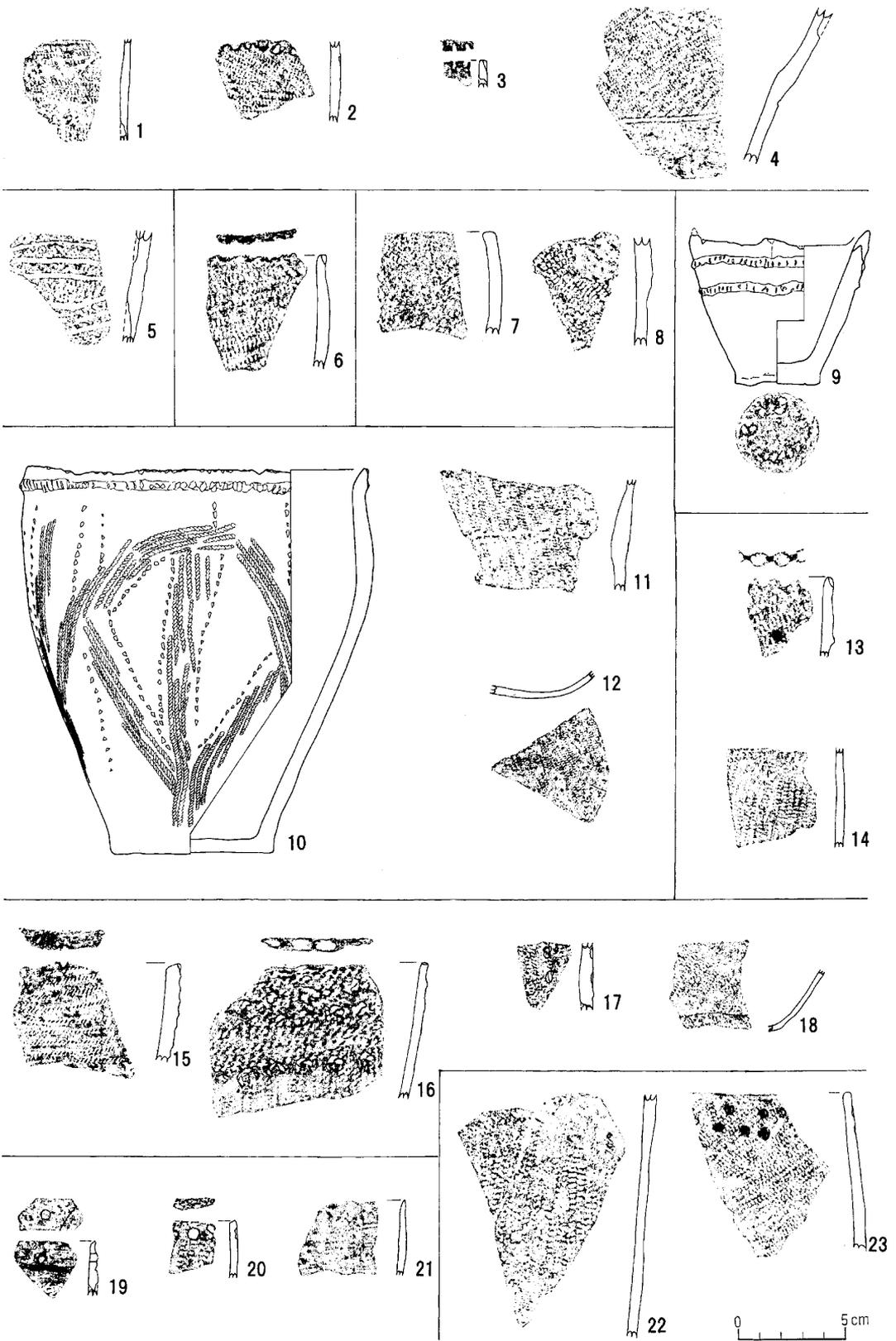
## ピット 906

### 遺構 (第165図)

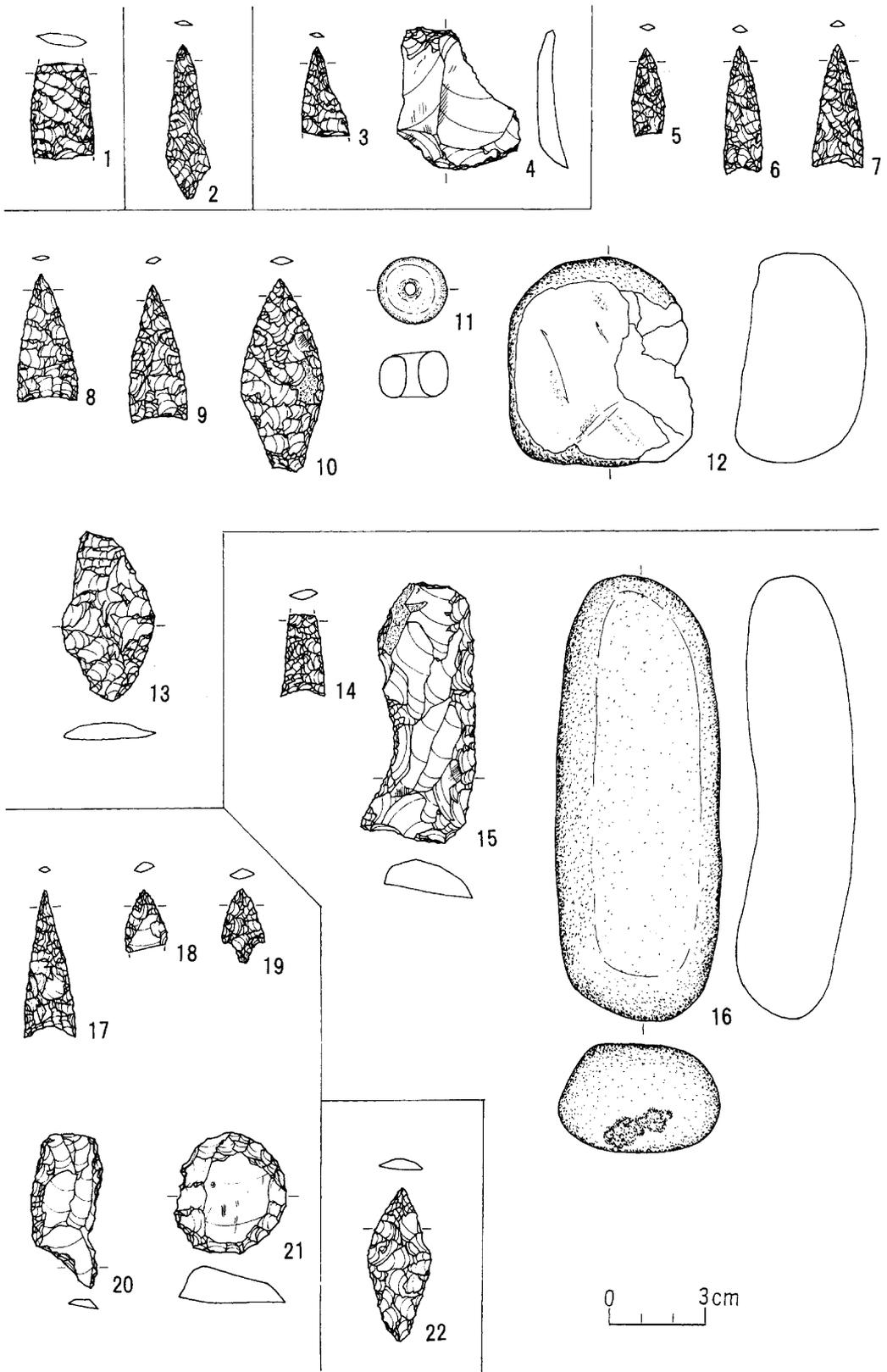
本ピットはE'89グリッドに位置する。規模は長軸約0.87m、短軸約0.65mの楕円形である。床面のほぼ全面に層厚2~3cmで暗赤褐色土を呈した遺存体が見られる。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約18cmである。



第155図 ピット903埋土(1)、904埋土(2)出土土器



第156図 ピット905埋土(1~4)、906埋土(5)、907埋土(6)、907a埋土(7・8)、908床面(9)、908a床面(10)・埋土(11・12)、908b埋土(13・14)、909埋土(15~18)、910埋土(19~21)、912埋土(22・23)出土土器



第157図 ビット900埋土(1)、901埋土(2)、902a埋土(3・4)、907遺体上(5~12)・埋土(13)、907a埋土(14~16)、909埋土(17~21)、912a埋土(22)出土石器・石製品

詳細な時期は不明である。

**遺物** (第156図-5)

第156図-5は埋土出土。角形の施文具による6条の沈線文がみられる。縄文晩期中葉であろう。(武田 修)

## ピット 907

**遺構** (第165図)

本ピットはE'89グリッドに位置する。規模は直径約0.80mの不整円形を呈し、ピット907aの東壁を切り込んでいる。床面に粘性をもった暗赤褐色土の遺存体が広がり、上部に長さ18cm、幅10cmにベンガラが散布されている。壁は垂直に立ち上がり、高さは確認面から約30cmである。各種の石器、装身具は南壁側からまとまって出土している。

統縄文期と思われるが、詳細な時期は不明である。

**遺物** (第156図-6, 第157図-5~13, 図版22-8~15)

第156図-6は埋土出土で縄文晩期中葉と思われる。

石器は遺体上から第157図-5~9は無茎石鏃。10は石槍。11は両側から穿孔された丸玉。粘板岩製。12は軽石を素材とした磨石。表面に淡いベンガラが付着する。埋土から13は片面加工ナイフ。11・12以外は黒曜石製。

(武田 修)

## ピット 907a

**遺構** (第165図)

本ピットはE'89グリッドに位置する。ピット907に東壁側を切られるものの規模は直径約1.15mの不整円形を呈する。壁高は確認面から約18cmを測る。

詳細な時期は不明である。

**遺物** (第156図-7・8, 第157図-14~16, 図版22-16・17)

第156図-7・8は縄文後期。7は鮎澗式である。

石器は第157図-14は無茎石鏃。15は比較的急斜な刃部をもった削器。黒曜石製。16はたたき石。砂岩製。(武田 修)

## ピ ッ ト 908

**遺 構** (第158図)

本ピットはF' 87に位置する。規模は長軸約2.10m、短軸約1.80mの楕円形を呈する。壁は床面から壙口部にかけて緩く立ち上がり、壁高は確認面から約20cmを測る。

**遺 物** (第156図-9, 図版23-1)

第156図-9は床面出土。口径8cm、器高7cmの小型土器。口唇部に4個の小突起をもち、口縁部に2条の擬縄隆帯が横走する。続縄文字津内系の土器。

**小 括**

遺存体の痕跡は認められなかったが形態的に土壙墓とみられる。時期は宇津内であろう。

(武田 修)

## ピ ッ ト 908 a

**遺 構** (第158図)

本ピットはピット908の東側に検出された。規模は長軸約1.32m、短軸はピット908に切られているが約1.10mの楕円形と思われる。壁高は確認面から32cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。床面からは遺存体と思われる粘性をもった暗茶褐色砂が認められている。南側の床面からは第156図-10の土器が出土している。

**遺 物** (第156図-10~12, 図版23-2)

第156図-10は床面から出土した土器。口径16.3cm、器高18.7cmで口唇部に刻みをもち、口縁部に横方向の擬縄隆帯を巡らす。胴部は縞縄文と三角形列点文が施された続縄文後北C<sub>2</sub>・D式である。埋土から11は続縄文字津内式。12は縄文晩期。

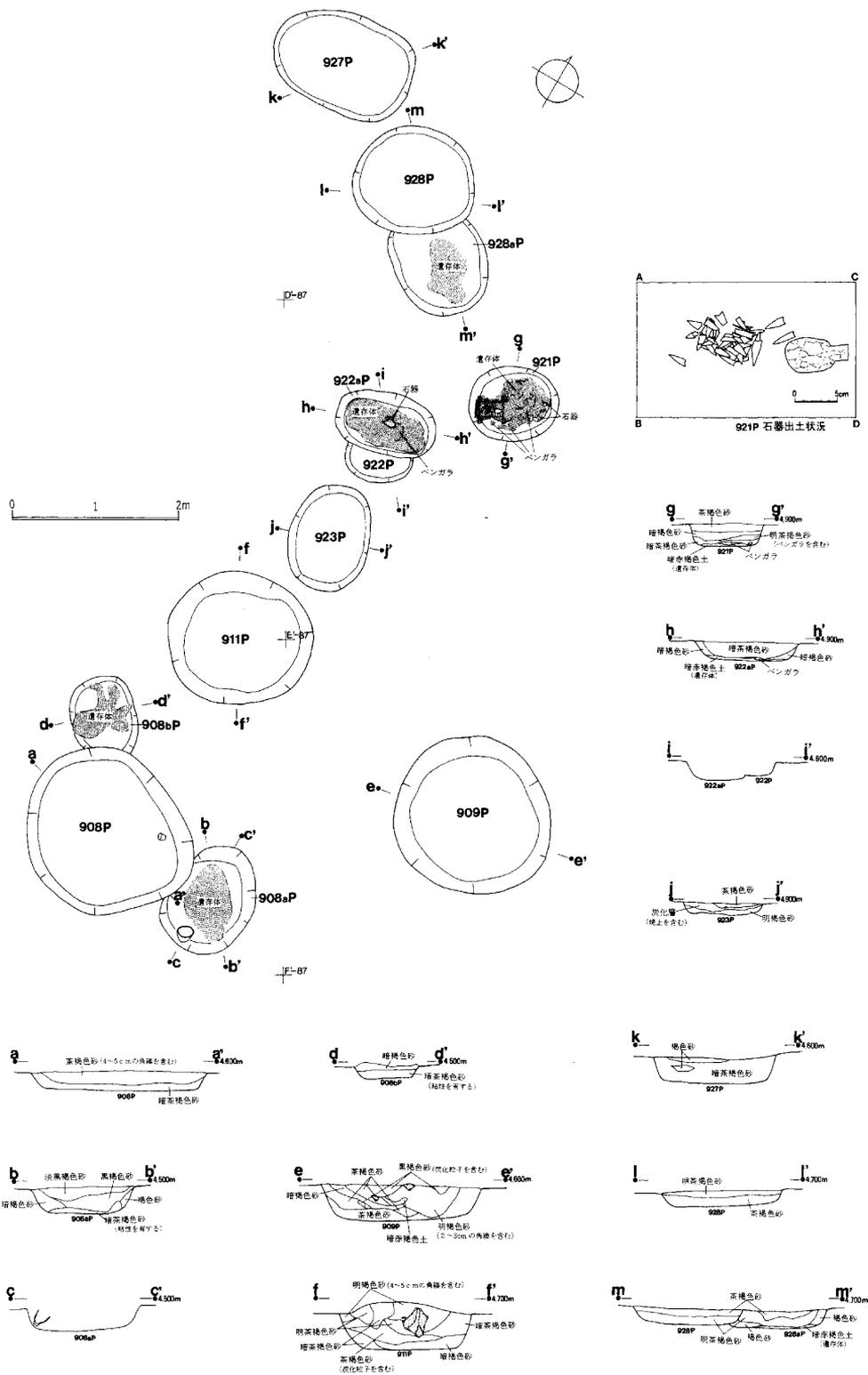
**小 括**

本ピットは楕円形を呈する土壙墓である。長軸は北-南方向にあるが、頭位は不明である。時期は床面出土の土器から続縄文後北C<sub>2</sub>・D式期と考えられる。(佐々木 覚)

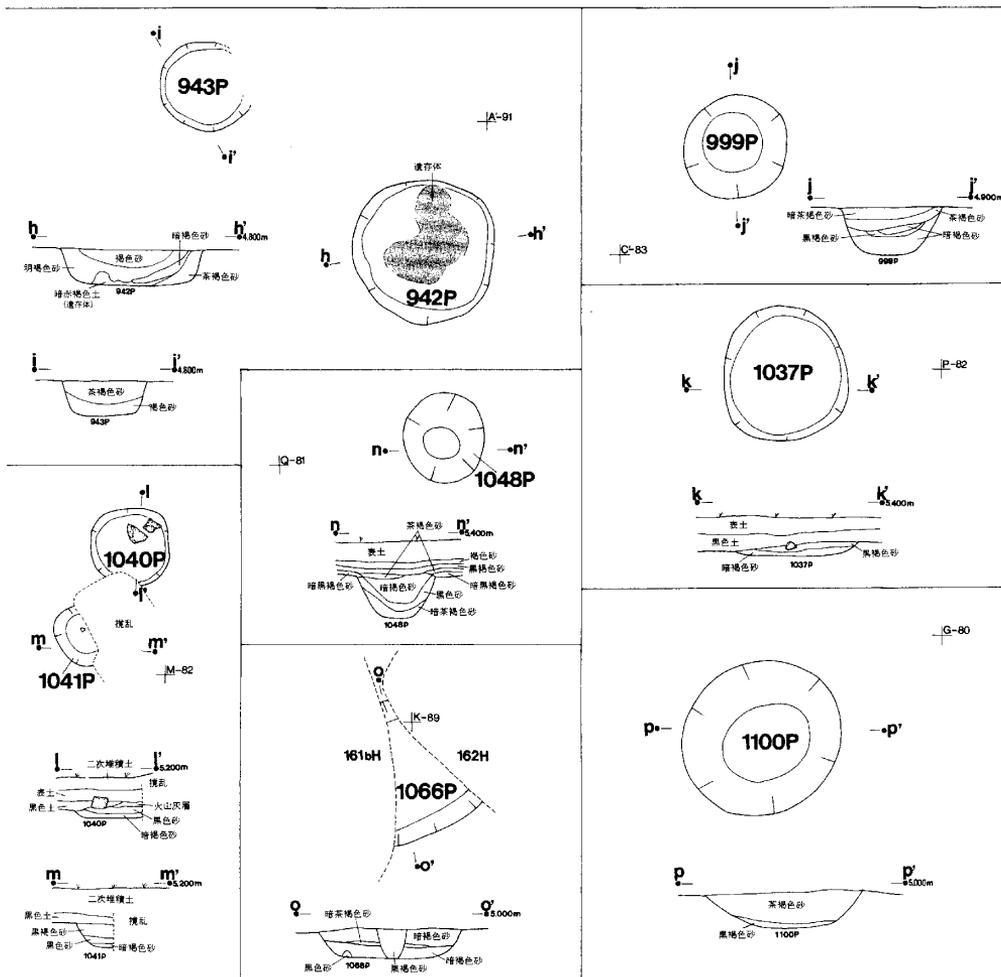
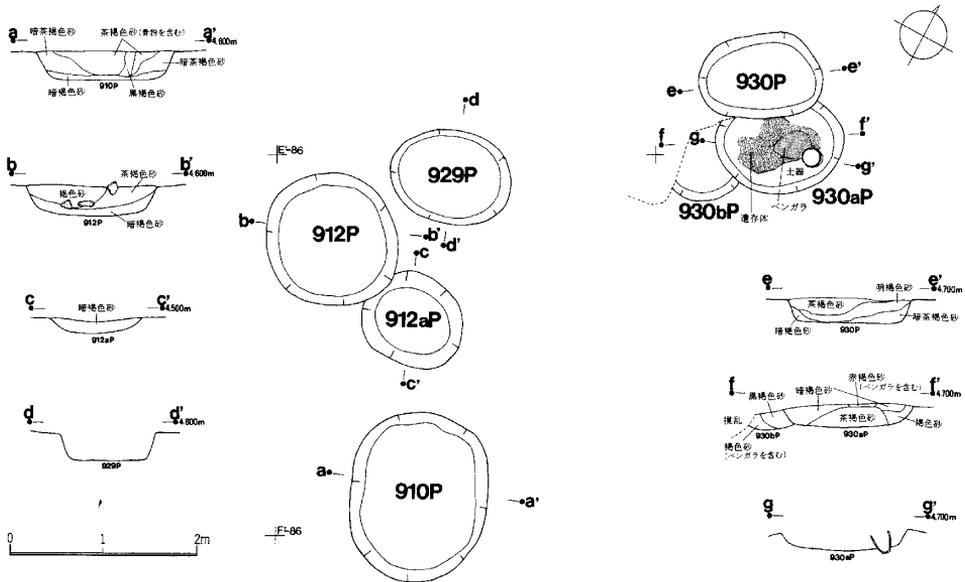
## ピ ッ ト 908 b

**遺 構** (第158図)

本ピットはピット908の北西側に検出された。規模は長軸をピット908に切られているが約1.00m、短軸約0.76mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から16cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。床面から遺存体と考えられる粘性をもった暗茶褐色砂が認められる。



第158図 ピット908、908a、908b、909、911、921、922、922a、923、927、928、928a 平面図



第159図 ピット910、912、912a、929、930、930a、930b、942、943、999、1037、1040、1041、1048、1066、1100平面図

## 遺物 (第156図-13・14)

第156図-13・14は埋土出土の縄文晩期。

## 小括

本ピットは土壙墓と考えられる。長軸は北西-南東方向にあるが、遺存体の形態から頭位は南方向と考えられる。

時期は不明である。

(佐々木 覚)

# ピット 909

## 遺構 (第158図)

本ピットはF' 86グリッドに位置する。規模は直径約1.80mの円形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、高さは確認面から約40cmである。

詳細な時期は不明である。

## 遺物 (第156図-15~18, 第157図-17~21, 図版23-3~5)

第156図-15~18は埋土出土である。15・16は口縁部直下に縄線文が多様化するもので、16は3段加わる。17も縄端圧痕文が施される。18は丸底の底部。4点とも縄文晩期中葉と思われる。

石器は第157図-17は無茎石鏃。18は石鏃の先端部。19は有茎石鏃。20は削器。21は円形搔器。全て黒曜石製。

(武田 修)

# ピット 910

## 遺構 (第159図)

本ピットはG' 85, F' 85グリッドに位置する。規模は長軸約1.80m、短軸約1.44mの楕円形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、高さは確認面から約30cmである。

詳細な時期は不明である。

## 遺物 (第156図-19~21)

第156図-19~21は埋土出土である。19は内側からの突瘤文をもつ。縄文晩期前葉であろう。

20は円形刺突文、21は無文。2点とも縄文晩期。

(武田 修)

# ピット 911

## 遺構 (第158図)

本ピットはE' 87グリッド杭下に位置する。規模は長軸約1.75m、短軸約1.52mの不整楕円

形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり高さは確認面から約40cmである。壙上部からやや下げた段階で直径約40cmほどの角礫がみられる。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 912

### 遺 構 (第159図)

本ピットはF'85グリッドに位置する。規模は直径約1.40mの円形を呈する。壙上部から中位にかけて直径約3～15cmの角礫が多量に混入する。壁は斜めに立ち上がり、高さは確認面から約28cmである。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第156図-23・24)

第156図-23・24は埋土出土である。23は縄文晩期の胴部片であろう。24も円形刺突文の施された縄文晩期。 (武田 修)

## ピ ッ ト 912a

### 遺 構 (第159図)

本ピットはピット912の東側にあり、長軸はピット912に切られているが約1.10m、短軸約0.94mの楕円形を呈し、壁高は確認面から10cmを測る。

### 遺 物 (第157図-22, 図版23-6)

第157図-22は裏側基部と先端部が調整された片面加工ナイフ。黒曜石製。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 913

### 遺 構 (第29図)

本ピットは145号堅穴の調査中に検出した。規模は直径約0.50mの円形を呈し、内部に25cm程の大角礫が3点と10cm程の小角礫が含まれる。壁高は145号の床面から約16cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 914

### 遺 構 (第75図)

本ピットはD88グリッドに位置する。規模は直径約0.66mの円形を呈する。壁高は確認面

常呂川河口遺跡

から約32cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 915

### 遺 構 (第75図)

本堅穴は149号堅穴の南壁と149b号堅穴の西壁を切り込んで構築されている。規模は直径約0.70mの円形を呈する。壁高は確認面から約12cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 916

### 遺 構 (第75図)

本ピットは149b号堅穴の床面を切って構築されている。規模は直径約0.50mの円形を呈し、壁高は149b号堅穴の床面から約16cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 917

### 遺 構 (第75図)

本ピットは149b号堅穴の床面を切って構築されている。規模は長軸約0.60m、短軸約0.50mの楕円形を呈し、壁高は149b号堅穴の床面から約20cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 918

### 遺 構 (第34図)

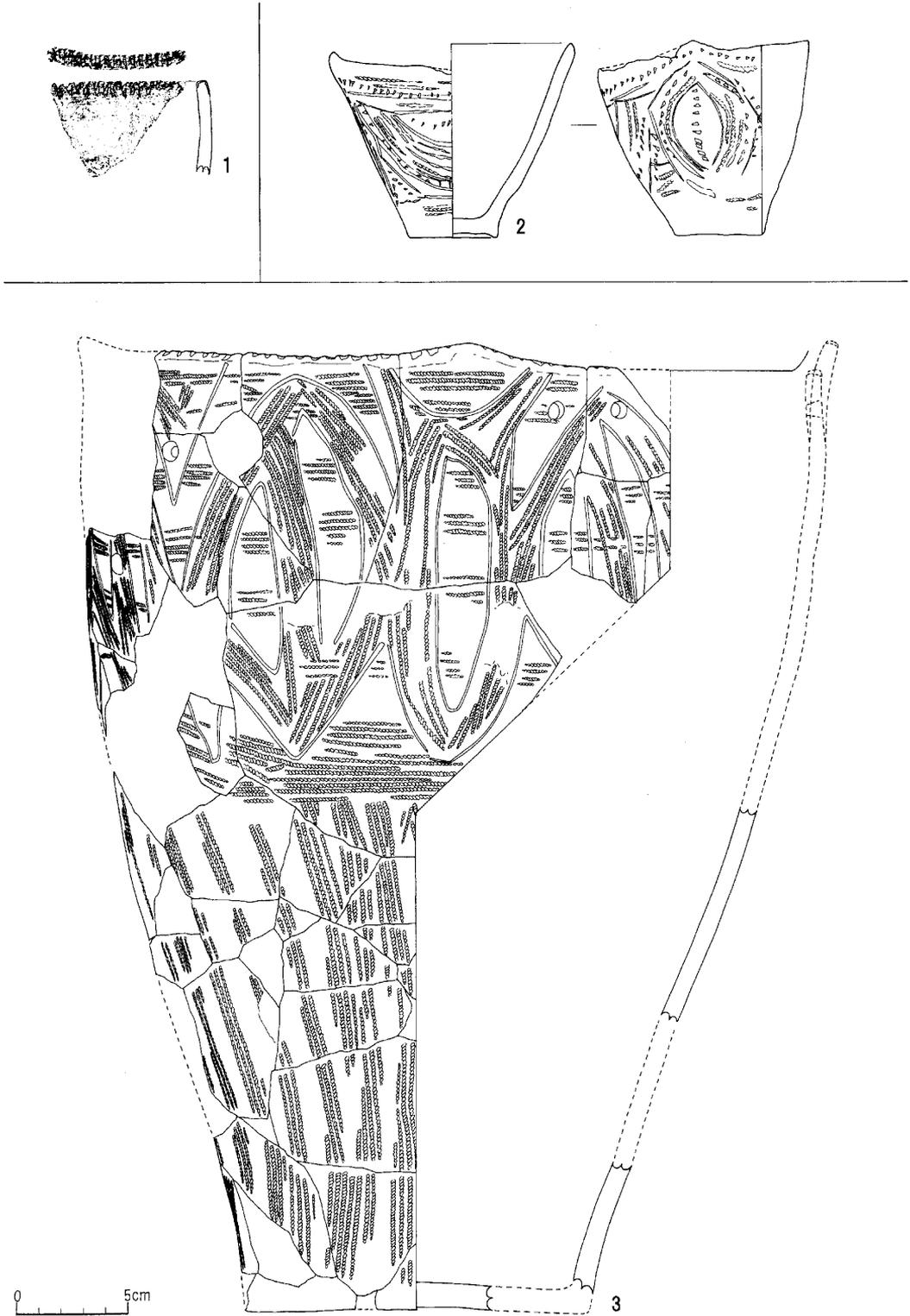
本ピットはB'90、C'90グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.75m、短軸1.20mの楕円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から40cmである。床面に暗赤褐色土の遺存体が薄く残存している。

土墳墓であることは確実であるが、詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第160図-1)

第160図-1は口唇部に撚糸文を押捺した刻みが施され、器面は無文となる。縄文晩期中葉であろう。

(武田 修)



第160図 ビット918埋土(1)、919床面(2)、920埋土(3)出土土器

## ピット 919

### 遺構 (第34図, 図版23-9)

本ピットはA'89, B'89グリッドにまたがって位置する。第Ⅱ層を6~7cm下げた段階で落ち込みを確認した。規模は長軸0.47m、短軸0.45mの楕円形である。掘り込みは浅く確認面から約10cmであり、南側から小型土器が出土している。

### 遺物 (第160図-2, 図版23-7)

第160図-2は床面出土。口径は長軸11cm、短軸9.5cmの楕円形で器高9cmの小型土器。長軸面に小突起をもつ。図に示すとおり、沈線文・帯縄文・列点文により小突起下部が円形文、側面は弧線文が施される。続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。 (武田 修)

## ピット 920

### 遺構 (第9図)

本ピットはB86グリッドに位置する。擦文期の141号堅穴によって長軸面の半分が削られているため正確な規模、形態は不明である。残存部の最大径は約0.96mである。壁高は確認面から約18cmを測る。北壁側の床面に径14cm、深さ9cmの柱穴をもつ。

### 遺物 (第160図-3, 図版23-8)

第160図-3に示す土器は埋土で約20m以上離れたA92, C92グリッド出土の破片が接合した。口径33.5cm、器高44cmの大型土器である。口唇部に刻みが施され、胴上部は横位の縞縄文上に楕円状の微隆起帯・帯縄文が施される。続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。

### 小括

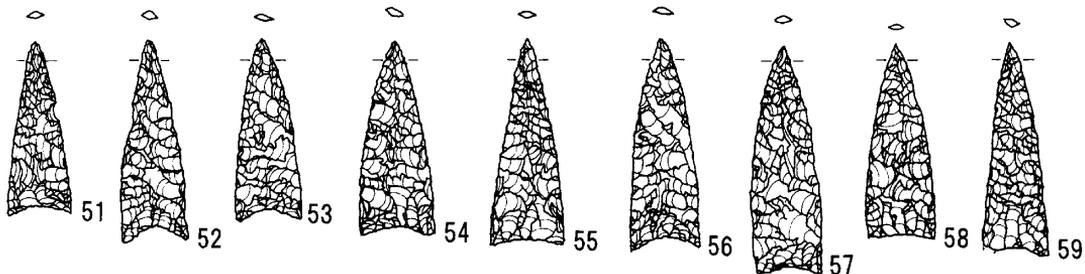
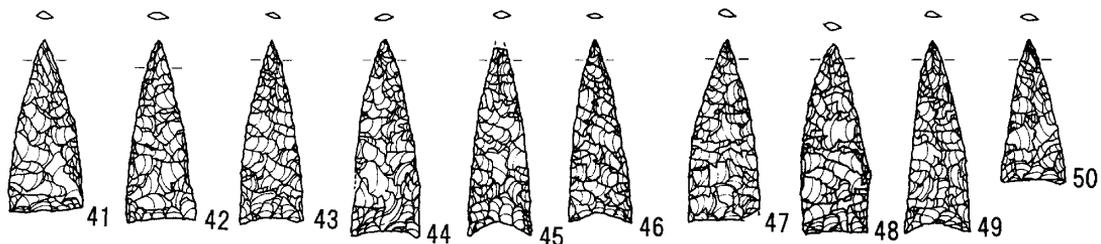
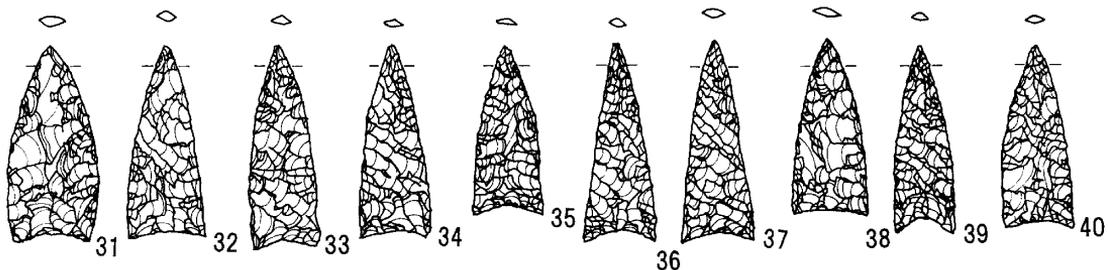
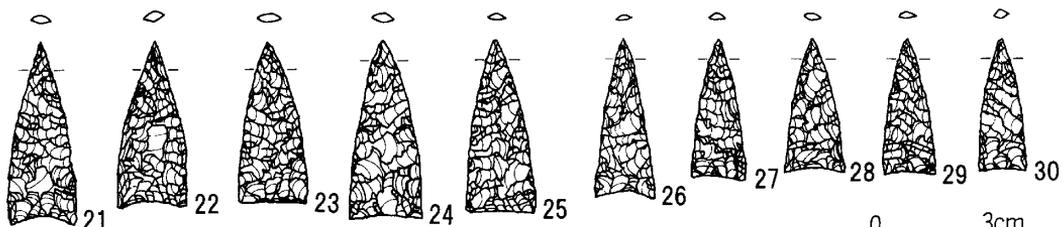
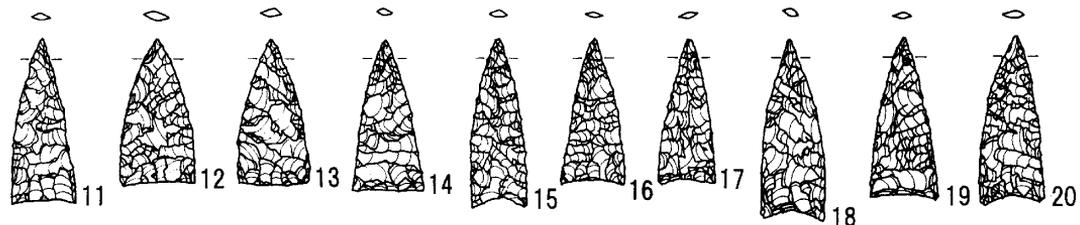
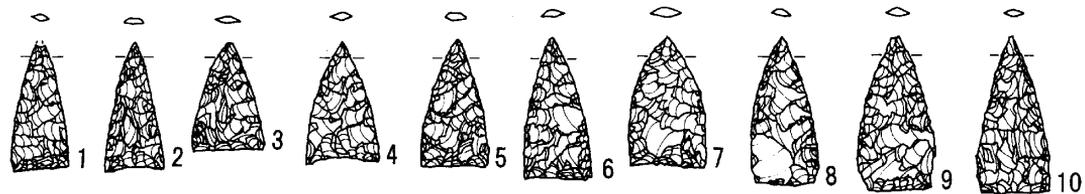
遺存体は検出されていないが形態的にみて土壌墓と思われる。長軸方向や埋土出土の土器から続縄文後北C<sub>2</sub>・D式と思われる。 (武田 修)

## ピット 921

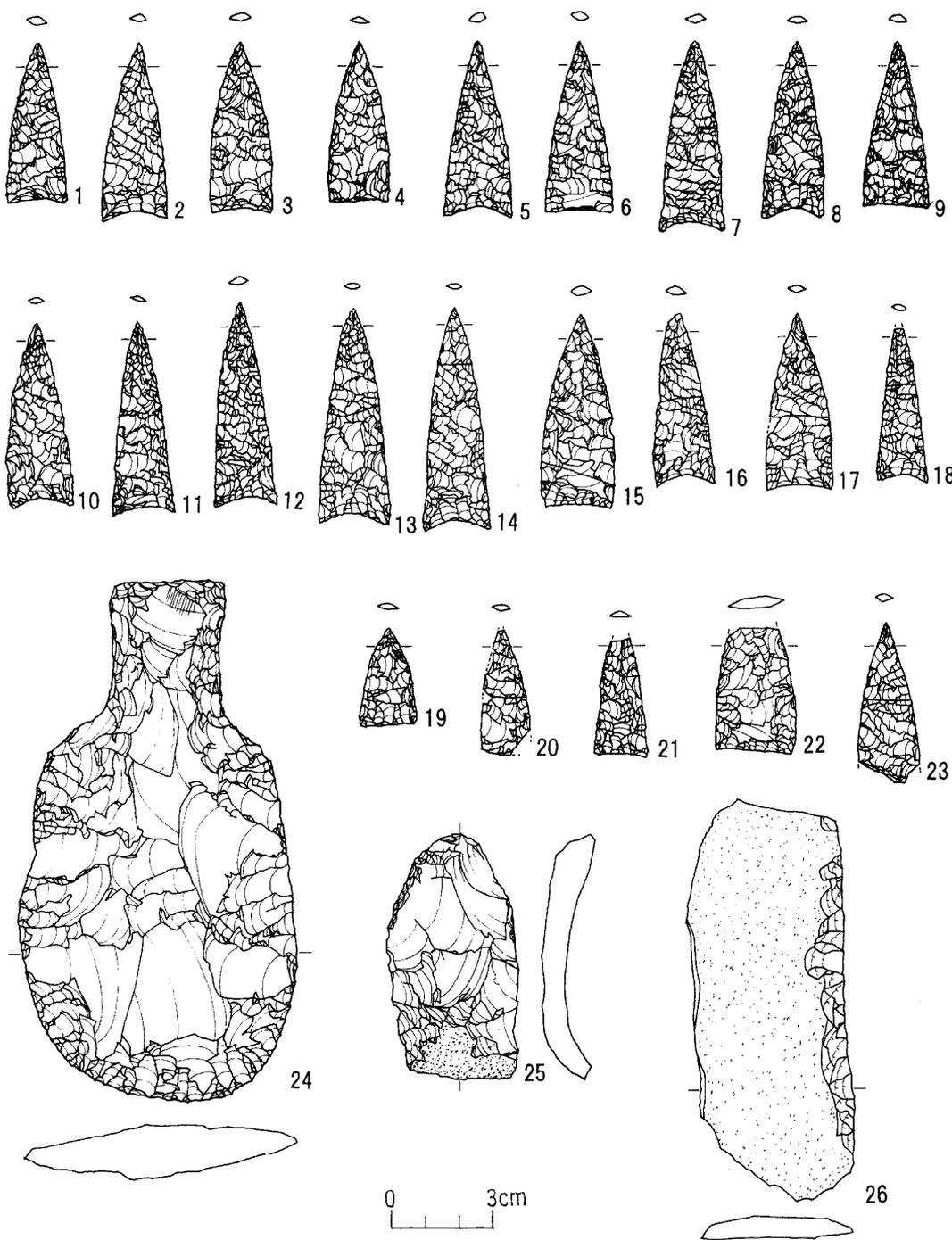
### 遺構 (第158図, 図版24-1)

本ピットはE'86グリッドに位置する。規模は長軸1.10m、短軸0.85mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約25cmを測る。床面のほぼ全面に粘性をもち暗赤褐色土を呈した遺存体があり、上部にベンガラが広い範囲に散布され、周囲にもブロック状にみられる。

遺存体は南壁側が丸みをおびるので頭部の可能性がある。遺物は石器が主体である。第158図に示すとおり、遺存体上から石鏃23本が集中しており、両面加工ナイフが近接して出土した。他の石器は北東壁隅からの出土である。



第161図 ビット921埋土(1~59)出土石器



第162図 ピット921埋土(1~26)出土石器

**遺 物** (第164図-1, 第161図, 第162図, 図版24-2~45, 図版25)

第164図-1は縄文晩期の口縁部。

石器は第161図・第162図-1~23は有茎石鏃。24は細長い柄部を作出した両面加工ナイフ。

25・26は削器。26は玄武岩製であり、他は黒曜石製。

**小 括**

時期は縄文初期と思われるが詳細は不明である。特徴的なナイフをみると宇津内Ⅱa式など縄文初頭であろう。 (武田 修)

**ピ ッ ト 922****遺 構** (第158図)

本ピットはE'86グリッドに位置する。ピット922aに北壁を削られるものの規模は長軸約0.80mの楕円形を呈すると思われる。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。 (武田 修)

**ピ ッ ト 922a****遺 構** (第158図, 図版26-1)

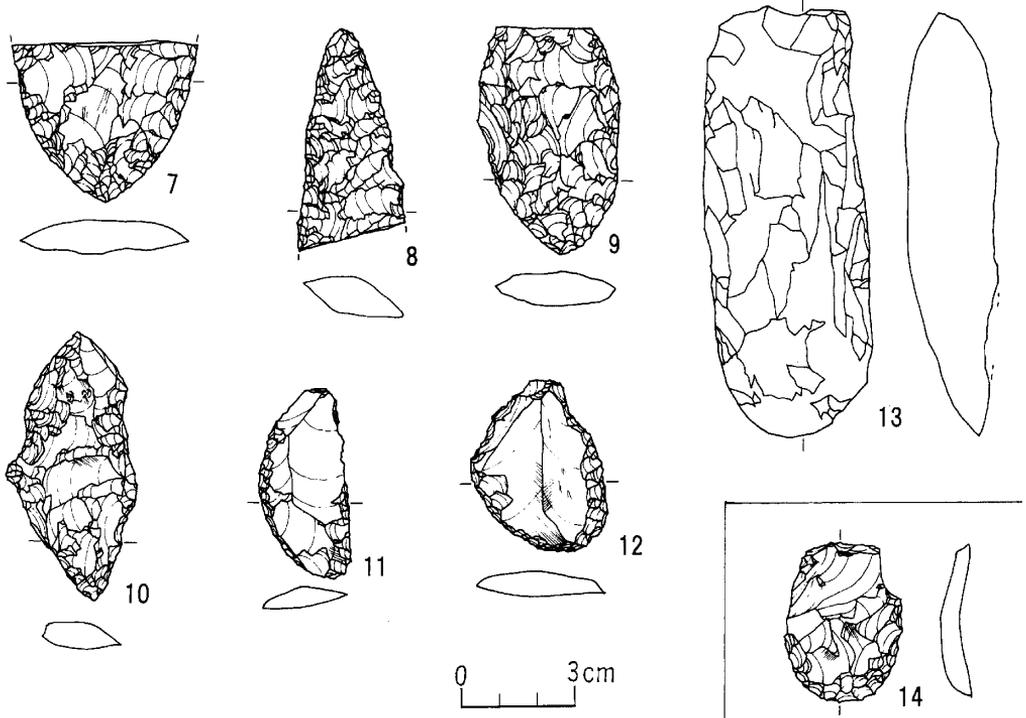
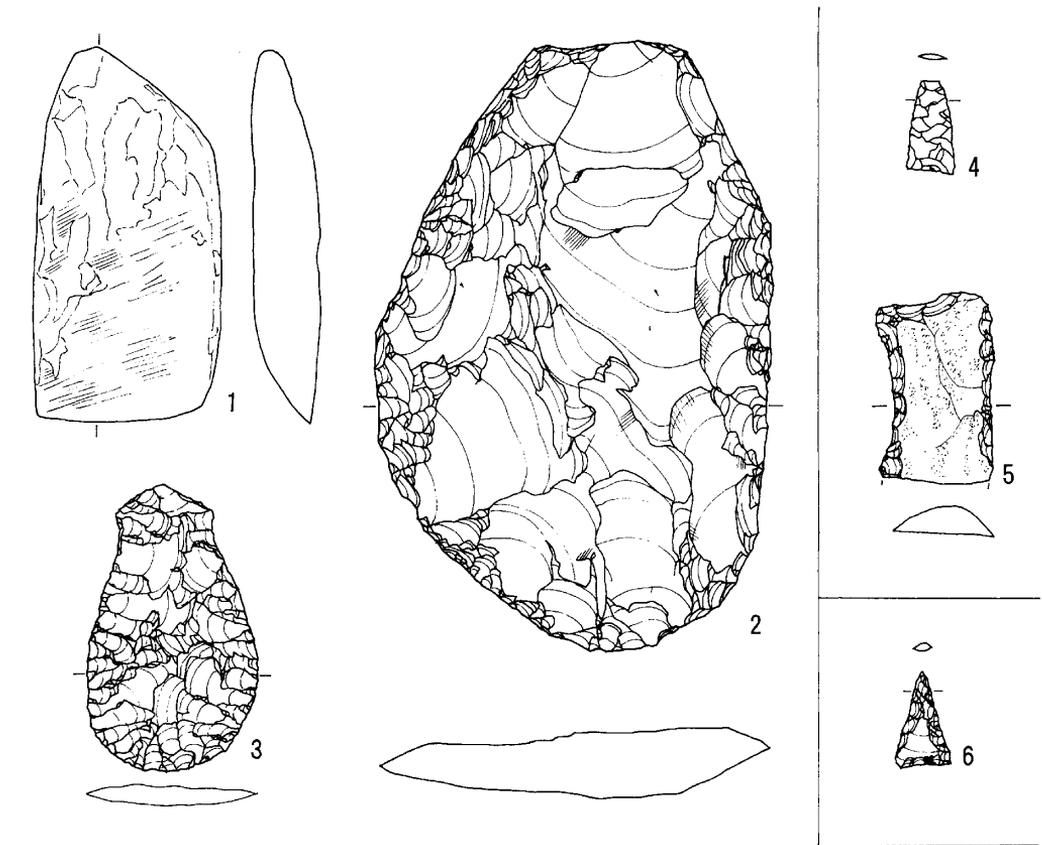
本ピットはE'86グリッドに位置する。規模は長軸約1.20m、短軸約0.63mの楕円形を呈する。床面全面に層厚3cmの暗赤褐色土を呈した遺存体がみられ、中央部からやや東寄りに長さ18cm、幅12cmの範囲にベンガラが散布されている。

**遺 物** (第164図-2・3, 第163図-1~3, 図版26-2~4)

第164図-2・3は無文土器。2は皿状を呈するのであろう。2点とも縄文晩期中葉であろう。

石器は第163図-1は床面出土の片刃磨製石斧。珪質泥岩製。2は表裏面とも大きな剥離痕をもち、縁辺部を調整した黒曜石製。3は柄部を作出した両面加工ナイフ。頁岩製。

(武田 修)



第163図 ピット922a 床面(1)・遺体上(2)・埋土(3)、924埋土(4・5)、925埋土(6)、926床面(7)  
 ・埋土(8~13)、929埋土(14)出土石器

## ピ ッ ト 923

## 遺 構 (第158図)

本ピットはE'86グリッドに位置する。規模は長軸約1.21m、短軸約0.93mの楕円形を呈する。高さは確認面から14cmを測る。

## 遺 物 (第164図-4)

第164図-4は縄文晩期の胴部片。

(武田 修)

## ピ ッ ト 924

## 遺 構 (第165図)

本ピットはE'88グリッドに位置する。規模は直径約1.20mの不整形円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。高さは確認面から約50cmである。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第164図-5・6, 第163図-4・5)

第164図-5は統縄文の胴部片。6は縄文後期。

石器は第163図-4は無茎石鏃。火熱を受け、発泡スチロール化している。5は削器。2点とも黒曜石製。

(武田 修)

## ピ ッ ト 925

## 遺 構 (第165図)

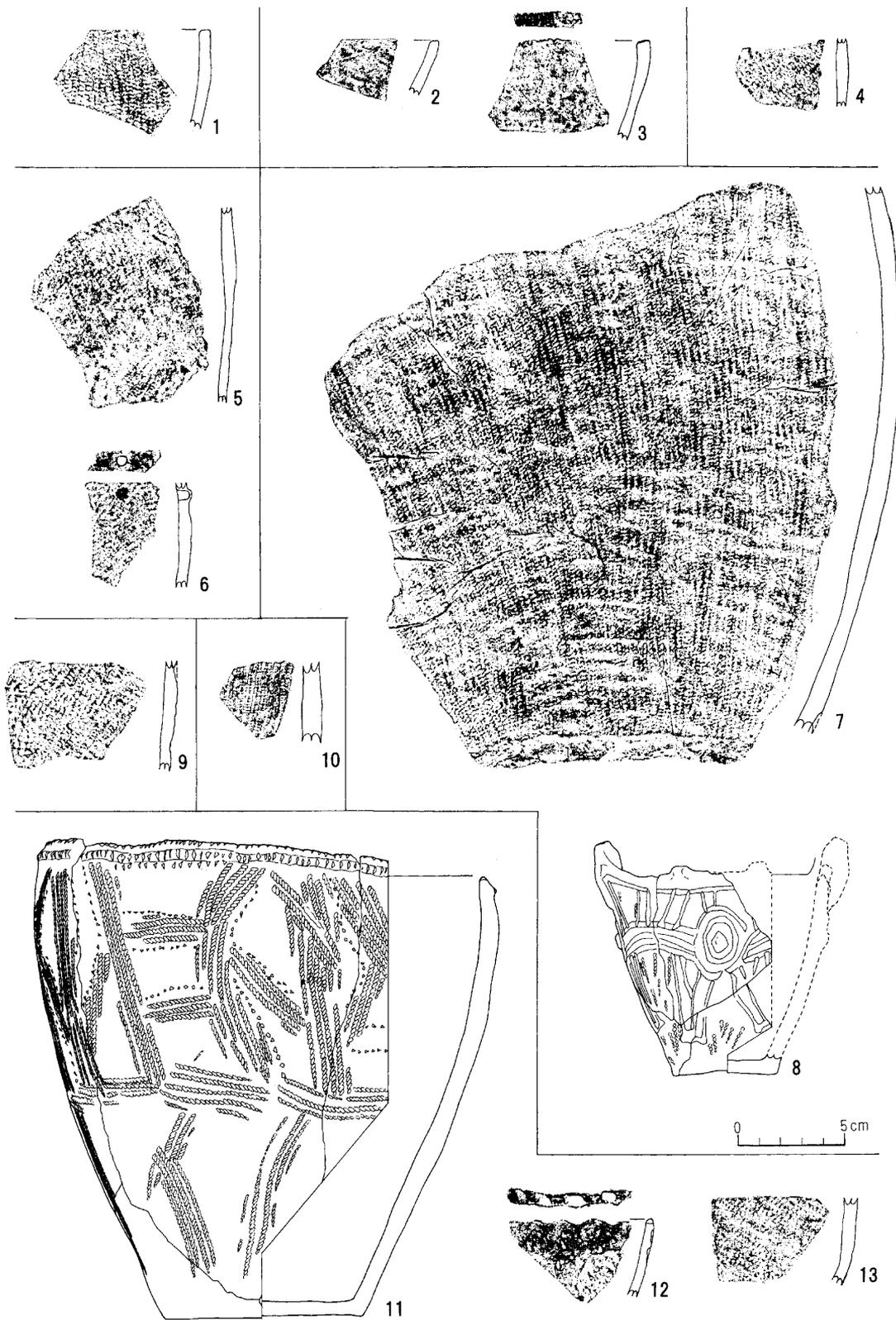
本ピットはE'88グリッドに位置する。規模は長軸約1.50m、短軸約1.30mの不整形楕円形を呈する。壁高は確認面から約10cmを測る。北東壁側に暗茶褐色土の遺存体の痕跡が認められるので土墳墓であろう。

## 遺 物 (第164図-7・8, 第163図-6, 図版26-5・6)

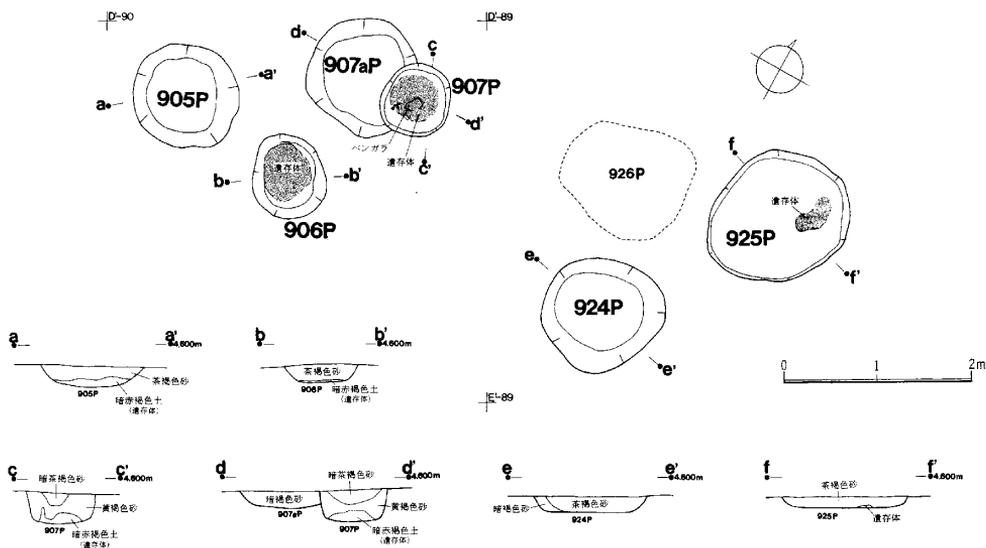
第164図-7は統縄文土器の胴部片。8は口径11.5cm、器高11cmの小型土器。同心円文を施した統縄文字津内Ⅱb式。

第163図-6は表裏面とも縁辺部に加工を施した三角形鏃。

(武田 修)



第164図 ビット921埋土(1)、922a埋土(2・3)、923埋土(4)、924埋土(5・6)、925埋土(7・8)、926埋土(9)、929埋土(10)、930a床面(11)・埋土(12・13)出土土器



第165図 ピット905、906、907、907a、924、925平面図

## ピ ッ ト 926

### 遺 構 (第166図, 図版27-1)

本ピットはE'88グリッドに位置する。規模は長軸約1.35m、短軸は東西で異なり東側が1.20m、西側が0.95mを測る。床面には暗赤褐色土の遺存体が2箇所あり、二体合葬墓と思われる。各壁際には直径6~8cm、深さ7~12cmの柱穴が6本が配置される。

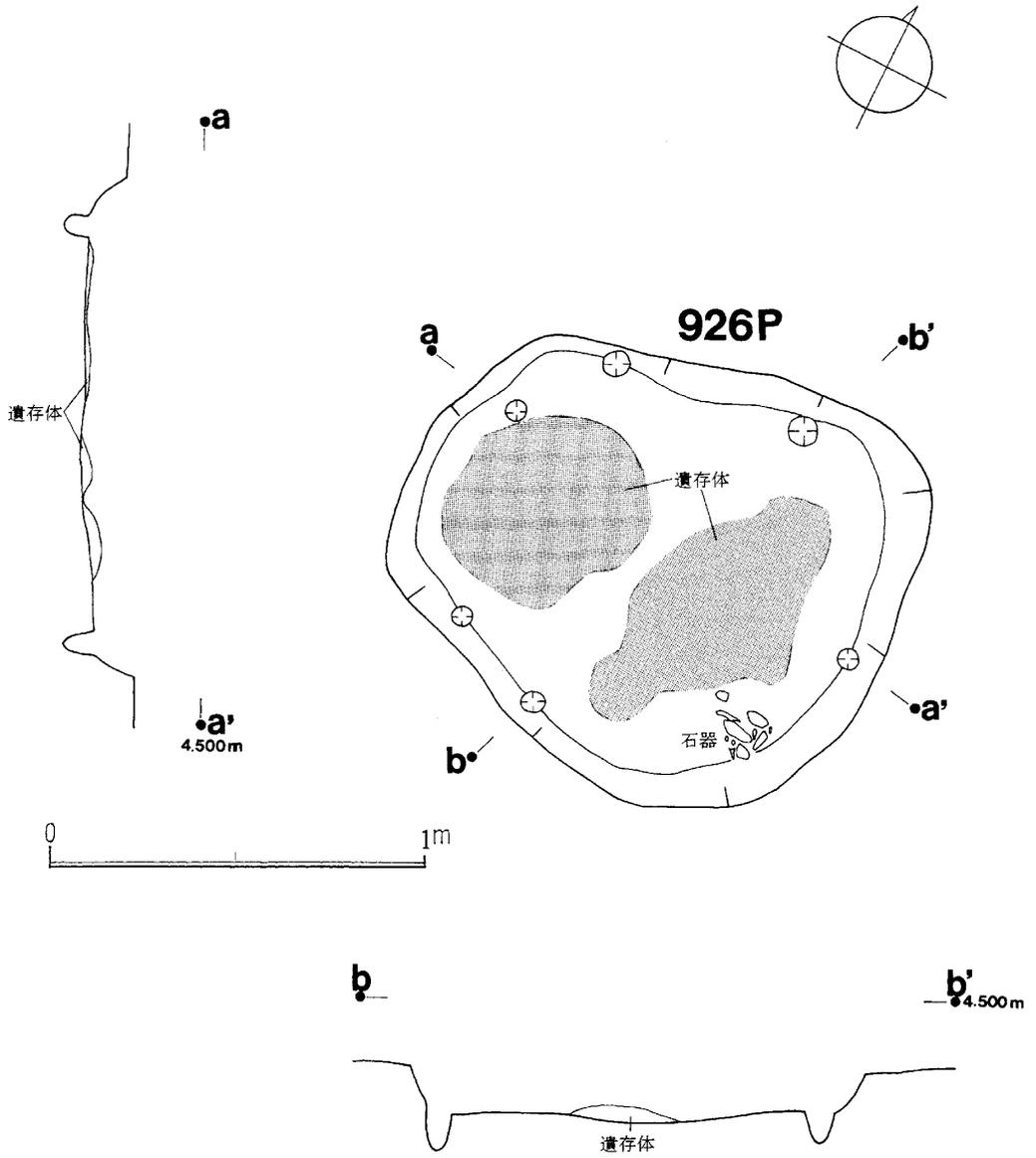
各種の石器群は南壁側に集中しており、ピット907同様の出土傾向である。

### 遺 物 (第164図-9, 第163図-7~13, 図版27-2~8)

第164図-9は縄文晩期の胴部片。

石器は第163図-7は床面出土の両面加工ナイフの先端部。8~10は両面加工ナイフで8は柄部。11は削器。12は搔器。全て黒曜石製である。13は剥落が著しいが、かろうじて刃部が残る丸みをもった両刃磨製石斧。青色片岩製。 (武田 修)

D'-89



第166図 ピット926平面図

## ピ ッ ト 927

## 遺 構 (第158図)

本ピットはD' 86・87グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.90m、短軸約1.20mの楕円形を呈する。壁は垂直に立ち上がり、高さは確認面から30cmを測る。(武田 修)

## ピ ッ ト 928

## 遺 構 (第158図)

本ピットはD' 86グリッドに位置する。規模は直径約1.40mの不整形円形を呈する。

高さは確認面から18cmを測る。(武田 修)

## ピ ッ ト 928a

## 遺 構 (第158図)

ピット928に北西側部を切られている。形態は残存部から判断して楕円形と思われる。推定長軸1.50m、短軸約1.10mを測る。床面に遺存体と思われる暗赤褐色土が見られる。高さは確認面から20cmを測る。(武田 修)

## ピ ッ ト 929

## 遺 構 (第159図)

本ピットはF' 25, E' 85に位置する。規模は長軸1.30m、短軸1.00mの楕円形を呈する。高さは確認面から28cmを測る。

## 遺 物 (第164図-10, 第163図-14, 図版27-9)

第164図-10は続縄文の胴部片。

石器は第163図-14は搔器。黒曜石製。(武田 修)

## ピ ッ ト 930

### 遺 構 (第159図)

本ピットはE'84に位置する。規模は長軸1.30m、短軸0.90mの楕円形を呈する。高さは確認面から26cmを測る。 (武田 修)

## ピ ッ ト 930a

### 遺 構 (第159図)

本ピットはピット930の南東側にあり、長軸約1.36m、短軸はピット930に切られているため不明である。壁高は確認面から20cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。埋土は4層あり、床面には遺存体と考えられる粘性をもった茶褐色砂が認められ、遺存体の上にはベンガラを含む赤褐色砂が検出されている。遺存体から歯骨が検出されなかったため頭位は不明である。ピットの東側の床面から第164図-11の土器が出土している。

### 遺 物 (第164図-11~13, 図版27-10)

第164図-11は床面出土。口径21cm、器高22.7cmで口唇部に刻みをもち、口縁部に横方向の擬状隆帯を巡らす。胴部は縞縄文と三角形列点文が施された、続縄文後北C<sub>2</sub>・D式の土器である。12・13は埋土出土の縄文晩期。

### 小 括

本ピットは長軸北東-南西方向の楕円形を呈する土壌墓である。時期は出土した土器から続縄文後北C<sub>2</sub>・D式期と考えられる。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 930b

### 遺 構 (第159図)

本ピットはピット930aの南西側にあるが、規模・形態は不明である。壁高は確認面から17cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。埋土の一部にはベンガラを含んでいることから土壌墓の可能性が考えられる。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 931

### 遺 構 (第9図)

本ピットはA'86グリッドに位置する。規模は直径約1.00mの不整形円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約32cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第169図-1・2)

第169図-1は縄文晩期。2は統縄文の底部。

(武田 修)

## ピ ッ ト 932

### 遺 構 (第9図)

本ピットはA'86グリッドに位置する。規模は直径約0.60mの不整円形を呈する。壁は丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 933

### 遺 構 (第9図)

本ピットはA85・86グリッドにまたがって位置する。規模は直径約0.60mの不整円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約40cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 934

### 遺 構 (第167図)

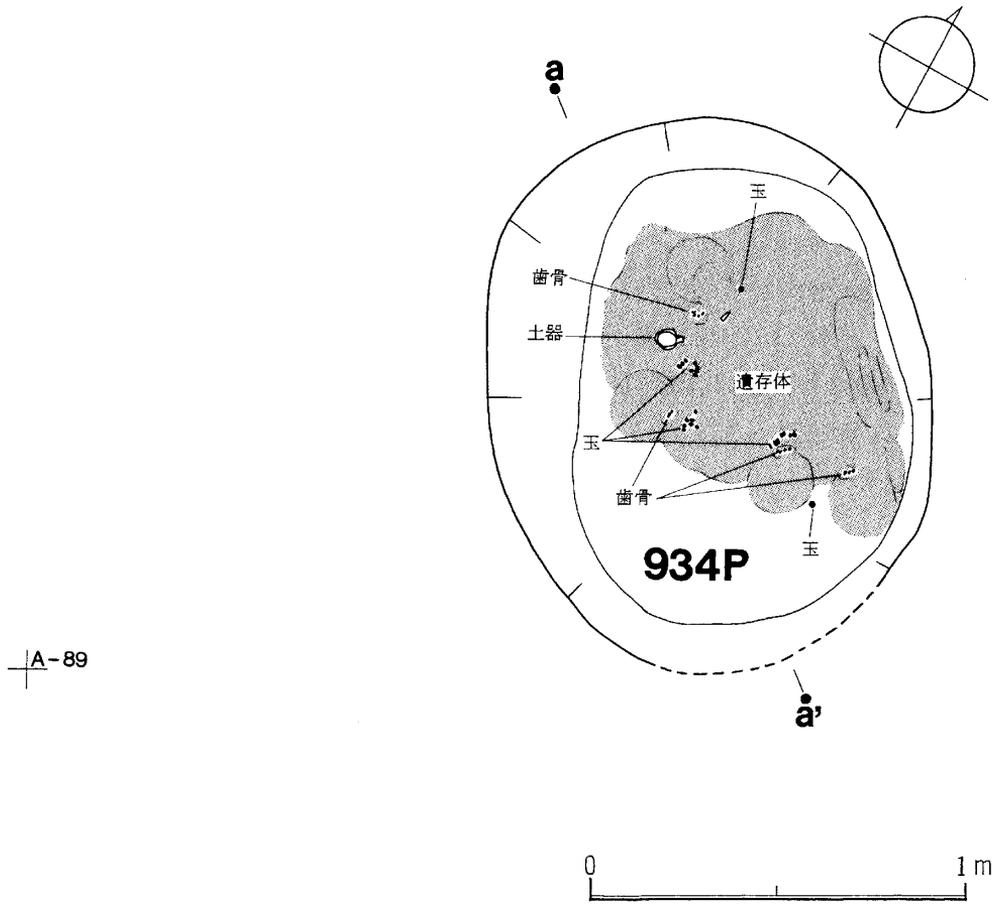
本ピットはA88グリッドに位置する。擦文期の140号堅穴の壁面検出中に発見したものである。140号堅穴によって東壁側が削られているが床面には達していない。規模は長軸約1.42m、短軸約1.15mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約65cmを測る。

床面のほぼ全面に暗褐色土の遺存体がみられる。頭部の膨らみも確認でき歯骨も検出された。頭部と歯骨の位置から四体の合葬墓であることが判明したが、三体は東頭位、一体は西頭位である。東頭位である三体の頭部の近くから玉類、西頭位の一体近くから注口土器が出土した。

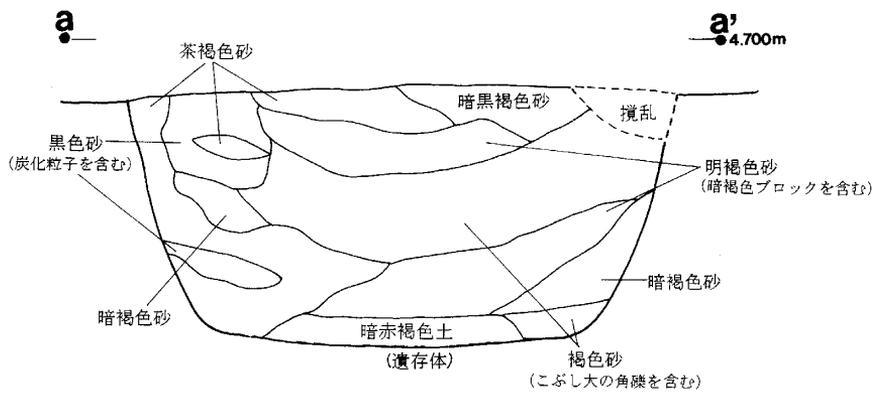
### 遺 物 (第169図-3~6, 第168図-1~97, 図版27-11)

第169図-3は遺体上、4~6は埋土出土である。3は口径約8cm、器高約5cmの小型注口土器。弧線状の微隆起帯と帯縄文、4は帯縄文が施された統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。5は統縄文宇津内系、6は縄文晩期であろう。

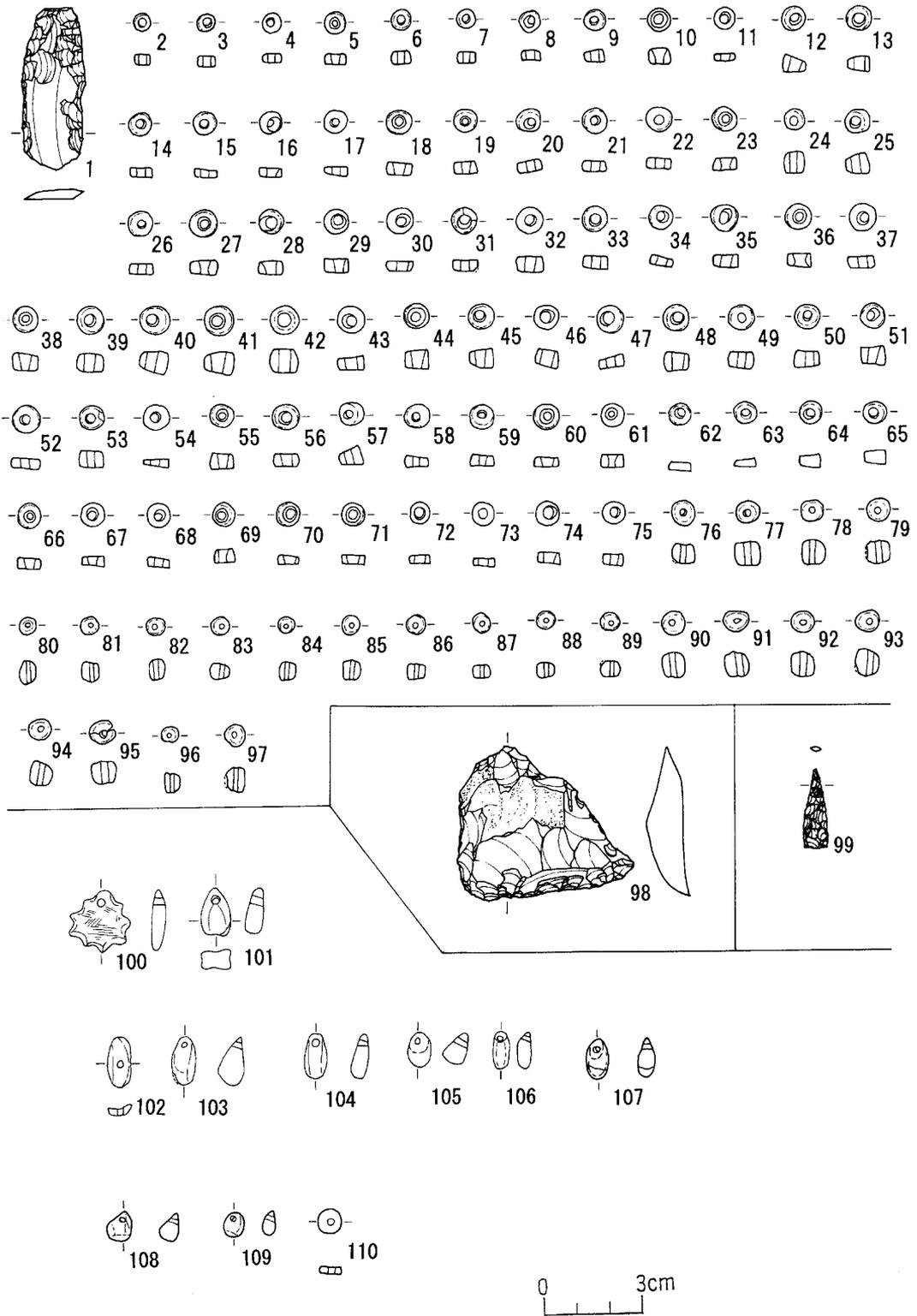
石器は第168図-1は埋土出土。横長剥片を素材とした削器。黒曜石製。2~79は蛇紋岩製の平玉。80~97は炭化状の黒色を呈した練り玉。



A-89



第167図 ビット934平面図



第168図 ビット934埋土(1~97)、938埋土(98)、940埋土(99)、941埋土(100~110)出土石器・琥珀玉・石製品・練り玉

## 小 括

本ピットは四体合葬の続縄文後北 C<sub>2</sub>・D 式の土壙墓である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 935

### 遺 構 (第29図)

本ピットは B' 84, C' 84 グリッドにまたがって位置する。表土下に白色の樽前 a 火山灰が堆積しており、層厚15cmほどの黒色砂を切り込んで構築されている。規模は長軸約1.70m、短軸約1.32mの楕円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約60cmである。

図示していないが黒色砂の下層から続縄文後北 C<sub>2</sub>・D 式の土器が出土するものの、詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 936

### 遺 構 (第29図)

本ピットは B' 84 グリッドに位置する。規模は直径約0.90mの円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約30cmを測る。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 937

### 遺 構 (第29図)

本ピットは A' 84・85に位置する。規模は直径0.70mの円形を呈する。壁は「V」字状に立ち上がり、高さは確認面から44cmを測る。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 938

### 遺 構 (第173図)

本ピットは B88 グリッドに位置する。規模は長軸約1.30m、短軸約1.10mの不整楕円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約31cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第169図-7・8, 第168図-98)

第169図-7・8は続縄文後北 C<sub>2</sub>・D 式。埋土出土。

第168図-98は搔器。黒曜石製。

(武田 修)

## ピ ッ ト 939

### 遺 構 (第172図)

本ピットはB90グリッドに位置する。規模は直径約1.00mの円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約30cmを測る。埋土内にベンガラ散布がみられる。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第169図-9)

第169図-9は埋土から出土した続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。

(武田 修)

## ピ ッ ト 940

### 遺 構 (第15図)

本ピットはD82グリッドに位置し、ピット940bの東壁上部を切り込んでいる。規模は長軸約0.78m、短軸約0.62mの小楕円形を呈する。壁高は確認面から約20cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第169図-10, 第168図-99)

第169図-10は埋土出土の続縄文宇津内系。

第168図-99は埋土出土の無茎石鏃。黒曜石製。

(武田 修)

## ピ ッ ト 940a

### 遺 構 (第15図)

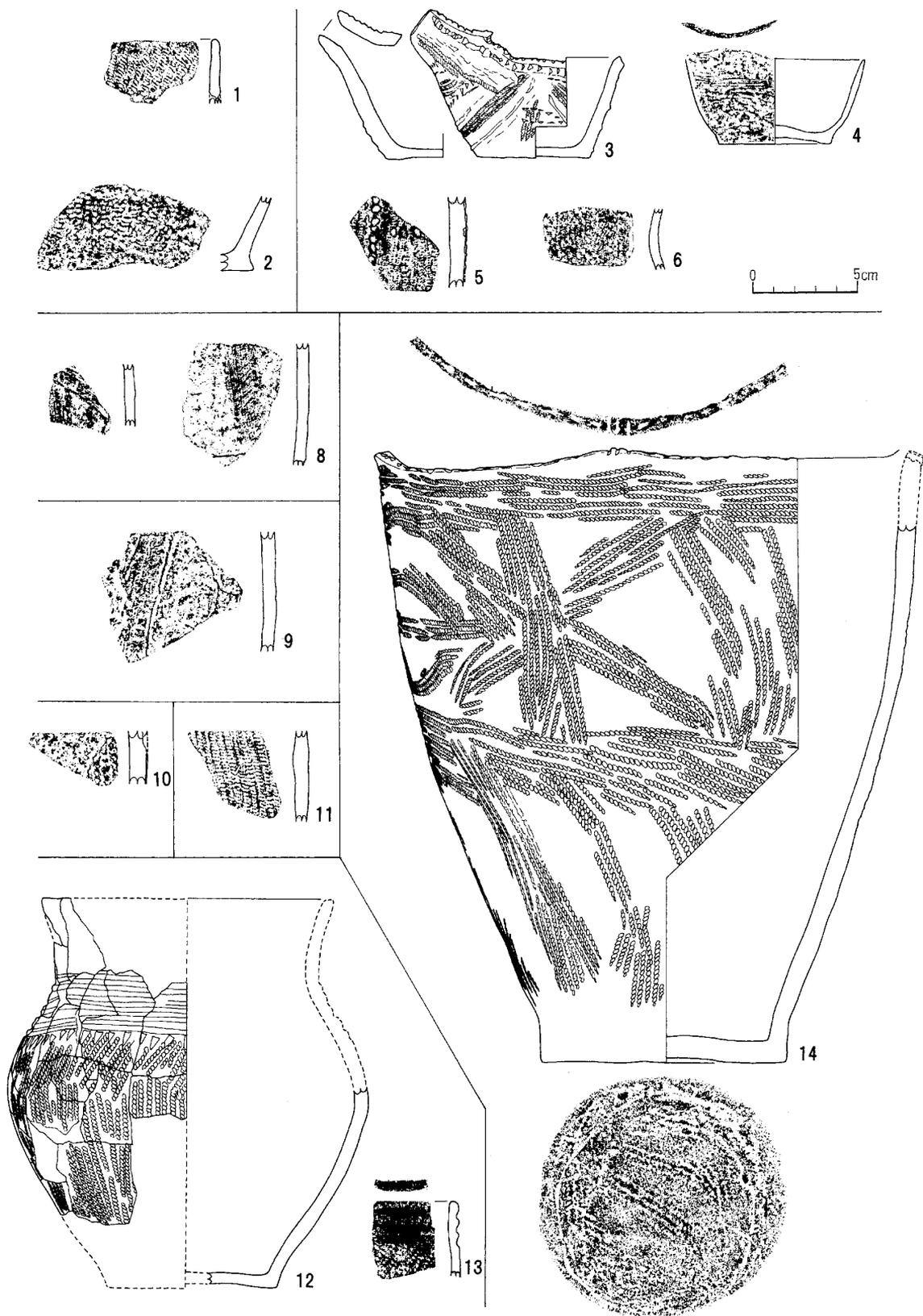
本ピットは長軸約1.70m、短軸約1.50mの楕円形を呈する。続縄文初頭のピット940bの西壁上部を切り込み、後北C<sub>2</sub>・D式のピット940cと僅かに重複する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約40cmである。埋土の中位に黒曜石のフレーク・チップ集積が流れ込む状態で認められる。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第169図-11)

第169図-11は埋土出土の続縄文土器。

(武田 修)



第169図 ビット931埋土(1・2)、934遺体上(3)・埋土(4~6)、938埋土(7・8)、939埋土(9)、940埋土(10)、940a埋土上部(11)、940b床面(12)・埋土(13)、940c床面(14)出土土器

## ピ ッ ト 940b

## 遺 構 (第15図, 図版28-1)

本ピットはD82・83グリッドにまたがって位置する。東西方向に長軸面をもつもので、規模は長軸約1.25m、短軸約0.80mの楕円形を呈する。壁は垂直に立ち上がり、高さは確認面から約30cmを測る。南壁際に3本、北壁際に2本の柱穴をもつ。径約6～8cm、深さ約5～10cmである。

床面には第169図-12の土器を伏せた状態で出土している。

## 遺 物 (第169図-12・13, 図版28-2)

第169図-12は口径約13cm、器高約19cmの壺型土器。口縁下部は無文であるが、頸下部は5条の横走沈線文があり、胴部の縦走縄文とは刺突文で区画される。続縄文初頭興津式相当であろう。13は埋土出土である。縄線文が施されており、縄文晩期中葉と思われる。

## 小 括

本ピットから遺存体は検出できなかったが、柱穴をもつ形態から土壙墓と思われる。時期は続縄文初頭の興津式相当であろう。 (武田 修)

## ピ ッ ト 940c

## 遺 構 (第15図, 図版28-4)

本ピットはD82, E82グリッドにまたがって位置する。表土を剥土した段階で落ち込みを確認したもので、規模は長軸約1.53m、短軸約0.90mの楕円形を呈する。壁は垂直に立ち上がり、高さは確認面から約50cmを測る。床面には黒褐色を呈した粘性のある遺存体が見られる。頭部は膨らみをもち、近接して第169図-14に示す土器が正立の状態で出土した。

## 遺 物 (第169図-14, 図版28-3)

第169図-14は床面出土である。口径約25cm、器高約30cmの大型土器。口唇部の4個の小波状突起は短刻線、他は刺突文をもつ。小波状突起の1つは打ち欠きされている。胴上部は二つの「\*」状の帯縄文間に弧線状の帯縄文、胴下部は縦走する。続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。

## 小 括

本ピットは東頭位の続縄文後北C<sub>2</sub>・D式の土壙墓である。 (武田 修)

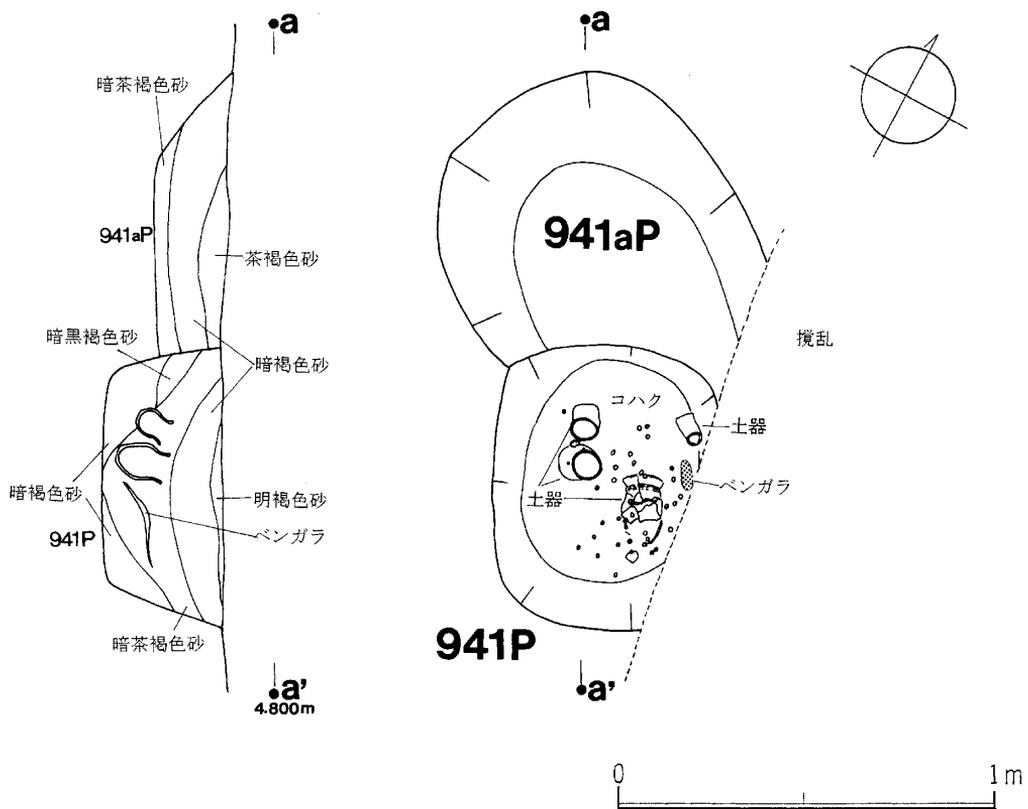
# ピット 941

## 遺構 (第170図, 図版29)

本ピットはB91グリッドに位置する。表土を剥土し、第Ⅱ層の茶褐色砂層を若干掘り下げた段階で落ち込みを確認した。北壁側が攪乱を受けるものの規模は長軸約0.75m、短軸約0.60mで、壁高は確認面から約30cmを測る。形態は不整長方形である。遺存体の痕跡は認められなかったが、ベンガラ散布や土器・琥珀玉の副葬から土墳墓とみられる。総数40点に及ぶ琥珀玉は連結せず、床面の近くで広く散在する状態である。

## 遺物 (第171図-1~4, 第168図-100~110, 図版30)

第171図-1~4は埋土出土である。1は北壁上隅隅から出土した口径6cm、器高6.5cmの小型無文土器。器面は煤が多量に付着する。2は口径約7.5cm、器高約9cmの小型土器。突瘤文と縄線文が胴下部まで施される。3は口径7.5cm、器高17.5cmの細長く、膨らみを胴下部にもつ、中型土器。縮約した口縁部は無文となり4個の小突起をもち、胴部の縦走縄文とは刺突文



B-91

第170図 ピット941、941a 平面図

で区画される。口縁部の一部にベンガラが付着する。2・3は床面からやや浮いて、並んだ状態で出土した。明らかに共伴している。2は続縄文宇津内Ⅱa式、3は興津式相当である。4は上部から出土した。3同様の細長い器形であり、縮約した口縁部に縄線文と吊り耳をもつ。興津式相当である。

第168図-100~110に代表的な琥珀玉を図示した。100は異形の琥珀玉であり、表面は研磨されている。101~109は雫形の琥珀玉、110は平玉である。平玉を除いた琥珀玉の孔は上部にもつ。

### 小 括

本ピットからは突瘤文をもつ宇津内Ⅱa式と興津式相当の土器が共伴している。琥珀玉の形態はこれまでの調査では宇津内Ⅱa式で平玉を多用するが、興津式相当では異形の琥珀玉が含まれることが確認されている。

時期は興津式相当の土壙墓と判断できる。 (武田 修)

## ピ ッ ト 941a

### 遺 構 (第170図)

本ピットはピット941に南東壁端部と攪乱により切られているが、残存部から判断して楕円形と思われる。短軸約0.77mである。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明であるが、ピット941の興津式相当より古いことは確実である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 942

### 遺 構 (第159図)

本ピットはB'91グリッドに位置する。規模は直径約1.50m不整円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約38cmである。床面に遺存体である層厚約2~12cmの暗赤褐色土がみられる。

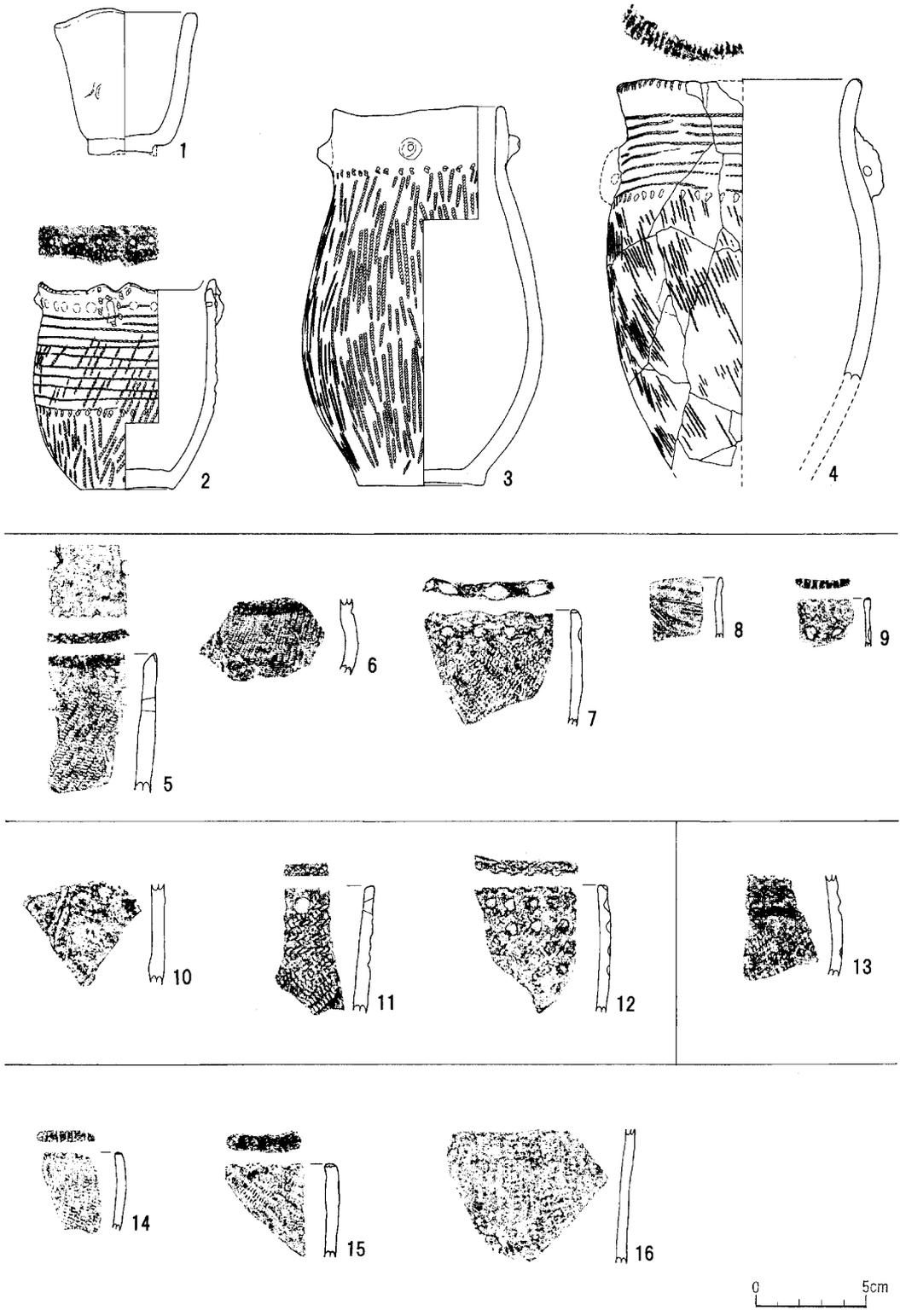
土壙墓であることは確実だが詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第171図-5~9, 第176図-1)

第171図-5・6は続縄文初頭。7~9は縄文晩期中葉。

第176図-1は両面加工ナイフ。黒曜石製。 (武田 修)

常呂川河口遺跡



第171図 ビット941埋土(1~4)、942埋土(5~9)、943埋土(10~12)、949埋土(13)、953床面(14)・埋土(15・16)出土土器

## ピ ッ ト 943

## 遺 構 (第159図)

本ピットはA'91グリッドに位置する。規模は直径約0.94mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約38cmである。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第171図-10~12)

第171図-10は続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。11は縄線文、12は刺突文の施された縄文晩期。

(武田 修)

## ピ ッ ト 944

## 遺 構 (第172図)

本ピットはA91グリッドに位置する。規模は直径約0.60mを測り、東西が若干長い不整円形を呈する。壁は皿状に立ち上がり、高さは確認面から約16cmである。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 945

## 遺 構 (第172図)

本ピットはA91グリッドに位置する。規模は直径約0.58mの円形を呈する。壁高は確認面から約33cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 946

## 遺 構 (第172図)

本ピットはA91グリッドに位置する。規模は直径約0.35mの小円形を呈する。壁高は確認面から約13cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

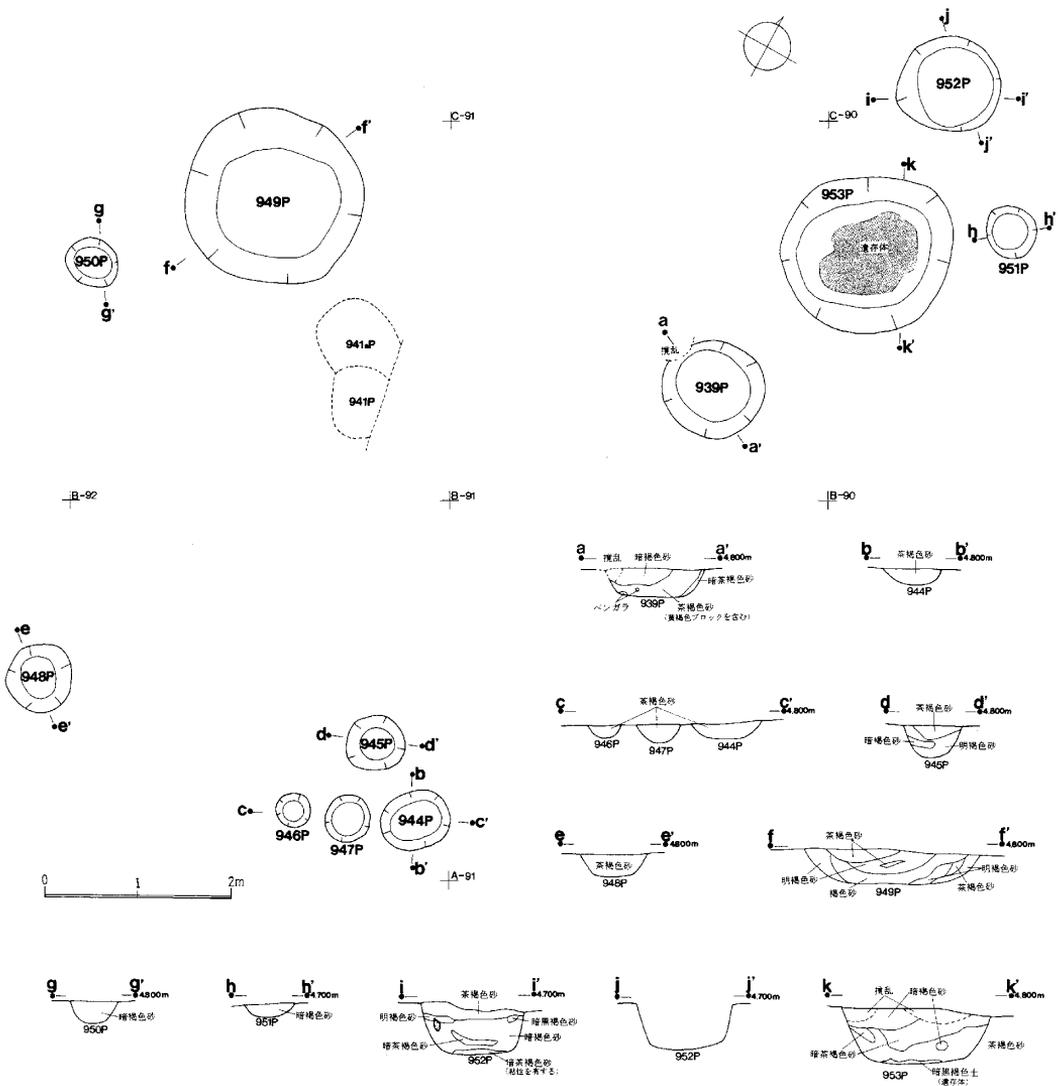
# ピット 947

## 遺構 (第172図)

本ピットはA91グリッドに位置する。規模は直径約0.50mの小円形を呈する。壁高は確認面から約20cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)



第172図 ピット939、944、945、946、947、948、949、950、951、952、953平面図

## ピ ッ ト 948

### 遺 構 (第172図)

本ピットはA92グリッドに位置する。規模は直径約0.60mの円形を呈する。壁高は確認面から約24cmを測る。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 949

### 遺 構 (第172図)

本ピットはB91グリッドに位置する。規模は直径約1.83mの円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約30cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第171図-13)

第171図-13は埋土出土である。縄線文と縄端圧痕文が施される。縄文晩期中葉であろう。

(武田 修)

## ピ ッ ト 950

### 遺 構 (第172図)

本ピットはB91グリッドに位置する。規模は直径約0.50mの小円形を呈する。壁高は確認面から約22cmを測る。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 951

### 遺 構 (第172図)

本ピットはB89グリッドに位置する。規模は直径約0.50mの小円形を呈する。壁は浅く立ち上がり、高さは確認面から約15cmを測る。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピット 952

### 遺構 (第172図)

本ピットは C89グリッドに位置する。規模は直径約0.95mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約50cmを測る。埋土には4～5cmの小角礫が顕著に混入する。床面に粘性をもった茶褐色砂の遺存体がみられる。

土壙墓であるが、詳細な時期は不明である。

### 遺物 (第176図-2)

第176図-2は両面加工ナイフ。黒曜石製。

(武田 修)

## ピット 953

### 遺構 (第172図)

本ピットは B89・90グリッドにまたがって位置する。規模は南北方向が1.80m、東西方向が1.60mを測る。壁高は確認面から約60cmを測る。形態は僅かに南北方向が長い不整形を呈する。床面のほぼ全面には薄い暗黒褐色土の遺存体がみられる。

### 遺物 (第171図-14～16, 第176図-3)

第171図-14は床面、他は埋土出土である。14は口唇部に細い刻みが施される。3点とも縄文晩期中葉であろう。

石器は第176図-3は無茎石鏃。黒曜石製。

### 小括

床面からの出土土器が小破片であるため断定できないが、縄文晩期中葉の土壙墓と思われる。

(武田 修)

## ピット 954

### 遺構 (第173図)

本ピットは C88グリッドに位置する。このピットを含め5基のピットが東側に連なり僅かに重複する。これらのピットは表土下の黒色土を剥した段階で落ち込みを確認した。規模は長軸約1.68m、短軸約1.20mの楕円形を呈する。最上部には焚火とみられる焼土が広い範囲に認められた。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約72cmを測る。

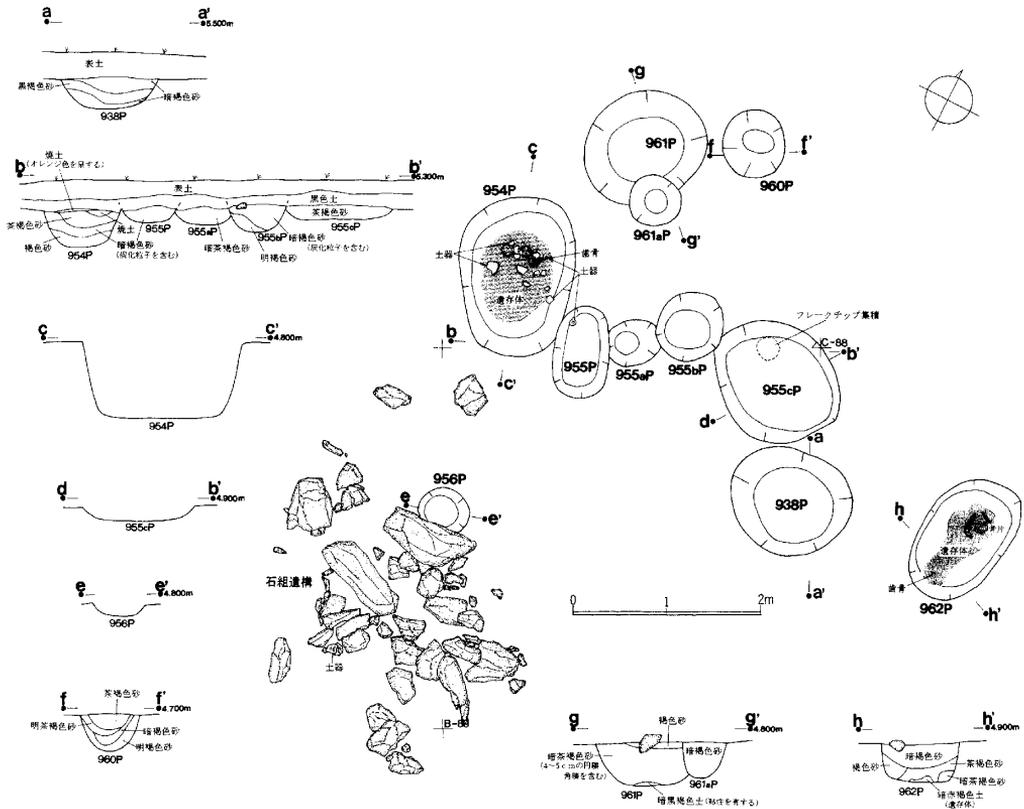
埋土を掘り下げる段階で後北 C<sub>2</sub>・D 式の破片が顕著にみられ、床面近くでは大型の破片も散見された。床面には暗茶褐色土を呈した遺存体がある。遺存体は粘性をもち頭部の輪郭も明瞭で、北頭位の三体の遺存体を確認された。

遺 物 (第174図, 図版31-1)

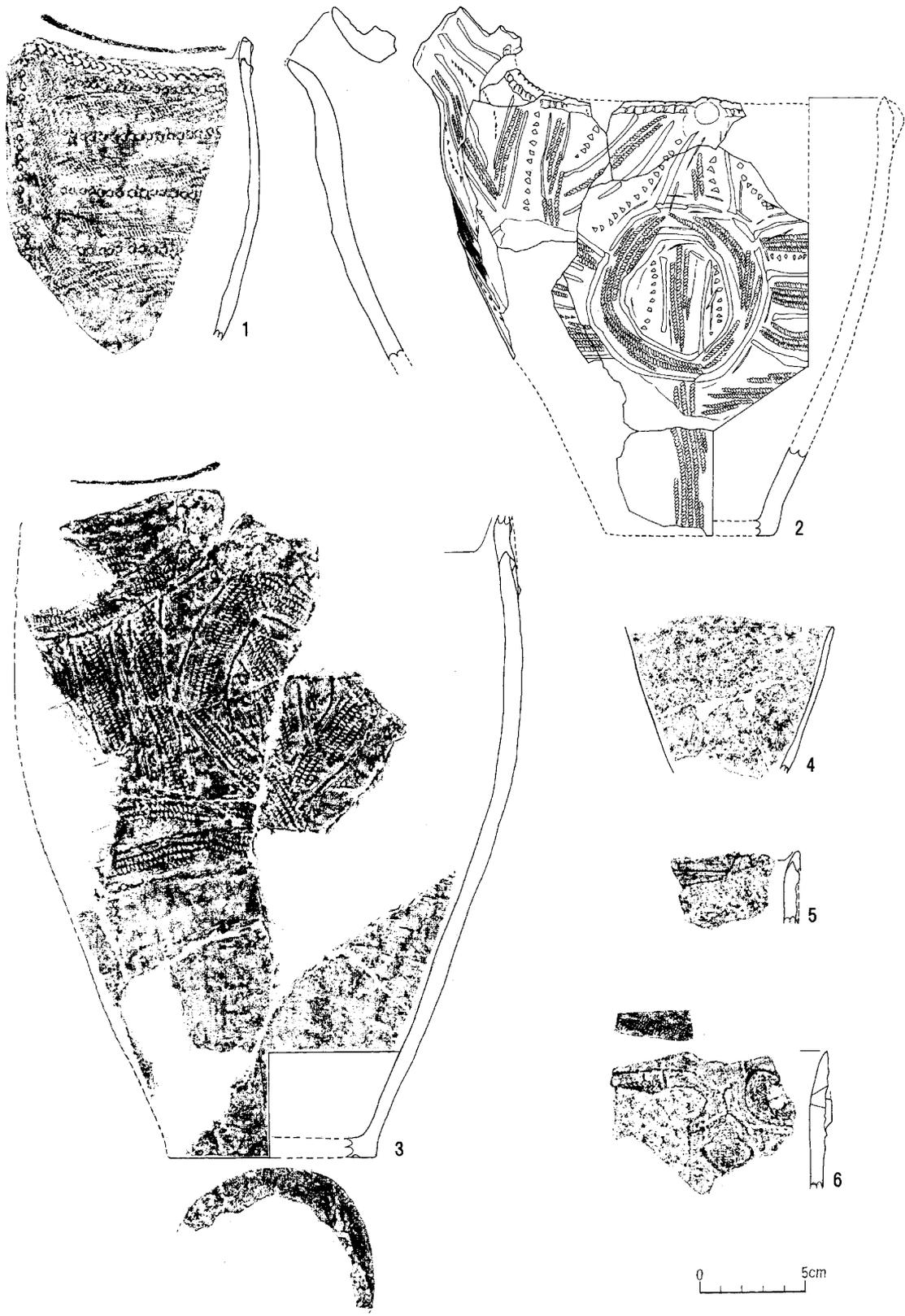
第174図は埋土から出土。1は三角列点文と帯縄文で構成される。2・3は埋葬時に破壊されたものと考えられるもので器面に円弧文が施される。2は口径約22cm、器高約25cmの注口土器。4は無文小型土器。1～4は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。5・6は宇津内Ⅱb式。

小 括

本遺跡における統縄文後北C<sub>2</sub>・D式の墓は東頭位を基本として、頭部に土器などの副葬品を正立の状態で配置するが、本ピットは北頭位の三体合葬墓であり、土器は破壊されている。死亡原因の結果により葬法が相違するのであろう。(武田 修)



第173図 ピット938、954、955、955a、955b、955c、956、960、961、961a、962、石組遺構平面図



第174図 ビット954埋土(1~6)出土土器

## ピ ッ ト 955

## 遺 構 (第173図)

本ピットはピット954と僅かに接する。規模は長軸約0.95m、短軸約0.60mの楕円形を呈する。西壁上部から第175図-1に示す小型土器が伏せた状態で出土しているが、本ピットに伴うか不明である。

## 遺 物 (第175図-1, 図版31-2)

第175図-1は口径約8cm、器高約4.5cmの小型土器。口唇部に4個の小突起をもち、1個は吊り耳状の大突起である。この部分では貫通しないが内側からの刺突がみられ注口土器を意図したようにも見受けられる。帯縄文を弧線状に施しており、赤色顔料が内外面に塗布される。続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。 (武田 修)

## ピ ッ ト 955a・955b

## 遺 構 (第173図)

ピット955aは南壁側をピット955、北壁側をピット955bに切られている。規模は南北にやや長い長軸約0.60m、短軸約0.48mの小楕円形であるが、床面は丸みをもつ。壁高は確認面から約20cmを測る。

ピット955bはピット955cの西壁端部で重複する。規模は直径約0.70mの円形を呈する。壁は丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約30cmを測る。

両ピットとも詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 955c

## 遺 構 (第173図)

本ピットは長軸約1.50m、短軸約1.20mの楕円形を呈するが、長軸側は細く尖る形態である。壁高は確認面から10cmほどと浅い。

床面に黒曜石を主体としたフレーク・チップ集積がみられるが、詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第175図-2・3, 第176図-4)

第175図は全て埋土出土である。2は緩く外反した無文の口縁部に縄端圧痕文が施される。続縄文宇津内系であろう。3は後北C<sub>2</sub>・D式。

石器は第176図-4は両面加工ナイフの柄部。黒曜石製。

(武田 修)

## ピット956

### 遺構 (第173図)

本ピットは B88・89グリッドの石組調査中に検出した。規模は直径約0.55mの小円形を呈する。壁高は浅く、確認面から約12cmである。南壁側では大型角礫が僅かに被さるものの、石組との関連、詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピット 957

### 遺構 (第177図)

本ピットは D90グリッドに位置する。上部に長さ28～33cmの大型角礫2点が垂平の状態出土している。床面には暗赤褐色土を呈した遺存体がみられ、南壁側から小角礫を多量に含む茶褐色砂が中央付近まで覆っている。規模は長軸約1.14m、短軸約0.80mの長方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり高さは確認面から約44cmである。

### 遺物 (第175図-4・5, 第176図-5～10, 図版31-3～7)

第175図-4・5は埋土出土で、縄文晩期の胴部片である。

第176図-5・6は遺存体上部から出土。5は両面加工ナイフの柄部。6は実測図正面と先端部側面が研磨され、複数の有溝部をもつ研磨器。軽石製。7は両面加工ナイフ。8・9は搔器。10は打製石斧。緑色片岩製。5・7～9は黒曜石製。

### 小括

ナイフの形態から続縄文初頭と思われるが、詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピット 958

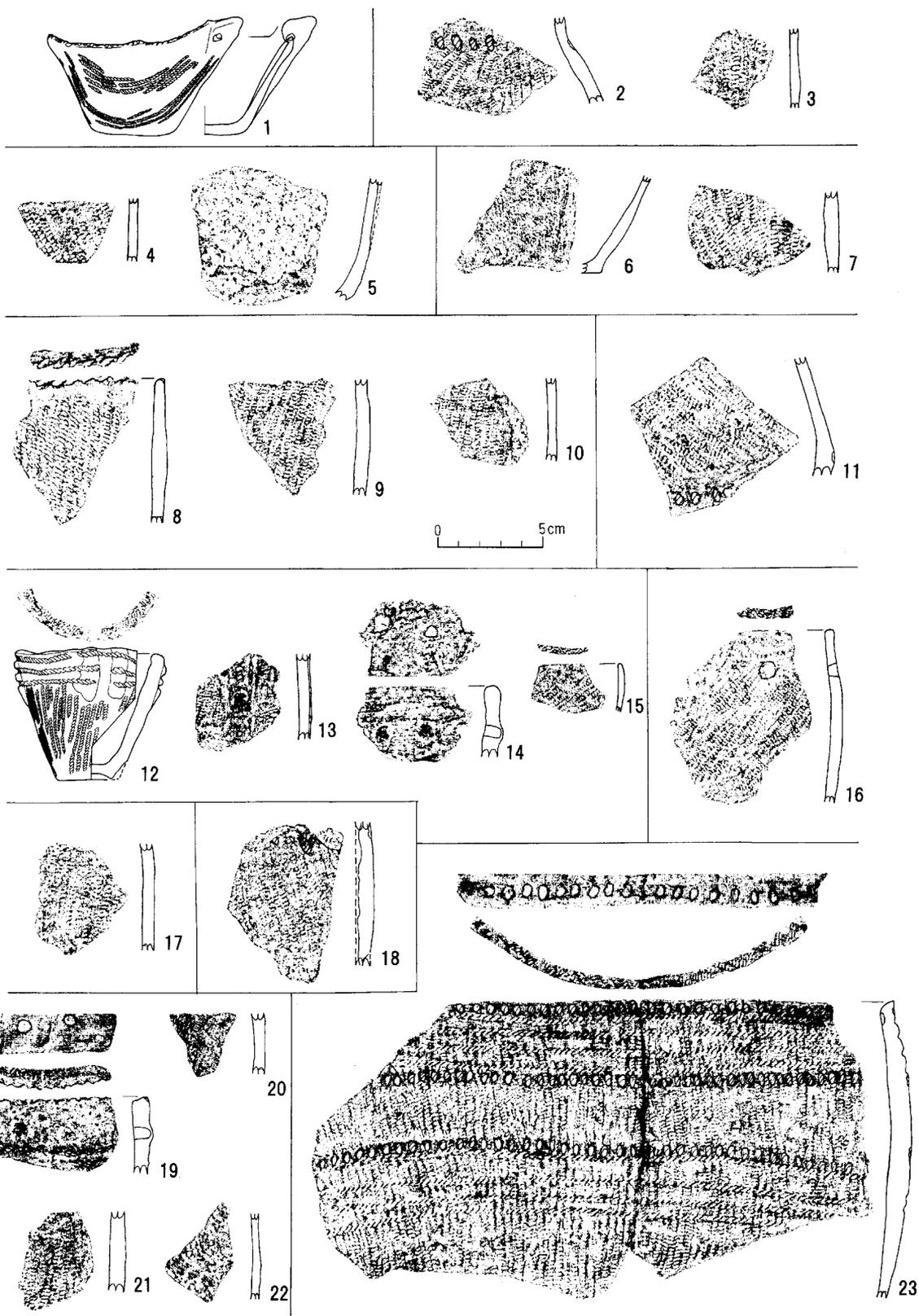
### 遺構 (第177図)

本ピットは D90グリッドに位置する。埋土は暗茶褐色砂の1層だけ堆積し、掘り下げ直後に長さ25～38cmの角礫2点が出土した。規模は長軸約0.98m、短軸約0.60mの楕円形を呈する。西壁は比較的緩く立ち上がるものの、他の壁はほぼ垂直であり、高さは確認面から約30cmである。暗赤褐色土の遺存体は中央部よりやや西側にある。南壁側からベンガラ散布され、上部から第176図-14に示す赤色顔料塗布の有溝研磨器がみられた。

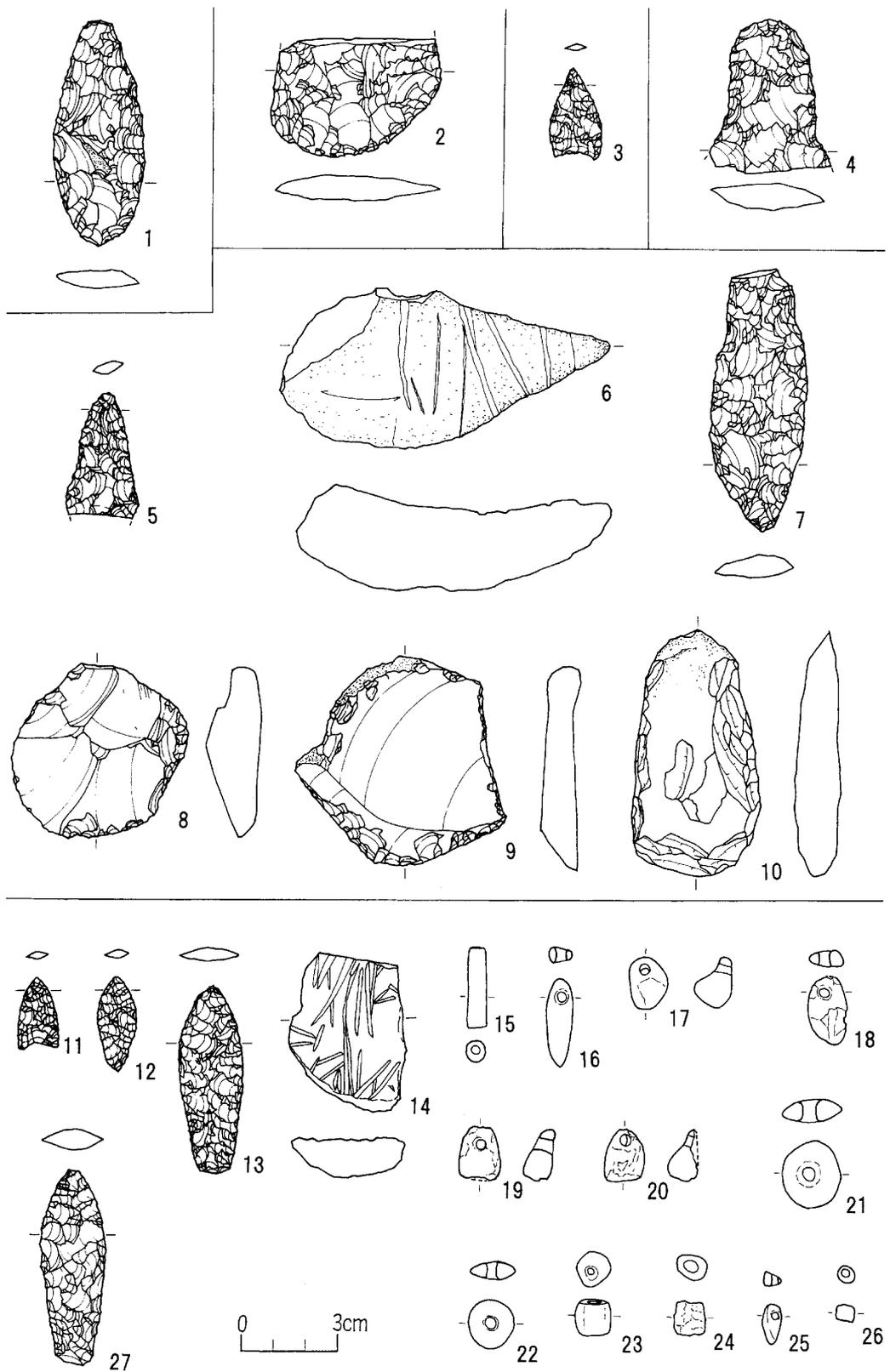
### 遺物 (第175図-6・7, 第176図-11～27, 図版31-8～24)

第175図-6・7は続縄文文字津内系であろう。6は捺糸文が施される底部。

石器は第176図-11は無茎石鏃。12・13・27は先頭部が最大幅をもち、柄部が細まる有茎石鏃。14はピット957にもみられた有溝研磨器であるが、表面全域に赤色顔料が塗布されている。



第175図 ピット955埋土(1)、955c埋土(2・3)、957埋土(4・5)、958埋土(6・7)、959a埋土(8～10)、961埋土(11)、962埋土(12～15)、963埋土(16)、965埋土(17)、966埋土(18)、967埋土(19～22)、968埋土(23)、出土土器

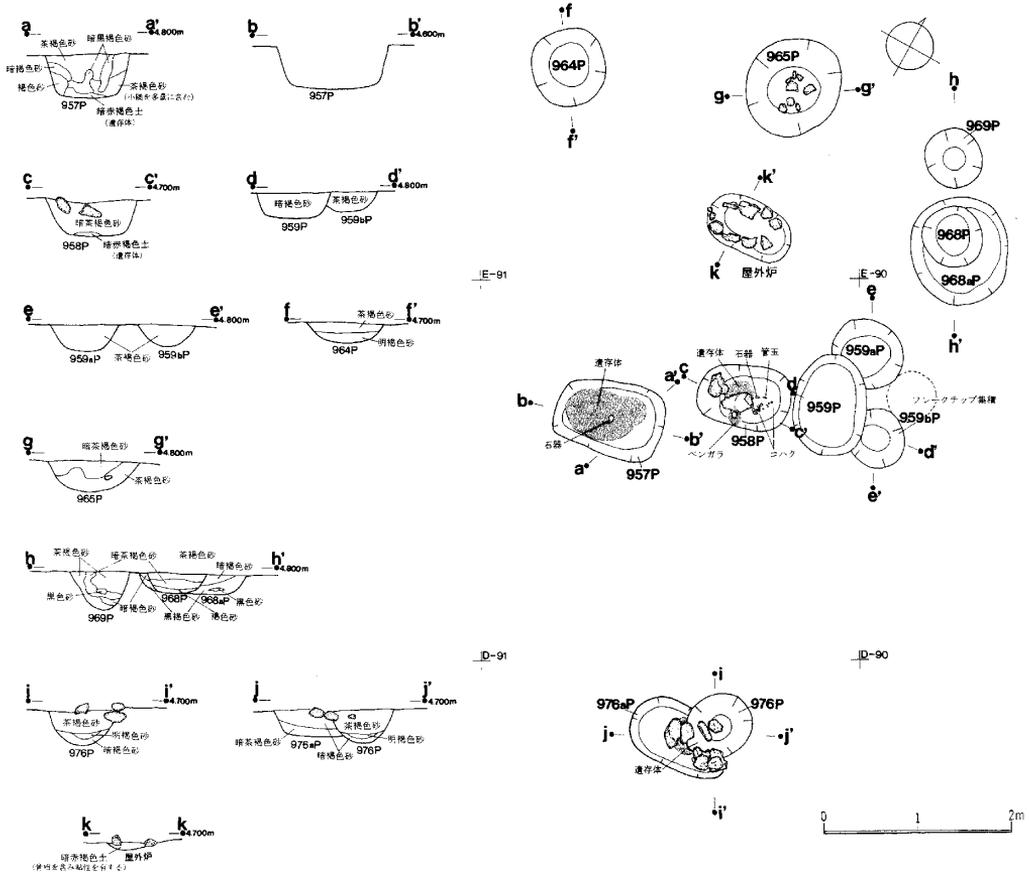


第176図 ビット942埋土(1)、952埋土(2)、953埋土(3)、955c埋土(4)、957遺体上(5・6)・埋土(7～10)、958遺体上(11～26)・埋土(27)出土石器・琥珀玉・管玉

軽石製。15は泥岩製の管玉。上部有孔面は研磨される。16~26は各種形態の琥珀玉。12はメノウ製、11・13・27は黒曜石製。

小 括

琥珀玉に管玉を伴う例はピット1012にも見られる。続縄文初頭と思われるが、詳細な時期は不明である。  
(武田 修)



第177図 ピット957、958、959、959a、959b、964、965、968、968a、969、976、976a、屋外炉平面図

## ピ ッ ト 959・959a・959b

### 遺 構 (第177図)

ピット959はD90グリッドに位置する。規模は長軸約1.05m、短軸約0.78mの楕円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約22cmを測る。

ピット959aはピット959に南壁を切られる。規模は直径約0.70mの円形を呈し、高さは確認面から約22cmを測る。

ピット959bはピット959に西壁を切られる。規模は直径約0.60mの円形を呈し、高さは確認面から約20cmを測る。

ピット959aと959bに接して径50cmの黒曜石のフレーク・チップ集積が認められた。両ピットの確認面とほぼ同一のレベルから検出された。

これらのピットの時期は不明である。

### 遺 物 (第175図-8~10)

第175図-8~10はピット959a埋土出土である。3点とも続縄文であるが、8は口唇部の外側に斜位の刻目が施される。続縄文初頭であろう。(武田 修)

## ピ ッ ト 960

### 遺 構 (第173図)

本ピットはC88グリッドに位置する。規模は直径約0.70mの円形を呈するが、床面は楕円形。壁高は確認面から約40cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。(武田 修)

## 屋 外 炉

### 遺 構 (第177図)

屋外炉はE90グリッドに位置する。第Ⅱ層の暗茶褐色砂の上面にある。規模は長軸約0.94m、短軸約0.59mの楕円形を呈する。10個の角礫は楕円形の掘り込み内部に配置されている。掘り込みは約8cmと浅く、粘性をもった暗赤褐色土には骨粉を含む。

続縄文期と思われるが詳細な時期は不明である。(武田 修)

## ピ ッ ト 961・961a

## 遺 構 (第173図)

ピット961は直径約1.18mの円形を呈する。南側から中央部にかけてみられる長さ100cm、幅45cmのフレーク・チップ集積を取り除き、約15cm下げた段階で墳上部の中央に長さ20cmほどの角礫1点が出土した。主たる埋土層である暗茶褐色砂層にも4～5cmの円礫と角礫が混入する。

床面には遺存体と思われる層厚4cmの暗黒褐色土が僅かにみられる。壁は丸みをもって緩く立ち上がり、高さは確認面から約44cmである。

土墳墓と思われるが詳細な時期は不明である。

ピット961aはピット961の東壁上部を切り込んでいる。規模は直径約0.54mの円形を呈し、深さは確認面から約36cmである。

## 遺 物 (第175図-11)

第175図-11はピット961から出土した。張り出した胴部に縄端圧痕文が施される。続縄文初頭であろう。

(武田 修)

## ピ ッ ト 962

## 遺 構 (第173図)

本ピットはB87グリッドに位置する。規模は長軸約1.40m、短軸約0.90mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約40cmを測る。南壁上部に径約15cm程の角礫一点がみられる。セクション図に示すとおり南壁側の褐色砂は上部の暗褐色砂に切り込まれるような不自然な堆積であるが、他のピットとの重複は確認できなかった。床面には粘性をもった暗赤褐色土の遺存体があり、南側から歯骨、北側に骨片が残存していた。骨片は1～2cm程のものであるが比較的硬化した状態であった。

## 遺 物 (第175図-12～15, 図版32-1)

全て埋土出土である。第175図-12は口径約6.5cm、器高約6cmの小型土器。隆帯を垂下させ、縄線文を施す。小型土器の割に器壁は厚く6mmである。続縄文宇津内系。13も宇津内系。14は無文部に突瘤文が施される。興津式相当であろう。15は縄文晩期の無文土器。

## 小 括

第175図-12に示す宇津内系の土墳墓と思われるが、これまでの調査で宇津内Ⅱa・Ⅱb期の墓は西頭位であり、違いがある。

(武田 修)

## ピ ッ ト 963

### 遺 構 (第186図)

本ピットはD87グリッドに位置する。規模は長軸約1.40m、短軸約1.10mの楕円形を呈する。上面確認の段階で複数のピットと重複すると思われたが、ピット963aとは僅かに接する程度である。高さは確認面から34cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第175図-16)

第175図-16は埋土出土である。無文の口縁部に補修口をもつ。縄文晩期であろう。

(武田 修)

## ピ ッ ト 963a・963b

### 遺 構 (第186図)

ピット963aはC87、D87グリッドにまたがって位置する。規模は直径約0.90mの円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約20cmである。上部の円礫はピット963bの礫が混入したものと判断できる。

ピット963bはピット963aに南壁の一部を削られるものの長軸約1.50m、短軸約1.30mの楕円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約20cmである。径4～20cmの円礫が東壁から中央部にかけて出土した。平面図、土層図に示すとおり各礫は密着し、礫下部の茶褐色砂層には4～5cmの小枝状炭化材、5～6mmの炭化粒を多量に含む。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 964

### 遺 構 (第177図)

本ピットはE90グリッドに位置する。規模は直径約0.80mの不整形を呈する。壁は皿状に浅く立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 965

## 遺 構 (第177図)

本ピットはE90グリッドに位置する。規模は直径約1.00mの円形を呈する。西壁から北壁にかけて緩く立ち上がる。壁高は確認面から約30cmを測る。床面からやや浮いて径10cmの小角礫6点と径18cmの中角礫2点出土している。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第175図-17)

第175図-17は統縄文字津内系の胴部片である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 966

## 遺 構 (第182図)

本ピットはE90, F90グリッドにまたがって位置する。規模は直径約0.60mの小円形を呈する。壁は「V」字状の断面をもち、高さは確認面から約30cmを測る。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第175図-18)

第175図-18は埋土出土である。大き目の縄端圧痕文が施される。統縄文字津内系であろう。

(武田 修)

## ピ ッ ト 967

## 遺 構 (第182図)

本ピットはE90, F90グリッドにまたがって位置する。ピット967aに西壁側を切られるものの形態は楕円形を呈する。短軸約0.90mを測る。上部に配置されていた角礫はピット967aに入り込む状態でみられ、下面に遺存体である粘性をもった暗茶褐色砂がみられた。壁の立ち上がりは浅く約15cm程である。

土壙墓であるが、詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第175図-19~22)

全て埋土出土である。第175図-19は無文の口縁部に突瘤文と縄線文が施される。統縄文初頭の興津式相当であろう。20・21は統縄文、22は縄文晩期の胴部片。

(武田 修)

## ピ ッ ト 967a・967b

### 遺 構 (第182図)

ピット967aは長軸約2.00m、短軸約1.30mの楕円形を呈する。北壁上部がピット967bに切られる。北壁側がやや開くが、他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。高さは確認面から約50cmを測る。床面に暗赤褐色土の遺存体がみられ、ベンガラが散布されている。

ピット967bは長軸約1.44m、短軸約0.90mの楕円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約32cmを測る。床面に暗赤褐色土の遺存体がみられる。

両ピットとも詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 967c

### 遺 構 (第182図)

本ピットの大半をピット967aに切られるが、残存部から判断して直径約0.55mの小円形を呈する。高さは確認面から約18cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 968・968a

### 遺 構 (第177図)

ピット968はE89グリッドに位置する。ピット968aの内部にあり、西側の床面を僅かに切り込んで構築されている。規模は直径約0.60mの円形を呈し、壁高は確認面から約20cmを測る。

ピット968aは長軸約1.10m、短軸約1.00mの不整形円形を呈し、壁高は確認面から約20cmである。

両ピットとも詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第175図-23)

ピット968から第175図-23は埋土出土である。横位の縄線文と縄端疋痕文が多用された続縄文宇津内系の土器。

(武田 修)

## ピ ッ ト 969

## 遺 構 (第177図)

本ピットはE89グリッドに位置する。規模は直径約0.60mの円形を呈する。壁は「V」字状に立ち上がり、高さは確認面から約40cmを測る。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第178図-1・2)

第178図-1は内側からの突瘤文をもち口縁部と口唇部に縄線文を施す。2は横走沈線文上に山形沈線文がみられる。1・2は続縄文初頭であろう。(武田 修)

## ピ ッ ト 970

## 遺 構 (第182図)

本ピットはE89, F89グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.10m、短軸約0.82mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約20cmを測る。埋土中位から黄褐色を呈した長さ18cm程の骨片がみられ、その直下から暗赤褐色土の遺存体を検出した。遺存体を取り除くと中央部に径約20cm、深さ約10cmの小ピットと西壁側に径約15cm、深さ約8cmの小ピットがみられた。

土壌墓であるが、詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第178図-3・4, 第179図-1~3, 図版32-2~4)

第178図-3・4は2点とも続縄文土器の胴部片と思われる。

石器は第179図-1は有茎石鏃。2・3は両面加工ナイフ。3点とも黒曜石製。

(武田 修)

## ピ ッ ト 970a

## 遺 構 (第182図)

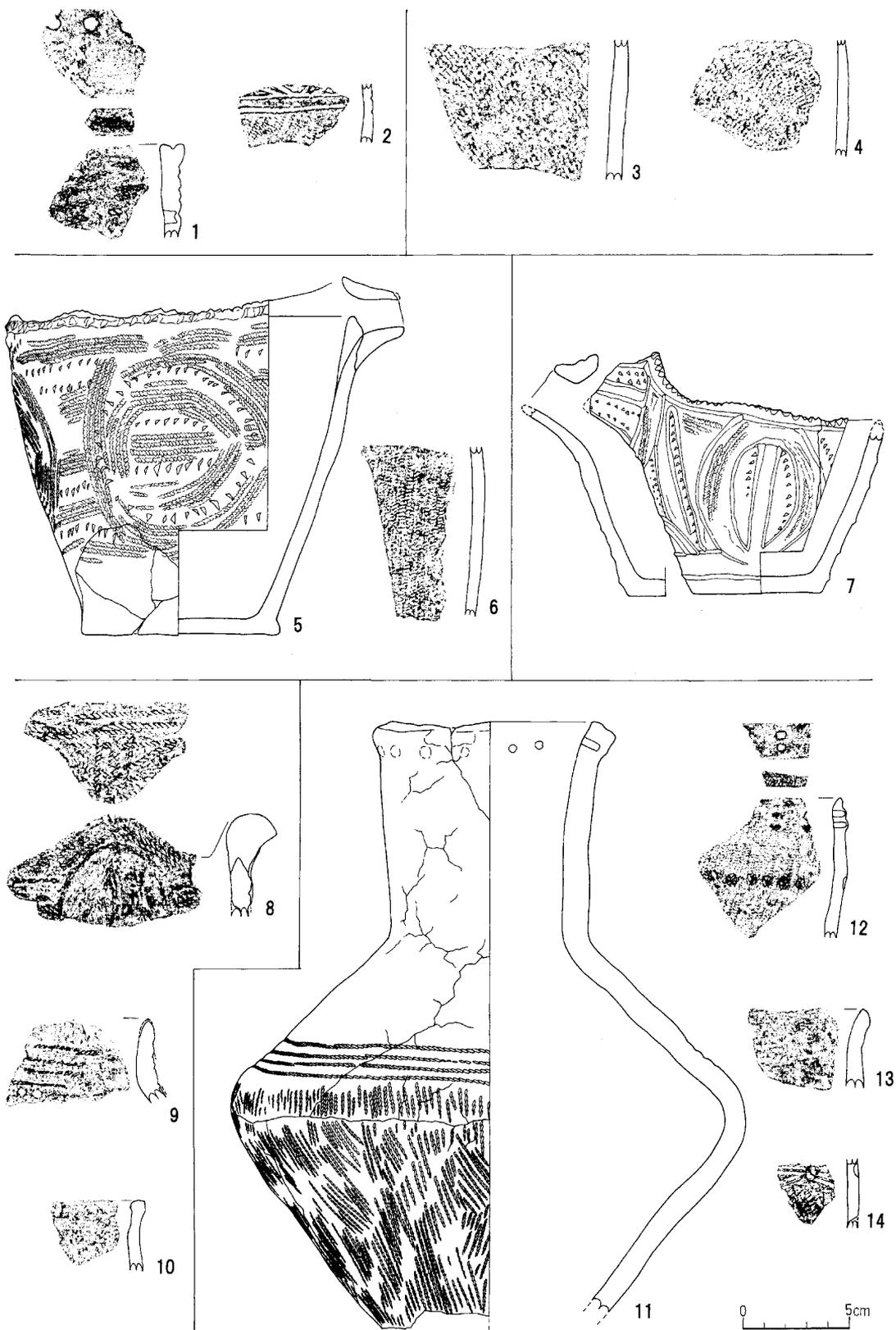
本ピットは970ピットに南壁側を切られるものの、直径約48cmの小円形を呈する。皿状に浅く立ち上がり、高さは確認面から約10cmを測る。

詳細な時期は不明である。

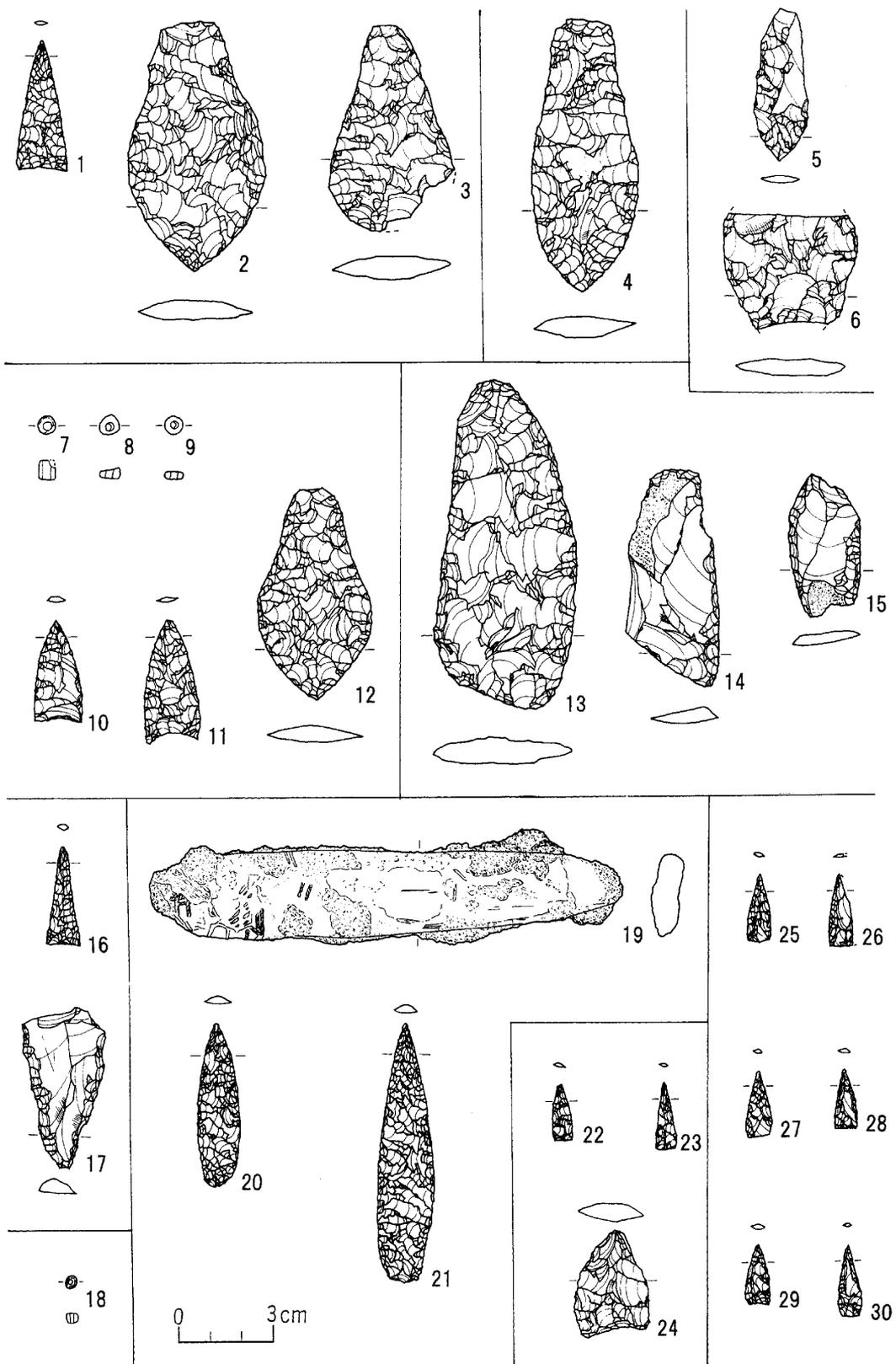
## 遺 物 (第179図-4 図版32-5)

第179図-4は両面加工ナイフ。黒曜石製。

(武田 修)



第178図 ビット969埋土(1・2)、970埋土(3・4)、971埋土(5・6)、972床面(7)、972a埋土(8~10)、973埋土(11~14)出土土器



第179図 ピット970埋土(1~3)、970a埋土(4)、973埋土(5・6)、979a遺体上(7~9)・埋土(10~12)、985床面(13)・埋土(14・15)、986埋土(16・17)、988埋土(18)、988a床面(19)・埋土(20・21)、990遺体上(22・23)・埋土(24)、993遺体上(25~30)出土石器・琥珀玉・ガラス玉・鉄製品

## ピット 971

### 遺構 (第182図, 図版32-6)

本ピットは G90グリッド杭の下部に位置する。セクション図に示すとおり明黒褐色砂の堆積があり、この区域ではさらに表土下には黒褐色土がみられる。ピットはこの黒色土系の堆積土を剥土した段階で落ち込みを確認した。壁はほぼ垂直に立ち上がり高さは確認面から約35cmを測る。

規模は長軸約1.40m、短軸約0.90mの楕円形を呈する。床面に暗黒褐色土の遺存体があり、東壁端部に第178図-5に示す注口土器がやや内側に傾斜した状態で副葬されていた。

西壁側に径約20cm、深さ約17cmの小ピットがあり、それを囲むように5点の白色粘土が出土している。

### 遺物 (第178図-5・6, 図版32-7)

第178図-5は床面の上部から出土したもので本ピットに伴うものである。口径・器高とも約15cmの注口土器である。帯縄文による円弧文が施された続縄文後北 C<sub>2</sub>・D 式。6は宇津内系の胴部片である。

### 小括

本ピットは続縄文後北 C<sub>2</sub>・D 式の土壙墓である。土器の位置から東頭位と推測できる。

(武田 修)

## ピット 972

### 遺構 (第182図)

本ピットは G90グリッドに位置する。規模は直径0.64mの円形を呈する。壁は丸く立ち上がり、壁高は確認面から28cmを測る。

### 遺物 (第178図-7, 図版32-8)

第178図-7は口径約11.5cm、器高約12.5cmの注口土器。微隆起帯と帯縄文で円弧文、弧線文が施された続縄文後北 C<sub>2</sub>・D 式。床面出土。

(武田 修)

## ピット 972a

### 遺構 (第182図)

本ピットは南側をピット972に切られるが、長軸0.52mの不整形円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から16cmを測る。

**遺 物** (第178図-8~10)

第178図-8・9は統縄文宇津内系である。9は口縁部が縮約する。10は無文の口縁部であり、統縄文初頭と思われる。 (武田 修)

## ピ ッ ト 973

**遺 構** (第182図, 図版33-1)

本ピットはF90・91グリッドに位置する。第Ⅱ層の茶褐色砂を剥土した段階で落ち込みを確認した。上部には部分的であるがベンガラが散布されており、南壁側では長さ16cm、幅10cm、層厚7cmの塊状となっている。この面より4~5cm下げた段階で第178図-11に示す土器が倒れた状態で出土した。規模は長軸1.45m、短軸1.20mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約40cmである。床面には暗褐色砂の遺存体が長軸方向にみられ、ベンガラが散布されている。南壁中央部では直径13cm、厚さ1cmほどの円形炭化材がみられた。

**遺 物** (第178図-11~14, 第179図-5・6, 図版33-2~4)

第178図-11~14は全て埋土出土である。11は胴部が「く」字状に強く張り出した長頸壺である。口径10cm。頸部は無文帯となり、口縁直下に内側から突瘤文がみられる。肩部は4条の縄線文と底部にかけて縦走縄文が施される。底部は欠損するが残存部の器高は29cmである。12は口縁部に2個縦列の突瘤文が施された統縄文宇津内Ⅱa式。13は緩く外反した無文の口縁部である。14は半載状の沈線文と縄端圧痕文がみられる。13・14は統縄文初頭であろう。

石器は第179図-5は片面加工ナイフ、6は両面加工ナイフ。2点とも黒曜石製。

**小 括**

第178図-11の土器は出土状況から本土墳墓に伴うとみてよい。長頸壺に突瘤文を施す資料は例がないが、張り出した胴部と縄線文などから興津式と宇津内Ⅱa式の特徴をもつ。

時期は統縄文初頭に位置づけられる。 (武田 修)

## ピ ッ ト 973a

**遺 構** (第182図)

本ピットはピット973の北壁と重複する。規模は長軸1.00m、短軸約0.60mの楕円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約12cmを測る。

切り合い関係からピット973より古いことは確実であるが、詳細な時期は不明である。

**遺 物** (第180図-1・2)

第180図-1は口縁部が無文となり僅かに外反する。統縄文初頭興津式相当であろう。2の突瘤文は貫通する。統縄文宇津内Ⅱa式である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 973b

### 遺 構 (第182図)

本ピットはピット973に南壁側が削られている。正確な規模は不明であるが短軸約0.60mの楕円形を呈すると思われる。壁は丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約16cmを測る。

切り合い関係からピット973より古いことは確実であるが、詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 974

### 遺 構 (第182図)

本ピットはF90グリッドに位置する。規模は長軸約0.90m、短軸約0.50mの楕円形を呈する。掘り込みは浅く確認面から約13cmを測る。床面に径22cm、深さ14cmの小ピットをもつ。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第180図-3)

第180図-3は統縄文の胴部片。

(武田 修)

## ピ ッ ト 975

### 遺 構 (第182図)

本ピットはF88グリッドに位置する。規模は長軸約0.80m、短軸約0.50mの楕円形を呈する。壁高は浅く、確認面から約10cmを測る。床面に明確な遺存体は検出できなかったが、周辺の土壙墓と同じ東壁中央部から第180図-4に示す土器が出土している。

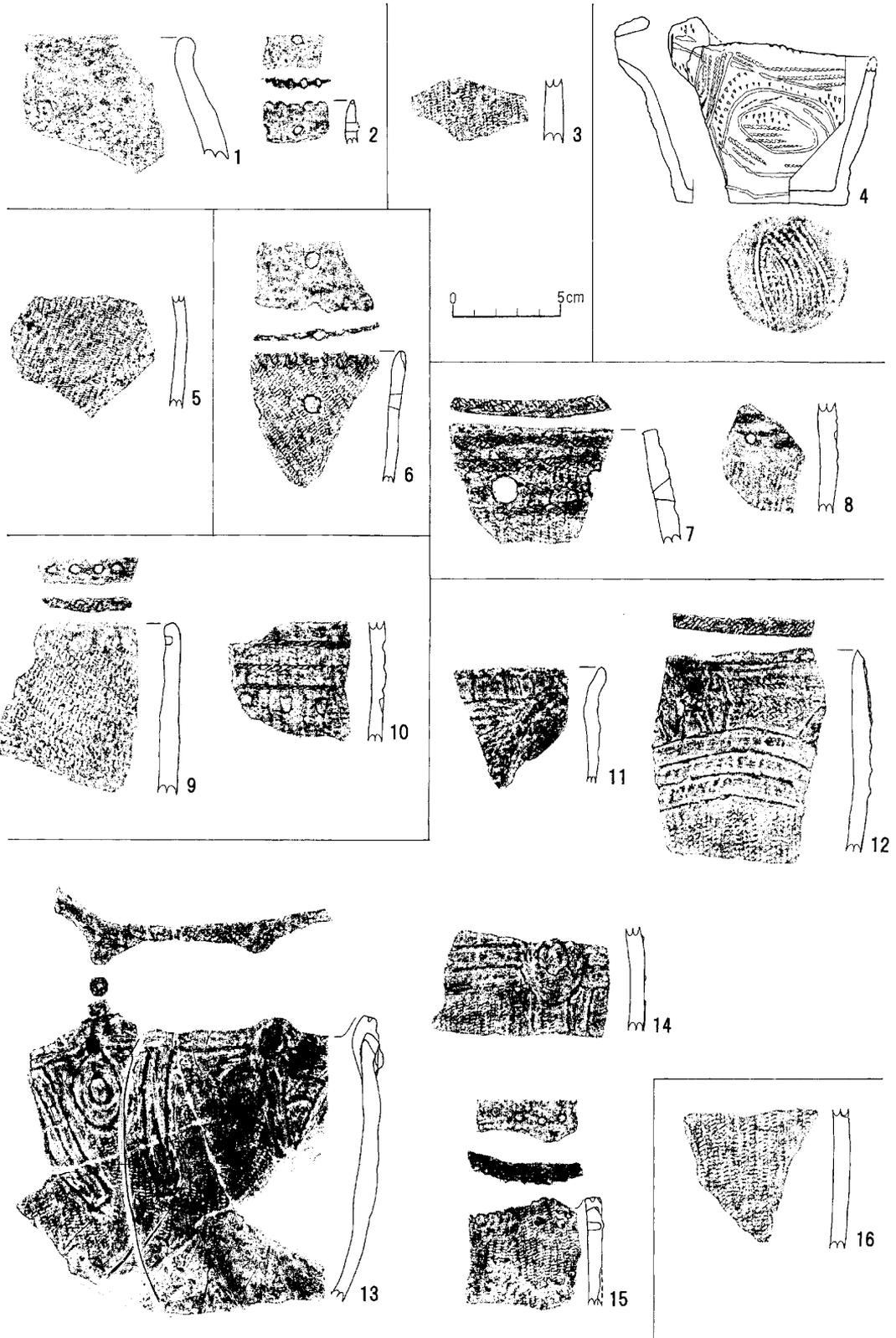
### 遺 物 (第180図-4, 図版33-5)

第180図-4は口径8cm、器高9cmの注口土器。円弧文を微隆起帯と帯縄文で施した統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。

### 小 括

形態と長軸方向、土器出土位置から土壙墓と思われる。統縄文後北C<sub>2</sub>・D式である。

(武田 修)



第180図 ビット973a 埋土(1・2)、974埋土(3)、975埋土(4)、976埋土(5)、978埋土(6)、979埋土(7・8)、979a 埋土(9・10)、983床面(11)・埋土(12~15)、983a 埋土(16)出土土器

## ピ ッ ト 976

### 遺 構 (第177図)

本ピットはC90グリッドに位置する。ピット976aの北壁上部を切り込んで構築されている。上部中央と北壁寄りに図示していないがくぼみ石が配置されている。南壁側の円礫を含め本ピットに伴うと判断される。規模は直径約0.75mの円形を呈する。壁は「V」字状の立ち上がりをもち、高さは確認面から約38cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第180図-5)

第180図-5は続縄文土器の胴部片。

(武田 修)

## ピ ッ ト 976a

### 遺 構 (第177図)

ピット976と重複するが規模は長軸約1.10m、短軸約0.68mの楕円形を呈する。壁は垂直に立ち上がり、高さは確認面から約26cmを測る。床面中央部に直径約40cmの赤褐色を呈した遺存体が認められるので土墳墓であることに間違いない。

遺物は出土していないため時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 977

### 遺 構 (第182図)

本ピットはF89・90グリッドにまたがって位置する。規模は直径約0.82mの円形を呈する。壁は丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約40cmを測る。

遺物は出土していないため詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 978

### 遺 構 (第182図)

本ピットはE88グリッドに位置する。規模は長軸約0.90m、短軸約0.78mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約22cmを測る。南壁側に径約8~10cm、深さ約6~7cmの柱穴をもつ。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第180図-6)

第180図-6は貫通した突瘤文をもち、口唇部は縄2本で押圧した刻みが施される。続縄文

宇津内Ⅱ a式である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 979

### 遺 構 (第182図)

本ピットはF89グリッドに位置し、大小のピットが複雑に重複している。ピット979aの上部を切って構築している本ピットの規模は長軸約1.60m、短軸約1.25mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約20cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第180図-7・8)

第180図-7は縦走縄文を地文に4条の縄線文が施され、2個の補修口がみられる。8は縄線文と縄端圧痕文が施される。7・8は続縄文初頭であろう。

(武田 修)

## ピ ッ ト 979a

### 遺 構 (第181図)

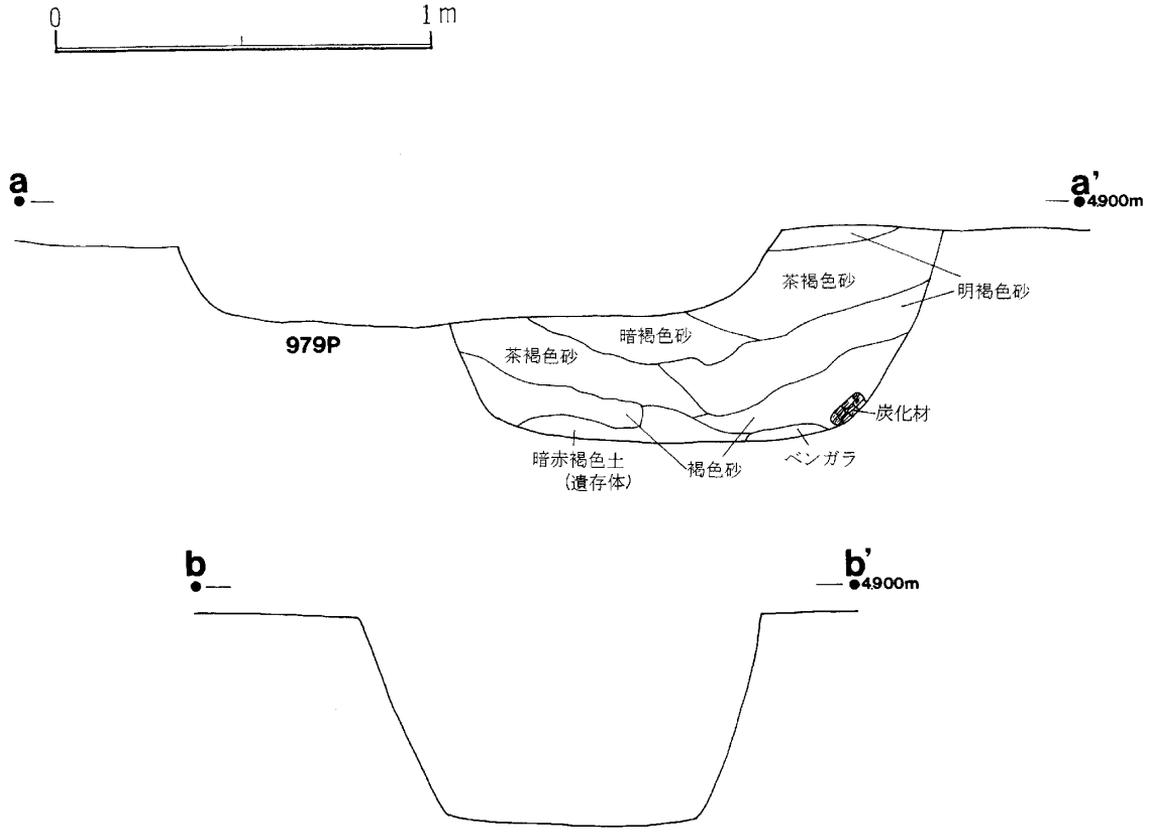
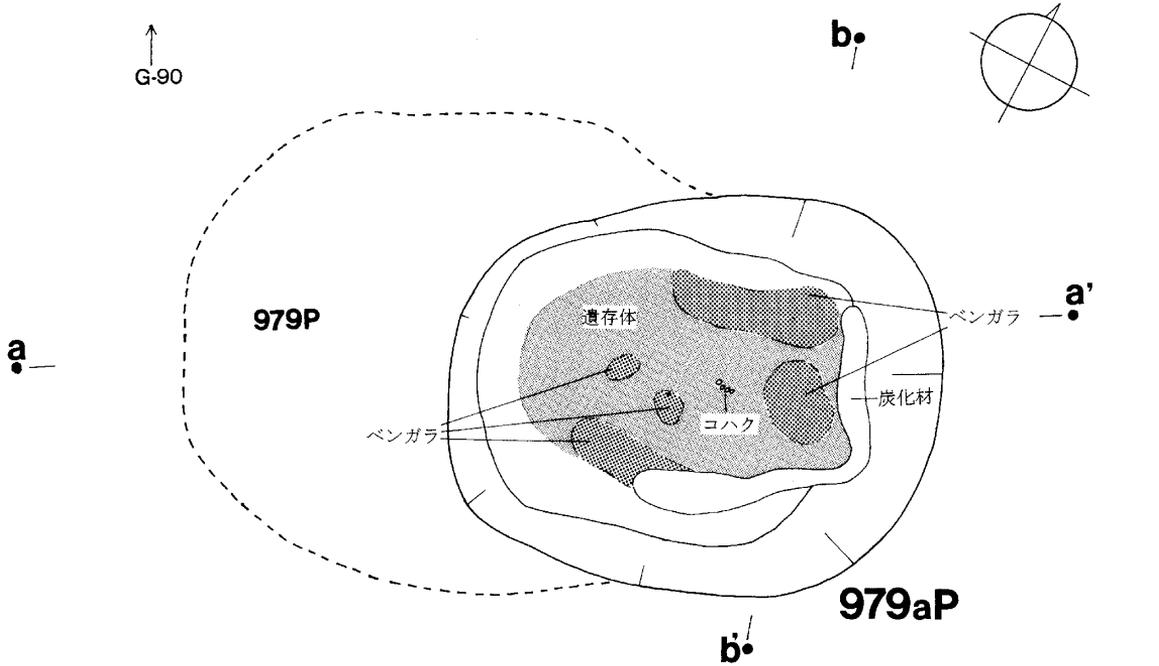
本ピットは長軸約1.30m、短軸約1.05mの不整形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約50cmを測る。埋土を掘り下げた段階から各種の層内にベンガラが散布されており、暗赤褐色土の遺存体上にも2~3cmほど特に厚くみられ、内部から琥珀製の平玉が出土している。また、北壁から東壁中央部にかけて炭化材と腐食化して黒色土となった痕跡を確認した。壁材もしくは木郭状のものと想定されるが、長さは10cm程の短いものである。

### 遺 物 (第180図-9・10, 第179図-7~12, 図版33-6~8)

第180図-9は続縄文初頭。10は縄線文の下部に半載状施文具による下方からの刺突文が施される。続縄文宇津内系であろう。

第179図-7~9は遺存体の上部から出土した琥珀製の平玉。10・11は無茎石鏃。12は両面加工ナイフ。10はメノウ製、11・12は黒曜石製。

(武田 修)



第181図 ピット979a 平面図

## ピ ッ ト 979b・979c

## 遺 構 (第182図)

ピット979bはピット979と大半が重なり、北東側をピット979aに切られるため遺存は悪い。南西側の残存部から判断して方形の形態をもつと思われる。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約36cmを測る。

ピット979cはピット979aに大半を切られるものの、残存部から判断して直径0.80mの円形である。壁高は確認面から約20cmを測る。

両ピットとも詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 979d・979e

## 遺 構 (第182図)

ピット979dもピット979aに大半を切られる。形態は残存部から判断して直径約0.60mの円形と思われる。壁高は確認面から約12cmを測る。

ピット979eはピット979の南壁上部で僅かに重複するようである。規模は直径約0.50mの小円形を呈する。壁高は確認面から約25cmを測る。

両ピットとも詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 980

## 遺 構 (第182図)

本ピットはF90グリッドに位置する。規模は直径約0.42mの小円形であり、20cm程の細長い角礫が斜めに突き刺さる状態で出土している。壁高は確認面から約16cmを測る。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 981・981a

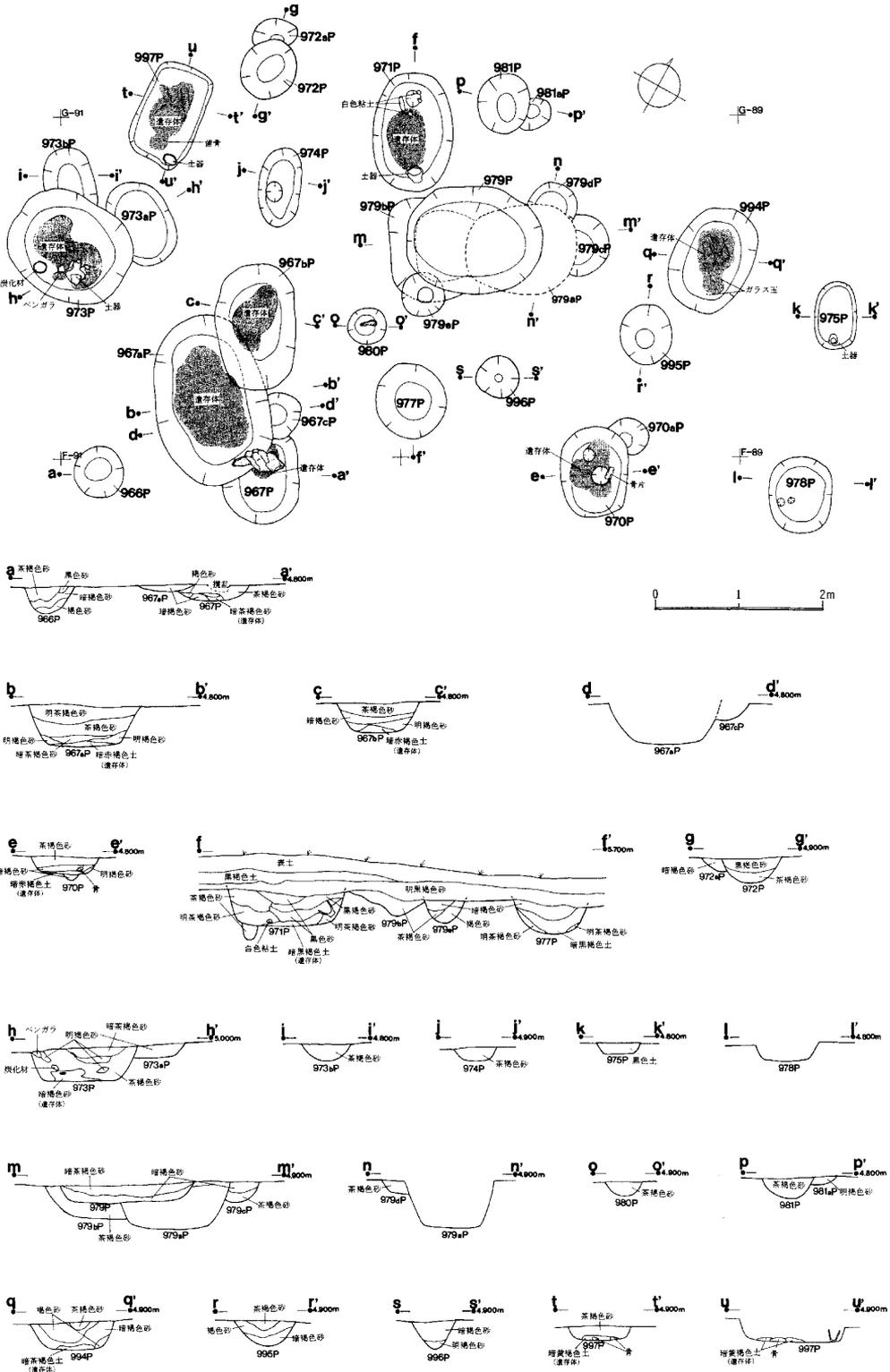
## 遺 構 (第182図)

両ピットはF89・G89グリッドにまたがって位置する。ピット981の規模は長軸約0.70m、短軸約0.60mの小楕円形を呈する。壁は丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約22cmを測る。

ピット981aはピット981に半分を切られる。規模は直径約0.40mの不整小円形を呈する。掘り込みは浅く確認面から約8cmを測る。

両ピットとも詳細な時期は不明である。 (武田 修)

常呂川河口遺跡



第182図 ピット966、967、967a、967b、967c、970、970a、971、972、972a、973、973a、973b、974、975、977、978、979、979b、979c、979d、979e、980、981、981a、994、995、996、997平面図

## ピ ッ ト 982

## 遺 構 (第17図)

本ピットはE85グリッドに位置する。規模は長軸約0.70m、短軸約0.55mの小楕円形を呈する。壁高は確認面から約32cmである。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 983

## 遺 構 (第186図)

本ピットはD86グリッドに位置する。規模は長軸約2.40m、短軸約1.30mの細長い楕円形を呈する。壁高は確認面から約20cmである。床面のほぼ中央部付近に径7～10cm、深さ9～12cmの4個の柱穴をもつ。

## 遺 物 (第180図-11～15)

第180図-11は床面出土。統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。12～14は統縄文字津内Ⅱb式。15は同Ⅱa式。 (武田 修)

## ピ ッ ト 983a

## 遺 構 (第186図)

ピット983の上面精査中に黒褐色砂の落ち込みを確認した。規模は直径約0.50mの円形を呈し、ピット983の床面を切り込んで構築されている。壁高は確認面から約30cmである。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第180図-16)

第180図-16は統縄文土器の胴部片。 (武田 修)

## ピ ッ ト 984

### 遺 構 (第186図)

本ピットはD86, E86グリッドにまたがって位置する。ピット984a、984b同様に表土を剥土した段階で落ち込みを確認した。ピット984aに北壁を切られるものの規模は長軸約1.70m、短軸推定1.10mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約50cmである。

後北C<sub>2</sub>・D式のピット984aより古い時期である。形態的に見て土壌墓と思われる。

### 遺 物 (第183図-1)

第183図-1は埋土出土である。統縄文字津内系の胴部片。 (武田 修)

## ピ ッ ト 984a

### 遺 構 (第186図, 図版34-1)

本ピットは長軸約1.58m、短軸約1.10mの楕円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり高さは確認面から約48cmである。各埋土層は比較的急斜な堆積状況をみせる。床面に層厚2cmの茶褐色土で粘性をもった遺存体がみられる。東壁に接して第183図-2に示す注口土器が正立の状態出土している。

### 遺 物 (第183図-2, 図版34-2)

第183図-2は床面出土。口径約20cm、器高約22.5cmの注口土器。微隆起帯と帯縄文の円弧文が施される。注口部の一部は欠失する。統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。

### 小 括

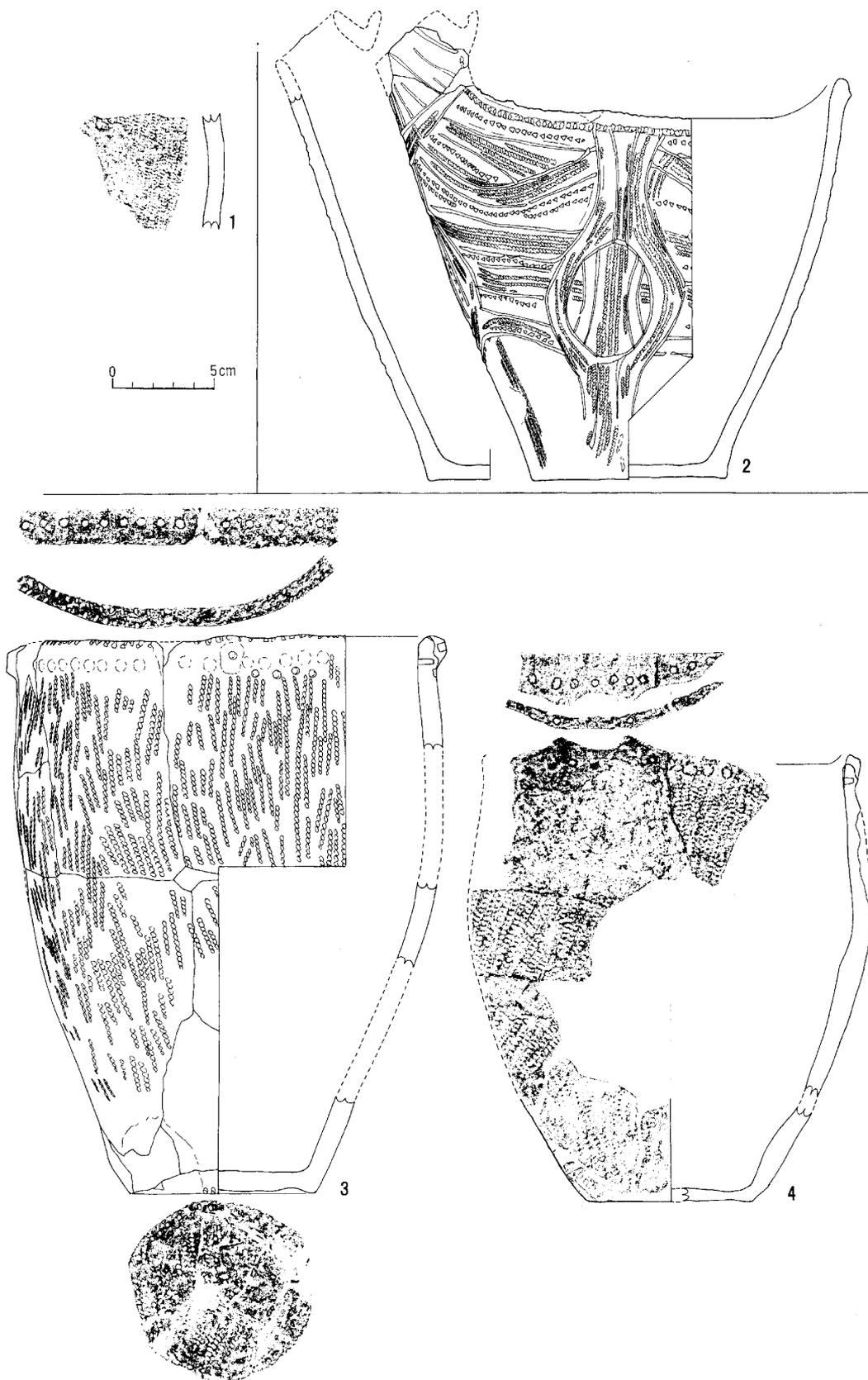
統縄文後北C<sub>2</sub>・D式の土壌墓である。歯骨は検出できなかったが頭位は土器が副葬された、東壁側と思われる。 (武田 修)

## ピ ッ ト 984b

### 遺 構 (第186図)

本ピットはピット984に南壁側の大半を切られている。規模は長軸約1.15mの楕円形を呈すると思われる。高さは確認面から約38cmを測る。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)



第183図 ビット984埋土(1)、984a床面(2)、985床面(3)・埋土(4)出土土器



第184図 ビット985埋土(1~7)出土土器

## ピ ッ ト 985

## 遺 構 (第186図)

本ピットはD87グリッドに位置する。ピット985a・985b・985c・985dの各ピットを切り込んで構築されているが、西壁上端部は149号堅穴に切られている。規模は長軸約1.80m、短軸約1.40の楕円形を呈する。壁は垂直に立ち上がり、高さは確認面から約54cmを測る。

## 遺 物 (第183図-3・4, 第184図, 第179図-13~15, 図版34-3~6)

第183図-3は床面出土。口径20cm、器高27cmの中型土器。口縁部に突瘤文が施され、4個の小突起をもつ。4は口径18cm、器高23cmの中型土器。埋土出土。口縁部に突瘤文が施され、山形突起をもつ。2個単位とした複数の山形突起で構成されていたと思われる。3・4は続縄文字津内Ⅱa式。

第184図-1~3は口縁部に突瘤文をもち、1は2条の縄線文が垂下する。2は撚糸文を地文とし、胴部は弧状を呈する。3は縄線文が施される。3点とも続縄文字津内Ⅱa式である。4~6は沈線文が施される。7は縦横に縄端圧痕文が押捺される。4~7は続縄文初頭であろう。

石器は第179図-13は両面加工ナイフ。14・15は削器。3点とも黒曜石製。(武田 修)

## ピ ッ ト 985a・985b

## 遺 構 (第186図)

ピット985aは西壁をピット985に切られるものの、長軸約1.15m、短軸は0.75m程の楕円形であろう。壁高は確認面から約20cmを測る。

ピット985bの大半は149号堅穴とピット985に切られており、検出できたのは東壁の一部だけである。形態は楕円形を呈すると思われるが詳細は不明である。壁高は確認面から約20cmである。

両ピットとも詳細な時期は不明である。(武田 修)

## ピ ッ ト 985c・985d

## 遺 構 (第186図)

ピット985cはピット985とピット985bに切られており、正確な形態は不明である。壁高は確認面から約14cmを測る。

ピット985dは東壁から南壁にかけてピット985に切られている。残存部から判断して長軸約1.00mの楕円形と思われる。壁高は確認面から約32cmである。

両ピットとも詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 986

### 遺 構 (第186図, 図版35-1)

本ピットはD85, E85グリッドにまたがって位置する。表土を剥土した段階で暗黒褐色砂の落ち込みを確認した。規模は長軸約1.80m、短軸約1.35mの不整形を呈する。壁は床面から開き気味に立ち上がり、暗黒褐色砂の堆積部分では有段化するように大きく開く。高さは確認面から約64cmを測る。

床面には粘性をもった暗茶褐色土の遺存体がみられ、東壁側から破壊された土器とやや内側に傾斜した状態で完形土器が出土した。破壊された土器の北側約20cmに歯骨があり、完形土器の下面に頭部の輪郭と歯骨を検出した。完形土器の中ほどには7~8cmほどの白色粘土の塊が納められてあった。

### 遺 物 (第185図-1・2, 第179図-16・17, 図版35-2~5)

第185図-1・2は遺体上から出土した。1は補修口のある後側の一部は欠失するが、口径約19cm、器高約21.5cmの注口土器。2個1対の小突起をもつ。馬鞍状の文様を沈線文、帯縄文、列点文で現わし、口縁部も縦位、斜位に短沈線文、列点文が施される。内部は煤が最も厚い箇所でも2mmほど付着する。2は破壊されていた土器である。口径約20cm、器高約22cmの中型土器で、口唇部に2個1対、1個1対の小突起をもち、刺突が加えられる。器面は帯縄文による円弧文、弧線文が施される。2点とも統縄文後北C<sub>2</sub>・D式である。

石器は第179図-16は無茎石鏃。17は削器。2点とも黒曜石製。

### 小 括

本ピットの時期は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式期。東頭位の二体合葬の土壙墓である。

(武田 修)

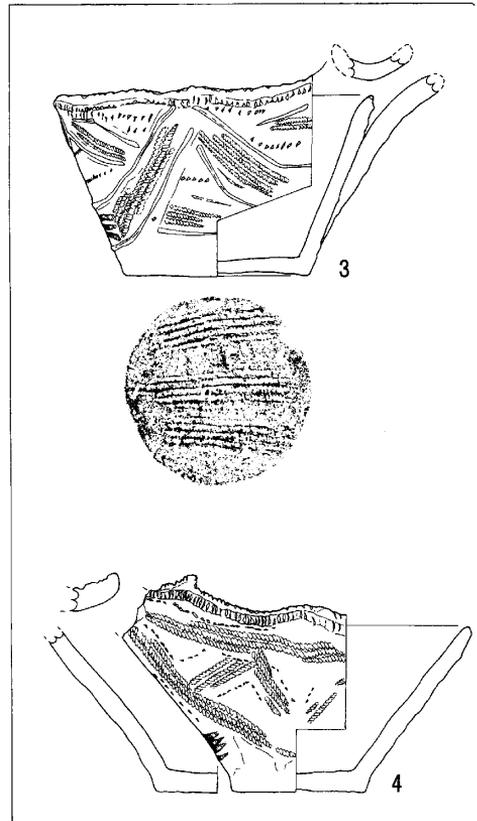
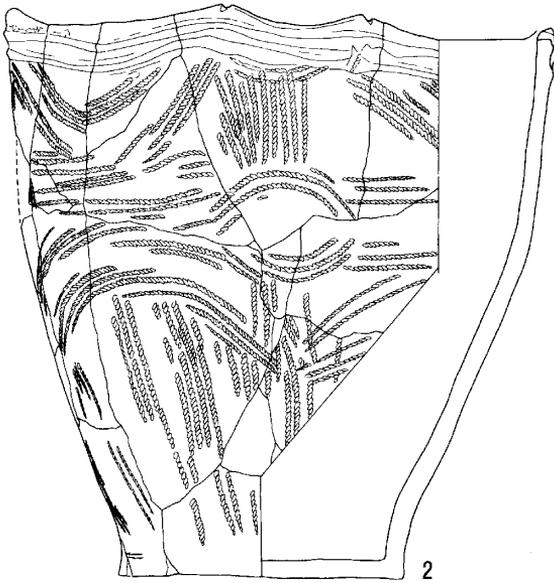
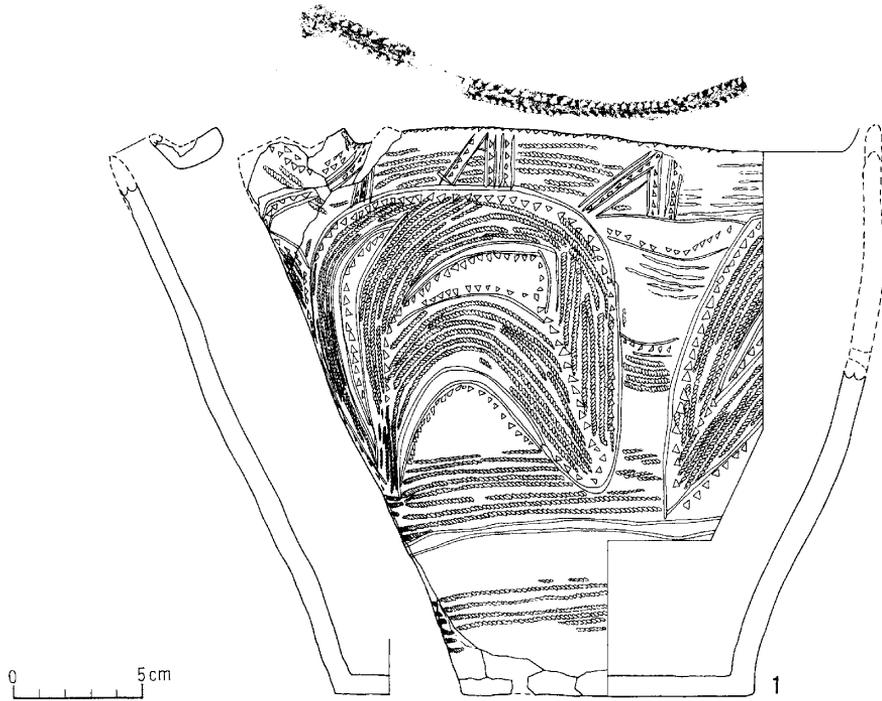
## ピ ッ ト 986a

### 遺 構 (第186図)

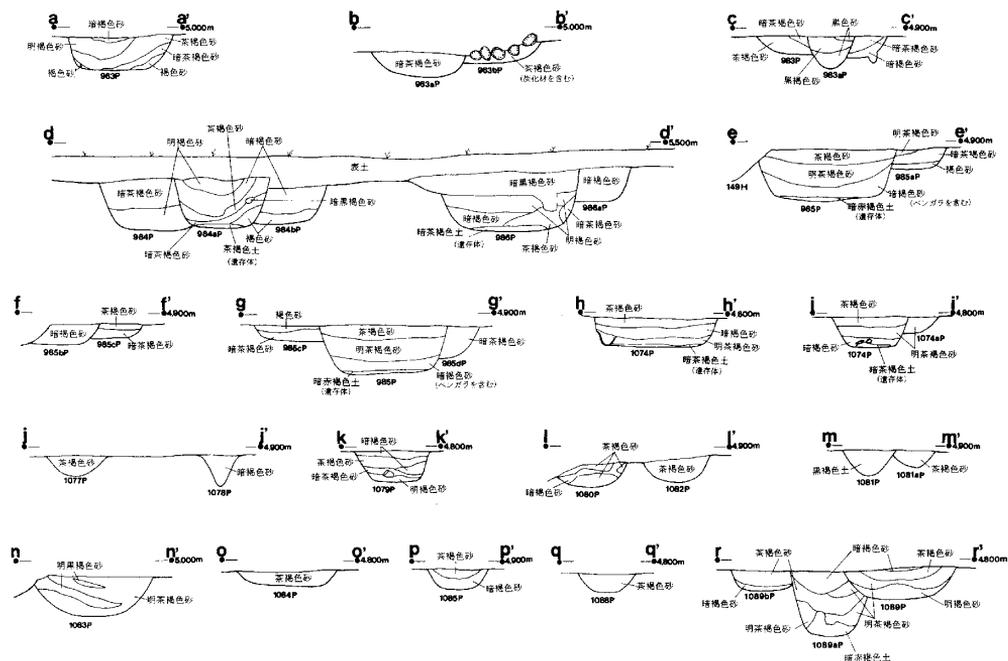
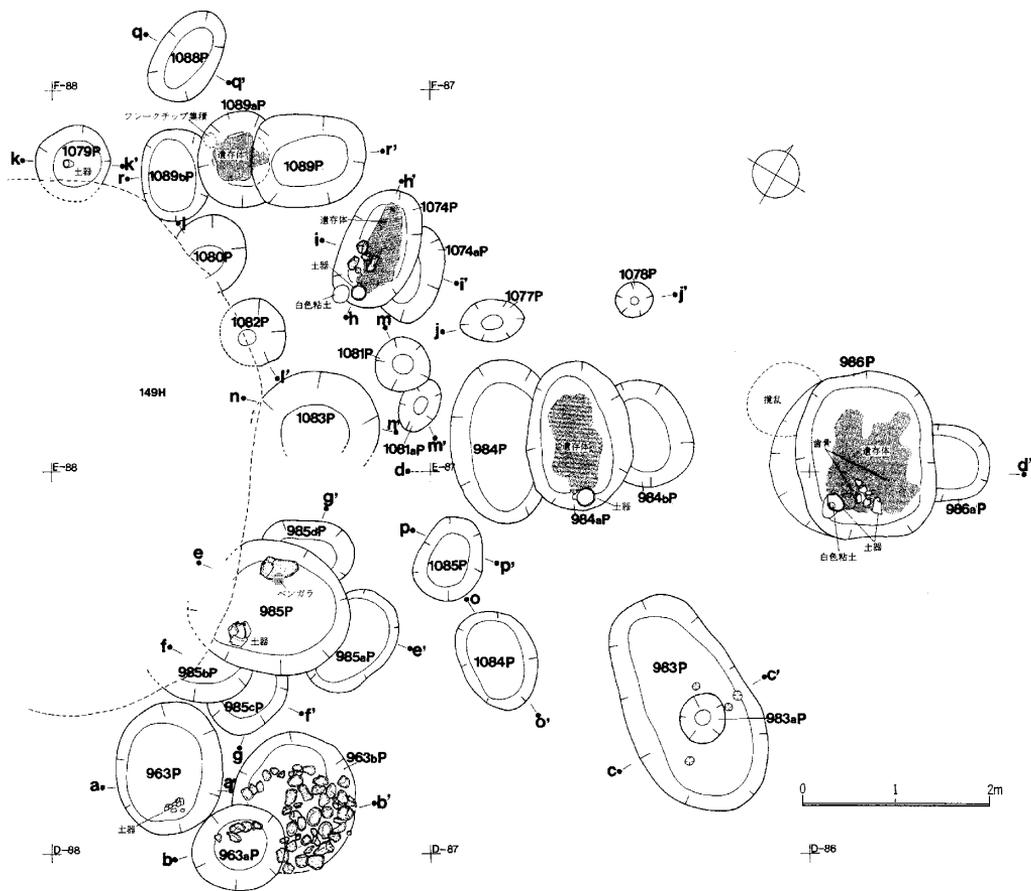
本ピットはピット986に大半が切られるものの、残存部から判断して楕円形を呈すると思われる。短軸約0.60m、壁高は確認面から約32cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)



第185図 ピット986床面(1・2)、987床面(3・4)出土土器



第186図 ピット963、963a、963b、983、983a、984、984a、984b、985、985a、985b、985c、985d、986、986a、1074、1074a、1077、1078、1080、1081、1081a、1082、1083、1084、1085、1085a、1085b、1085c、1085d、1086、1086a、1079、1079a、1089、1089a、1089b 平面図

## ピ ッ ト 987

## 遺 構 (第41図)

本ピットは148a号堅穴の床面精査中に検出した。西壁側は明確に捉えることができなかったものの、長軸0.93mの楕円形を呈する。床面から第185図-3・4に示す土器が2点とも伏せた状態で出土している。壁高は148a号堅穴の床面から約6cmである。

## 遺 物 (第185図-3・4, 図版35-6・7)

2点とも床面出土である。第185図-3は口径約11.5cm、器高約9cm。4は口径約11cm、器高約9.5cmの注口土器。3は微隆起帯と帯縄文、4は帯縄文を弧線状に施した続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。2点とも注口の一部が欠失する。

## 小 括

本ピットは後北C<sub>2</sub>・D式である。遺存体は検出されず、土器の配置からも土壌墓とは考えられない。148a号堅穴に伴う施設と思われる。(武田 修)

## ピ ッ ト 988

## 遺 構 (第188図, 図版36-1)

本ピットはF87・88グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.30m、短軸約0.85mの楕円形を呈する。ピット988aの東壁端部を僅かに切り込んでいる。壁は南壁側がやや開き気味であり、高さは確認面から約30cmである。床面には茶褐色土の遺存体がみられ、東壁側から歯骨が検出されている。土器は東壁の径20cm、深さ15cmの小ピット内に正立の状態に副葬されている。

本ピットと隣接するピット989の上部には長軸1.00m、短軸0.70mの焼土が被さっていたが関連は不明である。

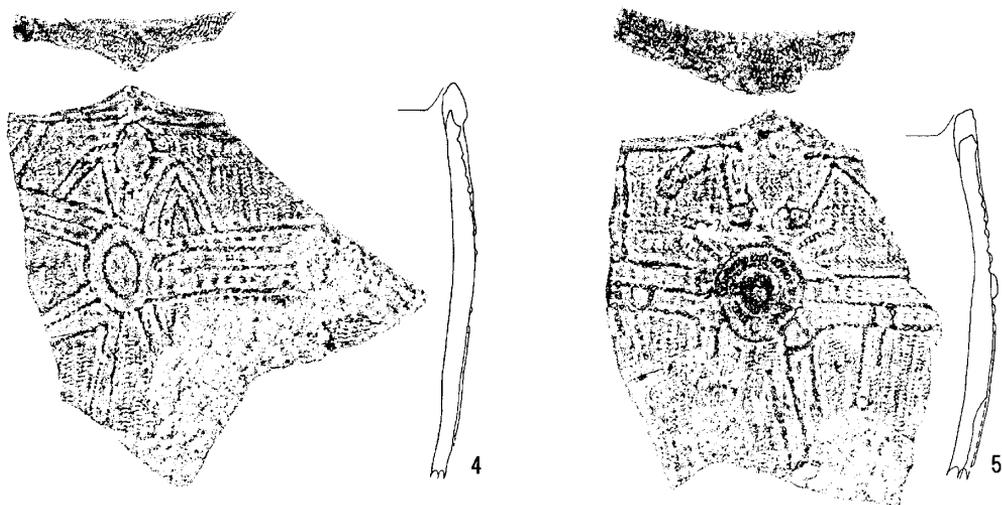
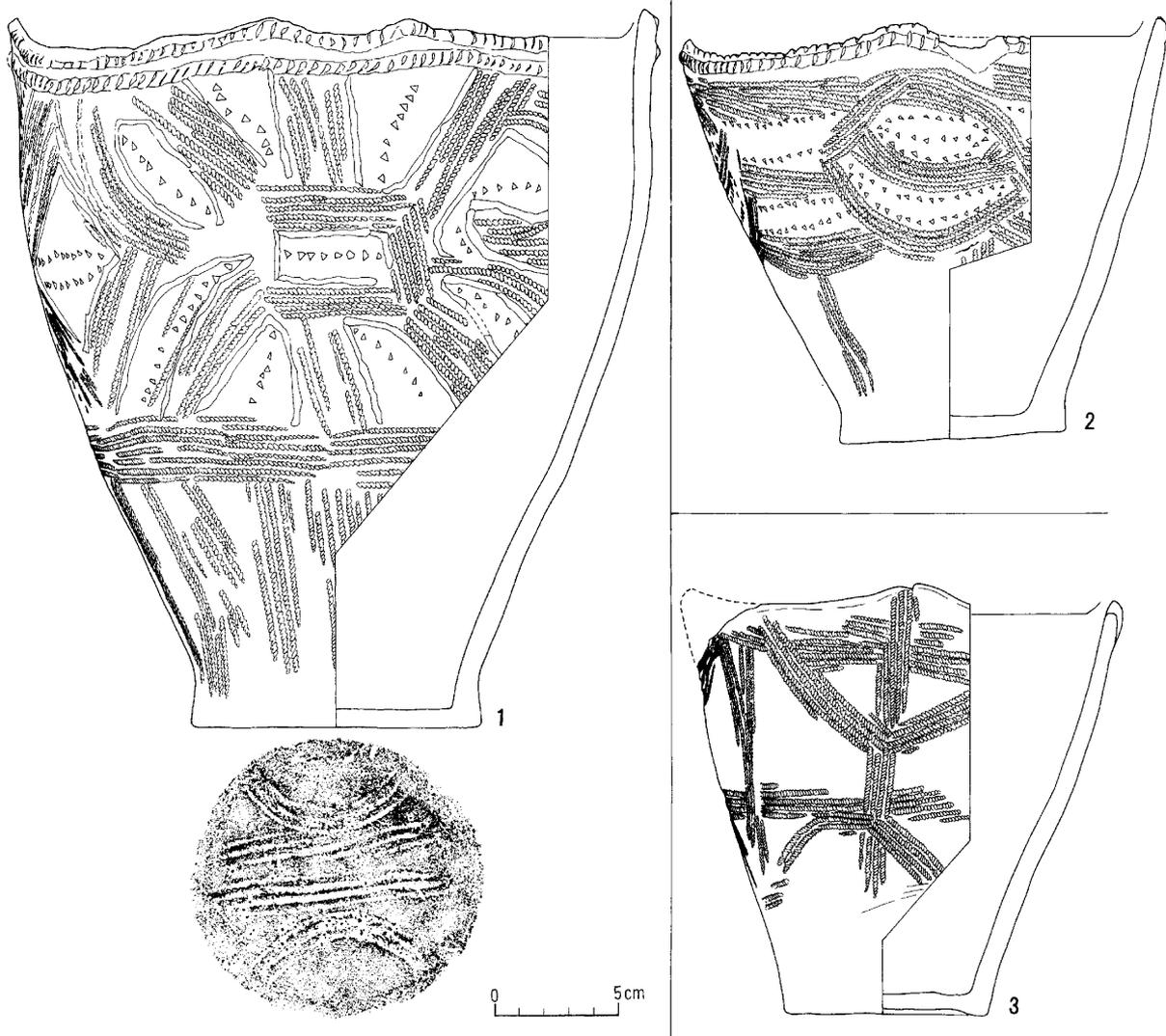
## 遺 物 (第187図-1, 第179図-18, 図版36-2)

第187図-1は床面出土である。口径約26.5cm、器高約29cmの大型土器。2個1対、1個1対の小突起をもつ。微隆起帯と帯縄文を放射状、菱形状に施した続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。

第179図-18は南壁上部から出土した淡青色のガラス玉。

## 小 括

本ピットは続縄文後北C<sub>2</sub>・D式であるが、同時期のピット988aと僅かに重複し、本ピットが新しい。東頭位である。(武田 修)



第187図 ピット988床面(1)、988a床面(2)、990床面(3)、991埋土(4・5)出土土器

## ピ ッ ト 988a

**遺 構** (第188図, 図版36-4)

本ピットはピット988のやや西側に位置し、一部は重複する。規模は長軸約1.32m、短軸約0.76mの楕円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約26cmを測る。床面には暗茶褐色土の遺存体が見られ、頭部の膨らみや大腿部骨がかろうじて観察することができたものの、取り上げは不可能であった。

ピット988同様に径約12cm、深さ約4cmの小ピットが東壁側にあり、第187図-2に示す土器が置かれ、頭部と土器の間に鉄製刀子が副葬されていた。

**遺 物** (第187図-2, 第179図-19~21, 図版36-3, 図版37-1~3)

第187図-2は床面出土である。口径約19.5cm、器高約17cmの中型土器。浅い波状口縁部であり、一部は欠失する。帯縄文により円弧文を施した続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。

第179図-19は長さ14.7cm、幅2.5cmの鉄製刀子。柄部には撚紐が巻き付けられている。石器は20・21は無茎石鏃。黒曜石製。

**小 括**

本ピットは東頭位の続縄文後北C<sub>2</sub>・D式の土壌墓である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 989

**遺 構** (第188図)

本ピットはE87グリッドに位置する。規模は直径0.84mの円形を呈する。壁高は確認面から10cmを測る。上部には焼土が被さっている。 (武田 修)

## ピ ッ ト 990

**遺 構** (第188図, 図版37-4)

本ピットはF87, G87グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.38m、短軸約0.75mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約20cmを測る。床面のほぼ全面に暗茶褐色土の遺存体が見られ、大腿部と思われるやや固めの黄色部も残存している。頭部の輪郭や歯骨は検出できなかったが、東壁端部に正立の状態で土器が副葬されており、他のものと同様の東頭位と思われる。

**遺 物** (第187図-3, 第179図-22~24, 図版37-5~8)

第187図-3は床面出土である。口径約17cm、器高約16.5cmの中型土器。口縁部の一部は欠失するが、4個の小突起をもつ。帯縄文を直線、弧線状に施した続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。内部

常呂川河口遺跡

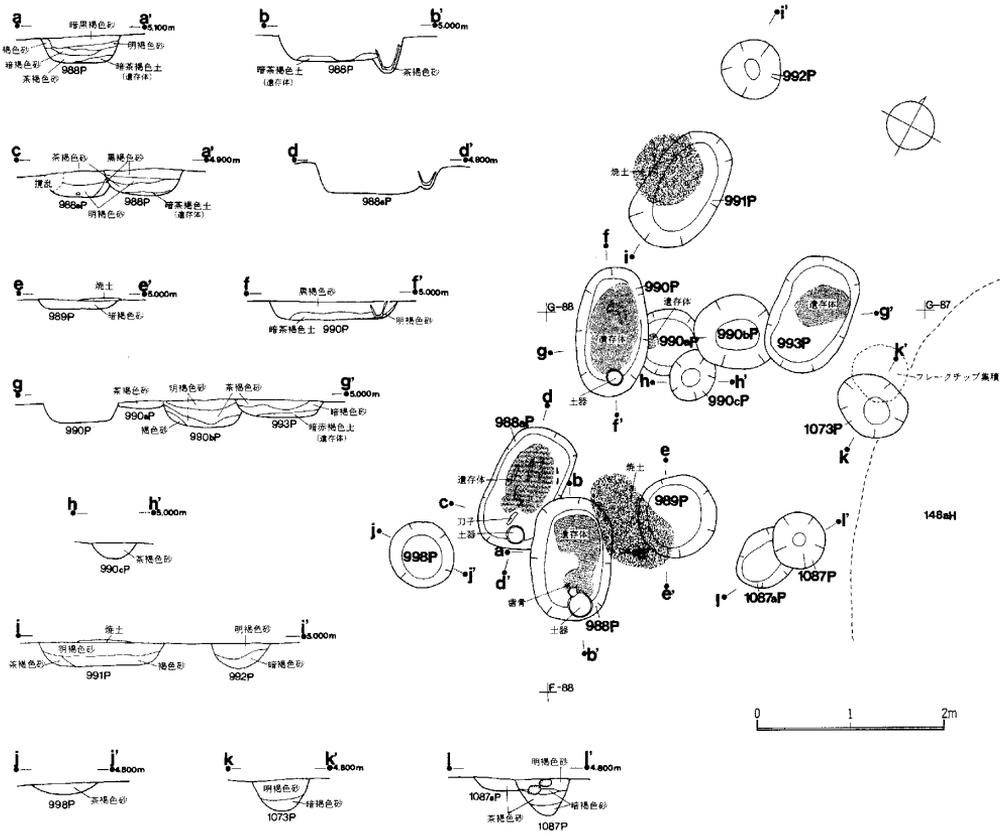
に煤が付着する。

石器は第179図-22・23は小型の無茎石鏃。24は表裏面とも調整は粗いが、鉛先鏃と思われる。3点とも黒曜石製。

小 括

本ピットは続縄文後北 C<sub>2</sub>・D 式の土壌墓である。

(武田 修)



第188図 ピット988、988a、989、990、990a、990b、990c、991、992、993、998、1073、1087、1087a 平面図

## ピ ッ ト 990a・990b・990c

## 遺 構 (第188図)

ピット990aはピット990に南壁と床面の一部、北壁をピット990b、東壁をピット990cに切られているため遺存はわるいが、規模は直径0.70mの円形を呈する。8cmほどの浅い皿状の掘り込みである。南壁側の床面に径1cmほどの樹枝状の炭化材が20cmの範囲にまとまっている。

ピット990bは直径約0.80mの円形を呈し、ピット993に北壁の上部を切られる。壁高は確認面から約30cmを測る。

ピット990cは直径約0.48mの円形を呈する。壁高は確認面から約16cmを測る。

3ピットとも遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 991

## 遺 構 (第188図)

本ピットはG87グリッドに位置する。上面に直径80cm、層厚約1cmの焼土が認められる。規模は長軸1.28m、短軸0.80mの楕円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。

上部検出の焼土との新旧関係、詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第187図-4・5, 第189図-1~4)

第187図-4・5は同心円文を配する宇津内Ⅱb式。

第189図-1は宇津内Ⅱb式。2は同Ⅱa式。3は続縄文。4は縄文晩期

(武田 修)

## ピ ッ ト 992

## 遺 構 (第188図)

本ピットはG87グリッドに位置する。規模は直径約0.62mの円形を呈する。壁は「V」字状に緩く立ち上がり、高さは確認面から約22cmを測る。特に床面に堆積する暗褐色砂には1cmほどの炭化粒が混入する。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第189図-5)

第189図-5は埋土出土。円形文を施した縄文晩期。

(武田 修)

## ピ ッ ト 993

### 遺 構 (第188図)

本ピットはF87, G87グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.20m、短軸約0.80mの楕円形を呈する。ピット990bの東壁上部を僅かに切り込んでいる。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約14cmを測る。遺存体はほぼ中央部にあり、東壁に接して第179図-25~30に示す石鏃が出土している。

統縄文期の土壙墓と思われるが詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第179図-25~30, 図版37-9~14)

第179図-6点ともピット990と同一の小型無茎石鏃。黒曜石製。 (武田 修)

## ピ ッ ト 994

### 遺 構 (第182図)

本ピットはF89グリッドに位置する。規模は長軸約1.25m、短軸約0.92mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約35cmを測る。床面に暗茶褐色を呈した遺存体が認められたが、その状況から屈葬と判断される。東方向の頭部から歯骨も検出された。ガラス玉も頭部付近から集中して出土した。

### 遺 物 (第190図-1~17)

第190図-1~17のガラス玉は径3~4mmであり淡青色を呈する。

### 小 括

東壁側に土器はみられないが頭位方向、ガラス玉の出土から統縄文後北C<sub>2</sub>・D式の土壙墓と思われる。 (武田 修)

## ピ ッ ト 995

### 遺 構 (第182図)

本ピットはF89グリッドに位置する。規模は径約0.60mの小円形を呈する。壁高は確認面から約30cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 996

## 遺 構 (第182図)

本ピットはF89グリッドに位置する。規模は直径0.50mの小円形を呈する。壁は「V」字状に立ち上がり、高さは確認面から32cmを測る。

## 遺 物 (第189図-6)

第189図-6は埋土出土。器壁の薄い口縁部に内側から突瘤文を施される。縄文晩期前葉。

(武田 修)

## ピ ッ ト 997

## 遺 構 (第182図, 図版38-1)

本ピットはF90, G90グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.20m、短軸約0.70mの長方形を呈する。掘り込みは浅く、壁高は確認面から約20cmである。東壁端部がやや外側に張り出し、第189図-7の小型土器が正立の状態に副葬されている。埋土の茶褐色砂層には1~1.5mmほどの枝状の炭化物が多量に含まれている。遺存体は暗黄褐色土を呈し、取り上げは出来なかったが骨部の箇所は周辺の土質より硬化している。頭部から歯骨も検出された。

石器は北壁側の床面近くや遺存体に接して出土したもので本ピットに伴うと判断される。

## 遺 物 (第189図-7, 第190図-18~21, 図版38-2~6)

第189図-7は床面出土。口径は17.8×14cmの楕円形であり、擬縄隆帯が横走する。端部は波状を呈するものの一つは破損する。器高は13.3cm。波状口縁の下部を含め4個の縞縄文が楕円形に配置され、その空間を上下に弧線状の縞縄文を施す。続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。

第190図-18~20は細身の石鏃。21は先端部が折れて出土した大型の石鏃。全て黒曜石製である。

## 小 括

本ピットは続縄文後北C<sub>2</sub>・D式の土壌墓である。長方形を呈し、東壁端部に袋状の小ピットをもった東頭位の屈葬である。

(武田 修)

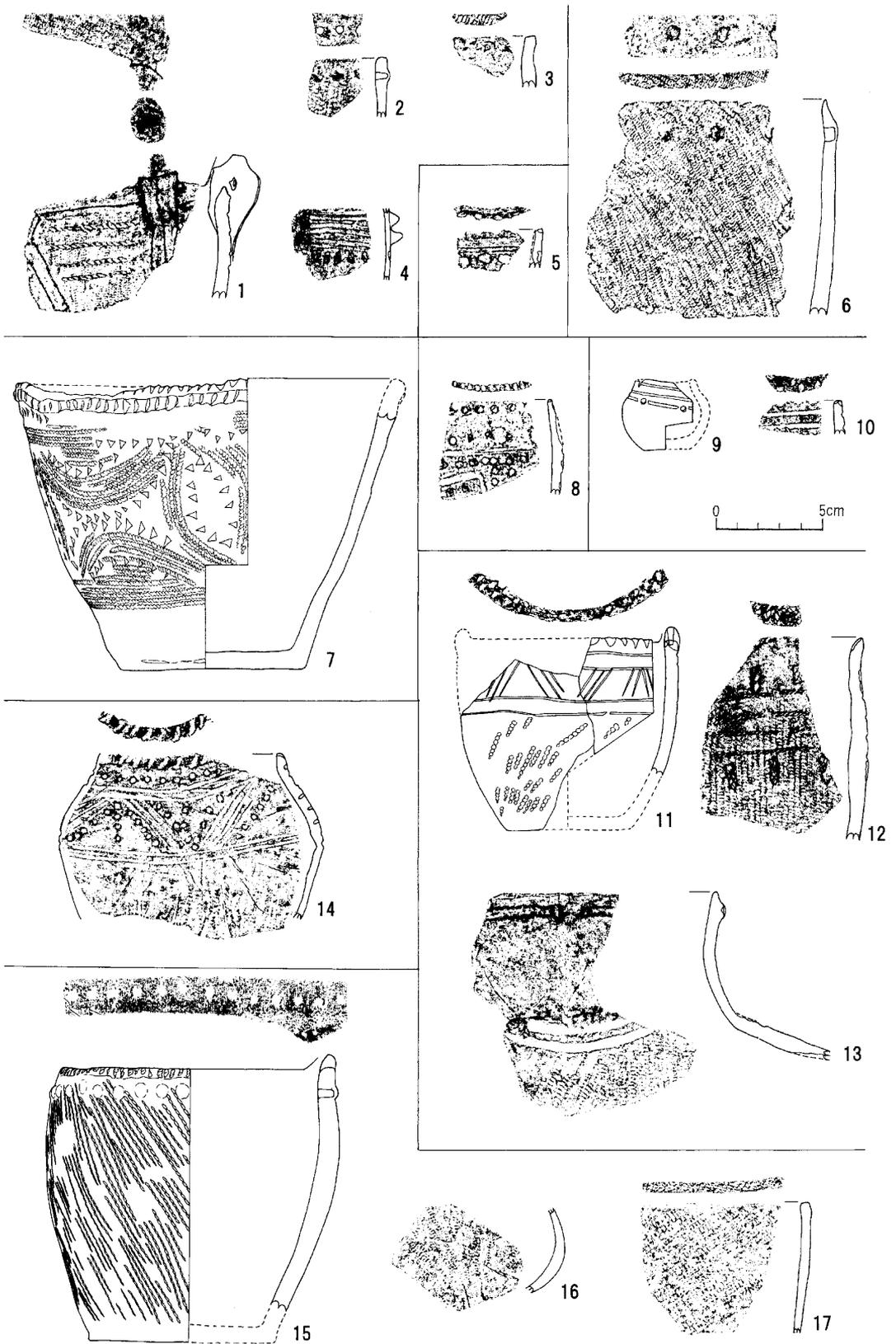
## ピ ッ ト 998

## 遺 構 (第188図)

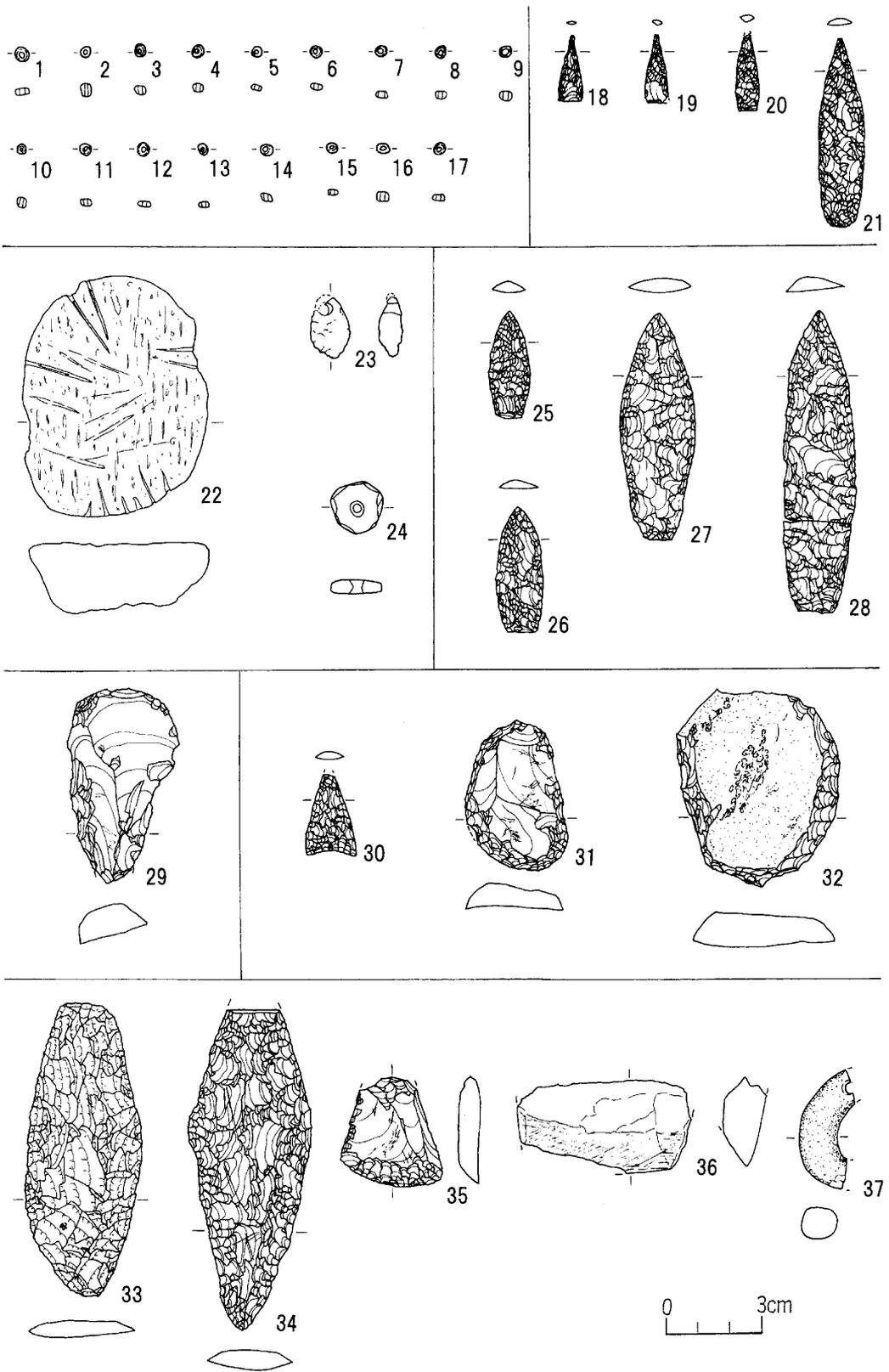
本ピットはF88グリッドに位置する。規模は直径約0.68mの円形を呈する。掘り込みは極めて浅く約10cmである。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)



第189図 ビット991埋土(1~4)、992埋土(5)、996埋土(6)、997床面(7)、1001埋土(8)、1005埋土(9・10)、1006埋土(11~13)、1006a埋土(14)、1006b遺体上(15)・埋土(16・17)出土土器



第190図 ビット994遺体上(1~17)、997埋土(18~21)、1001遺体上(22~24)、1002遺体上(25~27)・埋土(28)、1005埋土(29)、1006埋土(30~32)、1006a埋土(33~37)出土石器・琥珀玉・ガラス玉・石製品

## ピ ッ ト 999

### 遺 構 (第159図)

本ピットはC'82グリッドに位置する。規模は直径1.10mの円形を呈する。高さは確認面から約50cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 1000

### 遺 構 (第193図)

本ピットは152号堅穴の床面精査中に堅穴の南壁から検出された。大部分が152号堅穴に切られているため規模・形態は不明である。壁高は確認面から52cmを測る。

遺物は出土していない。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1001

### 遺 構 (第193図)

本ピットは152号堅穴の南側にあり、北側を152号堅穴に切られ、西側は攪乱を受けているため規模・形態は不明である。壁高は確認面から50cmを測る。

床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められ、遺存体の下からはベンガラが検出されている。遺存体の上から琥珀製の平玉1点と飾り玉1点、擦石が出土している。

### 遺 物 (第189図-8, 第190図-22~24, 図版38-7)

第189図-8は細い円形刺突文が施される。縄文晩期中葉。

第190図-22は軽石製の擦石。磨り面が浅い弧状を呈し、細長い使用痕が見られる。23は琥珀製の飾り玉。24は琥珀製の平玉。

### 小 括

本ピットは土墳墓であるが、規模・形態及び時期も不明である。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1002

### 遺 構 (第193図)

本ピットは152号堅穴の南東に位置し、規模は長軸約1.20m、短軸約1.00mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から50cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められ、遺存体の東側から歯骨が確認

されている。

**遺 物** (第190図-25~28, 図版38-8~11)

石器は遺存体の上から出土した第190図-25・26が石鏃。27は石槍。28は埋土出土の石槍。いずれも黒曜石製。

**小 括**

長軸は東-西方向で頭位は東であるが、時期は不明である。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1003

**遺 構** (第193図)

本ピットは152号堅穴の床面から検出されたピットである。規模は長軸約1.10m、短軸約0.80mの楕円形を呈し、壁高は152号堅穴床面から14cmを測る。埋土中からは黒曜石のフレークが1点出土したのみである。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1004

**遺 構** (第193図)

本ピットは152号堅穴の床面から検出された。規模は長軸約1.28m、短軸約1.00mの楕円形を呈し、壁高は確認面から22cmを測る。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1005

**遺 構** (第193図)

本ピットはB92グリッドに位置し、規模は長軸約1.52m、短軸約1.38mの円形を呈する。壁高は確認面から60cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。

**遺 物** (第189図-9・10, 第190図-29)

第189図-9は口径3.7cm、器高3.4cmのミニチュア土器。口縁部に3条の横走沈線文が施されるが、下段の沈線文は円形刺突文で分断される。10の口唇部は内外から刻み加えられ、口縁部は2条の横走沈線文が施される。縄文晩期後葉から続縄文初頭と思われる。

石器は第190図-29が黒曜石製の削器。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1006

### 遺 構 (第191図)

本ピットはピット1002の南側に約30cm離れて検出された。東側をピット896aに切られているが規模は長軸約2.10m、短軸約1.84mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から50cmを測り、垂直に立ち上がる。

床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められていることから土壙墓と考えられる。

時期は不明である。

### 遺 物 (第189図-11~13, 第190図-30~32, 図版39-1)

第189図-11は口径10.3cm、器高9.8cmの続縄文初頭。口唇部に刻みと1対の突起をもつ。口縁部には2本1組の沈線文を2段に巡らし、間に2~3本1組の斜めの沈線文を配す。12は口縁直下が無文帯となり、2段の縄端圧痕文間に4条の縄線文が施される。興津式相当であろう。13は頸部が無文の壺形土器。口縁部は2条の横走沈線文と2個の突起をもち、肩部も2条の横走沈線文が施される。

石器は第190図-30が無茎石鏃。31が搔器。32は削器。いずれも黒曜石製。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1006a

### 遺 構 (第191図)

本ピットはピット1006の南東側に検出された。北西側がピット1006に切られているが規模は長軸約0.96m、短軸約0.60mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から32cmを測る。

ピット床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されていることから土壙墓と考えられる。

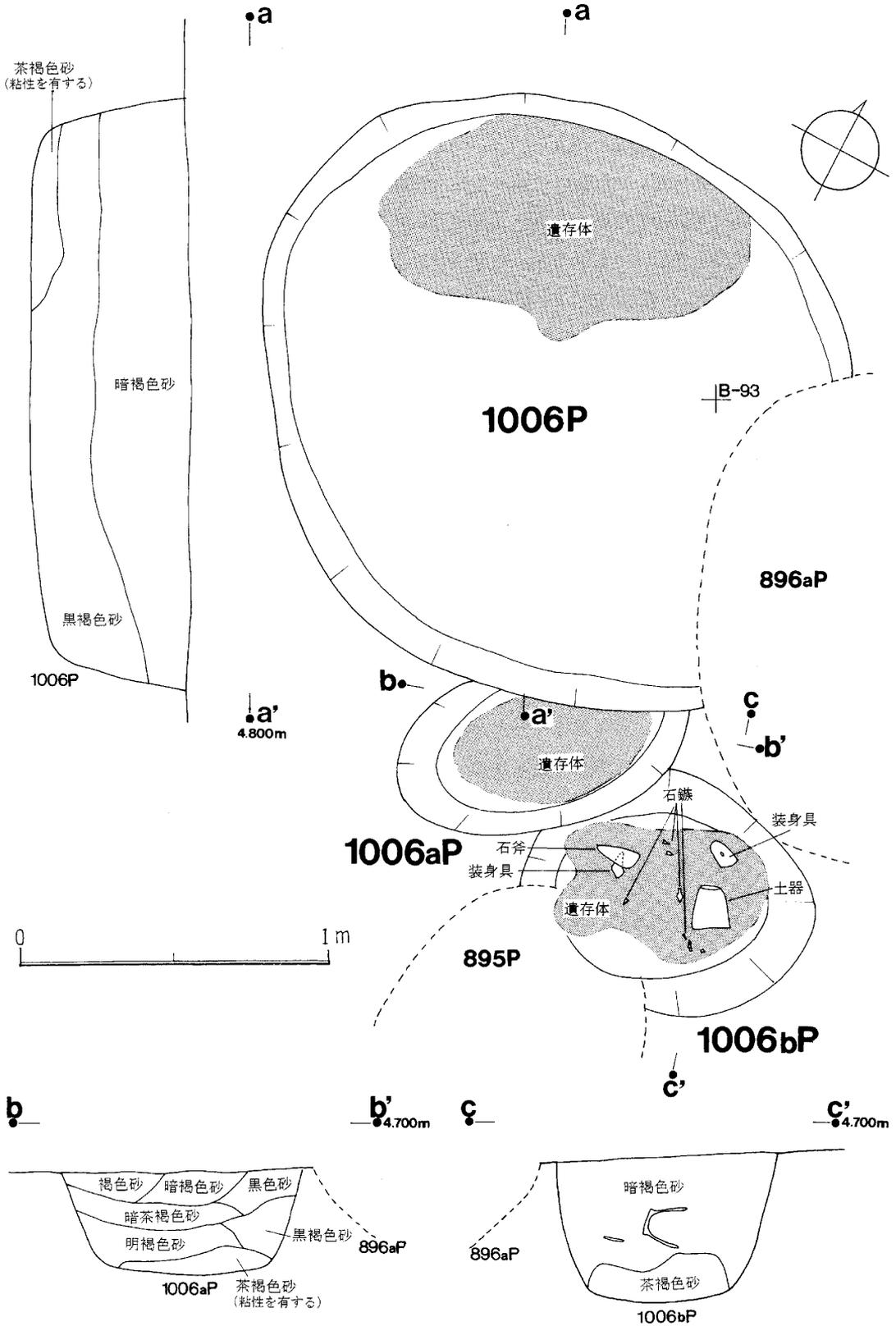
時期は不明である。

### 遺 物 (第189図-14, 第190図-33~37, 図版39-2~4)

第189図-14は口径約8.5cmの壺形土器。口縁部と胴中央部の沈線文間に3本単位の山形沈線文を施し、円形刺突文を加える。続縄文興津式相当であろう。

石器は第190図-33は玄武岩製のナイフ。34は黒曜石製のナイフ。35は黒曜石製の搔器。36は泥岩製の磨製石斧の刃先。37は石質不明の装身具。

(佐々木 寛)



第191図 ピット1006、1006a、1006b平面図

## ピ ッ ト 1006b

### 遺 構 (第191図, 図版39-5)

本ピットはピット1006aの東側から検出され、規模は長軸約0.85m、短軸約0.74mの楕円形を呈する。壁高は確認面から46cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められ、遺存体の上から第図-15の土器と第192図-9の装身具が出土している。遺存体の中から第192図-2～8の石器が出土している。床面からは第192図-1の装身具が出土している。遺存体の形態から頭位は西方向と考えられる。

### 遺 物 (第189図-15～17, 第192図, 図版39-6～8, 図版40-1～7)

第189図-15は遺存体の上から出土した土器で口径12.8cm、器高12.7cmの小型土器。口唇部に1個の山形突起と口縁部に突瘤文が施される。底部は意識的に破損されている。続縄文字津内Ⅱa式である。16は壺形のミニチュア土器。続縄文初頭であろう。17は縄文晩期中葉であろう。

石器は第192図-1は床面出土の硬質頁岩製の装身具。中央に孔を穿つ。2～6は石鏃。7はナイフ。8は泥岩製の片刃磨製石斧。9は硬質頁岩製の装身具。1と同様に中央に穴を穿つ。1・8・9以外は黒曜石製。

### 小 括

本ピットは墳墓である。長軸は東-西方向で、頭位は西である。

時期は続縄文字津内Ⅱa式期と考えられる。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1007

### 遺 構 (第193図, 図版40-8)

本ピットは152号竪穴の南約90cmに位置し、規模は長軸約1.60m、短軸約1.26mの楕円形を呈する。壁高は確認面から72cmを測り、垂直に立ち上がる。

床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められた。遺存体の形態から頭位は東方向と考えられる。遺存体の内部から削器、白色粘土、軽石が各1点ずつ出土している。

### 遺 物 (第195図-1～4, 第197図-1・2, 図版40-9・10)

第195図-1・2は縄文晩期中葉。3・4は縄文晩期前葉。埋土出土。

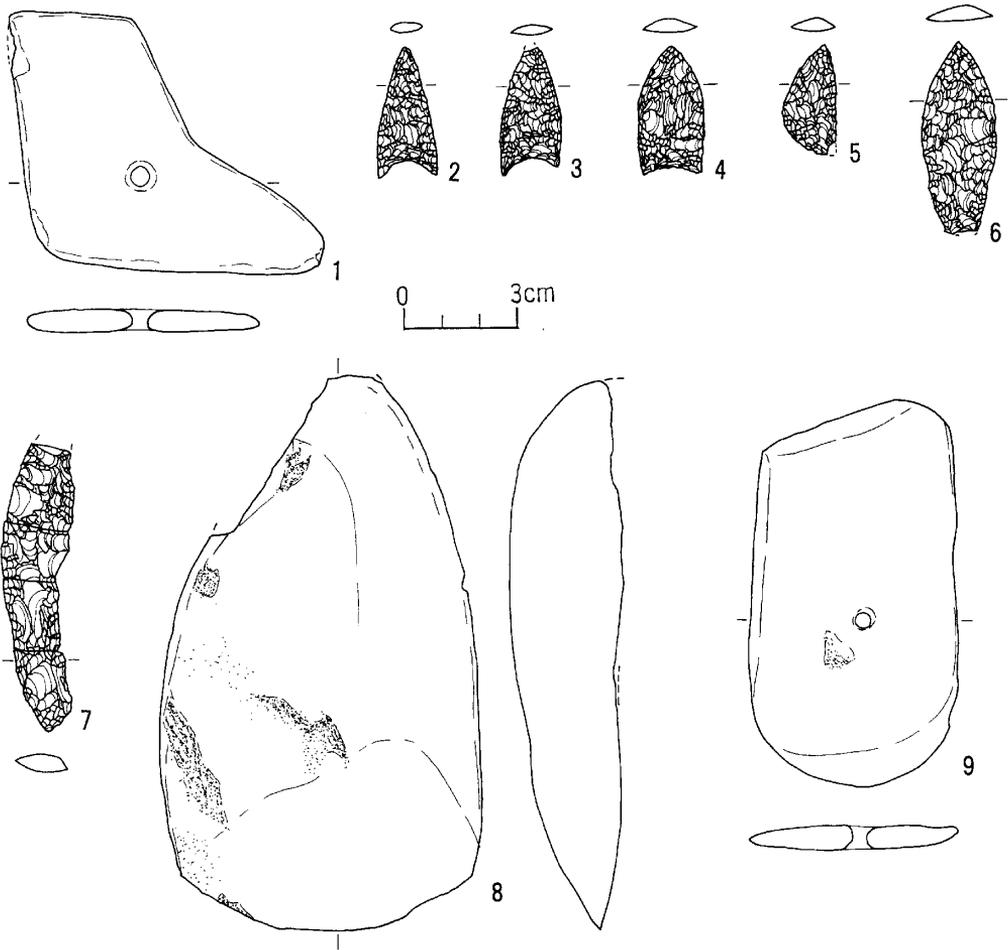
石器は第197図-1は遺存体の中から出土した黒曜石製の削器。埋土からは黒曜石製の両面加工ナイフが出土している。

### 小 括

本ピットは土墳墓である。長軸は東-西方向で頭位は遺存体の形態から東方向と考えられる。

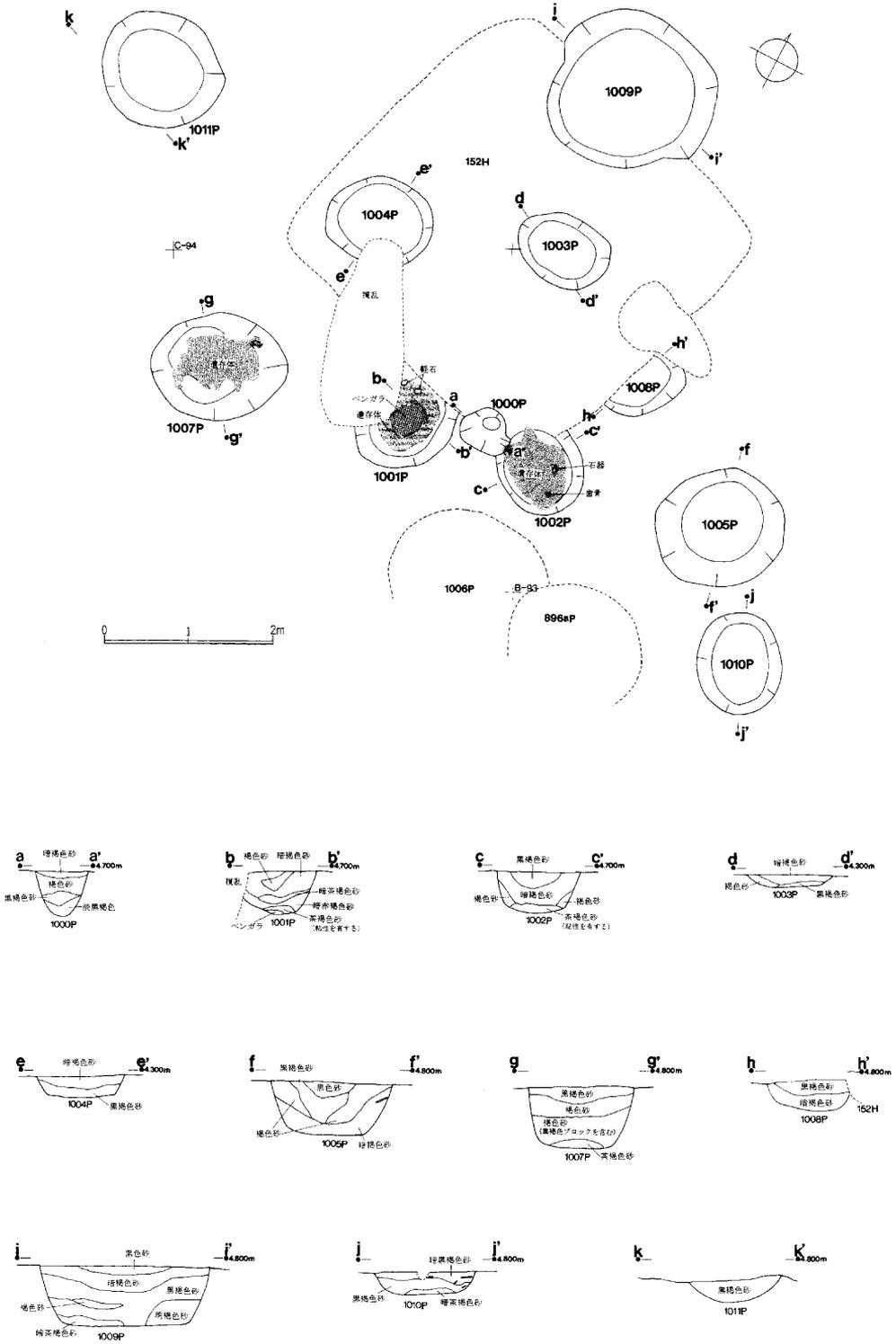
時期は不明である。

(佐々木 覚)



第192図 ピット1006b 床面(1)・遺体中(2~8)・遺体上(9)出土石器・石製品

常呂川河口遺跡



第193図 ピット1000、1001、1002、1003、1004、1005、1007、1008、1009、1010、1011平面図

## ピ ッ ト 1008

## 遺 構 (第193図)

本ピットは152号堅穴の東壁から検出されているが、規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から35cmを測る。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1009

## 遺 構 (第193図)

本ピットは152号堅穴の北壁から検出されている。規模は約2.00mの円形を呈する。壁高は確認面から70cmを測る。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1010

## 遺 構 (第193図)

本ピットはA92グリッドに位置し、長軸約1.18m、短軸約1.00mの楕円形を呈する。壁高は確認面から27cmを測る。埋土から第195図-5の土器が一括出土している。

床面の一部にはわずかに遺存体と思われる暗茶褐色砂が認められた。

## 遺 物 (第195図-5～8, 第197図-3, 図版41-1)

第195図-5は埋土から一括出土した口径15.5cm、器高18.8cmの鉢形土器。口唇部に2対の突起をもち、胴部は縞縄文を縦横に配している。時期は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式と考えられる。6は一部のみであるので口径・器高ともに不明である。胴部に微隆起線文と帯縄文・列点文をもつ統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。7・8は縄文晩期。

石器は第197図-3が黒曜石製の有茎石鏃。

## 小 括

本ピットは土壙墓で時期は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式期と考えられる。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1011

## 遺 構 (第193図)

本ピットは152号堅穴の西側に約1.50m離れて検出された。規模は長軸約1.50m、短軸約1.30mの楕円形を呈する。壁高は確認面から25cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。

遺物は出土していない。

(佐々木 覚)

## ピット 1012

### 遺構 (第194図, 図版41-3・4)

本ピットは156号堅穴の床面精査中に検出された。規模は長軸約0.80m、短軸約0.42mの楕円形を呈し、壁高は156号堅穴の床面から12cmを測る。

床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められ、南西側の遺存体上から第195図-9の土器が出土している。粘性をもつ茶褐色砂の中から琥珀製の平玉98点とそれに繋がった状態で管玉5点が出土している。土器の下から石鏃9点と削器1点が検出されている。

### 遺物 (第195図-9~13, 第197図-4~31, 図版41-2, 図版42)

第195図-9は遺存体の上から出土した統縄文字津内Ⅱb式期である。口径8.8cm、器高9.7cmで口縁部の上面観は菱形をしている。口唇部に大突起1対と小突起1対があり、大突起の下には隆帯が垂下し、小突起の下には「ハ」字状に隆帯が施される。口唇部内側に1条、口縁部に4条の縄線文が巡らされ、その下に縄端圧痕文が施されている。10は埋土から出土した口径12.7cm、器高12.8cmの鉢形土器。口唇部に1個の小突起が向かい合わせに2対あり、口縁部に突瘤文が施されている。胴部は地文の縦走する撚糸文のみである。統縄文字津内Ⅱa式である。11は統縄文初頭。12・13は縄文晩期。

第197図-4~8は硬質頁岩製の管玉。9は琥珀製の玉。10は琥珀製の平玉。石器では遺存体の上から第197図-11~19の無茎石鏃、20の頁岩製の削器が出土。埋土からは21~29が無茎石鏃。30が石槍。31は搔器。20以外は黒曜石製。

### 小括

本ピットは土壙墓である。長軸は北東-南西方向であり、頭位は琥珀玉出土の形態と位置から南西方向と考えられるが断定はできない。

時期は統縄文字津内Ⅱb式期と考えられる。(佐々木 寛)

## ピット 1013

### 遺構 (第196図, 図版43-1)

本ピットはH92・I92グリッドにかけて検出された。規模は直径約1.25mの円形を呈すると思われる。壁高は確認面から39cmを測る。

床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められ、遺存体の上から第198図-1~3の土器3点と原石を多用した琥珀製の装身具106点、石斧1点、白色粘土2点が出土している。

### 遺物 (第198図-1~4, 第197図-32~48, 図版43-2~4, 図版44-1~4)

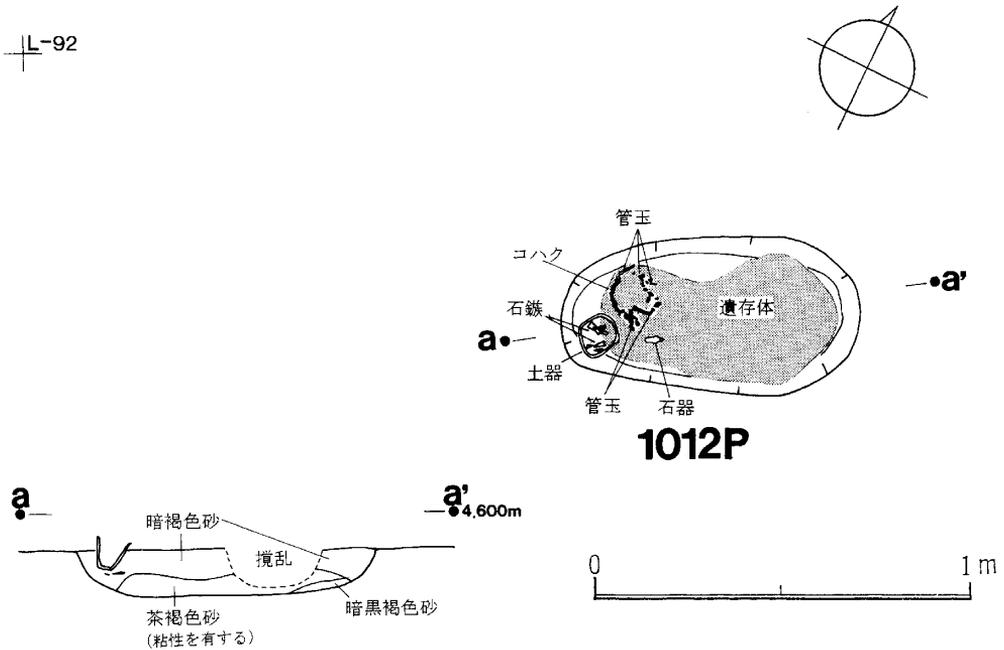
第198図-1は口径9.4cm、器高9.2cm。口縁部に突瘤文をもち、胴部は地文の撚糸文のみで

ある。2は口径5.4cm、器高7.1cm、胴部6.4cmの壺型土器。口縁部から胴部にかけて縄線文を7条巡らし、縄端圧痕文を施している。底部は丸みを帯びる。3は口径8.6cm、器高10.6cm。口唇部に突起が1対あり、胴部は無文で、底部は平底である。4は続縄文初頭。

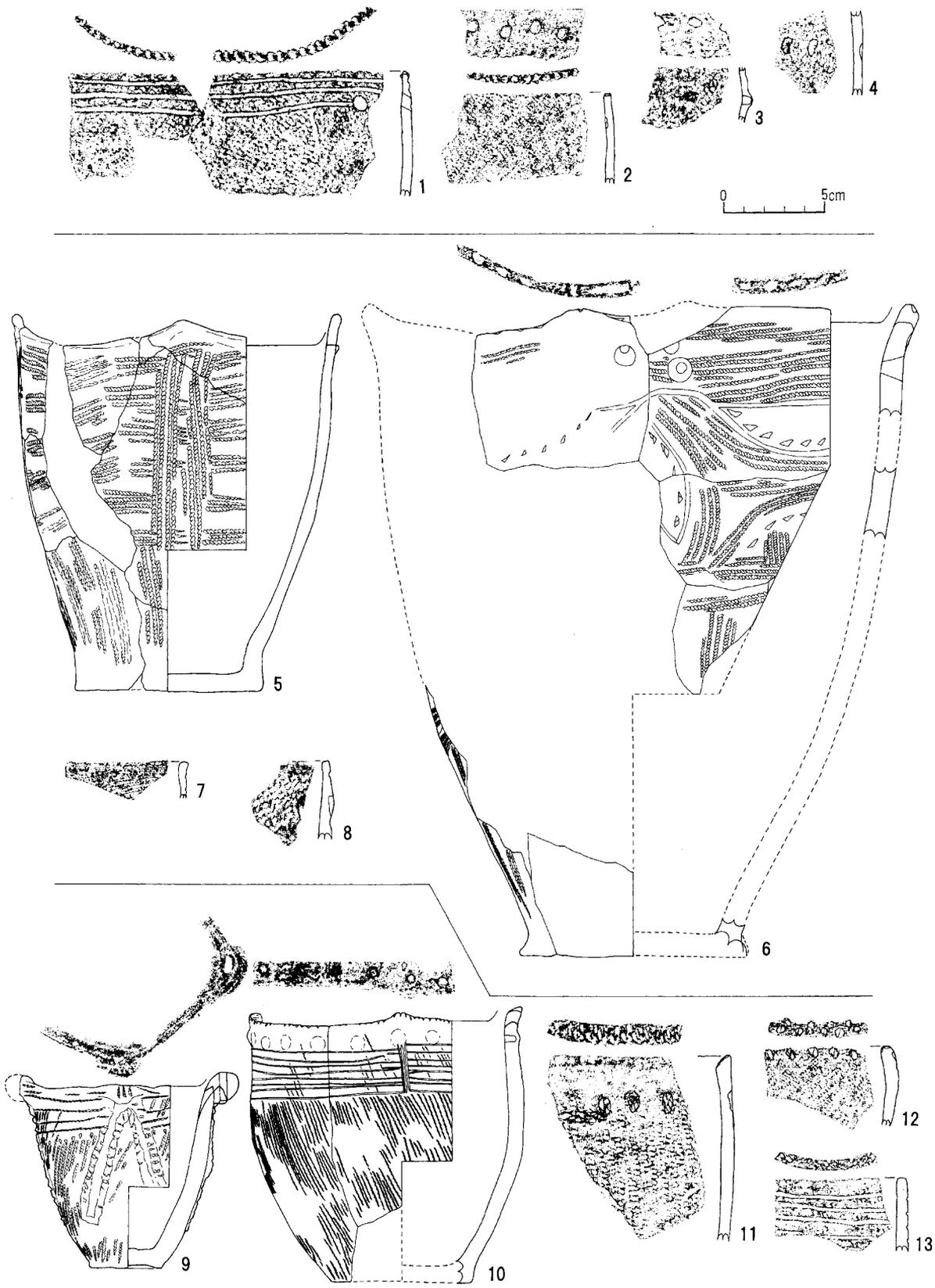
石器は第197図-32は遺存体の上から出土した泥岩製の片刃磨製石斧。33~44は琥珀製の装身具。埋土からは45は無茎石鏃。46~48は黒曜石製の削器。

小 括

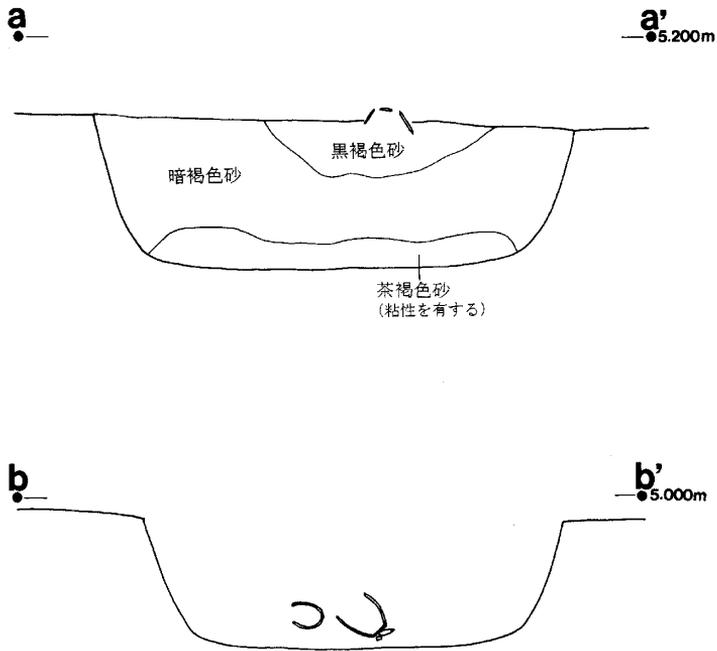
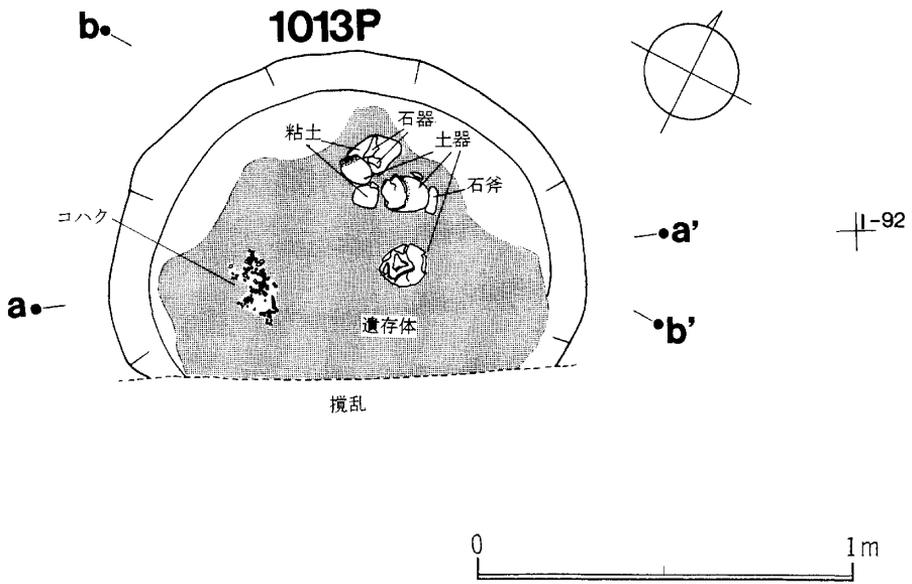
本ピットの頭位は琥珀の出土位置から南西方向ではないかと考えられるが断定はできない。時期は出土土器から続縄文初頭と考えられる。(佐々木 覚)



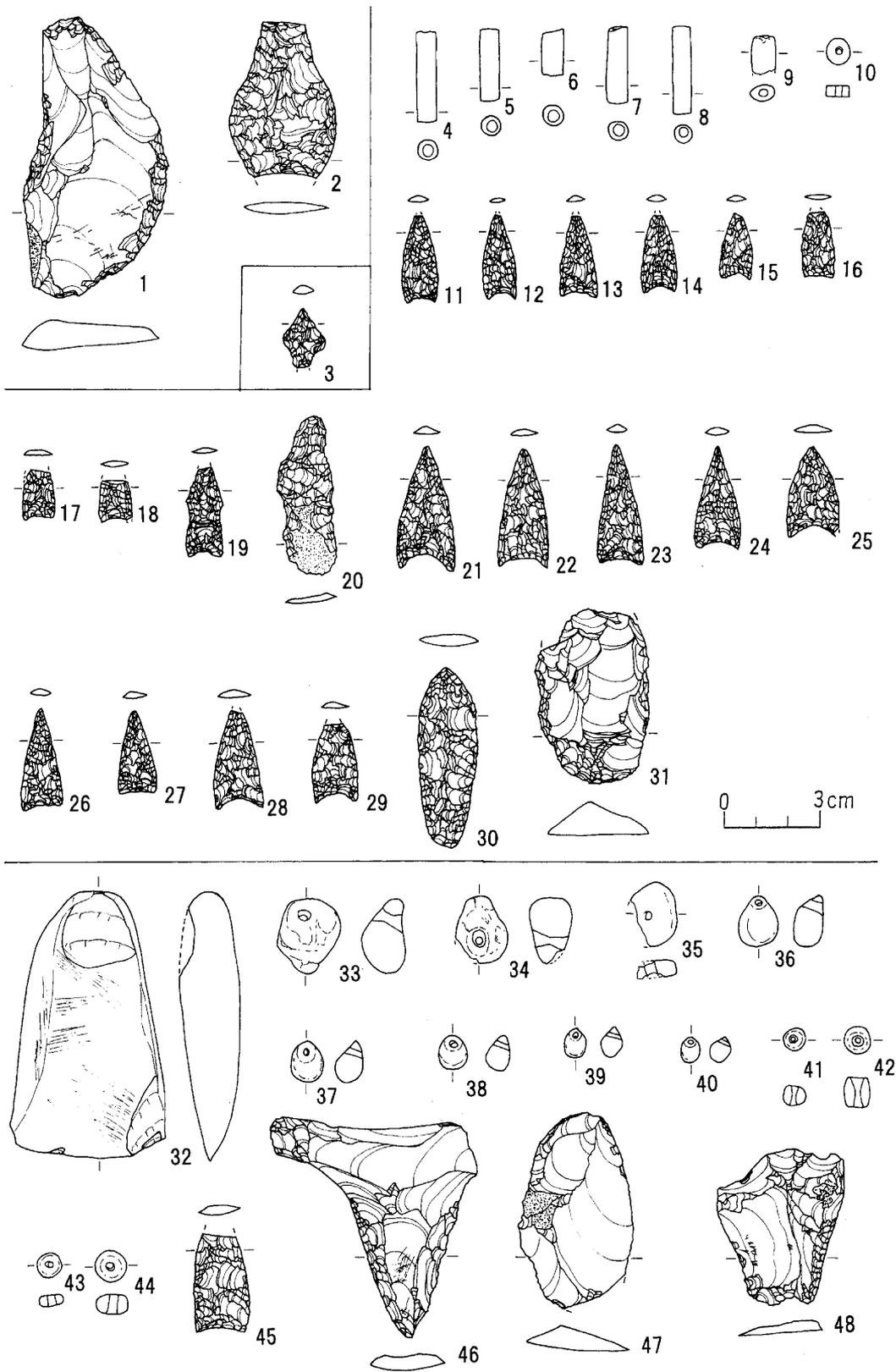
第194図 ピット1012平面図



第195図 ビット1007埋土(1~4)、1010埋土(5~8)、1012遺体上(9)・埋土(10~13)出土土器



第196図 ピット1013平面図



第197図 ビット1007床面(1)・埋土(2)、1010埋土(3)、1012遺体内(4~10)・遺体上(11~20)  
 ・埋土(21~31)、1013遺体上(32~44)・埋土(45~48)出土石器・琥珀玉・管玉

## ピ ッ ト 1014

## 遺 構 (第94図)

本ピットは153号竪穴の北側に検出されているが、洪水時の川岸崩落により大半が失われているため規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から60cmを測る。

床面に遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められ、遺存体の北東側から歯骨が検出された。

## 遺 物 (第198図-5~7, 第202図-1・2)

第198図-5は口縁部に突瘤文の施された宇津内Ⅱa式。6・7は縄文晩期。埋土出土。

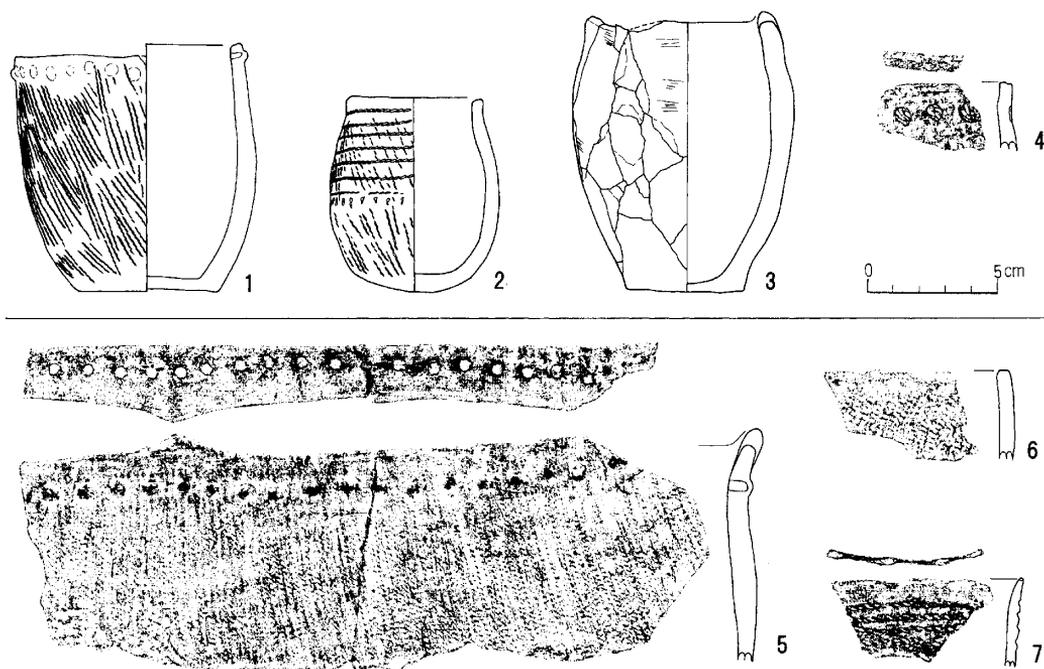
石器は第202図-1が有茎石鏃。2は削器。黒曜石製。埋土出土。

## 小 括

本ピットは洪水のための崩落により規模・形態は不明であるが土壙墓と考えられる。長軸は北東-南西にあると考えられ、歯骨の位置から頭位は東方向である。

時期は不明である。

(佐々木 覚)



第198図 ピット1013遺体上(1~3)・埋土(4)、1014埋土(5~7)出土土器

## ピ ッ ト 1015

### 遺 構 (第214図)

本ピットは157号竪穴の南壁に検出された。規模はピットの北側半分が157号竪穴に切られているため短軸は不明であるが長軸約1.18mの楕円形を呈するものと思われ、壁高は確認面から8cmを測る。ピット上面から第199図-1の土器が出土している。

### 遺 物 (第199図-1, 図版44-6)

第199図-1は埋土出土。4個の突起をもち、突起の下に同心円文を配する。同心円文の下には「ハ」字状に隆帯を垂下させる。それぞれの同心円文は横走する隆帯で連結される。口径28.5cm、器高41.2cmの宇津内Ⅱb式。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1016

### 遺 構 (第200図, 図版44-8)

本ピットはF91グリッドに位置し、規模は長軸約1.23m、短軸約1.12mの隅丸三角形を呈する。壁高は確認面から26cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。ピット埋土中から7点の礫と第199図-5の土器が出土している。

### 遺 物 (第199図-2~5, 図版44-7)

第199図-2は宇津内Ⅱa式。3は宇津内式の底部。4は宇津内Ⅱb式の底部。5は3分の1を欠くが口径約12cm、器高約30cmのの壺型土器。口縁部に吊り耳をもち、縄線文を5~6条横走させ、その下に縄線文を縦に施す。続縄文初頭。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1017

### 遺 構 (第210図)

本ピットはF93グリッドに位置し、大半が攪乱を受けているため規模は不明であるが楕円形を呈するものと考えられる。壁高は確認面から約40cmを測る。ピットの南側から大型の礫が5点検出されているが、このピットに伴うものかどうかは不明である。

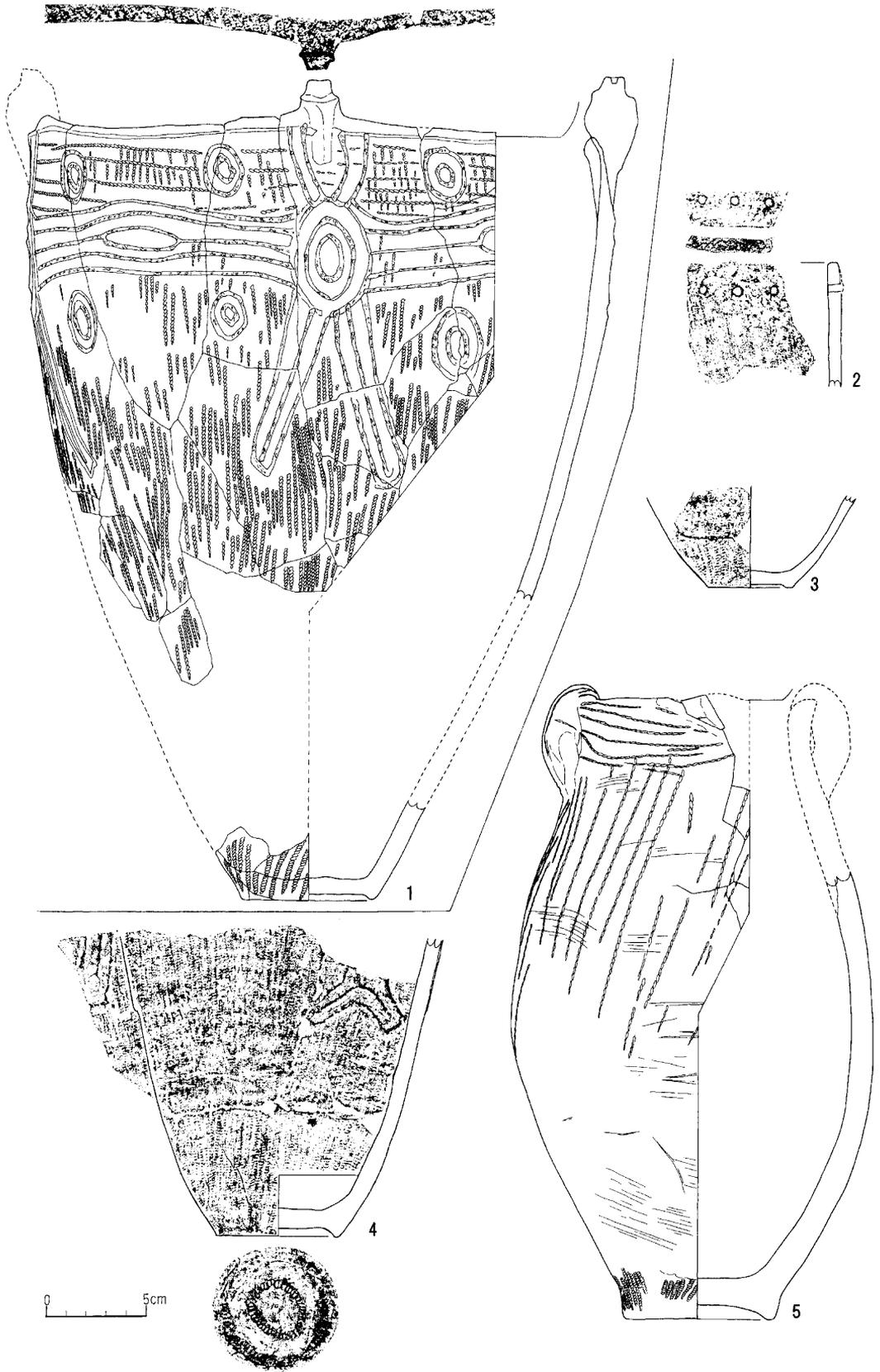
床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められ、床面から黒曜石製のナイフが出土されている。土壌墓と考えられる。

時期は不明である。

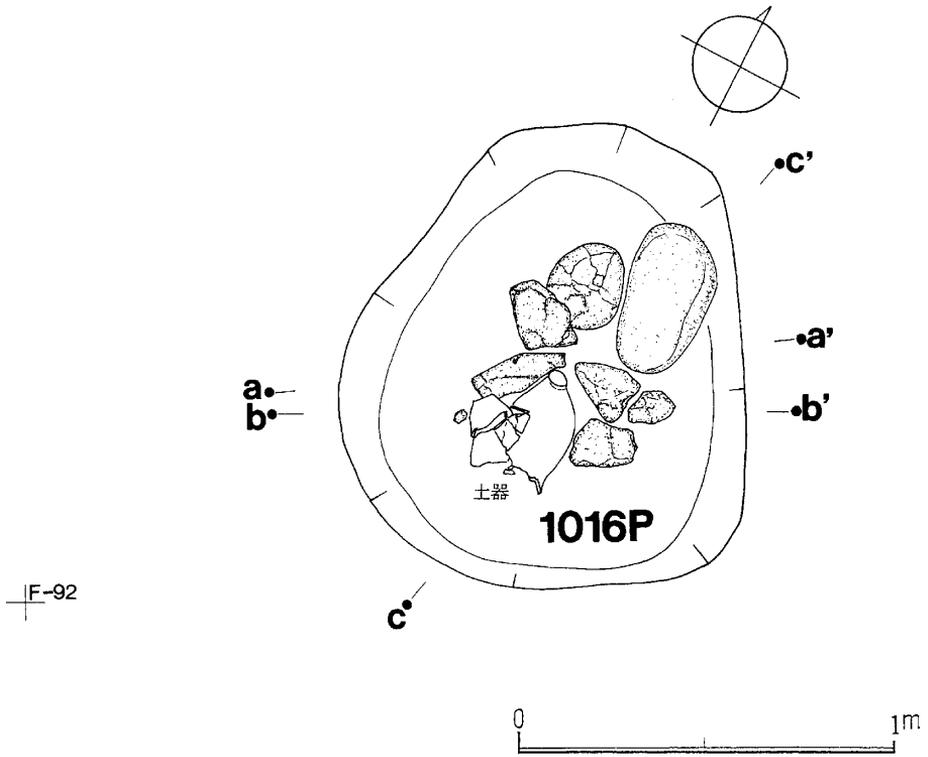
### 遺 物 (第202図-3, 図版45-1)

第202図-3は床面出土の黒曜石製ナイフ。

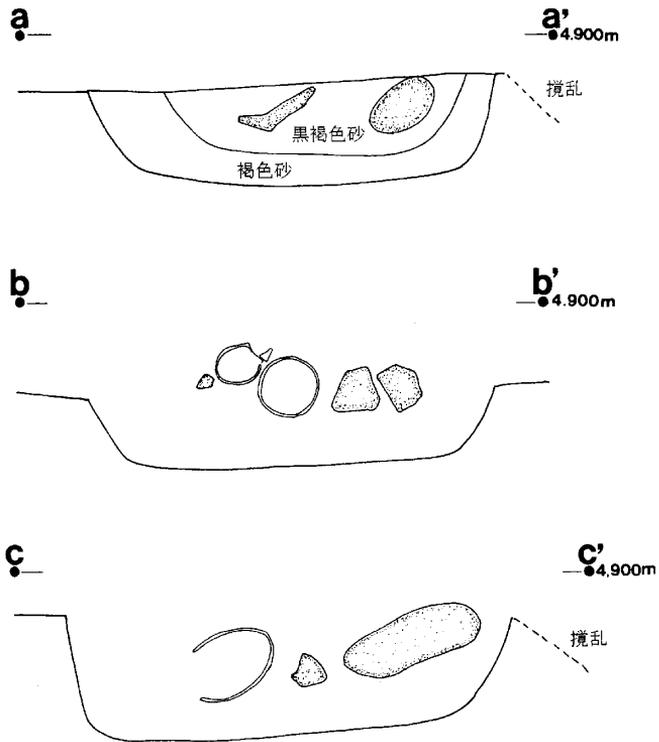
(佐々木 覚)



第199図 ビット1015埋土(1)、1016埋土(2~5)出土土器



F-92



第200図 ピット1016平面図

## ピ ッ ト 1018

**遺 構** (第210図)

本ピットは151号竪穴の南西角に接して検出された。規模は長軸約1.08m、短軸約0.94mの楕円形を呈し、壁高は確認面から26cmを測る。床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められていることから土壙墓と考えられる。

時期は不明である。

**遺 物** (第202図-4, 図版45-2)

第202図-4は埋土出土でメノウ製の有茎石鏃。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1019

**遺 構** (第201図, 図版45-3)

本ピットはF92グリッドに位置する。規模は径約1.10mの円形を呈し、壁高は確認面から62cmを測る。床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められ、遺存体の形態から頭位は南方向と考えられる。遺存体の上と中から石鏃7点とナイフ・搔器が各1点出土している。また、頭部の下から琥珀玉73点が検出された。

**遺 物** (第205図-1, 第202図-5~20, 図版45-4~15)

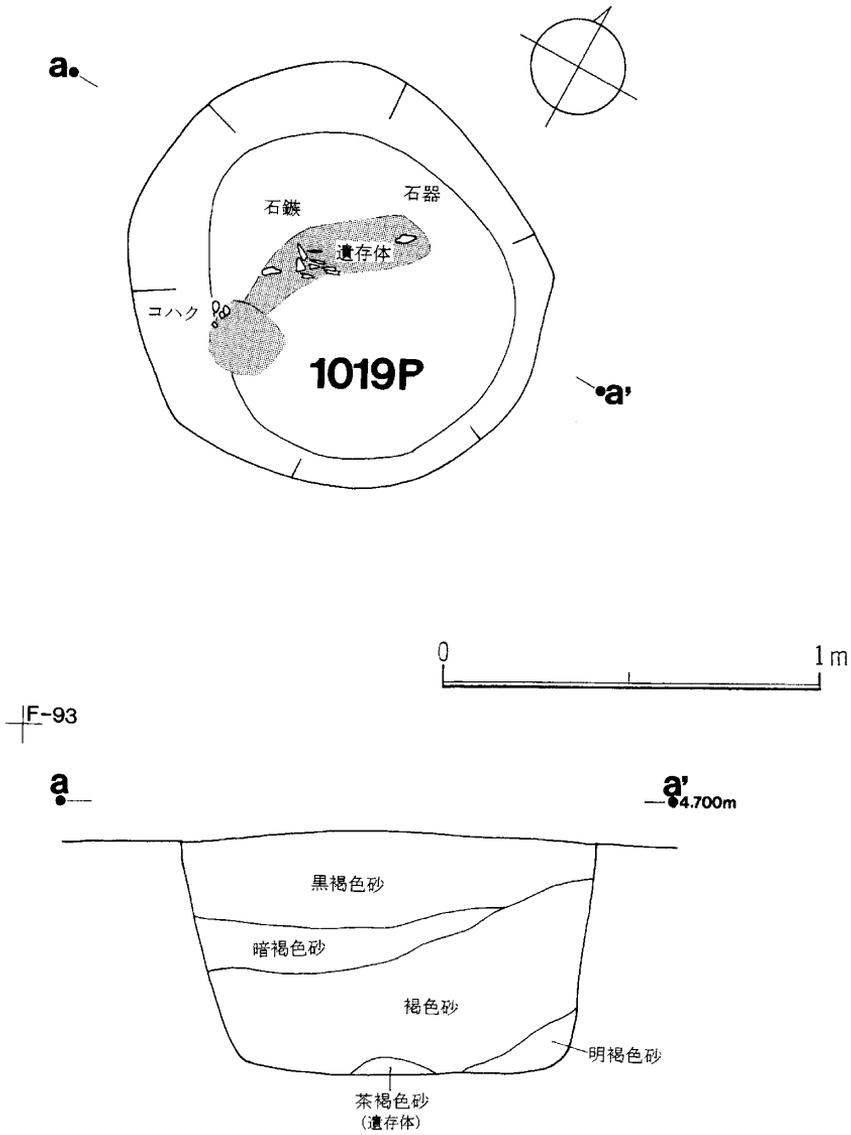
第205図-1は埋土出土で縄文の地文のみの口縁部。統縄文初頭と考えられる。

石器は第202図-5~17が遺存体の上と中から出土している。5~11は黒曜石製の無茎石鏃。12は頁岩製のナイフ。13は頁岩製の搔器。14~17は琥珀の原石を利用した装身具。埋土からは18・19は黒曜石製の無茎石鏃。20は頁岩製の有茎石鏃。

**小 括**

本ピットは土壙墓である。頭位は遺存体の形態から南方向と考えられるが、時期は不明である。

(佐々木 寛)



第201図 ピット1019平面図

## ピ ッ ト 1020

## 遺 構 (第210図)

本ピットは151号竪穴の南側から約40cm離れて検出され、規模は長軸約1.30m、短軸約0.86mの楕円形を呈する。壁高は確認面から17cmを測る。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1021

## 遺 構 (第210図)

本ピットはE92グリッドにあり、規模は径約1.70mの不整形円形を呈し、壁高は確認面から63cmを測る。

## 遺 物 (第202図-21)

第202図-21は黒曜石製の削器。(佐々木 覚)

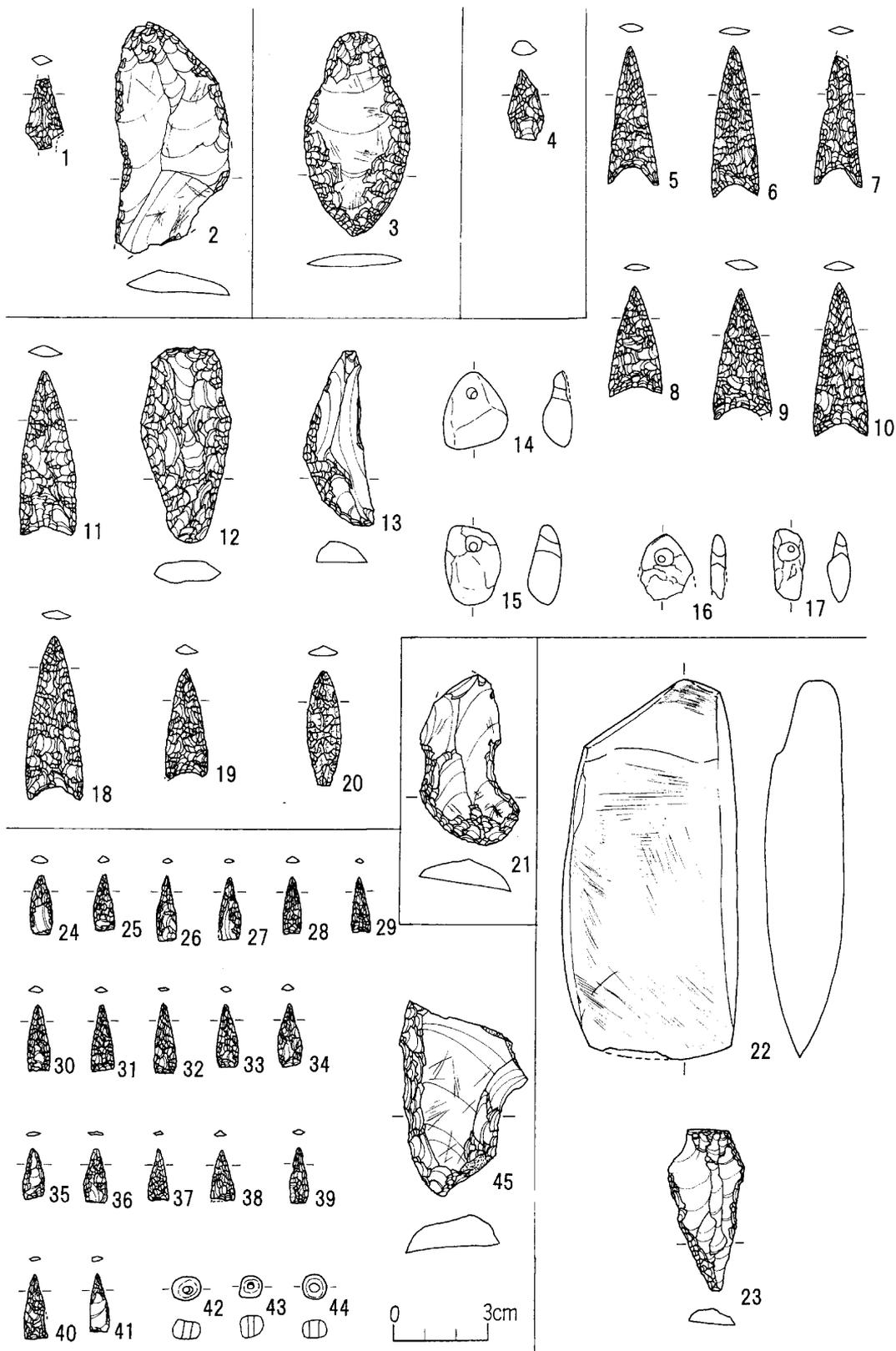
## ピ ッ ト 1022

## 遺 構 (第210図)

本ピットは151号竪穴の東壁に接して検出され、規模は径約1.00mの不整形円形を呈する。壁高は確認面から22cmを測る。埋土上層から大型の礫が1点検出された。

## 遺 物 (第205図-2)

第205図-2は埋土出土。口唇部に刻みをもち、口縁部に突瘤文を施す続縄文字津内Ⅱa式。(佐々木 覚)



第202図 ビット1014埋土(1・2)、1017床面(3)、1018埋土(4)、1019床面(5~17)・埋土(18~20)、1021埋土(21)、1023遺体上(22)・埋土(23)、1025床面(24~44)・埋土(45)出土石器・琥珀玉・ガラス玉

## ピ ッ ト 1023

## 遺 構 (第203図, 図版46-1)

本ピットはH93, I93グリッドに位置し、規模は長軸約1.15m、短軸約0.87mの楕円形を呈する。壁高は確認面から53cmを測る。ピット上面から第205図-3の土器が出土している。

床面からは遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められ、遺存体の形態から頭位は西方向と考えられる。南西側の遺存体の上面から石斧が1点、南壁際から白色粘土が出土している。床面壁際に柱穴が9本検出された。

## 遺 物 (第205図-3・4, 第202図-22・23, 図版46-2~4)

第205図-3はピットの上面から出土している。口径6.4cm、器高7.8cmの壺型土器。口縁部は外反し、胴部は地文の縦走する縄文のみである。続縄文初頭興津式に相当される。4は続縄文初頭。

石器は第202図-22は緑色泥岩製の磨製石斧。23は黒曜石製の削器。

## 小 括

本ピットは土壙墓と考えられ、長軸は南西-北東方向で頭位は西と考えられる。時期は続縄文初頭興津式相当であろう。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1024

## 遺 構 (第210図)

本ピットはE92・93, F92・93に位置する。規模は径約0.85mの円形を呈し、壁高は確認面から28cmを測る。

## 遺 物 (第205図-5~11, 図版46-5)

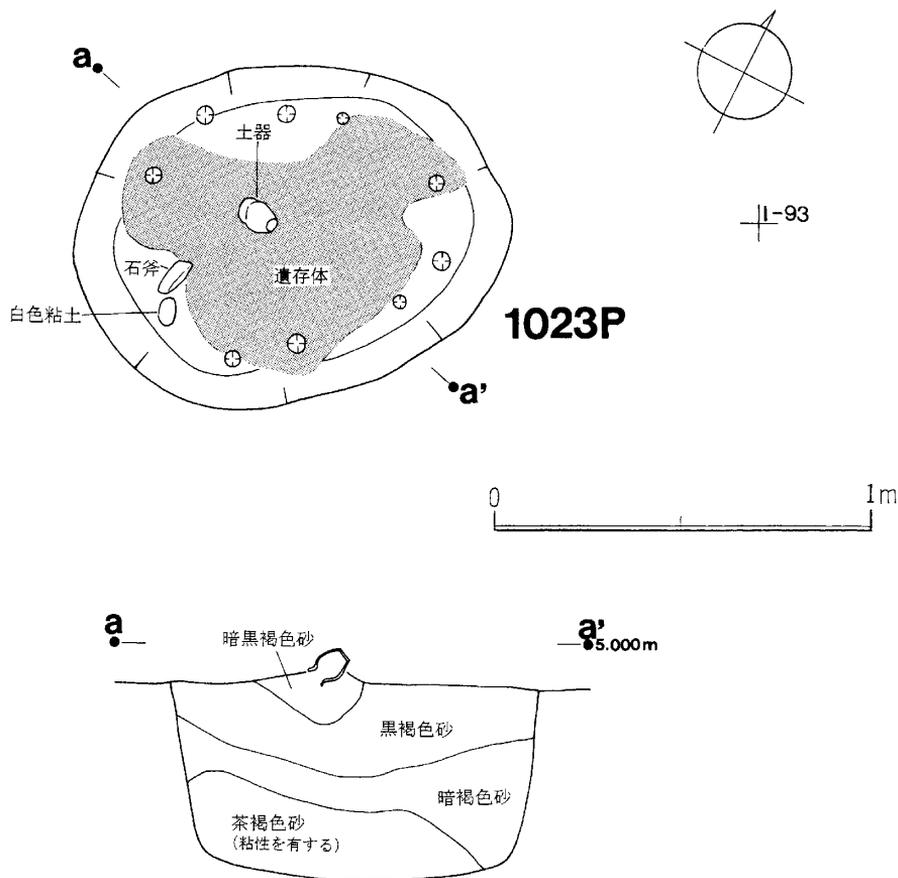
第205図-5は口径4.7cm、器高5.1cmの無文の小型土器。続縄文初頭。6~9・11は続縄文。10は続縄文初頭。埋土出土。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1025

## 遺 構 (第204図, 図版47-1)

本ピットはF91グリッドに検出された。規模は長軸約1.58m、短軸約0.98mの楕円形を呈し、壁高は確認面から56cmを測り、壁は垂直に立ち上がる。

床面からは遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められた。頭部と考えられる遺存体の下から東側にかけて土器が一括出土しており、頭部の北側からは第202図-42~44の濃青色のガラス玉が3点出土している。北側の遺存体の中から第202図-24~41の小型の無基石鏃が18



第203図 ピット1023平面図

点出土している。

**遺物** (第205図-12~15, 第202図-24~45, 図版47-3~21)

第205図-12は床面から出土した土器。口径17.7cm、器高18.8cmで口縁部に横方向の擬縄隆帯を巡らし、胴部は帯縄文が施されている。続縄文後北C<sub>2</sub>・D式の古手の土器と考えられる。埋土から13・14は宇津内Ⅱa式。15は縄文晩期。

石器は第202図-24~41は床面の北側から出土した黒曜石製の無茎石鏃である。42~44は濃青色のガラス玉。45は埋土出土の黒曜石製の削器。

**小括**

本ピットは土壌墓である。長軸は北-南方向にあり、頭位は遺存体の形態から南方向と考えられる。時期は床面出土の土器から続縄文後北C<sub>2</sub>・D式の古い時期のものと考えられる。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1025a

### 遺 構 (第204図)

本ピットはピット1025の南側に検出された。規模は長軸約0.70m、短軸は不明であるが、楕円形を呈するものではないかと思われる。壁高は確認面から48cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

床面からは遺存体と考えられる粘性をもった茶褐色砂が認められ、埋土中からは骨片が検出されている。土壙墓と考えられる。

時期は不明である。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1025b

### 遺 構 (第210図)

本ピットはピット1025の南西側にあり、規模・形態ともに不明であるが、壁高は確認面から12cmを測る。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1025c

### 遺 構 (第210図)

本ピットはピット1025の北西にある。東側の一部がピット1025に切られている。規模は径約1.40mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から56cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は8層あり、床面には遺存体と考えられる粘性をもった茶褐色砂が認められ、一部にはベンガラが散布され茶褐色砂が赤変していることから土壙墓と考えられる。遺存体からは歯骨は検出されなかった。遺存体の中から第207図1～6の石鏃が検出された。

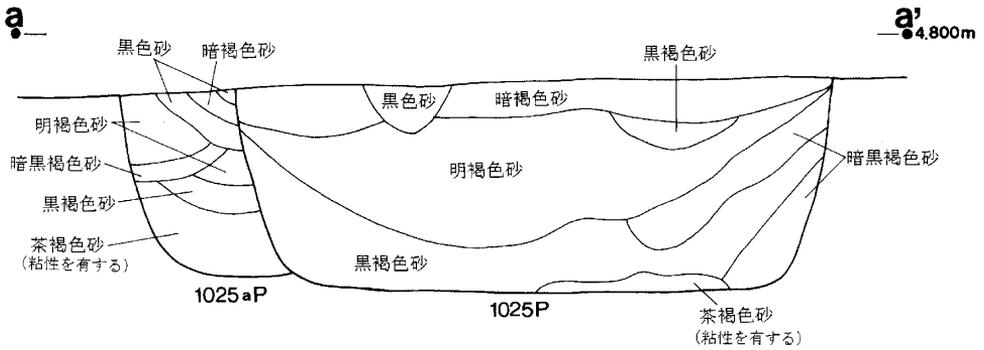
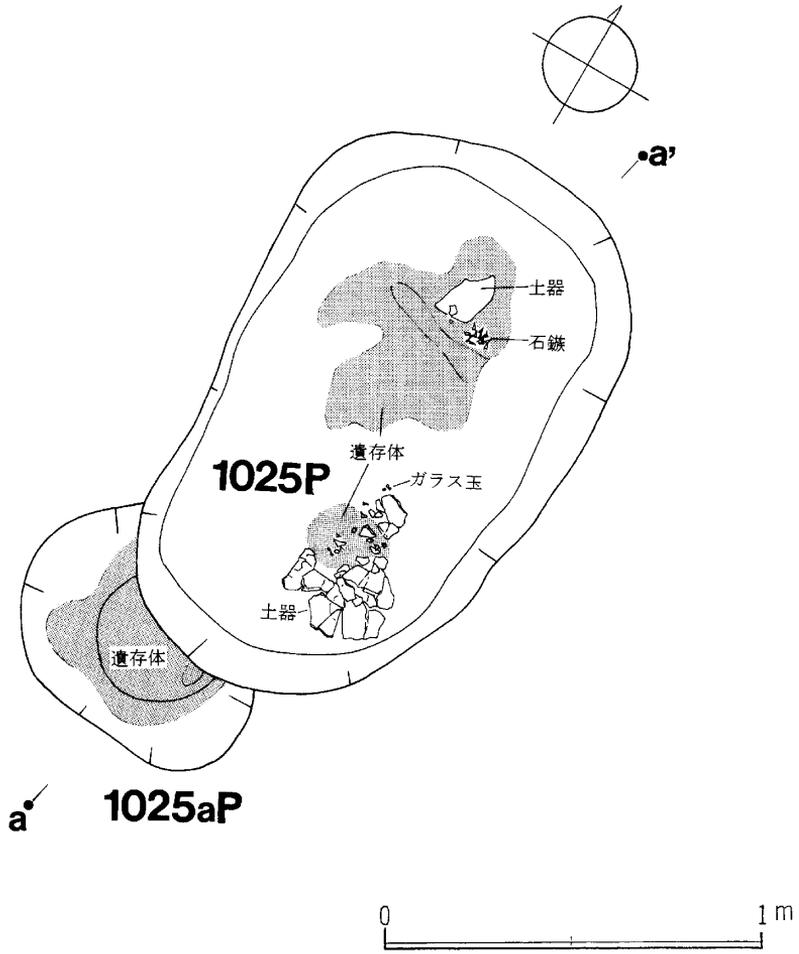
### 遺 物 (第206図-1, 第207図-1～6, 図版48-1～6)

第206図-1は埋土出土の統縄文初頭。

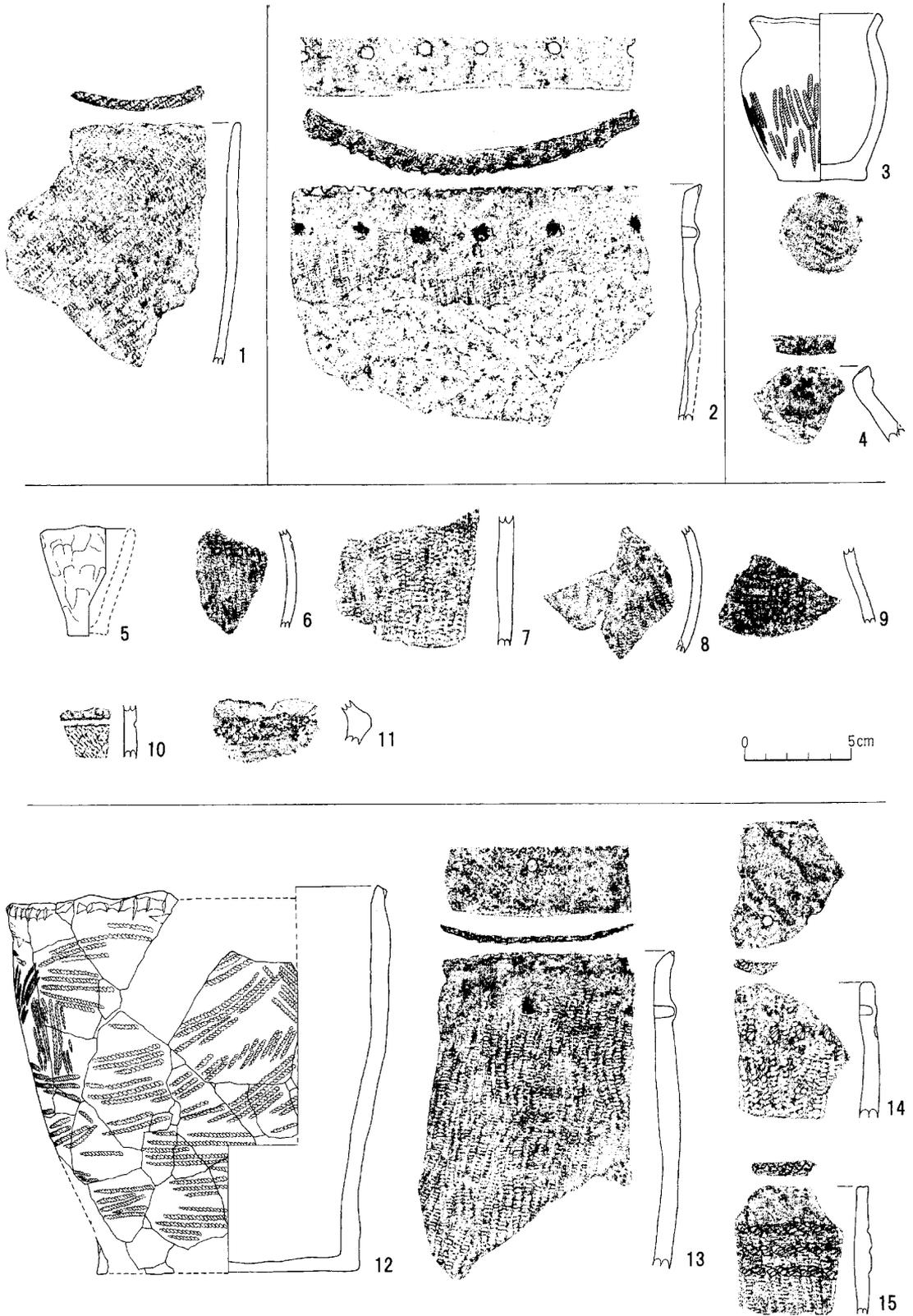
石器は第207図-1～6は遺存体の中から出土した石鏃。1は頁岩製。それ以外は黒曜石製。

(佐々木 覚)

G-92



第204図 ピット1025、1025a 平面図



第205図 ビット1019埋土(1)、1022埋土(2)、1023埋土(3・4)、1024埋土(5~11)、1025床面(12)・埋土(13~15)出土土器

## ピ ッ ト 1025d

### 遺 構 (第210図)

本ピットはピット1025cの北側にある。南側をピット1025cに北側を155号堅穴に切られているが、径約1.40mの円形を呈するのではないかと思われる。壁高は確認面から40cmを測り、垂直に立ち上がる。

埋土は4層あり、床面には遺存体と考えられる粘性をもった暗茶褐色砂が認められていることから土壙墓と考えられる。

時期は不明である。

### 遺 物 (第206図-2)

第206図-2は埋土出土の続縄文初頭。口縁部には縄端圧痕文が施される。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1026

### 遺 構 (第210図)

本ピットはピット1025aの南東側にあり、規模は長軸約1.44m、短軸約1.10mの楕円形を呈する。壁高は確認面から28cmを測る。

埋土は3層で床面からは遺存体と考えられる粘性をもった暗茶褐色砂が認められていることから土壙墓と考えられる。

時期は不明である。

### 遺 物 (第206図-3)

第206図-3は埋土出土の続縄文初頭。(佐々木 覚)

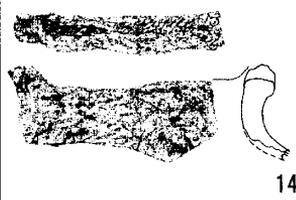
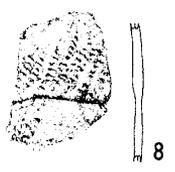
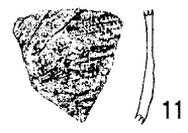
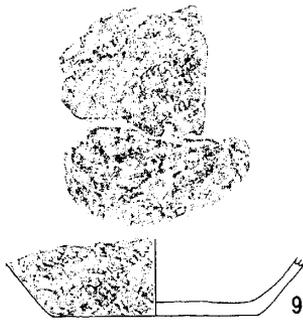
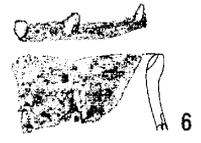
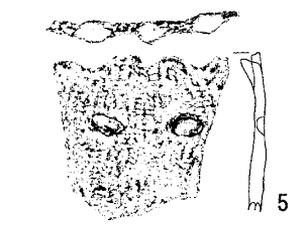
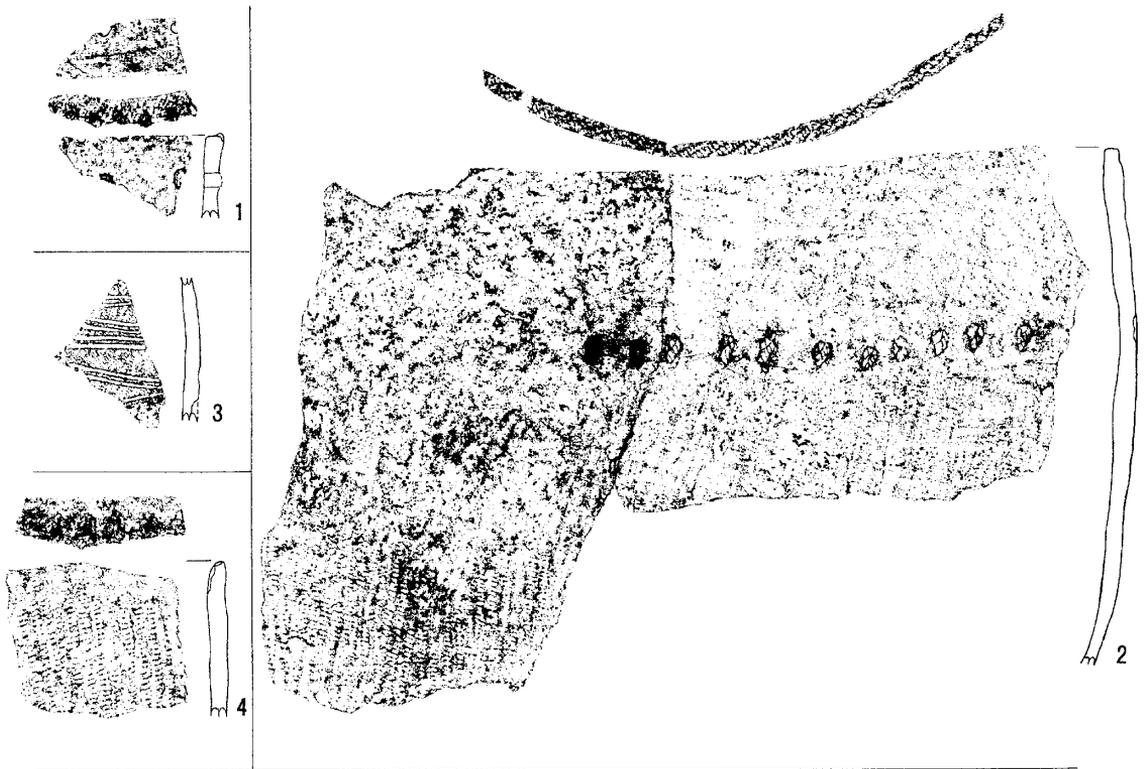
## ピ ッ ト 1027

### 遺 構 (第214図)

本ピットは151b号堅穴の床面精査中に検出された。規模は長軸約1.20m、短軸約0.98mの楕円形を呈し、壁高は確認面から30cmを測る。

### 遺 物 (第206図-4)

第206図-4は埋土出土の続縄文初頭。(佐々木 覚)



第206図 ピット1025c埋土(1)、1025d埋土(2)、1026埋土(3)、1027埋土(4)、1028埋土(5~9)、1029埋土(10)、1031埋土(11・12)、1032埋土(13)、1034埋土(14)、1036埋土(15)出土土器

## ピ ッ ト 1028

### 遺 構 (第214図)

本ピットは151a号堅穴の北西側から検出された。規模は長軸約1.28m、短軸約0.70mの楕円形を呈し、壁高は確認面から60cmを測る。

### 遺 物 (第206図-5~9)

第206図-5~9は続縄文初頭。埋土出土。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1028a

### 遺 構 (第214図)

本ピットはピット1028の北東側にあるが、ピット1028に切られているため規模・形態は不明である。壁高は確認面から30cmを測る。

### 遺 物 (第207図-7・8)

埋土から第207図-7は無茎石鏃。8は搔器。いずれも黒曜石製。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1028b

### 遺 構 (第214図)

本ピットはピット1028aの北東側にあり、西側をピット1028aに切られ、東側は攪乱を受けているため規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から22cmを測る。

### 遺 物 (第207図-9~12, 図版48-7~10)

埋土から第207図-9は無茎石鏃。10は削器。11は搔器。12は青色泥岩製の石斧片。12以外は黒曜石製。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1029

### 遺 構 (第214図)

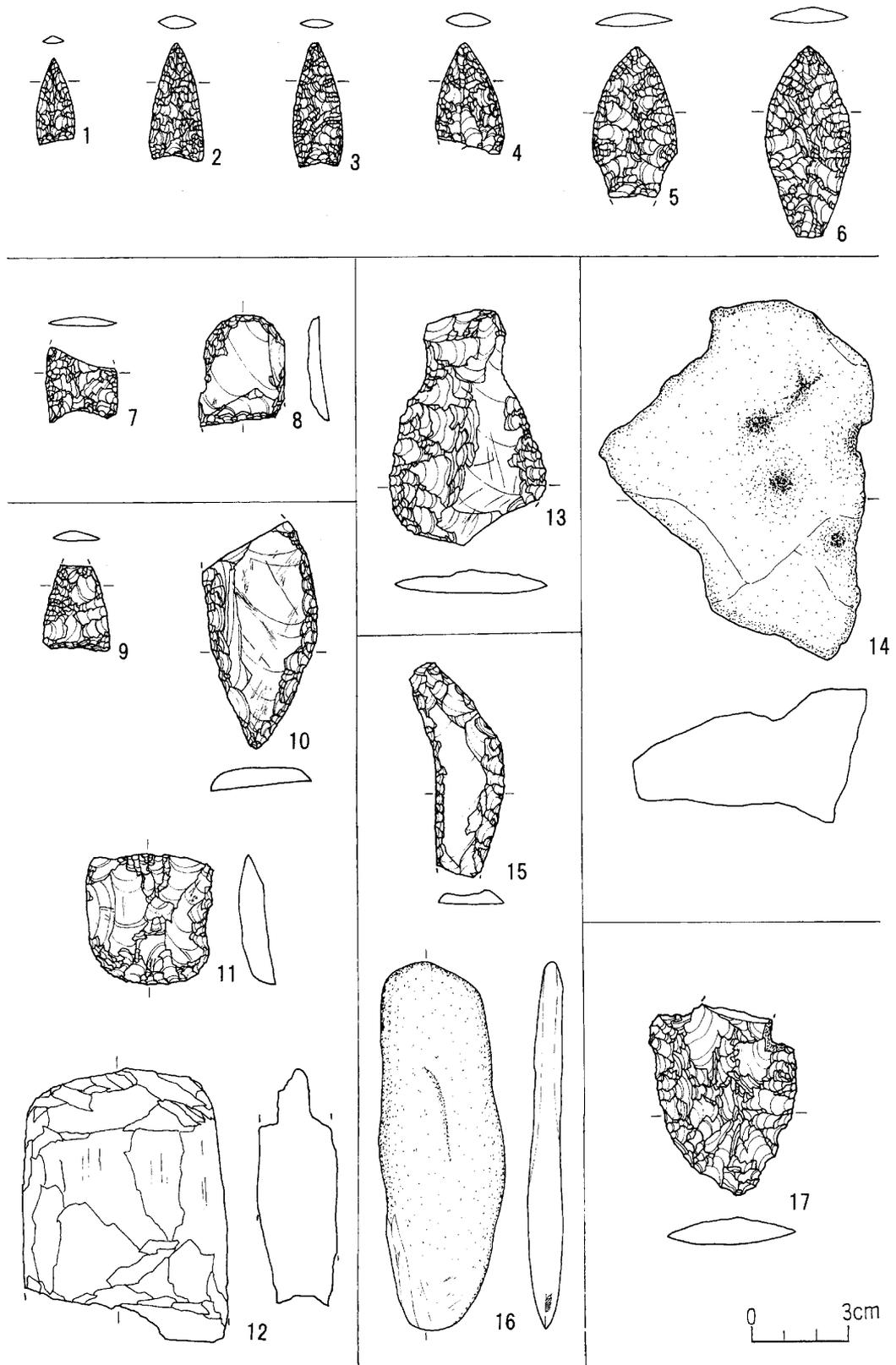
本ピットは151b号堅穴の北西側に位置する。大半が攪乱を受けており規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から25cmを測る。埋土の暗茶褐色砂層には炭化粒が混入する。

### 遺 物 (第206図-10, 第207図-13)

第206図-10は続縄文の胴部片。

石器は第207図-13は黒曜石製のナイフ。

(佐々木 覚)



第207図 ピット1025c 床面(1~6)、1028a 埋土(7・8)、1028b 埋土(9~12)、1029埋土(13)、1033埋土(14)、1035埋土(15・16)、1036埋土(17)出土石器

## ピ ッ ト 1030・1030a

### 遺 構 (第214図)

ピット1030はH92グリッドから検出された。規模は東側が攪乱を受けているため長軸は不明であるが短軸約0.54mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から14cmを測る。

ピット1030aはピット1030の南側にあり、東側の大部分が攪乱を受けているため規模・形態ともに不明である。壁高は確認面から22cmを測る。

遺物は出土していない。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1031

### 遺 構 (第208図, 図版48-11)

本ピットは161a号堅穴の床面精査中に黒色砂の落ち込みが確認された。規模は径約1.05mの円形を呈し、壁高は確認面から27cmを測る。埋土は炭化物を多く含む黒色砂1層のみであるが、その中から径約5~20cmの礫が多量に出土している。礫は角礫が多く、火熱を受けている。北壁際では長さ25cm、幅8cmの板状の炭化物も検出されている。

### 遺 物 (第206図-11・12)

埋土から第206図-11は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。12は統縄文初頭。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1032

### 遺 構 (第214図)

本ピットはI92グリッドに位置する。規模は長軸約0.98m、短軸約0.92mのほぼ円形を呈し、壁高は確認面から19cmを測る。

### 物 遺 (第206図-13)

第206図-13は統縄文字津内式。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1033

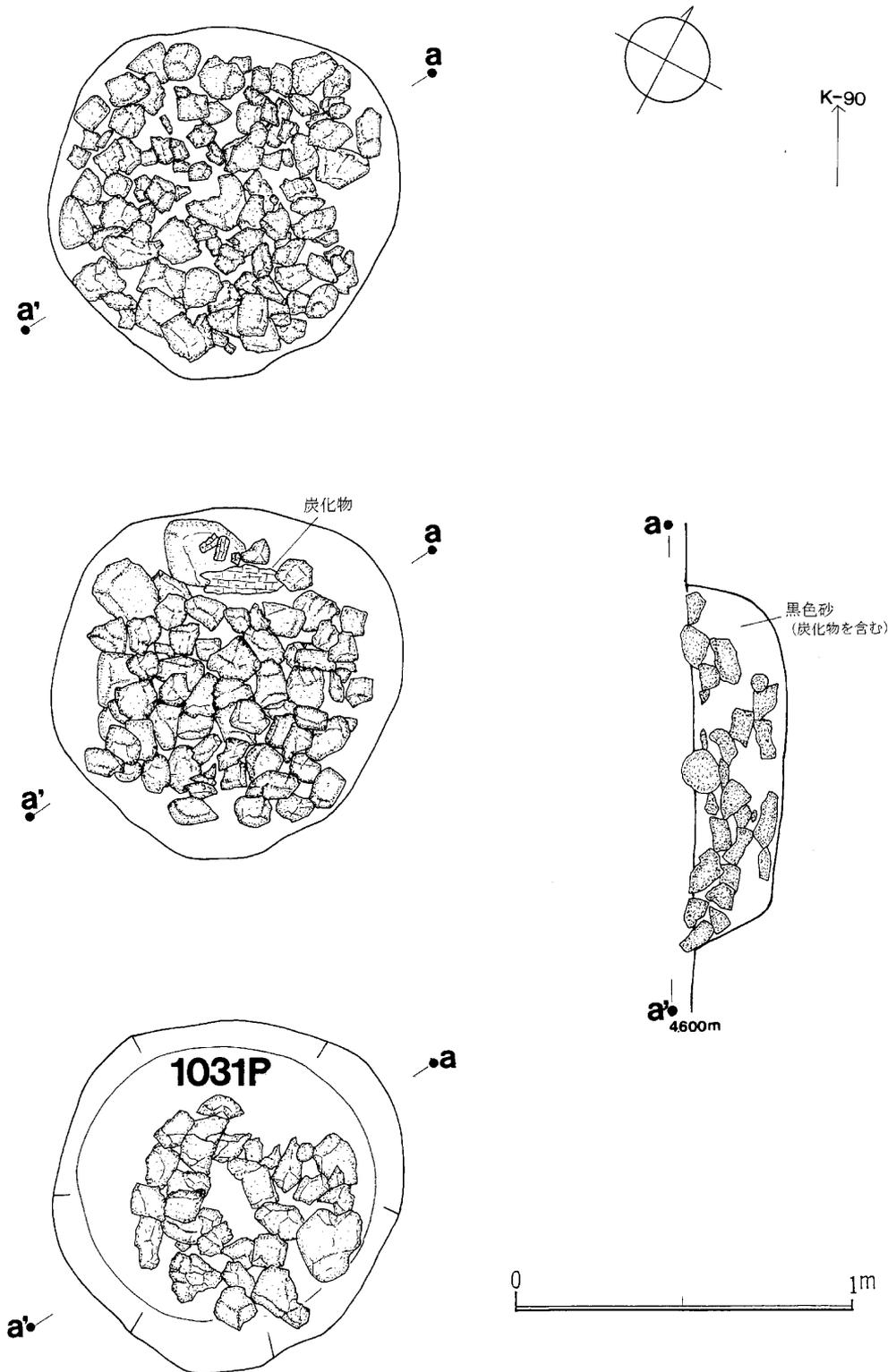
### 遺 構 (第214図)

本ピットはピット1032の北側にあり、規模は長軸約1.00m、短軸約0.92mの不整形を呈する。壁高は確認面から20cmを測る。埋土の黒褐色砂層には炭化粒が含まれている。

### 遺 物 (第207図-14)

第207図-14は埋土中から出土した砂岩製のくぼみ石である。

(佐々木 寛)



第208図 ピット1031平面図、遺物出土状況

## ピ ッ ト 1034

### 遺 構 (第214図)

本ピットは158号堅穴の張り出し部とピット1023との間に位置し、規模は長軸約1.02m、短軸約0.96mのほぼ円形を呈する。壁高は確認面から23cmを測る。

### 遺 物 (第206図-14)

第206図-14は口唇部に小突起と縄線文が施されたかなり大きな統縄文。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1035

### 遺 構 (第130図)

本ピットは156号堅穴の南側約50cm離れて検出された。規模は長軸約1.10m、短軸約0.98mのほぼ円形を呈する。壁高は確認面から17cmを測る。埋土上層の黒色砂層には炭化粒が混入されている。

### 遺 物 (第207図-15・16)

第207図-15は黒曜石製の削器。16は泥岩製の磨製石斧。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1036

### 遺 構 (第130図)

本ピットは156号堅穴の南壁に検出された。規模は長軸約1.00m、短軸は不明であるが楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から16cmを測る。埋土の黒褐色砂層には炭化粒が混入されている。

### 遺 物 (第206図-15, 第207図-17)

第206図-15は統縄文後北 C<sub>2</sub>・D 式。

石器は第207図-17は黒曜石製のナイフ。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1037

### 遺 構 (第159図)

本ピットは O82, P82 グリッドにかけて検出された。表土下層部から黒色土上層部にかけて礫が多量に検出され、礫を除去した黒色土層の下から黒褐色砂の落ち込みが確認された。規模は長軸約1.40m、短軸約1.32mのほぼ円形を呈する。壁高は確認面から10cmと浅い皿状を呈する。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1038

## 遺 構 (第130図)

本ピットは156号堅穴の北東側に1.60mはなれて検出された。規模は長軸約1.00m、短軸約0.80mの楕円形を呈する。壁高は確認面から17cmを測る。埋土から土器片と礫が出土している。

## 遺 物 (第209図-1・2)

埋土から第209図-1は統縄文字津内式の底部。2は統縄文初頭。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1039

## 遺 構 (第214図)

本ピットは158号堅穴とピット1032との間から検出された。規模は長軸約0.80m、短軸約0.70mの不整円形である、壁高は確認面から37cmを測る挿鉢状を呈する。埋土の黒褐色砂層には炭化粒が多く含まれている。

## 遺 物 (第209図-3)

第209図-3は縄文晩期中葉。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1040

## 遺 構 (第159図)

本ピットはM82グリッドに検出された。南東側の一部が攪乱を受けているが径約0.84mの不整円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から20cmと浅い。埋土上部からは礫が1点出土している。

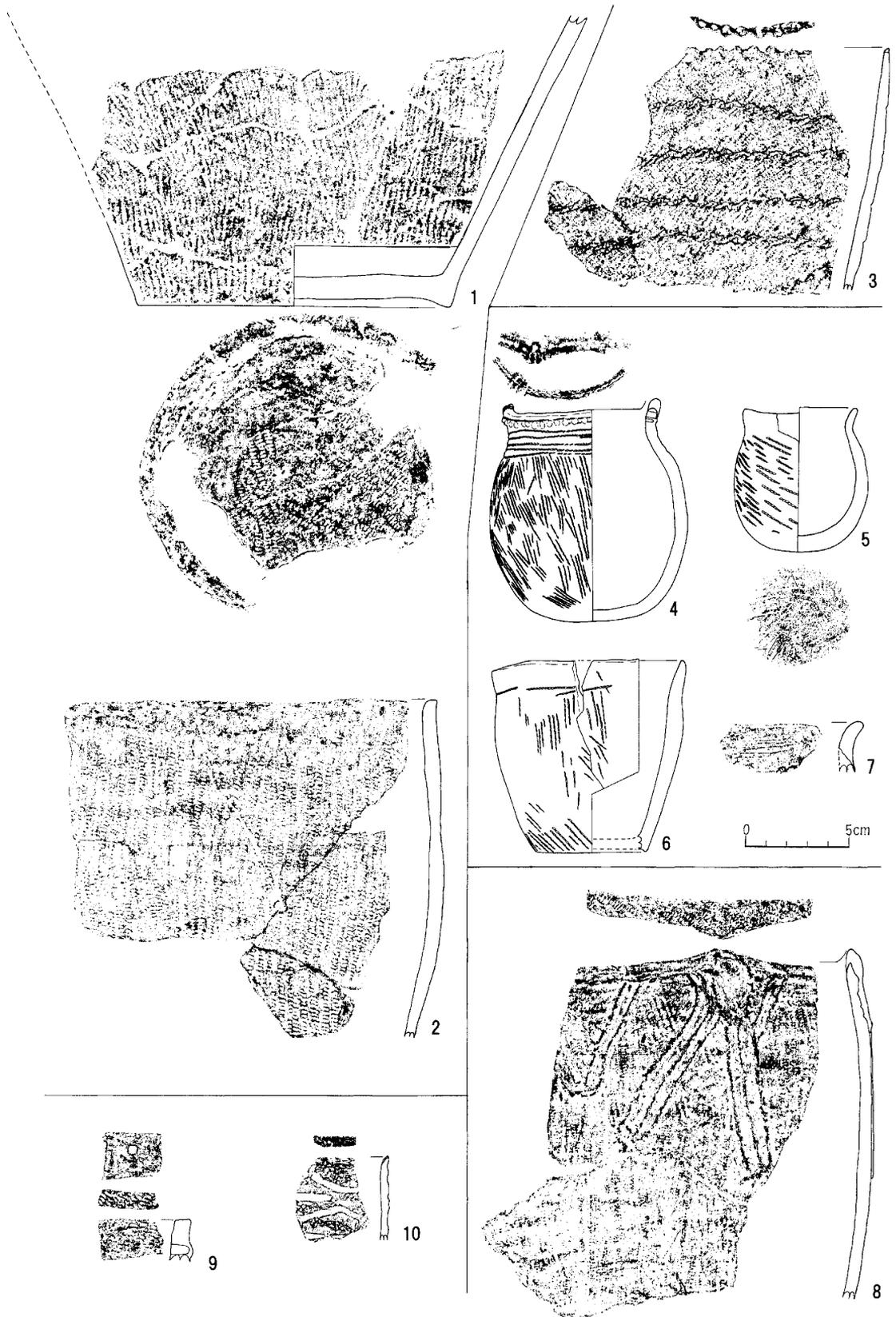
## 遺 物 (第211図-1)

第211図-1は埋土から出土した無茎石鏃。黒曜石製。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1041

## 遺 構 (第159図)

本ピットはM82グリッドに位置する。北東側の半分以上が攪乱を受けているため規模・形態は不明である。壁高は確認面から25cmを測る。 (佐々木 覚)



第209図 ピット1038埋土(1・2)、1039埋土(3)、1046a 遺体上(4)・埋土(5~7)、1050埋土(8)、1050a 埋土(9・10)出土土器

## ピ ッ ト 1042

## 遺 構 (第220図)

本ピットはI87グリッドに位置する。規模は径約1.20mの円形で壁高は確認面から12cmを測る浅い皿状を呈する。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1042a

## 遺 構 (第220図)

本ピットはピット1042の西側から検出された。規模は長軸約1.20m、短軸約1.10mのほぼ円形を呈する。壁高は確認面から22cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。ピットの上面には礫が7点検出され、埋土には炭化物が混入する。

床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められていることから土壙墓と考えられる。また床面からは径10cm、深さ7cmの柱穴が2本検出された。

時期は不明である。

## 遺 物 (第211図-2・3)

埋土から第211図-2はナイフ。3は削器。黒曜石製。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1043

## 遺 構 (第210図)

本ピットはD91, E91グリッドに位置する。規模は長軸約1.32m、短軸約1.10mの楕円形を呈する。壁高は確認面から50cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められていることから土壙墓と考えられる。

時期は不明である。

## 遺 物 (第211図-4～8)

埋土から第211図-4はナイフ。5・6は削器。7・8は搔器。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1043a

## 遺 構 (第210図)

本ピットはピット1043の北側に位置し、規模は長軸約1.24m、短軸は南側をピット1043に切られているため不明である。壁高は確認面から22cmを測り緩やかに立ち上がる。

## 遺 物 (第211図-9)

第211図-9は黒曜石製の搔器。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1044

### 遺 構 (第220図)

本ピットは161号堅穴の床面精査中に検出された。規模は長軸の北西側が攪乱を受けているため不明であるが短軸約1.70mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は161号堅穴床面から10cmとごく浅い。埋土中から黒曜石のフレークが2点出土したのみである。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1045

### 遺 構 (第210図)

本ピットはE91グリッドに位置する。規模は径約0.60mの円形を呈する。壁高は確認面から10cmを測る。

遺物は出土していない。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1045a

### 遺 構 (第210図)

本ピットはピット1045の東側に位置する。規模は長軸約1.10m、短軸約0.98mの不整円形を呈する。壁高は確認面から20cmを測り、斜めに立ち上がる。

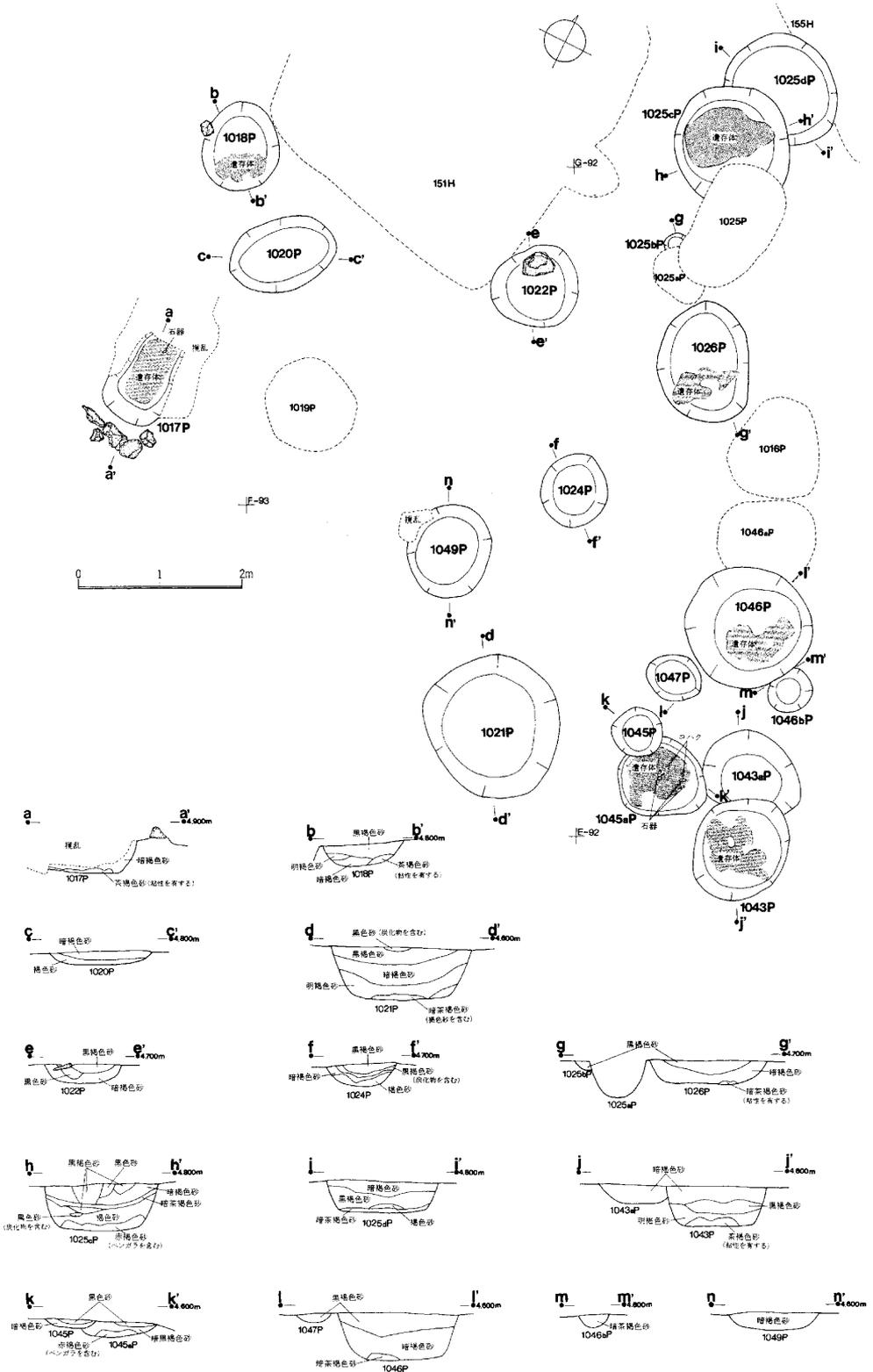
ピットの床面からはベンガラをかけた遺存体と思われる粘性をもった赤褐色砂が認められ、その中から第211図-10~12の琥珀製の装身具3点と第211図-13~17の石器が出土している。土壙墓と考えられる。

時期は不明である。

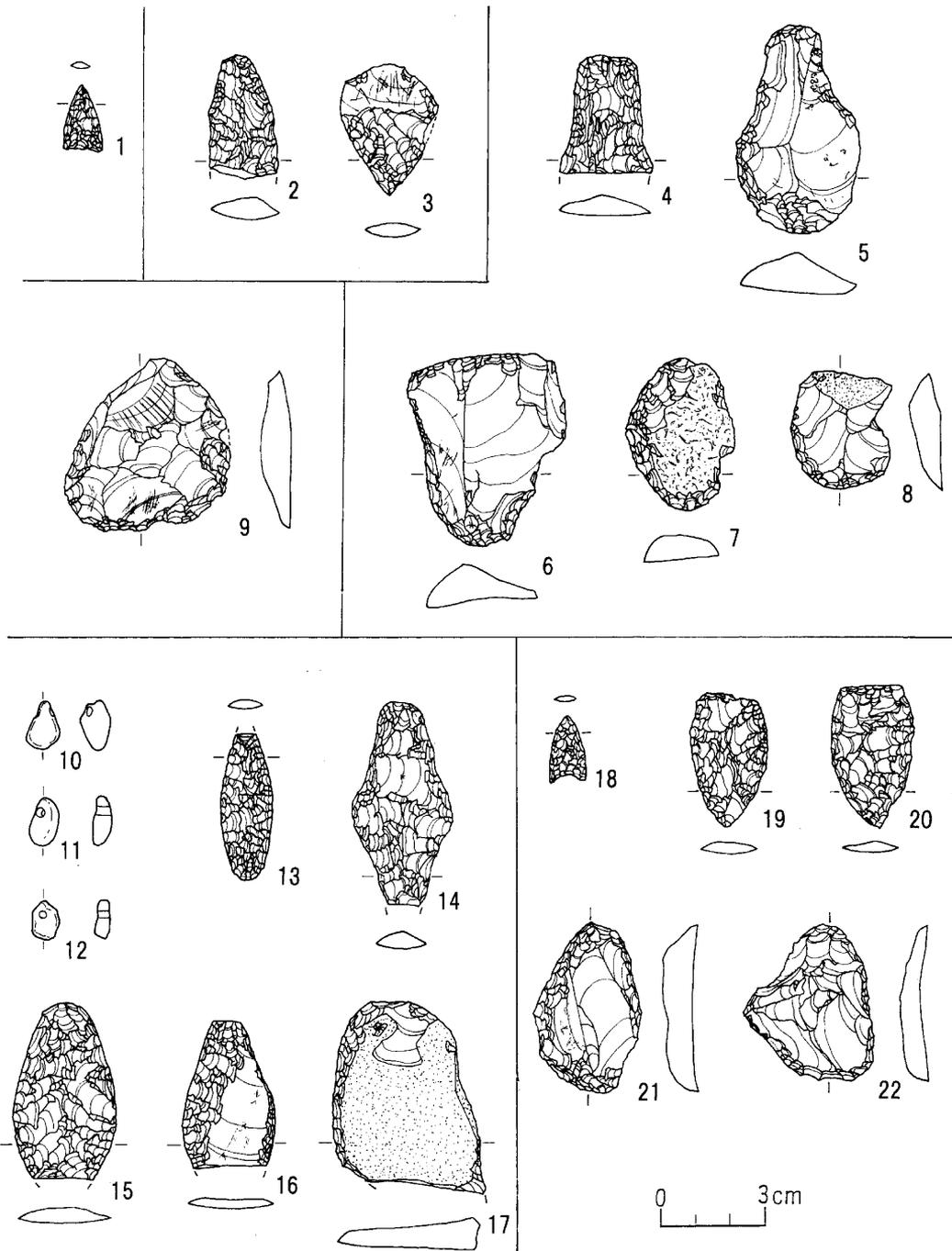
### 物 遺 (第211図-10~17)

第211図-10~12は床面出土の琥珀製の装身具3点。石器は13~17は床面直上の遺存体の中から出土。13は石槍。14・15は両面加工ナイフ。16・17は削器。すべて黒曜石製。

(佐々木 寛)



第210図 ピット1017、1018、1020、1021、1022、1024、1025b、1025c、1025d、1026、1043、1043a、1045、1045a、1046、1046b、1047、1049平面図



第211図 ピット1040床面(1)、1042a埋土(2・3)、1043埋土(4~8)、1043a埋土(9)、1045a床面(10~12)・床面直上(13~17)、1046埋土(18~22)出土石器・琥珀玉

## ピ ッ ト 1046

## 遺 構 (第210図)

本ピットはピット1043aの北西側約50cmにあり、規模は径約1.55mの円形を呈する。壁高は確認面から57cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットの床面から遺存体と思われる粘性をもった暗茶褐色砂が検出されていることから土壙墓と考えられる。

時期は不明である。

## 遺 物 (第211図-18~22)

埋土から第211図-18は無茎石鏃。19・20は両面加工ナイフ。21は搔器。22は削器。いずれも黒曜石製。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1046a

## 遺 構 (第212図, 図版49-1・2)

本ピットはピット1046の北側に検出された。規模は長軸約1.18m、短軸約0.95mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約36cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土土層にはベンガラを含む赤褐色砂が認められた。埋土の黒褐色砂から第209図-5の土器が出土している。床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められている。遺存体の上から第209図-4の土器が出土している。遺存体の上と遺存体の中から琥珀製の平玉と飾り玉、石製装身具、石器が出土している。琥珀は遺存体の上に散布されたような状態で検出されており、琥珀の種類は小型の平玉107点、中型の扁平丸玉35点大型の扁平丸玉3点、棗玉1点、やや大型の玉2点の合計148点である。

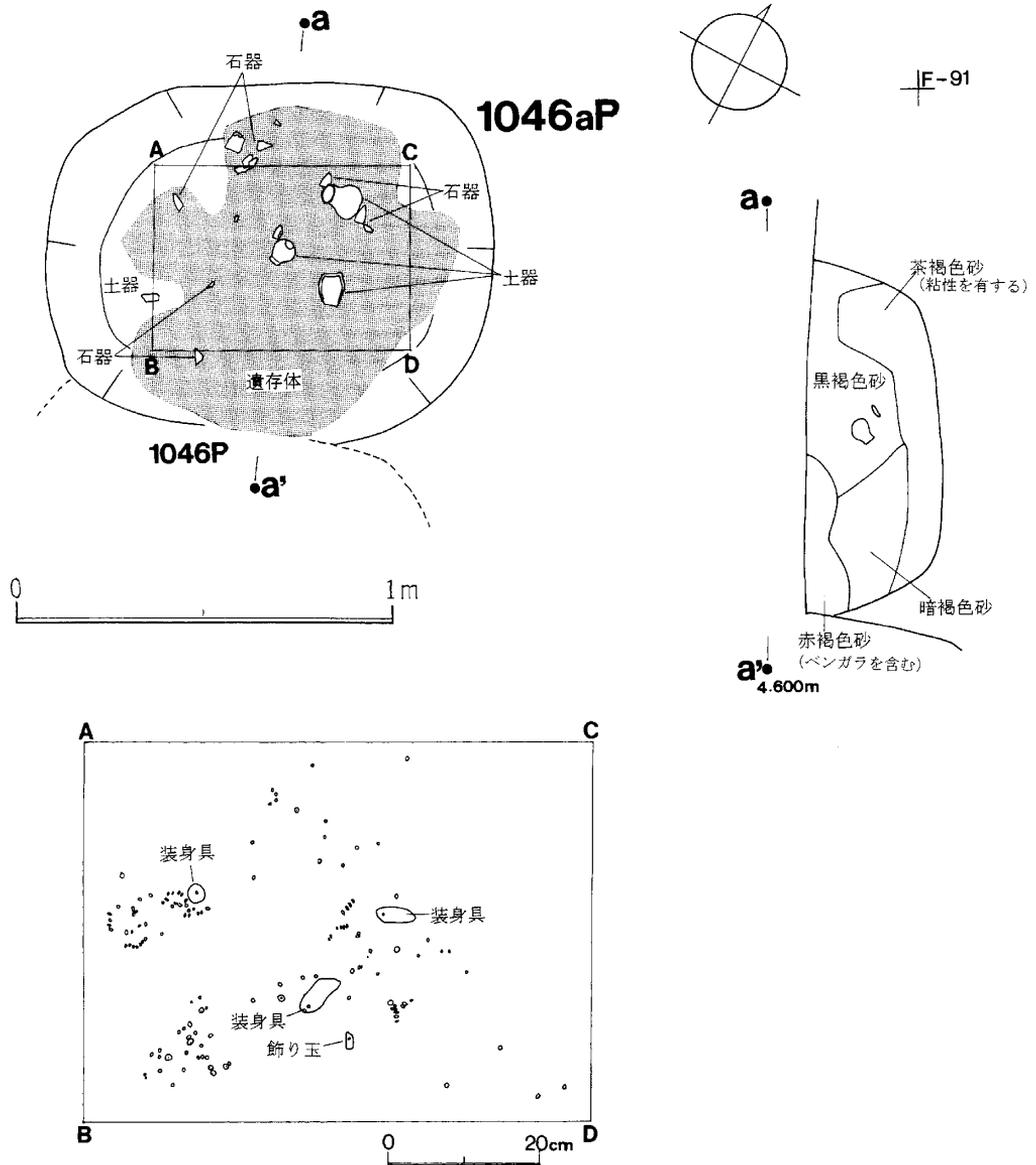
## 遺 物 (第209図-4~7, 第213図-1~13, 図版49-3~5, 図版50-1~5)

第209図-4の土器は遺存体の上から出土した口径7.5cm、胴部9.3cm、器高10.4cmの壺形土器。口唇部に1対の突起があり、口縁部には突瘤文が見られる。口唇部と突瘤文の間に1条、突瘤文の下に5条の縄線文が巡らされている。胴部は縦走する縄文の地文のみであり、底部は丸底である。5は埋土中から出土した小型壺形土器。口径5.6cm、胴部6.4cm、器高6.8cmで口縁部が外反する。地文の縄文のみで丸底である。6は口径9.3cm、器高9.2cm。胴部のところどころに縄文が見られるのみである。3点とも宇津内Ⅱa式にない文様、器形でありⅡa式より古手であろう。7は続縄文初頭。

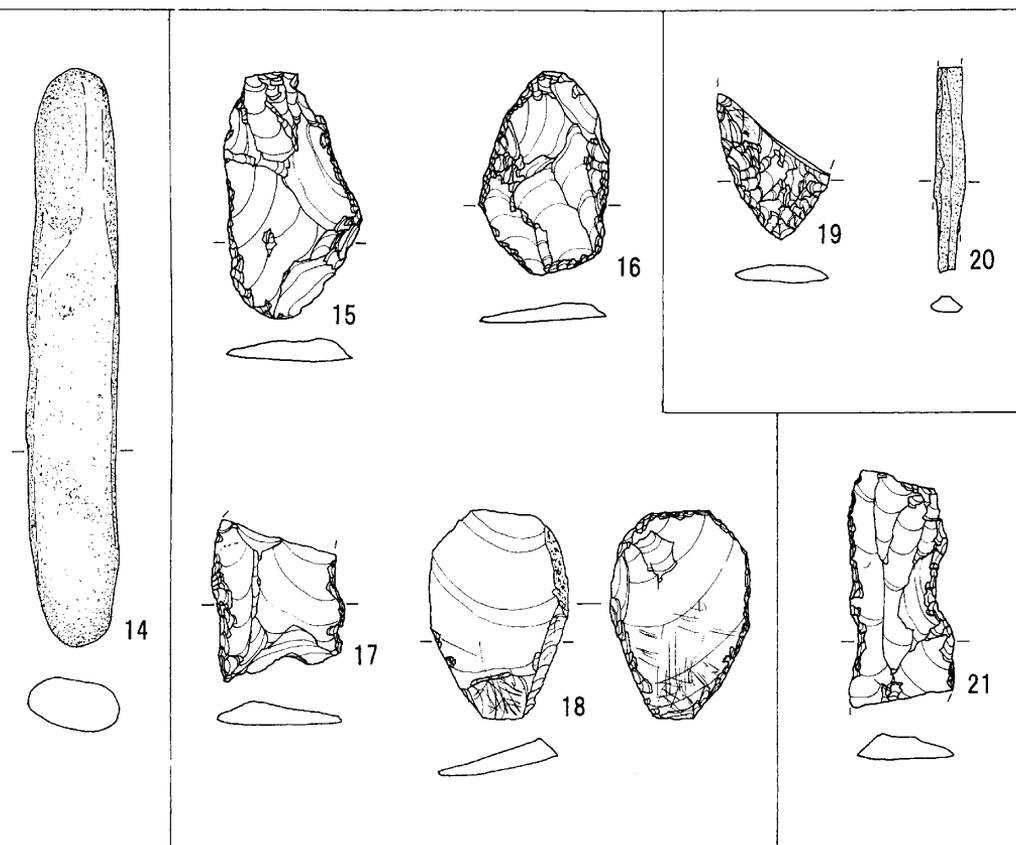
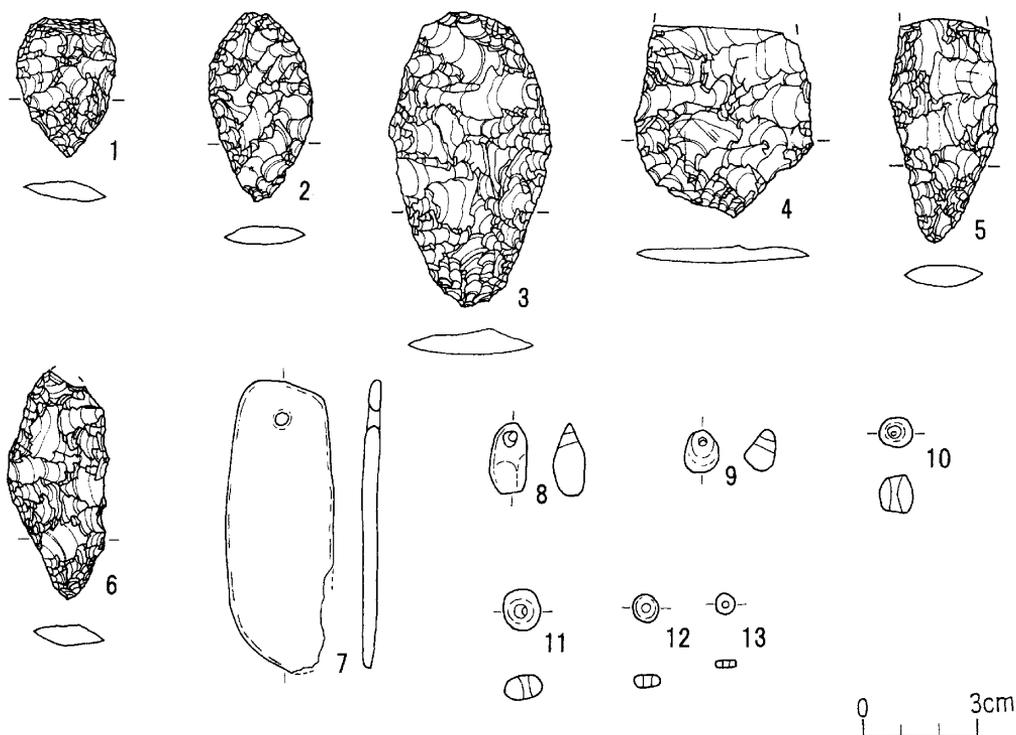
石器は第213図-1~7が遺体上から出土。1~6は両面加工ナイフ。7は硬質頁岩製の装身具。図示はしていないがこの他に2個出土している。8・9はやや大型の玉。10は棗玉。11~13は平玉。8~13は琥珀製。他は全て黒曜石製。

小 括

本ピットは楕円形を呈する土壙墓である。長軸は北東—南西方向にあるが、頭位は不明である。時期は出土の完形土器から続縄文初頭から宇津内Ⅱ a 式の古手と思われる。(佐々木 寛)



第212図 1046a 平面図・琥珀出土状況



第213図 ビット1046a 埋土(1~13)、1051埋土(14)、1053埋土(15~18)、1055埋土(19・20)、1058埋土(21)出土石器・琥珀玉・石製品

## ピ ッ ト 1046b

### 遺 構 (第210図)

本ピットはピット1046の東側にあり、規模は径約0.55mの円形を呈する。壁高は確認面から15cmを測る。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1047

### 遺 構 (第210図)

本ピットはピット1046の南側にあり、規模は長軸約0.70m、短軸約0.56mの楕円形を呈する。壁高は確認面から10cmを測る。

遺物は出土していない。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1048

### 遺 構 (第159図)

本ピットはQ80グリッドに検出された。規模は長軸約0.92m、短軸約0.84mのほぼ円形を呈する。壁高は確認面から40cmを測る。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1049

### 遺 構 (第210図)

本ピットはE92グリッドに検出された。規模は長軸約1.12m、短軸約1.00mのほぼ円形を呈する。壁高は確認面から22cmを測る。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1050

### 遺 構 (第214図)

本ピットはH91グリッドにあり、規模は径約1.04mの円形を呈する。壁高は確認面から22cmを測る。

### 遺 物 (第209図-8)

第209図-8は埋土出土の宇津内Ⅱb式。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト1050a

**遺 構** (第214図)

本ピットはピット1050の西側にあり、北側が攪乱を受けているが、規模は長軸約2.30m、短軸約1.80mの楕円形を呈するものと思われる。床面から径18cm、深さ12~14cmの柱穴が2本検出されている。

**遺 物** (第209図-9・10)

埋土から第209図-9は字津内Ⅱa式。10は縄文晩期。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1051

**遺 構** (第130図)

本ピットは157b号堅穴の北壁上に検出された。規模・形態は不明であるが、壁高は確認面から53cmを測る。

**遺 物** (第213図-14)

第213図-14は泥岩製のたたき石。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1052・1052a

**遺 構** (第214図)

ピット1052は157a号堅穴の南西壁上に検出された。規模・形態は不明である。壁高は確認面から23cmを測る。

ピット1052aはピット1052の東側に位置しているが、規模・形態は不明である。壁高は確認面から21cmを測る。

遺物は出土していない。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1053

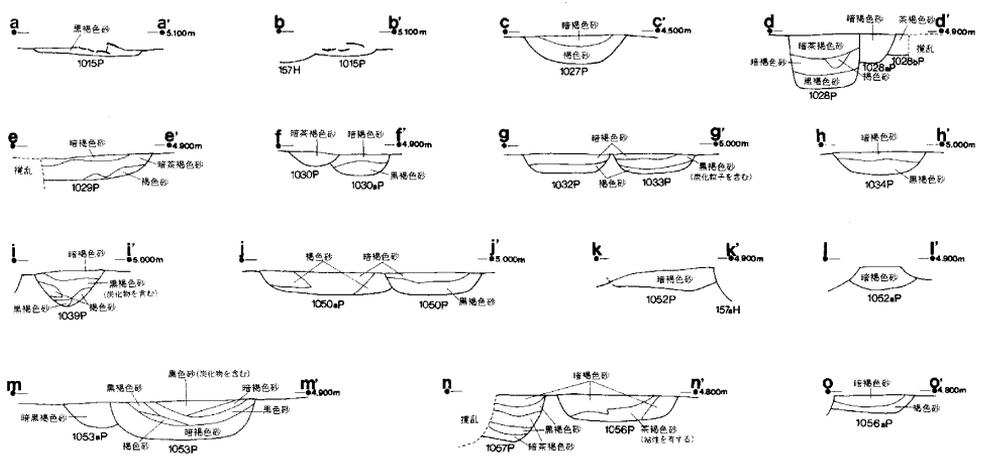
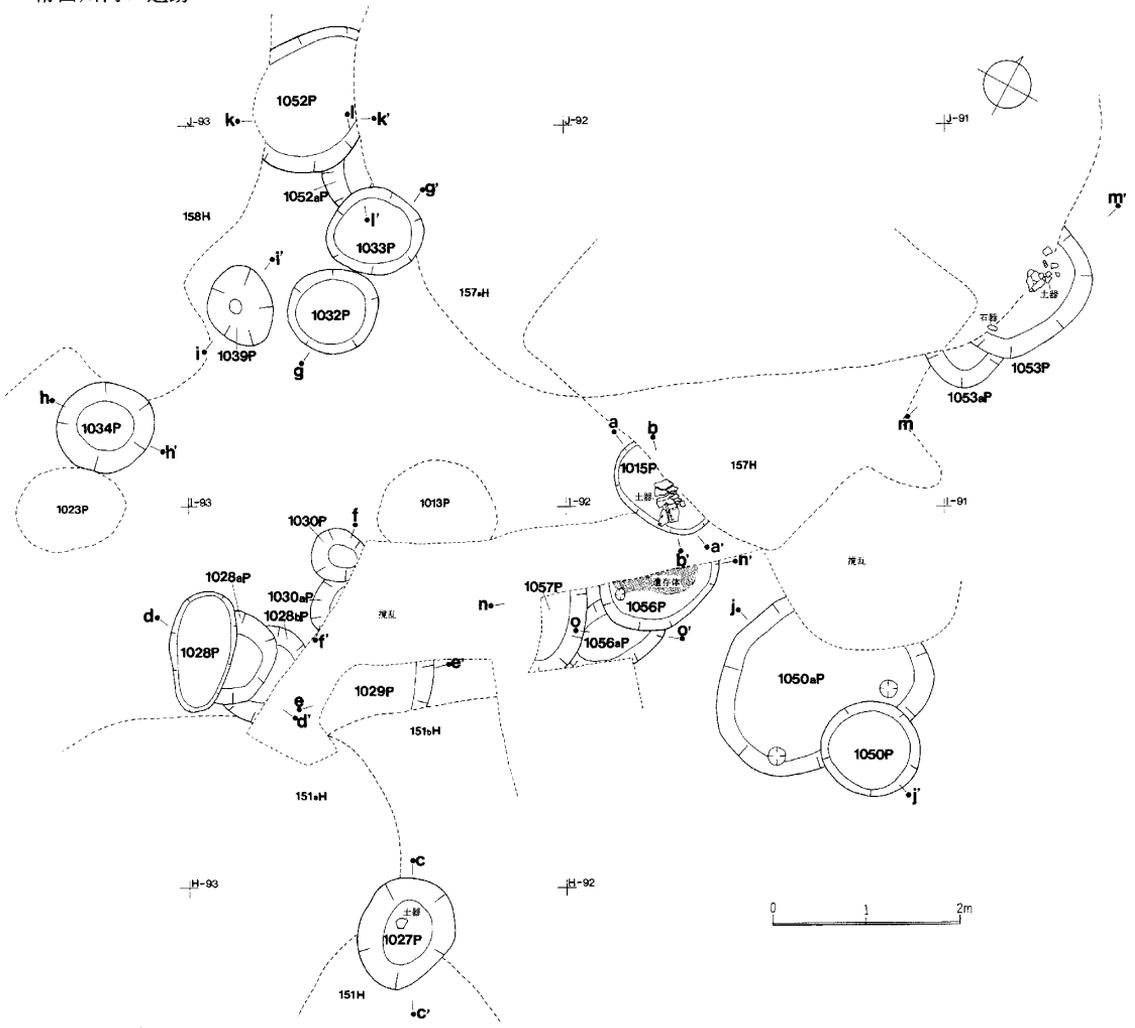
**遺 構** (第214図)

本ピットは157a号堅穴の東壁上に検出された。規模は長軸約1.60m、短軸は不明であるが楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から40cmを測る。

**遺 物** (第215図-1~4, 第213図-15~18, 図版50-6~9)

埋土から第215図-1・2は字津内Ⅱa式。3・4は続縄文初頭。3は縄線文と縄端圧痕文を施す。4は縄端圧痕文を2段に施す。

常呂川河口遺跡



第214図 ピット1015、1027、1028、1028a、1028b、1029、1030、1030a、1032、1033、1034、1039、1050、1050a、1052、1052a、1053、1053a、1056、1056a、1057平面図

石器は第213図-15~18は黒曜石製の削器。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1053a

### 遺 構 (第214図)

本ピットは1053の南側に位置しているが、規模・形態は不明である。壁高は確認面から26cmを測る。

遺物は出土していない。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1054

### 遺 構 (第130図)

本ピットはK92グリッドに位置し、規模は径約1.12mの不整円形を呈する。壁高は確認面から17cmを測る。

遺物は出土していない。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1055

### 遺 構 (第130図)

本ピットは157a号堅穴の西側に検出された。規模は長軸約0.64m、短軸0.50mの楕円形を呈する。壁高は確認面から34cmを測る。埋土上層の黒褐色砂には炭化物が含まれており、礫が2点出土している。床面には径14cm、深さ13cmの柱穴が1本検出されている。

### 遺 物 (第213図-19・20)

第213図-19は黒曜石製の両面加工ナイフの先端部。20は黒曜石製の棒状原石。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1056

### 遺 構 (第214図)

本ピットはH91グリッドに位置し、規模・形態は北側半分が攪乱を受けているため不明である。壁高は確認面から28cmを測る。ピットの床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められている。南側の床面には径20cm、深さ8cmの柱穴が1本検出された。

遺物は出土していない。土壙墓と考えられるが、時期は不明である。

(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1056a

### 遺 構 (第214図)

本ピットはピット1056の南側に検出された。規模・形態は不明であるが、壁高は確認面から17cmを測る。

### 遺 物 (第215図-5)

第215図-5は統縄文初頭。無文の口縁部に突瘤文が施される。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1057

### 遺 構 (第214図)

本ピットはピット1056aの南西側に検出された。攪乱を受けているため規模・形態は不明である。壁高は確認面から46cmを測る。

### 遺 物 (第215図-6)

第215図-6は統縄文初頭。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 1058

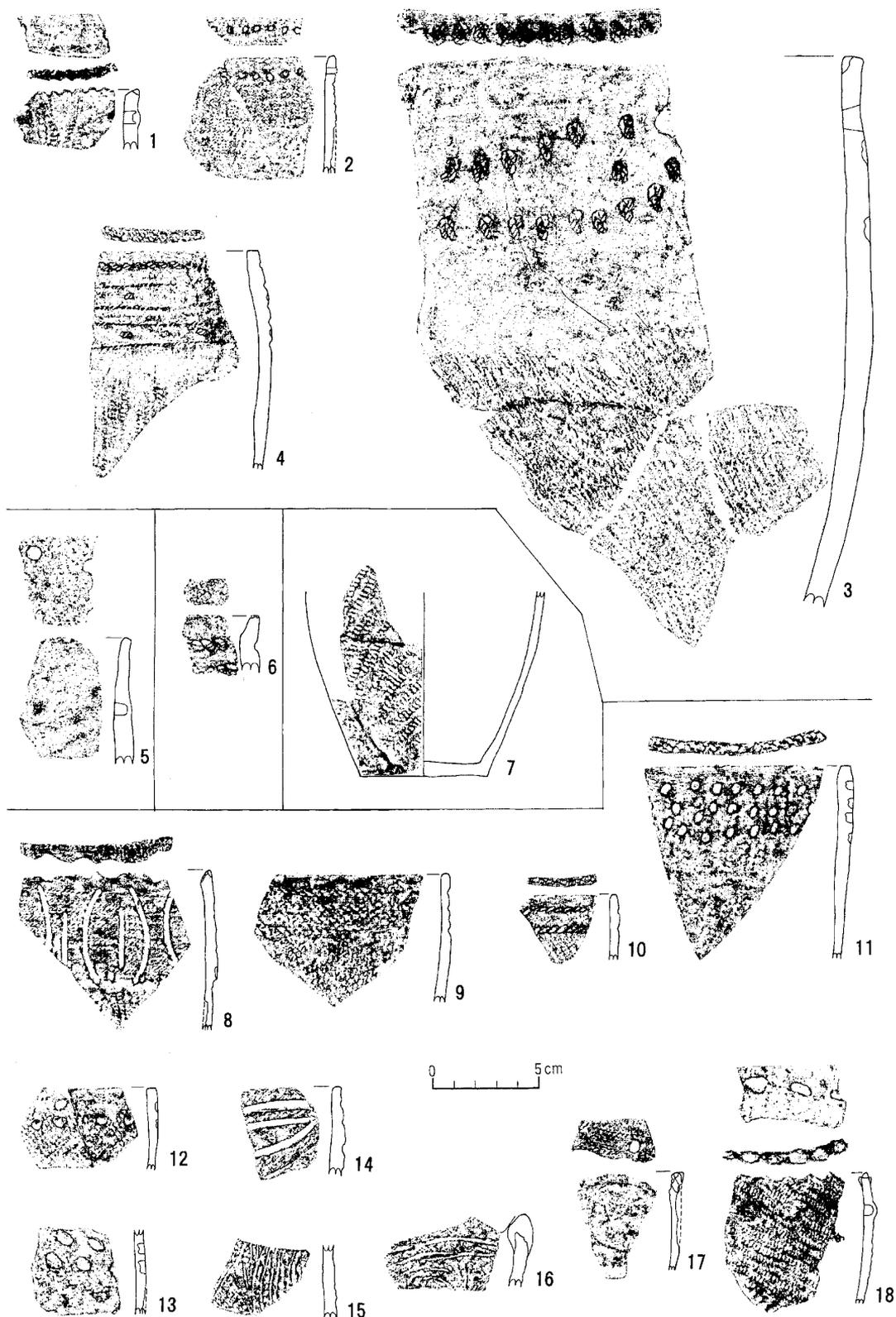
### 遺 構 (第217図)

本ピットはH' 91・92グリッドに検出されたピットである。西側に攪乱を受けているため長軸は不明であるが、短軸約1.40mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から38cmを測る。

### 遺 物 (第215図-7, 第213図-21, 図版50-10)

第215図-7は統縄文の底部。

石器は第213図-21は黒曜石製の削器。 (佐々木 覚)



第215図 ピット1053埋土(1~4)、1056a埋土(5)、1057埋土(6)、1058埋土(7)、1062埋土(8~18)、出土土器

# ピット 1062

## 遺構 (第217図)

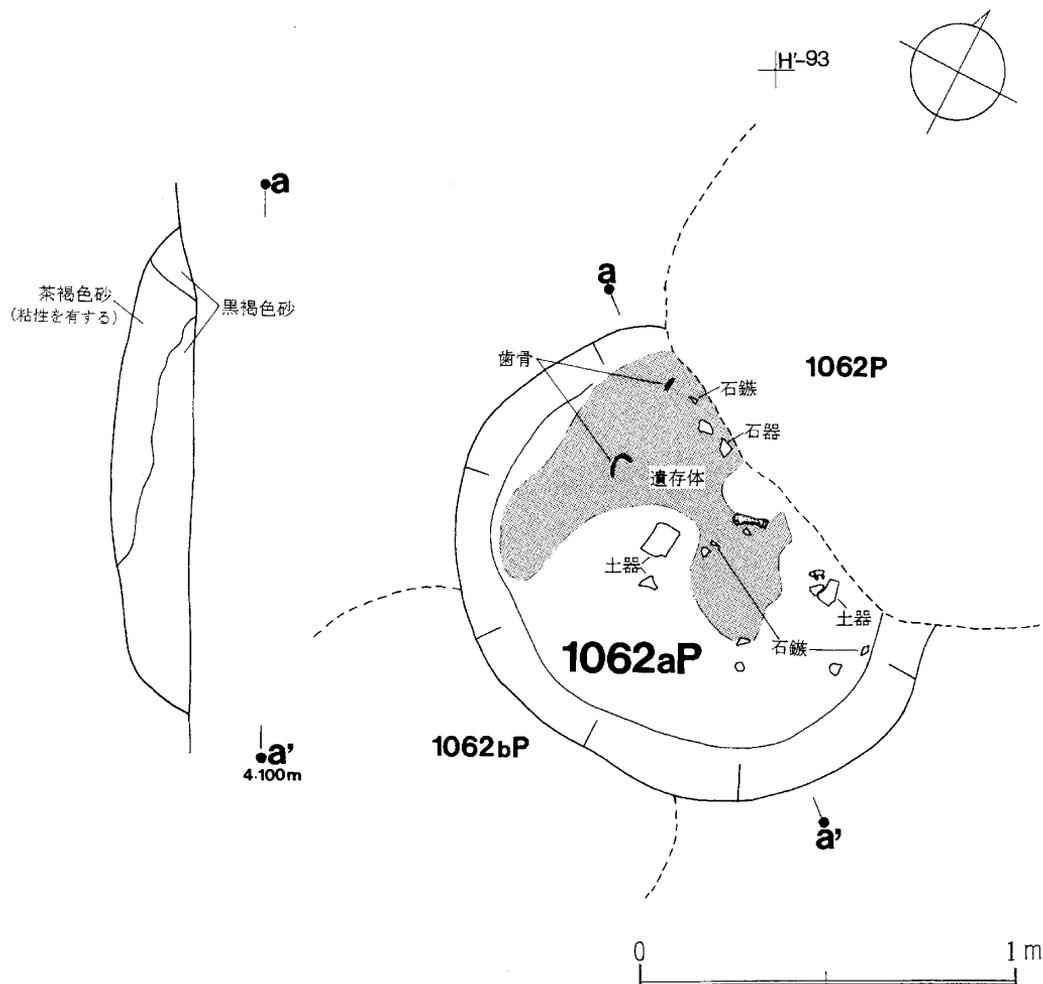
本ピットはI'92グリッドに位置する。規模は長軸約1.80m、短軸約1.66mの円形を呈し、壁高は確認面から54cmを測る。ピット上面には礫が認められる。

## 遺物 (第215図-8~18, 第218図-1~5, 図版50-11~15)

埋土から第215図-8は縄文晩期後葉幣舞式。9~16は縄文晩期中葉。9・10は縄線文。11~13は刺突文。14~16は沈線文を施す。17は縄文晩期。18は内側に斜めの方向から施された突瘤文をもつ縄文晩期前葉。

石器は第218図-1・2は有茎石鏃。3・4は削器。5は搔器。すべて黒曜石製。

(佐々木 寛)



第216図 ピット1062a 平面図

## ピ ッ ト 1062a

### 遺 構 (第216図)

本ピットはピット1062の南側に検出された。規模は長軸約1.34m、短軸は不明であるが楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から20cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められた。遺存体の西側と北西側の2箇所から歯骨が検出されていることから二体合葬と考えられる。遺存体の中から石鏃と搔器が出土している。

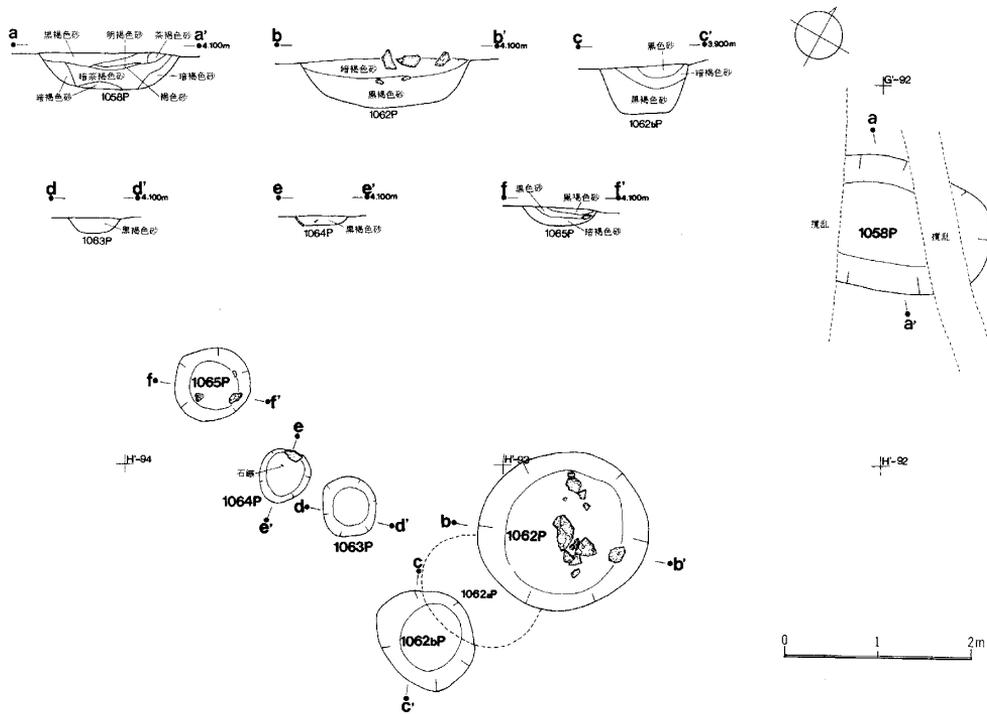
### 遺 物 (第219図-1, 第218図-6~12, 図版50-16~22)

第219図-1は埋土出土の続縄文初頭。口縁部に突瘤文と刺突文が施されている。

石器は第218図-6は遺存体の中から出土した有茎石鏃。7は搔器。8~12は埋土出土。8~10は無茎石鏃。11は有茎石鏃。12は削器。すべて黒曜石製。

### 小 括

本ピットは楕円形を呈する土墳墓である。長軸は東-西方向であり、頭位は西方位である。時期は不明であるが二体合葬と考えられる。(佐々木 寛)



第217図 ピット1058、1062、1062b、1063、1064、1065平面図

## ピ ッ ト 1062b

### 遺 構 (第217図)

本ピットはピット1062aの南側に検出された。規模は長軸約1.10m、短軸約1.00mの不整形円形を呈し、壁高は確認面から50cmを測る。埋土中から骨片が1点検出されている。

### 遺 物 (第219図-2~5)

第219図-2は字津内Ⅱa式。3は縄文晩期中葉。4は無文。統縄文初頭にみられる小型壺型土器と思われる。5は2本単位の沈線文を矢羽根状に施した縄文後期。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1063

### 遺 構 (第217図)

本ピットはI'93グリッドに位置する。規模は径約0.60mの不整形円形を呈し、壁高は確認面から16cmを測る。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1064

### 遺 構 (第217図)

本ピットはピット1063の西側約20cmに検出された。規模は長軸約0.60m、短軸約0.50mの楕円形を呈し、壁高は確認面から10cmを測る。床面から第218図-13の石鏃が出土している。

### 遺 物 (第219図-6, 第218図-13)

第219図-6は統縄文土器の胴部片。

石器は第218図-13は床面から出土した黒曜石製の有茎石鏃。(佐々木 寛)

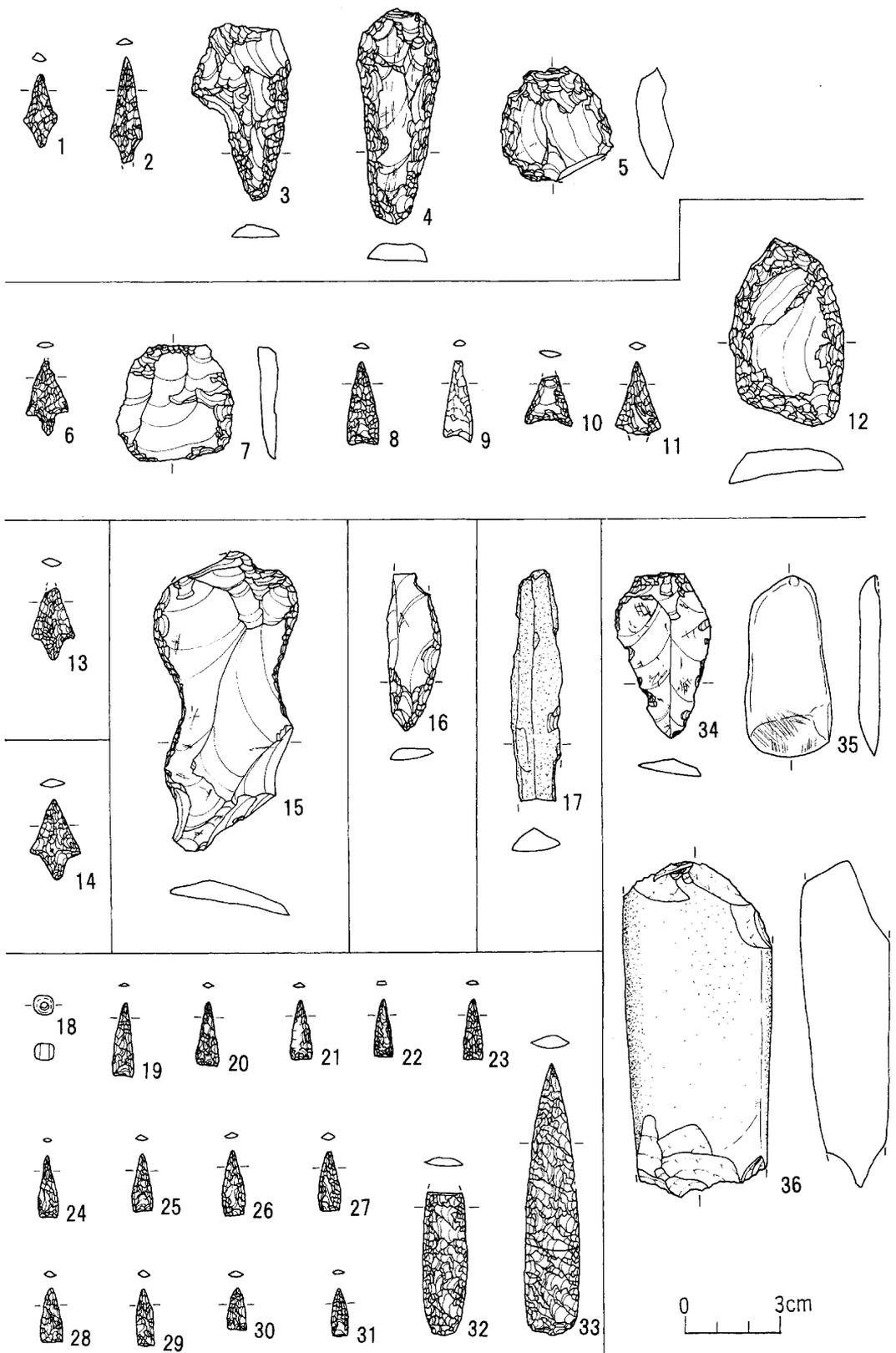
## ピ ッ ト 1065

### 遺 構 (第217図)

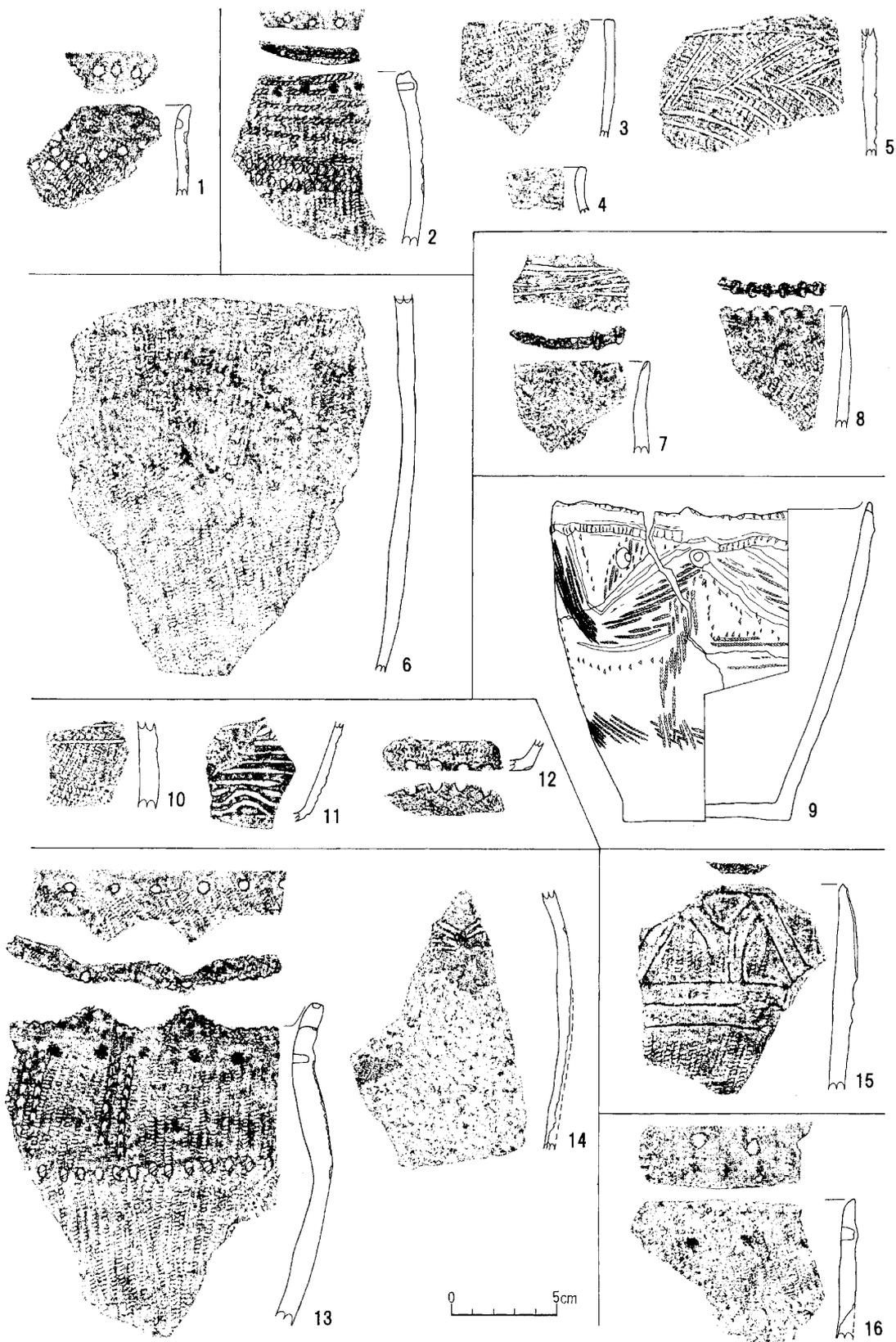
本ピットはピット1064の西側に約50cm離れて検出された。規模は径約0.80mの円形を呈し、壁高は確認面から20cmを測る。

### 遺 物 (第218図-14)

第218図-14は埋土出土の有茎石鏃で黒曜石製。(佐々木 寛)



第218図 ピット1062埋土(1~5)、1062a床面(6・7)・埋土(8~12)、1064床面(13)、1065埋土(14)、1066埋土(15)、1070上部(16)、1073埋土(17)、1074遺体上(18)・埋土(19~33)、1075埋土(34~36)出土石器・ガラス玉



第219図 ビット1062a 埋土(1)、1062b 埋土(2~5)、1064埋土(6)、1066埋土(7・8)、1067埋土(9)、1069埋土(10~12)、1070埋土上部(13・14)、1071埋土(15)、1072埋土(16)出土土器

## ピ ッ ト 1066

## 遺 構 (第159図)

本ピットは161b号堅穴の東壁に検出された。規模・形態ともに不明であるが、壁高は確認面から30cmを測る。

## 遺 物 (第219図-7・8, 第218図-15)

第219図-7は内削ぎ状の口唇部に刻みをもち、内側に複数の細い沈線文が施される。8も内削ぎ状の口唇部であり、縄による刻みが施される。この2点は続縄文初頭であろう。

石器は第218図-15は黒曜石製の削器。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1067

## 遺 構 (第94図)

本ピットはM'96グリッドに位置する。規模は長軸約0.47m、短軸約0.36mの楕円形を呈し、壁高は確認面から15cmを測る。埋土中から第219図-9の土器が出土している。

## 遺 物 (第219図-9, 図版51-1)

第219図-9は埋土中から出土した口径15.3cm、器高14.8cmの後北C<sub>2</sub>・D式である。口唇部に刻みを入れ、口縁部直下に擬縄隆帯が横走する。縦走する縞縄文を割付け微隆起体を三角形に施し、列点文が加わる。胴下半部には縞縄文が全周する。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1068

## 遺 構 (第94図)

本ピットはピット1067の西側に接して検出された。規模は長軸約1.54m、短軸約0.90mの楕円形を呈する。壁高は確認面から15cmを測る。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1069

## 遺 構 (第94図)

本ピットはピット1068の南側約25cmに位置する。規模は径約1.00mの不整円形を呈し、壁高は確認面から10cmを測る。浅い皿状である。

## 遺 物 (第219図-10~12)

第219図-10は宇津内式又は続縄文初頭。11・12は縄文晚期中葉。埋土出土。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 1070

### 遺 構 (第220図)

本ピットはH86グリッドに位置する。規模は径1.20mの不整円形を呈する。壁は丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から30cmを測る。

### 遺 物 (第219図-13・14, 第218図-16)

第219図-13は内側からの突瘤文をもつ。半載状施文具による刺突文が縦列し、やや張り出した胴部に縄端圧痕文が施される。統縄文字津内Ⅱ a式よりやや古手に属するのであろう。14は表面の剥落が著しいが、上部に2本単位の沈線文が山形状に施され、頂点部に円形刺突文が加わる。縄文晩期中葉であらう。

石器は第218図-16は削器。黒曜石製。 (武田 修)

## ピ ッ ト 1071

### 遺 構 (第220図)

本ピットはH86, I86グリッドにまたがって位置する。規模は東側が攪乱を受けているものの径1.30mの不整円形を呈すると思われる。高さは確認面から28cmを測る。

### 遺 物 (第219図-15)

第219図-15は統縄文字津内Ⅱ b式。 (武田 修)

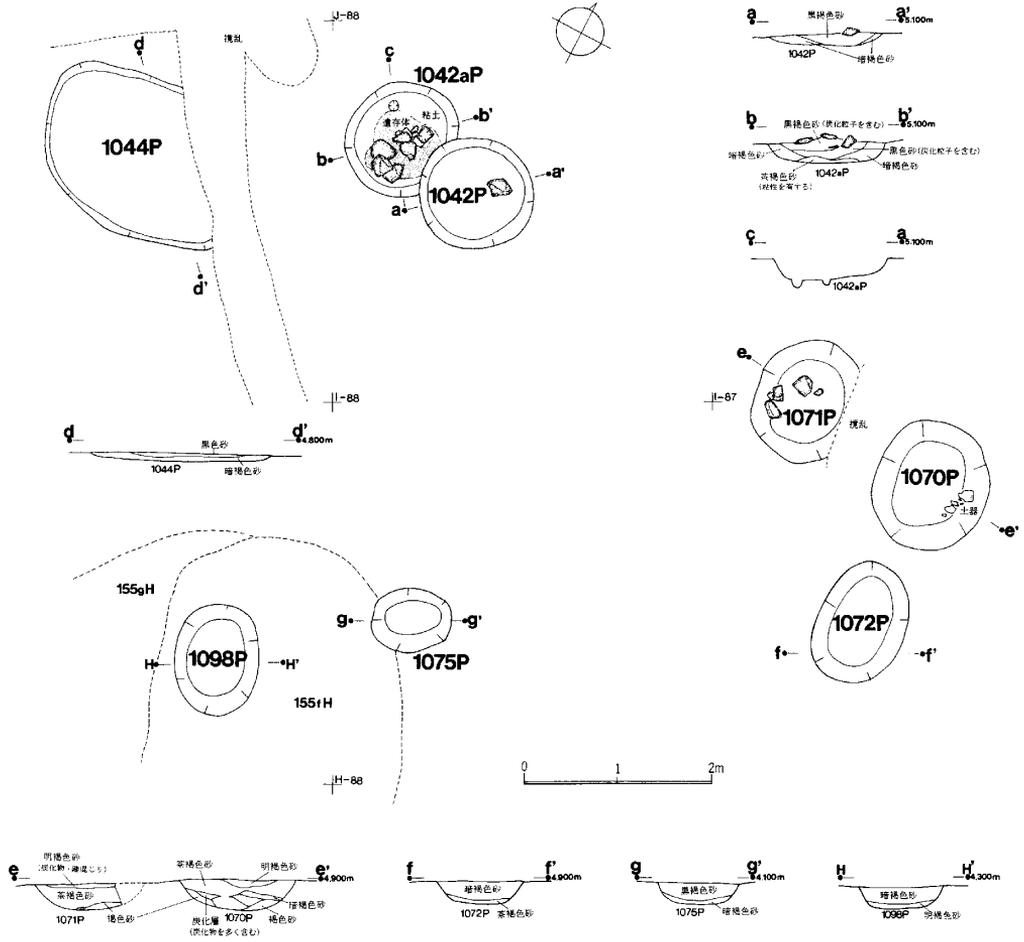
## ピ ッ ト 1072

### 遺 構 (第220図)

本ピットはH86グリッドに位置する。規模は長軸1.30m、短軸0.90mの楕円形を呈する。高さは確認面から22cmを測る。

### 遺 物 (第219図-16)

第219図-16は内側からの突瘤文が施された統縄文字津内Ⅱ a式。 (武田 修)



第220図 ピット1042、1042a、1044、1070、1071、1072、1075、1098平面図

## ピ ッ ト 1073

### 遺 構 (第188図)

本ピットはF87グリッドに位置する。規模は直径約0.72mの円形を呈する。壁は床面から緩く立ち上がり、高さは確認面から約32cmを測る。

上部に黒曜石のフレーク・チップ集積が径60cmの範囲に集中しているが、ピットとの関連は不明である。

### 遺 物 (第218図-17)

第218図-17は埋土出土の棒状原石。黒曜石製。図示していないが他に頁岩製の円形ナイフ未製品が出土している。

(武田 修)

## ピ ッ ト 1074

### 遺 構 (第186図)

本ピットはE87グリッドに位置する。上部に約10～20cmほどの角礫4点がまとまって配置される。規模は長軸約1.25m、短軸約0.80mの楕円形を呈し、壁高は確認面から約30cmを測る。

床面の遺存体は暗茶褐色土を呈し、粘性を有する。東壁に接して注口部を内側に向けた注口土器が正立で副葬されている。近接して検出された白色粘土は東壁にもぐり込んだ状態で出土した。

西壁側の遺存体上から出土した無茎石鏃、石槍も本ピットに伴うと思われる。

### 遺 物 (第221図-1, 第218図-18～33, 図版51-2～17)

第221図-1は口径15cm、器高12.5cmの中型注口土器。注口下部と反対側を隆起帯と縞縄文による円形文を施し、その間を横位と弧線状の隆起帯と縞縄文をもち、相対して三角形の列点文がみられる。続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。

石器は第218図-18は遺存体上部から出土した淡青色のガラス玉。19～33は埋土出土。19～31は細い鏃身の無茎石鏃。32・33は丁寧に調整された石槍。2点とも切断され、33は20cmほど離れて出土した2点が接合した。全て黒曜石製。

### 小 括

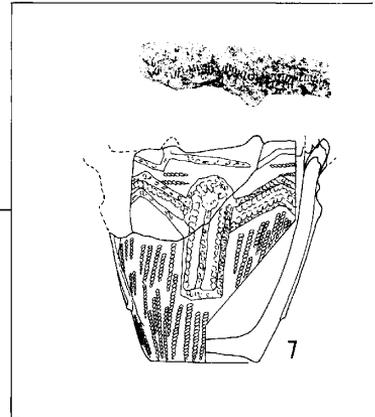
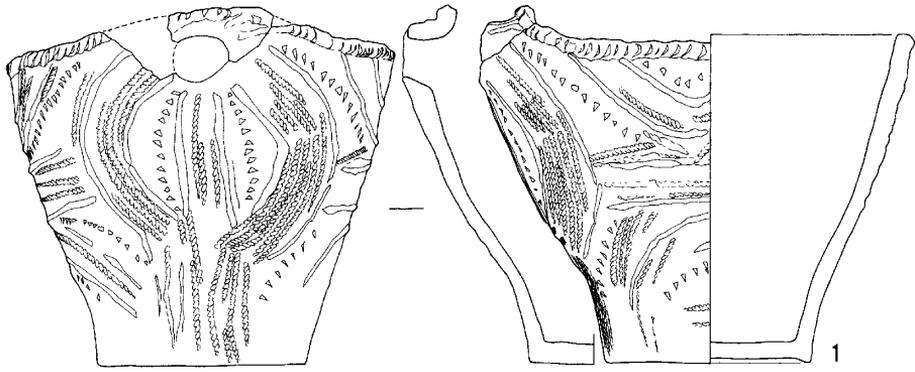
本ピットは続縄文後北C<sub>2</sub>・D式の土壌墓である。東頭位の屈葬と思われる。淡青色のガラス玉とこの時期には珍しく石鏃、石槍を副葬する。 (武田 修)

## ピ ッ ト 1074a

### 遺 構 (第186図)

本ピットはピット1074に大半を切られている。規模は長軸約1.00mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約20cmである。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)



第221図 ビット1074床面(1)、1075埋土(2~5)、1076埋土(6)、1079埋土(7)、1081a埋土(8)出土土器

## ピット 1075

### 遺構 (第220図)

本ピットはH88グリッドに位置する。規模は長軸0.84m、短軸0.68mの楕円形を呈する。高さは確認面から22cmを測る。

### 遺物 (第221図-2~5, 第218図-34~36)

第221図-2~5は埋土出土。2は山形突起をもつ続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。3は同宇津内Ⅱb式。4・5は同Ⅱa式。

石器は第218図-34~36は埋土出土。34は先鋭化した剥片の側縁部に刃こぼれ状の微細な使用痕がみられる。35は扁平な少円礫の端部に刃部を作出した磨製石斧。泥岩製。36は上・下端部とも破損するもので擦石と思われる。砂岩製。(武田 修)

## ピット 1076

### 遺構 (第108図)

本ピットは155a号堅穴の床面を切って構築されている。規模は直径約0.70mの円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは155a号堅穴の床面から約20cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺物 (第221図-6, 第223図-1~4)

第221図-6は埋土から出土した続縄文後北C<sub>2</sub>・D式の大型土器。

石器は第223図-1~4は埋土出土の削器。1・2は主要剥離面側にも粗い加工痕がみられる。全て黒曜石製。(武田 修)

## ピット 1077

### 遺構 (第186図)

本ピットはE86グリッドに位置する。規模は長軸0.68m、短軸0.42mの楕円形を呈する。壁は丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から22cmを測る。(武田 修)

## ピット 1078

### 遺構 (第186図)

本ピットはE86グリッドに位置する。規模は直径0.40mの小円形を呈し、壁は「V」字状に立ち上がり高さは確認面から32cmを測る。(武田 修)

## ピ ッ ト 1079

## 遺 構 (第186図)

本ピットはE87グリッドに位置する。149号堅穴に南壁を切られるものの規模は直径0.80mの円形を呈する。高さは確認面から32cmを測る。

## 遺 物 (第221図-7, 第223図-5, 図版51-18)

第221図-7は口径8cm、器高9cmの小型土器。小突起下部の「□」状の擬縄隆帯を横位の山形擬縄隆帯で連結する。統縄文字津内Ⅱb式。

石器は第223図-5は埋土出土の円形搔器。黒曜石製。 (武田 修)

## ピ ッ ト 1080

## 遺 構 (第186図)

本ピットはE87グリッドに位置する。規模は直径約0.75mの円形を呈するが、浅い掘り込みのため南壁は検出できなかった。壁高は確認面から約14cmである。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 1081

## 遺 構 (第186図)

本ピットはE87グリッドに位置する。規模は直径0.60mの円形を呈する。壁高は確認面から約30cmを測る。

詳細な時期は不明である。

## ピ ッ ト 1081a

## 遺 構 (第186図)

本ピットはピット1081に西壁を切られるものの長軸0.60m、短軸0.40mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から20cmを測る。

## 遺 物 (第221図-8)

第221図-8は統縄文字津内Ⅱa式。 (武田 修)

## ピ ッ ト 1082

### 遺 構 (第186図)

本ピットはE87グリッドに位置し、半分は149号堅穴の北壁を切り込んでいる。規模は直径約0.70mの小円形を呈する。壁は丸みをもって立ち上がり、壁高は確認面から約24cmである。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 1083

### 遺 構 (第186図)

本ピットはE87グリッドに位置する。規模は南西壁がわずかに149号堅穴に切られるが直径約1.32mの円形を呈すると思われる。掘り込みは浅いため東壁は検出できなかった。壁は丸みをもって立ち上がり、壁高は確認面から約40cmである。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 1084

### 遺 構 (第186図)

本ピットはD86グリッドに位置する。規模は長軸1.10m、短軸0.80mの楕円形を呈し、壁は皿状に浅く立ち上がり壁高は確認面から17cmを測る。

### 遺 物 (第222図-1・2, 第223図-6)

第222図-1は床面出土で内側から円形刺突文が施される。縄文晩期前葉。2は埋土出土の浅鉢。縄文晩期中葉と思われる。

石器は第223図-6は先鋭化した縁辺部に比較的急斜な刃部をもつ削器。黒曜石製。

(武田 修)

## ピ ッ ト 1085

### 遺 構 (第186図)

本ピットはD86グリッドに位置する。規模は長軸約0.90m、短軸約0.70mの楕円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約20cmである。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピット 1086

## 遺構 (第17図)

本ピットは C85グリッドに位置する。規模は径約0.70mの円形を呈する。壁高は確認面から北壁で40cm、南壁で20cmを測る。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピット 1087・1087a

## 遺構 (第188図)

ピット1087は F87グリッドに位置する。規模は直径約0.54mの円形を呈する。床面は小さく「V」字状の断面であり、壁高は確認面から約40cmを測る。

ピット1087aはピット1087に北側端部を削られる。長軸は不明であるが、短軸約0.58mの楕円形を呈する。掘り込みは浅く約10cmを測る。

両ピットとも詳細な時期は不明である。

## 遺物 (第222図-3, 第223図-7)

ピット1087aから第222図-3は統縄文土器の胴部片。

石器は第223図-7は埋土出土の片刃磨製石斧の刃部。緑色泥岩製。

(武田 修)

## ピット 1088

## 遺構 (第186図)

本ピットは F87グリッドに位置する。規模は長軸約1.00m、短軸約0.64mの楕円形を呈する。掘り込みは浅く確認面から約18cmを測る。

## 遺物 (第222図-4)

第222図-4は埋土出土。胴部に浅い3条の沈線文が施され、円形の列点文が加えられる。縄文晩期中葉であろう。 (武田 修)

## ピ ッ ト 1089

### 遺 構 (第186図)

本ピットはE87グリッドに位置する。規模は長軸約1.18m、短軸約0.95mの不整形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。

### 遺 物 (第222図-5)

第222図-5は埋土出土。口径6.5cmの壺形土器。無文の頸部に3条の縄線文をもち、胴部は燃糸文が施される。続縄文初頭興津式相当と思われる。(武田 修)

## ピ ッ ト 1089a・1089b

### 遺 構 (第186図)

ピット1089aは北東壁側をピット1089に切られるものの、直径約1.00mの円形を呈する。壁は丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約28cmである。内部掘り下げ直後に西壁上部から20cmの範囲に黒曜石主体のフレイク・チップ集積がみられた。床面に遺存体である粘性を有した暗赤褐色土が薄く認められる。

埋土出土の石器の特徴から続縄文期宇津内Ⅱa式と思われる。

ピット1089bはピット1089aに北壁上部を切られる。規模は長軸約0.95m、短軸約0.70mの円形を呈し、壁高は確認面から約20cmである。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第223図-8~13, 図版51-19-24)

ピット1089aから第223図-8は無茎石鏃。9・10は両面加工ナイフ。11は表裏面とも粗い剥離面がみられる。両面加工ナイフの未製品と思われる。12は左側縁部が加工された削器。13は幅広の棒状原石。全て黒曜石製。埋土出土。(武田 修)

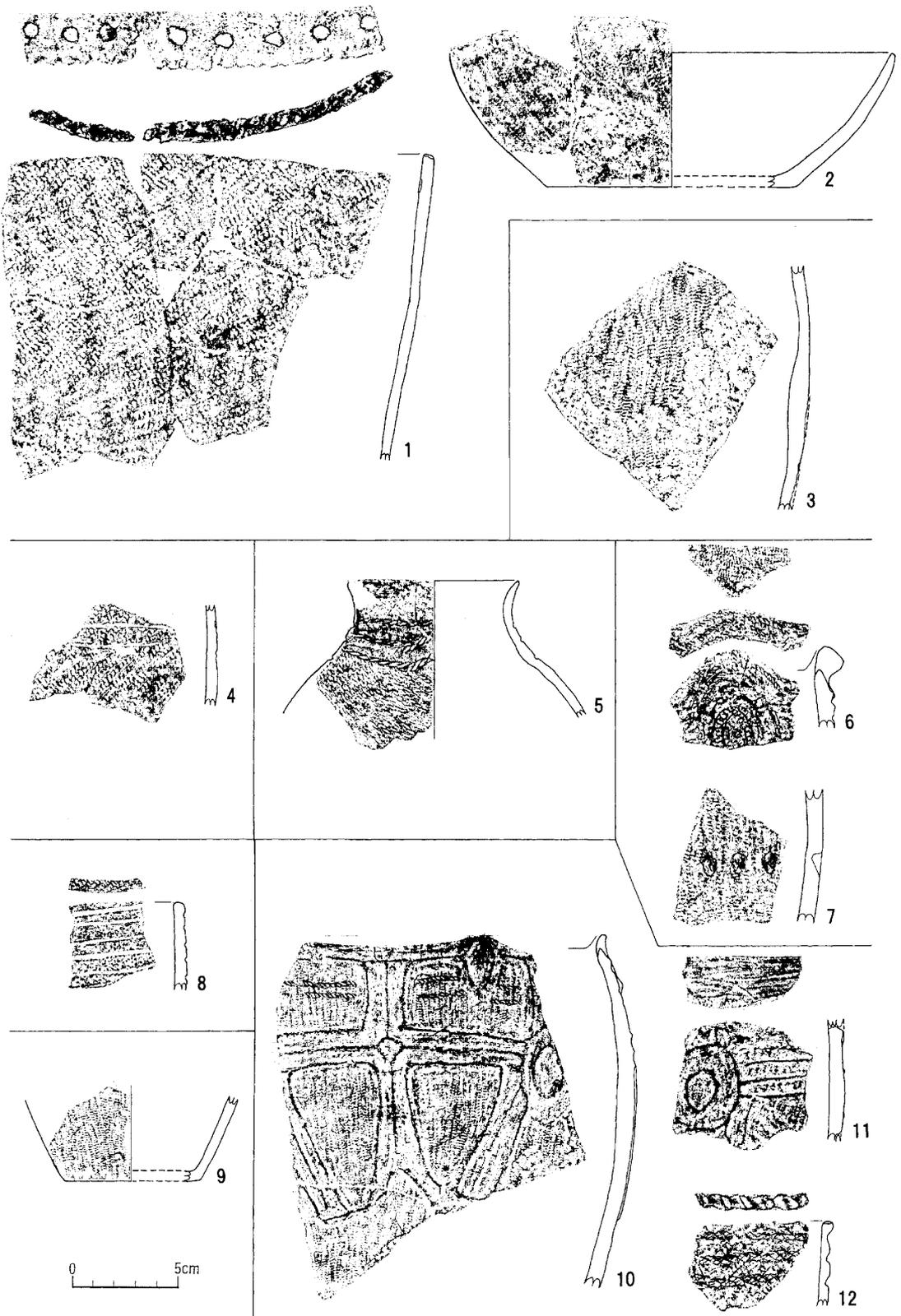
## ピ ッ ト 1090

### 遺 構 (第17図)

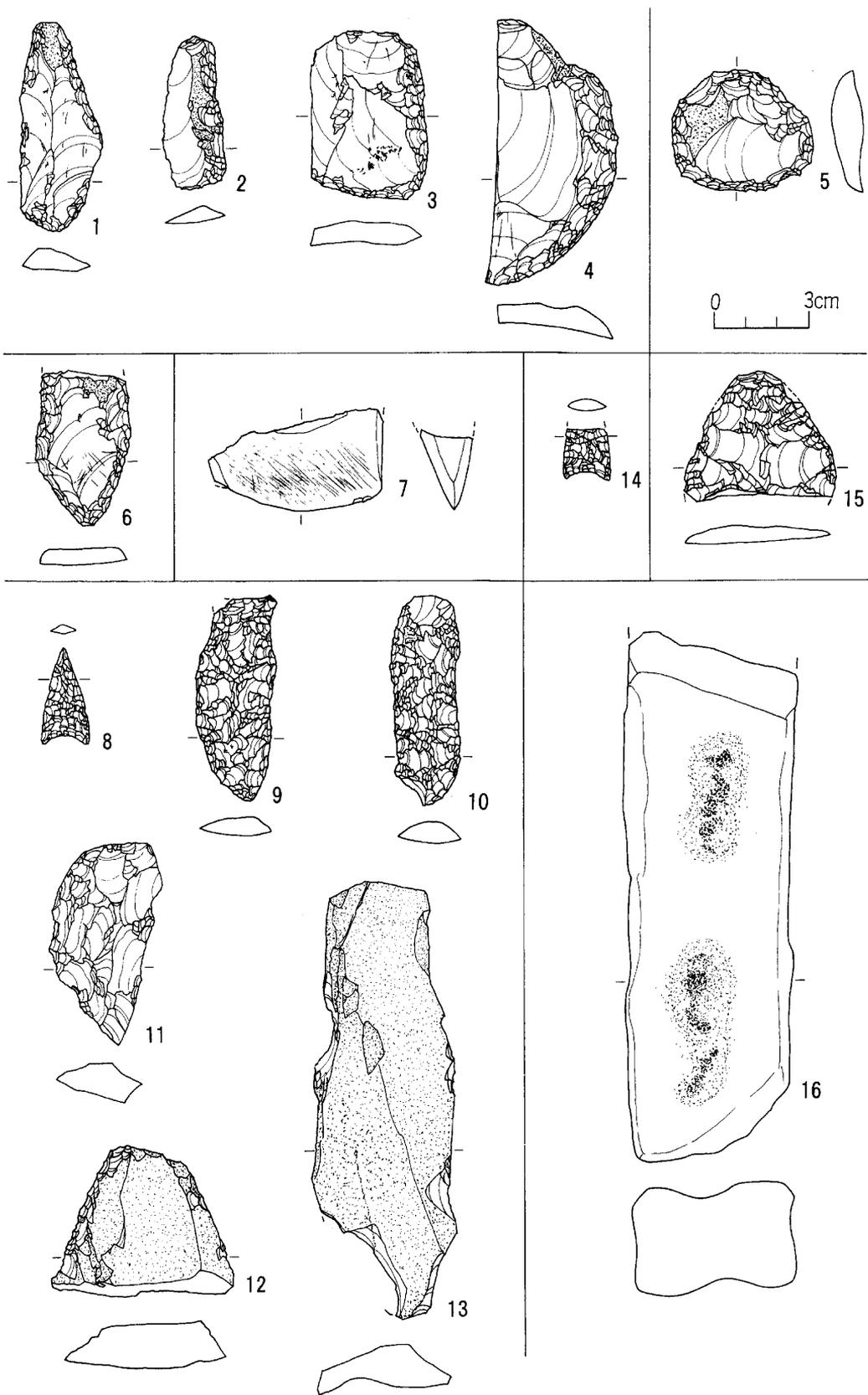
本ピットはD85グリッドに位置する。144号堅穴に北東側の約半分を削られている。規模は長軸約1.30mを測る。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約28cmである。図示していないが床面近くから直径20cmほどのくぼみ石が出土している。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)



第222図 ビット1084床面(1)・埋土(2)、1087a埋土(3)、1088埋土(4)、1089埋土上部(5)、1092埋土(6・7)、1093a埋土(8)、1095埋土(9)、1097埋土(10~12)出土土器



第223図 ビット1076埋土(1~4)、1079埋土(5)、1084埋土(6)、1087a埋土(7)、1089a遺体上(8~13)、1091埋土(14)、1092埋土(15)、1094埋土(16)出土石器

## ピ ッ ト 1091

## 遺 構 (第17図)

本ピットは C85グリッドに位置する。規模は長軸0.70m、短軸0.60mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約34cmを測る。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第223図-14)

第223図-14は先端部が欠失した無基石鏃。黒曜石製。 (武田 修)

## ピ ッ ト 1092

## 遺 構 (第17図)

本ピットは E85グリッド杭の直下に位置する。規模は長軸約1.65m、短軸約1.34mの楕円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約50cmである。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第222図-6・7, 第223図-15)

第222図-6は統縄文字津内Ⅱb式。7は胴部に縄端圧痕文が等間隔に施される。統縄文初頭であろう。

石器は第223図-15は埋土出土の両面加工ナイフの先端部。黒曜石製。 (武田 修)

## ピ ッ ト 1093・1093a

## 遺 構 (第17図)

ピット1093は D84, E84グリッドに位置する。規模は長軸約1.10m、短軸約0.65mの楕円形を呈し、ピット1093aの南壁を切り込んで構築されている。高さは確認面から44cmを測る。

ピット1093aはピット1093に南壁を切られるものの長軸約1.20m、短軸約0.85mの楕円形を呈する。高さは確認面より30cmを測る。

## 遺 物 (第222図-8)

第222図-8はピット1093a埋土出土。口縁部直下に浅い6条の横走沈線文を施す。縄文晩期中葉であろう。 (武田 修)

## ピ ッ ト 1094

### 遺 構 (第17図)

本ピットはD84グリッドに位置する。表土下に堆積した黒褐色砂を剥土した段階で落ち込みを確認した。規模は長軸約1.00m、短軸約0.65mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約40cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第223図-16)

第223図-16は表面に3箇所、裏面に4箇所の窪みをもつくぼみ石。砂岩製。(武田 修)

## ピ ッ ト 1095

### 遺 構 (第17図)

本ピットはE83・84グリッドにまたがって位置する。形態は北壁側がすぼまる卵形を呈し、規模は長軸約1.05m、短軸約0.85mを測る。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約25cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第222図-9)

第222図-9は統縄文土器の底部。宇津内系と思われる。(武田 修)

## ピ ッ ト 1096

### 遺 構 (第17図)

本ピットはE83・84グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約0.93m、短軸約0.50mの楕円形を呈する。床は西壁に向かってやや傾斜する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から東壁が約20cm、西壁が約26cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 1097

### 遺 構 (第15図)

本ピットはD83グリッドに位置する。規模は直径約1.20mの円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から30cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第222図-10~12)

第222図-10~12は埋土出土。10・11は統縄文宇津内Ⅱb式。12の口唇部は小波状を呈し、

4条の縄線文を施す。縄文晩期中葉であろう。(武田 修)

## ピ ッ ト 1098

### 遺 構 (第220図)

本ピットはH88グリッドに位置する。規模は長軸1.20m、短軸0.90mの楕円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から20cmを測る。

詳細な時期は不明である。(武田 修)

## ピ ッ ト 1099

### 遺 構 (第15図)

本ピットはE81グリッドに位置する。規模は1.10mの不整形円形を呈する。壁は丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から26cmを測る。

### 遺 物 (第224図-1~9, 第225図-1)

第224図-1~5は床面出土。1は大きなボタン状の貼付けをもつ。1・2は統縄文字津内Ⅱb式。3は同Ⅱa式。口唇部に鋭い刻みが斜めに加えられる。4は短い隆帯が垂下する。5は2~3本の横走沈線文間に斜位の沈線文と刺突文が施される。4・5は統縄文初頭であろう。6・7は統縄文字津内Ⅱb式。8・9は統縄文の底部。

石器は第225図-1は削器。黒曜石製。(武田 修)

## ピ ッ ト 1100

### 遺 構 (第159図)

本ピットはF80グリッドに位置する。規模は1.60mの円形を呈する。壁は皿状に立ち上がり、高さは確認面から38cmを測る。

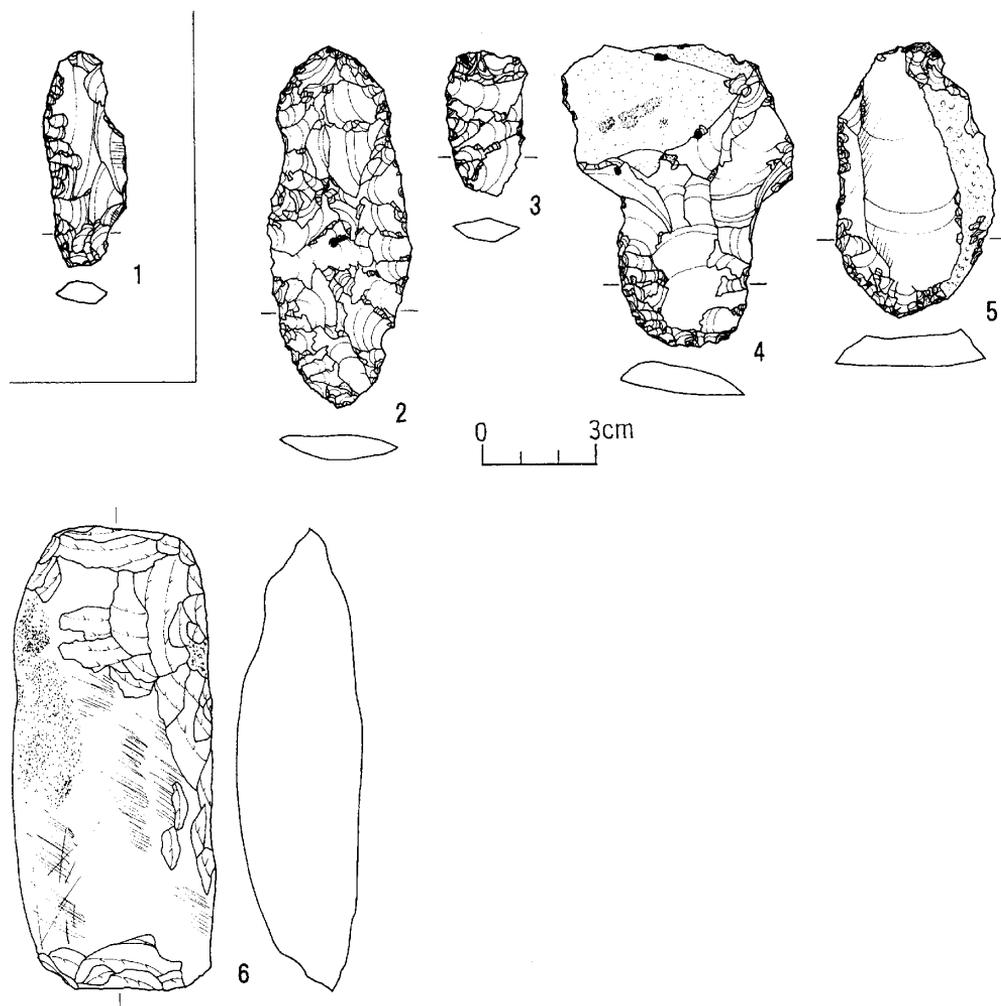
### 遺 物 (第224図-10~12, 第225図-2~6, 図版52-1~5)

第224図-10は統縄文字津内Ⅱa式。11は口唇部に山形小突起をもち、縦走縄文を地文に口縁直下に2条の縄線文と胴部に2本の横走沈線文が施される。統縄文初頭であろう。12は口唇部に刺突文、口縁直下に「×」字状の太い沈線文が施される。縄文晩期中葉であろう。

石器は第225図-2は両面加工ナイフ。3は両面加工ナイフの未製品。4は大型剥片に丸みをもった急斜な刃部を作出した搔器。5は削器。6は磨製石斧。2~5は黒曜石製。6は緑色泥岩製。(武田 修)



第224図 ピット1099床面(1~5)・埋土(6~9)、1100埋土(10~12)出土土器



第225図 ピット1099埋土(1)、1100埋土(2~6)出土石器

## 埋 養 9

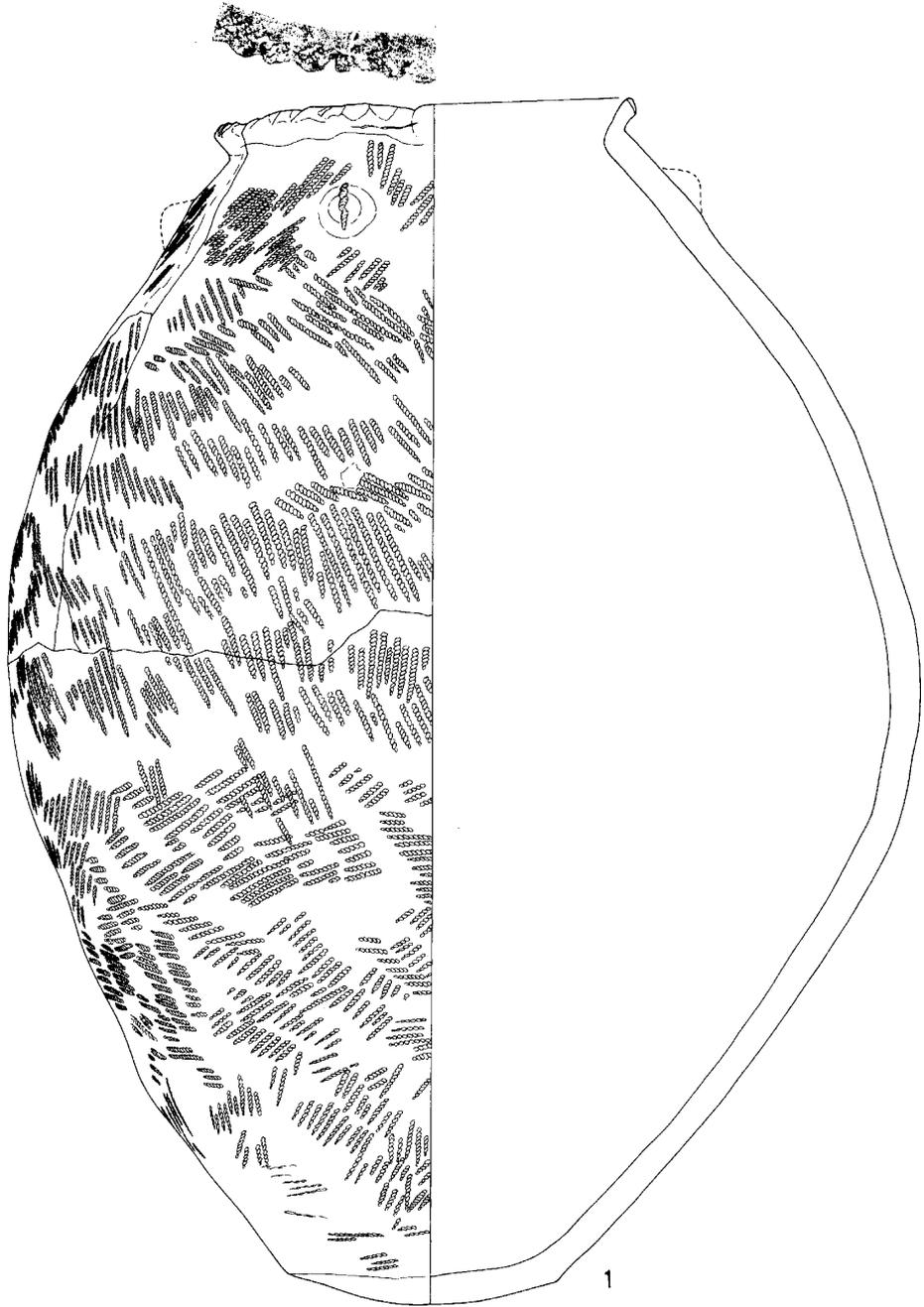
### 遺 構 (第60図)

148e号竪穴の埋土層である粒子の粗い明褐色砂層から掘り込まれ、焼土層、炭化物層と中央部床面を約18cm切り込んでいる。上部径が約36cm、断面「V」字状のピットに第226図-1の土器が正立の状態ですっぽり納まって出土した。

### 遺 物 (第226図, 図版52-6)

口径16cm、器高46cmで胴部が大きく張り出した壺形である。底部は丸みをもち不安定であり、正立の状態で置くことは難しい。口縁部の器壁は胴部に比して薄く、「く」字状に外反し、直下に縄線文の施されたボタン状の貼付文がみられる。続縄文初頭興津式相当である。

(武田 修)



0 5cm

第226図 埋甕 9

## 集 石 9

## 遺 構 (第54図)

148b 号堅穴の床面を径約 1.00m、深さが10cmほど皿状に浅く切り込んでおり、その内部に径 5～20cmの大小の角礫がみられる。角礫下部の床面のほぼ全域から炭化材が検出された。

詳細な時期は不明であるが148b 号堅穴より新しいことは確実である。(武田 修)

## 炭 化 材 配 列 ピ ッ ト

## 遺 構 (第124図)

本ピットは155g 号堅穴の南西壁の一部と床面を約 5 cm切り込んで構築している。北側は検出できなかったものの形態は楕円形を呈すると思われる。規模は長軸推定1.00m、短軸約0.75 mである。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約18cmである。中央部に径約17cm、深さ約18cmの小ピットをもつ。

炭化材は第124図に示すとおり比較的大型の細長い材を長軸面に沿って並べた状態であり、壁側から中央部に向かって弧状に配置している。炭化材の上層は焼土や炭層が堆積する。

## 小 括

時期は155g 号堅穴より新しいことは確実であるが、用途・機能については不明である。

(武田 修)

## 石 組 遺 構

## 遺 構 (第173図)

本ピットは B88・89グリッドの表土を剥土した段階で、角礫主体の石組を検出した。第173図に示すとおり石組の長軸は東西方向にある。最大で長さ1.00m程の角礫 2点を並列させ、やや小型の角礫を周辺に配置させ、内部は若干であるが空白部となる。縄文晩期幣舞式の土壇墓にみられた配石墓の可能性もあるため角礫除去後に精査したが落ち込みは確認できなかった。

図示していないが角礫上部から縄文晩期の土器が出土している。(武田 修)

## 第Ⅵ章 まとめ

### 1. 擦文文化期

本時期の竪穴は140号、141号、146号、148号、151号、152号、155号、156号、157号の9軒である。全竪穴とも宇田川編年後期に比定されるもので、カマドを東壁側にもつ。焼失竪穴は140号、141号、148号、151号の4軒である。特に148号竪穴は床面のほぼ全面に炭化材が見られ、小枝状の炭化材の上に茅材が載る状態で検出されている。

### 2. 続縄文文化期

本時期の竪穴は続縄文初頭が142号、148e号、155g号の3軒。宇津内Ⅱb式と思われるのは148b号、148c号、149a号、155b号、155d号の5軒。宇津内Ⅱb式もしくは後北C<sub>2</sub>・D式と思われるのが144号。後北C<sub>1</sub>式もしくは後北C<sub>2</sub>・D式は148a号、155a号。後北C<sub>2</sub>・D式は149号である。

詳細な時期が不明な竪穴は143号、145号、147号、148d号、149b号、151a号、151b号、153号、154号、155c号、155e号、155f号、158号の13軒である。

ピットでは続縄文初頭と思われるのは921号、940b号、941号、957号、958号、1023号の6基であり、異形の琥珀玉が出土した941号は興津式相当と思われる。続縄文初頭から宇津内系と思われるのが各種の石器と装身具が出土した907号、979a号、1001号、1013号、1019号の5基。確実なのは宇津内Ⅱa式が1006b号、1046a号の2基。宇津内Ⅱb式が1012号。後北C<sub>2</sub>・D式が900号、901号、902号、908a号、920号、930a号、934号、940c号、954号、971号、975号、984a号、986号、988号、988a号、990号、994号、997号、1010号、1025号、1074号の21基である。

続縄文初頭の958号墓は琥珀玉と管玉が連結して出土した。これまでの調査で琥珀玉と管玉が連結した例は宇津内Ⅱb式の22a号墓、琥珀玉と管玉が共伴した122a号墓がある。管玉が出土したのは宇津内Ⅱb式の24号墓、後北C<sub>1</sub>式の46号墓がある。以前の宇津内Ⅱa式は琥珀玉が主体となっているので、管玉は宇津内Ⅱb式・後北C<sub>1</sub>式の段階で加わった装身具とみられる。前回報告した884a号墓出土のメノウ製の管玉も同時期の可能性があろう。

上記の後北C<sub>2</sub>・D式のピットは土壙墓であり、今回の調査が最も多く発見された。複数の墓域をもつようである。竪穴も存在するので竪穴との関連など、今後、詳細に検討したい。破砕された土器をもつ954号墓以外は全て東壁側に接して、土器が正立の状態に副葬されている。東頭位と考えられる。特筆される遺物は988a号墓の鉄製刀子である。これまで後北C<sub>1</sub>式の157号墓からサクラ樹皮を巻き付けた鉄製刀子、300号墓から平柄状鉄斧、刀子が出土している。

また、300号墓にみられた濃青色のガラス玉も後北 C<sub>2</sub>・D 式の1025号墓から出土している。後北 C<sub>2</sub>・D 式の988号墓、994号墓には淡青色のガラス玉がみられる。後北 C<sub>2</sub>・D 式の934号墓からは蛇紋岩製の平玉と練り玉が出土している。

埋甕 9 は統縄文初頭の堅穴中央部から出土したもので興津式に相当する。明らかに堅穴を切り込んでおり、時期差がある。

道東部の統縄文初頭の土器編年は確立されていないが、本遺跡からはフシココタンチャシ下層式、興津式相当、元町 2 式、宇津内 II a 式など資料が増加している。中には型式間の折衷を思わせる資料が973号墓出土土器や157a 号堅穴埋土出土土器（第137図-5）もみられる。本報告の148e 号堅穴資料も含め最終報告書でまとめることとしたい。

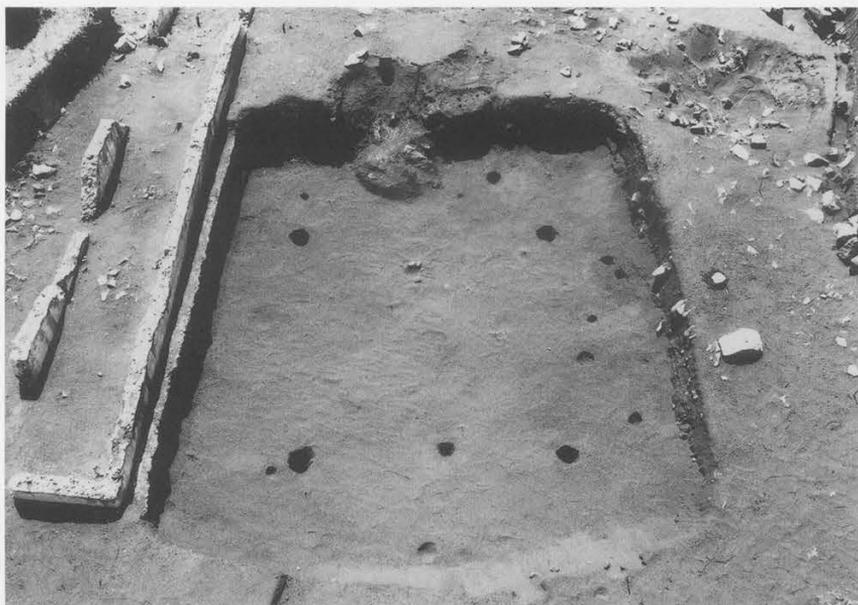
### 3. 縄文晩期

この時期の堅穴は157a 号、157b 号、158a 号の 3 軒が相当する。ピットでは953号が晩期中葉と思われる。

常呂川河口遺跡発掘調査報告書は今回の上梓で 6 巻目となる。発掘調査に15年間要し、その後も報告書作成の整理作業を継続している。長期間の発掘調査と遺物整理には東京大学名誉教授藤本強、東京大学大学院人文社会系研究科教授宇田川洋、北海道教育委員会種市幸生の各氏をはじめ多くの方々からご指導、助言を賜りました。記して感謝の意を表すしだいです。

(武田 修)

# 圖 版



1. 140号竖穴



2. 140号竖穴烟道上部出土土器



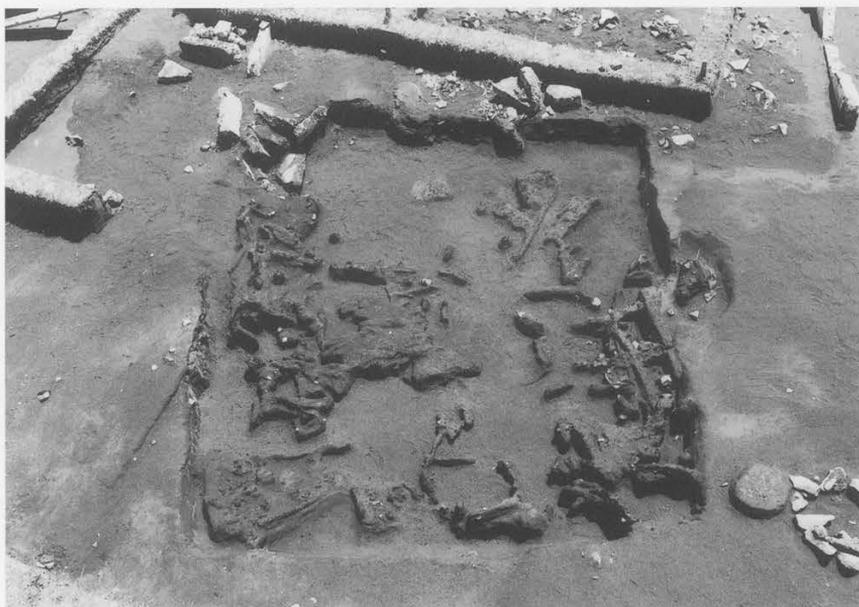
3. 140号竖穴埋土出土土器



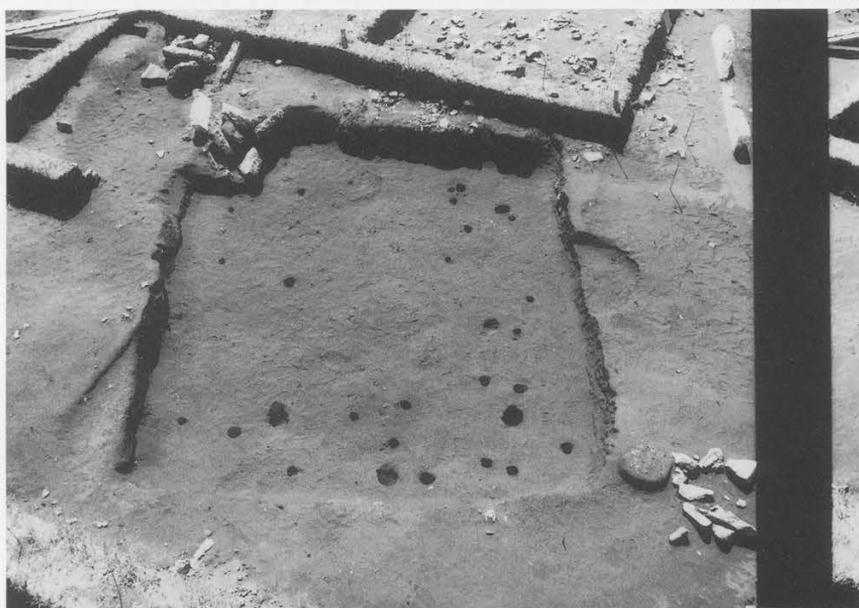
4. 140号竖穴埋土出土土器



5. 140号竖穴埋土出土土器



1. 141号竖穴炭化材出土状况



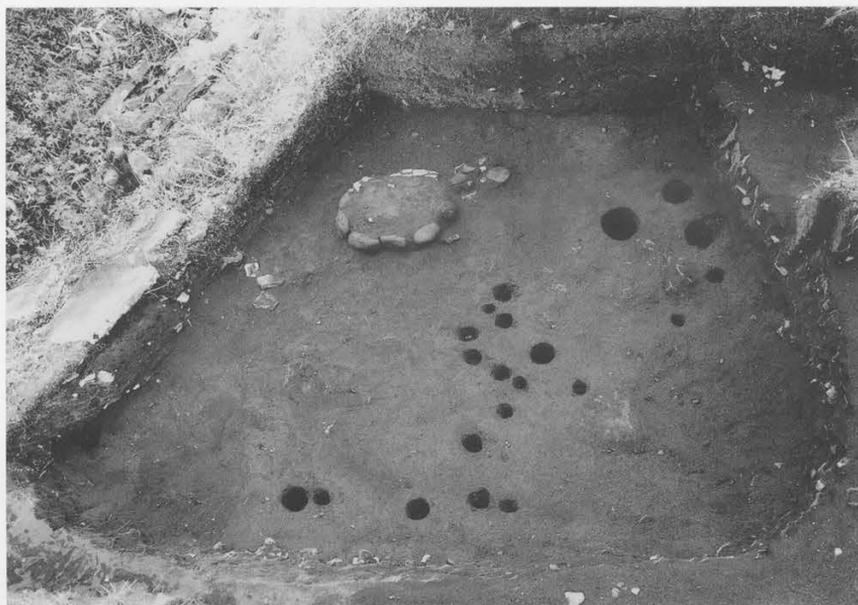
2. 141号竖穴



3. 141号竖穴埋土出土土器



4. 141号竖穴埋土出土土器



1. 142号竖穴



2. 144号竖穴



1. 144号竖穴埋土出土土器



2. 144号竖穴埋土出土土器



3. 144号竖穴埋土出土土器



4. 144号竖穴埋土出土土器



5. 144号竖穴埋土出土土器



6. 144号竖穴埋土出土土器



7. 144号竖穴埋土出土土器



8. 144号竖穴埋土出土土器



9. 144号竖穴埋土出土土器



10. 145号竖穴



1. 146号竖穴



2. 146号竖穴カマド検出状況



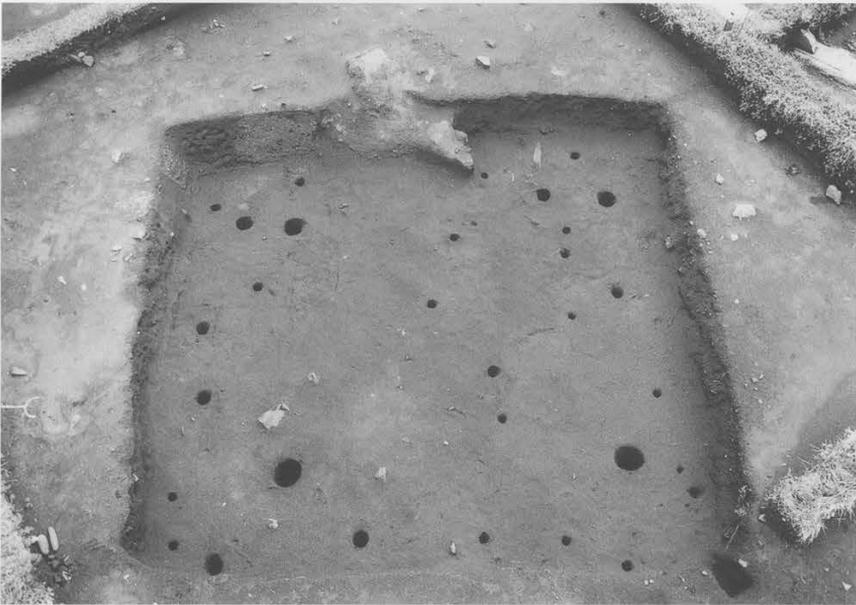
3. 146号竖穴埋土出土土器



4. 147号竖穴埋土出土土器



1. 148号竖穴遗物出土状况



2. 148号竖穴



1. 148a 号竖穴



2. 148a 号竖穴埋土出土土器



3. 148a 号竖穴埋土出土土器



4. 148a 号竖穴埋土出土土器



5. 148a 号竖穴埋土出土土器



6. 148a 号竖穴埋土出土土器



7. 148a 号竖穴埋土出土土器



8. 148a 号竖穴埋土出土土器



9. 148a 号竖穴埋土出土土器



1. 148b 号竖穴埋土出土土器



2. 148b 号竖穴埋土出土土器



3. 148b 号竖穴埋土出土土器



4. 148b 号竖穴埋土出土土器



5. 148c 号竖穴床面出土土器



6. 148e 号竖穴床面出土土器



1. 149号竖穴



2. 149号竖穴床面出土土器



3. 149号竖穴埋土出土土器



4. 149号竖穴埋土出土土器



5. 149号竖穴埋土出土土器



6. 149号竖穴埋土出土土器



1. 149a 号竖穴



2. 149b 号竖穴



1. 151号竖穴炭化材出土状况



2. 151号竖穴遺物出土状况



1. 151号竖穴



2. 151号竖穴埋土出土土器



3. 151号竖穴埋土出土土器



4. 151号竖穴埋土出土土器



5. 151号竖穴埋土出土土器



1. 151a 号竖穴



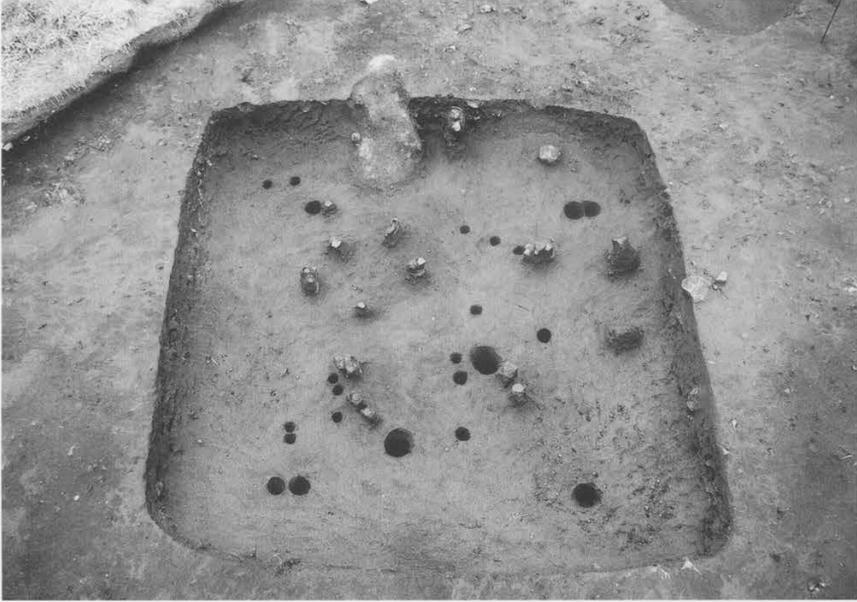
2. 151a 号竖穴埋土出土土器



3. 151a 号竖穴埋土出土土器



4. 151b 号竖穴



1. 152号竖穴



2. 153号竖穴



3. 153号竖穴埋土出土土器



4. 153号竖穴埋土出土土器



1. 154号竖穴



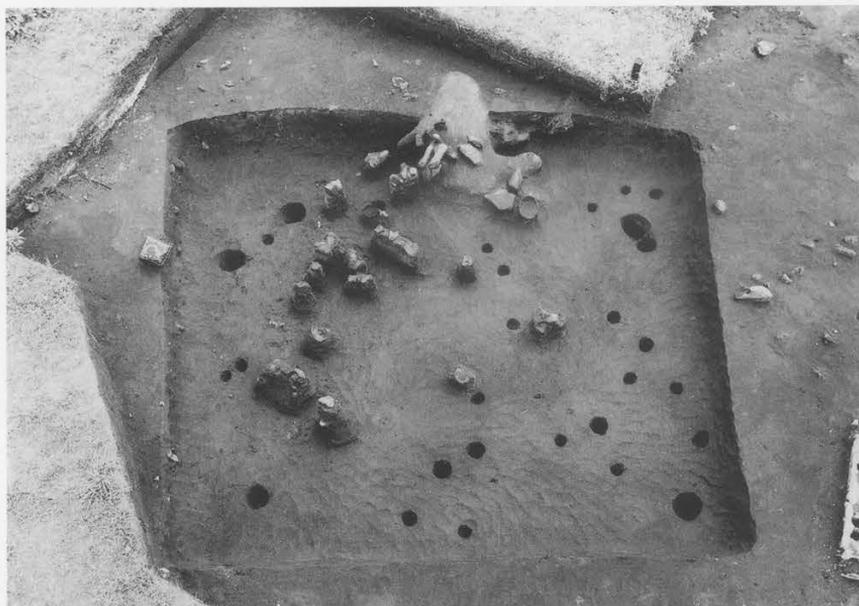
2. 154号竖穴埋土出土土器



3. 154号竖穴埋土出土土器



4. 154号竖穴埋土出土土器



1. 155号竖穴



2. 155号竖穴床面直出土器



3. 155号竖穴埋土出土器



4. 155号竖穴埋土出土器



5. 155号竖穴埋土出土器



1. 155a 号竖穴



2. 155b 号竖穴床面出土土器



3. 155b 号竖穴埋土出土土器



4. 155f 号竖穴埋土出土土器



5. 155g 号竖穴床面出土土器



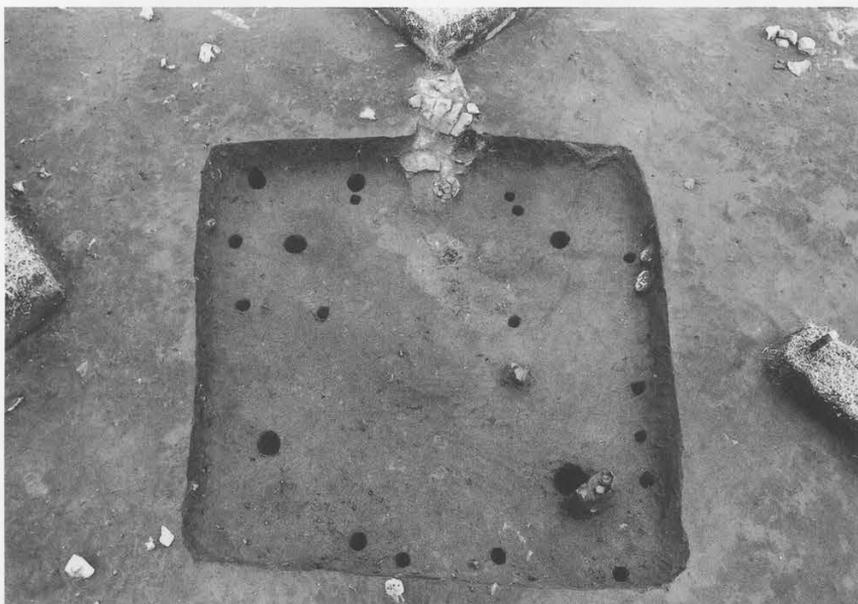
1. 156号竖穴



2. 156号竖穴床面出土土器



3. 157号竖穴カマド出土土器



4. 157号竖穴



1. 157a 号竖穴



2. 157a 号竖穴埋土出土土器



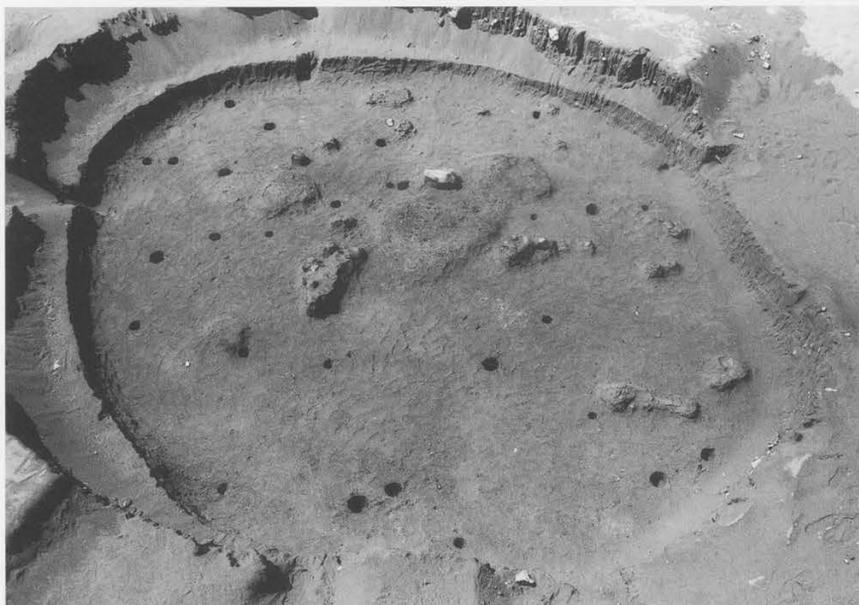
3. 157a 号竖穴埋土出土土器



4. 157a 号竖穴埋土出土土器



5. 157a 号竖穴埋土出土土器



1. 157b 号竖穴



2. 158号竖穴



3. 158号竖穴埋土出土土器



1. 158a 号竖穴



1. ピット900



2. ピット900床面出土土器



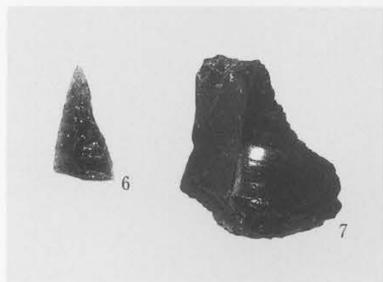
3. ピット900  
埋土出土石  
器



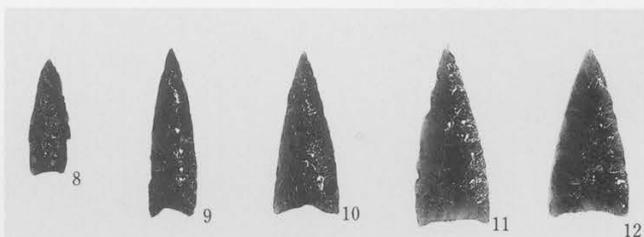
4. ピット901  
埋土出土  
石器



5. ピット902埋土上部出土土器



6・7. ピット902a 埋土出土石器



8～15. ピット907遺体上出土石器・石製品



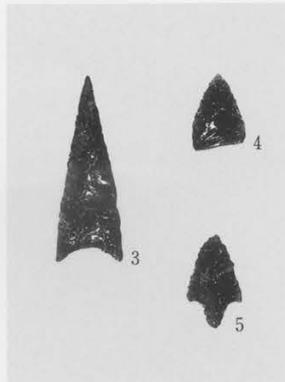
16・17. ピット907a 埋土出土石器



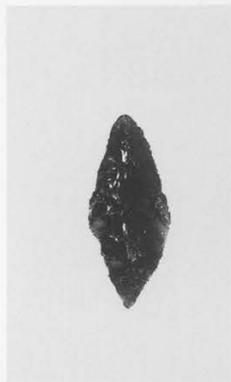
1. ピット908床面出土土器



2. ピット908a床面出土土器



3～5. ピット909埋土出土石器



6. ピット912a埋土出土石器



7. ピット919埋土出土土器



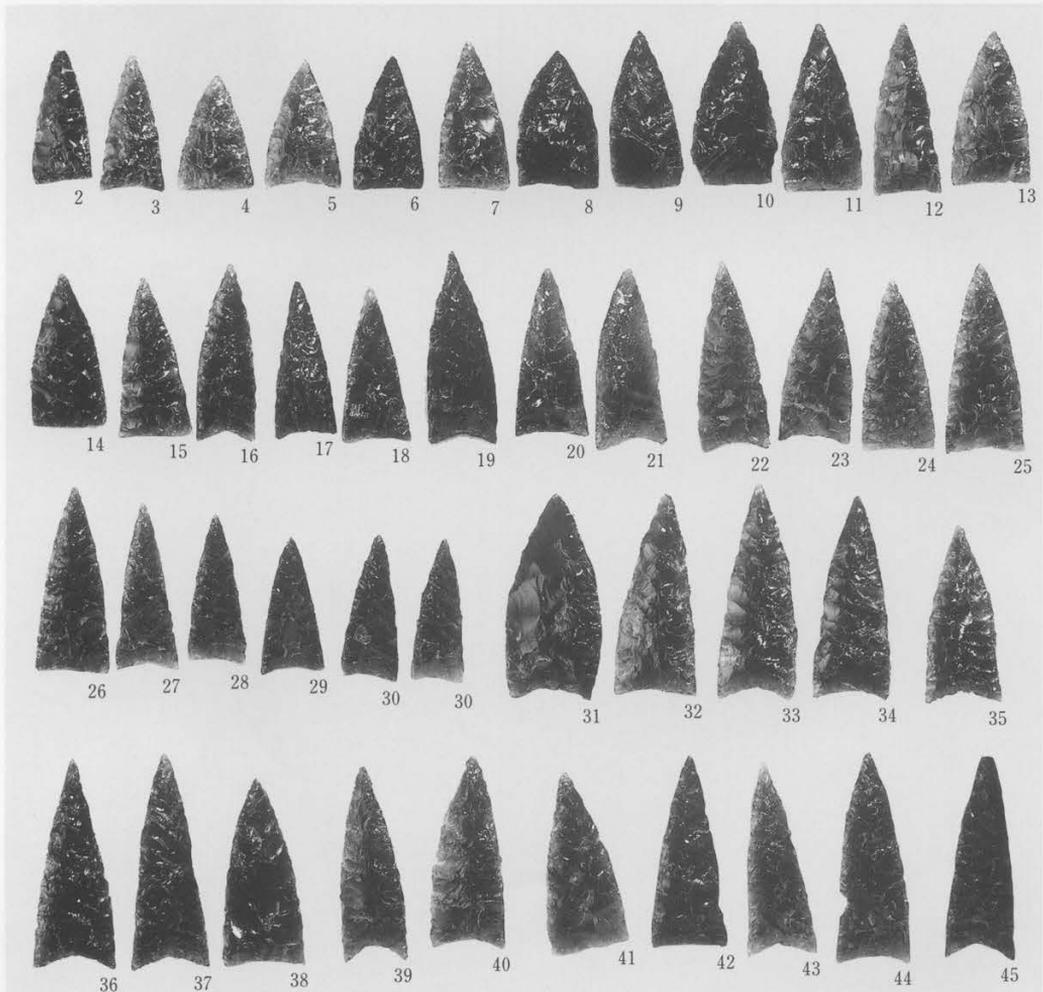
8. ピット920埋土出土土器



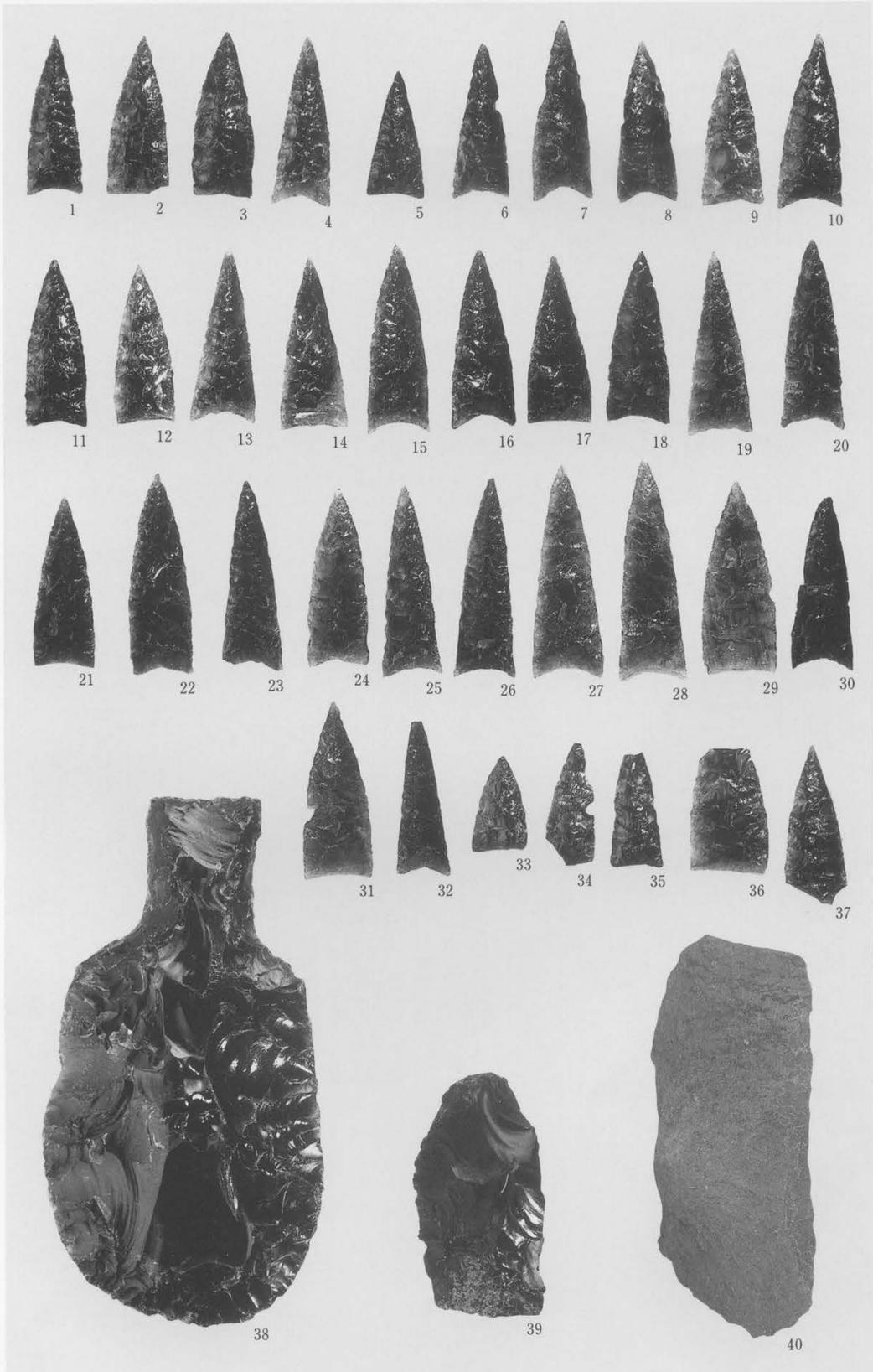
9. ピット919



1. ピット921遺物出土状況



2～45. ピット921埋土出土石器



1~40. ピット921埋土出土石器



1. ビット922a



2. ビット922a 床面出土石器



3. ビット922a 遺体上出土石器



4. ビット922a 埋土出土石器



5. ビット925埋土出土土器



6. ビット925  
埋土出土  
石器



1. ビット926



2. ビット926床面出土石器



3



4



8



5



6



7

3～8. ビット926埋土出土石器



9. ビット929埋土出土石器



10. ビット930a 床面出土土器



11. ビット934床面出土土器



1. ビット940b



2. ビット940b 床面出土土器



3. ビット940c 床面出土土器



4. ビット940c



1. ピット941



2. ピット941遺物出土状況



1. ビット941埋土出土土器



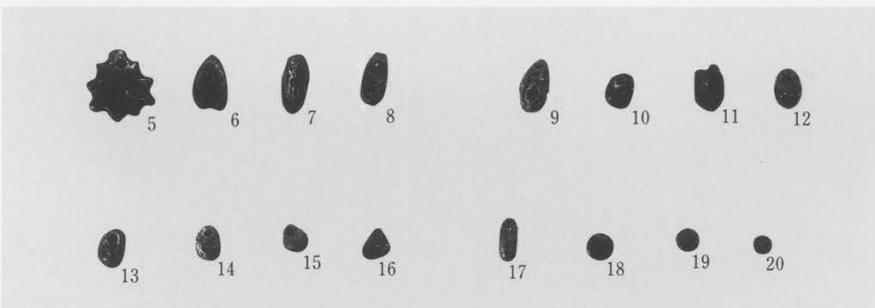
2. ビット941埋土出土土器



3. ビット941埋土出土土器



4. ビット941埋土出土土器



5～20. ビット941埋土出土琥珀玉



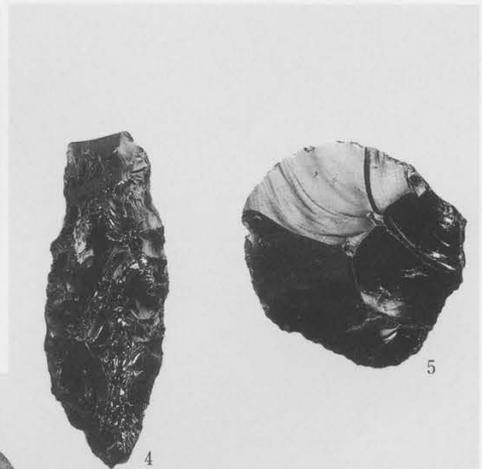
1. ビット954埋土出土土器



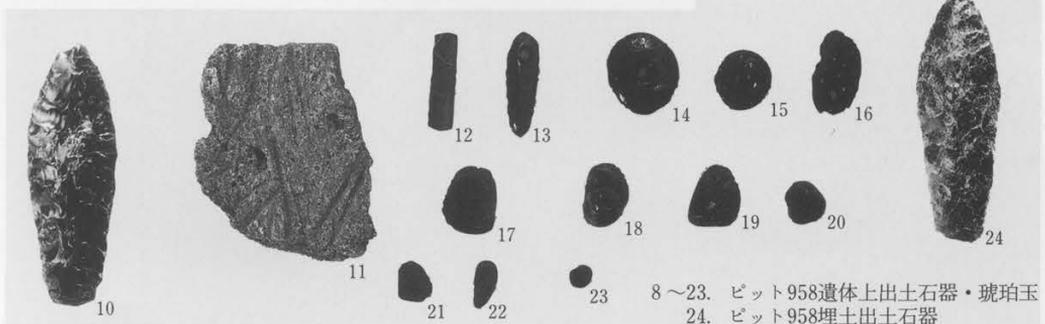
2. ビット955埋土出土土器



3. ビット957遺体上出土石器



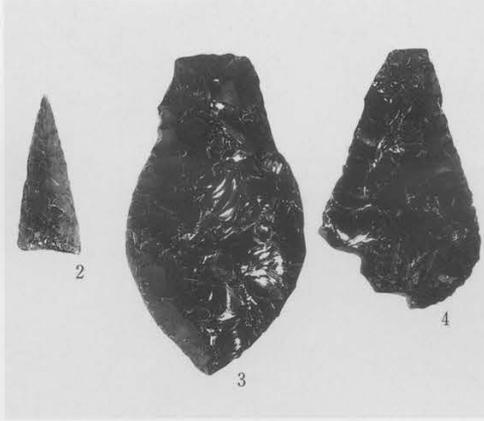
4～7. ビット957埋土出土石器



8～23. ビット958遺体上出土石器・琥珀玉  
24. ビット958埋土出土石器



1. ピット962埋土出土土器



2～4. ピット970埋土出土石器



5. ピット970a埋土出土石器



6. ピット971



7. ピット971埋土出土土器



8. ピット972床面出土土器



1. ピット973



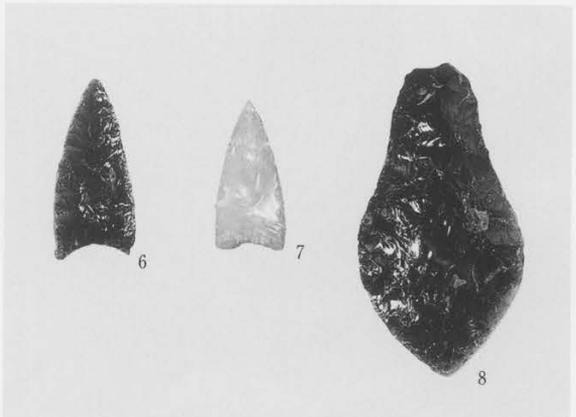
2. ピット973埋土出土土器



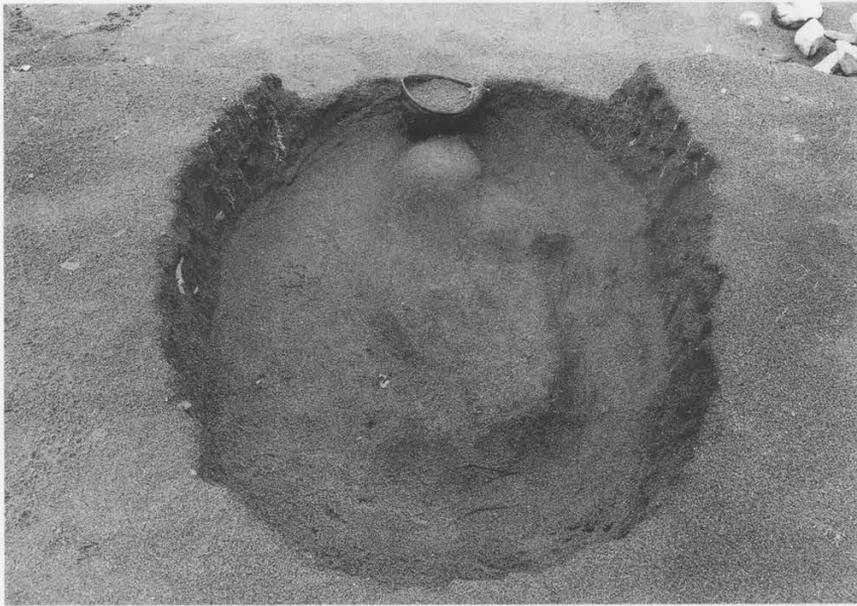
3・4. ピット973埋土出土石器



5. ピット975埋土出土土器



6～8. ピット979a埋土出土石器



1. ビット984a



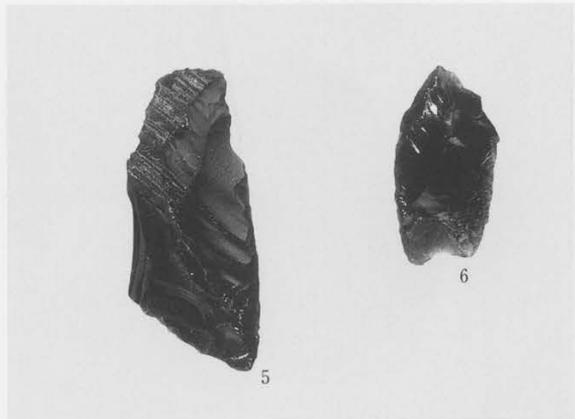
2. ビット984a 床面出土土器



3. ビット985床面出土土器



4. ビット985床面出土石器



5・6. ビット985埋土出土石器



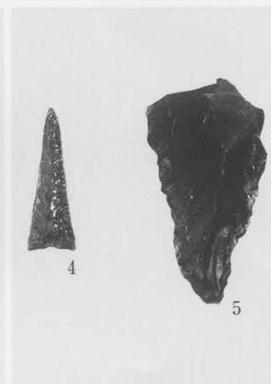
1. ピット986



2. ピット986床面出土土器



3. ピット986床面出土土器



4・5. ピット986埋土出土石器



6. ピット987床面出土土器



7. ピット987床面出土土器



1. ピット988



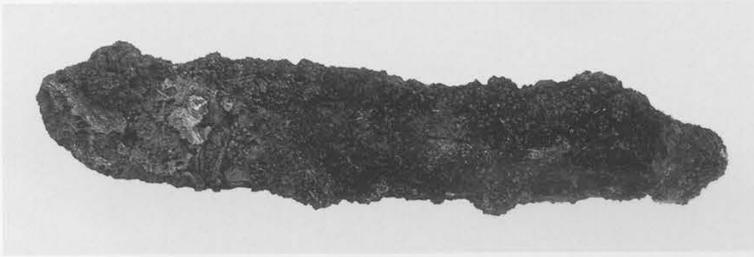
2. ピット988床面出土土器



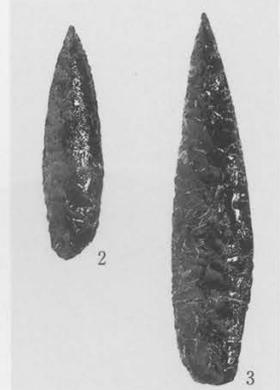
3. ピット988a 床面出土土器



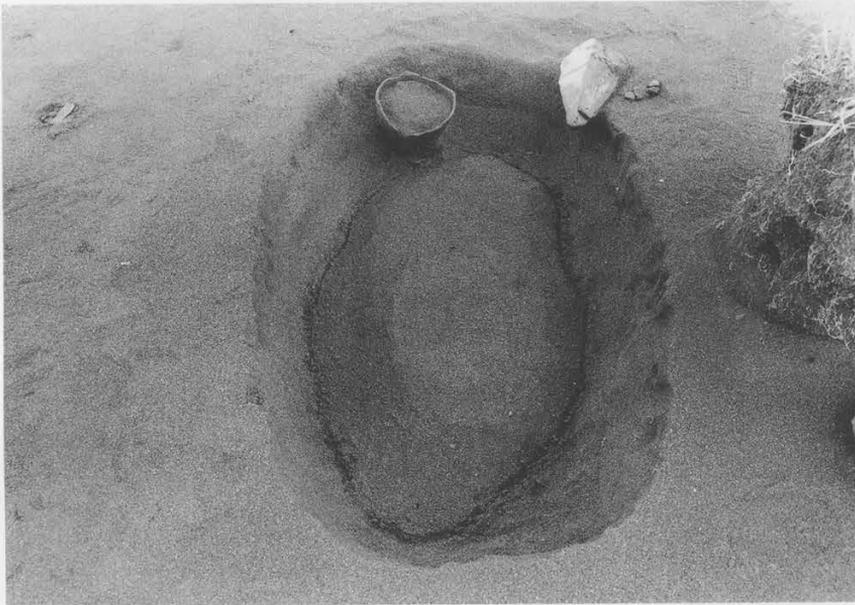
4. ピット988a



1. ピット988a 床面出土鉄製品



2・3. ピット988a 埋土出土石器



4. ピット990



5. ピット990床面出土土器



6・7. ピット990遺体上出土石器  
8. ピット990埋土出土石器



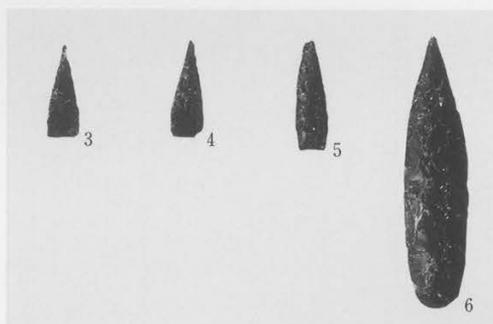
9～14. ピット993遺体上出土石器



1. ピット997



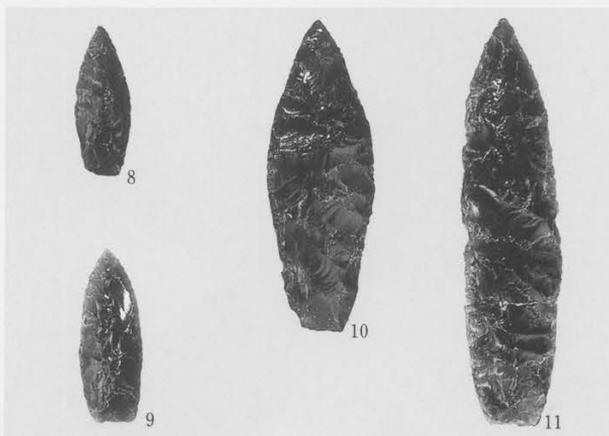
2. ピット997床面出土土器



3～6. ピット997埋土出土石器



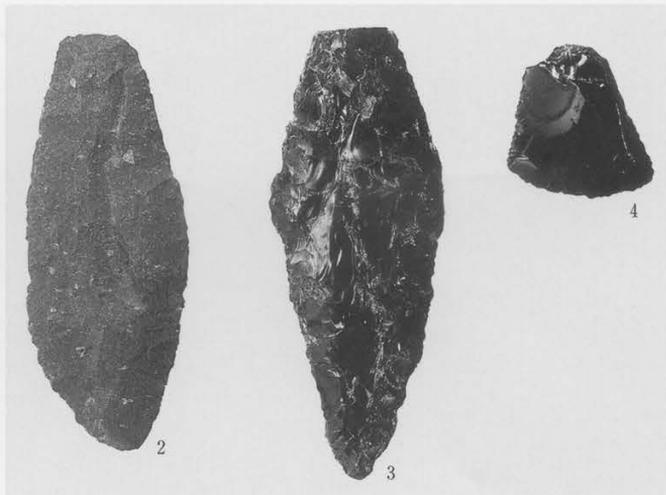
7. ピット1001埋土出土石器



8～10. ピット1002床面出土石器  
11. ピット1002埋土出土石器



1. ビット1006埋土出土土器



2～4. ビット1006a埋土出土石器



5. ビット1006b



6. ビット1006b埋土出土土器



7. ビット1006b床面出土石製品



8. ビット1006b埋土出土石製品



1～7. ピット1006b 埋土出土石器



8. ピット1007



9. ピット1007床面出土石器



10. ピット1007埋土  
出土石器



1. ビット1010埋土出土土器



2. ビット1012遺体上出土土器



3. ビット1012



4. ビット1012遺物出土状況



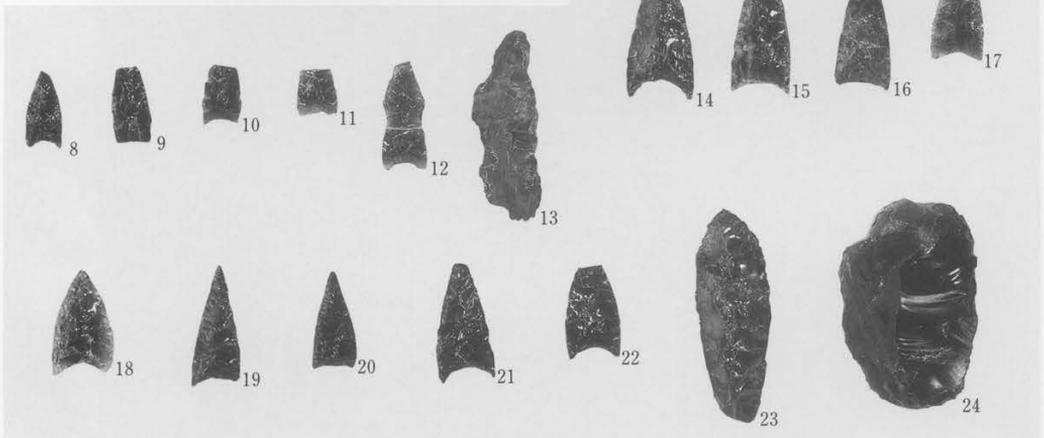
1. ビット1012遺体上出土土器



2. ビット1012埋土出土土器



3. ビット1012遺体上出土琥珀玉・管玉



4～13. ビット1012遺体上出土石器  
14～24. ビット1012埋土出土石器



1. ビット1013



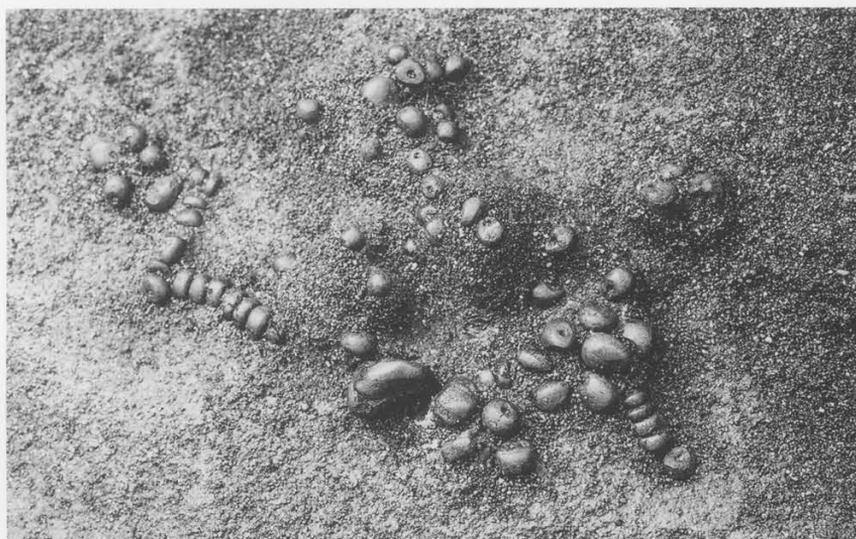
2. ビット1013遺体上出土土器



3. ビット1013遺体上出土土器



4. ビット1013遺体上出土土器



5. ビット1013琥珀玉出土状況



1. ピット1013遺体上出土  
石器



2～5. ピット1013埋土出土石器



6. ピット1015埋土出土土器



7. ピット1016埋土出土土器



8. ピット1016



1. ビット1017床面出土石器



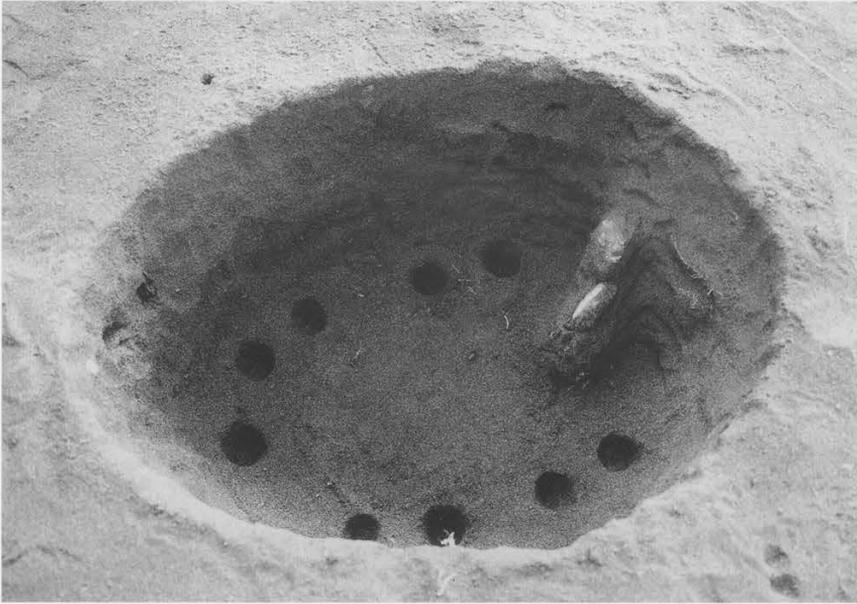
2. ビット1018  
埋土出土  
石器



3. ビット1019



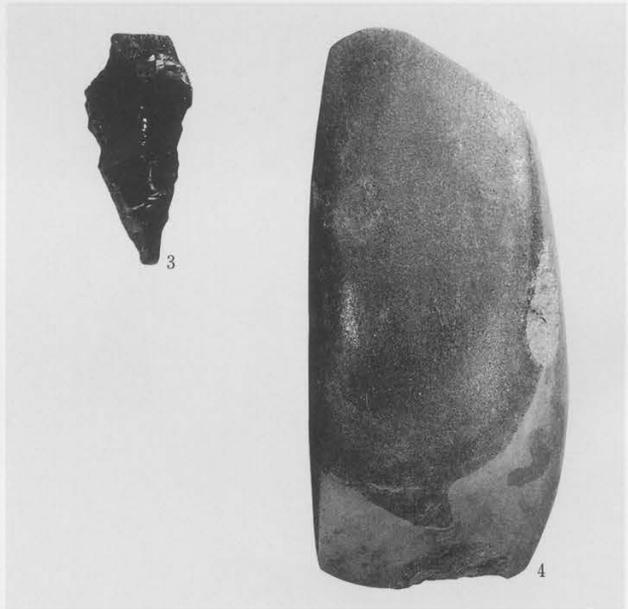
4～12. ビット1019床面出土石器  
13～15. ビット1019埋土出土石器



1. ピット1023



2. ピット1023埋土出土土器



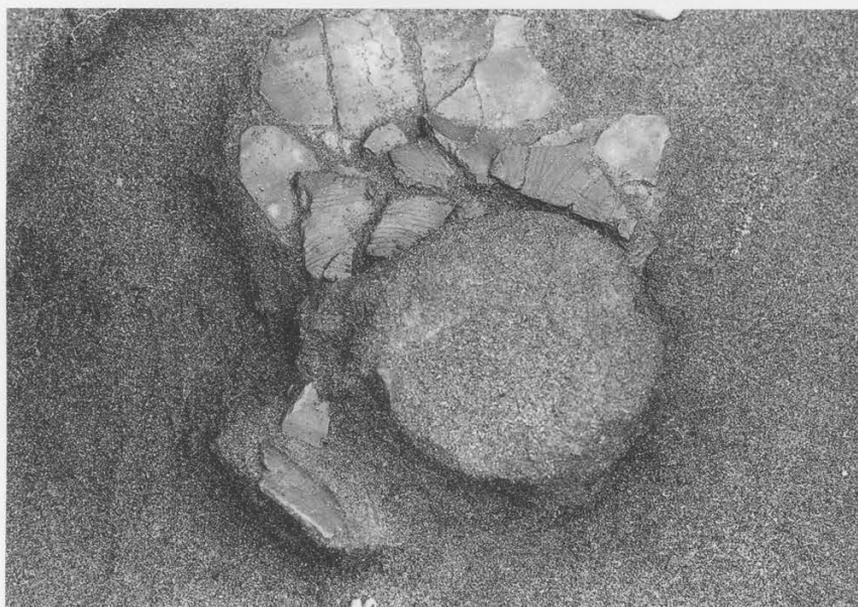
3. ピット1023埋土出土石器  
4. ピット1023遺体上出土石器



5. ピット1024埋土出土土器



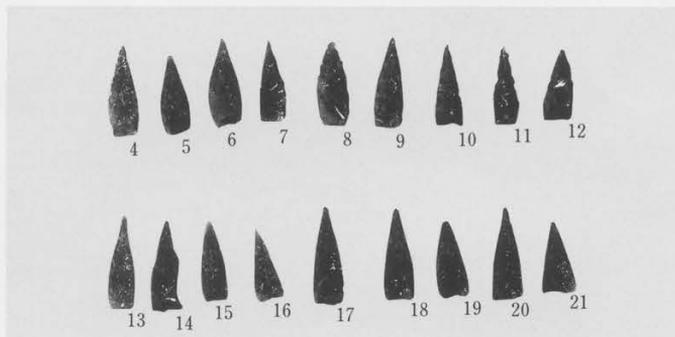
1. ビット1025



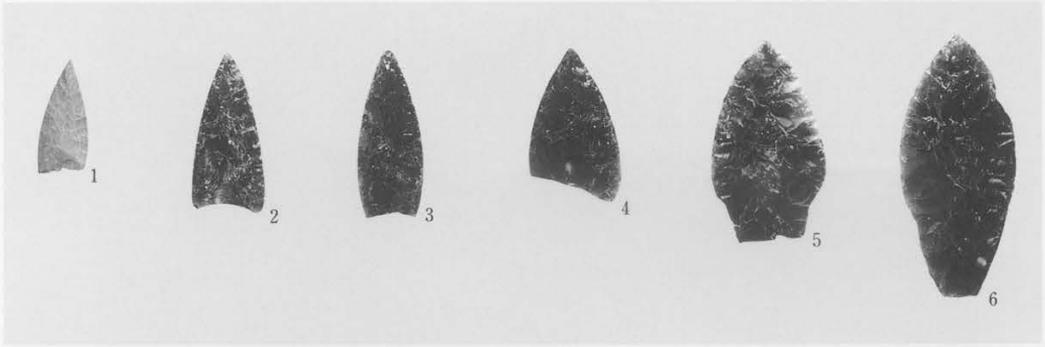
2. ビット1025土器出土状況



3. ビット1025床面出土土器



4～21. ビット1025床面出土石器



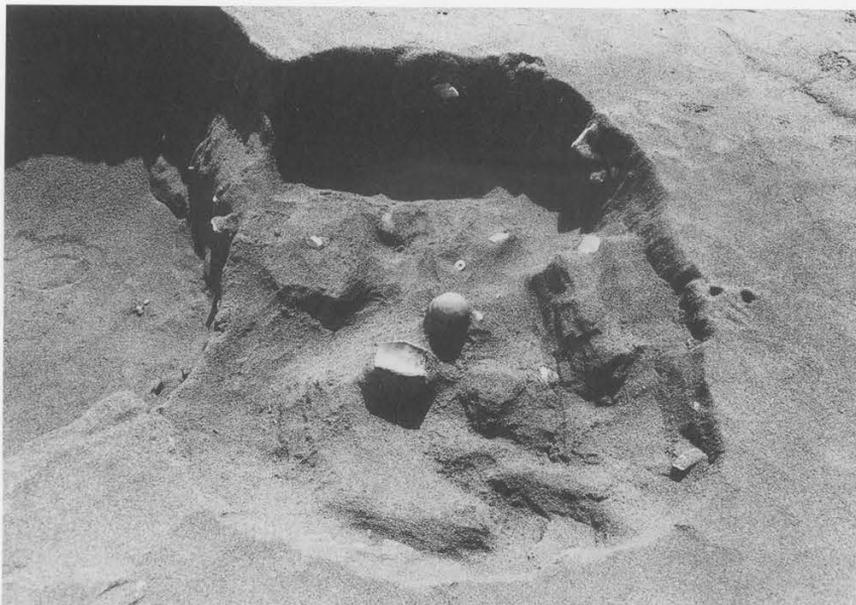
1～6. ビット1025c 床面出土石器



7～10. ビット1028b 埋土出土石器



11. ビット1031



1. ビット1046a



2. ビット1046a 遺物出土状況



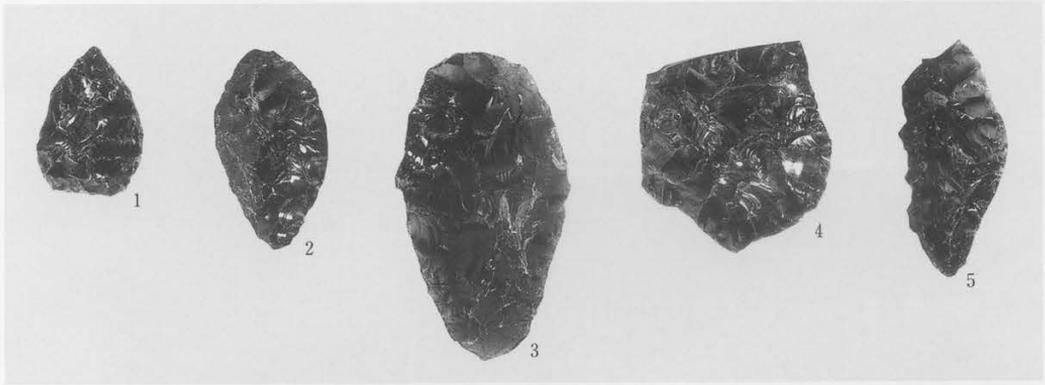
3. ビット1046a 遺体上出土土器



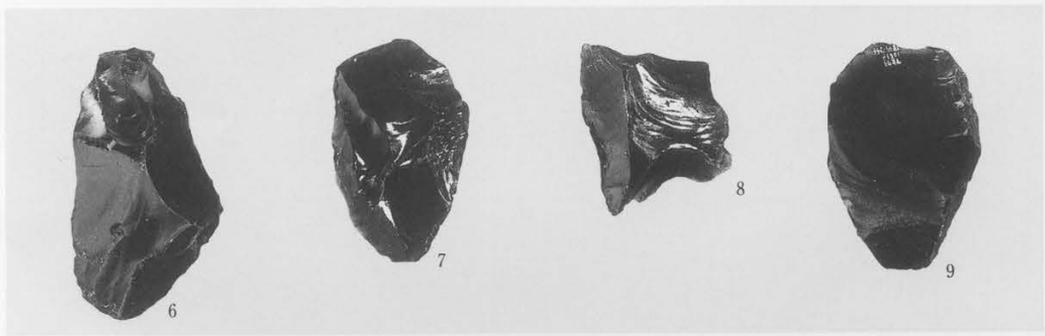
4. ビット1046a 埋土出土土器



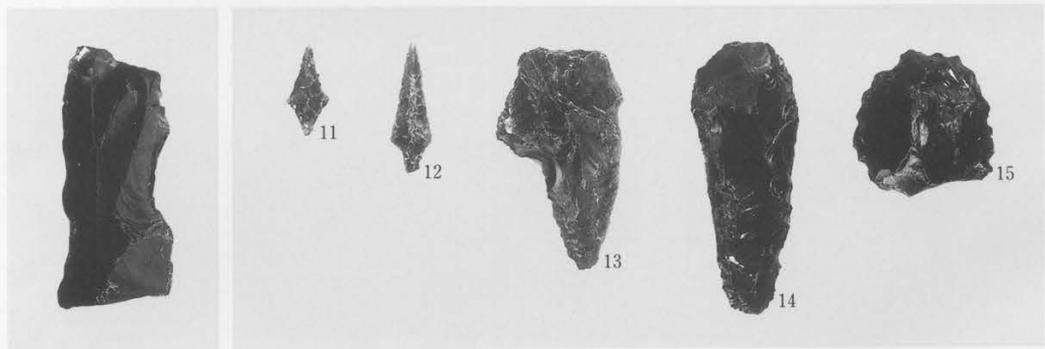
5. ビット1046a 埋土出土土器



1～5. ピット1046a 埋土出土石器

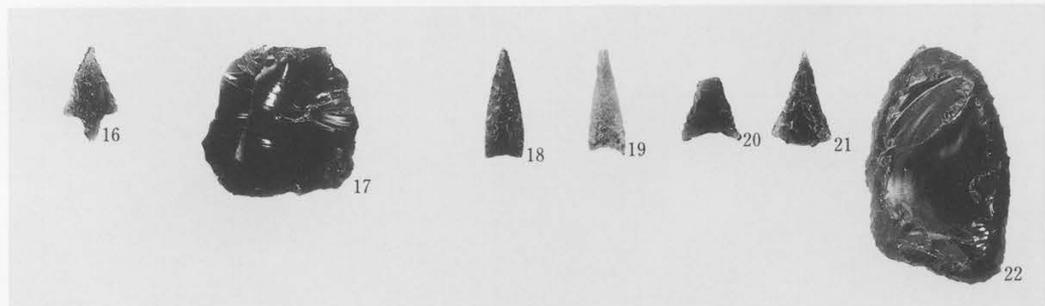


6～9. ピット1053埋土出土石器



10. ピット1058埋土出土石器

11～15. ピット1062埋土出土石器



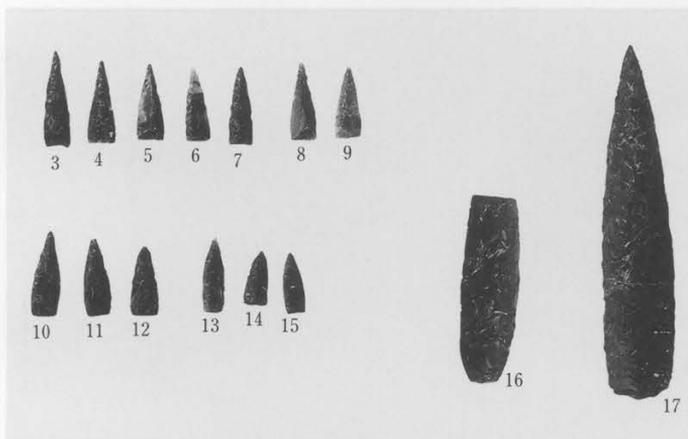
16・17. ピット1062a 床面出土石器  
18～22. ピット1062a 埋土出土石器



1. ビット1067埋土出土土器



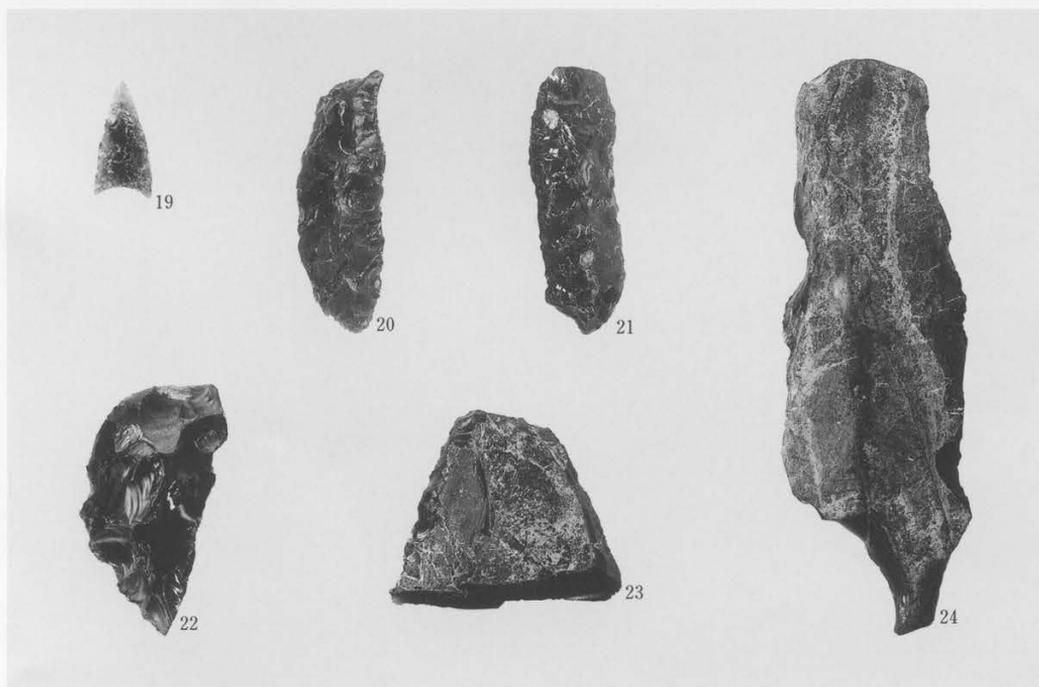
2. ビット1074床面出土土器



3～17. ビット1074埋土出土石器



18. ビット1079埋土出土土器



19～24. ビット1089a 遺体上出土石器



1～5. ピット1100埋土出土石器



6. 埋甕9

## 報告書抄録

ふりがな	ところがわかこういせき				
書名	常呂川河口遺跡(6)				
副書名	常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る発掘調査報告書				
シリーズ名					
シリーズ番号					
編著者名	武田 修				
編集機関	常呂町教育委員会				
所在地	〒093-0209 北海道常呂町字土佐2-1				
発行年月日	西暦2006年1月26日				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経
		市町村	遺跡番号		
ところがわかこういせき 常呂川河口遺跡	ほっかいどうところちよらぎところ 北海道常呂町字常呂	01553	I-16-128	44° 06' 58"	144° 04' 42"
調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	所収遺跡名	種別	主な時代
平成10年～平成11年	4,400	河川改修	常呂川河口遺跡	集落包 蔵地	擦文 続縄文
主な遺構		主な遺物		特記事項	
住居跡 土壙墓		土器・石器・琥珀玉・ガラス 玉など		続縄文初頭の興津式相当、宇 津内Ⅱa式の土壙墓には多量 の副葬品が見られる。後北C <sub>2</sub> ・Dの土壙墓は東頭位であ り、ガラス玉をもつものがあ る。	

2006年1月20日 印刷  
2006年1月26日 発行

## 常呂川河口遺跡 (6)

—常呂川河口右岸掘削護岸  
工事に伴う発掘調査報告書—

発行者 北海道常呂町教育委員会  
印刷所 株式会社 北海印刷  
北海道北見市本町5丁目